本州四国連絡橋建設に伴う
大毛島地区埋蔵文化財発掘調査報告書
(上)

昭和63年３月（1988年）

徳島県教育委員会

序

徳島県民83万の夢の架橋といわれ，待望久しかった本四連絡橋の「大鳴門橋」も昭和60年に完成し，引き続き「明石海峡大橋」の早期完成にむけ，県民の期待も高まりつつあります。

「大鳴門橋」関連道路の建設工事に伴いまして，昭和53年から実施しておりました大毛島地区での埋蔵文化財発掘調査及び出土遺物整理作業も，今年度をもちまして完了のはこびとなりました。

渦潮で名高い鳴門海峡に面した島嶼に営まれた古代から近世に至る多数の遺跡は，各々に特徴を有しており，県下における歴史研究の貴重な資料となり得るものです。

ここにその集大成として，「本州四国連絡橋建設に伴う大毛島地区埋蔵文化財発掘調査報告書」を刊行することになりました。

なお，長年にわたりました埋蔵文化財発掘調査及び出土遺物整理作業期間中，多大な御援助，御協力をいただきました関係各位並びに関係機関に感謝するとともに，厚く御礼申しあげます。

昭和63年３月

徳島県教育委員会

教育長　松　本　冨　夫

例　　言

1．本書は大鳴門架橋に関連した国道28号改良工事に伴う発掘調査報告書である。

2．発掘調査は本州四国連絡橋公団の要請をうけ，徳島県教育委員会文化課が実施した。

3．本書で用いた絶対高は海抜を表わす。方位はすべて磁北である。

4．遺構の略号はＳＢ－住居跡，ＳＫ－土坑（土壙），ＳＤ－溝跡，ＳＰ－柱穴跡，ＳＸ－不明遺構，その他を用いた。

5．土色の判定に際しては，財団法人日本色彩研究所編「新版標準土色帖」，色調については，色彩企画センター編「配色色名帖」等を使用して行った。

6．調査区位置図は，建設省国土地理院発行の５万分の１地形図「鳴門海峡」図幅を転載した。

7．発掘調査は昭和53年から昭和61年にかけて実施し，以後は整理作業を行った。

8．発掘調査に際し，第５区－島巡，第６区－立花・小林・島巡，第７区－島巡，第８・９・10・15区－松永雅，第11・12・13・14区－松永住，第16区－島巡，第21区－松永雅・島巡，第22区－松永雅，第23区－松永住，第24区・25・26区－松永住，第27・28区－松永雅，第29区－松永雅，第30区－松永雅，第31区－松永雅，第33区－松永雅，第35区－松永雅，第37区－小笠原，第38区－松永雅，第39区－松永住が担当し，分担執筆した。松永雅担当分については河野も分担執筆した。

9．発掘調査及び本報告書の執筆作業には，立花博・小林勝美・松永住美・河野雄次・島巡賢二・松永雅行・小笠原賢があたり，島巡が編集した。

10．発掘調査から整理作業に至る間，文化財調査員の方々の多大な援助をうけた。徳島県文化財保護審議会の森浩一委員，秋山泰委員（旧）からは御指導と御教示をうけた。

また，調査全般にわたって本州四国連絡橋公団鳴門工事事務所のお世話になった。

11．なお，長年にわたりました発掘調査及び期間期間中，多大な御援助，御協力をいただきました，関係各位並びに関係機関に感謝するとともに，厚く御礼申しあげます。

目　　次

鳴門架橋に係る道路建設に伴う埋蔵文化財精密分布調査……7
第８・９・10・15区……19
第11・12・13・14区……33
第22区……51
第23区……91
第24・25・26区……103
第27・28区……113
第29区……125
第30区……141
第31区……151
第33区……171
第35区……181
第38区……207
第39区……231
第５・６・７区……295
第16区……307
第21区……315
第37区……531

鳴門架橋に係る道路建設に伴う
埋蔵文化財精密分布調査

本　文　目　次

Ⅰ　調査の趣旨
Ⅱ　調査の経過
Ⅲ　遺跡一覧
Ⅳ　各遺跡の概要
Ⅴ　ま と め

挿　図　目　次

Fig. 1　遺跡位置図（５万分の１）
Fig. 2　遺跡位置図(1)
Fig. 3　遺跡位置図(2)

図　版　目　次

ＰＬ．1　大毛島全景　　第１区全景
ＰＬ．2　第６区遺物包含状況　　第10区砂岩露出状況
ＰＬ．3　第38区馬垣露出状況　　第39区全景
ＰＬ．4　第36区全景　　採集遺物

Ⅰ　調査の趣旨

（Fig.１，ＰＬ．１）

昭和47年度に「鳴門地区の文化財分布調査」を計画し，県内の考古学研究者と協議を行い，徳島考古学研究グループと調査団を組織し分布調査を実施し，報告書が作成された。

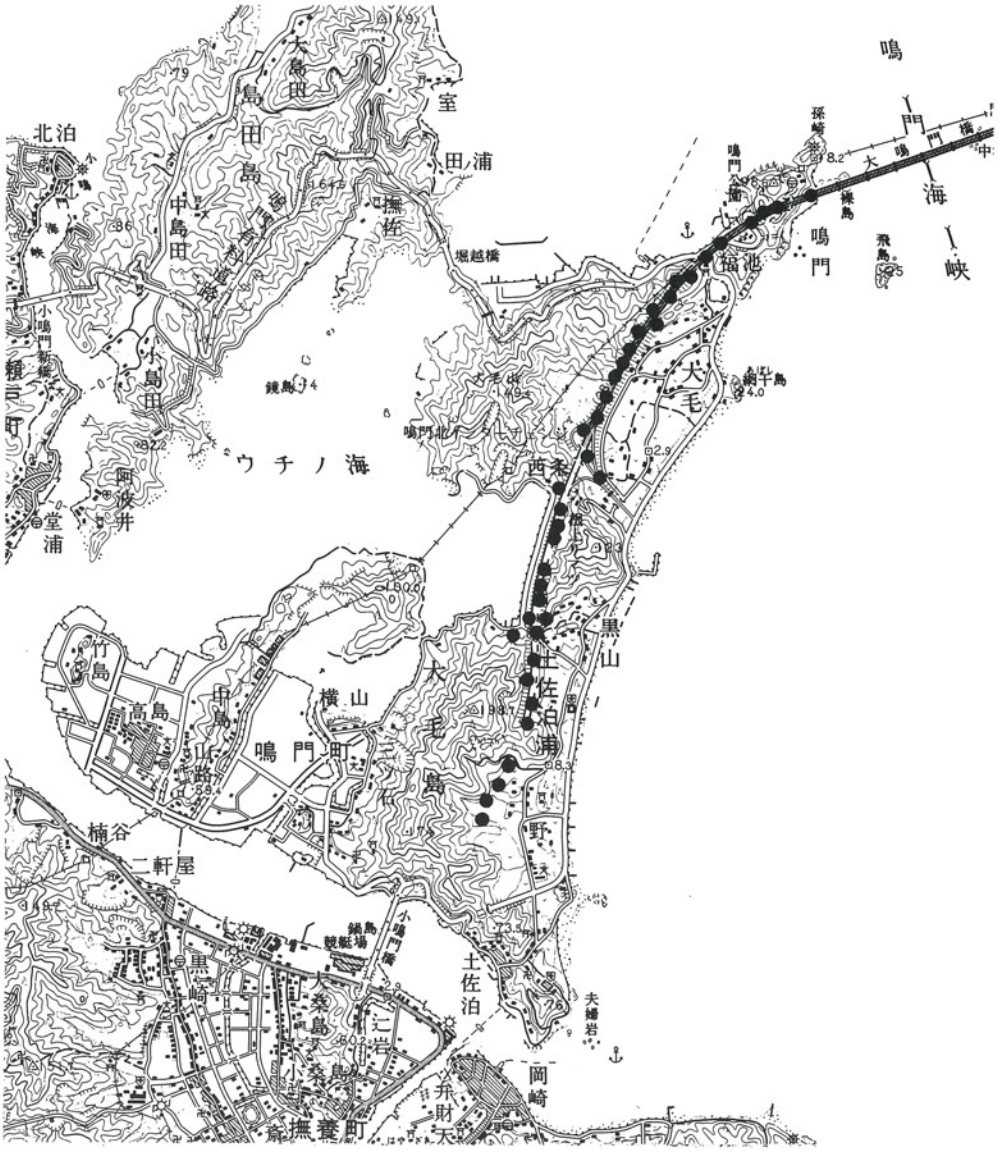


Fig.１　遺跡位置図

この報告書（註１）の成果は路線決定にあたって，文化財保護の健策として生かされている。

昭和52年度の精密分布調査は本四鳴門架橋の本格化とこれに伴う道路建設が具体化され，路線決定と道路幅，その他附属施設等の整備計画により実施された。そのため，高速道路計画路線内を精密に踏査し，地形の現状把握や遺物を採集し，調査結果を協議し，その結果をまとめて記録し，今後の緊急発掘調査計画の基礎的資料とする。

Ⅱ　調査の経過

１．所　在　地　鳴門市鳴門町大毛島内の高速道路計画路線内

２．調 査 期 間　昭和52年４月28日～５月20日

３．調 査 主 体　徳島県教育委員会文化課

４．調査の方法　調査員が高速道計画路線内を踏査して地形の現状把握をするとともに遺物の採集を行い，遺物の散布状況から遺跡の存在とその範囲を推定する。一方では縮尺千分の１地形図への記入，さらには分布調査カードへの見取図や調査項目についての記述をしていく。最後に写真撮影を行うとともに全員が協議して，大体の遺跡の性格などの判断をしていくという方法を採った。

Ⅲ　遺跡の一覧

遺跡番号	遺跡名	番地	地目	採集遺物	内容（地形状況や現状）	ランク
No. 1			山林	弥生式土器片	丘陵の中腹に平坦地があり，地表下1～1.5mの所に包含層がある。 現在プレハブ住宅が建てられている。	Ⅰ
No. 2			山林		丘陵の尾根上に微高地がある。 敷石か配石かは不明であるが，確認される。微高地は２か所ある。	Ⅱ
No. 3			山林		尾根の最先端の頂上に微高地がある。配石が３個並んでいる。 麓には巨石の自然石がある。	Ⅱ
No. 4			山林		尾根の最先端の頂上に微高地がある。石が２個並んでいる。	Ⅱ

遺跡番号	遺跡名	番地	地目	採集遺物	内容（地形状況や現状）	ランク
No. 5			山林		尾根の最先端の頂上に微高地がある。石が３個並んでいる。	Ⅱ
No. 6	福池遺跡		山林 宅地	須恵器片 土師器片	山の斜面の地表下１ｍ内外の所に数ｍにわたって包含層が確認できる。宅地の下にも遺跡の可能性がある。	Ⅰ
No. 7			山林		丘陵の中腹に径約1.5ｍほどの円形の平坦地がある。中央には配石が２列に並び，古墳の可能性がある。	Ⅰ
No. 8			山林		丘陵の尾根上に微高地がある。 微高地が３か所あり，特に鉄塔の西側は古墳の可能性がある。	Ⅱ
No. 9			山林		丘陵の尾根上に微高地がある。 石が３個並んでいる。	Ⅱ
No.10			山林		開墾地の段丘に砂岩の切石が数個縦に並べられており，上には横に置いて蓋をしたようである。古墳の可能性がある。	Ⅰ
No.11			山林		尾根の頂上に微高地がある。中央や周辺に石が並んでいる。	Ⅱ
No.12			山林		尾根の頂上に微高地がある。石の存在がある。	Ⅱ
No.13			山林		尾根の最先端の頂上に微高地がある。 周辺には砕石した切石の石層が多数散乱している。	Ⅱ
No.14			山林		尾根の最先端の頂上に微高地がある。	Ⅱ
No.15			畑		柑橘畑となっており，丘陵と丘陵の間に谷間の平坦地がある。	Ⅱ
No.16			畑		ラッキョ畑で砂地の平坦地が形成されている。近くより土師器片が出土し，その範囲の一部分であろう。	Ⅰ
No.17			山林 畑		砂丘となっており，砂丘の上には松林がある。松を伐採したり，畑として開墾した所もある。その松の根元や開墾地に瓦片や陶磁器片及び貝が付着している。もし遺構か何がしかの遺跡があるとしたら砂丘の下であろう。 また，この地の周辺には馬垣跡や須恵器片，土師器片，陶磁器片が多数散布している所がある。	Ⅱ
No.18						
No.19						
No.20			畑	陶磁器片	ラッキョ・麦畑となっており，時期は不明であるが，陶磁器片が散布している。	Ⅱ
No.21			山林 畑	須恵器片 瓦 器 片 陶磁器片	海岸線に沿った平坦地がある。 また山の中腹に神社の祠跡や鳥居がある。平坦地も遺跡の可能性がある。	Ⅰ
No.22			畑		海岸線に沿った所に平坦地がある。	Ⅱ
No.23			畑		海岸線に沿った所に平坦地がある。	Ⅱ

遺跡番号	遺跡名	番地	地目	採集遺物	内容（地形状況や現状）	ランク
No.24			畑 山林		海岸線に沿った所に平坦地がある。また，尾根の最先端の頂上に微高地がある。	Ⅱ
No.25			山林		丘陵の尾根の頂上に微高地がある。	Ⅱ
No.26			山林		丘陵の尾根の頂上に微高地がある。	Ⅱ
No.27			山林		丘陵の尾根の頂上に微高地がある。微高地の周辺に配石の存在がある。	Ⅱ
No.28			山林		丘陵の尾根上に微高地がある。	Ⅱ
No.29			山林		丘陵の尾根の最先端に微高地がある。	Ⅱ
No.30			山林		丘陵の尾根の頂上に微高地があり，また，海岸に延びた尾根にも微高地がある。	Ⅱ
No.31			畑		海岸線に沿った所に平坦地がある。	Ⅱ
No.32			畑		海岸線に沿った所に平坦地がある。ただし，造成された可能性がある。	Ⅱ
No.33			畑		山の麓に緩傾斜があり，砂地と山土からなっている。畑としてラッキョや柑橘類を栽培している。	Ⅱ
No.34			山林		丘陵の尾根の頂上に微高地がある。 石の存在もある。	Ⅱ
No.35			畑		砂地で形成された畑地である。 畑はラッキョ畑となっている。	Ⅱ
No.36			畑	土師器片 陶器片	山麓を開墾して畑地としている。 畑地の表土に遺物が散布している。	Ⅰ
No.37			田	須恵器片 土師器片 陶器片	水田耕作が可能な所である。表土に遺物が散布しており，住居跡の可能性がある。	Ⅰ
No.38			山林		山の中腹に約80m，高さ1m，幅1mの馬垣が残存している。2か所残っている。	Ⅰ
No.39			田 山林	須恵器片 土師器片 陶磁器片	水田及び畑地となっている。表土に遺物が散布しており，住居跡の可能性がある。	Ⅰ

備考　ランクⅠ……全面発掘調査が必要と思われる。
　　ランクⅡ……確認発掘調査が必要と思われる。

Ⅳ　各遺跡の概要

（Fig.２・３，ＰＬ．１～４）

１．第１区

鳴門公園千畳敷下の南側斜面の崖下である。この崖下の中間点に狭い空間地があり，本四架橋の作業員小屋が建てられている場所である。地表より１～1.5mの断崖面に帯状に包含層が確認でき，弥生式土器が包含されている。鳴門市史（上巻）によると壺形土器，甕形土器片が採集され，土器表面には櫛描文が施文されていた（註２）と記されている。

今回の調査では包含層と土器細片が確認できたのみで，断崖のため危険である。この第１区は鳴門海峡に向って延びた丘陵の最先端の南側中腹に位置した狭い平坦地にある。このような狭隘な平坦地を利用して弥生時代に人々が生活した足痕があることは，鳴門海峡の歴史的意義を解明する手がかりになる。ただし、今の現状より崩壊させないという事で調査対象外となった。

２．第６区

県道が千畳敷方面と鳴門スカイライン方面に分かれる地点である。ここに亀浦神社の祠があり，神社の西側の山の斜面には包含層が確認でき，須恵器，土師器片が採集される。

地元の人々の話では亀浦神社の御神体はカメ（瓶）であるとのことである。また，この亀浦神社からは瀬戸内海の播磨灘が展望できる。このように瀬戸内海を後背地とした遺跡が想定されるとともに，周辺では北側に納言山古墳群の存在や土師式土器片が採集されるなど，重要遺跡の可能性がある。

３．第７区

亀浦神社の西の横側に山を登るための小路があり，約30m程登った中腹に径約15mの円形の地形がある。中央部には人工的な配石とおもわれるものや，周辺には円礫も確認できる。また，この地点からは瀬戸内海が展望でき，遠く播磨灘も見わたせる好景観である。

４．第10区

山の中腹に山を縦断する小路があり，この小路のすぐ横に砂岩の切石が縦に５～６枚並

べられている。現在，全長７ｍであり，この縦石の上には横に並べて蓋をした状況で確認できる石がある。古墳の石室の側壁が露出している状態かとも思われるが，周辺の土地は段々に開墾されているし，柑橘類が栽培されていた痕跡もあり，現地点では想定不可能であるが，人工的であることにはまちがいがない。

５．第16・17区

太平洋の海岸から砂地が奥地まで広がった地点で，砂丘を形成している。この砂丘と山麓との間は谷川が流れ，凹地を形成している。また，砂丘上には砂地を囲むように馬垣が寛永６年（1629）に築かれ，現在は長さ約100ｍ，高さ１ｍ，幅１ｍで残っている。砂丘上からは須恵器，土師器，陶磁器片が多数採集されるとともに，製塩土器片も散布しており，製塩遺跡の可能性がある。ただ，製塩遺跡としてもその範囲がどこまで広がるかは想定しにくい。

６．第21・22・23区

国指定天然記念物の根上り松よりウチノ海に下りた地点であり，西條地区に位置する。

海岸線より石段を登ると神社の祠がある。海岸線には倒壊しているが鳥居があり，明治23年建立の銘が刻まれている。祠の周囲からは須恵器，瓦器，陶磁器片の散乱がみられる。

この第21区より連続して小湾を形成した平坦地があり，遺跡の可能性は十分考慮されなければならない。

７．第36・37・39区

鳴門東小学校より北へ進んだ最奥地にあたる。この地は現在，大毛島で唯一の水田耕作が行われている。この地域には須恵器，土師器片，チャート石片等が多数散布しているので集落跡が想定される。

８．第38区

水田耕作が行われている上の山麓地帯で，中腹に築かれた馬垣である。現在は長さ約80ｍ，高さ１ｍ，幅１ｍで残存している。この馬垣は馬の放牧のためではなく，放牧された馬が山中より下りて来て，農作物を食い荒らすのを防ぐために地元の人々が江戸時代に築いたと言われる。この地区全域に築かれていたようだが，現在はこの地区のみになった。

その他の遺跡は古墳とか，その他の遺構とかの可能性があるとして想定したが，不確実のため，今後は緊急発掘調査を実施し，より正確な内容を把握する必要がある。

以上，各遺跡について具体的に記述したが，分布調査にはおのずと限界があり，今後の道路工事の計画に合わせて埋蔵文化財の保護を充実させてほしい。また，遺跡の規模，内容（時期・遺構の存在）などを明確にするためには，道路工事を着工する事前に充分，時間と費用をかけて全面発掘調査及び確認発掘調査を実施する必要がある。

V まとめ

今回の精密分布調査によって計39箇所の遺跡，あるいは遺跡とは判定しがたいが，可能性が充分あると推定される場所が確認できた。可能性とは周辺に遺跡が確認されており，その範囲の一部であると思われる場合，または周辺に遺物が散乱し，同一地点として把握できる場合，あるいは立地条件にめぐまれた地形に微高地がある場合，さらには目的は不明であるが何らかの施設の石材が散乱していることを考慮してのことである。また，遺跡の範囲は遺物の散乱状況，自然地形等の状況により推定して想定した範囲であるため，今後，若干の変更は必要と思われる。

註

註１　「文化財分布調査概要　鳴門地区(1)」’77年　徳島県教育委員会

註２　「鳴門市史」（上巻）’76年　鳴門市史編纂室

Fig. 2　遺跡位置図（1）

Fig. 3　遺跡位置図（2）

第8・9・10・15区

本　文　目　次

Ⅰ　位置と環境
Ⅱ　調査の経過
Ⅲ　基本層序
Ⅳ　遺　　構
Ⅴ　遺　　物
Ⅵ　ま と め

挿　図　目　次

Fig. 1　第８・９・10・15区位置図
Fig. 2　第８・９区地形測量・トレンチ配置図
Fig. 3　第８・９・10・15区層序柱状図
Fig. 4　第10区地形測量・トレンチ配置図
Fig. 5　第10区土塁状遺構１・２
Fig. 6　第15区地形測量・トレンチ配置図
Fig. 7　第８・10・15区出土遺物

図　版　目　次

ＰＬ．１　第８区全景　第９区全景
ＰＬ．２　第15区調査前全景　第15区トレンチ全景
ＰＬ．３　第10区土塁状遺構　第10区土塁状遺構
ＰＬ．４　第８・10・15区出土遺物

Ⅰ　位置と環境

（Fig. 1）

第８・９・10・15区は大毛島山系の北部にあたる。第８・９区は標高70～74mの尾根上に，第10区は標高44～51mの尾根南傾斜面に，第15区は標高５～15mの南傾斜面に位置する。第８・９区からは北に備讃瀬戸・鳴門海峡，東に紀伊水道・淡路島，西に亀浦港・島田島が望める。第10区からの眺望は北に鳴門海峡，東に紀伊水道・淡路島である。第15区は大毛島山系が平地と接する位置にあたるため，南に臨海低地を望むにすぎない。いずれも地目は山林である。

Ⅱ　調査の経過

昭和52年度の鳴門架橋に係る道路建設に伴う埋蔵文化財精密分布調査（以下，分布調査とする）の成果に基づき，第８・９・10・15区においては昭和57年度に確認調査を行うこととなった。

期間期日は第15区では４月１日～13日，第10区では４月１日～５月19日，第８・９区では５月10日～６月24日であり，第21区の調査とも同時併行で行った。

調査日誌抄

４月１日　調査準備作業開始
　　７日　第15区地形測量開始
　　８日　第10区地形測量開始
　　13日　第15区写真撮影，調査終了
　　26日　第10区土塁状遺構写真撮影，第１・２トレンチ掘り下げ
５月11日　第８・９調査区，地形測量開始
　　18日　第10区土層図・平板測量図作成，全景写真撮影
　　19日　第10区確認調査終了
　　25日　第８・９区トレンチ掘り下げ開始
　　26日　第８区第２層より石鏃出土
６月24日　第８・９区確認調査終了

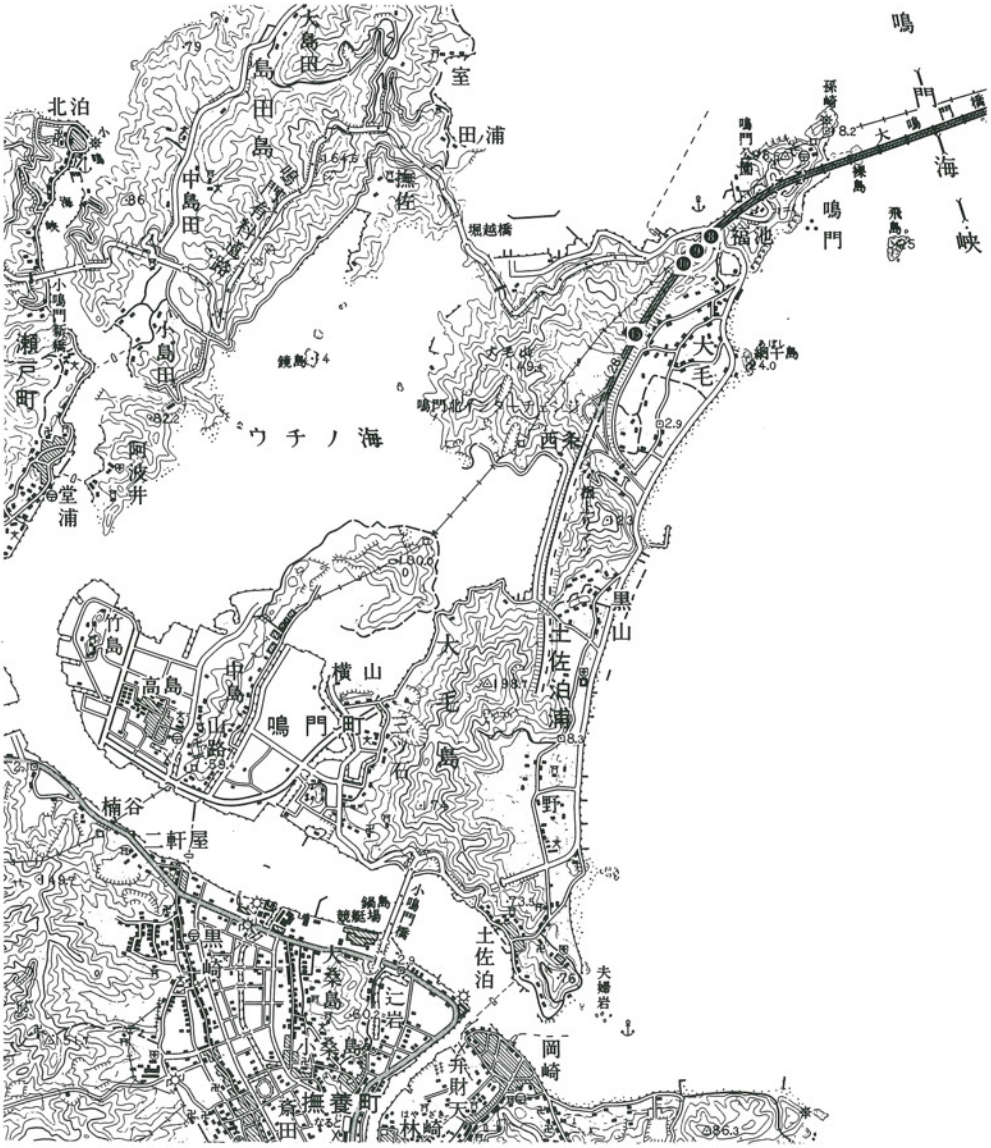


Fig. 1　第８・９・10・15区位置図

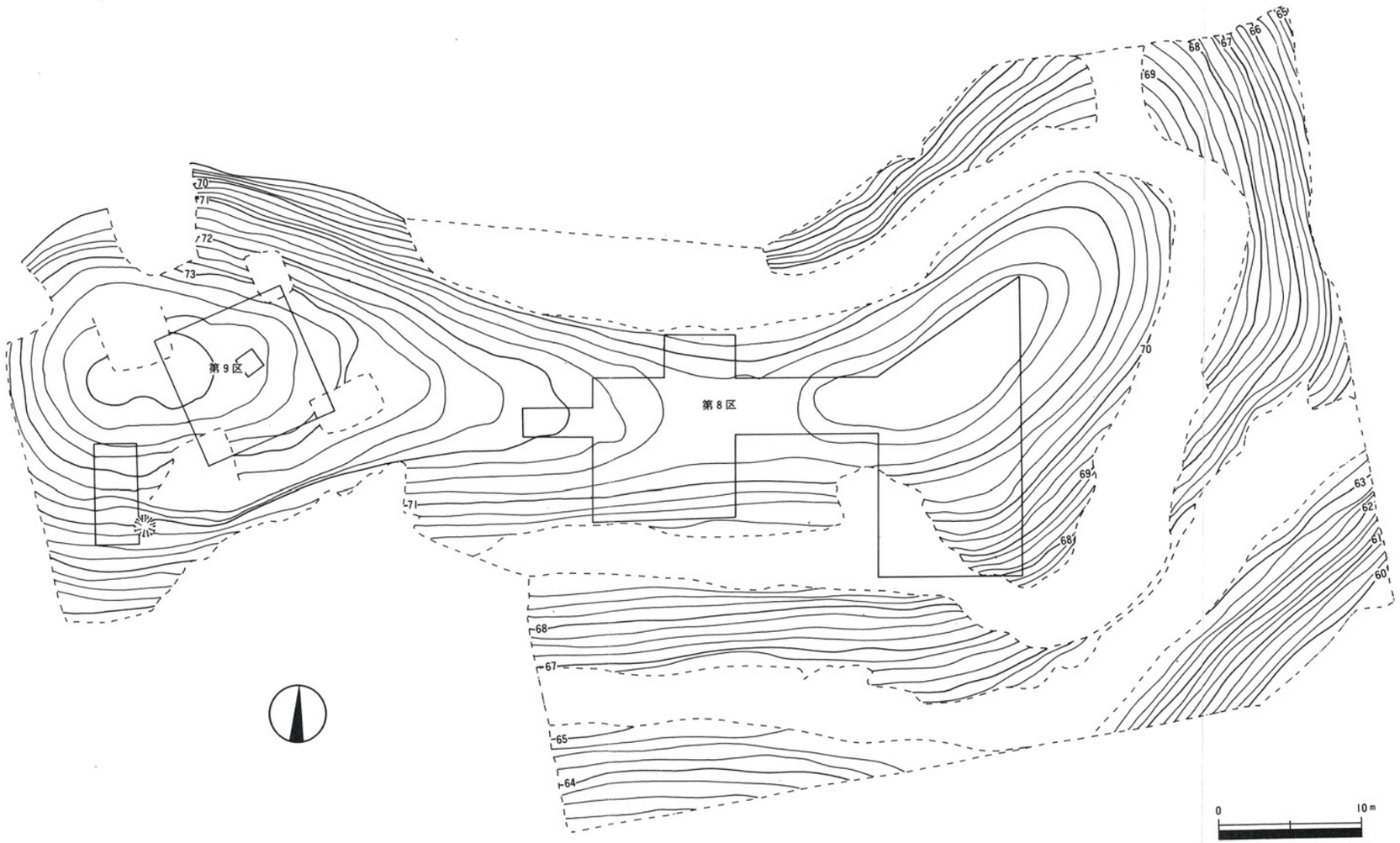


Fig. 2　第８・９地形測量・トレンチ配置図

Ⅲ　基本層序

1．第8・9区　　（Fig. 2・3，ＰＬ．1）

両区は東西にのびる尾根上にあたり，第8区から第9区にかけて次第に高くなって行く。

分布調査では古墳の可能性があるとみられていたため，第8区では尾根から南と北の傾斜面にかけて土字形に，第9区では尾根から南及び東の傾斜面にかけて，2箇所の方形状トレンチを設定した。

両区とも砂岩を主とする和泉層群を地山とし，その上に自然堆積層の黄褐色粘質土，表土腐植土層と続く。第8区では第2層の黄褐色粘質土層から石鏃が出土しているが，遺構及び遺構面は検出されなかった。

2．第10区　　（Fig. 3・4，ＰＬ．3）

当該区は東西にのびる尾根の上と南傾斜面にあたり，北東から南西に下降する谷状地形も含まれる。分布調査では古墳の可能性があるとみられていたため，南傾斜面を中心として長方形と，逆Ｌ字形の2箇所にトレンチを設定した。

第8・9区と同じく砂岩を主とする和泉層群を地山とし，その上に自然堆積層の黄褐色粘質土層，表土腐植土層と続く。第2層の黄褐色粘質土層からサヌカイト剝片と，火熱を受けたとみられる多くの砂岩礫が出土しているが，土器などの遺物は出土してなく，その該当する年代は不明である。第2層上面には土塁状遺構・土坑が構築されている。

3．第15区　　（Fig. 3・6，ＰＬ．2）

当該区は南へ緩傾斜する谷状地形にあって，部分的に平坦面もみられる。分布調査では平坦面に遺跡があるとみられていたため，平坦面を中心にした十字形状のトレンチを設定した。1ｍ以上の海砂の堆積があり，風によって吹き上げられたものとみられる。上部の腐植土を含んだ砂層中から近世陶磁器が出土している。その下部は無遺物層であり，遺構及び遺構面は検出されなかった。

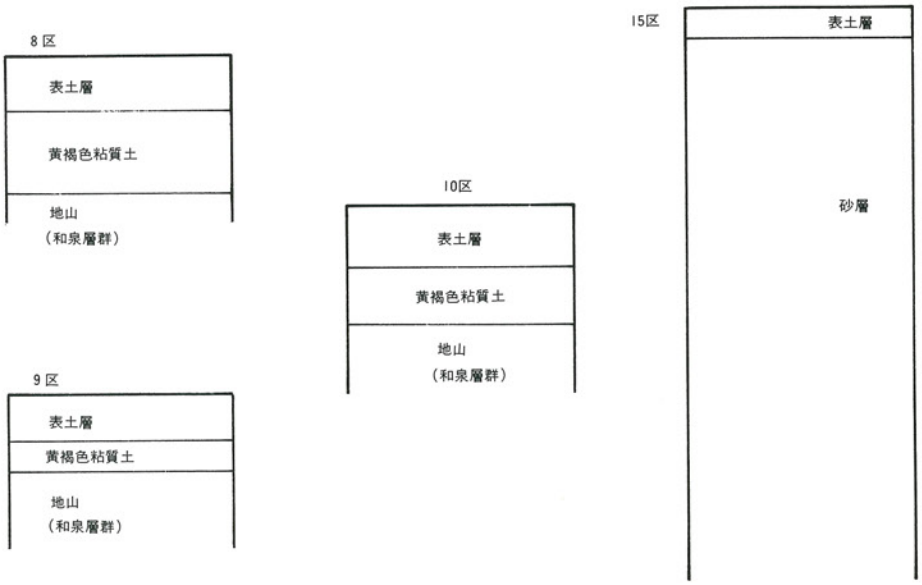


Fig. 3　第8・9・10・15区層序柱状図

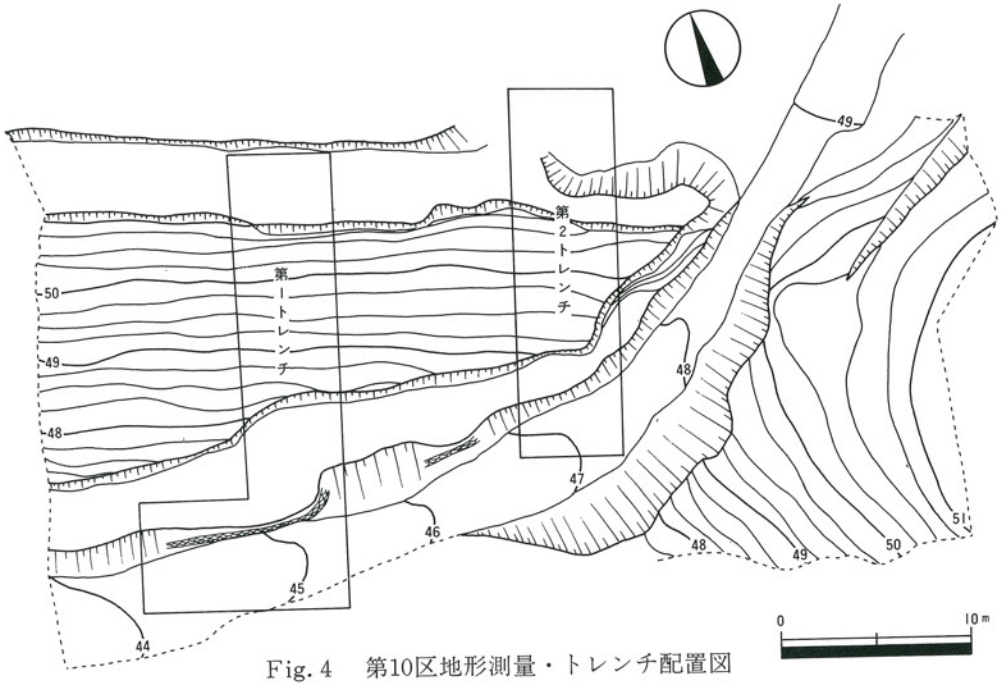


Fig. 4　第10区地形測量・トレンチ配置図

Ⅳ 遺　　構

1．第８・９・15区

第８・９・10・15区では遺構及び遺構面は検出されなかった。

2．第10区　　（Fig. 5，ＰＬ．３）

第10区では第２層上面に遺構が構築されている。土塁状遺構２箇所，土坑１箇所。構築年代決定資料は出土していないが，土塁状遺構については近世の所産とみられる。

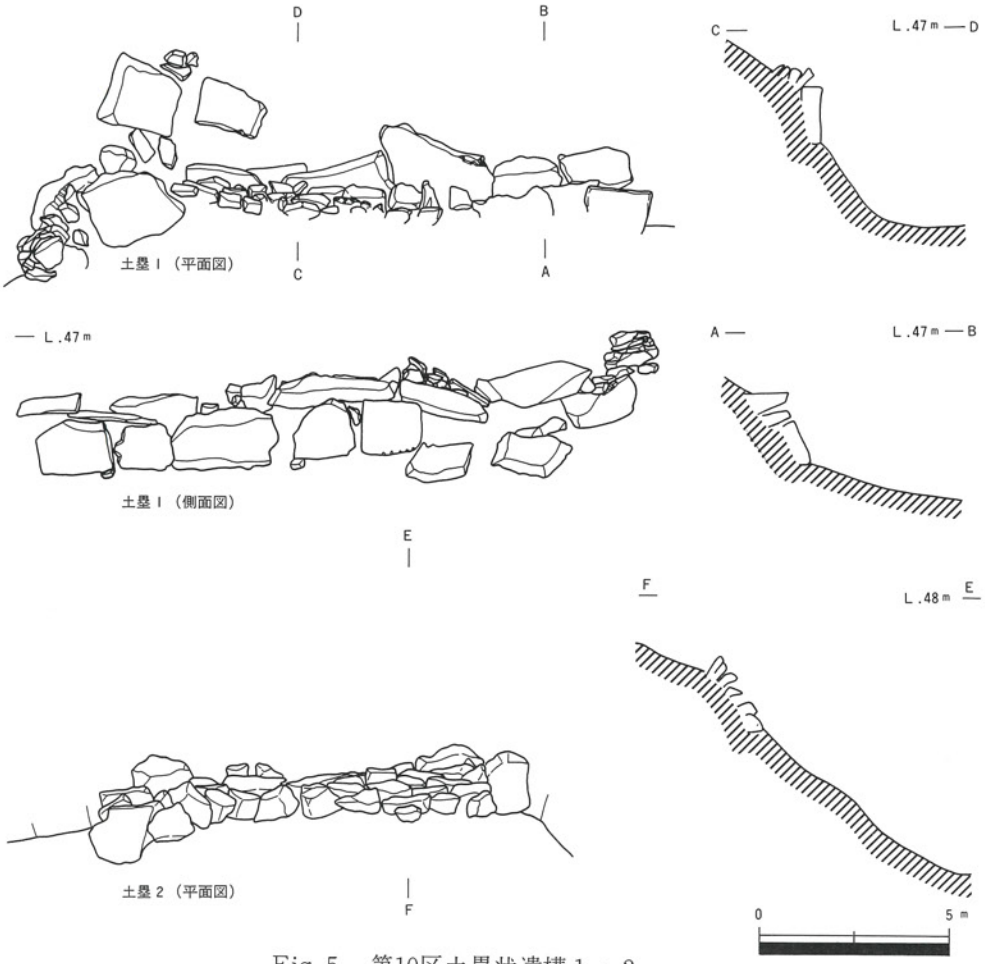


Fig. 5　第10区土塁状遺構１・２

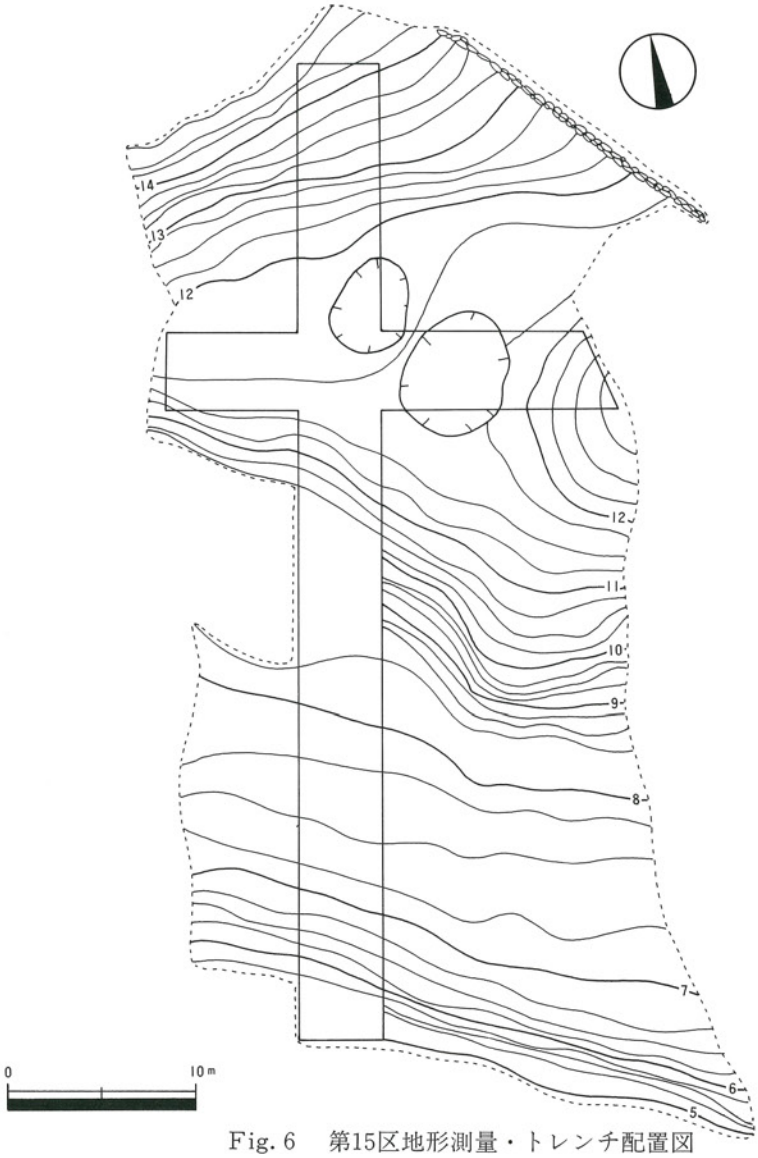


Fig. 6　第15区地形測量・トレンチ配置図

土塁状遺構　　谷状地形の北に位置し，南に傾斜する地形に沿って北東から南西に走る。2箇所検出したが一連の構築物とみられる。調査時には石垣としたが構築状況などから，防砂的な役割をもつとみられ土塁状遺構として扱う。出土遺物はない。土塁状遺構1は長さ約6.6mを遺存する。1m内外の砂岩割石を小口積み様に3～4段積み上げる。部分的に0.3m内外の石材を用いる。石材には石切り時に用いられた矢の痕跡を残すものもみられる。一部用材が崩落している。土塁状遺構2は長さ約2.3mを遺存する。0.4m以下の砂

岩割石を小口積み様に6段前後積み上げる。

土坑　尾根の南傾斜面側に位置する。長さ約3.1m，幅約0.9mの長楕円形状で，深さ10cm前後。埋積土の上部には炭化物が認められるが，自然遺構とみられる。出土遺物はない。

V 遺　　物

（Fig. 7，PL. 4）

遺物はきわめて少なく第8区から石鏃が1点，第10区からサヌカイト剝片が1点，第15区から陶器が4個体と磁器の小破片が出土しているにすぎない。第9区では遺物は発見されなかった。

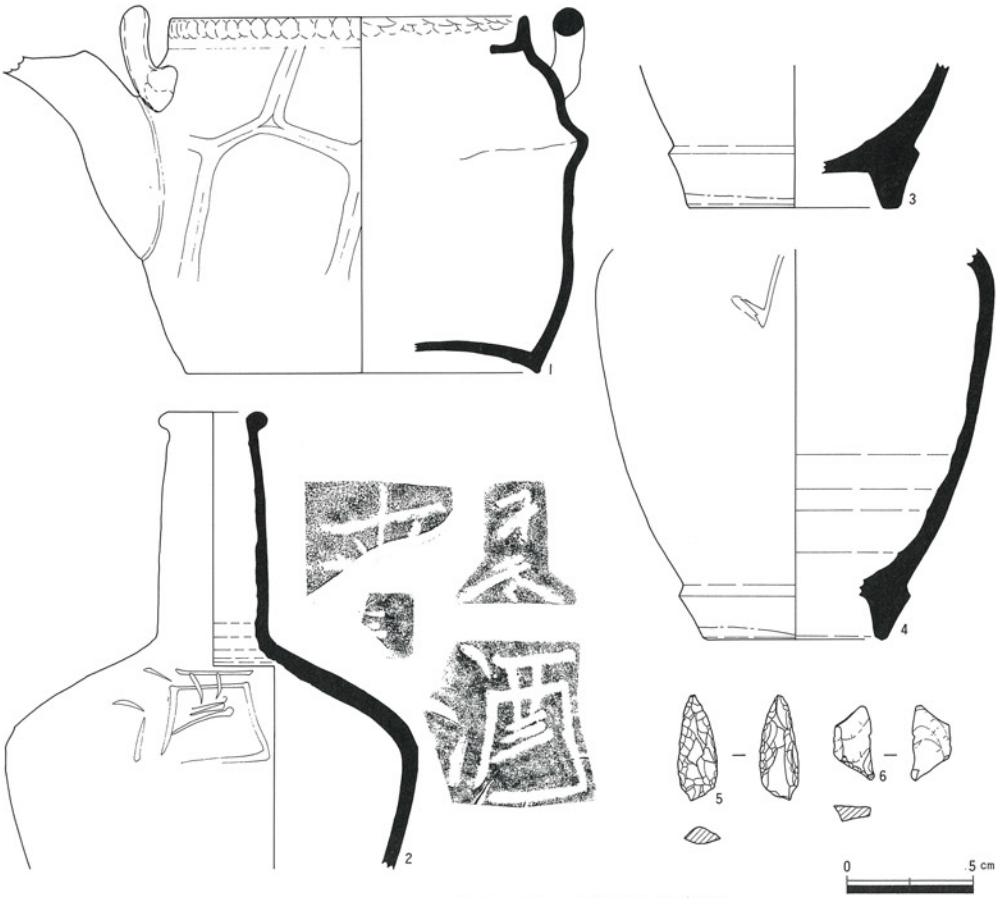


Fig. 7　第8・10・15区出土遺物

1．土器類

土瓶１は第15区第１層出土の陶器の土瓶である。型物とみられ体部に亀甲形の文様を浮出し，底部に布目を残す。底部は上げ底である。口縁部は短く直立し，内側に蓋受け用の段をつくり出す。蓋は欠失している。体部の最大径部分に注口を貼り付ける。体部と注口部の接点には直径３～４㎜の円孔を10個外面から穿つ。穿孔後の調整はみられない。

注口部の上位には紐状の取手を貼り付ける。体部と底部に煤の付着がみれるため，直火にかけて茶をせんじ出す機能を有していたとみられる。

徳利　　第15区第１層出土の施釉陶器の徳利である。大谷焼系とみられる（註１）。

２は口頸部から肩部を遺存する。筒状の頸部に大きく張り出す肩部を有する。肩部に酒などの文字を刻む。赤褐色の素地に暗茶褐色の釉をかける。釉に光沢がある。３は底部を遺存する。内向する断面梯形の高く大きい高台を有する。暗赤褐色の素地に黒褐色の釉をかける。４は肩部以下を遺存する。内向する断面梯形の高台を有する。肩部に文字を刻むが，その一部を遺存するにすぎなく文字不明。赤褐色の素地に黒褐色の釉をかける。釉に光沢がある。

2．石器類

石鏃　　５は第８区第２層黄褐色粘質土層より出土した有茎石鏃である。石材はサヌカイト。粗い作りであるが縁辺の整形剥離は入念に施されている。基部を欠失するが現存長約41㎜，現存重量3.9ｇと大型の石鏃である。

剥片　　６は第10区第２層黄褐色粘質土層上面より出土したサヌカイトの剥片である。石面左端には長軸に平行する剥離痕が認められる。磨滅が著しい。

Ⅵ　ま　と　め

第８・９・10区では尾根上という立地条件から，古墳の可能性があるとみられていたが，古墳時代に該当する遺物や遺構を伴わない。第８区から石鏃が出土しているが，遺構は検出されなかった。第10区の土塁状遺構は構築状況や立地地形から，土砂止めの機能を果していたとみられる。そのため，第21・38・39区で指摘されている土塁とは性格を異にする。

構築年代は資料となる遺物は出土していないが，近世とみられる。石材は第16区の西に石切り場跡があるため，ここから搬入された可能性が高い。第15区では谷状地形の中に平

坦地があるため，遺跡の可能性があるとみられていたが，近世の土瓶と徳利の出土をみるにすぎない。

このように，当該区における先人の明確な足跡は，第10区における土塁状遺構が検出されるにとどまる。

註

註１　「阿波の焼物　大谷焼」'69　豊田　進

第11・12・13・14区

本 文 目 次

Ⅰ　位置と環境
Ⅱ　調査の経過
Ⅲ　第 11 区
Ⅳ　第 12 区
Ⅴ　第 13 区
Ⅵ　第 14 区
Ⅶ　ま と め

挿 図 目 次

Fig. 1　第11・12・13・14区位置図
Fig. 2　第11区地形測量・トレンチ配置図
Fig. 3　第11区トレンチ層序
Fig. 4　第12区地形測量・トレンチ配置図
Fig. 5　第12区トレンチ層序
Fig. 6　第13区地形測量・トレンチ配置図
Fig. 7　第13区トレンチ層序
Fig. 8　第14区地形測量・トレンチ配置図
Fig. 9　第14区トレンチ層序

図 版 目 次

ＰＬ．1　第11区全景
ＰＬ．2　第12区全景　第14区全景
ＰＬ．3　第13区全景　第13区第３トレンチ

Ⅰ　位置と環境

（Fig. 1）

第11・12区は南北に連なる山系の頂上部に位置し，すぐ眼下に淡路フェリーの乗り場があり，その南に納言山古墳群が所在する。東は網干島から紀伊水道が眼下に一望でき，狭くなった大毛山系の高所にある。第11区は標高74.6mの南北に延びた平坦面があり，第12区は68.2mを頂点に南北に細長い平坦面を形成し，表面に和泉砂岩の露頭が随所にみられる。

第13・14区は南北に連なる大毛山系から南東に延びた小さな尾根の最先端の頂上部に位置し，眼下に置砂によって形成された平坦部があり，その向うに紀伊水道が一望できる場所にあたり，第13区は標高28mを頂点とした墳丘状の高まりがあり，地表面に砂岩の割石が露出している。第14区は標高27mを頂点として緩やかな傾斜であり，標高27mと24m付近でやや平坦な面を形成している。

いずれの調査区も古墳の可能性があるということで，各地形に合わせて確認調査を実施した。調査の結果，遺物・遺構がみられなかったので一括してのべる。

Ⅱ　調査の経過

第11～14区は昭和52年度の分布調査により，第11・12区は尾根の頂上に微高地があり，石が並んでいること，第13区は尾根の最先端の頂上に微高地があり，周辺に砕石した石屑が多数散乱していること，第14区は尾根の頂上に微高地があり，古墳の可能性があるということで6月2日より8月29日まで調査を実施した。

調査日誌抄

6月2日　調査区全景写真撮影

5日　第13区伐採，第14区下草刈り

10日　第13区トレンチ設定・第1層掘り下げ，第14区地形測量開始

16日　第12区地形測量開始

23日　第11，12区トレンチ設定

Fig. 1　第11・12・13・14区位置図

30日　第13区写真撮影

7月3日　第13区土層図完了

8日　第14区土層図完了

20日　第11区石出土状況写真撮影

29日　第11・12区土層図作成

8月7日　第11区第3層排土，第12区全測図作成

12日　第12区土層図作成

19日　第11区写真撮影・土層図作成準備

24日　第11区土層図完了，第12区埋め戻し完了

29日　器材補修及び，第22〜26区への移動準備

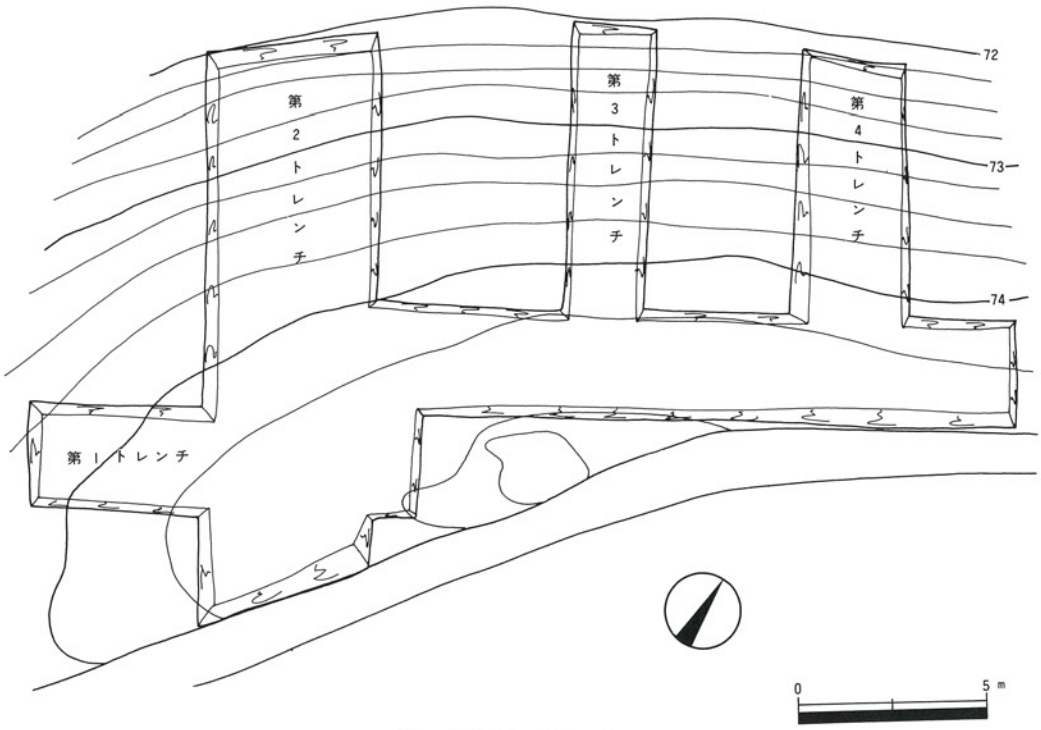


Fig. 2　第11区地形測量・トレンチ配置図

Ⅲ　第　11　区

（Fig. 2・3，ＰＬ．1）

本調査区は北東から南西に細長く狭い平坦面を有し，北西及び南東に向かって急傾斜となっており，この地形の形状と合わせて平坦面に沿って地境沿いに長さ15m，幅２m，長さ３m，幅２mの第１トレンチを設定し，それに直交する形で長さ10m，幅３mの第２トレンチ，それより北へ3.5m離れた所に長さ3.5m，幅1.5mの第３トレンチ，これより北へ３m離れた所に長さ４m，幅２mの第４トレンチを設定し調査を実施した。

第１トレンチは頂上部に調査前から結晶片岩の露頭がみられたが，僅か10㎝の深さの暗赤褐色腐葉土層を取り除くと灰白色の岩盤直上層となり，南北両端は50㎝程の深さで岩盤となり，腐葉土下は灰白色・淡黄色の粘質土層の岩盤上層となっている。

第２トレンチは約10㎝の暗赤褐色腐葉土層が堆積し，その下に灰白色と淡黄色の粘質土層と20～30㎝の岩盤直上層が地形の傾斜と同じように堆積している。

第３トレンチもやはり約10㎝の暗赤褐色腐葉土層が堆積し，その下に第１・２トレンチよりやや厚く40～50㎝の灰白色と淡黄色の岩盤直上層が地形の傾斜と同じように堆積している。

第４トレンチも第１～３トレンチと同様の堆積をしており，他に比べて岩盤直上層が厚く堆積している。

以上，第11区の調査の結果，分布調査では和泉砂岩の露頭石がみられ，古墳の可能性があると考えられていたが，古墳を示す遺構・遺物はなく，それ以外の他の遺構・遺物の存在もなかった（註１）。なお第１層と第２層の間でみられた炭化物と焼土は島内の人達の話から昭和20年に福池地区から発生した山火事の痕跡であることが判明した。

Ⅳ　第　12　区

（Fig. 4・5，ＰＬ．2）

本調査区は第11区より西へ向かって緩かに下り，そこから緩かに立ち上がった細長い平坦面であり，南北は急傾斜となっている。この地形の形状と合わせて，まず平坦面中央部

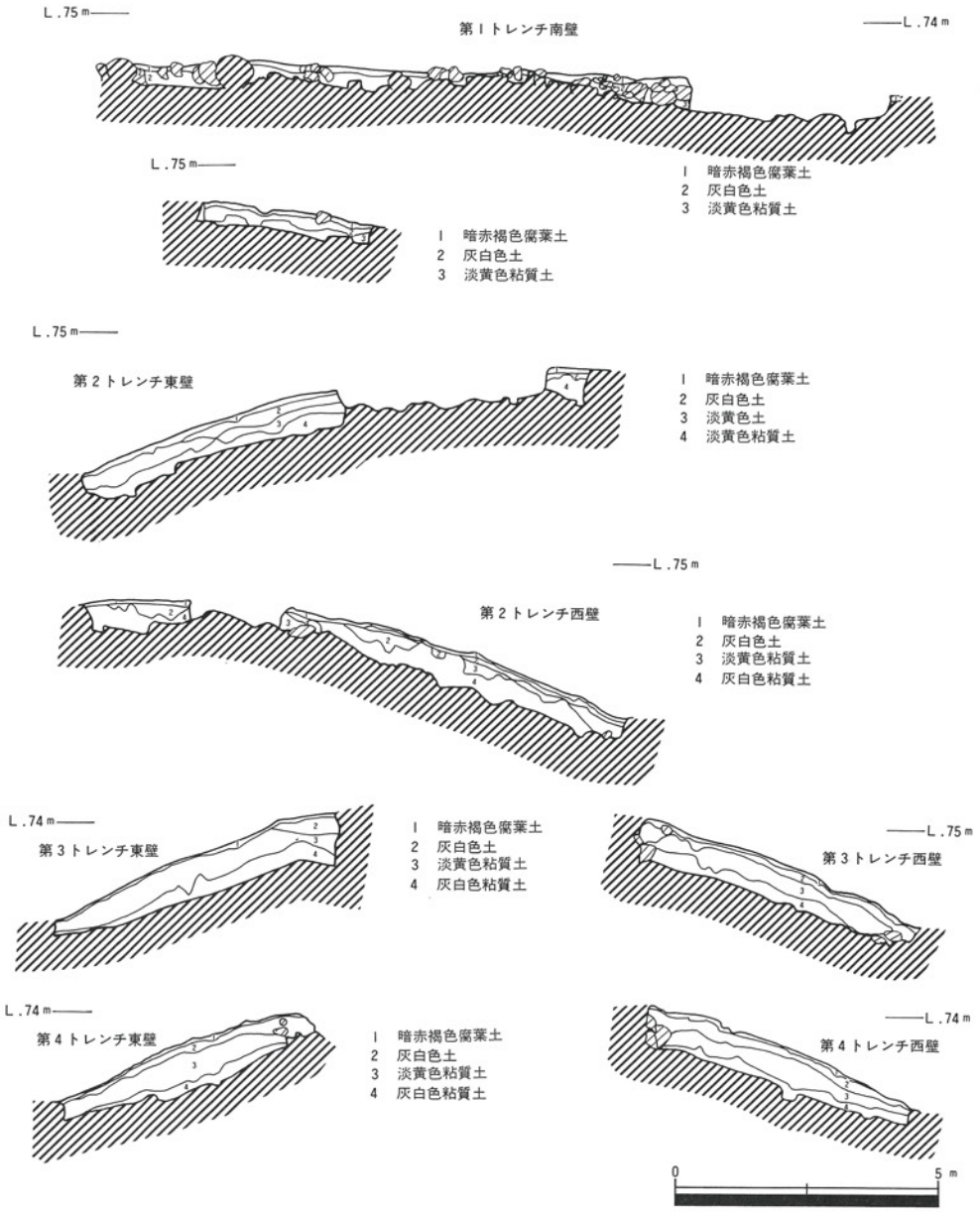


Fig. 3　第11区トレンチ層序

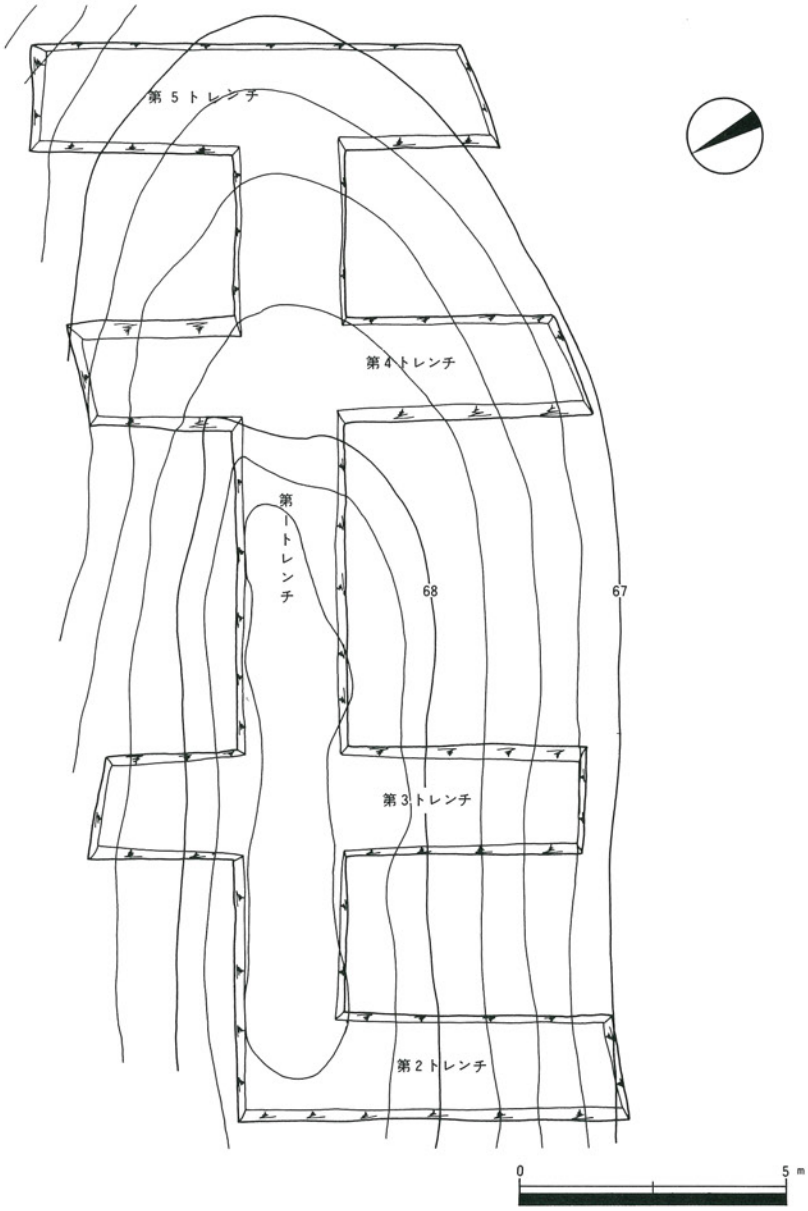


Fig. 4　第12区地形測量・トレンチ配置図

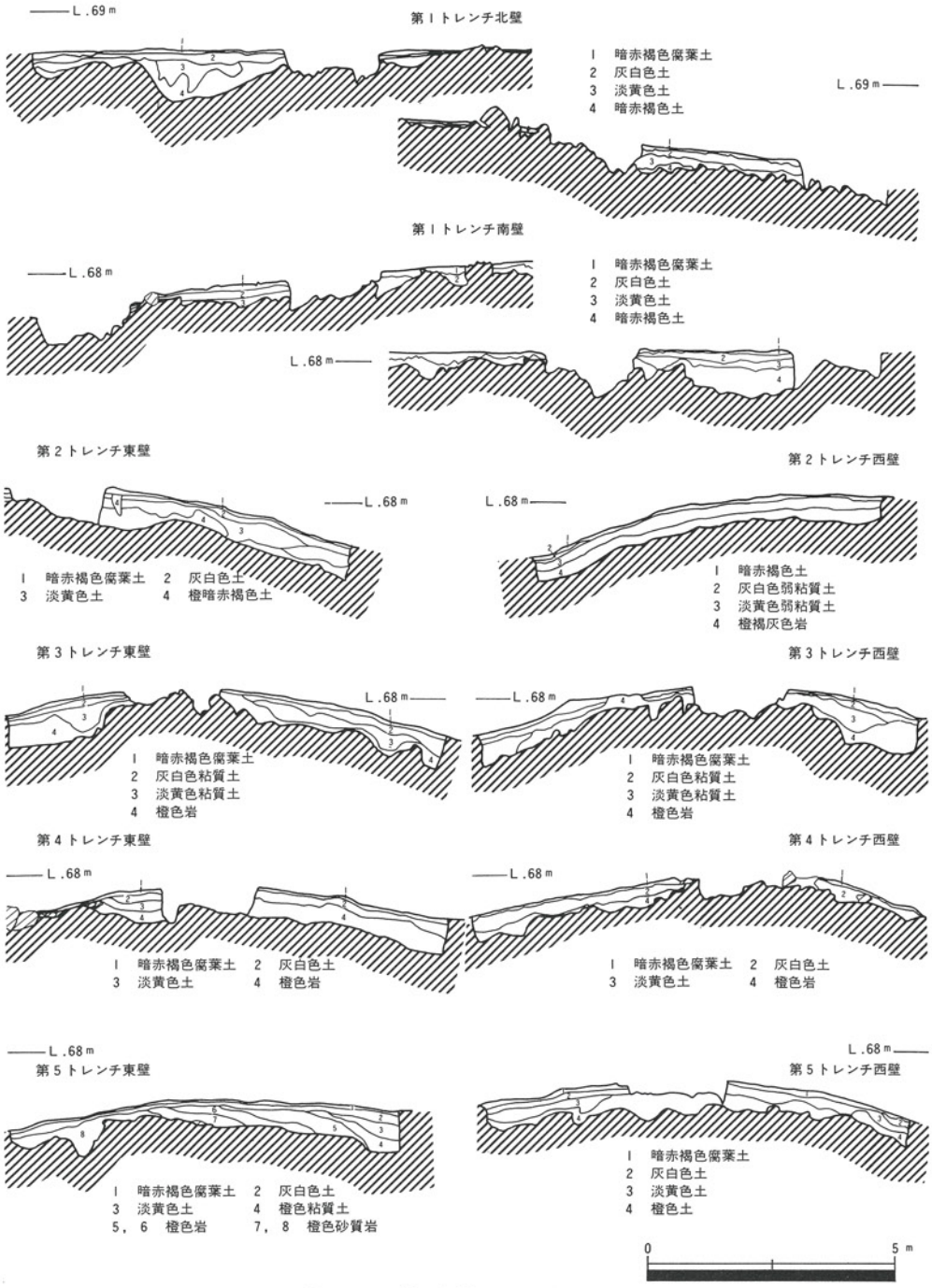


Fig. 5　第12区トレンチ層序

に地境より東へ向かって長さ20m，幅２mの第１トレンチ，それに直交する形で長さ７m，幅２mの第２トレンチ，東へ３m離れた所に長さ９m，幅２mの第３トレンチ，さらに６m東に離れた所に長さ９m，幅２mの第４トレンチ，さらに３m東に離れた地境東端部に長さ8.5m，幅２mの第５トレンチを設定し，調査を実施した。

第１トレンチは第11区と同様に和泉砂岩が随所に露頭しておりその露頭の間に厚さ10㎝の暗赤褐色腐葉土層が堆積し，その下は岩盤の間を埋めるように厚さ20～40㎝で灰白色と淡黄色粘質土層が堆積している。西端近くの第３層の下に厚さ50㎝で淡黄色土層に暗赤褐色の混合層がみられた。

第２トレンチは地形の状況と同じように厚さ40～60㎝の堆積で岩盤となっており，第１トレンチと同様の堆積である。

第３・４トレンチは地形に沿ってかまぼこ状を呈し，第１層の腐葉土層と第２層の灰白色粘質土層はいずれも10～20㎝と浅く，第３層は淡黄色粘質土層であり岩盤の起伏の間を埋める形で堆積している。

第５トレンチは全体的に南へ向かって傾斜した堆積を示しており，第１・２層は現地形と同じ傾斜をもち，第３・４層はいずれも岩盤の起伏の間を埋める形で堆積している。

以上，第12区の調査の結果，分布調査では砂岩の露頭石が古墳の可能性があると考えられていたが，それらを示す遺構・遺物はみられず，確認調査で調査は終了した。

Ⅴ　第　13　区

（Fig. 6・7，ＰＬ．３）

本調査区は大毛山系の南斜面が急傾斜を呈して下っており，標高30m付近よりやや緩かになり，標高29m付近から舌状に張りだして傾斜しており，28m付近では南に向かって平坦面を形成している。27.5m付近は複雑な地形となっており，あきらかに人工的な手が加えられていることを示しており，先端部に約50㎝程の墳丘状高まりがみられ，27m付近より南及び東西両端は急傾斜で平野部へと降りている。墳丘状高まりは和泉砂岩があり，古墳もしくは経塚等の可能性があるということから，急傾斜から平坦面へ移る標高31mから古墳状高まりを含めて，傾斜と並行して長さ12.5m，幅２mの第１トレンチ，第１トレンチに直交する形で北端より約3.5m南に長さ8.5m，幅２mの第２トレンチ，古墳状高まり

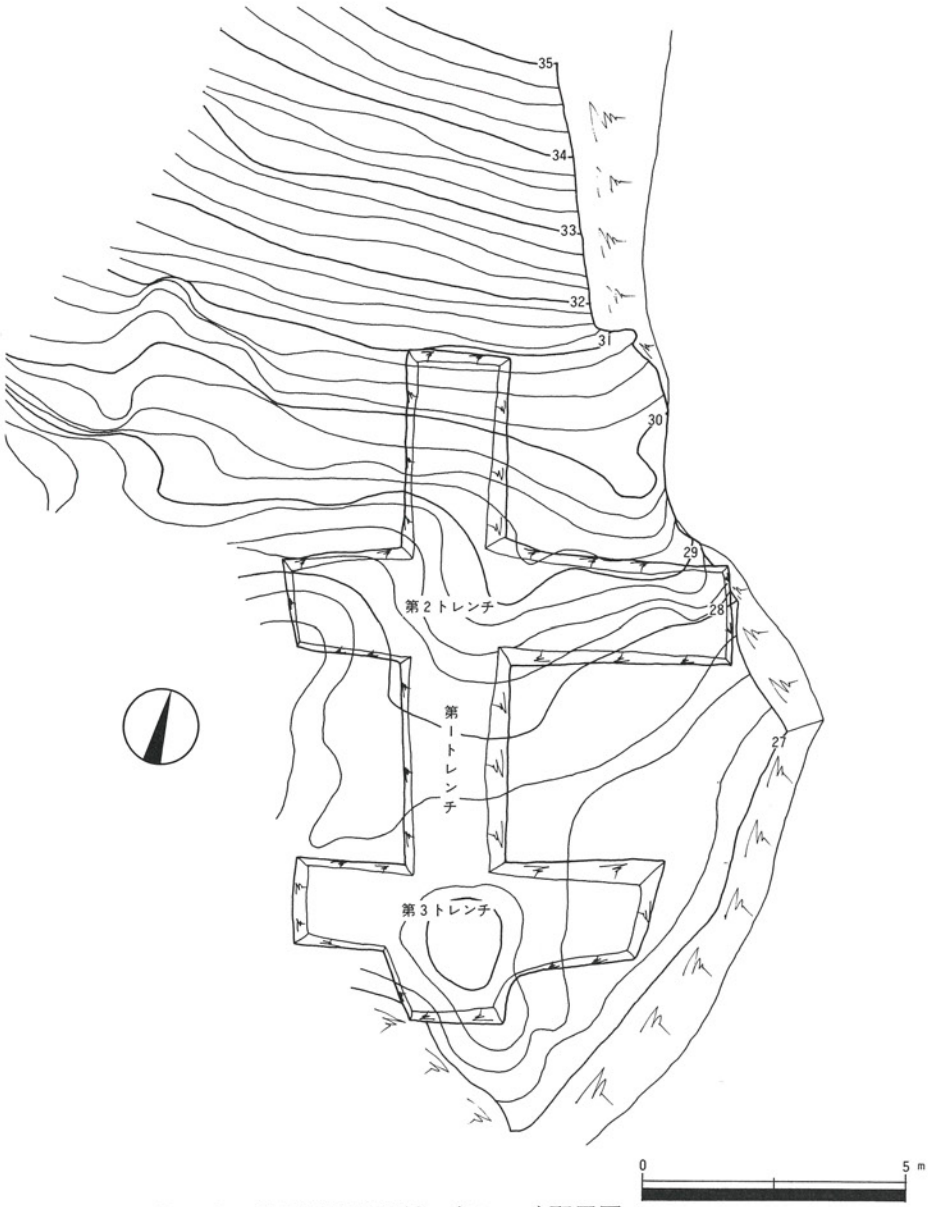


Fig. 6　第13区地形測量・トレンチ配置図

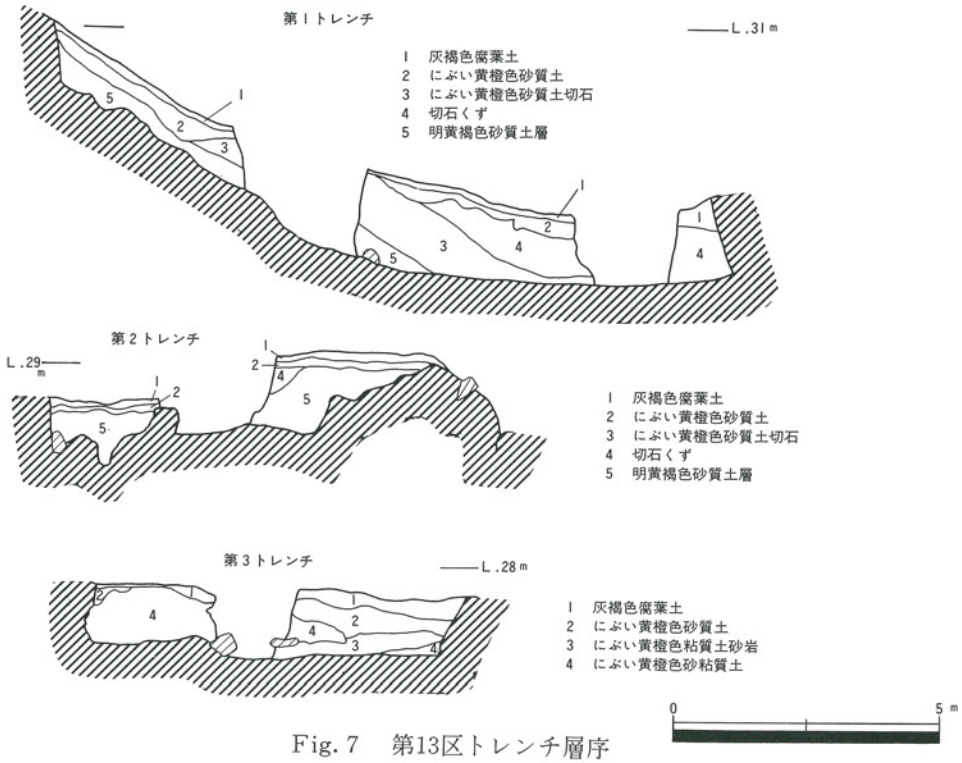


Fig. 7　第13区トレンチ層序

地点で直交する形で長さ７m，幅２mの第３トレンチを設定し調査を実施した。

第１トレンチは標高29～31.5m付近までは第１層の灰褐色腐葉土層が約10cm程堆積し，第２層は地形の傾斜と同じ堆積を示し，北端より２m程の所で傾斜が地形と異なり薄くなっている。それに替って第３層ににぶい黄橙色砂質土層に和泉砂岩の切石の混ざった層が１mと厚く傾斜面に沿って堆積している。第３層の上に標高28.5mすなわち舌状に地形が張り出した地点から墳丘状の高まり部分は，大小さまざまの和泉砂岩の切石が乱雑に堆積し，中に長方形のノミ跡の見られる石がある。第５層は明黄褐色砂質土層が30～50cm地形の傾斜面に合わせて堆積しており，それより下層は岩盤である。

第２トレンチの堆積をみても砂岩の切り石の堆積層が西へ向かって傾斜している。

以上，これらのことを総合して考えてみるならば，本来の地形は南へ下る急傾斜面であった所へ，調査区北東30mに人工的に切り崩した和泉砂岩の露頭面があり，ここで石の採石を行い，その採石の際に不必要な屑石をこの斜面に投棄したものが古墳状高まりとなったものである。切石の中に遺物がみられないことから時期は分からないが，長方形のノミ跡

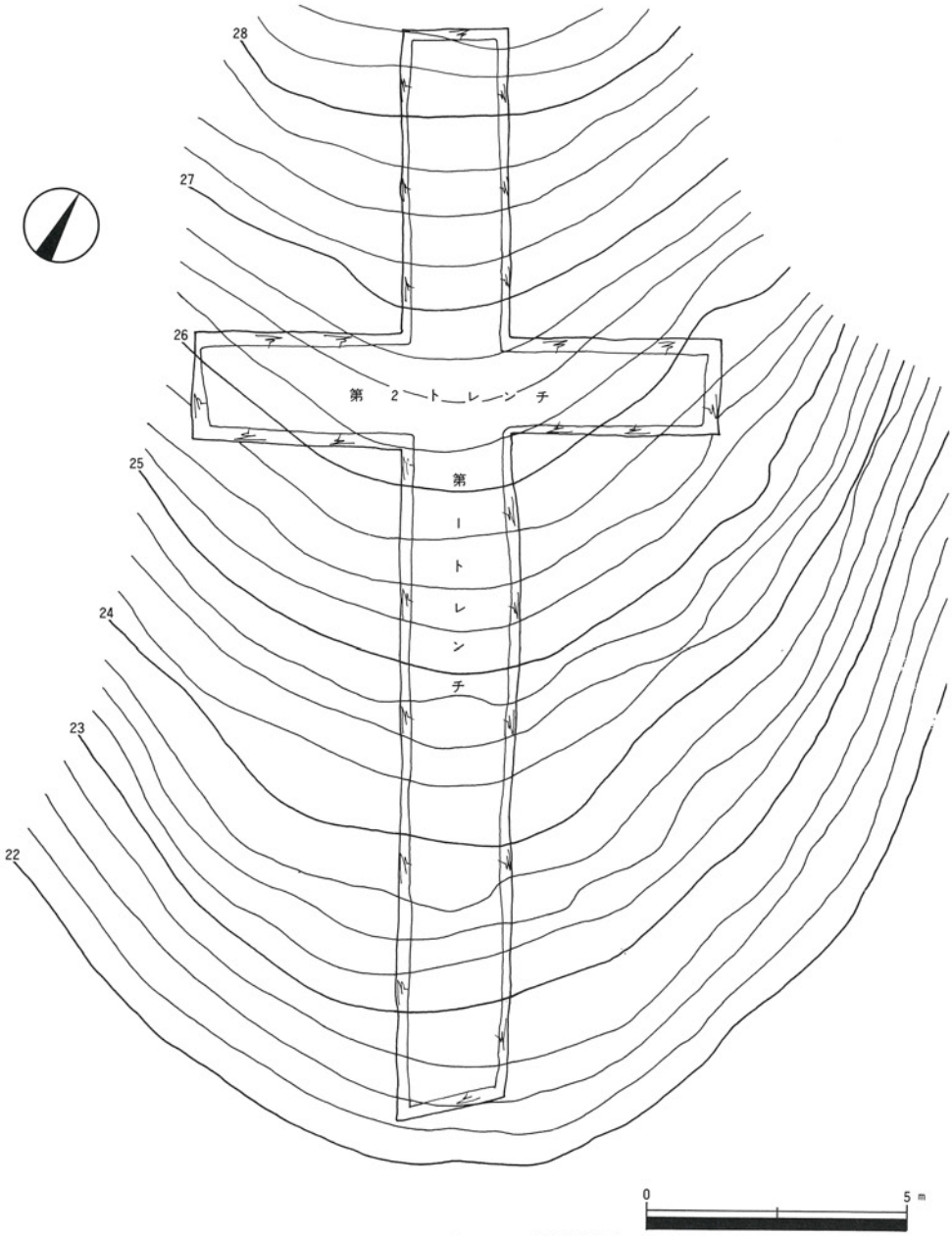


Fig. 8　第14区地形測量・トレンチ配置図

がみられること，発破に伴った円孔が見られないこと，第35区で石切用具とともに出土した陶磁器から江戸時代後半と考えられることから，この調査区の切り石の堆積も同時期に比定されるものと思われる（註２）。

この大毛島内での和泉砂岩は建築用材，塩田堤防用材，石碑材等に古くから利用され，現在も盛んに切り出されている。採石の歴史は「鳴門市史」によれば，天保５年（1835）頃には藩営の石切り場があり，天保９年（1839）頃には販売に対する保護政策がとられたと記述されており，大毛島内を含め撫養地区（鳴門市北部）における主要産地であったことがうかがえ，この調査区もそのひとつの不要石の捨て場であったと思われる（註３）。

Ⅵ　第　14　区

（Fig. 8・9，ＰＬ．２）

本調査区は第13区より尾根をひとつ隔てて西側に位置し，やはり大毛山系から南へ延びた尾根の先端上にあり，標高28mより23mまで緩かに傾斜した舌状の斜面である。この傾斜した斜面の中央部の高まりに並行して，長さ21m，幅２mの第１トレンチを設定し，北

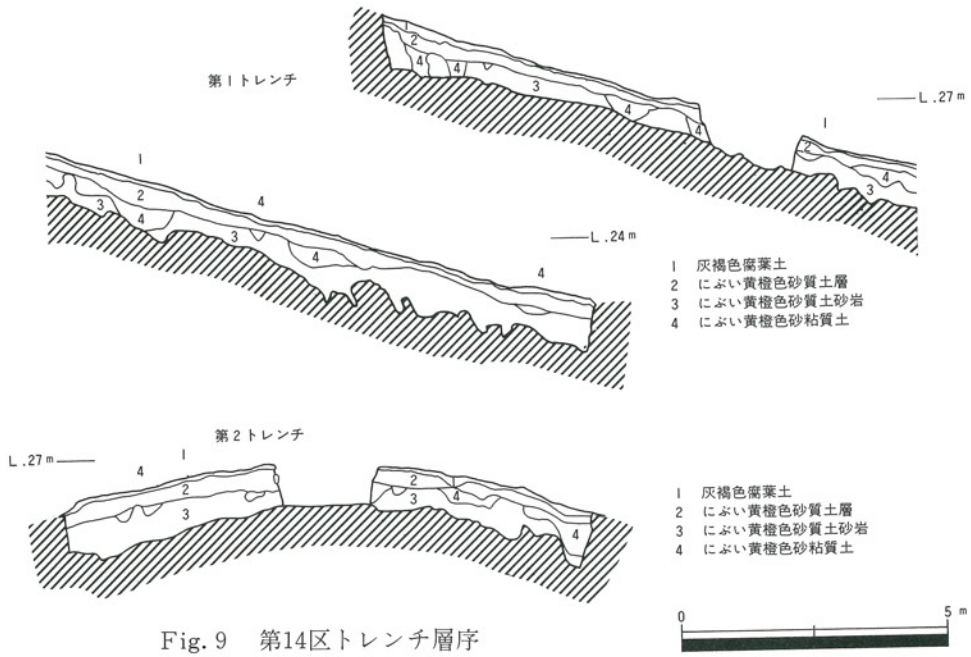


Fig. 9　第14区トレンチ層序

端より６ｍ南の一番平坦面がみられる標高26～27ｍ付近で直交して長さ10ｍ，幅２ｍの第２トレンチを設定し調査を行った。

第１トレンチの土層をみると，約60㎝程の厚さで平均的に堆積しており，第１層は５～10㎝の灰褐色腐葉土層であり，第２層は薄い所で20㎝，厚い所で30㎝のにぶい黄橙色砂質土層であり，その下岩盤までは第３層と第４層が混合した形で岩盤と凹凸をくりかえして土層を形成しており，堆積状態は地形の傾斜と同じ堆積状況である。

第２トレンチの堆積は左右両側に向かって地形が傾斜しており，第１トレンチと同じく同様の堆積を示している。いずれのトレンチにも遺構・遺物がみられず確認調査で調査を終了した。

Ⅶ　ま　と　め

大毛山系の丘陵の先端に北山古墳・納言山古墳があること，これらの古墳よりも標高が高くより見晴らしがよく，砂岩の石が露頭していることから，古墳の所在の可能性が高いということで調査に入ったが，いずれも遺構・遺物は検出されなかった。

第13区において，石切り場本体の遺跡ではないが江戸時代の石切りを行った際の屑石捨て場が検出され，第35区と重ね合わせて考えるならば阿波藩官営の石切り場の所在が確認され，大毛島における江戸時代の産業の特色をとらえる上で一助となりうる資料となった。

註

註１　徳島県文化財調査概報「鳴門架橋に係る道路建設に伴う埋蔵文化財精密分布調査報告書」'77年　徳島県教育委員会

第　22　区

本　文　目　次

Ⅰ　位置と環境
Ⅱ　調査の経過
Ⅲ　基本層序
Ⅳ　遺　　構
Ⅴ　遺　　物
Ⅵ　ま と め

挿　図　目　次

Fig. 1　第22区位置図
Fig. 2　第22区地形測量・トレンチ配置図
Fig. 3　第22区トレンチ層序
Fig. 4　第22区遺構配置図
Fig. 5　第22区土器溜り遺構（ＳＫ－02）
Fig. 6　第22区溜池状遺構・土壙状遺構（ＳＫ－01・03）
Fig. 7　第22区土壙状遺構（ＳＫ－04・05・06）
Fig. 8　第22区土壙状遺構（ＳＫ－07・08）
Fig. 9　第22区井戸跡・集石遺構・灰原遺構
Fig. 10　第22区攪乱層出土遺物
Fig. 11　第22区土器溜り出土一括遺物(1)
Fig. 12　第22区土器溜り出土一括遺物(2)
Fig. 13　第22区灰原出土遺物
Fig. 14　第22区集石遺構出土遺物
Fig. 15　第22区石鏃・剥片
Fig. 16　第22区有溝礫・石斧

表　目　次

Tab. 1　第22区出土遺物観察表

図 版 目 次

ＰＬ. 1　第22区調査前全景　第22区井戸跡
ＰＬ. 2　第22区井戸跡　第22区井戸跡・集石遺構
ＰＬ. 3　第22区溜池状遺構　第22区溜池状遺構
ＰＬ. 4　第22区土器溜り遺構（ＳＫ－02）　第22区土器溜り遺構（ＳＫ－02）土器出土状況
ＰＬ. 5　第22区土壙状遺構（ＳＫ－03・04・02）　第22区土壙状遺構（ＳＫ－03）
ＰＬ. 6　第22区土壙状遺構（ＳＫ－04）　第22区土壙状遺構（ＳＫ－05・06）
ＰＬ. 7　第22区土壙状遺構（ＳＫ－07）　第22区土壙状遺構（ＳＫ－08）
ＰＬ. 8　第22区集石遺構　第22区集石遺構
ＰＬ. 9　第22区土器出土状況　第22区土器出土状況
ＰＬ. 10　第22区太型蛤刃石斧出土状況　第22区太型蛤刃石斧刃部出土状況
ＰＬ. 11　第22区出土遺物(1)
ＰＬ. 12　第22区出土遺物(2)
ＰＬ. 13　第22区出土遺物(3)
ＰＬ. 14　第22区出土遺物(4)
ＰＬ. 15　第22区出土遺物(5)
ＰＬ. 16　第22区出土遺物(6)

Ⅰ　位置と環境

（Fig. 1，ＰＬ．１）

本遺跡は北側，南側，東側を急峻な大毛山系に囲まれ，西側がウチノ海に面して開けた最大幅35m余りの凹地であり，なだらかに西に向かって傾斜したわずかな面積の平坦地である。この地は，大毛島の東海岸（16〜20区，37〜39区）とは異なり置き砂はみられず，むしろ海岸線は円礫がごろごろした状態であり，季節風による浸食作用を受けているようにみられる。現在の海岸線は相当古くから現状のままであったものと思われ，山の傾斜面からすぐ海といった状態であり，平坦地はごくわずかであったと想定される。

標高3.5〜1.5mの高さに位置しているが，等高線が均一でなく非常に入り乱れている。

地形図を見ると分かるように南西部分は戦後における真珠養殖場あるいはワカメの作業場としての建物のコンクリート基礎工事によって現状が大きく変わっているためこの部分の調査は断念した。北半分の等高線が台形状に東に向かって大きく抉りこまれている所は付近の人達の話から第二次世界大戦中本土防衛に際しての軍事用小型船舶の隠し場所として開墾されていたためである。更に中央部において２カ所ほど凹みがみられ，この内１カ所が調査の結果井戸跡と判明したが，調査区全域において自然地形当初の状態のところはわずかに中央部の標高2.5〜３ｍのコンタラインの部分のみと言っても過言ではなく，日当たりの悪いわずかな平坦地を幾度となく土地利用が激しく行われていることを伺わせており，大毛島内における21区遺跡とともに西海岸線でのわずかに存在する平坦地の利用の激しさを伺わせる。

調査前の現状は，大毛島のゴミ捨て場となっていたようであり，残土，コンクリート塊の廃材，灰ワカメ等の投棄，スイカ等の野菜屑など相当量のいろいろなものが投げ込まれており，調査に入る以前の樹木の伐採，清掃の際に悪臭とハエに悩まされながら相当な労力を要した。

Fig. 1　第22区位置図

Ⅱ　調査の経過

昭和52年度に分布調査を行い，遺物の散布はなかったが，海岸線に沿った所に平坦地があり，事前の確認調査が必要ということから，昭和56年８月31日～昭和57年３月15日まで調査を行い，トレンチ調査によって遺物・遺構がみられたため，本四公団と協議を行い全面調査を実施した（註１・２）。

調査日誌抄

８月31日　下草刈り及び樹木伐採開始

９月７日　地形測量開始

10日　グリッド設定及び第１層掘り下げ開始

22日　第１トレンチ第５層掘り下げ，土師器片出土。第３トレンチ第４層掘り下げ

24日　第１トレンチ第５層中央部で井戸跡らしき掘り込み確認

26日　第１トレンチ第５層精査，太型蛤刃石斧出土

10月５日　第１トレンチ第５層掘り下げ石鏃出土，第２トレンチＳＫ－05確認

７日　地形測量図トレース及び遺構略図の作成，集石遺構の確認

12日　トレンチ内遺構清掃及び写真撮影

13日　第１トレンチ土層精査及び写真撮影

15日　第１トレンチ土層図作成

11月４日　全面調査切りかえのためトレンチ調査の排土の除去開始

10日　盛土排除及び拡張区の樹木伐採

13日　盛土排除完了

19日　撹乱層内より太型蛤刃石斧刃部出土

12月５日　土器溜り遺構確認・検出

10日　土器溜り遺構実測開始。土器片取り上げ

16日　集石遺構排土及び灰原遺構を確認。灰原遺構の検出開始

18日　土器溜り遺構・集石遺構・灰原遺構実測

28日　土器溜り遺構，集石遺構平面図作成，現場御用納め

１月６日　土器溜り遺構，集石遺構平面図作成

12日　土器溜り遺構平面図及びエレベーション図作成

20日　集石遺構平面図作成完了及びエレベーション作成

30日　現地説明会開催，約70名ほど参加者があった

2月2日　集石遺構下部実測

5日　ＳＫ－07検出，石鏃が出土

13日　集石遺構間排土及び実測、集石遺構内遺物取り上げ

22日　集石遺構間排土及び集石基礎部分実測開始

23日　集石遺構基底部清掃及び写真撮影・実測

3月1日　土壙状遺構確認及び検出。灰原遺構内より土器片がやや固まった状態で出土

2日　灰原遺構内土器出土状況写真撮影及び土器取り上げ開始

3日　土壙状遺構検出及び実測と写真撮影。灰原下層の土器取り上げ

6日　灰原遺構土層セクション図作成

11日　調査区後かたづけ。室内で遺物整理及び遺構図トレース

15日　資材運搬，発掘調査完了

Ⅲ　基本層序

（Fig. 2・3）

1．第1トレンチ

第1トレンチは調査区中央部の一番平坦で残りのよい場所に，ほぼ南北に入れたトレンチで，東壁を実測したものである。

以下第1層から第17層について述べる。

第1層は黒褐色土層でいわゆる腐葉土層であり，現代陶磁器及び染付磁器等が含まれている。

第2層はにぶい黄褐色礫まじり層であり，いわゆる大毛山系における風化作用における斜面から流入した堆積土層である。

第3層は明褐色砂礫まじり粘質土層であり，第2層と同様の堆積土層であり，第2層と多少の時間差がみられるものである。

第4層は暗褐色砂まじり粘質土層である。第5層に部分的に混入した層と考えられる。

第5層はオリーブ褐色大礫まじり粘質砂土層であり，遺構上面を覆っている遺物包含の堆積土層であり，須恵器・土師器片等を含んでいる。

第６層より第10層まではにぶい黄褐色・明黄褐色・黄褐色の礫まじり粘質及び砂質土層であり，戦時中における小型船舶用船渠坑跡の二次堆積土層で無遺物層である。

第11層は明黄褐色砂質土層であり，第12層とともにこの大毛山系の岩盤上層であると考えられ，人為的な影響を受けていない層である。

第12層は明黄褐色粘質小礫まじり層であり、11層が風化作用によって形成された層と考えられる。

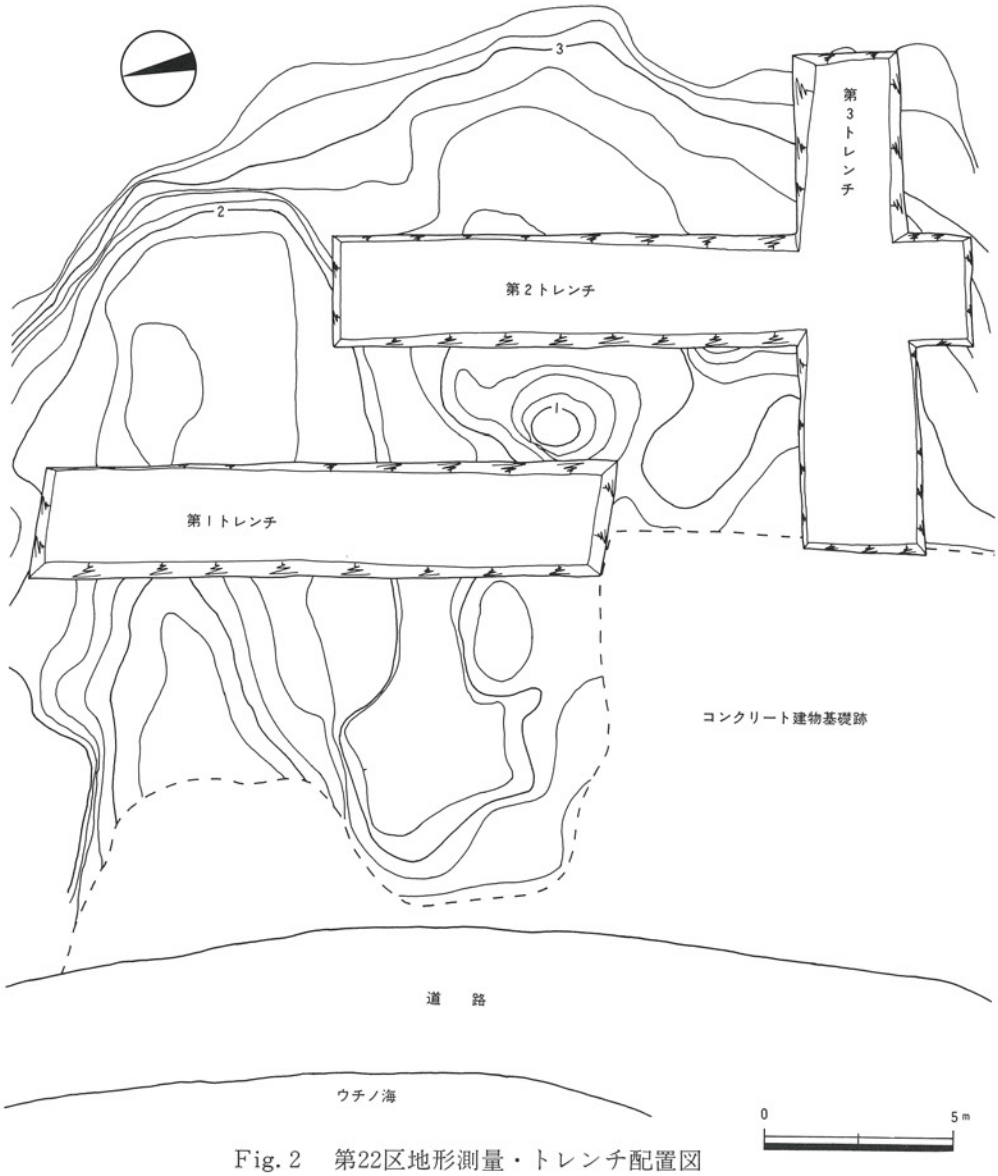


Fig. 2　第22区地形測量・トレンチ配置図

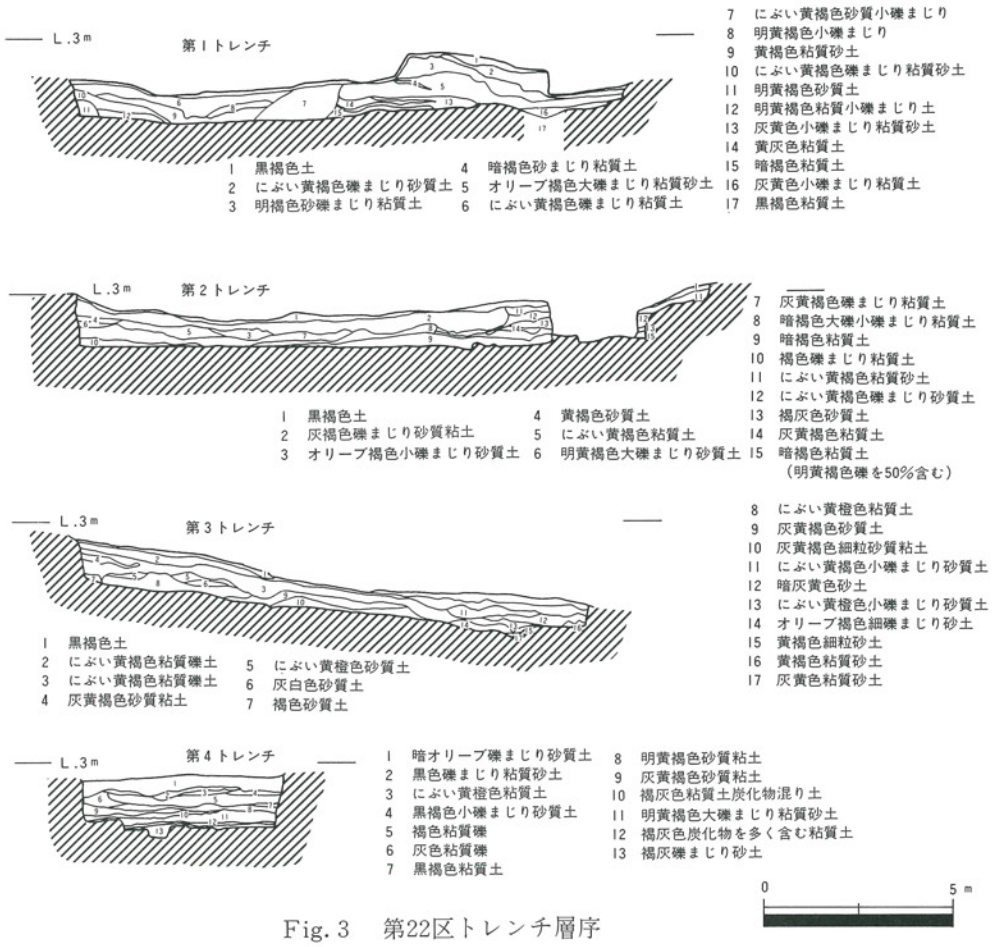


Fig. 3　第22区トレンチ層序

第13層から第16層が遺構上面層あるいは遺構内覆土と考えられる。

第13層は灰黄色小礫まじり粘質砂土層であり，太型蛤刃石斧，石鏃等がこの層より出土している。

第14層は黄灰色粘質土層（炭化物を少量含む）であり，第13層内に挟みこまれた形で堆積しており，本来は第13層と同じ堆積土層と考えられるが，ある一定期間の堆積時間の差があったと思われる。

第15層は暗褐色粘質土層であり，この層が集石遺構・土器溜り遺構・土壙状遺構の覆土であり，弥生時代から古墳時代にかけての遺物を多く含んでいる。

第16層は灰黄色小礫まじり粘質土層であり井戸状遺構の上部堆積土層であり，井戸組の和泉砂岩の石が多量に混ざっている。

第17層は黒褐色粘質土層であり，井戸状遺構内の上部堆積土層であり，染付磁器とともに井戸の石組の石材が数多く混入して出土している。この第17層に入っている遺物からみて，第２～第５層にかけては江戸時代後期（18世紀～19世紀初頭）以降の堆積土層であると考えられる。

なお17層以下の井戸状遺構は湧水が激しく危険を伴うため調査を断念した。

以上第１トレンチについて述べたが，本来の自然堆積を示している層はみられず，特に戦時中の撹乱が大きくみられる。

２．第２トレンチ

第１トレンチより東へ３m離れた位置に第１トレンチとほぼ並行に設定したトレンチであり，東壁を実測したものである。

以下第１層から14層について述べる。

第１層は黒褐色土層であり第１トレンチと同様の腐葉土層である。

第２層は灰褐色礫まじり砂質粘土層であり，開墾等によって人為的な痕跡を残している層と考えられる。

第３～８層にかけては北東の山系からの流入土層と考えられいずれも無遺物層である。

第３層はオリーブ褐色礫まじり砂質土層，第４層は黄褐色砂質土層，第５層はにぶい黄褐色粘質土層，第６層は明黄褐色大礫まじり砂質土層，第７層は灰黄褐色礫まじり粘質土層，第８層は暗褐色大礫，小礫まじり粘質土層である。

第９～15層も人為的な堆積ではなく自然堆積の状態を示しているようであり，無遺物層である。

第９層は暗褐色粘質土層，第10層は褐色礫まじり粘質土層でありいわゆる岩盤直上層である。

第11層はにぶい黄褐色粘質砂土層（明黄褐色礫層を含む）であり，南側山系からの流入土と考えられる。

第12層はにぶい黄褐色礫まじり砂質土層であり，第11層と同様の堆積と考えられる。

第13層は褐灰色砂質土層と明黄褐色礫層の混合層である。

第14層は灰黄褐色粘質土層であり，第15層は暗褐色粘質土層と明黄褐色礫層の混合層であり，非常に固く第９・10層と同じく岩盤直上層あるいは岩盤上層面と思われる。

以上第２トレンチについて述べたが，第２トレンチ中央部は開墾によって二次堆積し，

左右は両側の山系からの流入土の堆積層を示しているようである。

3．第3トレンチ

調査区南端で第2トレンチと直交する形で入れたものであり，自然地形がある程度よく残っており，東から西，すなわち山から海へ向かって傾斜している。

以下1～17層について述べる。

第1層は他のトレンチと同じく黒褐色土層である。

第2層はにぶい黄褐色粘質礫土層と明黄褐色礫層の混合層であり，第2トレンチ第11層と同層であり，東南の斜面から流入された土層と思われる。

第3層はにぶい黄褐色粘質礫土層と灰黄褐色土層の混合層であり，第2層と同様に思われる。

第4層は灰黄褐色砂質粘土層に明黄褐色土層を混合した層であり，第3層に部分的に混入した層と考えられる。

第5層はにぶい黄橙色砂質土層ににぶい黄褐色土層を少量含んだものであり，第2層の土壌が含まれていることからみて，南東側の斜面から流入し岩盤直上層がまじりあったものと思われる。

第6層は灰白色砂質土層であり第8層上面に部分的に堆積した層と考えられる。

第7層から第10層にかけては岩盤直上あるいは岩盤の一部を形成している土層を示すものと考えられる。

第7層は褐色砂質土層であり，第2トレンチの第9・10層とほぼ同様の土層と考えられ，第8層はにぶい黄橙色粘質砂土層であり，第9層は灰黄褐色砂質土層であり，第2トレンチ第2層に対応する層で，第10層は灰黄褐色細粒砂質粘土層で褐色土層ブロックを含んでおり，第2トレンチ第14層に対応する層と考えられる。

第11層は暗灰黄色砂土層であり，溜池状遺構埋没後の上面に堆積した流入土と考えられる。

第13～15層は溜池状遺構内に流入した埋土と思われる。

第13層はにぶい黄橙色小礫まじり砂質土層，第14層はオリーブ褐色細礫まじり層，第15層は黄褐色細粒砂土層で，中央部に向かって凹んで堆積している。

第16層は黄褐色粘質砂土層である。

第17層は灰黄色粘質砂土層であり，溜池状遺構の基底部を形成している層と思われる。

以上第３トレンチについて述べてみたが，トレンチ西端部は溜池状遺構があり，土層が細かく分かれるが，それ以外は山系傾斜面の流入土の堆積土と考えてさしつかえないと思われる。

４．調査区西端地区

調査区と道路境の灰原遺構に伴うものである。一部下層は海の干満によって調査時間に制限が必要であった。

以下第１～13層について述べる。

第１層は暗オリーブ礫まじり砂質土層で，いわゆる道路敷等に使用した土壌が堆積したものである。

第２層は黒色礫まじり粘質砂土層（腐葉土）で，本来の表土層である。

第３層はにぶい黄橙色粘質土層で，部分的な堆積を示しており他からの流れ込んだ層と考えられる。

第４層は黒褐色小礫まじり砂質土層で，炭化物と灰をかなり含み，土師器・須恵器の細片がみられる。

第５層は褐色粘質礫層で，堆積の厚い層である。

第６層は灰色粘質礫層で，第５層によって切られた状態で堆積している。

第７層は黒褐色粘質土層で，微量ではあるが灰を含み須恵器片が出土した。

第８層は明黄褐色砂質粘土層で，第１トレンチ第３層に対応できる層と考えられる。

第９層は灰黄褐色砂質粘土層で，弥生時代から古墳時代の土器片を含んでいる。

第10層は褐灰色粘質炭化物混じり層の灰原土層で，第９層とほぼよく似た遺物を含んでいる。

第11層は明黄褐色大礫まじり粘質砂土質である。北の方が厚いことから北側からの流入土と考えられ，第１トレンチ第12層の土壌とほぼ同様と思われる。

第12層は褐灰色の炭化物を多く含む粘質土層で，いわゆる灰原土層で弥生時代から古墳時代の遺物を多く含んでいた。

第13層は褐灰礫まじり砂土層に明黄褐色土層を含んだもので，標高0.5mより下層となり水分を多量に含み，干満によって水の量が異なることからみて海水の影響を受ける層であり，これより下層は海水の湧水により調査が困難なため，調査を断念した。

以上が調査区西端地区の土層であるが，灰原を伴う遺物包含層が間層を挟んで３層確認

され，しかも年代的に幅をもっていることからある期間に火を用いた人為的作業が行われていることを表している。

Ⅳ 遺　　構

（Fig. 4）

遺構としては大きく分けると近世のものと，弥生時代末期～古墳時代初頭にかけての二通りがみられる。

井戸跡・溜池状遺構が江戸時代，土器溜り遺構・土壙状遺構・集石遺構・灰原遺構は土壙状遺構の一つを除いて弥生時代末期～古墳時代初頭のものが検出された。

以下各遺構ごとに述べる。

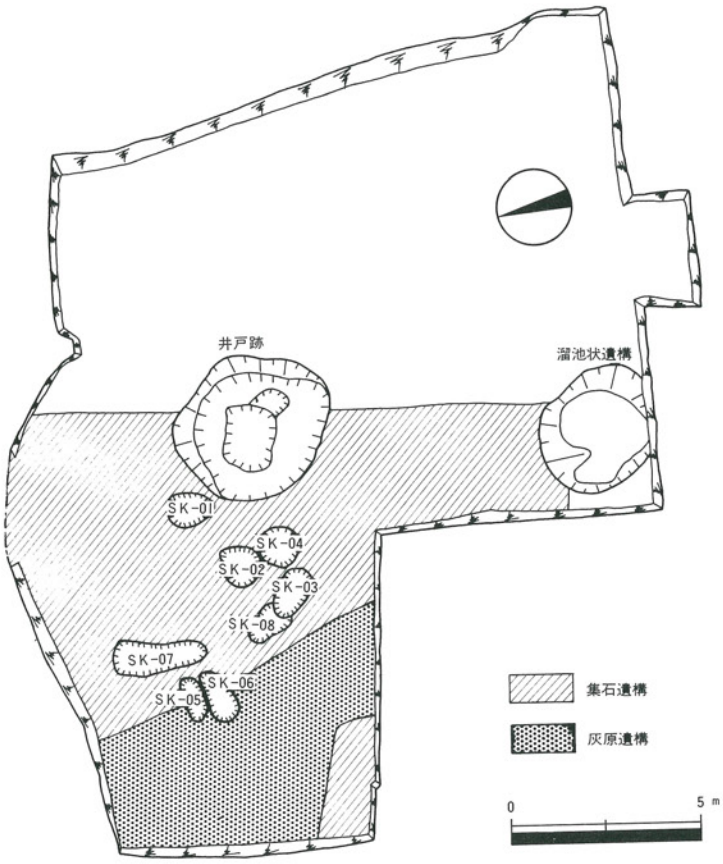


Fig. 4　第22区遺構配置図

1．井戸跡（Fig. 9，ＰＬ．１・２）

調査区のほぼ中央に位置し，地形測量図で見てもわかるように標高１m前後の大きく凹んだ状態であり，調査当初は撹乱箇所と扱っていたが，第１トレンチの調査の際に第13層を切りこんだ形で確認された。東西直径4.24m，南北直径4.5mの不整円形を呈し，なだらかに中央に向かって傾斜し，中央部でほぼ直角に近く２段に落ちこんでいる。２段目の掘り込みは，東西長1.5m，南北長1.1mの隅丸長方形状を呈している。深さについては湧水と青灰色グライ粘質土層で非常にねばく，又人命の危険性を考慮して途中で作業を終了したため不明である。

なお遺構内の土層については，何回かの台風接近に伴う豪雨によって土層セクション用壁面が，作図・写真撮影以前に崩壊して土層図の作成が不可能であった。

覆土中に人頭大のある大きさにまとまった和泉砂岩の円礫・角礫が多量に含まれていることからみて，素掘りの井戸ではなく，壁面は石垣を組んでいたものと想定される。

１段目の落ちこみは中に向かってなだらかに傾斜し，２段目の落ちこみの回りを東側1.5m，西側１mでほぼ均等の距離でテラス状を呈していることからみて，井戸の外側に洗い場等の作業場としての機能をもっていた場所と考えられる。この作業場も現在使用されている井戸などから考えると石敷等の構築がなされていたものと思われる。

構築時期については，表土下1.5m付近で近世磁器片（伊万里焼）が出土したことから江戸時代後半より以前に作られたと想定できる。

海岸線に非常に近い所にみられることから大毛山系の岩盤直上にしみこんだ地下水を汲み上げたものと想定されるが，山の傾斜が相当急なことからそう多くの水は望めなかったものと思われる。

2．溜め池状遺構（Fig. 6，ＰＬ．３）

調査区南端のほぼ中央に位置し，約１m西側からは建物跡コンクリートによって調査が不可能な場所となっている第３トレンチの際に検出され，はじめは自然傾斜の落ちこみ，あるいは撹乱層でないかと考えていたが，精査の結果，第３層を切りこんだ形でほぼ確定でき，他の土壙状遺構と異なり非常に粒子の細かい砂土層が入っていることから溜め池状遺構と判断した。

南側は調査区の排土の関係から調査は不可能であったが，規模は東西直径3.1m，南北推定直径3.2m，深さ0.6mの不整円形プランで，東側及び北側が２段になって掘りこまれ

ており，断面はやや傾斜し，北側及び東側はややなだらかな傾斜となっており，底は皿状を呈している。土層は第３層のにぶい黄褐色粘質礫土層及び第10層の灰黄褐色細粒砂質粘土層を切りこんだ形で確認され，土層は３層であり第２層はにぶい黄橙色小礫まじり砂質土が堆積し，その下に東側から流入したと思われるオリーブ褐色細礫層が堆積し，西側より黄褐色細砂土が堆積している。溜め池状遺構廃棄後の最初の土層としては，灰黄色粘質砂土層が堆積土層である。この堆積土層からみると溜め池状遺構は，やや西へ向かって傾斜した粘質土層を円形に切りこみ東側山系の天水をためて使用したものと思われる。

北側が２段にわたって傾斜していることから溜め池の水をくみ出す場所として階段状に付けたものと推定される。島内に水が湧水するところは大毛東斜面を除いては皆無に近い状態であることから，生活に必要な貴重な水を得る為に非常に工夫をしていることがうかがえる。

なお遺物が全く出ていない為時期は不明であるが，それ以前の集石遺構が切られていること，土層の層位からみて江戸時代と思われる。

３．土器溜り遺構（Fig. 5，ＰＬ．４）

調査区南端のほぼ中央において，集石がややとぎれた状態で，第15層の暗褐色粘質土層内より少量の土器片が確認され，全面発掘によって長軸110㎝，短軸90㎝の楕円形に土器片が広がりをもった遺構であることが判明した。

土器を取り除いた後，約1.4mの不整円形プランの土壙状遺構（ＳＫ－02）が確認され土壙状遺構を円礫と土器片でもって被覆した形で出土したものである。

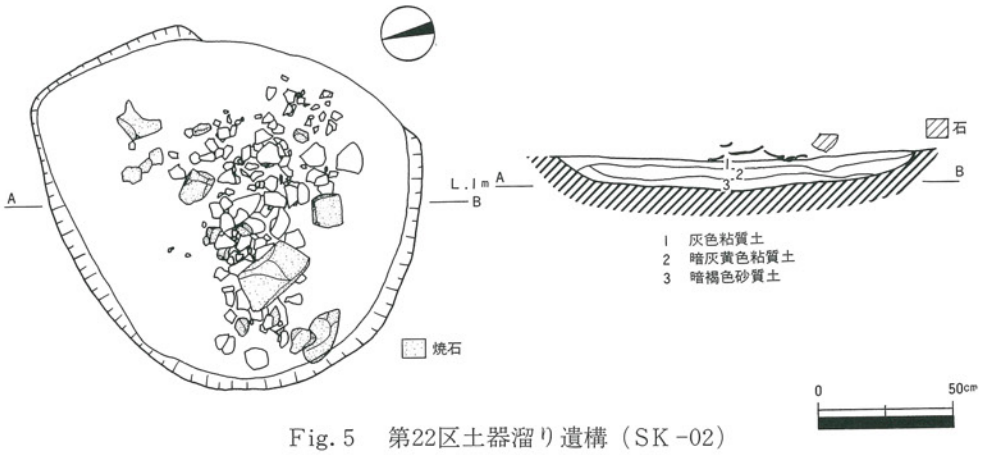


Fig. 5　第22区土器溜り遺構（SK-02）

土器片は大きさ１～10㎝の約170片の土器片が，土器の表裏面は関係なくほぼ水平に約10㎝程の厚さで堆積し，特に西半分すなわち海側の出土状態の密度がこく，東から西へ向かってやや傾斜して厚くなっており，海へ向かって厚く堆積したようである。土器片の直上で約20個程の円礫が，中央部よりやや北西にずれ，しかも主軸とは直交する形で意図的に置かれた状態で出土している。

この土器片の出土状態からみると，意図的に破砕して置いたかどうかは別として，埋没以前にすでに壊れた状態で出土しているのである。土器片の間には小礫と炭化物が少量混っていた。

時期については，遺物の項で述べるが弥生時代後期後半の畿内第Ｖ様式新段階と考えられる。

なお土壙内の覆土は，第１層が灰色粘質土層であり砂礫と炭化物を含んだ層が堆積し，第２層は暗灰黄色粘質土層（暗褐色砂質土層を小量含む）であり，やや礫が混っている。

第３層は暗褐色砂質土層で焼土及び炭化物を含んだ層であり，２層・３層は皿状堆積となっている。

４．土壙状遺構（Fig. ６～８，ＰＬ．５～７）

調査区域内で８カ所の遺構（うちＳＫ－02は土器だまり遺構の項で述べた）が検出された。いずれも集石遺構の範囲内で確認され，集石遺構と同じ高さ，あるいは集石遺構の基礎部分，集石遺構より下の層で検出された。検出された順にＳＫ－01～08と名付けた。以下各土壙ごとに述べる。

(1)　ＳＫ－01　（Fig. ６）

井戸状遺構の北西側に接するように確認され，長軸1.4m，短軸１m，長軸がほぼ北を向いた卵形楕円形を呈しており，断面はＵ字形で深さ10㎝で平底である。東側は削平されている為，土壙のプランは十分摑みきれなかった為推定である。覆土は灰色粘質土の一層であり炭化物を含んでいる。時期については遺物・層序的に不安定であり断定はできないが江戸時代以降と思われる。

(2)　ＳＫ－03　（Fig. ６，ＰＬ．５）

ＳＫ－08と一部重複し，ＳＫ－08を切った形で確認され，東側でＳＫ－04と僅か10㎝程

離れた形で検出された。長軸1.35m，短軸0.83m，深さ8㎝の楕円形を呈している。断面は浅いU字形を呈し，土層は2層に分かれ第1層は暗灰黄色粘質小礫まじり層（暗褐色砂質土層を含む）であり，土壙の中央部の堆積層である。第2層は土壙壁面に堆積したものであり，灰色粘質小礫まじり土層（暗褐色砂質土層を含む）である。第1層より弥生後期後半の土器が出土しており，この時期と思われる。

(3) ＳＫ－04 （Fig. 7，ＰＬ．５・６）

ＳＫ－03のすぐ東側に接しプランが不明瞭であった為全容は分からないが，直径1.2mの円形プランであると推定される。深さは集石遺構との重なりから十分攪めなかったが，浅い皿形を呈しており，２～６㎝程と推定される。

(4) ＳＫ－05 （Fig. 7，ＰＬ．６）

ＳＫ－06と重複しており，新旧関係は不明。集石遺構の下層で検出されたものであり，側壁の一部が不明瞭であるので確定できないが，長軸1.65m，短軸最大幅0.57m，最小幅0.31m，平面不定長方形で主軸が南西方向，断面台形状を呈し，深さ9㎝である。土壙上面及び覆土より約15片の土器片が出土している。土層は2層に分かれ，第1層は褐灰色砂質土層（明褐色砂質土層が若干混じる）で，第2層は明褐色砂質土層（褐色砂質土層が若干混じる）であり，いずれも少量の炭化物を含んでおり，時期は弥生時代後期後半。

(5) ＳＫ－06 （Fig. 7，ＰＬ．６）

ＳＫ－05のすぐ南に重複し，ＳＫ－05と主軸を並行して長軸２m，短軸最大幅１m，最小幅0.55m，深さ10㎝で変形楕円形を呈し，断面浅い台形を呈している。ＳＫ－05と同じく20数片の弥生土器片が覆土中より検出されている。土壙内の土層は安定していないが一応２層に分かれるようであり，ＳＫ－05と同様の土が入っている。

(6) ＳＫ－07 （Fig. 8，ＰＬ．７）

ＳＫ－05，06より約40㎝程東側で検出されたもので，東側のプランを十分確認できていないが，長軸2.38m，短軸1.3m，深さ１０㎝で，主軸を南南西に向けた平面変形楕円形，断面浅い皿形を呈している。土壙内より５点の弥生土器片と凹基式石鏃が１点出土している。上層は１層で褐灰色砂質小礫，焼石まじり土層で明褐色砂質土層の混合層である。土

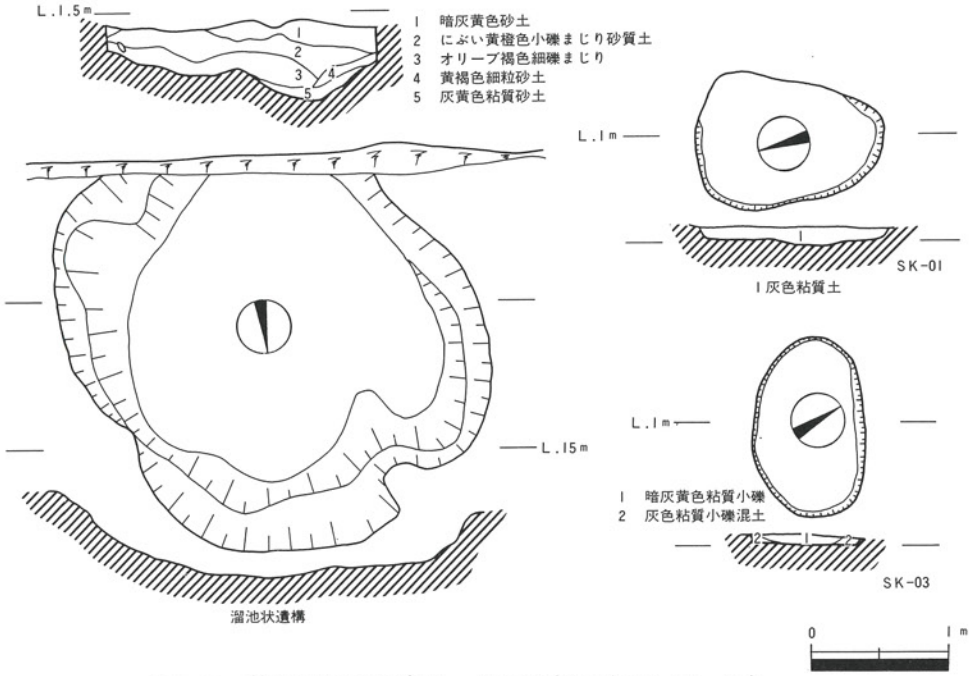


Fig. 6　第22区溜池状遺構，土壙状遺構（SK-01，03）

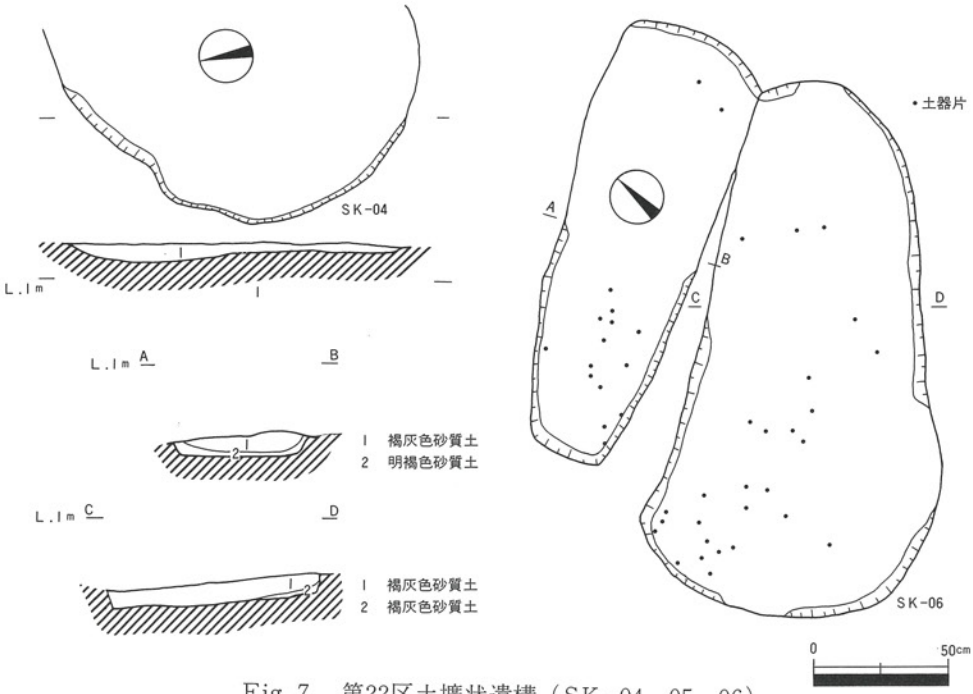


Fig. 7　第22区土壙状遺構（SK-04，05，06）

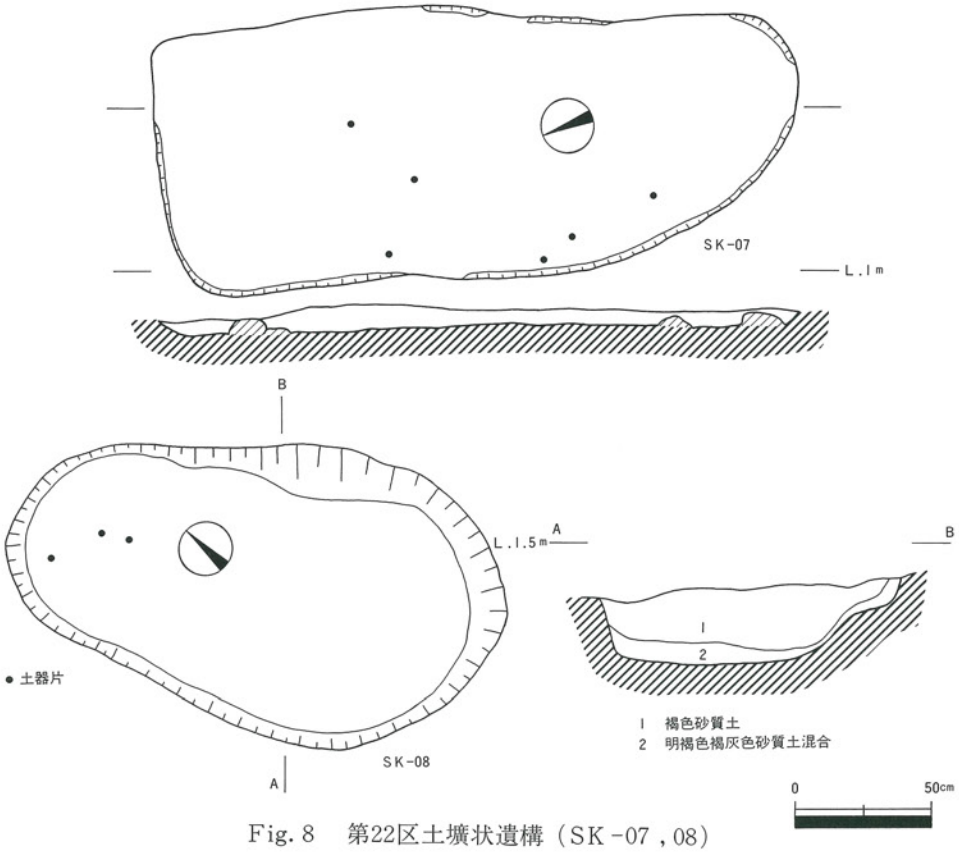


Fig. 8　第22区土壙状遺構（SK-07，08）

壙内のやや側壁よりの基底部に焼石が若干みられ，集石遺構の凹みとも考えられる。

(7)　SK－08　（Fig. 8，PL. 7）

SK－03の下で検出されたもので，長軸1.9m，短軸1.1m，深さ30cmで平面楕円形・断面台形を呈している。覆土上層部で3片の弥生土器片が出土している。土層は第1層が褐色砂質土層に明褐色砂質礫まじり土層を多少混合した層である。第2層は明褐色砂質土層と褐灰色砂質土層の混合層であり，遺物はみられなかった。

5．集石遺構　（Fig. 9，PL. 2・8）

調査区中央の井戸状遺構付近から海岸線よりの西側において地形の傾斜と同じようになだらかに傾斜した状態で検出された。最初は上層の山系からの流れこみの自然石と区別がつかず自然堆積によるものが海岸線に近く，しかも標高が1m前後であることから，波に

よって形成された旧海岸線でないかと考えていたが，集石の中には焼石が混ざり，焼土がある程度固まって出た所や，集石の間に焼土・炭化物が混入し，土器片を含んでいることから人工的な手が加えられたものであり集石遺構と判断した。

集石はこの海岸線や，山系が風化して堆積した近くの石を持ってきたもので，直径２～40㎝ぐらいの和泉砂岩の亜角礫・亜礫を厚さ10～30㎝程西側へ向かって緩やかに傾斜し堆積されたものである。集石下層の自然堆積層にも同様の亜角礫・亜礫を含んだ層であるので見分けがつきにくい状態であり一応小礫まじりの層が切れ，焼石がなくなり，炭化物が切れる段階で自然堆積層と集石遺構との区分けを行い断定したものである。

集石の厚さは西側へ行く程堆積が薄くなり，特にコンクリートの基礎で残したラインより西側は集石状況が雑然とした堆積であり，しかも焼石も少なくなっている。それと代わりに灰原の堆積が次第に厚くなり顕著となっている。したがって，このラインより西側に集石の中心がみられ，集石状況はいくつかのブロックに堆積していると考えられ，一時期に一度に形成されたものではなく，幾度かの集石ブロックが複合して形成したものと思われ，しかも集石の状態からみて意図的に積まれたという感じはなく，何らかの作業を行った際に用いられ，使用後に投げ捨てられたといった感じである。

集石が水平でなく，斜めに傾斜した自然地形を使っていること，後で述べる灰原，焼石がみられることから，海に面しての傾斜ということからみて，海に関係する何らかの作業が行われていたことを物語っている。

出土遺物からみて弥生時代後期後半の時期に比定される。

６．灰原遺構　（Fig. 9）

集石遺構の西半分と重複するように検出され，海岸線との間にある調査境の道路敷まで確認されており，本来は傾斜しながら道路の下まで入っているようであり西側の範囲は不明である。なお南側はコンクリート建物の基礎によって壊され，北側も戦時中の撹乱によって不明である。

この灰原遺構は集石遺構の切れるところから次第に厚く何層かにわたって堆積している道路敷境の土層図からみると，第７層の黒褐色粘質土層，第10層の褐灰色粘質土層，第12層の褐灰色炭化まじり粘質土層の３層において３回にわたってみられ，この土層内には弥生時代後期後半の遺物がブロック状に堆積している。

出土遺物や灰原の堆積状況からみると，集石遺構・土壙状遺構と相関関係を持ち，これ

らの遺構を１つのセットとしてとらえて遺構の性格を考えていく必要があると思われる。

遺跡の性格については，まとめの項で一括して述べる。

Ⅴ 遺　　物

（Fig. 10～16，ＰＬ．11～16）

出土遺物は１．撹乱，２．土器溜り遺構，３．灰原遺構，４．集石遺構，５．集石下層に分類して述べる。又遺構内の石器等はその他の遺物と一緒に６．として記述した。

１．撹乱　（Fig. 10）

１～３は染付磁器，４～５は陶質土錘，６は陶器，７は須恵器，８は土師質土器，９，10は弥生土器である。いずれも腐葉土層からの出土である。

染付磁器

１はやや薄手で口縁部が外反した端反り形で，高台は外反した三角形。口径11.1cm，底径4.4cm，器高5.9cmで胎土は乳白色を呈し青味がかった灰白色釉，青藍色で内面見込みに飛翔する鶴を描き，外面大根か人参を丁寧に描いており，伊万里焼で19世紀前半。２はくらわんか手で，厚手の口縁部が外反した端反り，高台はやや狭くＵ字形。口径13.1cm，底径5.4cm，器高6.0cmで，胎土は灰白色，青味がかった灰白色釉を施し，淡い藍色で外面松葉枝文，口縁内面波文，内面見込み五弁花スタンプ文，内面見込み蛇ノ目釉ハギを行っている。伊万里焼で18世紀代（註３）。３は碗の底部で，やや厚く高台は外反したＵ字形，胎土は灰白色，濃い藍色で底部外面渦福，内面見込み五弁花スタンプ文を施し，伊万里焼で18世紀後半～19世紀初頭。

土錘

４は陶質の物で丸棒成形で，全長4.1cm，最大径1.3cm，重さ８ｇであり，体部中央を膨らませており，端部は使用痕がある。焼成は良好で，褐色釉を施しており，指おさえによる凹みがみられる。５はやや大きめの陶質の丸棒成形で，全長5.8cm，最大径３cm，現重量11.1ｇであり，体部中央をやはりやや膨らませており，褐色釉が磨滅しており，内面にのみ残っている。指おさえによる凹みがみられる。

陶器

６は徳利の胴部の破片で，内外面ともロクロ痕を残しており，胎土は赤茶褐色で外面に

Fig. 9　第22区井戸跡・集石遺構・灰原遺構

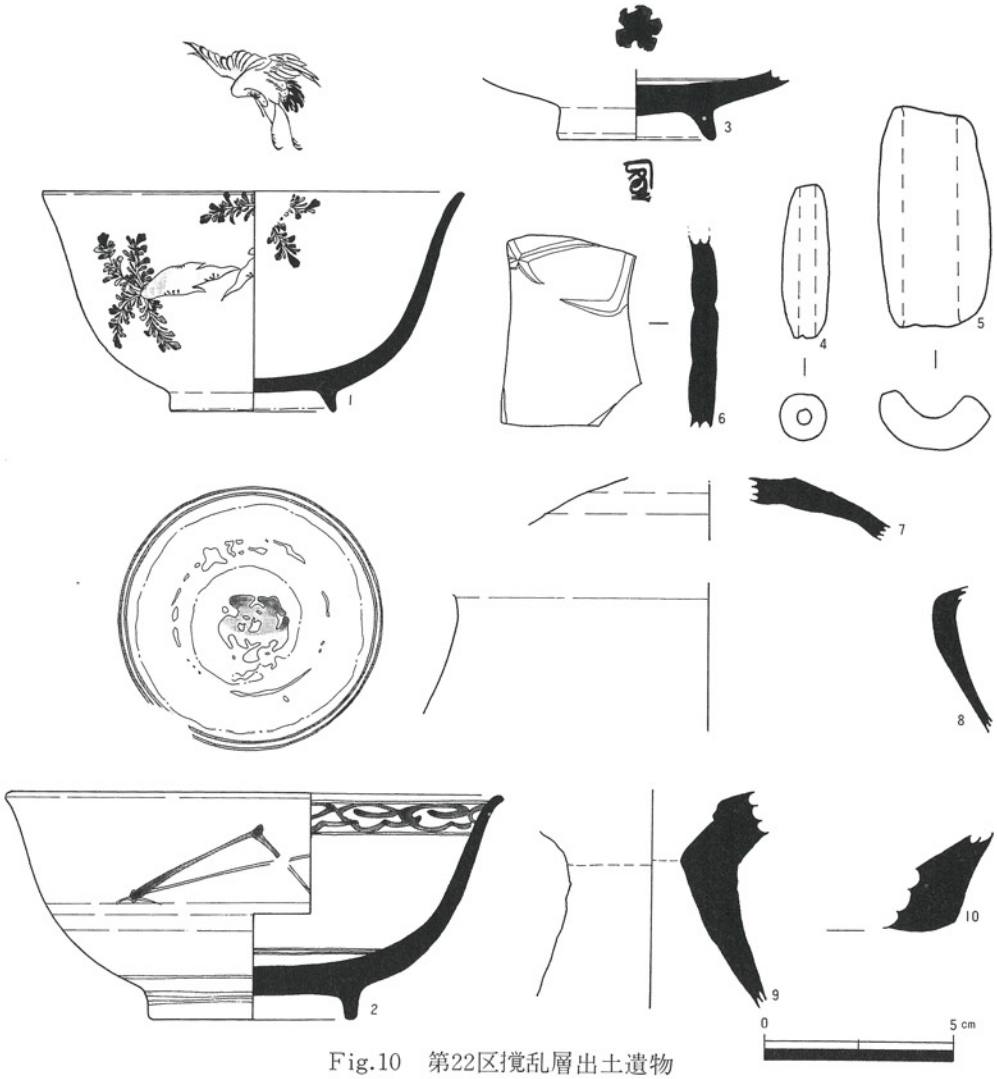


Fig.10　第22区撹乱層出土遺物

褐色釉を施し，外面にV字形の鋭いヘラによる文字を刻んでいる。大谷焼で時期は18世紀後半～19世紀前半（註４）。

須恵器

７は杯蓋で，体部はゆるく内彎しながら外方に延びており，頂部につまみがつくかどうかは不明。胎土は白灰色でロクロミズビキ成形痕が内外面ともみられる。器面は磨滅を受けている。

土師質土器

８は甕の頸部の破片で，体部は頸部より斜下方に外反し，口縁部は「く」字形に外反し

ており，口縁部は丸くおさめているものと推定される。胎土は茶褐色を呈し，焼成は良好で，内外面とも器面の剝落が著しく，調整は不明であるが，ナデが行われているものと思われる。時期は不明。

弥生式土器

9は高杯の脚部の破片で，脚部は「ハ」字形に大きく外反し，受部は外上方に開いており，やや厚手で赤茶褐色を呈し，白砂を含んでいる。杯部の底に円板充塡を施しているものと考えられる。調整は剝落が激しく不明。10は壺か甕の底部で，やや厚く，体部は斜上方に立ち上がり，途中で彎曲して外反するものと思われる。胎土は淡い薄茶色を呈し，緑泥片岩，白砂を含んでおり，吉野川南岸流域の土器と思われる。いずれも弥生時代後期後半と思われる。

2．**土器溜り遺構**（ＳＫ－02）　（Fig. 5・11・12，ＰＬ．4・5）

170片の土器片が出土しているが，細片が多く図化できたものはわずか9点のみであった。いずれも弥生時代後期後半（畿内編年Ｖ様式）～古墳時代初頭（庄内併行期）で捉えられると思われる。

11は甕の上半の破片で，体部は斜下方にゆるく外反し，頸部はゆるく外反し，口縁端部はそのまま尖り気味に丸くおさめている。口径12.3㎝で，胎土は内面黒灰色，外面茶白色で，白砂，雲母を含み焼成は良好である。内面に粘土紐接合痕がみられ，口縁外面部に指おさえ痕がみられる。剝落のため調整は不明。12はやはり甕の口縁部の破片で，口縁部はゆるく外反し，端部を尖り気味におさめている。口径14.4㎝で，胎土は黄茶色であり，内面口唇部より1㎝下までヘラ削りを施しているが他の調整は不明。13は甕の口縁で，頸部は「く」字形に大きく外反し口縁部は端部をやや肥厚させ，口唇部は面取りされ，角をもっている。胎土は明赤茶色で，クサリ礫と白砂を含み，焼成は良好。剝落のため調整は不明。14は甕の口縁の破片であり，体部は外方に大きく開き，頸部は「く」字形に外反し，口縁部はやや肥厚しながら口唇部をやや内側に丸くおさめている。口径17.2㎝で，胎土は明赤茶色と灰白色であり，緑色片岩と白砂を含んでおり，吉野川南岸で焼成されたものと思われる。内面に粘土紐接合痕がみられる。15は甕の胴上半部の破片で，やや内彎しながら斜下方に下っている。胎土は内面黒灰色，外面淡い赤茶色を呈し，雲母，石英，クサリ礫を含んでおり，外面に一部黒斑がみられる。内面に胴部と頸部に粘土紐接合痕がみられ調整は剝落のため不明。18は壺か甕の底部の破片で，底径4.5㎝であり，底部は平底で体部は

内彎しながら外上方に開いており，胎土は赤茶褐色を呈し，白砂，クサリ礫を含んでおり，焼成は良好である。剝落が激しく調整は不明。16は甕の底部の破片で，底径5.5cmで平底であり，体部はやや内彎しながら外上方に開いている。胎土は灰白色を呈し，白砂緑色片岩を含んでおり焼成はややあまい。内面に縦方向のヘラ削りが施され，外面は全体にケズリないしヘラミガキの痕跡がみられる。17は甕の底部の破片で，底径4.2cmで平底であり，体部は直線状に斜上方に開き，胎土は内面淡赤褐色，外面淡褐色を呈し，白砂，クサリ礫

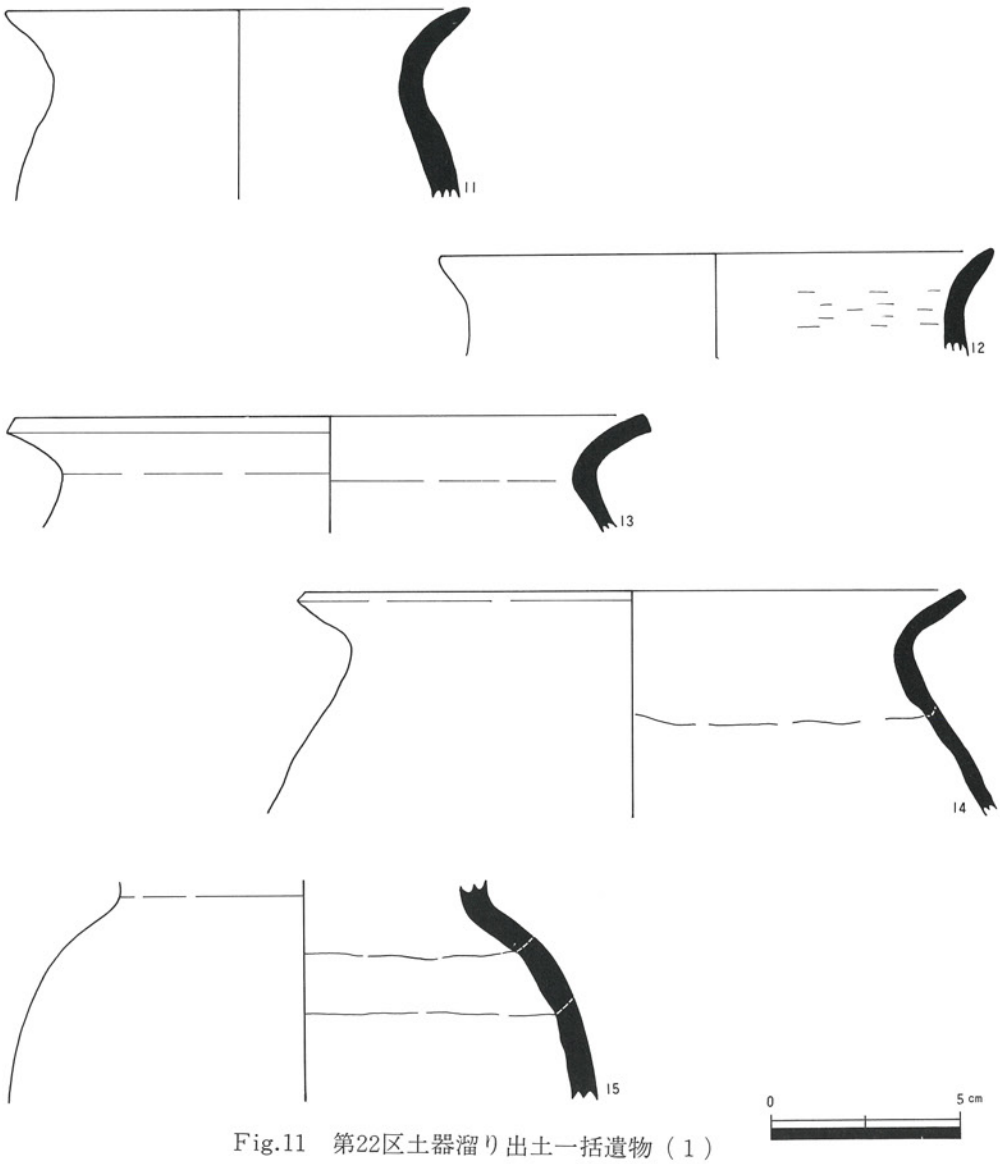


Fig.11　第22区土器溜り出土一括遺物（1）

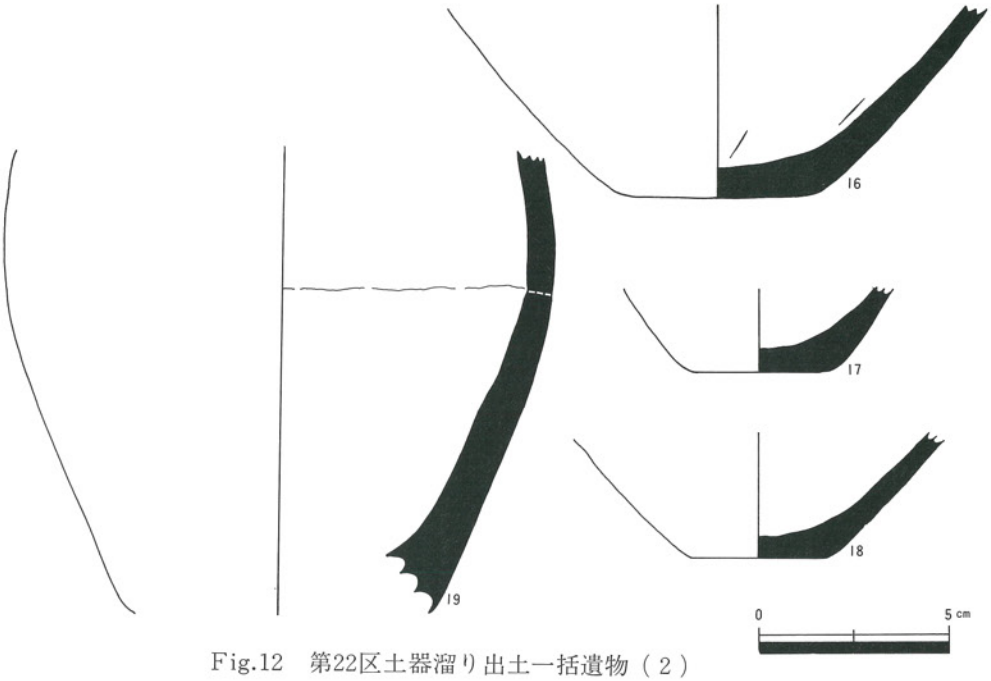


Fig.12　第22区土器溜り出土一括遺物（２）

を含み，焼成は良好。調整は剝落のため不明。19は甕の胴部上半より下の破片で，最大径が胴上半部にあり，底部からゆるやかに斜上方に開き，胴部中央は球形状を呈しており，胎土は黝黒色，外面淡茶褐色を呈し，雲母，白砂，チャート（？）等を含んでおり焼きはあまい。外面に黒斑がみられる。調整は剝落のため十分分からないが胴下半をヘラ削りした後スリケシを行っている。底部は粘土接合痕から欠損。

３．灰原遺構　（Fig. 9・13）

本遺跡の遺構の中で一番多くの遺物が出土しているがいずれも細片でかつ磨滅したものが多く図化できたものは18点であった。いずれも弥生時代後期後半（畿内第Ⅴ様式新段階）～古墳時代初頭（庄内併行期）にあたるものと思われる。

20は壺か甕の底部の破片であり，底部は平底，径6.2㎝で粘土紐貼りつけの高台状を呈しており，体部はやや内彎しながら外上方に開いている。胎土は黒褐色ないし茶褐色を呈し，白砂，雲母，黒粒を含み焼成は良好で，器面剝落のため調整は不明。21は甕の底部，底径3.5㎝の平底で斜上方に少し立ち上がり屈曲して斜上方に開いており，胎土は淡い赤茶褐色を呈し，雲母を含む。外面にごく僅か右上がりの平行タタキメを施している。22は壺の底部の破片で，底径2.4㎝で，平底であり体部はゆるく内彎しながら立ち上がってい

る。胎土は灰茶褐色を呈し，外面に僅かに平行タタキメを施している。23は甕の底部の破片で，底部は平底，体部は大きく斜上方に開いており，胎土は淡黄茶褐色を呈し白砂を含んでいる。二次火熱を受けたためか外面に小さなヒビ割れがみられ，調整は不明。24は高杯形土器の身部の破片で，口径13.6㎝で，体部中半より大きく屈曲させて外反し，口縁端部は外上方に開き尖り気味に丸くおさめている。胎土は淡赤褐色を呈し雲母・白砂を含み焼成は良好。内面にヘラミガキを施しているが，外面調整は不明。25～28はいずれも高杯形土器でいずれも体部上半で屈曲させ，外反させて端部を尖り気味に丸くおさめているもので外反の角度が大きいものからやや弱いものまであり，胎土は25が淡赤橙色，26は淡茶

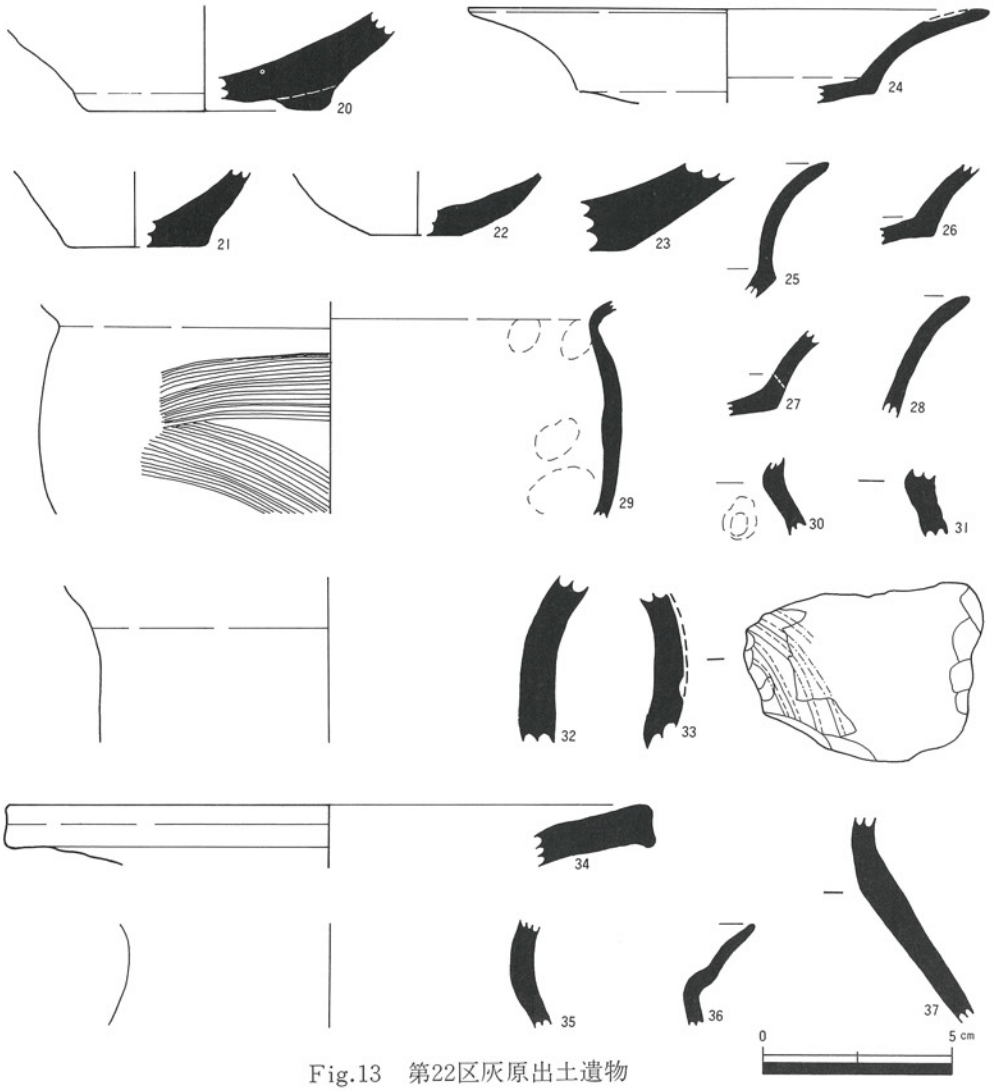


Fig.13　第22区灰原出土遺物

褐色，27は淡赤茶褐色，28は淡赤茶褐色を呈し，白雲母・石英を含み焼成は良好である。いずれも剝落のため調整は不明。29は甕の頸部から胴部にかけての破片で，胴部は緩やかな球形を呈し，頸部は「く」字形に屈曲外反し，胎土は淡白茶褐色を呈し，雲母・白砂を含み，頸部下半に黒斑がある。外面ヨコおよび右下がりのハケメを施した後ナデを行っている。内面頸部は近指押えを行っている。33は甕の胴部の破片で，胎土は赤茶褐色を呈し雲母・白砂を含み，器面は剝落しており調整は不明であるが外面に平行タタキがみられる30・31はいずれも甕の頸部の破片であり，体部は頸部より斜下方に外反し，「く」字形に外反して斜上方に開くと思われる。30は胎土が淡赤褐色を呈し，雲母・白砂を含む。31は淡茶褐色でやはり雲母，白砂を含んでおり，いずれも平行タタキメを施しその後にヘラ状工具で磨消している。32は壺形土器の頸部で，ゆるやかに外反しており，胎土は淡褐色を呈し，雲母・白砂・緑色片岩の砂粒を含んでいる。調整は剝落のため不明。35は壺形土器の胴上半部の破片でわずかに内彎し外下方に外反しており，頸部は直立するものと思われる。胎土は淡茶褐色を呈し，雲母・石英を含んでいる。調整は剝落のため不明。34は壺形土器の口縁部で直径16㎝であり，頸部より水平に近く外反し，口唇部は下にやや肥厚させて端面を作り，２条の擬凹線を巡らしており，胎土は内面淡黄褐色，外面茶褐色を呈し石英を含んでいる。焼成はややあまい。36は口縁部に一段の屈曲をもつ壺形土器の口縁部で，頸部より外反する口縁は一段のゆるい屈曲をもち外方へカーブを描きながら口唇部を薄く尖らせている。胎土は白橙色で，白砂・クサリ礫・結晶片岩を含み，剝落で調整不明。纒向遺跡辻地区土壙４下層土器と類似する。古墳時代初頭か（註５）。37は壺か甕の頸部でありゆるく「く」字形に外反し，胎土は淡赤褐色を呈し，雲母・白砂を含み，焼成は良好。

４．集石遺構　（Fig. 9・14，ＰＬ．２・８）

弥生土器と石鏃，太型蛤刃磨製石斧が出土している。集石内の層位は分層が困難であったので一括して取り扱った。土器片は50片程出土しているが，図化できるものは８点である。土器はほぼ弥生時代後期（畿内第Ⅴ様式）～古墳時代初頭（庄内併行期）の範囲であると思われる。

38・39はいずれも壺形土器の底部の破片であり，平底で体部は斜上方に大きく外反しており，38は淡黄褐色ないし赤茶褐色を呈し雲母・白砂を含み剝落のため，調整は不明。39は淡赤橙色を呈し，雲母・白砂・チャート（？）を含み剝落のため調整は不明であるが外面にわずかに平行タタキメの痕跡がみられる。40は壺形土器の底部であり，底部は平底で

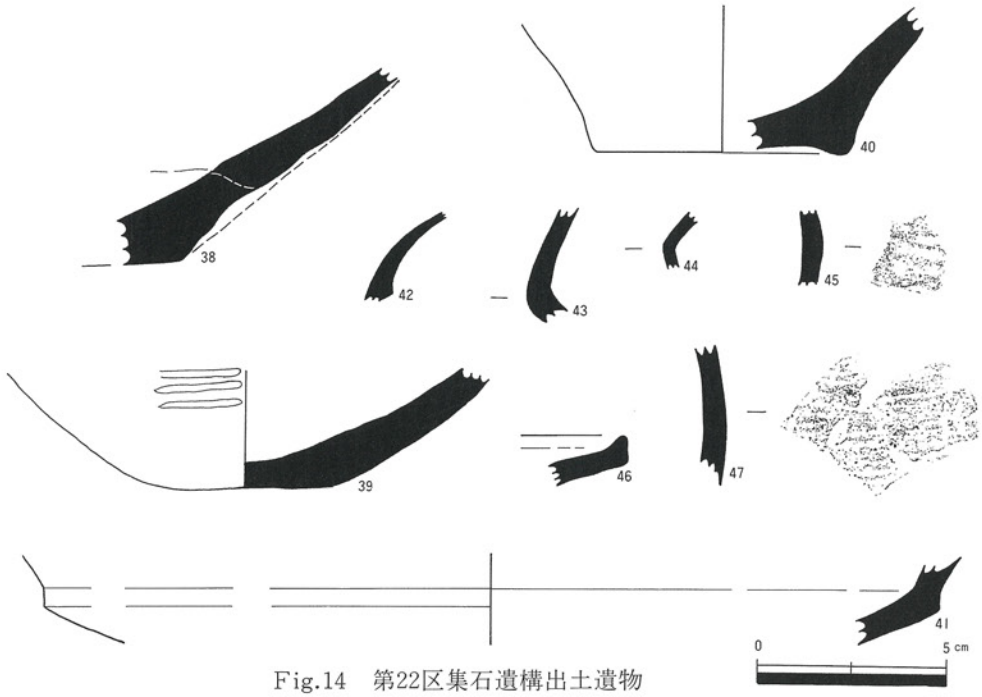


Fig.14　第22区集石遺構出土遺物

体部はやや直上し，やや内彎しながら外上方に立ち上がっている。胎土は淡茶褐色を呈し白砂・雲母・クサリ礫を多量に含んでいる。調整は剝落のため不明であるが底部内面に指頭圧痕がわずかにみられる。41・42は高杯形土器の皿の部分であり，体部中央で屈曲させて段をもち彎曲しながら外反するものであり，41は赤褐色を呈し，白砂・雲母・黒砂を含み，42は淡赤褐色を呈し雲母を含んでいる。いずれも剝落が激しく調整は不明であるが器形からみて「纒向遺跡」東田地区南溝中層のものに類似し，時期は古墳時代初頭。44は甕の頸部の破片であり「く」字形に大きく外反しており，胎土は赤褐色を呈し，白砂を含んでいる。調整は剝落のため十分分からないが，内面にヘラミガキの痕跡がみられる。43は壺形土器の頸部であり，頸部はやや内彎しながら斜上方にゆるやかに外反し，肩部が大きく張ったものと思われ，胎土は淡黄褐色を呈し，雲母を含んでいる。調整は剝落のため不明。45は甕の胴部の破片。

5．集石下層　（Fig.9・14，ＰＬ．２・８）

数十点の土器片が出土しているが，いずれも細片であり，しかも器面が剝落しているため，図化できたのはわずか２点のみであった。

47は甕形土器の胴部の破片でありゆるく内彎しており，胎土は淡茶褐色を呈し黒粒を含み，外面に1㎜内外の平行タタキメを施した後ヘラ状工具で不完全に磨消している。46は壺の口縁と思われ，口縁部は水平に近く開き，端部を上につまみ上げており，胎土は淡橙白色を呈し，クサリ礫・白砂を含んでいる。内面横方向のヘラミガキを施しているが，外面の調整は不明。

6．石器・その他　(Fig. 15・16)

石鏃・剥片・有溝礫・太型蛤刃石斧が出土している。以下各項目にわけて記述する。

石鏃

石鏃は全部で5点出土しており，48・49・50・52は集石遺構，51は井戸状遺構の撹乱土層より出土している。48は端部と茎部を欠損し，現長1.6㎝，最大幅1.4㎝，最大厚0.2㎝，重さ0.6ｇの凸茎式石鏃であり，片方は剥片の自然面を残し3回の剥離をていねいに行っている。49は茎部の片方を欠損しており，長さ2㎝，最大幅1.4㎝，厚さ0.3㎝，重さ　0.6ｇで断面菱形であり，剥片の両面を丁寧に剥離を行った二等辺三角形の凹茎式石鏃である。51はほぼ完形に近く，長さ2.3㎝，最大幅1.6㎝，最大厚0.4㎝，重さ0.9ｇの断面楕円形を呈し，自然面をよく残しており，両面より荒い剥離を行った二等辺三角形の凹茎式石鏃である。50は茎部の長さが異なり，長さ2㎝，最大幅1.7㎝，最大厚0.4㎝，重さ0.8ｇで断面楕円形に近い菱形で，片面は剥離面を残し，両端・茎部を2回以上の剥離でもって作り，茎部がやや外反した二等辺三角形の凹茎式石鏃である。52は上下が分からないが一

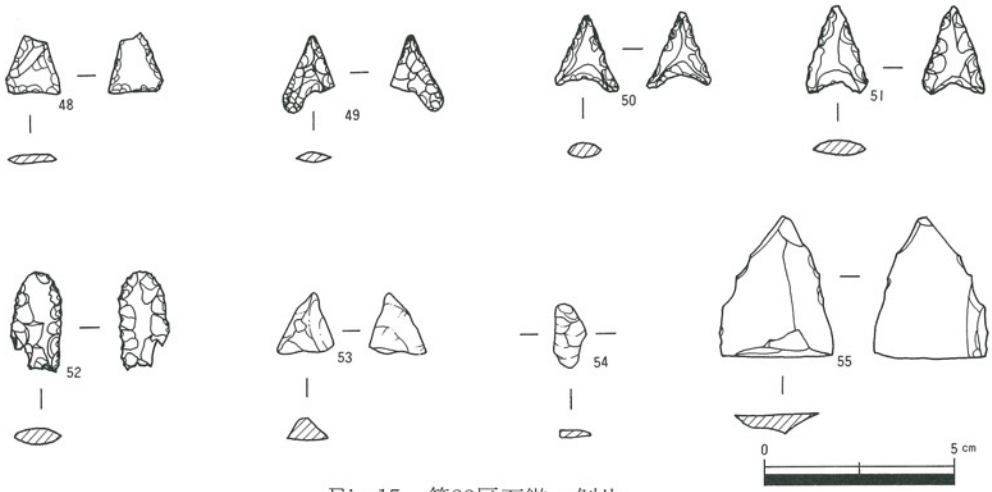


Fig.15　第22区石鏃・剥片

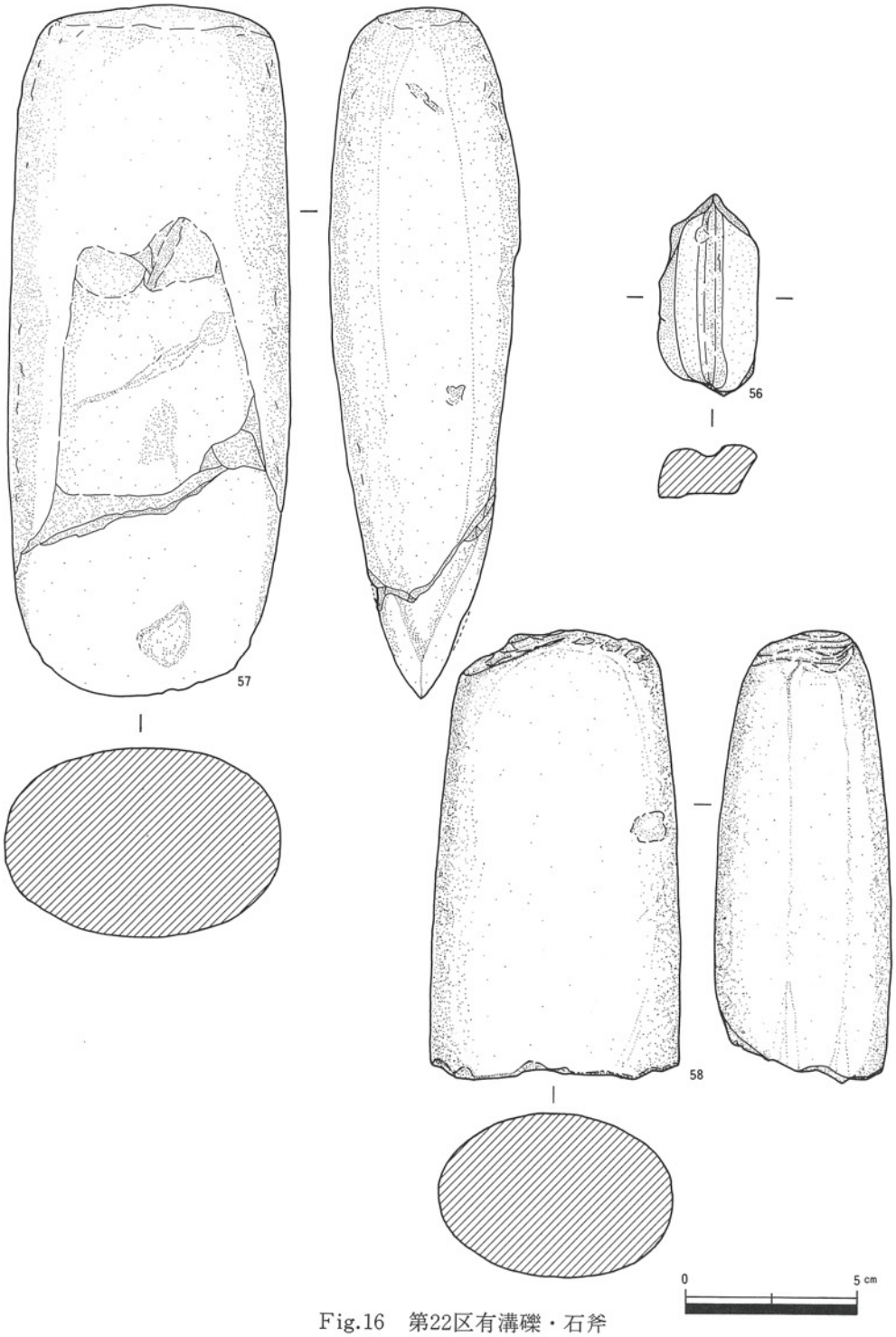


Fig.16　第22区有溝礫・石斧

応残っている部分を上にしたものであり，現長2.6cm，最大幅1.3cm，最大厚0.4cm，重さ1.3gで断面楕円形の菱形を呈し，両端を丁寧に剝離しており凸茎式石鏃と思われる。

剝片　(Fig.15)

いずれも横長の剝片で53・55は集石遺構，54は土器溜り遺構の中から出土しており，53・55は自然面を残しており，53・55は石鏃の素材とも思われる。

有溝礫　(Fig.16)

上部撹乱層内より出土したもので，片方の先端部と裏面を欠損しており，現長5.9cm，最大幅2.8cm，現在厚1.4cmの和泉砂岩製で，長軸方向の中央部に幅1cm，深さ0.3cmのU字形を呈した溝を切りこんでおり，石錘の可能性が考えられる。

太型蛤刃石斧　(Fig.16)

2点出土しており，57は数m離れた別々の遺構のものが接合でき，58は刃部を欠損した破片である。石材は徳島大学教授中川衷三氏の鑑定によれば，変斑糲岩（MetaGabbro）で四国山脈中の御荷鉾帯に産し，鮎喰川下流の氾濫原などから採集される吉野川南岸の石でありいずれも緑色を呈している。

57は全長20.2cm，最大幅8cm，最大厚5.6cm，重さ1.58kgでありていねいに磨いた磨製石斧で刃部は両刃で鋭く作り出されている。刃部は集石遺構から出土し，茎部は井戸状遺構の撹乱の中より出土しており，本来は集石遺構に伴っていたものが何らかの折りに破損し撹乱の中に入ったものと思われる。現在の市販されている斧の断面と何ら変わりのないものである。

58は現在長13.1cm，最大幅6.8cm，最大厚4.8cm，現在重量0.94kgで57よりはやや小ぶりのものであり、集石遺構内より出土している。茎部にかなりの敲打痕がみられる。

以上遺物について述べたが，染付磁器は伊万里焼，徳利は鳴門市大麻町の大谷焼，弥生土器，土師質土器は胎土に緑色片岩の細片が入っていることから，吉野川南岸の土でもって焼成しており，太型蛤刃石斧は吉野川南岸鮎喰川下流域の産，石鏃は香川県もしくは兵庫県淡路島産のものと思われる。

Ⅵ　ま　と　め

出土した遺構・遺物は大別すると江戸時代の後期と弥生時代の後期後半～古墳時代初頭の2時期に限定され，その間は須恵器が1点のみであり遺跡の所在は不明である。

先づ江戸時代については「鳴門市史」によれば，本調査区は通称「馬ノ口」と呼ばれている。寛永6年（1269）に藩営の馬の放牧場が開営されたものとされ，38区の土塁状遺構，39区調査区外西へ50m程入った所にある石垣，21区で調査した建物跡などがこの放牧場に関連する遺構と考えられる（註6）。又，ウチノ海にただ一軒現存する佐々木家の墓所の墓石の中に元禄4年（1691）の銘があり，この地に最低その年より古いころの人の所在が明らかである。今回出土した井戸状遺構，溜め池状遺構もこれら放牧場に何らか関係した遺構と想定されるが，確証を得る資料とはならなかった。出土遺物もわずかであり伊万里焼碗と大谷焼徳利，在地の陶質土錘が出土している。いずれも18世紀代以降のものであり寛永年間に逆上る資料は得られなかった。

弥生時代後期後半～古墳時代初頭のものは，集石遺構・土壙状遺構・土器溜り遺構・灰原遺構が検出され，集石遺構・土器溜り遺構・灰原遺構からはある程度まとまって土器片が出土しているが，器面が剥落しているものが多く殆どが細片であり，図化できるものは僅かであった。この僅かの資料をみても時期的には限定された時期であり，いずれの遺構も同時期に存在したと考えられ相互に関連したものであると思われる。

集石遺構は遺構の項で述べたように，海へ向かって傾斜しており，人工的に積み重ねている状態でなく，焼石が数多く含まれていること，間に炭化物・焼土・磨滅した土器片がみられること，集石と重なって海側に3回にわたってある程度の灰原がみられることがあげられる。これらの状況からみると，火を多量に使用した何らかの作業が行われていることを物語っている。

この海に面し傾斜し，多量の焼石と灰原を用いる作業として考えられることは，海に関する作業が考えられるのである。これらの上に出土遺物の状況を加味してみるならば，太型蛤刃石斧が2本出土していること，反対に製塩土器，土錘が1点もみられないこと魚貝類の骨・貝殻等がみられないことから，海を直接的に利用した作業の実例は非常に乏しいのである。この中で太型蛤刃石斧が数少ない石器の中で2点出土していること，集石が海に向かって傾斜していることを合わせて考えるならば，弥生時代後期後半から古墳時代における船の製作を行った当時の造船所の可能性が想定できる。すなわち確証するものとしての船の残片・木片等は出土していないが，木という遺物の制約上残る条件は限定されるので想定の域はでないのであるが，この斜面を用いて丸太を半分に割り，その割った上面を火や焼石でもって木の幹を焼き削りやすくして船を作ったものと思われ，その加工に石斧を用い，又，船の内面を広げる際に熱を加えて柔らかくし，加工しやすくする南太平洋

の民俗例があることなどから船を製作した跡と傍証されると思われる。灰原遺構は燃焼した灰を海側の斜面に捨てたものであり，それが幾時期かにまたがるため，何回かの堆積を示しているものと思われる。船になる材料の木については，この大毛山系なり，他の地域からでも海水の浮力によって容易に運搬でき，斜面を利用して陸上での運搬も進水も可能であり，想定できる一番可能性の強いことを述べておく。

本遺跡での作業にたずさわった集団であるが，出土した遺物を検討してみると，土器の中に吉野川南岸特に鮎喰川下流域の土器片が含まれていること，太型蛤刃石斧の材質がやはり鮎喰川下流に産出する石材であることなどからみると，徳島市内の鮎喰川下流域との密接な関係が考えられるのである（註７）。

この当時の物質の輸送，移動として容易に活動ができる手段は，川や水路・海を使った方法が一番合理的であり，しかも多量に移動が可能であることからみて，古くから船を使った移動は当時の最高の運搬方法と考えられ，本調査区のウチノ海は台風時でも冬期でも波静かな海であり，瀬戸内海・鳴門海峡をへだてた紀伊水道の絶好の泊（港）となる場所である。時期は異なるが，古墳時代後期にこれらウチノ海に面して北山古墳，納言山古墳阿波井神社古墳，田ノ浦古墳，竹島古墳などウチノ海を囲む形で古墳群が造営されておりこれらは海を見下ろす高所に位置し明らかに海を意識した古墳群であることからウチノ海は古くから海上交通の要所として重要な位置であったと思われる（註６）。

特に鳴門海峡は干満の差によっては潮流の流れが激しく，「鳴門の渦」として有名な程急流となるものであり，潮目を利用しての移動の際に本遺跡をはじめとしてウチノ海に面した各泊（港）が一次的停泊所の役割を果たしてきたものであり，船の補修や製作所として必要な場所であったと考えられる。

最近徳島市鮎喰遺跡，板野町黒谷川郡頭遺跡等河川の近くで弥生時代後期後半から古墳時代初頭の遺跡の所在が明らかになっており，黒谷川郡頭遺跡より畿内的様相をもつ直孤文土器，鮎喰遺跡から吉備系土器の出土例など，相当広範囲にわたって船を利用した移動がみられ，本遺跡に鮎喰川流域の集団との何らかのかかわりがあることも考えられ，本遺跡の遺物からみて１つの立証となるものである（註８）。

木製品の加工については，弥生時代中期よりは金属製品，特に鉄製工具が使用されている例がみられるが，本遺跡では古墳時代初頭まで石製工具が使用されていたことが明らかになった。

註

註1　徳島県文化財調査概報「鳴門架橋に係る道路建設に伴う埋蔵文化財精密分布調査報告書」'77年　徳島県教育委員会

註2　徳島県文化財調査概報「大鳴門橋関連工事に伴う埋蔵文化財発掘調査　大毛島22・23区遺跡」'83年　徳島県教育委員会

註3　特別展図録「国内出土の肥前陶磁器」'84年　佐賀県立九州陶磁文化館

註4　豊田進「阿波の陶磁」陶磁選書5

註5　「纒向」'76年　奈良県立橿原考古学研究所

註6　「鳴門市史」上巻'76年　鳴門市史編纂室

註7　「庄・鮎喰遺跡」'85年　徳島県教育委員会

註8　「黒谷川郡頭遺跡Ⅰ・Ⅱ」　徳島県教育委員会

Tab.1　第22区出土遺物観察表

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
1	磁器	碗	青藍色の呉須染付 見込：飛翔する鶴 外面：大根か人参　鶴２羽	口径　11.1 器高　5.9 高台径　4.4 高台高　0.5	胎土：乳白色，釉：青味がかった灰白色，釉切れは畳付による19C前，伊万里焼
2	磁器	碗	淡い藍色染付 見込：五弁花スタンプ文，蛇の目釉ハギ 外面：松葉枝文，口縁内面：波文	口径　13.1 器高　6.0 高台径　5.4 高台高　0.7	胎土：灰白色，釉：青味がかった灰白色 くらわんか手，18C代 伊万里焼
3	磁器	碗	見込：五弁花スタンプ文 高台内：渦福銘	高台径　4.0 高台高　0.85	碗の底部，胎土：灰白色，18C後〜19C初 伊万里焼
4	土錘	管状土錘	施釉，指おさえによる凹み	全長　4.1 最大径　1.3 重量　8.0	釉：褐色，端部使用痕
5	土錘	管状土錘	施釉，指おさえによる凹み	全長　5.8 最大径　1.3 重量　11.1	釉：褐色
6	陶器	徳利	外面施釉，内外面：ロクロ痕		胴部の破片，胎土：赤茶褐色，釉：褐色，18C後〜19C前，大谷焼
7	須恵器	蓋	内外面：ロクロミズビキ成形痕		杯蓋，胎土：白灰色
8	土師質土器	甕			頸部の破片，胎土：茶褐色，く字状口縁
9	土器	高杯			脚部の破片，弥生土器 胎土：赤茶褐色 ハ字状脚部
10	土器	壺か甕			底部，胎土：淡い薄茶色，弥生土器
11	土器	甕	内面：粘土紐接合痕 口縁外面部：指おさえ痕	口径　12.3	上半の破片，胎土：内面黒灰色，外面茶白色
12	土器	甕	内面：ヘラ削り	口径　14.4	口縁部の破片 胎土：黄茶色
13	土器	甕		口径　16.6	口縁部，胎土：明茶褐色，く字状口縁
14	土器	甕	内面：粘土紐接合痕	口径　17.2	口縁部の破片 胎土：明赤茶色，灰白色，く字状口縁

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
15	土器	甕	内面：胴部と頸部に粘土紐接合痕		胴上半部の破片 胎土：内面黒灰色，外面淡い赤茶色，一部黒斑
16	土器	甕	内面：縦方向のヘラ削り 外面：ケズリ，ヘラミガキ，平底	底径 5.5	底部の破片，胎土：灰白色
17	土器	甕	平底	底径 4.2	底部の破片，胎土：内面淡赤褐色，外面淡褐色
18	土器	壺か甕	平底	底径 4.5	底部の破片，胎土：赤茶褐色
19	土器	甕	胴部下半：ヘラ削り，スリケシ 粘土紐接合痕		胴部上半より下の破片 胎土：黝黒色，外面淡茶褐色，黒斑
20	土器	壺か甕	高台：粘土紐貼り付け	高台径 6.2 高台高 0.6	底部の破片，胎土：黒褐色，茶褐色
21	土器	甕	外面：平行タタキメ，平底	底径 3.5	底部，胎土：淡い赤茶褐色
22	土器	壺	外面：平行タタキメ，平底	底径 2.4	底部の破片，胎土：灰茶褐色
23	土器	甕	平底		底部の破片，胎土：淡黄茶褐色
24	土器	高杯	内面：ヘラミガキ	口径 13.6	身部の破片，胎土：淡赤茶褐色
25	土器	高杯			胎土：淡赤橙色
26	土器	高杯			胎土：淡茶褐色
27	土器	高杯			胎土：淡赤茶褐色
28	土器	高杯			胎土：淡赤茶褐色
29	土器	甕	内面頸部：指押え 外面：ヨコ及び右下がりのハケメナデ		頸部から胴部にかけての破片，胎土：淡白茶褐色，頸部下半に黒斑く字状頸部
30	土器	甕	平行タタキメ，ヘラ状工具による摩滅		頸部の破片，胎土：淡赤褐色，く字形に外反
31	土器	甕	平行タタキメ，ヘラ状工具による摩滅		頸部の破片，胎土：淡茶褐色，く字形に外反

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
32	土器	壺			頸部，胎土：淡褐色
33	土器	甕	外面：平行タタキ		胴部の破片，胎土：赤茶褐色，内面丸い褐色斑
34	土器	壺	2条の擬凹線	口径 16.0	口縁部，胎土：内面淡黄褐色，外面茶褐色
35	土器	壺			胴上半部の破片 胎土：淡茶褐色
36	土器	壺			口縁部，胎土：白橙色
37	土器	壺か甕			頸部，胎土：淡赤褐色 く字形に外反
38	土器	壺	平底		底部の破片，胎土：淡黄褐色，赤茶褐色
39	土器	壺	外面：平行タタキメ，平底		底部の破片，胎土：淡赤橙色
40	土器	壺	底部内面：指頭圧痕？平底？		底部，胎土：淡茶褐色
41	土器	高杯			皿の部分？胎土：赤褐色，古墳時代初
42	土器	高杯			皿の部分？胎土：淡赤褐色，古墳時代初
43	土器	壺			頸部，胎土：淡黄褐色
44	土器	甕	内面：ヘラミガキの痕跡		頸部の破片，胎土：赤褐色，く字形
45	土器	甕			胴部の破片，胎土：外面淡い赤茶色，内面赤橙色
46	土器	壺	内面：横方向のヘラミガキ		口縁，胎土：淡橙白色
47	土器	甕	外面:1mm内外の平行タタキメ ヘラ状工具による磨消		胴部の破片，胎土：淡茶褐色
48	石器	石鏃		長さ 1.6 最大幅 1.4 最大厚 0.2 重量 0.6	凸茎式石鏃 端部と茎部を欠損 3回の剥離
49	石器	石鏃		長さ 2.0 最大幅 1.4 最大厚 0.3 重量 0.6	凹茎式石鏃 茎部の片方を欠損

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
50	石器	石鏃		長さ 2.0 最大幅 1.7 最大厚 0.4 重量 0.8	凹茎式石鏃 両端・茎部を2回以上の剥離
51	石器	石鏃		長さ 2.3 最大幅 1.6 最大厚 0.4 重量 0.9	凹茎式石鏃 ほぼ完形
52	石器	石鏃		長さ 2.6 最大幅 1.3 最大厚 0.4 重量 1.3	凸茎式石鏃 上下不明
53	石器	剥片			石鏃の素材？
54	石器	剥片			
55	石器	剥片			石鏃の素材？
56	石器	有溝礫		長さ 5.9 最大幅 2.8 最大厚 1.4	片方の先端部と裏面を欠損，長軸方向の中央部に幅1cm，深さ0.3cmのU字形溝，石錘？
57	石器	太型 蛤刃石斧		長さ 20.2 最大幅 8.0 最大厚 5.6 重量 1.58	磨製石斧
58	石器	太型 蛤刃石斧		長さ 13.1 最大幅 6.8 最大厚 4.8 重量 0.94	茎部にかなりの敲打痕

第　23　区

本　文　目　次

Ⅰ　位置と環境
Ⅱ　調査の経過
Ⅲ　基本層序
Ⅳ　遺　　物
Ⅴ　ま と め

挿　図　目　次

Fig. 1　第23区位置図
Fig. 2　第23区地形測量・トレンチ配置図
Fig. 3　第23区トレンチ層序
Fig. 4　第23区出土遺物

図　版　目　次

ＰＬ．1　第23区全景（調査前）　第23区全景（調査後）
ＰＬ．2　第23区第１トレンチ　第23区第２トレンチ
ＰＬ．3　第23区出土遺物

Ⅰ　位置と環境

（Fig. 1）

第22区と尾根をひとつ隔てた南側のウチノ海に面した緩かな傾斜面に位置し，標高6.75～1.5mの高さであり，それより西は市道ウチノ海灘線によって埋没され，その西は海岸線となっている。大毛山系より標高6mまでは非常に平坦な地形を呈しているが，この部分はコンクリート建物跡があり，この建物を建設する際に斜面を段々に切り開いており，相当開墾を受けた平坦面で当初の自然面はなく，それより西側の傾斜面が自然地形を多少残していると思われるが，何箇所か土取りによる凹みがみられる。調査区北端及び南端は第22区と同じく軍用小型船舶の隠し場所として開削された大きな凹みがみられるため，調査区から除外した。昭和51年の分布調査では遺物の採集はみられず，海岸線に沿った平坦地があり確認調査が必要とある（註1）。したがって傾斜面を中心として確認調査を実施することとした。調査区の現状は西半分の斜面部分は相当年数を経た松と，戦後に生えたと思われる雑木が生茂げり，東半分の平坦部は建物の基礎であるコンクリートと，屋根や壁に使用した廃材が相当投げ込まれており，カヤとバラが密生した状態であった。調査の際，巨木の松の根の排除とゴミ捨て場となっているゴミ（特に真珠養殖に用いた網カゴ，ワイヤー等）の除去に相当労力を要した。

Ⅱ　調査の経過

（Fig. 2，ＰＬ．1）

本調査は上半分が開墾によって相当地形が変化していることから，自然地形を中心に調査を実施することとし，市道境に長さ25m，幅3mの第1トレンチを設定し，それと直交する形で斜面に長さ5m，幅2.5mの第2トレンチ，長さ3m，幅2.5mの第3トレンチ，念のため平坦部に長さ15m，幅3mの第4トレンチを設定し調査を行った。第1トレンチ攪乱土層内より須恵器片，土師器片がみられ，慎重に調査を進めていったが遺構がみられないため，トレンチ調査で調査を終了した。

調査日誌抄

8月31日　樹木伐採及び下草刈り

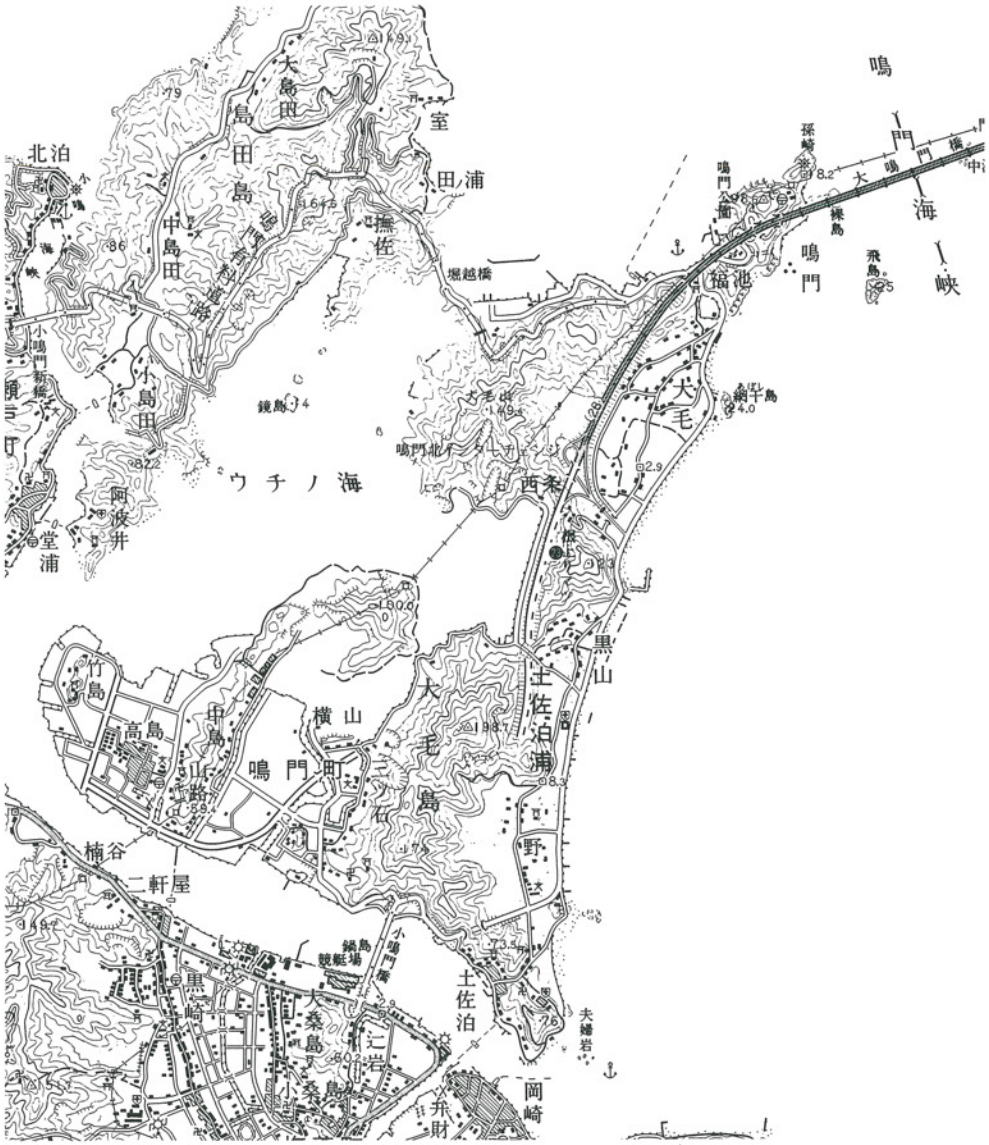


Fig. 1　第23区位置図

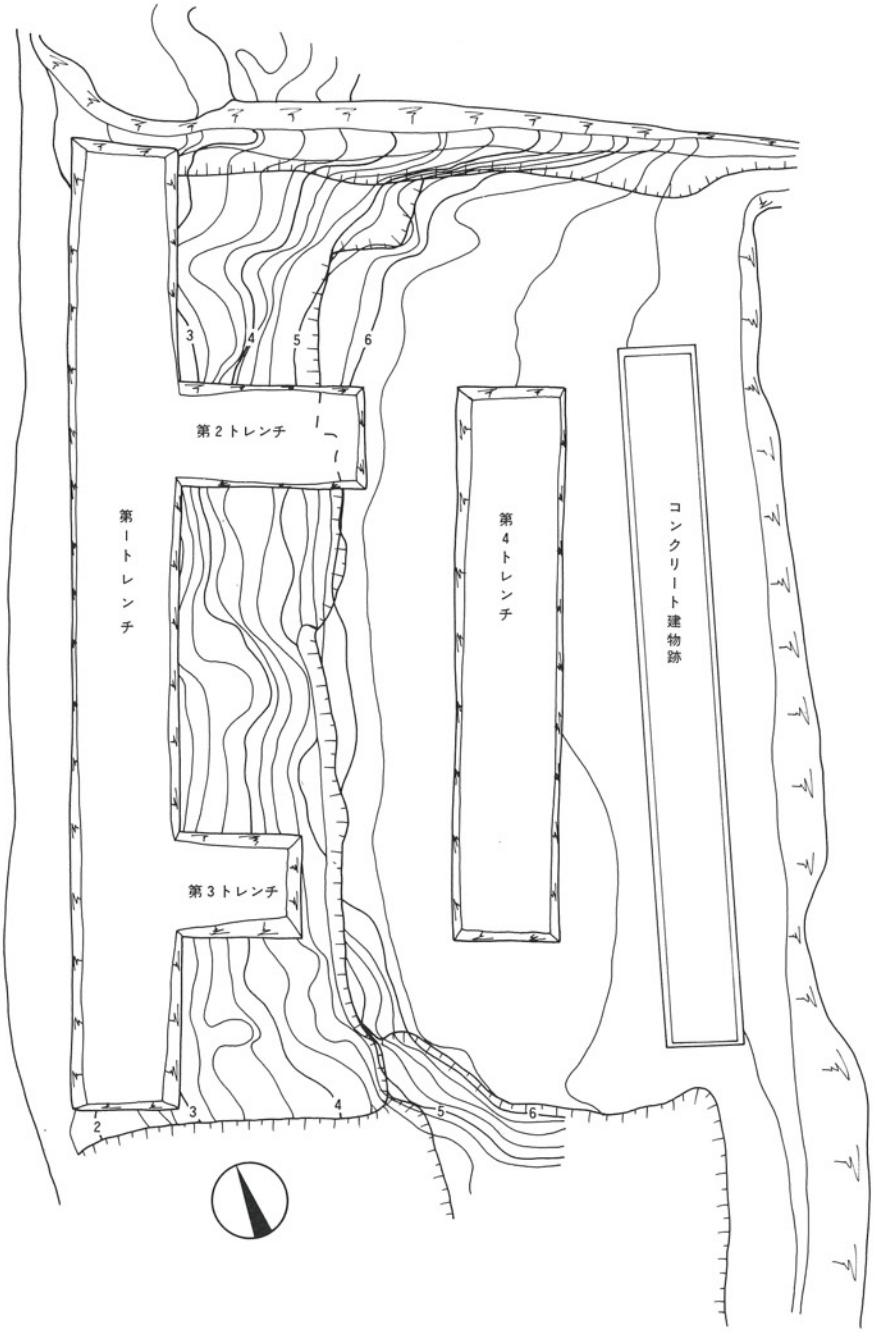


Fig. 2　第23区地形測量・トレンチ配置図

9月8日　調査前写真撮影
9月14日　地形測量開始
10月8日　第2・3トレンチ第1層掘り下げ
13日　第1トンレチ第1層掘り下げ
19日　第1トレンチ第1層より須恵器片出土
26日　第1・2・3トレンチ第2～4層掘り下げ
11月5日　清掃及び写真撮影，土層図作成準備
10日　第2トレンチ土層図完了
18日　第4トレンチ土層図作成
1月7日　埋め戻し完了，調査終了

Ⅲ　基本層序

（Fig. 3，ＰＬ．2）

第1トレンチ第1層は薄い所で10㎝，厚い所で50㎝ある黒褐色腐葉土層で，小礫から人頭大の和泉砂岩，あるいは須恵器片を含んでいる。第2層はにぶい黄褐色砂質土層で調査区北側に一部みられる。第3層はにぶい黄橙色砂質土層で，第2層の下に北側でごく僅かに入り込んでいる状態であり，北側の尾根からの押出し層である。第4層はこのトレンチの大半を占め厚い所で1m20㎝程あり，上の斜面を削平した明黄褐色礫層が堆積したものと思われる。第5層は明黄褐色と灰黄褐色の混合層で和泉砂岩の小礫から巨石までを含み湧水がみられる。第6層は第2トレンチ南側の攪乱層で灰色砂質土層で小礫から人頭大の和泉砂岩を含んでいる。第7層は明黄褐色砂質土層で小さいな粒状岩石を多く含みよくしまった土層である。第8層は黒褐色砂質土層の有機質層で開墾以前の腐葉土層と思われる。第9層は明黄褐色砂質土層で黒っぽいマンガン質の小粒を含む層である。第10層は黒褐色砂質土層の有機質層で礫を含み，やはり旧地表面の腐葉土層と思われる。第11層は褐灰色粘質土層で，やはり砂岩の礫を含んでおり湧水がみられた。

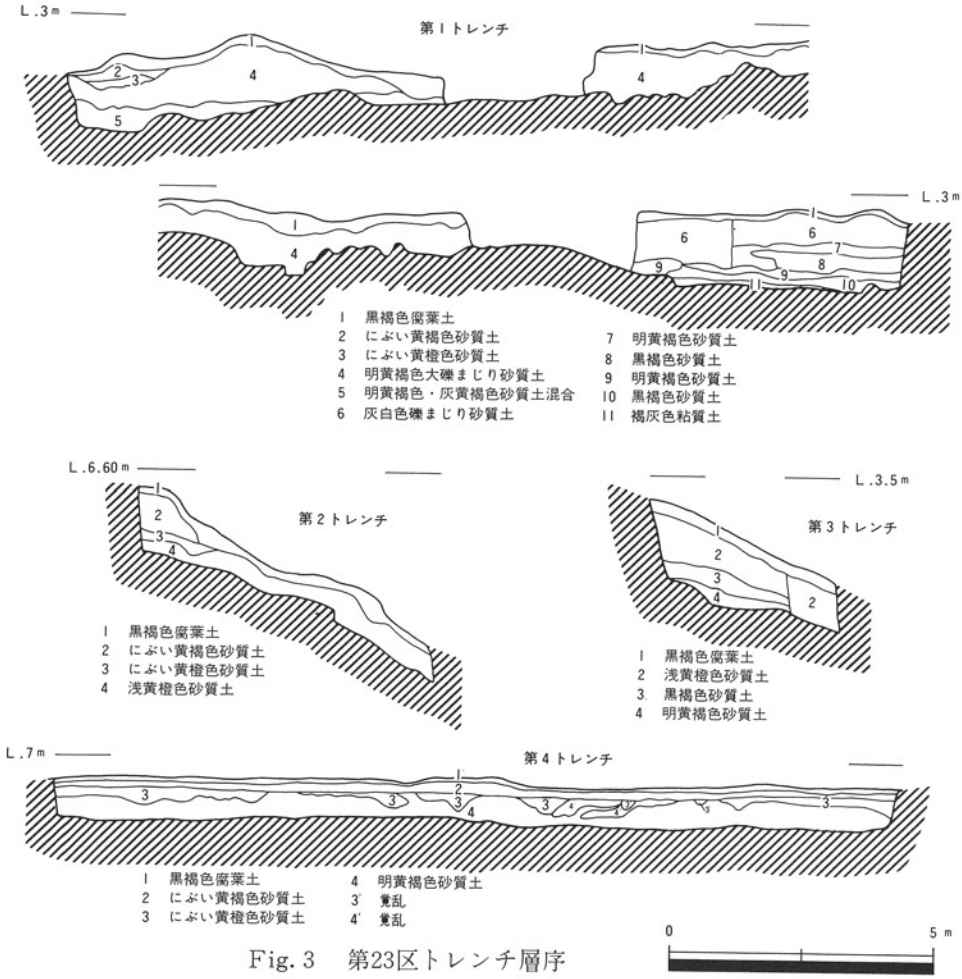


Fig. 3　第23区トレンチ層序

第２トレンチは第１層は黒褐色砂質土層のいわゆる腐葉土層である。第２層はにぶい黄褐色砂質土層で和泉砂岩の礫を多く含んでおり，いわゆる開墾による攪乱土層である。第３層はにぶい黄橙色砂質土層で極細の砂粒を含んでいる。第４層は浅黄橙色砂質土層である。いずれも地形の傾斜に沿って傾斜しており，岩盤の傾斜も同様である。

第３トレンチは第１層は黒褐色砂質土層でいわゆる腐葉土層である。第２層は浅黄橙色砂質土層で小礫から人頭大の和泉砂岩の礫を含み，開墾の際の攪乱土と思われる。第３層は黒色砂質土層の有機質層で明黄褐色砂質土層が混合しており，いわゆる旧地表面である。第４層は明黄褐色と灰黄褐色砂質土層の混合層の岩盤直上層であり，下層は湧水がみられた。

第４トレンチは開墾によって平坦になった層であり，第１層は５㎝未満の厚さの黒褐色砂質土層の腐葉土層である。第２・３層はいずれもにぶい黄褐色砂質土層であり，第２層の方がややしまっており，第３層は開墾の際の整地層である。第４層は明黄褐色砂質土層で礫を含み岩盤直上層である。

以上，１～４トレンチの土層について述べたが第１トレンチ第１層に須恵器片と土師器片がみられたので，開墾による攪乱土層がこの調査区の大半である。

Ⅵ　遺　　物

（Fig. 4，ＰＬ．３）

第１トレンチの上部からの崩壊攪乱土層の堆積層の中から須恵器提瓶の胴部破片が２個体分と，小量ながら弥生式土器片と土師質土器片が出土した。この内，図化できたものは僅か３点であるが，須恵器片が出土したことにより，本調査区のそう遠くない場所に古墳もしくは何からの遺跡の所在が想定される。

１．土器類

須恵器　２点出土しており，いずれも提瓶の胴部の破片である。１は胎土が灰白色で白砂を若干含んだもので焼成は良好。調整は外面掻き目の上に平行叩き目を施し，不完全に水引き撫でを行った後，もう一度粗い掻き目を同心円状に施している。内面は青海波文の叩き目を何回か繰返しており，断面からみると粘土紐巻上げの継ぎ目が明瞭である。２は

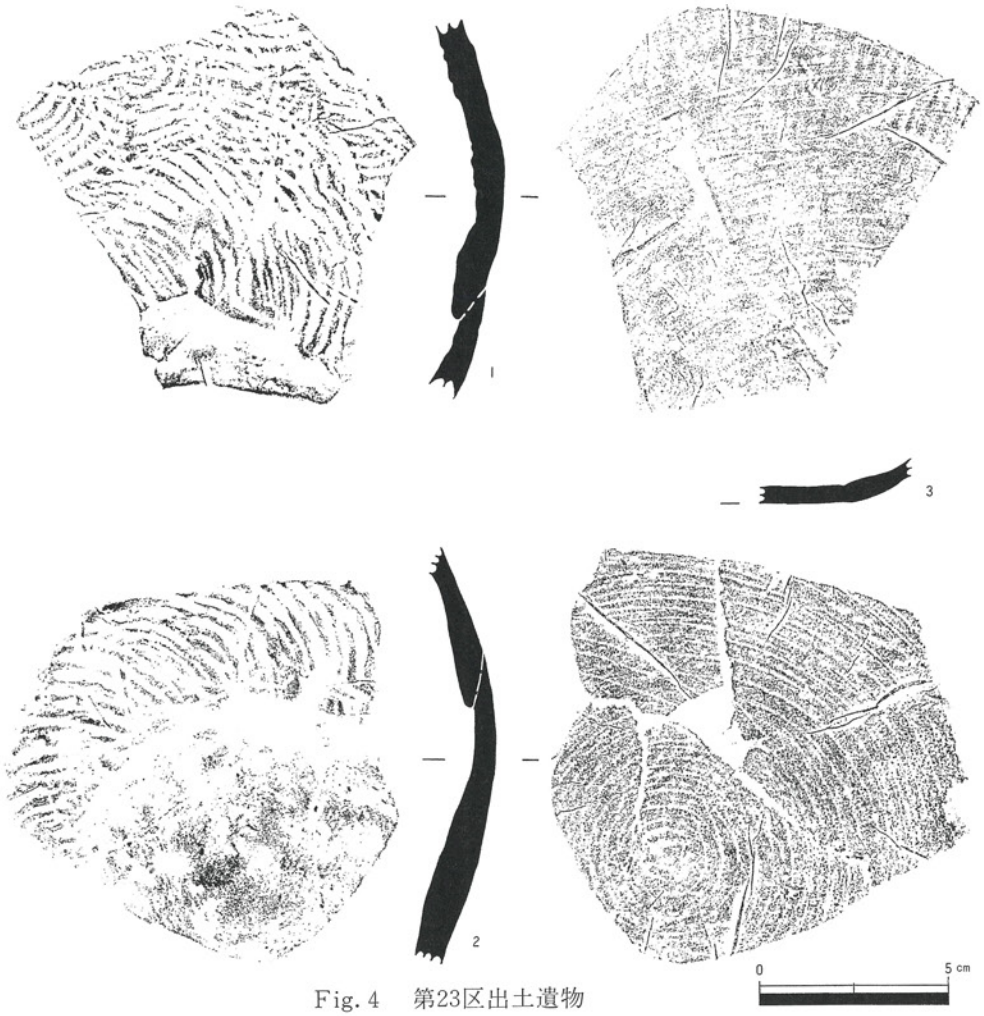


Fig. 4　第23区出土遺物

胎土が黄灰色を呈し，結晶片岩粒を含んでおり，焼成はあまい。調整は外面掻き目を施した跡，不完全に水引き撫でを行った後，もう一度粗い掻き目を同心円状に施している。

内面は細かい青海波文の叩き目を何回か繰返して行っており，内面及び断面に粘土紐巻上げの継ぎ目が明瞭に残っている。

土師質皿３は底部平底で体部やや内彎しながら，斜め上方に開き気味に立ち上がっている。胎土は水簸されており，細かい砂を含み焼成は良好で赤茶褐色である。底部に粘土巻上げ痕がみられる。

V まとめ

調査前の状況では斜面部分がコンクリートの基礎によって開墾されているため，遺構，遺物の所在は全く無いものと考えられたが，須恵器の提瓶の破片が攪乱土層の中に入っていることから，建物を作る際に削平されたか，調査区に近い所に古墳もしくは何らかの遺跡の所在が想定される資料が得られた。島内における古墳時代後期の遺跡は亀浦漁港の北の北山古墳，淡路フェリー南側の納言山古墳，土佐泊港東側の松瀬山古墳，古墳前期にあたる第6区などが挙げられ，ウチノ海に面した地点での須恵器の出現は，この地域にも何らかの人的な作業が行われていることを物語っている（註2）。

註

註1　徳島県文化財調査概報「鳴門架橋に係る道路建設に伴う埋蔵文化財精密分布調査報告書」'77年　徳島県教育委員会

註2　「鳴門市史」（上巻）'76年　鳴門市史編纂室

第24・25・26区

本 文 目 次

Ⅰ　位置と環境
Ⅱ　調査の経過
Ⅲ　第 24 区
Ⅳ　第25・26区
Ⅴ　ま と め

挿 図 目 次

Fig. 1　第24・25・26区位置図
Fig. 2　第24区地形測量・トレンチ配置図
Fig. 3　第24区トレンチ層序
Fig. 4　第25・26区地形測量・トレンチ配置図

図 版 目 次

ＰＬ．1　第25・26区全景

I　位置と環境

（Fig. 1）

第24～26区は22・23区と合わせて調査を実施したが，第22・23区は遺物，遺構がみられたため，それぞれに述べることとし，第24～26区は遺物，遺構がみられなかったので一括して述べることとした。

第24区は第21～23区と同じく，大毛島のウチノ海に面した数少ない平坦地であり，調査区と海岸線境に市道ウチノ海灘線が通っている。昭和52年の分布調査では平坦地があることから，確認調査が必要とされていた地域である（註１）。調査区は標高1.5～4.5mの範囲内にあり，ウチノ海に面してやや緩かな傾斜をしており，北端は開墾によって大きく削られており，南端はコンクリート建物跡の基礎によって破壊され，市道沿いは３箇所にわたって大きく攪乱されており，2.5～３m付近に自然地形面が僅かに残っている感じであった。

第25・26区は西はウチノ海に面し，東は紀伊水道を眼下に望む大毛島山系の狭い尾根の頂上に位置し，標高70mを頂点に南へ向かって標高55mまで緩かな傾斜であり，昭和52年度の分布調査では古墳の可能性があるということで確認調査が必要とされていた地点であり，調査区が隣接しているため一緒に調査をすることにした。地形的には古墳の所在が十分考えられる地形である。

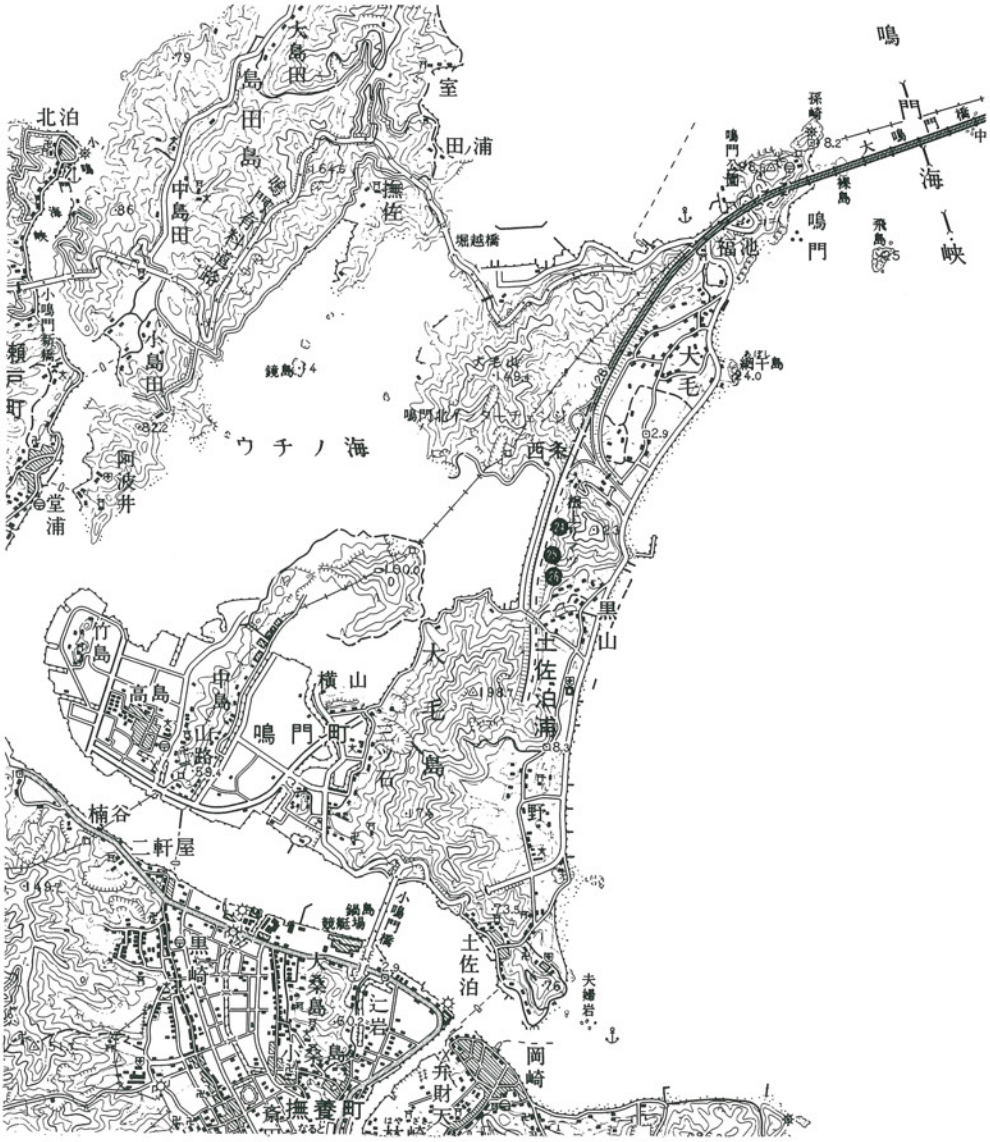


Fig. 1　第24・25・26区位置図

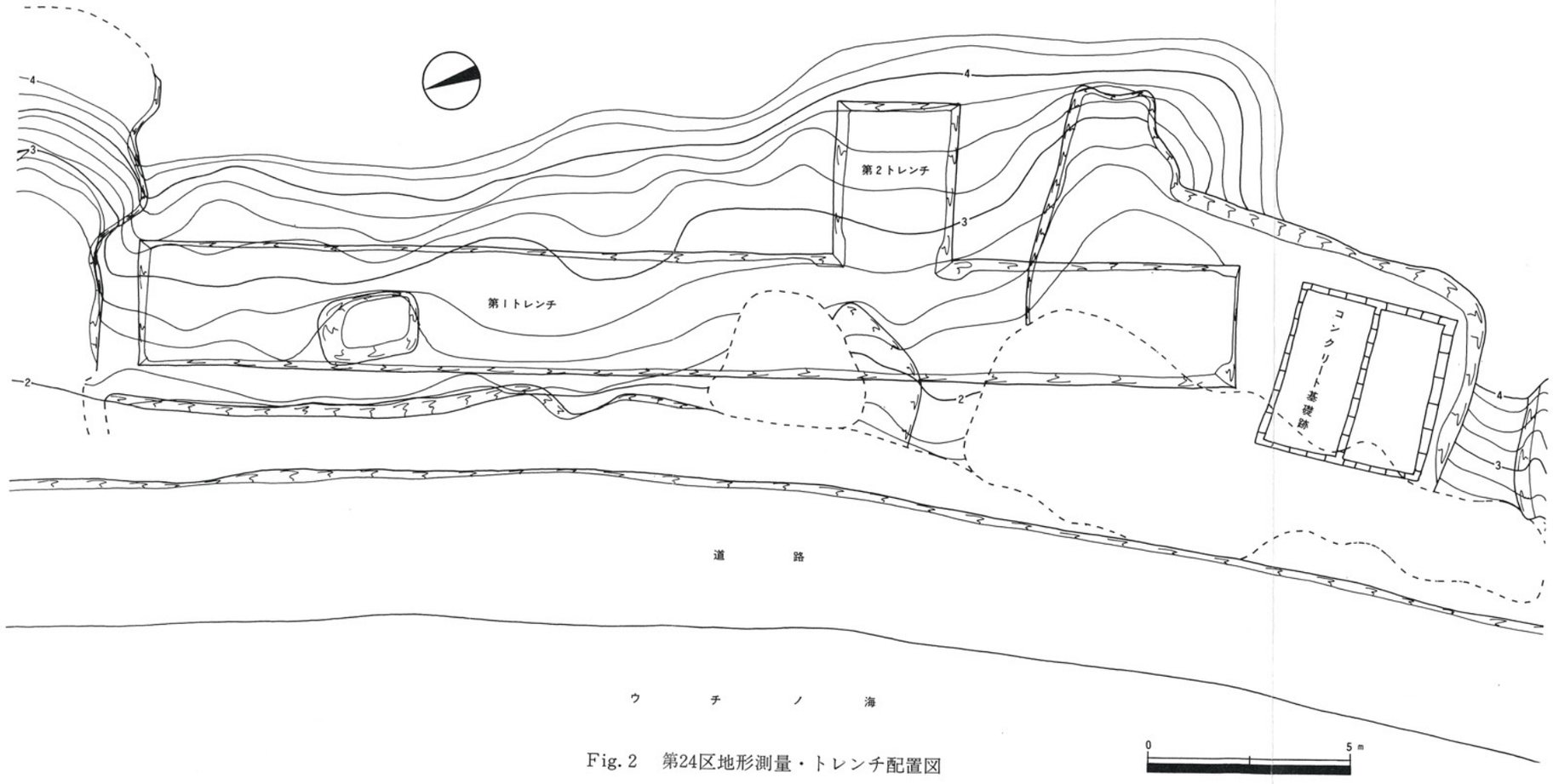


Fig. 2　第24区地形測量・トレンチ配置図

Ⅱ　調査の経過

第24区は第23区と尾根ひとつ隔てたウチノ海に面したごく僅かな平坦地である。分布調査の際，確認調査が必要ということから，平坦面に南北に１箇所，尾根先端部の張出しの東西に１箇所のトレンチを設定し調査を行った。第25・26区は隣接しており，いずれも丘陵尾根の頂上部に微高地があることから確認調査が必要となり，２箇所を合わせて尾根の頂上部に長く１本のトレンチを設定し，そのトレンチに直交する形で傾斜のやや緩い所に４箇所のトレンチを設定し調査を行った。

調査日誌抄

11月11日　第24区伐採開始
11月17日　第24区地形測量及びトレンチ設定
12月14日　第24区第１層掘り下げ
　　21日　第24区第２層及び第３層掘り下げ
１月６日　第24区第４層掘り下げ
　　12日　第25・26区伐採開始
　　20日　第24区土層図完了
　　23日　第25・26区トレンチ設定
　　28日　第24区埋め戻し，第25・26区地形測量
２月２日　第25・26区第１層掘り下げ，ＮＨＫ取材
　　18日　第25・26区調査完了写真
　　23日　第25・26区埋め戻し
　　25日　第25・26区資材運搬・調査完了

Ⅲ　第　24　区

（Fig. 2・3）

第23区より尾根ひとつ隔てて南側に位置し，地形の自然面から考慮して標高２～３ｍの傾斜に並行して南北に長さ19.5m，幅２ｍの第１トレンチ，それに直交する形で一番自然面の残っている所で，第１トレンチ南端より北へ５ｍの所に長さ３ｍ，幅２ｍの第２トレンチを設定した。

第１トレンチは土層からみると北から南へ向かって緩かに傾斜し比高差は１ｍあり，岩盤も１ｍの比高差がある。第１層は黒褐色腐葉土層で10～15㎝程ある。第２層は第３層の中に部分的に落込んだにぶい黄褐色粘質礫混じり層である。第３層はオリーブ褐色砂質混じり小礫を含む粘土層であり，北半分における岩盤直上層である。第２トレンチより南はコンクリート建物跡によって攪乱されており，にぶい黄褐色粘質砂土大礫混じり層を切った形で黄褐色砂質粘土層，褐色砂質粘土層，明褐色砂質土層，明黄褐色粘土層が堆積している。

第２トレンチは第１層が約10㎝の腐葉土層である。第２層は調査区上の部分で厚く堆積しており，本来は開墾等によって平坦に削平された部分に堆積したとみえ，海に向かって傾斜している。第４層は第３層より途中から入れ代ってやや厚く堆積し，海に向かって急

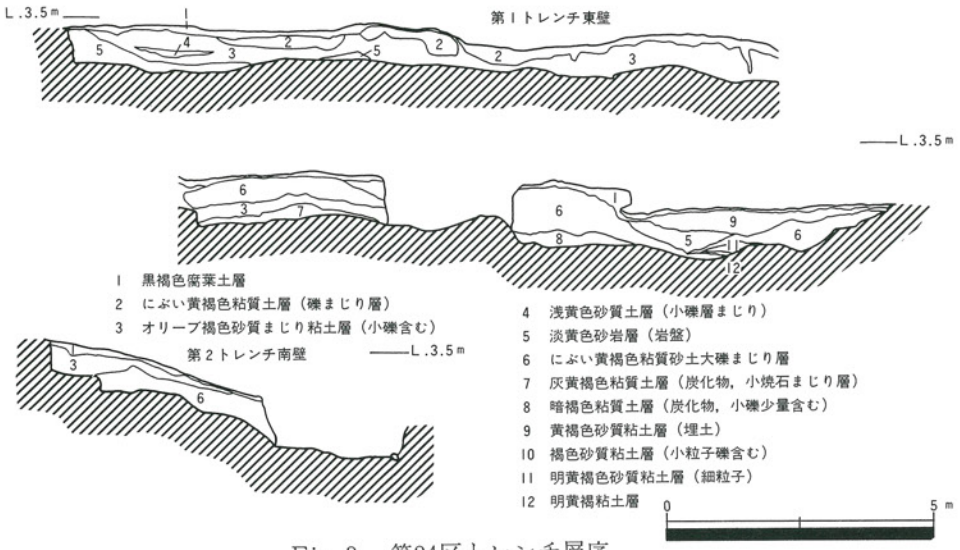


Fig. 3　第24区トレンチ層序

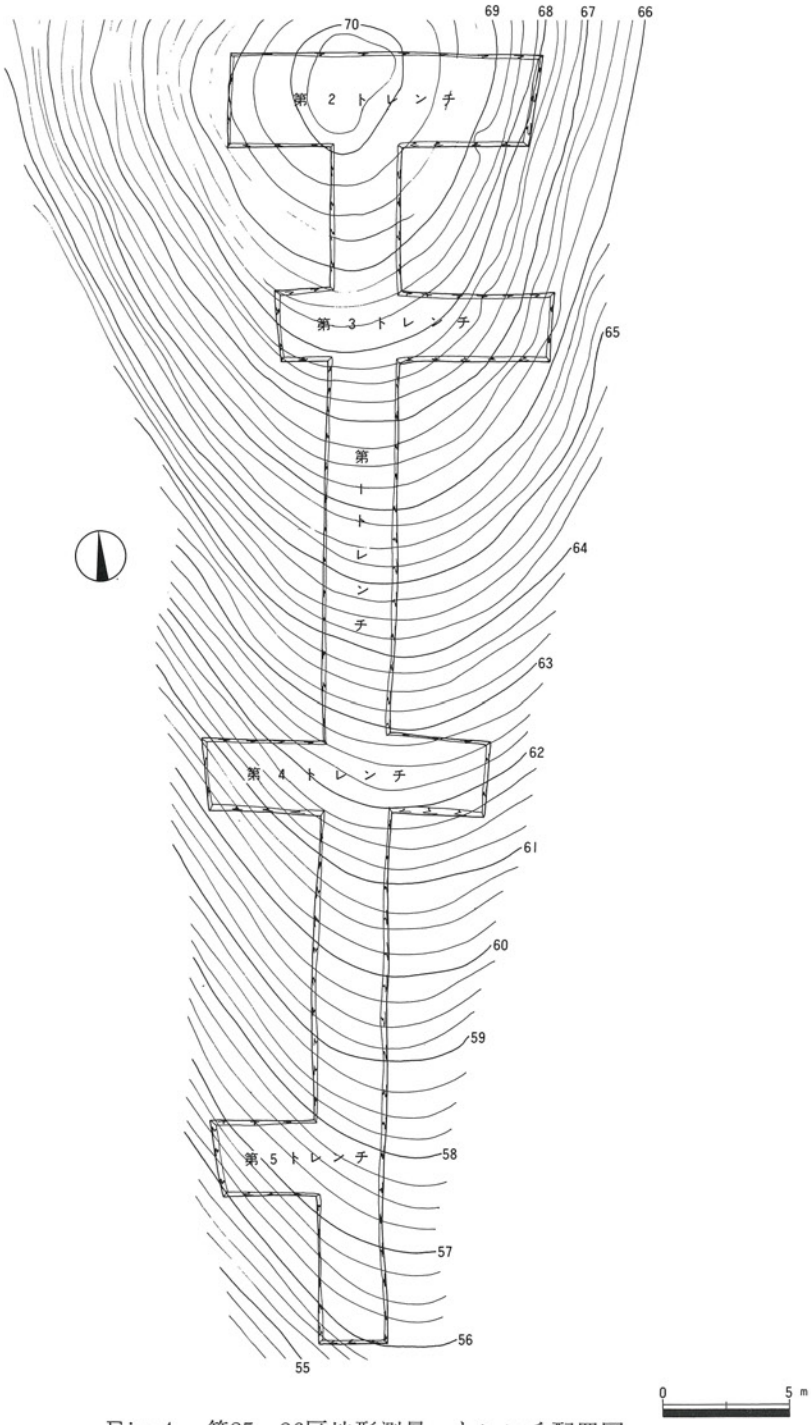


Fig. 4　第25・26区地形測量・トレンチ配置図

傾斜で下がっている。

以上，いずれのトレンチ調査でも遺構，遺物はみられず，トレンチ調査で発掘調査は終了した。

Ⅳ　第25・26区

（Fig. 4，ＰＬ．１）

本調査区は大毛島山系の南北に延びた狭い頂上の鞍部に位置し，標高70mを頂点に古墳状の高まりをもち，地表面に和泉砂岩の円礫が点在している25区と，そこよりやや傾斜をもって下がった標高63〜55mの部分が26区である。尾根のつながりからみて一緒に調査することとし，尾根の頂上部を長さ31m，幅２mの第１トレンチ，それに直交する形で北端に長さ12m，幅３mの第２トレンチ，南へ６m離れた所に長さ11m，幅２mの第３トレンチ，南へ15m離れた所に長さ11m，幅２mの第４トレンチ，南へ12m離れた所に長さ４m，幅2.5mの第５トレンチを設定し調査を行った。

第１トレンチ，第２トレンチとも約10㎝の腐葉土層の下はすぐ岩盤直上層となっており，遺構，遺物がみられなかったので土層図は省略し調査を終了した。

Ⅴ　ま　と　め

第24区は海岸沿いの僅かな平坦地であり，何らかの遺跡の所在が想定されたが，遺構，遺物はみられず，トレンチ調査で調査を終了した。

第25・26区は分布調査では古墳の可能性があるということで調査を実施したが，遺構，遺物はみられず，トレンチ調査で調査を終了した。

註

註１　徳島県文化財調査概報「鳴門架橋に係る道路建設に伴う埋蔵文化財精密分布調査報告書」’77年　徳島県教育委員会

第27・28区

本　文　目　次

Ⅰ　位置と環境
Ⅱ　調査の経過
Ⅲ　基本層序
Ⅳ　遺　　構
Ⅴ　遺　　物
Ⅵ　ま と め

挿　図　目　次

Fig. 1　第27・28区位置図
Fig. 2　第27区地形測量・トレンチ配置図
Fig. 3　第27区トレンチ層序（A－B）
Fig. 4　第28区地形測量・トレンチ配置図
Fig. 5　第28区トレンチ層序（A－B）
Fig. 6　第27区遺構配置図
Fig. 7　第27区土坑（SK－03）
Fig. 8　第27・28区出土遺物

図　版　目　次

PL. 1　第27区全景　第27区土坑
PL. 2　第28区調査前全景　第28区全景
PL. 3　第28区層序
PL. 4　第27・28区出土遺物

I　位置と環境

第27・28区は大毛島山系の中央部にあたる（Fig. 1）

第27区は標高58m前後の平坦な尾根上に，第28区は標高33m前後の尾根上に位置する。

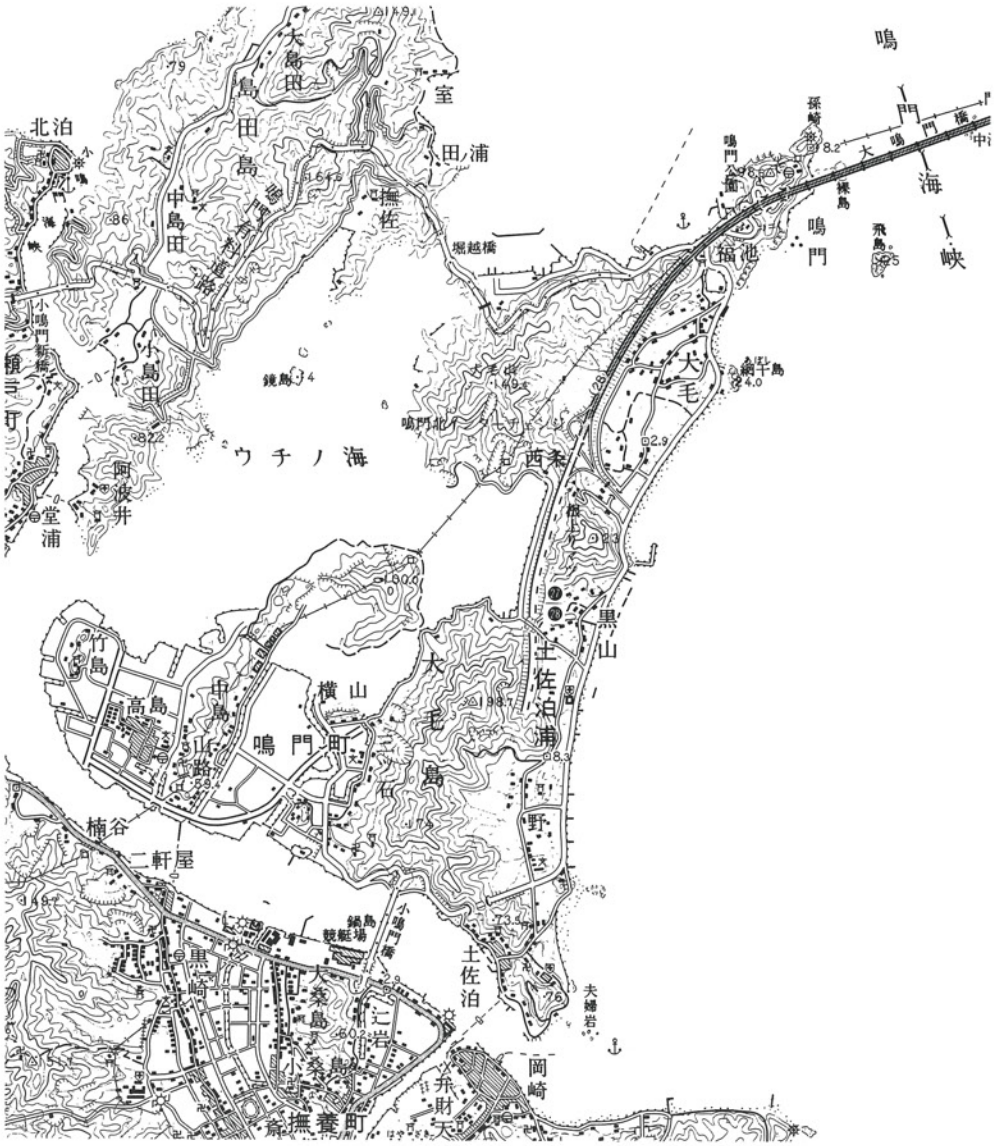


Fig. 1　第27・28区位置図

両当該調査区とも北に淡路島，東に紀伊水道，西にウチノ海が一望できる。いずれも地目は山林である。

Ⅱ　調査の経過

昭和52年度の鳴門架橋に係る道路建設に伴う埋蔵文化財精密分布調査（以下，分布調査とする）の成果に基づき，第27・28区においては昭和57年度に確認調査を行うこととなった。

調査期日は第27区では10月７日から11月24日，第28区では10月14日から12月10日であり，期間中の後半は第29・30区の調査とも同時併行で行った。

調査日誌抄

10月７日　第27区樹木伐採開始

10月14日　第28区樹木伐採開始

10月18日　第27区調査区設定及び地形測量開始

10月22日　第27区表土腐植土層中より弥生式土器出土

10月23日　第28区調査区設定及び地形測量開始

11月５日　第27区土坑検出　　第28区・第２，３層より石鏃出土

11月11日　第27区土坑掘り下げ

11月12日　第27区土坑写真撮影

11月19日　第27区遺構平面図及び土層図作成

11月24日　第27区確認調査終了

11月25日　第28区石鏃出土

12月６日　第28区土層図作成，砂岩を主とする和泉層群直上で焼土検出

12月10日　第28区確認調査終了

Ⅲ　基本層序

１．第　27　区（Fig. 2・3，ＰＬ．１）

当該調査区は東西にのびる平坦な尾根上に位置する。分布調査では石材の存在から遺跡の可能性があるとみられていたため，平坦部を中心に十字形にトレンチを設定し，必要に

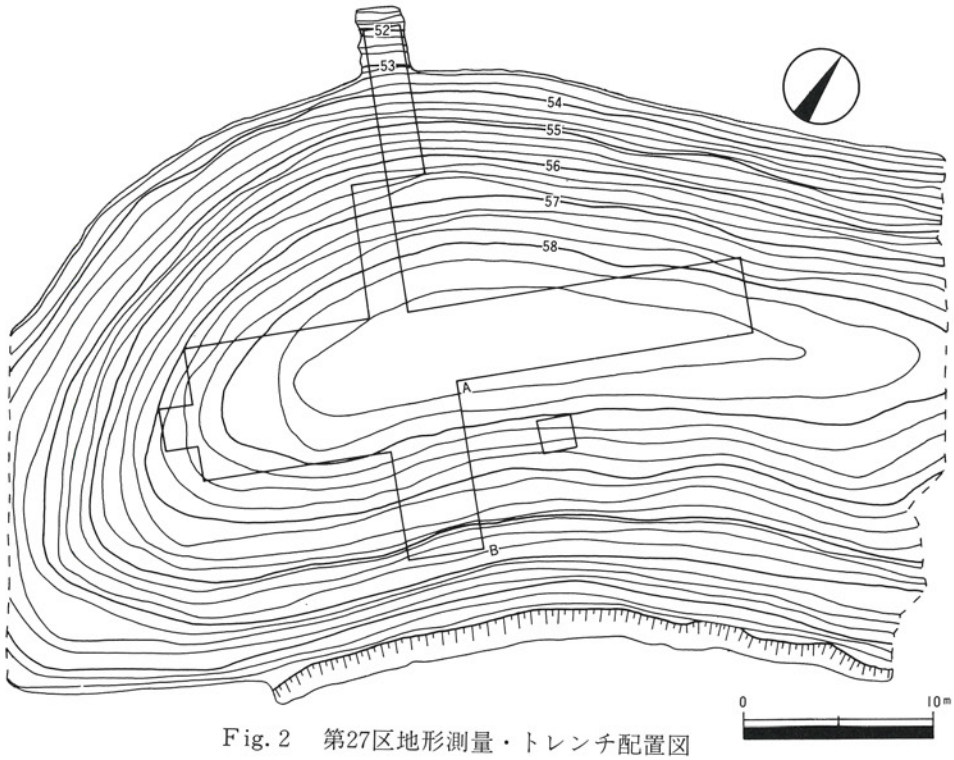


Fig. 2　第27区地形測量・トレンチ配置図

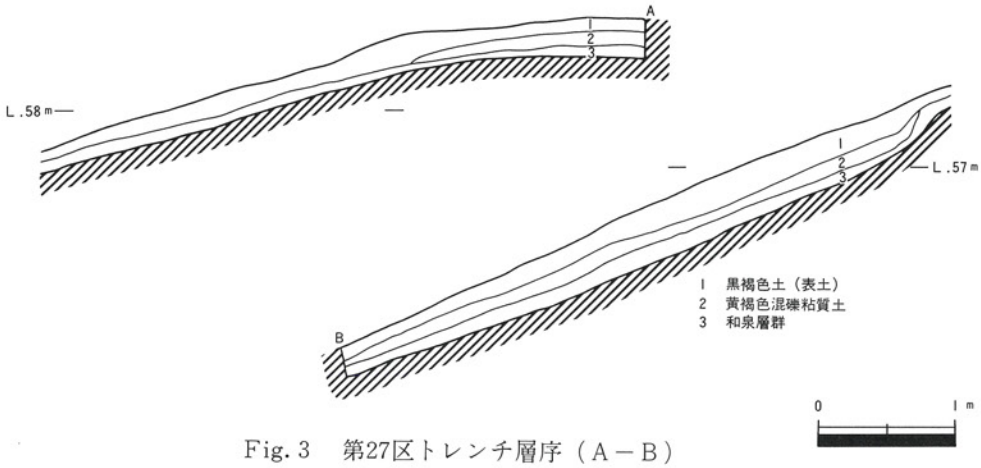


Fig. 3　第27区トレンチ層序（A－B）

応じて部分的にトレンチを拡張した。

砂岩を主とする和泉層群を基盤として，その上に黄褐色系粘質土層，表土腐植土層と続く。第２層黄褐色粘質土層上面には土坑，柱穴状遺構が構築されている。

2．第　28　区（Fig. 4・5，ＰＬ．２・３）

当該調査区は東西にのびる尾根上に位置する。分布調査では尾根上に小さく高まりがみられることから，遺跡の存在が指摘されていたため，ユ字状にトレンチを設定した。

砂岩を主とする和泉層群を基盤として，その上に黄褐色系粘質土層，表土腐植土層と続く。尾根上の表土層腐植土層直下の和泉層群岩盤上に焼土が数箇所検出されたが，明確な遺構及び遺構面としてはとらえられない。

Ⅳ　遺　　構

1．第　28　区

当該調査区では明確な遺構及び遺構面は検出されなかった。

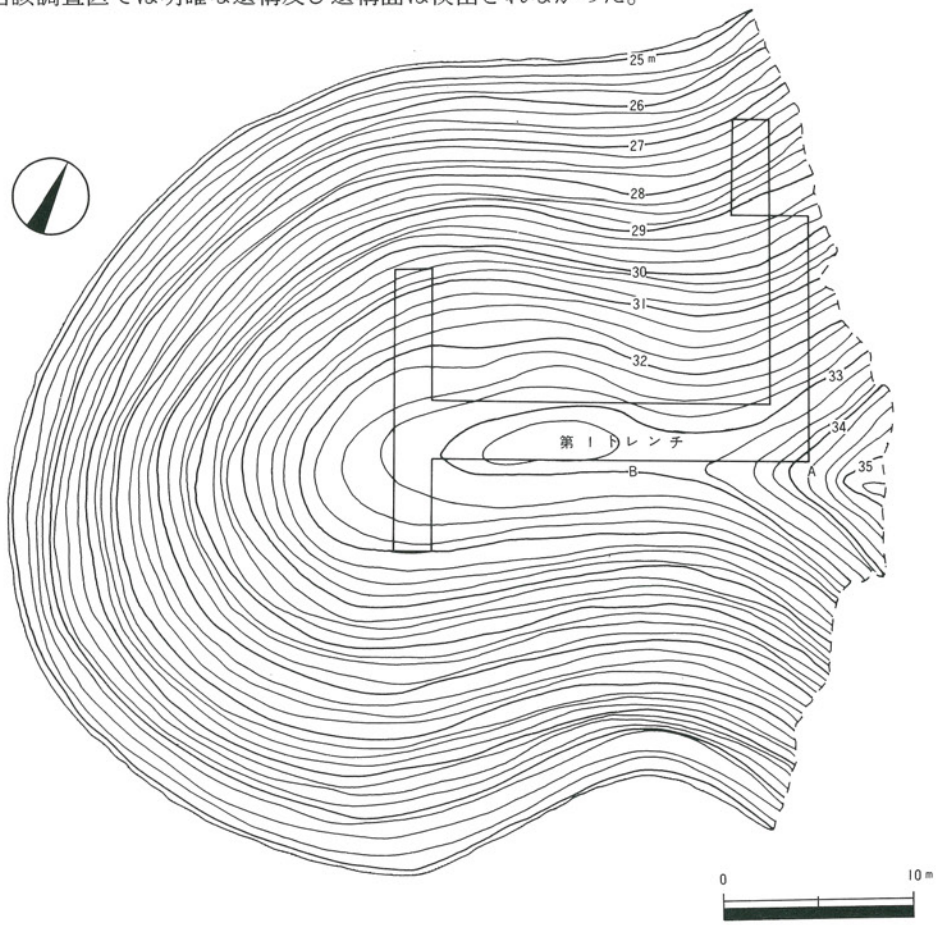


Fig. 4　第28区地形測量・トレンチ配置図

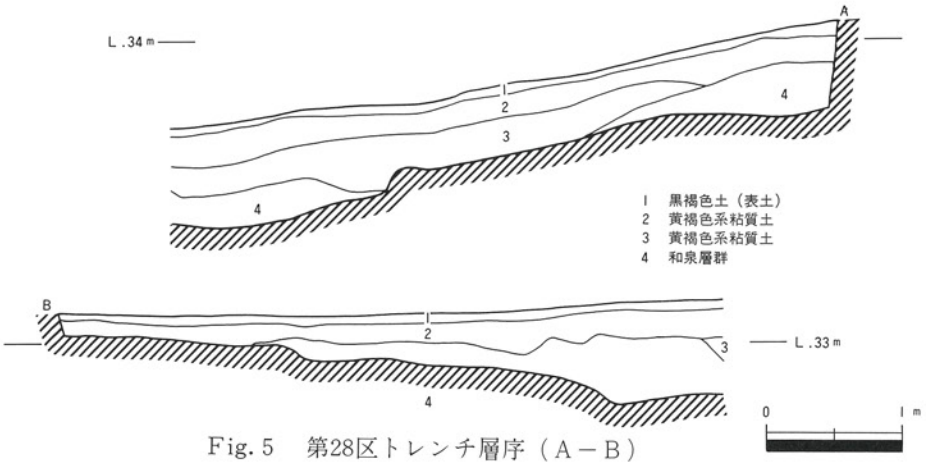


Fig. 5　第28区トレンチ層序（A－B）

2．第　27　区（Fig. 6・7）

第２層上面に遺構が構築されている。土坑９箇所，柱穴状遺構４箇所の13箇所の遺構が検出された。年代決定資料に乏しく構築時期については不明である。

(1)土坑

９箇所の土坑が検出された。いびつな形状をもつものが多く，埋積土は砂岩風化の黄褐色系の砂質土である。土坑の構築目的，機能については不明。

ＳＫ－01は長さ約203㎝，幅約83㎝の長方形状で，深さ約17㎝。

ＳＫ－02は長さ約160㎝，幅約96㎝の瓢箪形状で，深さ約11㎝。

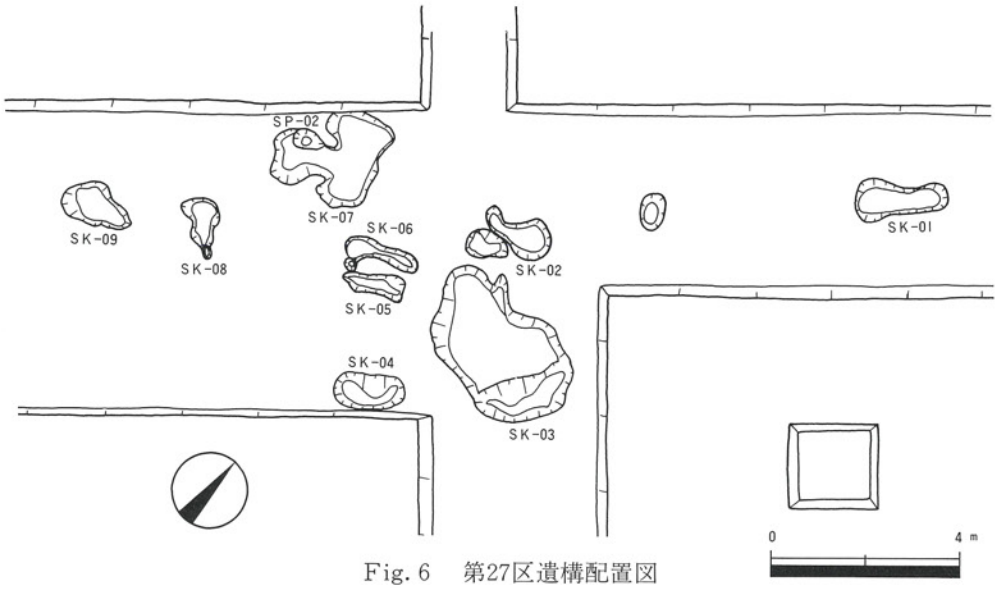


Fig. 6　第27区遺構配置図

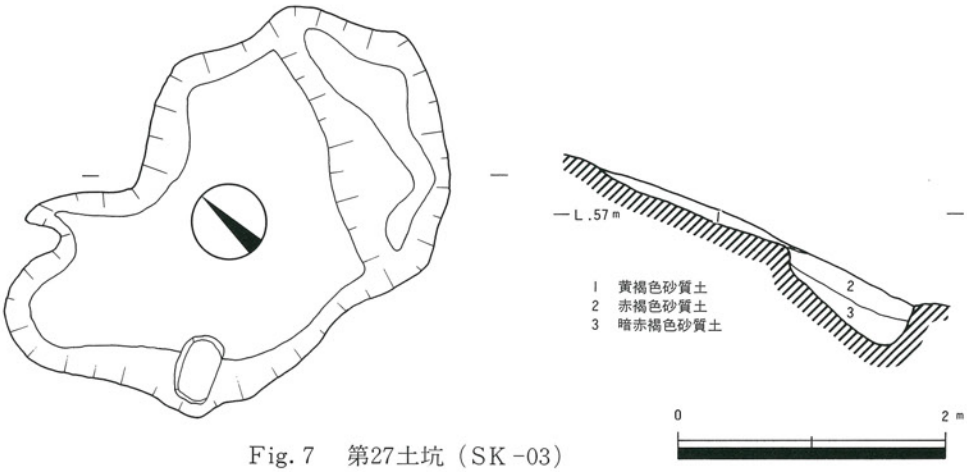


Fig. 7　第27土坑（SK-03）

ＳＫ－03は長さ約372cm，幅約227cmの不整楕円形状で，深さ約18cm。第１層から第３層に火熱を受けたとみられる，５cm以下の砂岩小礫が多量に含まれる。サヌカイト剝片が１点出土している。

ＳＫ－04は長さ約150cm，幅約78cmの楕円形状で，深さ約19cm。

ＳＫ－05は長さ約128cm，幅約45cmの長方形状で，深さ約15cm。

ＳＫ－06は長さ約166cm，幅約50cmの長楕円形状で，深さ約９cm。

ＳＫ－07は長さ約218cm，幅約218cmの瓢簞形状で，深さ約20cm。

ＳＫ－08は長さ約134cm，幅約78cmの瓢簞形状で，深さ約14cm。埋積土に焼土が認められる。

ＳＫ－09は長さ約150cm，幅約90cmの瓢簞形状で，深さ約16cm。埋積土に焼土が認められる。

(2)柱穴状遺構

柱穴状遺構は４箇所検出された。長径34～90cm，短径23～75cmの楕円形状で，深さは10cm内外と浅いが，ＳＰ－02は約33cmと深い。埋積土は砂岩風化土の黄褐色系砂質土である。

柱穴状遺構相互の関連は認められない。

V 遺　　物

遺物はきわめて少ない。両調査区の第１層表土層から近世陶磁器の小破片が出土している。他に第27区で弥生式土器，土師器，サヌカイト剥片，第28区で土師器，チャート，石鏃，砥石などがみられる。

１．土　器　類（Fig. 8，ＰＬ．４）

弥生式土器　第27区出土，土坑ＳＫ－03の北の第２層上面より出土した壺形土器の口頸部である。頸部は長く直立し口縁部は外反する。口縁端部を丸くおさめる。磨滅が著しく調整は不明であるが，頸部外面に指頭圧痕がみられる。口径約9.8㎝。

２．石　器　類（Fig. 8，ＰＬ．４）

石鏃　第28区から３点の石鏃が出土している。石材はサヌカイト。２は第３層暗褐色粘質土層中より出土した凹基の石鏃である。入念な整形剥離が施されシャープな作りである。

完形品で長さ約23㎜，最大幅約17㎜，最大厚約3.5㎜，主さ約0.65ｇ。３は第４層にぶ

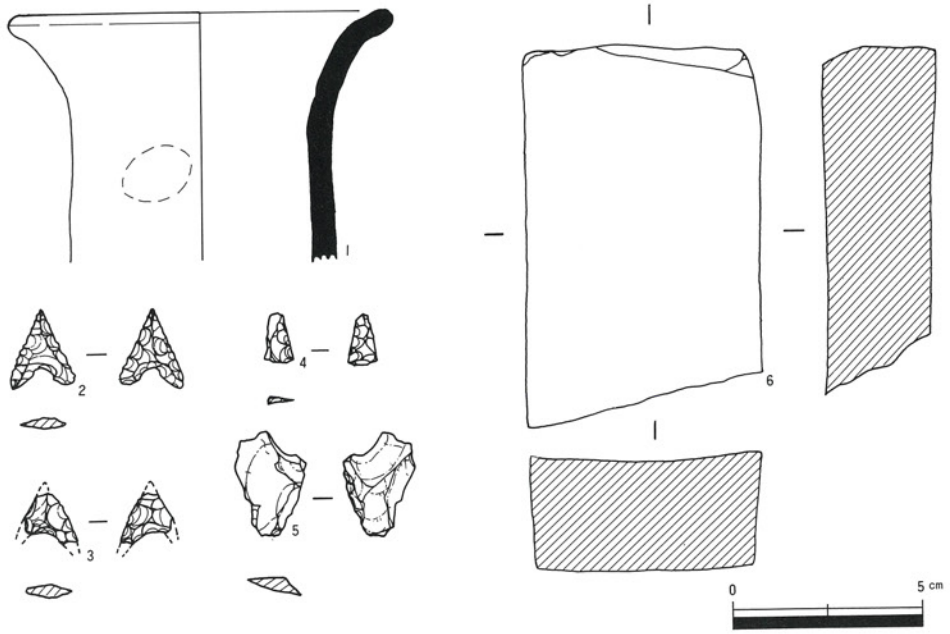


Fig. 8　第27・28区出土遺物

い黄褐色粘質土層中より出土した凹基の石鏃である。入念な整形剥離が施されている。尖端部と基部が欠失している。最大厚約３㎜，現存重量約0.４ｇ。４は第４層にぶい黄褐色粘質土層中より出土した尖端部を遺存する石鏃である。整形剥離は粗い。

剥片　第27区土坑ＳＫ－03出土のサヌカイト剥片である。主要剥離面の剥離方向は長軸に直交し，横長状の形態をとる。背面には先行する剥離面が３枚認められる。

砥石　第28区第１層表土層中より出土した砥石である。形状は長方体。約半分を欠失する。砥面は上下左右の４面であるが，特に上下の２面に顕著な使用痕が認められる。全体に小孔が無数に認められるが，きめが細かく仕上砥とみられる。石材の名称は不明。

Ⅵ　ま　と　め

第27区では尾根に石材があることから遺跡の可能性があるとみられていたが，明確な年代を提示しえない土坑，柱穴状遺構を検出したにとどまる。弥生式土器，サヌカイト剥片が出土しているが，遺構に伴う遺物とは断定し難い。

第28区では尾根上に高まりがあるとみられていたが，石鏃と砥石が出土したにすぎなく遺構は検出されなかった。このように第27区では年代，用途とも不詳の遺構が検出されたが，良好な遺物包含層・遺構面はみられない。

第　29　区

本 文 目 次

Ⅰ　位置と環境
Ⅱ　調査の経過
Ⅲ　基本層序
Ⅳ　遺　　物
Ⅴ　ま と め

挿 図 目 次

Fig. 1　第29区位置図
Fig. 2　第29区地形測量・トレンチ配置図
Fig. 3　第29区トレンチ層序
Fig. 4　第29区礫層上部実測図
Fig. 5　第29区出土遺物(1)
Fig. 6　第29区出土遺物(2)
Fig. 7　第29区出土遺物(3)

表　目　次

Tab. 1　第29区出土土器類観察表
Tab. 2　第29区出土石器類計測表

図 版 目 次

ＰＬ．１　第29区全景（完掘状況）　第29区層序（東壁）
ＰＬ．２　第29区礫層検出状況　第29区弥生式土器出土状況
ＰＬ．３　第29区出土遺物(1)
ＰＬ．４　第29区出土遺物(2)
ＰＬ．５　第29区出土遺物(3)

Ⅰ　位置と環境

（Fig. 1）

第29区は大毛島山系中央部の東斜面にあたる（鳴門市鳴門町土佐泊浦字黒山）。

大毛島東海岸から深く入り込んだ地点であり，切り通しを越えた北西にはウチノ海が広がる。南は紀伊水道に面しているが，北後背地は急傾斜の大毛島山系であり，眺望はよくない。地目は荒地である。

Ⅱ　調査の経過

昭和52年度の鳴門架橋に係る道路建設に伴う埋蔵文化財精密分布調査（以下，分布調査とする）の成果に基づき，第29区においては昭和57年度に確認調査を行うこととなった。

調査期日は11月11日から，翌年３月23日である。第27・28・30・31区の調査とも同時併行で行った。

調査日誌抄

11月11日　調査区設定，掘り下げ開始

12日　石鏃，陶磁器出土

20日　多量の円礫検出

22日　砂層中より弥生式土器出土

24日　土層図作成

12月13日　円礫平面図作成

27日　円礫除去

１月７日　平面図作成

27日　土層図作成，写真撮影

３月23日　確認調査終了

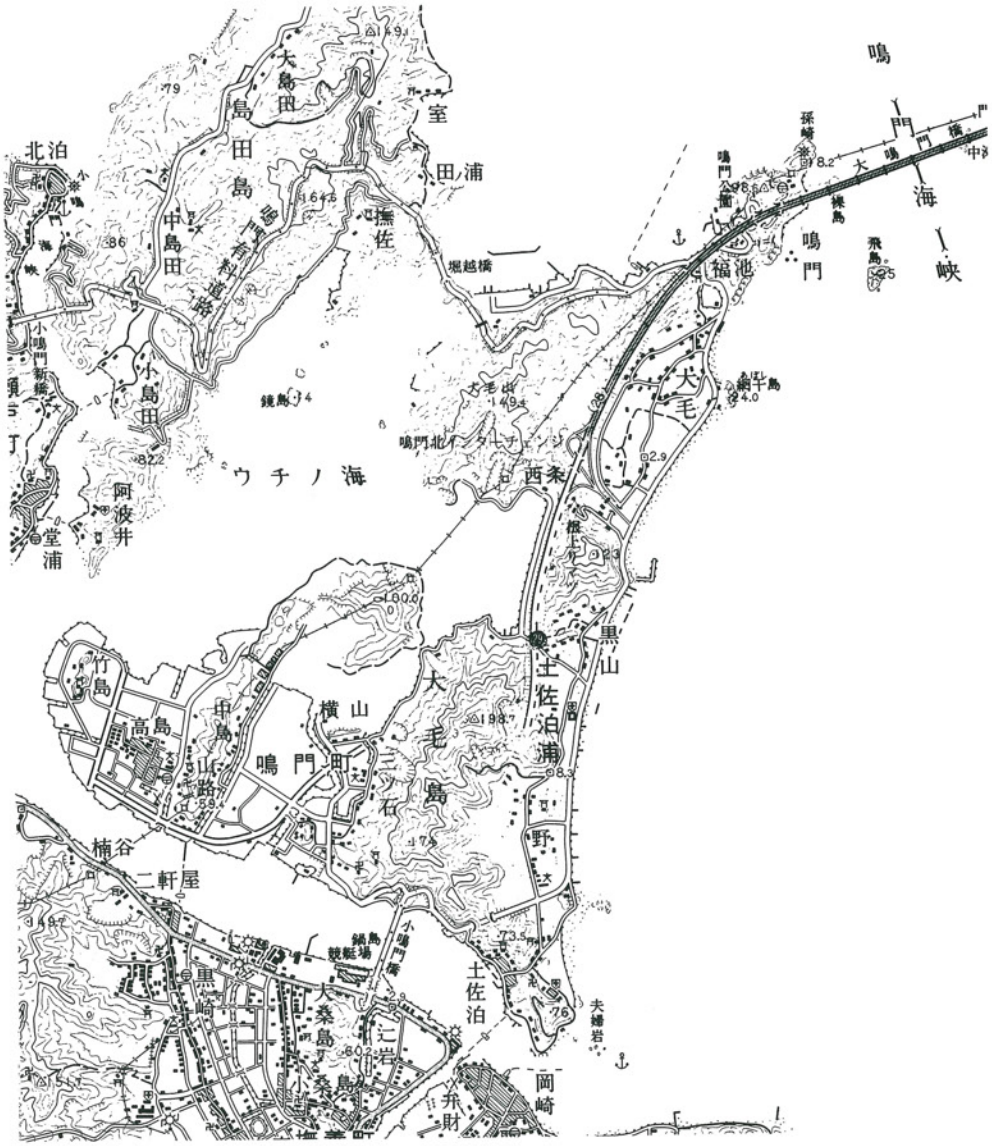


Fig. 1　第29区位置図

Ⅲ 基本層序

（Fig. 2～4，ＰＬ．１・２）

当該調査区は大毛島山系の内懐にいだかれた緩傾斜地にあたる。分布調査では微高地があるため，遺跡の可能性が高いとみられていた。地形的にみてもとは段々畑とみられるため，平坦地に方形トレンチを設定し，必要に応じて部分的にトレンチを拡張した。

東セクションでは32層に分層されるが，基本層序は砂岩を主とする和泉層群を基盤として，礫層，粘質土と砂質土との互層，表土旧耕作土層と続く。土層の構成から大毛島山系からの流れ込みと海砂の吹きつけとみられ，そこには安定した遺構及び遺構面は検出されなかった。礫層中にサヌカイト剥片が検出されたが，流れ込みとみられる。

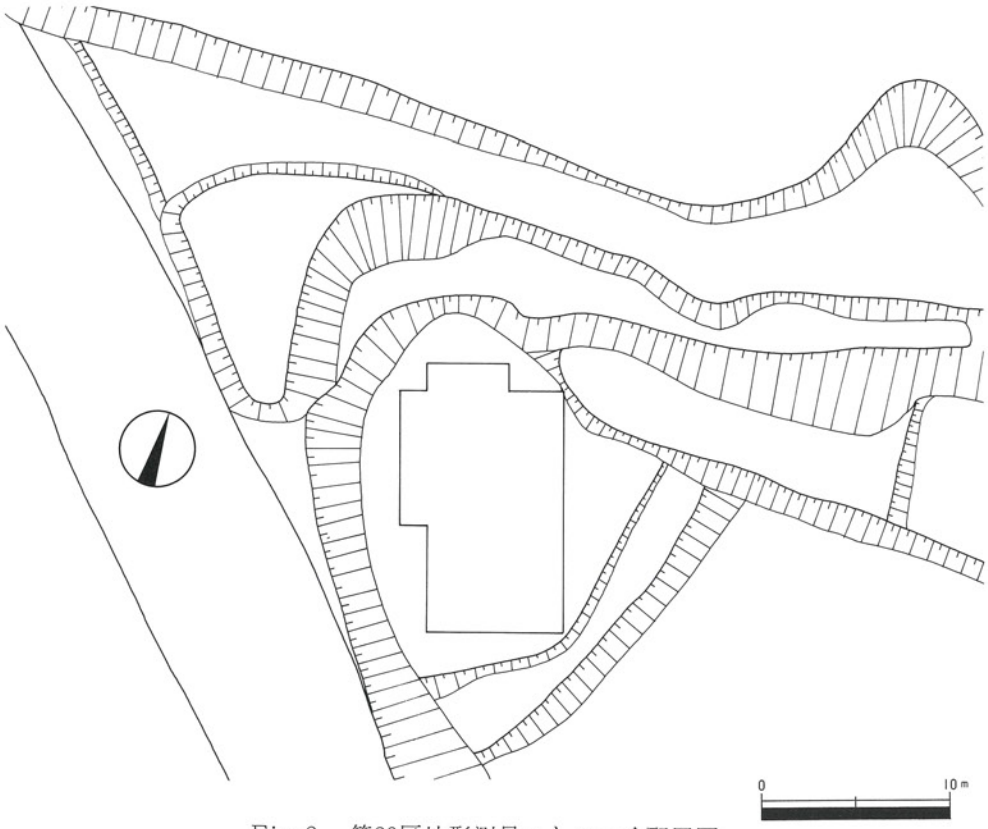


Fig. 2　第29区地形測量・トレンチ配置図

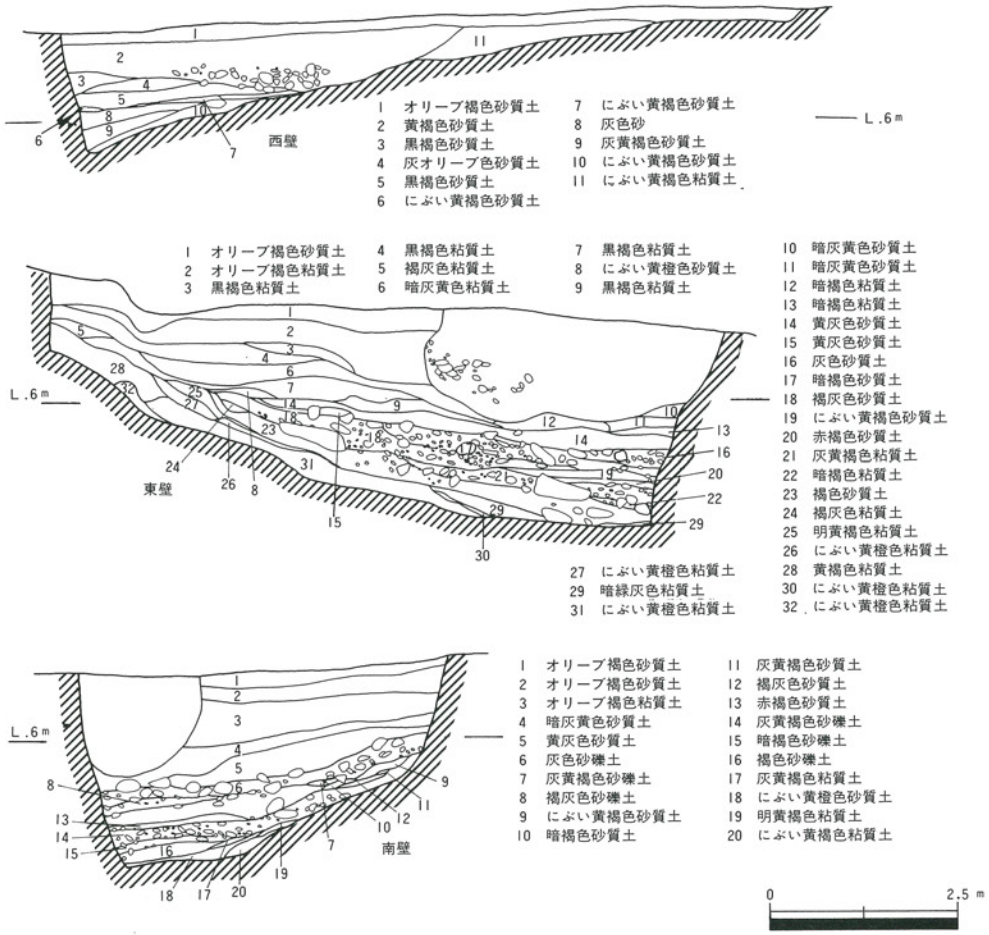


Fig. 3　第29区トレンチ層序

Fig. 4　第29区礫層上部実測図

Ⅳ 遺　　物

（Fig. 5～7，Tab. 1・2，PL. 3～5）

第1層旧耕作土層から礫層上部までの間に弥生式土器，陶磁器，石鏃，サヌカイト剥片などが散在している。礫層からはサヌカイト剥片が1点出土したにすぎない。

1．土　器　類

弥生式土器　　弥生式土器は6個体出土しているが，すべて弥生時代後期に比定される甕形土器である。近世陶磁器と混在して旧耕作土直下から出土しており，しかも磨滅が著しいため流れ込みとみられる。

1はく字状口縁部とする。口縁部下端を僅かにつまみだす。体部には右上がりの叩きを施した後，縦方向に刷毛目調整を加える。口縁部内外は横撫で調整。内面は横方向のへら削り。胎土は粗く多くの砂粒を含む。色調は淡橙色。2は体部上位を遺存する。体部に叩きを施した後、縦方向に刷毛目調整を加える。内面は指押えの後，不整方向に刷毛目調整。胎土は密。焼成良好，堅緻。色調は淡橙黄色。3は底部を遺存する。平底。内外面に指押えがみられる。胎土はやや粗く細砂粒をふくむ。焼成良好，堅緻。色調は淡橙褐色。

須恵器　　4は須恵器の底部である。やや外に開く断面方形の小さく低い高台を貼り付ける。高台裏に指紋とみられる痕跡がある。胎土はやや粗く，砂粒を含む。焼成良好。色調は暗青灰色。

碗　　5～10は染付磁器の碗である。5は暦文を染付ける広東碗。6は見込みを蛇ノ目釉剥ぎとし，五弁花を染付ける。7，8は端反りする碗である。

猪口　　11，12は染付磁器の猪口である。11は丸文の中に釣人図を染付ける。12は紐文を染付け，茶褐色の口銹を施す。愛知県かみた窯製とみられる。

蓋　　13は染付磁器の山蓋。鶴飛翔図と稲束図とみられる染付を施す。

燈明皿　　14は施釉陶器の油受皿。見込みに断面三角形状の突帯をめぐらし，1箇所に半月形切込みを入れる。

鍋・土釜　　15は施釉陶器の鍋。片口とみられる。16，17は土師質土器の土鍋。煤付着。18は瓦質土器の土釜。外面が乳黄白であるのに対し，内面を漆黒色とする。

他に帆船航海図を染付ける皿があるが，これは第31区出土資料と同一個体である。

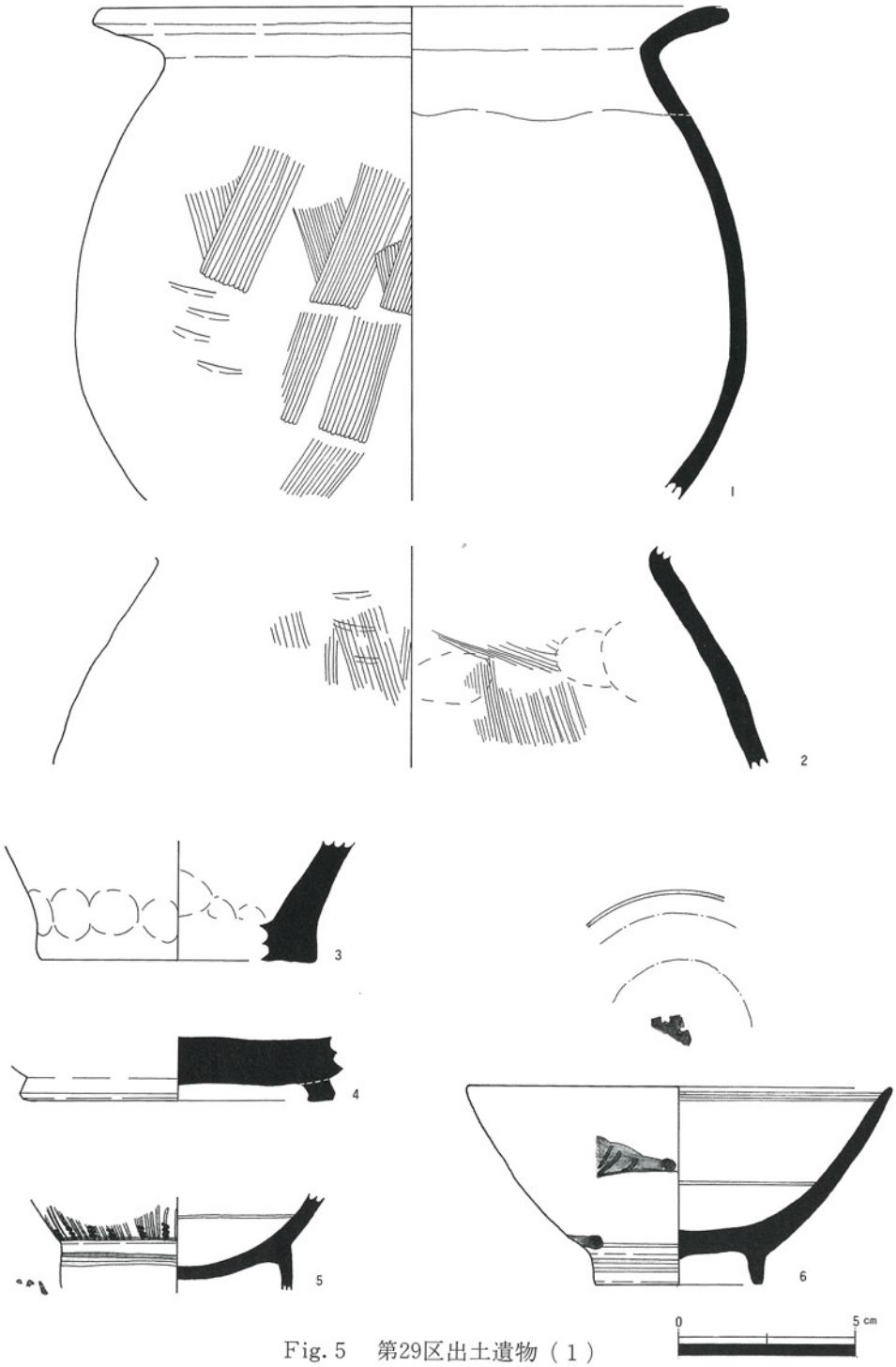


Fig. 5　第29区出土遺物（1）

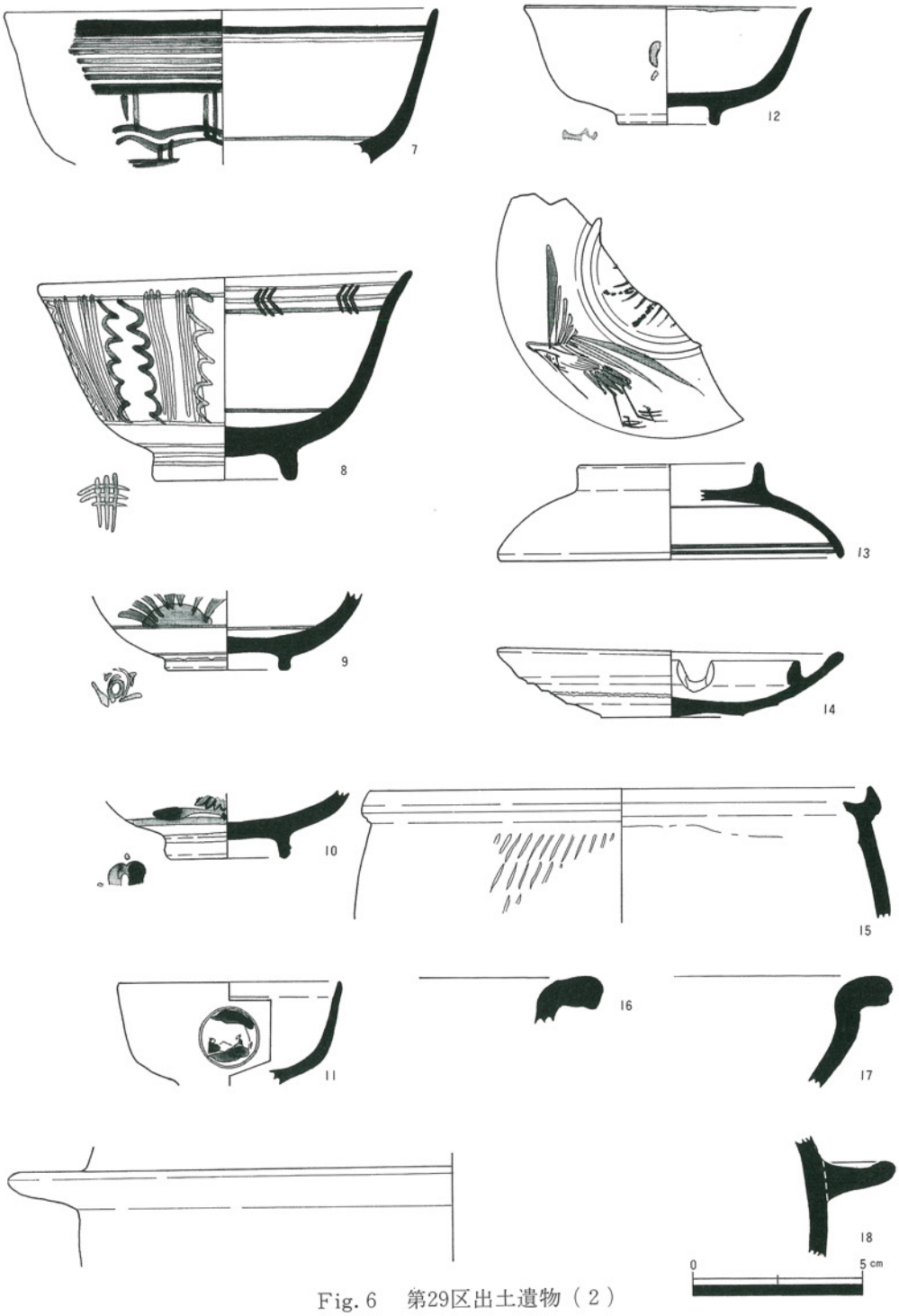


Fig. 6　第29区出土遺物（２）

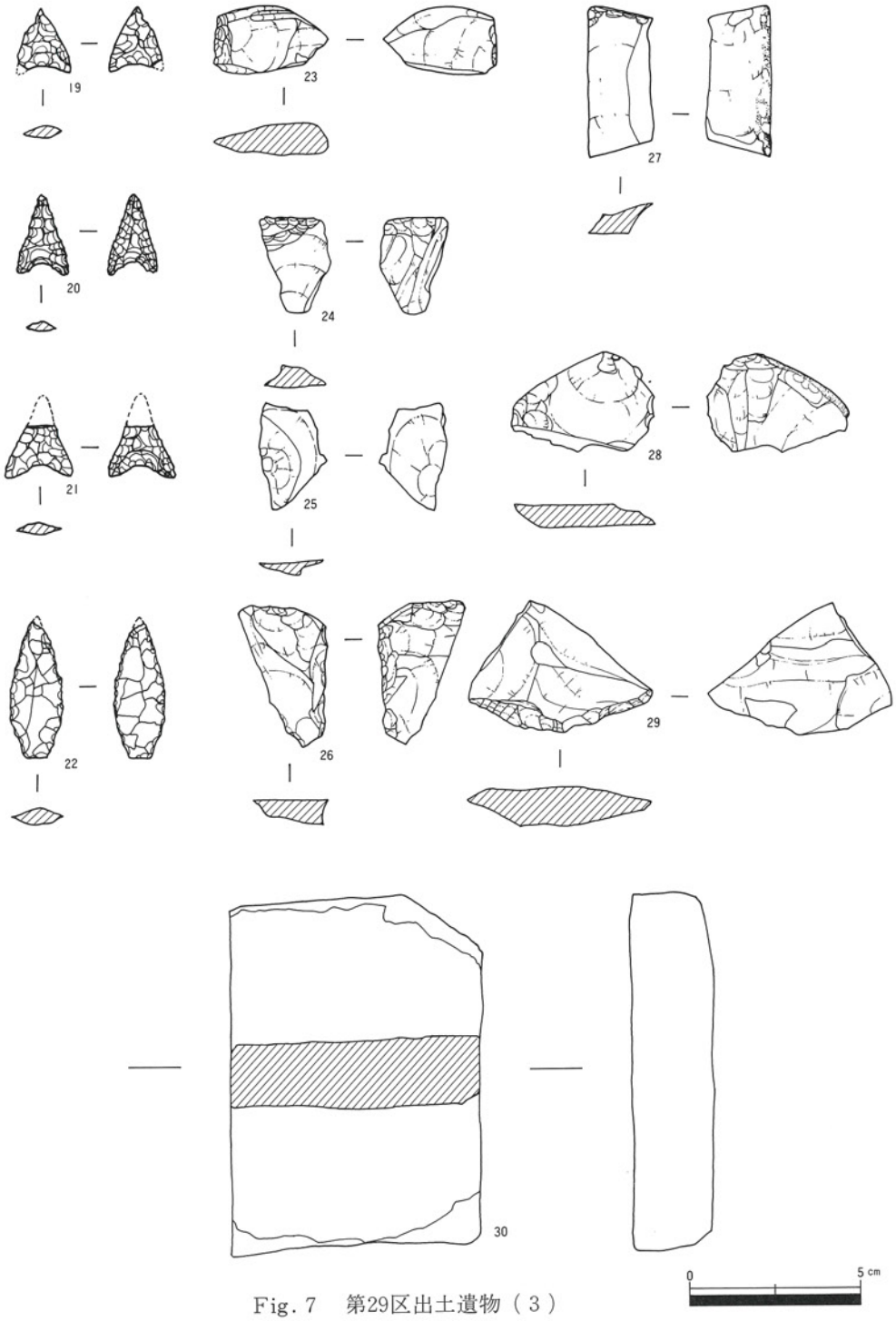


Fig. 7　第29区出土遺物（3）

2．石　器　類

第２・３層，礫層中から，サヌカイトの石鏃と剥片が11点出土している。19〜21は凹基の石鏃である。20，21には入念な整形剥離が施されている。22は凸基の石鏃。尖端と基部を欠失するが，大きく重量のある製品である。23〜29は剥片。契形石器あるいは掻器とみられる剥片もあるが不明。28は礫層中から出土している。

3．砥　　石

30は粘板岩系石材の砥石。扁平な長方体。淡黄灰色。砥面は上下の二面とみられるが，使用痕は認められない。約半分を欠失。第２層出土。

Ⅴ　ま　と　め

緩傾斜地に平坦部及び微高地があることから，遺跡の可能性が高いとみられていたが，遺構及び遺構面は検出されなかった。礫層までの上層では近世の陶磁器と砥石に混在する形で石鏃，剥片と共に弥生時代後期の甕が出土している。礫層中からは剥片が１点出土しているにすぎない。そのため，上層は大毛島山系からの流れ込み，海砂の吹き溜まり，あるいは施入土，礫層は大毛島山系からの流れ込みとみられる。

このように，良好な遺物包含層，遺構面は確認されていない。

Tab. 1　第29区出土土器類観察表

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
1	弥生式土器	甕	内面；ヘラケズリ 外面；タタキ，ハケ目調整 口縁部内外面；ヨコナデ	口径 17.4	胎土；淡橙色，粗い 焼成良好 砂粒を多く含む
2	弥生式土器	甕	内面；指押え，ハケ目調整 外面；タタキ，ハケ目調整		胎土；淡橙黄色，密 焼成良好，堅緻
3	弥生式土器		内外面指押え	底径 7.6	胎土；淡橙褐色，やや粗い，焼成良好 堅緻
4	須恵器		貼り付け高台	高台径 8.0 高台高 0.6	胎土；暗青灰色，やや粗い，焼成良好
5	磁器	碗	暦文		広東碗，19C初 胎土；乳白色 釉；淡水色系，半透明
6	磁器	碗	見込蛇ノ目釉ハギ 見込中央；五弁花 体部；松図	口径 11.9 器高 5.6 高台径 4.6 高台高 0.9	19C前半 胎土；乳白色 釉；淡水色系，半透明
7	磁器	碗	亀甲様文	口径 12.5	19C　胎土；乳白色 釉；淡水色系，半透明
8	磁器	碗	体部；よろけ縞文 見込中央，口縁部内面；直線文	口径 10.8 器高 5.9 高台径 4.0 高台高 0.8	19C 胎土；乳白色 釉；淡水色系，半透明
9	磁器	碗	体部；草図 見込；文様有り	高台径 3.5 高台高 0.4	胎土；乳白色 釉；淡水色系，半透明 畳付無釉
10	磁器	碗	体部；草図 見込；文様有り	高台径 3.4 高台高 0.6	胎土；乳白色 釉；淡水色系，半透明 畳付無釉
11	磁器	猪口	体部；釣人図 口縁部内側無釉	口径 6.5	胎土；乳白色 釉；内側，白色系，半透明，外側，淡水色系，半透明
12	磁器	猪口	体部；紐文	口径 8.4 器高 3.5 高台径 2.9 高台高 0.3	19C前半，畳付無釉 愛知県かみた窯 胎土；乳白色 釉；白色系，半透明

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
13	磁器	蓋	外面；鶴飛翔図 つまみ内部；稲束図？	口径 10.0 器高 2.8 つまみ径 5.2 つまみ高 0.8	19C前半，山蓋 胎土；乳白色 釉；淡水色系，半透明
14	陶器	燈明皿	体部；ロクロ目 外面に重ね焼の痕跡	口径 10.0 器高 1.9 底径 4.1	油受皿 胎土；淡黄褐色 釉；赤褐色
15	陶器	鍋	体部；陰刻櫛歯状文	口径 14.6	胎土；淡灰色 釉；内面 淡黄緑色 外面 赤褐色
16	土師質土器	土鍋			胎土；淡橙褐色 煤付着
17	土師質土器	土鍋			胎土；淡黄褐色 煤付着
18	瓦質土器	土釜		鍔径 26.0	胎土；内側 漆黒色 外側 乳黄白色

Tab. 2　第29区出土石器類計測表

番号	種類	形態	石材	出土層位	重量(g)	長さ(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	備考
19	石鏃	凹基	サヌカイト	第2層	0.7	19	15	3.5	欠損
20	石鏃	凹基	サヌカイト	第2層	0.8	24.5	15	3	欠損
21	石鏃	凹基	サヌカイト	第2層	0.8	16	19	4	欠損
22	石鏃	凸基	サヌカイト		3.1	39	15	5	欠損
23	剥片		サヌカイト		6.5	33	20	9	契形石器？
24	剥片		サヌカイト	第2層	3.2	28	20	7	契形石器？
25	剥片		サヌカイト		1.8	31	20	4	
26	剥片		サヌカイト		7.5	41	26	7	契形石器？
27	剥片		サヌカイト	第3層	8.1	44	19	9	
28	剥片		サヌカイト	礫層	10.2	42	29	7	契形石器？
29	剥片		サヌカイト	表採	19.0	53	38	11	掻器？

第　30　区

本 文 目 次

Ⅰ　位置と環境
Ⅱ　調査の経過
Ⅲ　基本層序
Ⅳ　遺　　物
Ⅴ　ま と め

挿 図 目 次

Fig. 1　　第30区位置図
Fig. 2　　第30区地形測量・トレンチ配置図
Fig. 3　　第30区トレンチ層序
Fig. 4　　第30区出土遺物

表　目　次

Tab. 1　　第30区石器類計測表

図 版 目 次

ＰＬ．1　　第30区全景　　第30区層序
ＰＬ．2　　第30区出土遺物

Ⅰ　位置と環境

（Fig. 1，ＰＬ．1）

第30区は大毛島山系中央部の尾根上にあたる（鳴門市鳴門町土佐泊浦字大谷）。第28区に続く標高35～36mの尾根であるが，切り通しによって分断されている。大毛島東海岸から西へ大きく入り込んだ地点である。東には紀伊水道，西にはウチノ海を望むことができる。

Ⅱ　調査の経過

昭和52年度の鳴門架橋に係る道路建設に伴う埋蔵文化財精密分布調査（以下，分布調査とする）の成果に基づき，第30区においては昭和57年度に確認調査を行うこととなった。

調査期日は11月18日から翌年３月23日である。第27・28・29・31区の調査とも同時併行で行った。

調査日誌抄

11月18日　地形測量開始，調査区設定

　　28日　石鏃出土

12月20日　石鏃・サヌカイト出土

１月７日　全景写真撮影

　　12日　土層図作成

３月23日　調査終了

Ⅲ　基本層序

（Fig. 2・3，ＰＬ．1）

当該区は大毛島山系の尾根上にあたる。分布調査では尾根の頂上に微高地があるため，遺跡の可能性が高いとみられていた。そのため，尾根の頂上から尾根に沿って１本のトレ

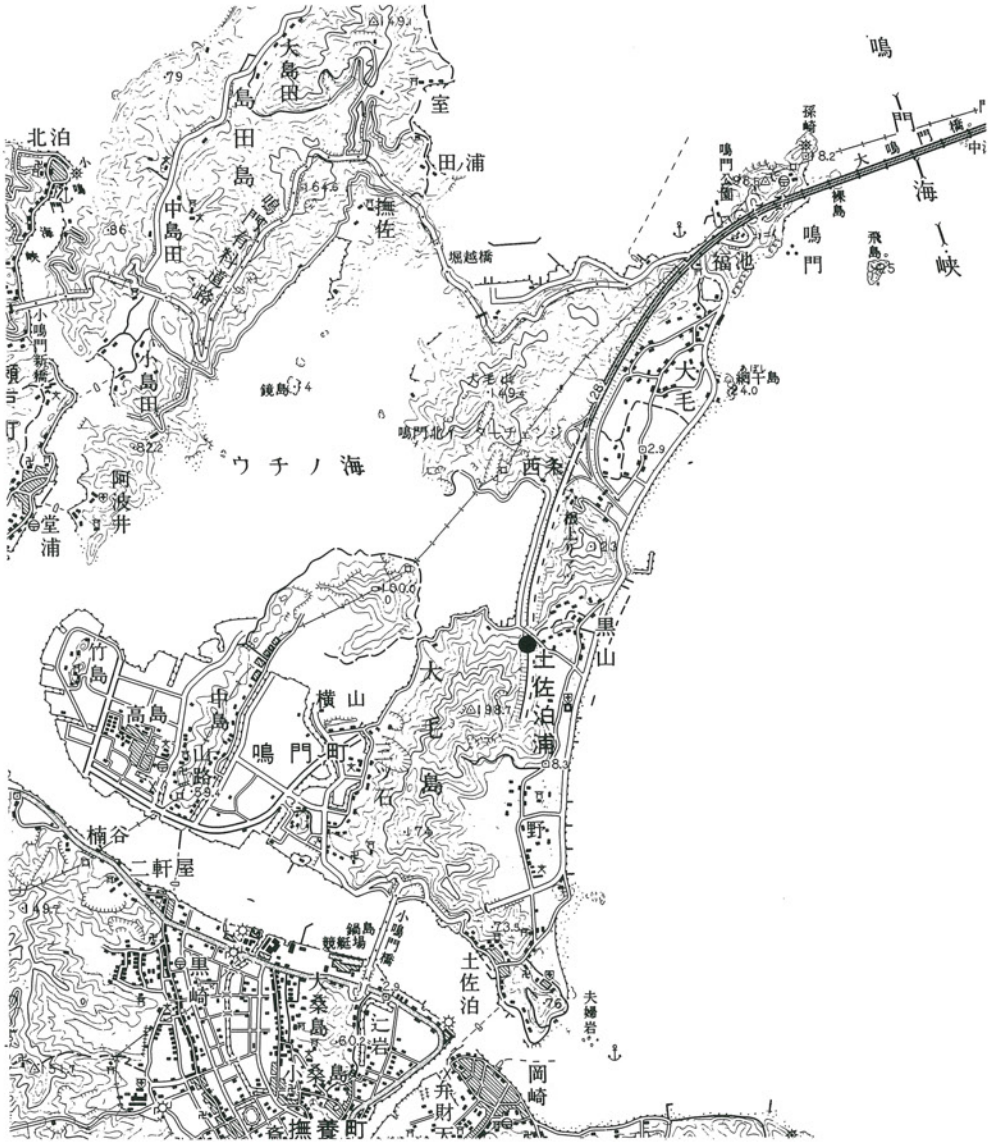


Fig. 1　第30区位置図

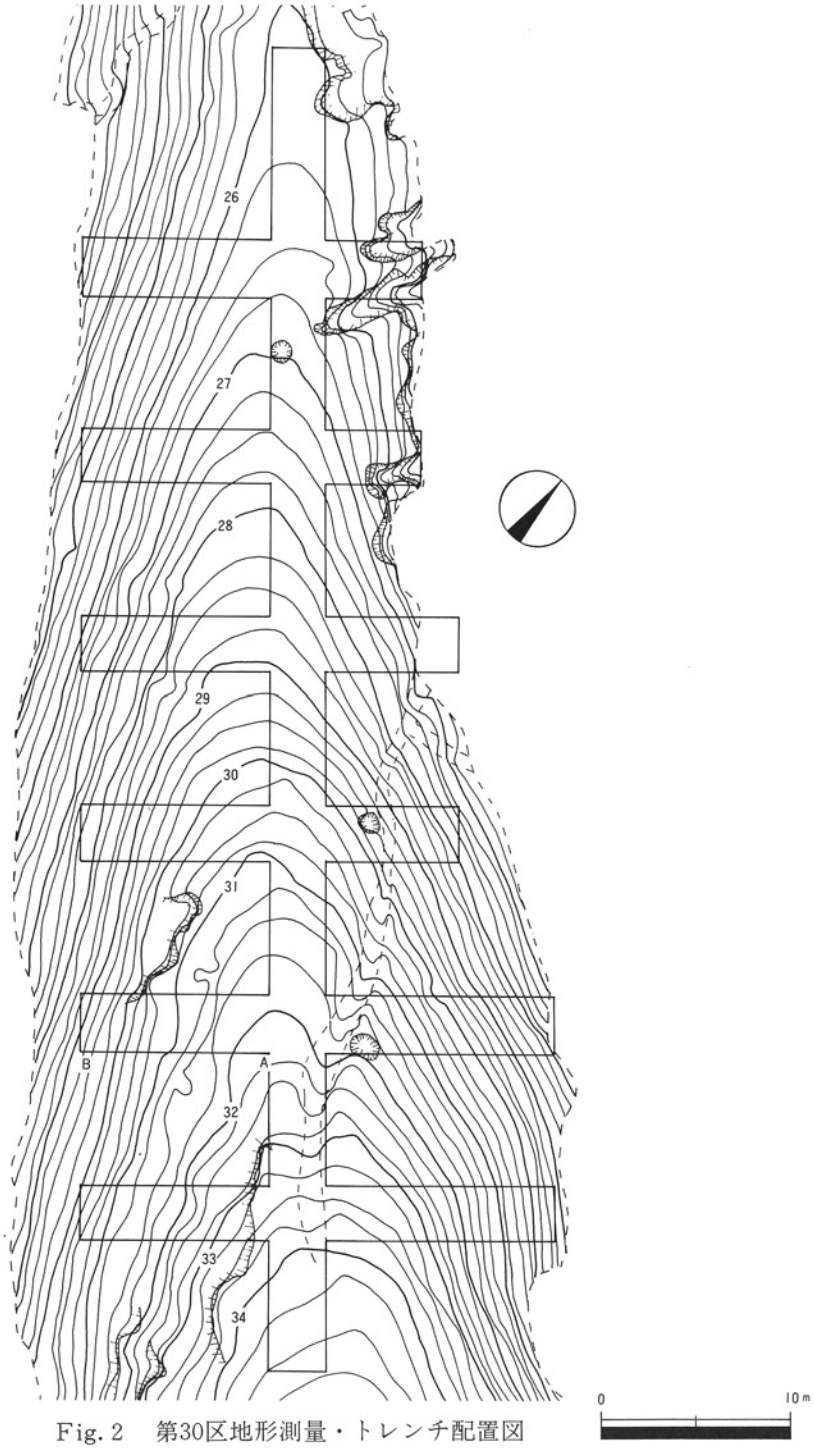


Fig. 2　第30区地形測量・トレンチ配置図

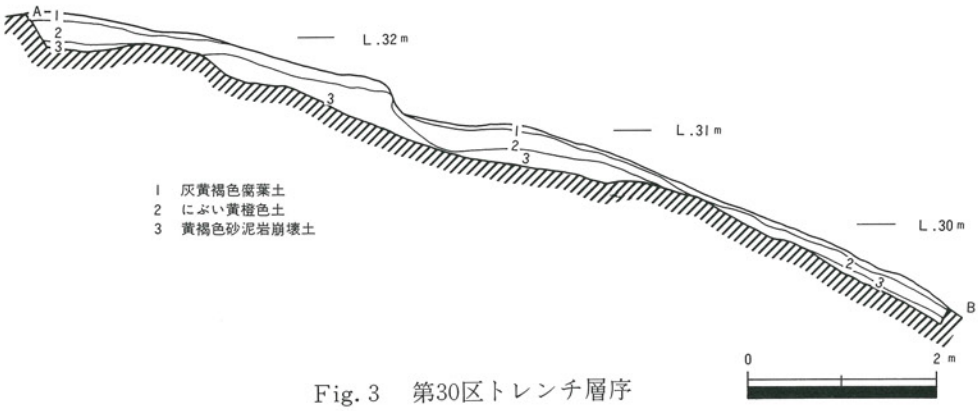


Fig. 3　第30区トレンチ層序

ンチを入れ，また必要に応じてそれに直交する形でのトレンチを設定した。

基本層序は砂岩を主とする和泉層群を基盤に，黄褐色系の風化土および腐植土が堆積し3層に分けられる。第1層表土層から近世の小柄とともに石鏃，第2・3層からは石鏃，サヌカイト剥片が出土しているが，明確な遺物包含層とはなり得ず，遺構および遺構面は検出されなかった。

Ⅳ　遺　　物

（Fig. 4，ＰＬ．2）

出土遺物はきわめて少ない。第1層表土層から小柄1点，石鏃3点，第2層から石鏃1点，第3層からサヌカイト剥片が4点の計9点にすぎない。

1．小　　柄

1は小柄である。鉄製の刃部はほとんどが欠失し，銅製の柄の部分を遺存する。現存長約10.6cm，表土第1層出土。柄は1枚の銅板を巻いて貼り合せ中空とする。文様などはみられない。長さ約9.6cm，最大幅約1.2cm，棟側の厚さ約0.4cm，刃側の厚さ約0.1cm。

断面は丸味のある三角形状。緑青が出ている。第21区出土資料に較べてやや小さい。

2．石　器　類（Tab. 1）

サヌカイトの石鏃と剥片が8点出土している。2～4は凹基の石鏃である。2には入念な整形剥離が施されている。5は基部を欠失してるので形態は不明。縁片を鋸歯状に整形する。6～9は剥片である。調整はみられない。風化が著しい。

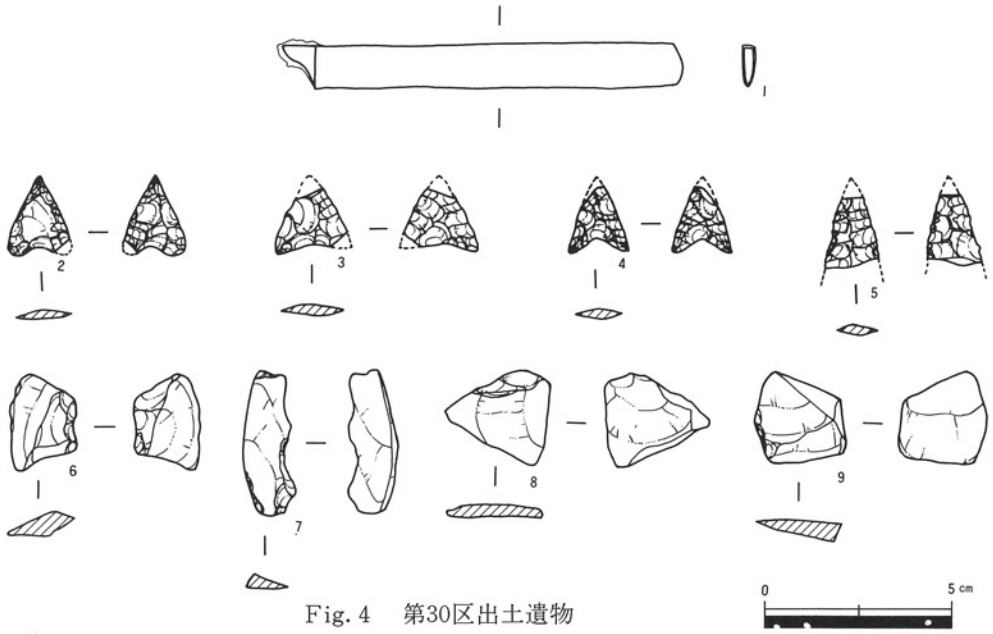


Fig. 4　第30区出土遺物

V　ま　と　め

尾根の頂上に微高地があることから，遺跡の可能性が高いとみられていたが，遺構および遺構面は検出されなかった。堆積土層は単純な風化土層で石鏃，サヌカイト剥片は出土するが，明確な遺物包含層とは認めがたい。

このように，良好な遺物包含層，遺構面は確認されていない。

Tab.1　第30区石器類計測表

番号	種　類	形　態	石　　材	出土層位	重量(g)	長さ(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	備　　考
2	石　鏃	凹　基	サヌカイト	第 1 層	0.7	21.5	16	3	欠損
3	石　鏃	凹　基	サヌカイト	第 1 層	0.8	17	19	3	欠損
4	石　鏃	凹　基	サヌカイト	第 2 層	0.6	17	16	3	欠損
5	石　鏃		サヌカイト	第 1 層	0.9	18	14	3	欠損
6	剝　片		サヌカイト	第 3 層	2.4	25	16	5	
7	剝　片		サヌカイト	第 3 層	2.2	38	13	4	
8	剝　片		サヌカイト	第 3 層	2.7	28	27	3	
9	剝　片		サヌカイト	第 3 層	3.1	24	24	5	

第　31　区

本　文　目　次

Ⅰ　位置と環境
Ⅱ　調査の経過
Ⅲ　基本層序
Ⅳ　遺　　構
Ⅴ　遺　　物
Ⅵ　ま と め

挿　図　目　次

Fig. 1　第31区位置図
Fig. 2　第31区遺構配置図
Fig. 3　第31区南壁層序
Fig. 4　第31区第 9 層出土遺物
Fig. 5　第31区第 1 層出土遺物(1)
Fig. 6　第31区第 1 層出土遺物(2)
Fig. 7　第31区第 1 層出土遺物(3)
Fig. 8　第31区第 1 層出土遺物(4)
Fig. 9　第31区第 1 層出土遺物(5)
Fig. 10　第31区第 1 層出土遺物(6)
Fig. 11　第31区第 1 層出土遺物(7)
Fig. 12　第31区第 1 層出土遺物(8)
Fig. 13　第31区第 1 層出土遺物(9)
Fig. 14　第31区第 1 層出土遺物(10)

図 版 目 次

ＰＬ．１　第31区全景　第31区全景
ＰＬ．２　第31区土坑（ＳＫ－01）　第31区南壁層序
ＰＬ．３　第31区出土遺物(1)
ＰＬ．４　第31区出土遺物(2)
ＰＬ．５　第31区出土遺物(3)
ＰＬ．６　第31区出土遺物(4)
ＰＬ．７　第31区出土遺物(5)
ＰＬ．８　第31区出土遺物(6)

Ⅰ　位置と環境

（Fig. 1，ＰＬ．1）

第31区は大毛島山系中央の西緩傾斜面に位置する。入江状に入り込んだ西海岸沿いにあたり標高約４ｍである。眼前にウチノ海がひろがり，南に漁港，西に島田島が望める。地目は畑であるが荒地となっている。

Ⅱ　調査の経過

昭和52年度の鳴門架橋に係る道路建設に伴う埋蔵文化財精密分布調査（以下，分布調査とする）の成果に基づき，第31区においては昭和57年度に確認調査を行うこととなった。

調査期間は昭和58年１月６日から３月23日であり，第29・30区の調査も同時に行った。

調査日誌抄

１月６日　調査区設定

27日　土師質土器の土釜破片が出土する。

２月３日　土坑状遺構検出，写真撮影

10日　出土遺物の写真撮影

３月１日　土層図作成

12日　現地説明会開催

23日　調査終了

Ⅲ　基本層序

（Fig. 2・3，ＰＬ．1）

ウチノ海の海岸沿いに道路があり，その東側緩傾斜面にあたる。分布調査では海岸線に沿った所に平坦地があるとの指摘があったため，地形に合わせて直角三角形状にトレンチを設定した。堆積土は大毛島山系からの砂質土を主とする流入土である。

表土第１層から第７層には近世陶磁器を主とする遺物が包含されているが，明確な遺構は構築されていない。第９層上面を切り込んで土坑が構築されている。第９層からは土師

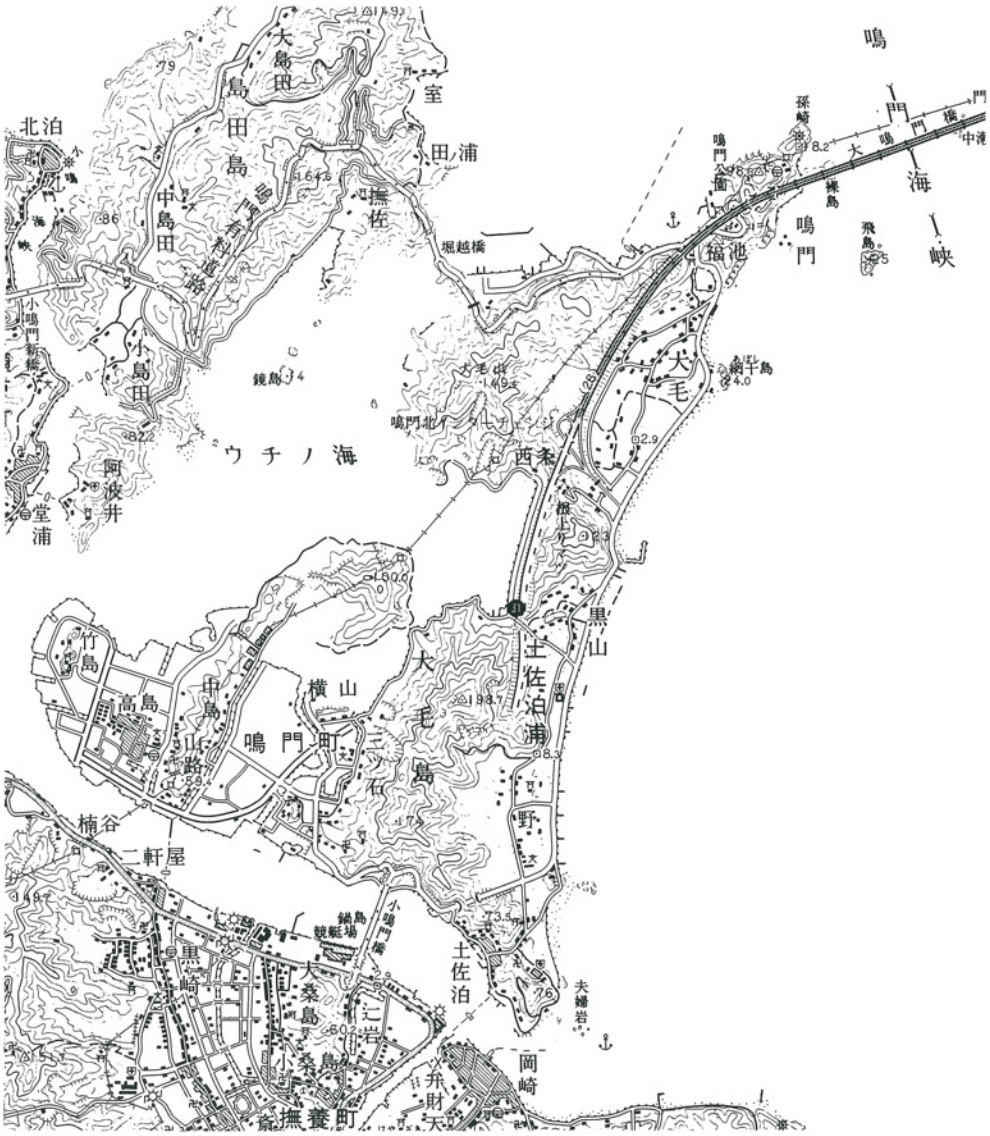


Fig. 1　第31区位置図

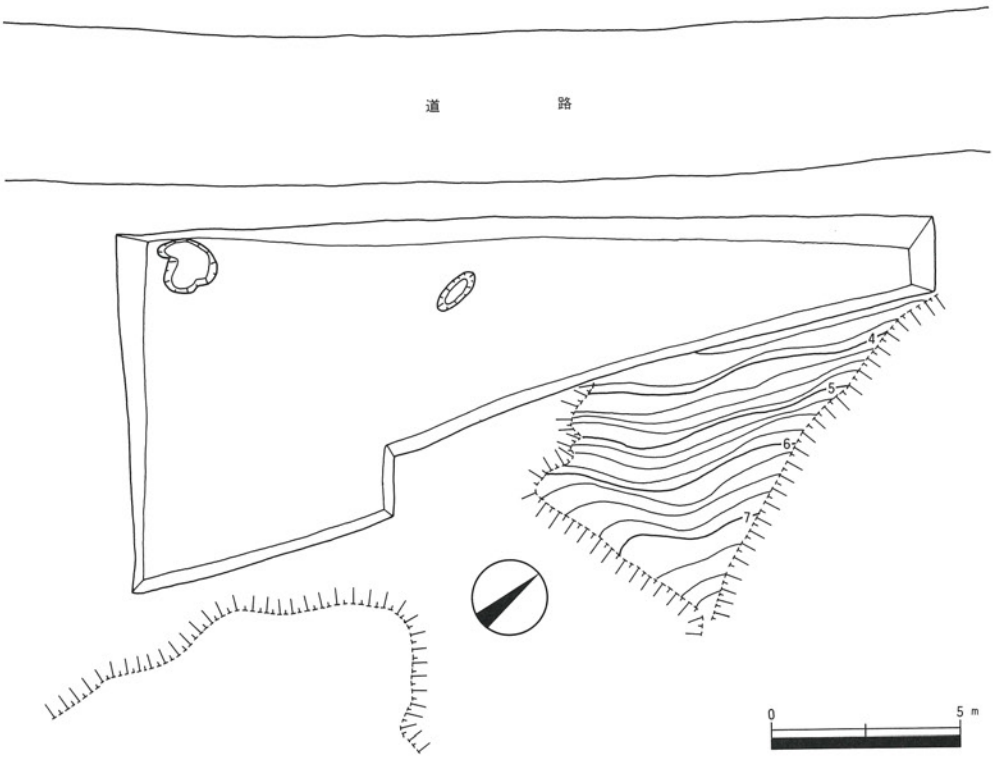


Fig. 2　第31区遺構配置図

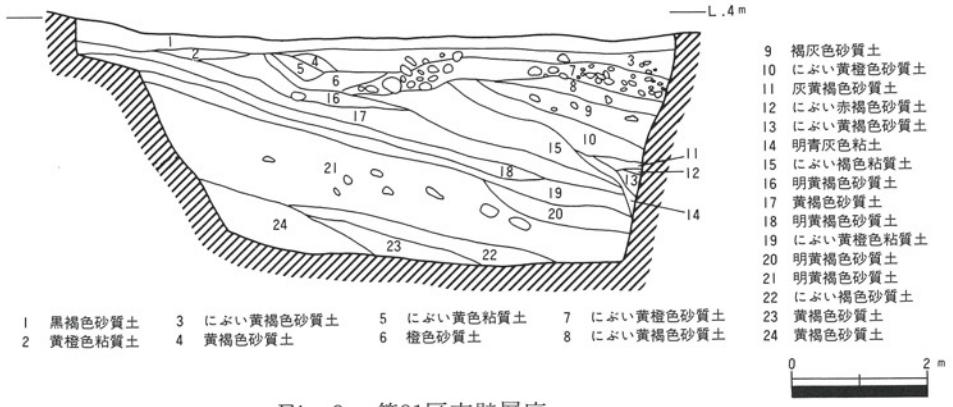


Fig. 3　第31区南壁層序

質土器が出土しているが，その下層の第10層には遺構は構築されておらず，明確な遺構面としては捉えられない。第10層以下には遺物および遺構は確認されていない。深さ約3.5mまで調査を進めたが，危険を伴うため第24層までで打ち切りとした。

Ⅳ 遺　　構

（Fig. 2，ＰＬ．２）

第９層上面に遺構が構築されている。土坑２箇所。出土遺物はない。

ＳＫ－01は長さ約68cm，幅約75cmの不整楕円形で深さ約20cm，埋積土は流入状の暗赤褐色砂質土と褐色砂質土である。10cm以下の砂岩風化礫を含む。

ＳＫ－02は長さ約52cm，幅約20cmの楕円形で深さ約20cm，埋積土は暗赤褐色砂質土とにぶい褐色砂質土である。10cm以下の砂岩風化礫と小量の炭化物を含む。

Ⅴ 遺　　物

（Fig. 4～14，ＰＬ．３～８）

出土遺物は近世遺物がその大勢を占める。第９層出土遺物には土師質土器，第１～７層

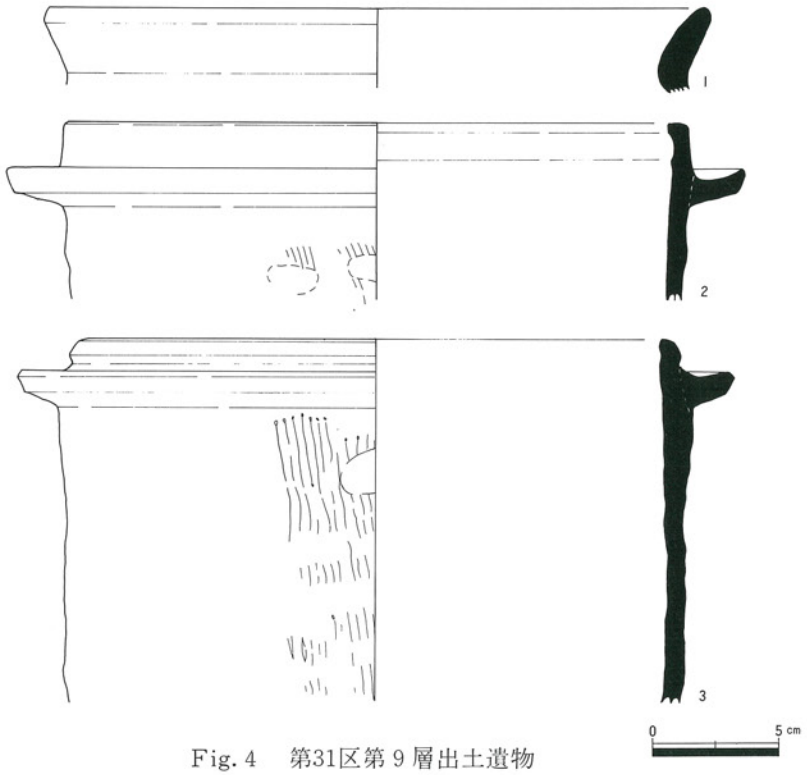


Fig. 4　第31区第９層出土遺物

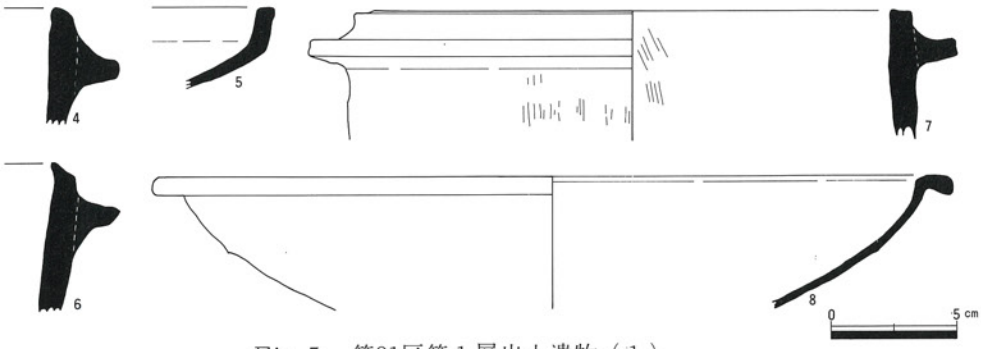


Fig. 5　第31区第１層出土遺物（１）

には陶磁器を主とし土師器，土師質土器，瓦質土器，サヌカイト剥片などがみられる。

１．第９層出土遺物

甕　　１は口径26cmの口縁部を遺存する甕である。口縁部は外反し端部を丸くおさめる。胎土は粗い。焼成良好。色調は淡橙色。

土釜　　２・３は体部下半を欠失する土釜である。体部はほぼ直立し口縁端部に小さく平坦面を形成する。口縁部直下に幅広い鍔を貼り付ける。体部外面に粗い刷毛目調整を縦方向に施す。２に較べ３の胎土は粗い。

２．第１層出土遺物

土師器　　５は土師器の高杯である。杯部の上半を遺存する。杯部上半に稜を形成し口縁部は直立する。器壁の磨滅が著しい。外面に黒斑がみられる。

土師質土器　　４・６は体部下半を欠失するが土師質の土鍋である。体部は内彎して大きく開き口縁部直下に鍔を貼り付ける。７は口縁端部にわずかにくぼみをもって平坦面を形成し，内外面に縦方向の粗い刷毛目調整を施す。口径20.4cm。

瓦質土器　　８は体部下半を欠失する瓦質土器の土鍋である。体部は内彎して大きく開き，口縁部は外に拡張して上端に平坦面を形成する。口径31.2cm。灰黒色を呈し，焼成良好。体部外面に煤が付着している。

碗　　全て磁器である。口縁部をわずかに外反させるもの９，外反していわゆる端反りと呼称されるも10～12に分けられる。９は腰部を形成し口縁部をわずかに外反させる。

呉須により胴部に梅花図，見込中央に草文を描く。見込中央にハリ支え痕がみられる。

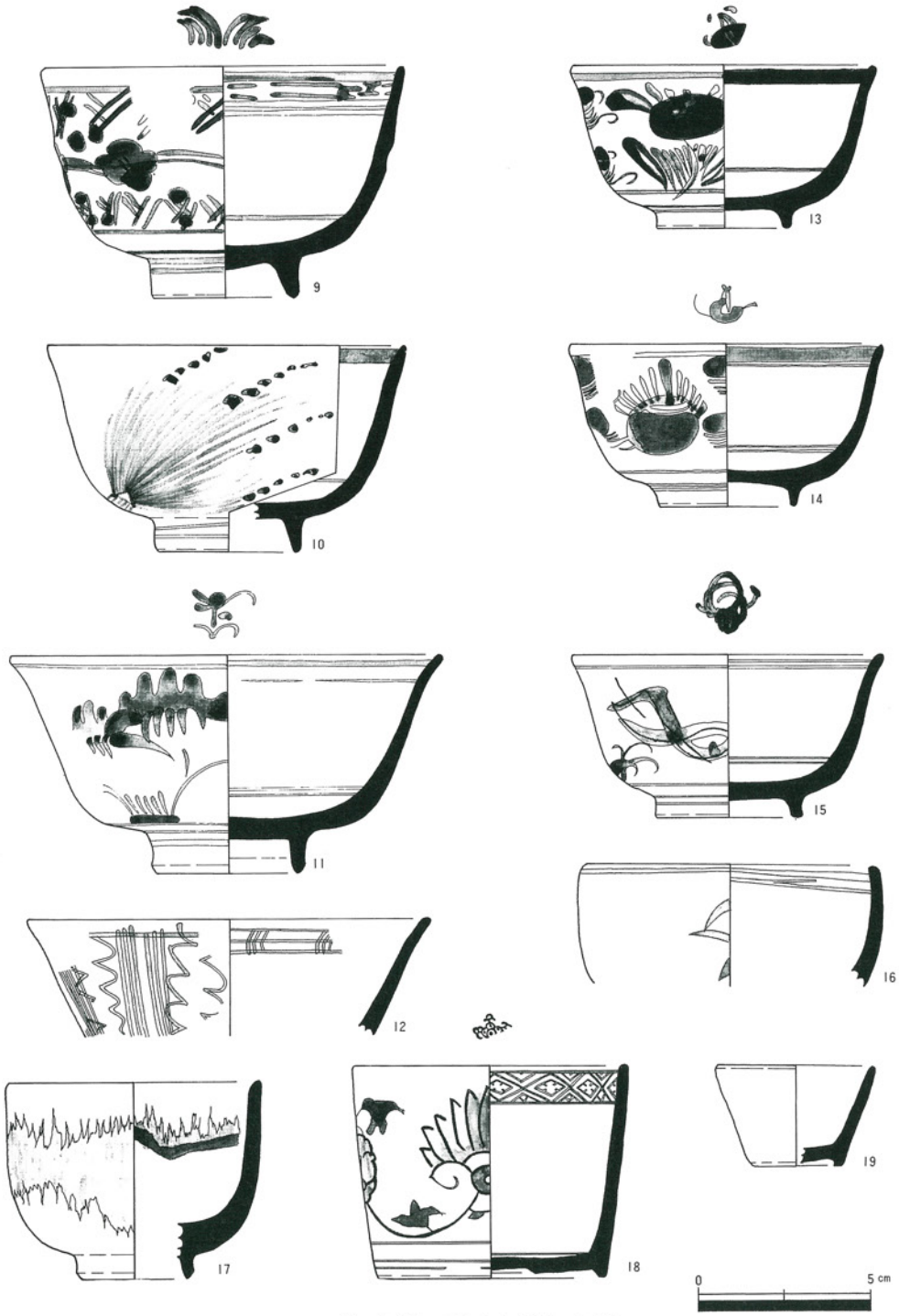


Fig. 6　第31区第１層出土遺物（２）

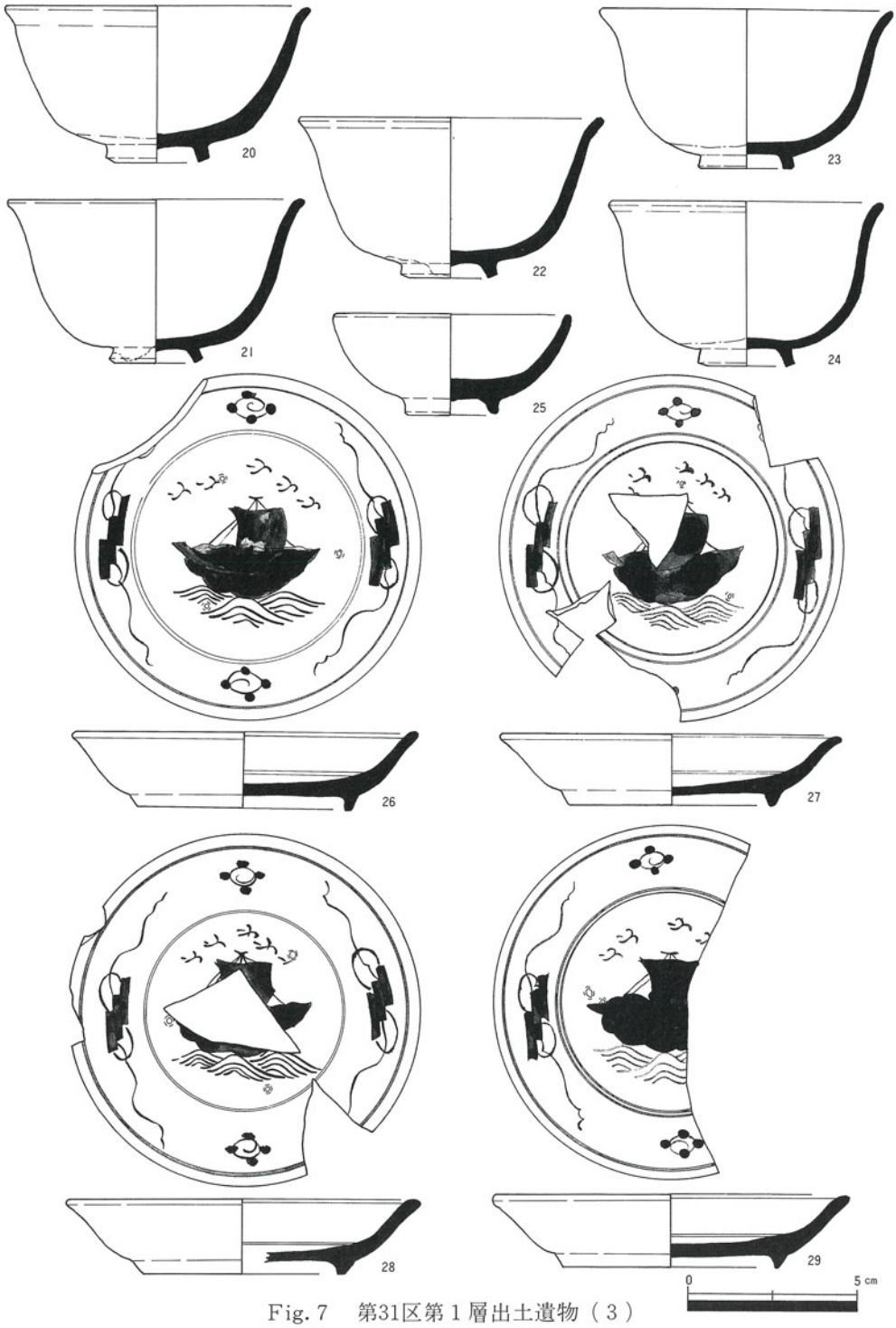


Fig. 7　第31区第１層出土遺物（３）

10〜12は端反りする。10・12の外反は11に較べて小さい。呉須により10の胴部に稲束図，12の胴部によろけ縞文，11の胴部に歯朶図を描く。

猪口　猪口には碗形の染付磁器13〜16，碗形の施釉陶器17，碗形で端反りする施釉陶器20〜24，筒形の染付磁器18，筒形の施釉陶器19，盃形の施釉磁器25がみられる。16の口縁部は内傾する。胴部に呉須による草図を描く。13〜15は腰部を形成して口縁部を外反させて，端反りの形状をもつ。呉須により胴部に草花図を描く。見込中央にも文様がみられる。17は口縁部がわずかに端反りする。胴部には白色釉で細い縦縞状文様を施す。20〜24は小さく腰部を形成して端反りする。釉はにぶい黄緑色系の発色をし，全体に細貫入がみられる。20に較べて21〜24は薄手に作られている。京焼とみられる。18は蛇ノ目底を有す。呉須により胴部に花図，見込に四方襷文，見込中央に五弁花を赤く。19は筒底に作る。胴部は直線的に開く。

皿　26〜29は同一の手になる製品とみられる。染付磁器。端反りの形状を有し，高台径は大きい。見込に3点のハリ支え痕がみられる。黒緑色に発色する釉で見込に帆船航海図を描く。船を葉で表現する。

灯明皿　30は施釉陶器の油皿である。体部は大きく開く。釉は淡緑白色系に発色し全面に細貫入がみられる。

蓋　31は高台状のつまみをもつ染付磁器の山蓋である。口縁部が小さく外反する。呉

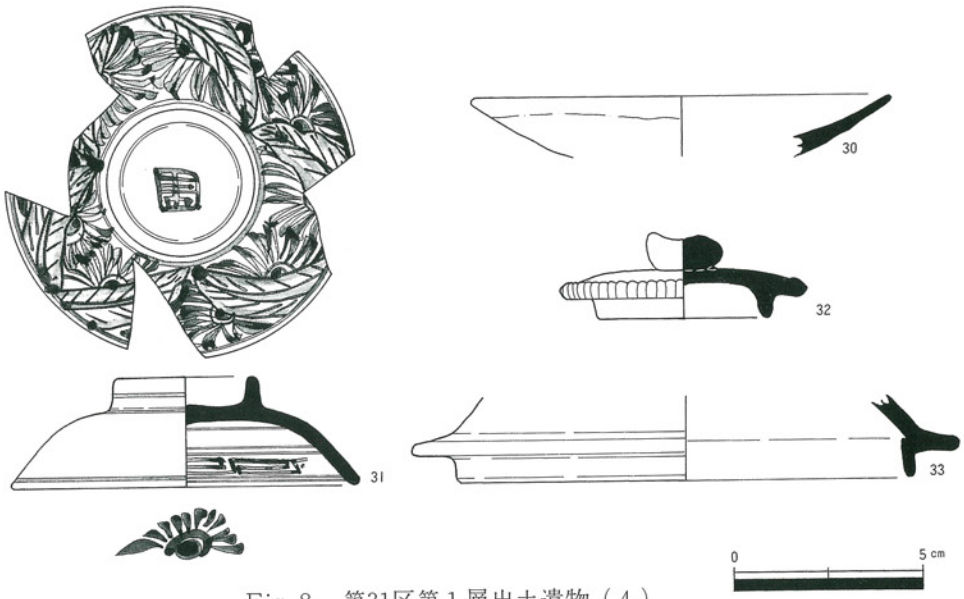


Fig. 8　第31区第1層出土遺物（4）

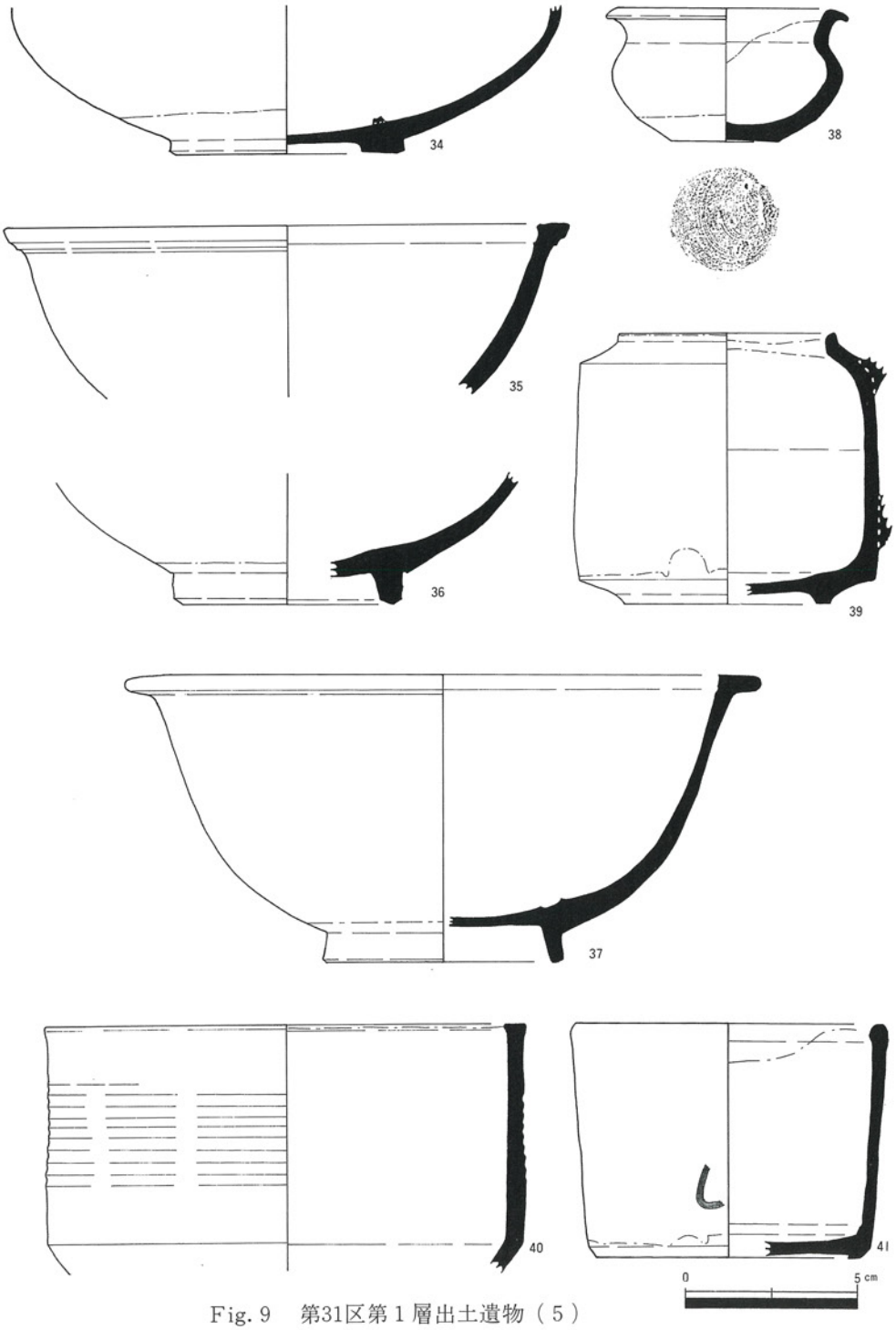


Fig. 9　第31区第１層出土遺物（５）

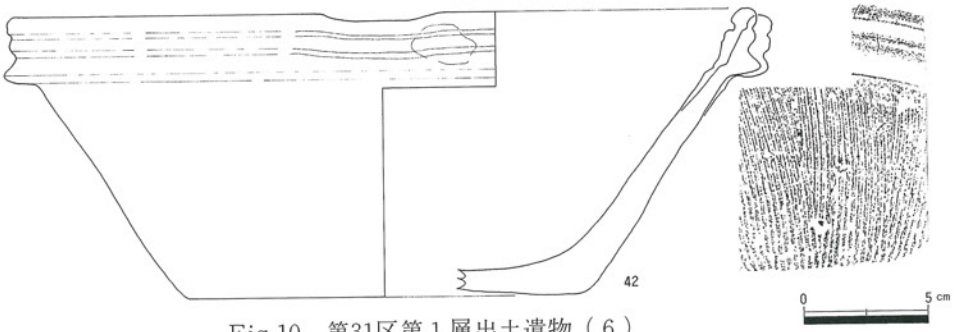


Fig.10　第31区第１層出土遺物（６）

須により体部に花図，つまみ内に文字銘，見込に雷文，見込中央に花文を描く。32は施釉陶器の山蓋である。つまみを貼り付け，天井部下端に刻目をめぐらし内側にかえりをもつ。淡緑色に発色する釉を施す。33は施釉陶器の山蓋である。天井部欠失。天井部下端を大きく外に拡張し内側にかえりをもつ。赤褐色の素地に黒褐色の釉をかける。大谷焼。

鉢　34は施釉陶器の鉢である。幅広で低い高台を有する。胴部は内彎して開き内傾する。見込に３点のハリ支えが認められる。淡乳黄色の素地に淡い緑褐色の釉をかける。全面に細貫入がみられる。35～37は片口鉢とみられる大谷焼の施釉陶器である。胴部は内彎して立ち上がる。口縁部は外に拡張して平坦面を形成する。37は35に較べて幅広い平坦面をもつ。36の見込に重ね焼痕がみられ砂が付着している。赤褐色系の素地に黒褐系の釉をかける。40は施釉陶器の鉢である。大谷焼とみられる。下位に稜をもち胴部は直立する。胴部に９条の累線状沈線をめぐらす。赤褐色の素地に暗赤褐色の釉をかける。口縁端部無釉。41は煙草盆用の火鉢とみられる施釉陶器である。筒形で小さい筒底をもつ。淡黄褐色の素地に半透明の釉をかける。胴部に鉄釉による文様を施す。全面に細貫入がみられる。

42は片口の擂鉢である。無施釉陶器。口縁部を外に肥厚させて内外面に２条の凹線をめぐらす。内面に14条単位の擂り目を右下りに右から左へ移す。淡橙色。

香炉　38は施釉陶器の香炉である。低い小壺状の形態をとる。回転糸切り底。明赤褐色の素地に半透明の釉をかける。大谷焼系（註１）。39は施釉陶器で香炉とみられる。肩衝茶入れ的形状をしている。胴部に把手状のものを貼り付けた痕跡がある。淡黄褐色の素地に茶褐色の釉をかける。

土瓶　43は施釉陶器の土瓶である。上げ底で算盤形の胴部につくる。胴部最大径部分の上位に直径６～７㎜の円孔を外面から３個穿つ。この部位に注口部を貼り付ける。注口部の上位に直径７㎜の円孔をもつ三角形状の取手を貼り付ける。胴部に櫛状工具による円

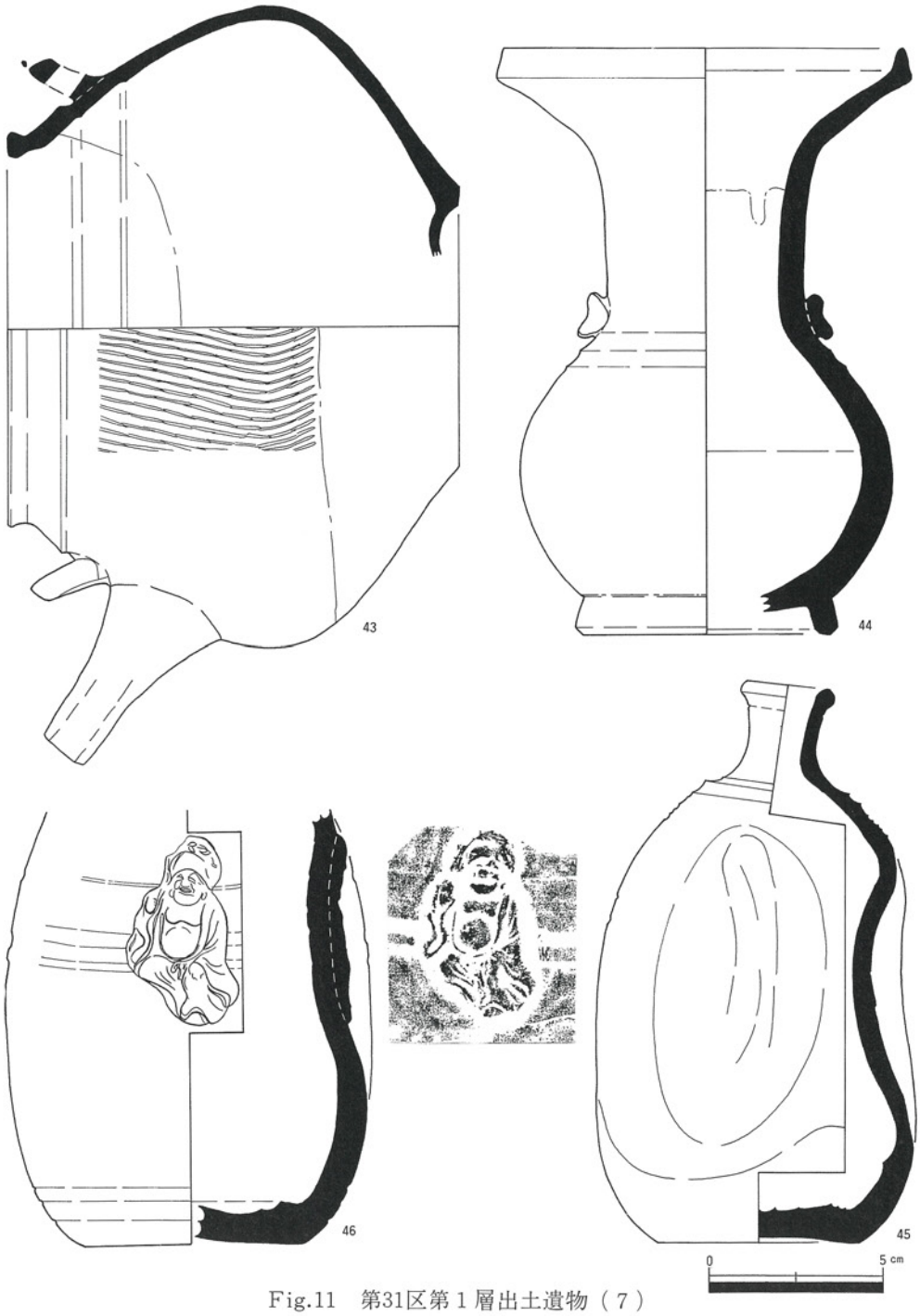


Fig.11　第31区第１層出土遺物（７）

弧状の沈線を施す。淡黄色の素地ににぶい緑黄色の釉をかける。底部および底部下位に煤の付着が認められ，直火用とみられる。

瓶　44～46は施釉陶器の花生用瓶とみられる。44は高台を有し胴部は球形状。頸部は長く直立し口縁部は大きく開き端部が直立する。胴部と頸部との境に1対の耳を貼り付ける。暗赤褐色の素地に光沢のある黒褐色の釉をかける。墓前あるいは仏前用とみられる。

45・46は備前焼とみられる。上げ底気味の平底。胴部の三方に大きなくぼみをみせる。46のくぼみの一方には布袋とみられる人物像を貼り付ける。46は口頸部を欠失するが，45の頸部は短く直立し口縁部はわずかに肥厚して玉縁状とする。ともに暗灰色の素地に茶

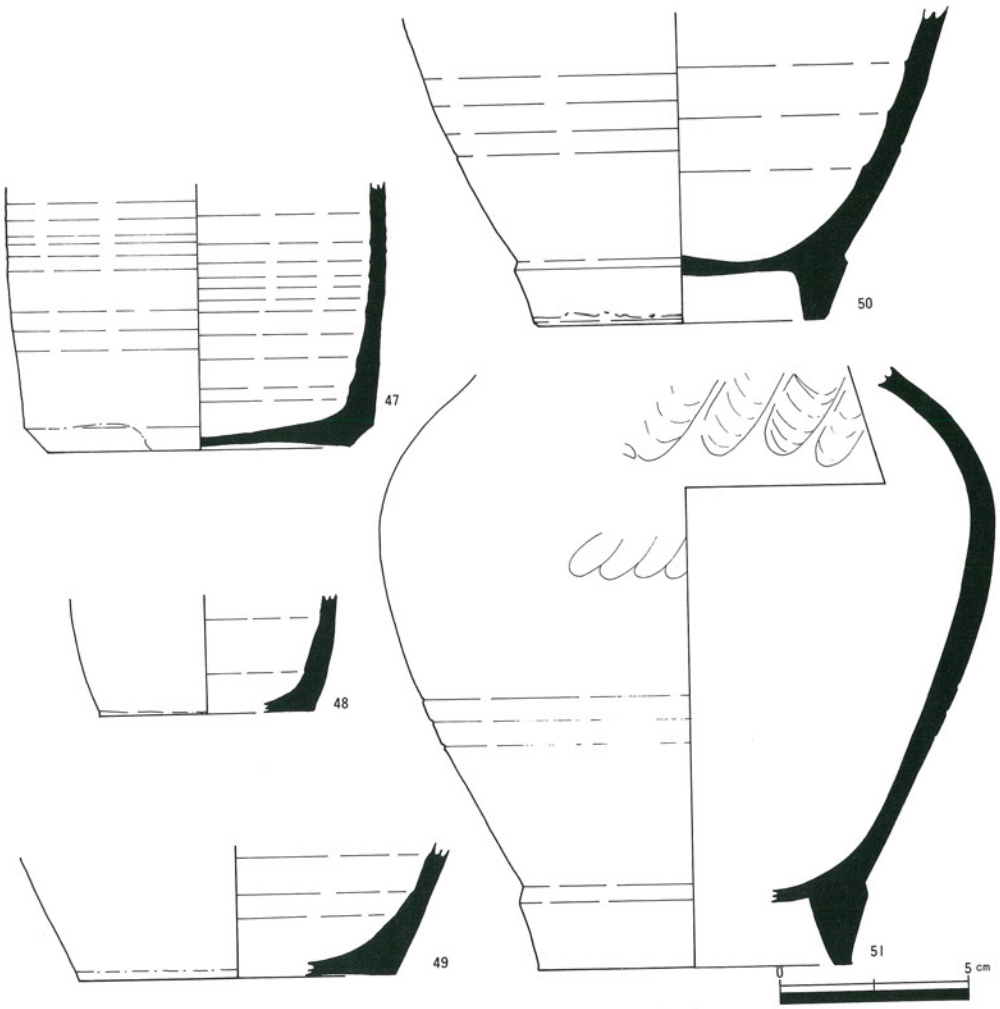


Fig.12　第31区第1層出土遺物（8）

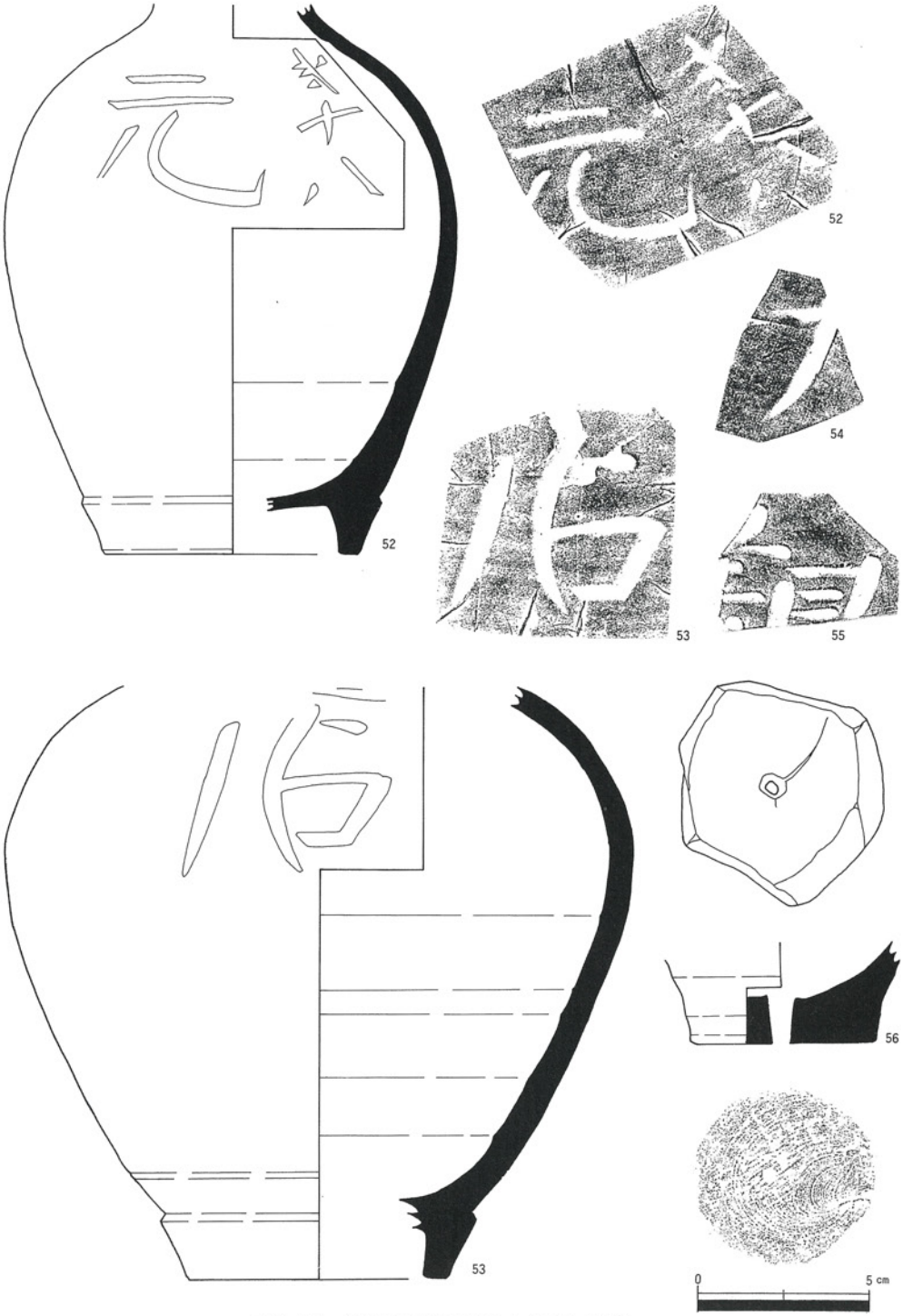


Fig.13　第31区第１層出土遺物（９）

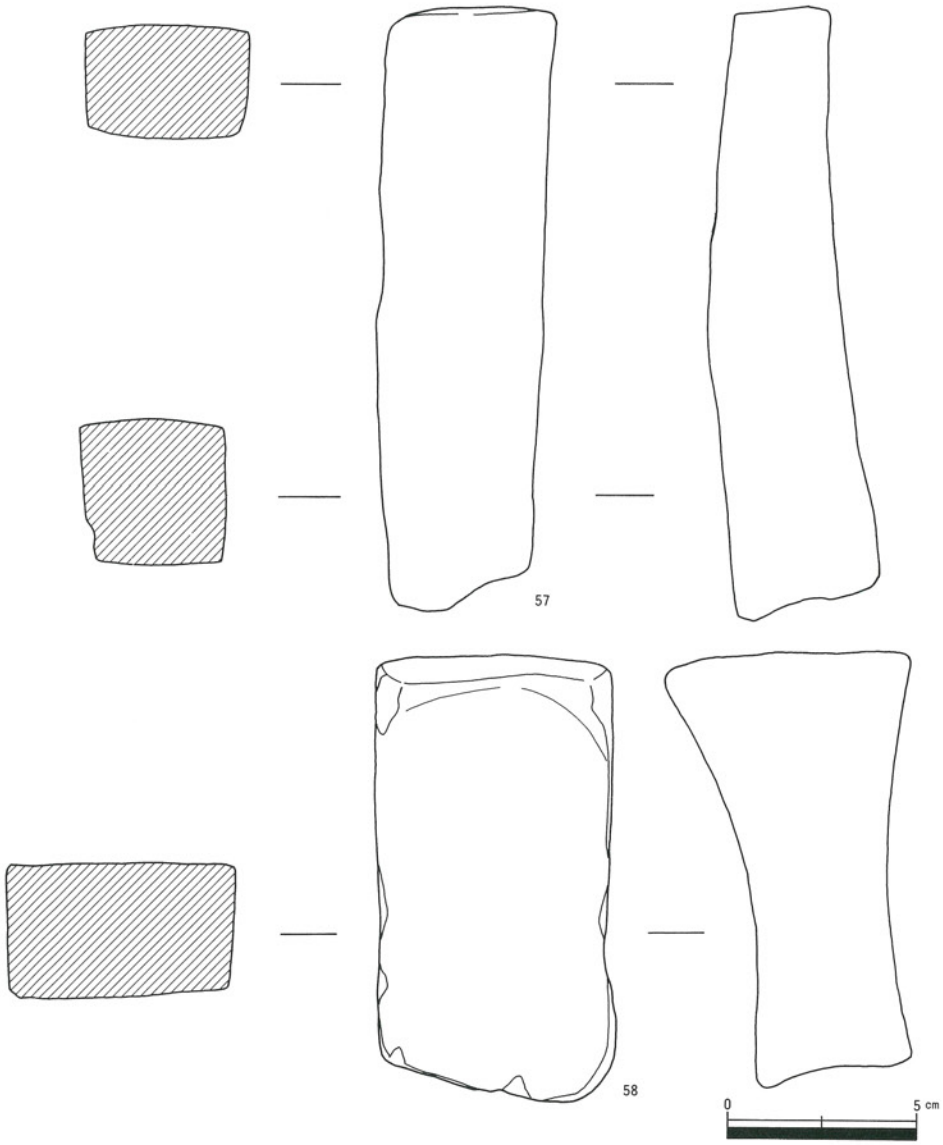


Fig.14　第31区第１層出土遺物（10）

褐色系の釉をかける。

壺　　47〜49は大谷焼系の施釉陶器で壺の底部とみられる。48・49は平底で赤褐色の素地に暗赤褐色系の釉をかける。47は上げ底気味の平底で筒状の胴部をもつ。暗茶褐色の素地に黒褐色の釉をかける。

徳利　　50〜55は施釉陶器の徳利である。大谷焼系。内向する断面梯形の高台を有する。赤褐色系の素地をもつ。50には暗赤褐色，他には黒褐色の釉をかける。52・53には釉に光沢がある。51には粘土紐輪積み時の指跡を未調整のまま一部に残す。肩部に刻字がみられる。52には弐十八，元，53には店，55には銀の文字を刻む。51・54は不詳。

その他　　56は無釉陶器の底部である。回転糸切りの平底。底部に1個の円孔を有する。焼成前に内面から外面に穿つ。直径，内面8㎜，外面5㎜，用途不詳。

砥石　　57・58は長方体状の砥石である。一部を欠損する。57の砥面は上下左右の4面。きめが細かく仕上げ砥とみられる。石材の名称は不明。58の砥面は上下左右の4面であるが，上下の2面に顕著な使用痕が認められる。砂岩製で中砥とみられる。

Ⅵ　ま　と　め

当該区では海岸線沿いの緩傾斜地であることから，遺跡の存在の可能性が高いとみられていたが，明確な構築年代を提示しえない土坑を検出したにとどまる。

このように，年代，用途とも不詳の土坑が検出されたが，良好な遺物包含層，遺構面はみられない。

註

註1　　「阿波の焼物　大谷焼」'69　豊田　進

第　33　区

本　文　目　次

Ⅰ　位置と環境
Ⅱ　調査の経過
Ⅲ　基本層序
Ⅳ　遺　　物
Ⅴ　ま と め

挿　図　目　次

Fig. 1　　第33区位置図
Fig. 2　　第33区地形測量・トレンチ配置図
Fig. 3　　第33区トレンチ層序
Fig. 4　　第33区出土遺物

図　版　目　次

ＰＬ．1　　第33区第１トレンチ全景　　第33区第２トレンチ全景
ＰＬ．2　　第33区第１トレンチ層序　　第33区第２トレンチ層序
ＰＬ．3　　第33区出土遺物

Ⅰ　位置と環境

（Fig. 1）

第33区は大毛島山系中央の東傾斜面に位置する。標高13～18mであり，東に紀伊水道が望める。小渓谷にあたり氾濫による地形変化がみられるが，地目は畑である。

Ⅱ　調査の経過

昭和52年度の鳴門架橋に係る道路建設に伴う埋蔵文化財精密分布調査（以下，分布調査とする）の成果に基づき，第33区においては昭和58年度に確認調査を行うこととなった。

調査期間は4月1日から7月9日であり，第35区の調査とも同時併行で行った。

調査日誌抄

4月1日　発掘調査準備

11日　地形測量，トレンチ掘り下げ

18日　第1トレンチ第5層より石鏃出土

26日　第1トレンチ第5層より弥生式土器出土

5月10日　第1トレンチ第5層より石鏃出土

25日　第2トレンチ表土第1層より寛永通宝出土

6月6日　第2トレンチ土層図作成

14日　第1トレンチ土層図作成

7月4日　第1トレンチ土層図作成

9日　調査終了

Ⅲ　基本層序

（Fig. 2・3，PL. 1・2）

東側前面に平地が広がる山裾の傾斜面にあたる。分布調査では山裾に緩傾斜地があるとの指摘があったため，地形に直交あるいは平行するトレンチを，道路をさしはさむ東西2箇所に設定した。

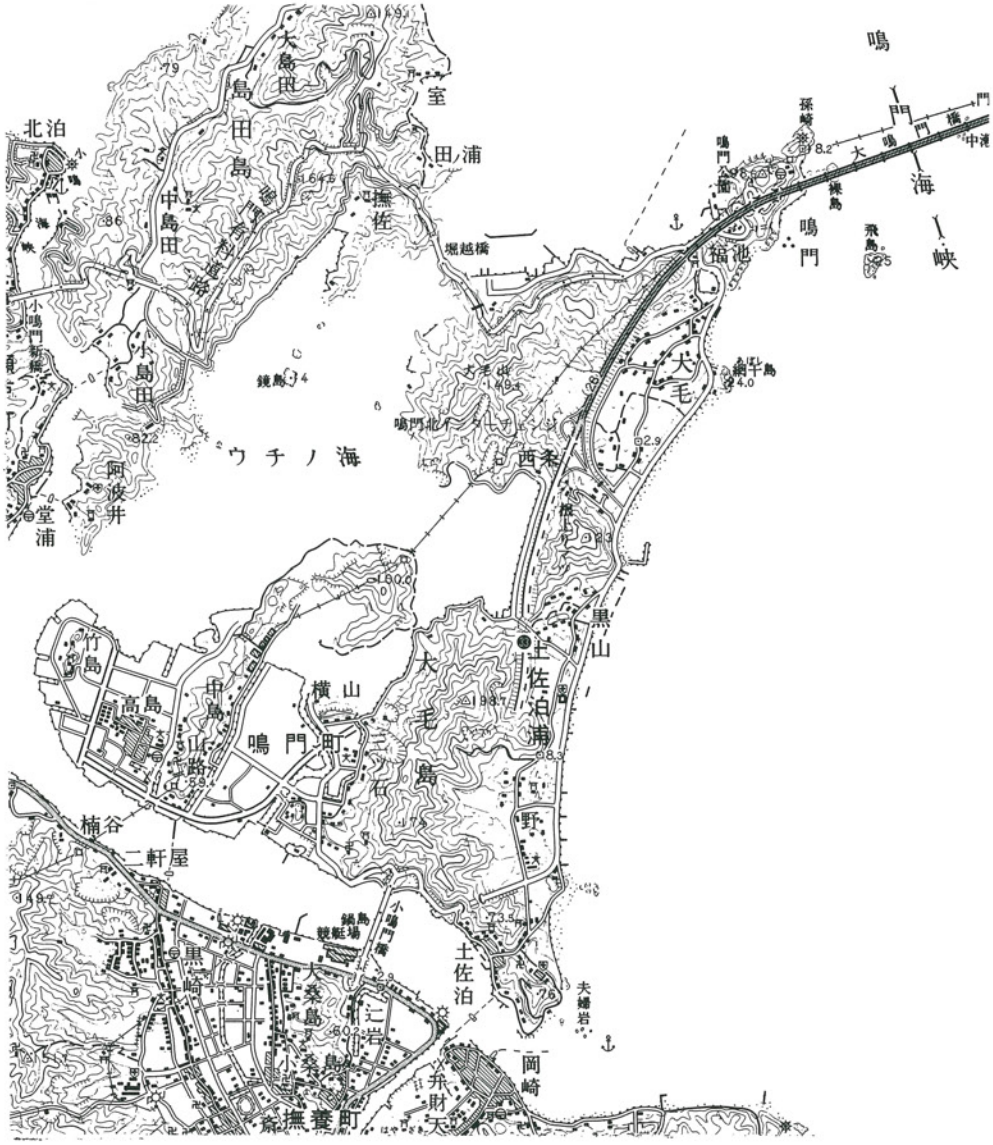


Fig. 1　第33区位置図

第１トレンチの堆積土は大毛島山系からの砂質土を主とする流入土である。表土腐植土層から近世陶磁器が出土している。第２～４層は無遺物層である。第５層は砂岩礫を多く含む褐色砂質土層で，上部から弥生式土器とサヌカイト剥片，石鏃が出土している。第６層以下は砂岩礫を多く含む黄褐色系粘質土層で無遺物層である。第５層出土遺物は流れ込みとみられ，明確な遺構および遺構面は検出されなかった。

第２トレンチの堆積土は山系からの流入土と海砂とが互層になっている。表土腐植土層から近世陶磁器と寛永通宝が出土しているが，第２層以下は無遺物層であり，明確な遺構および遺構面は検出されなかった。

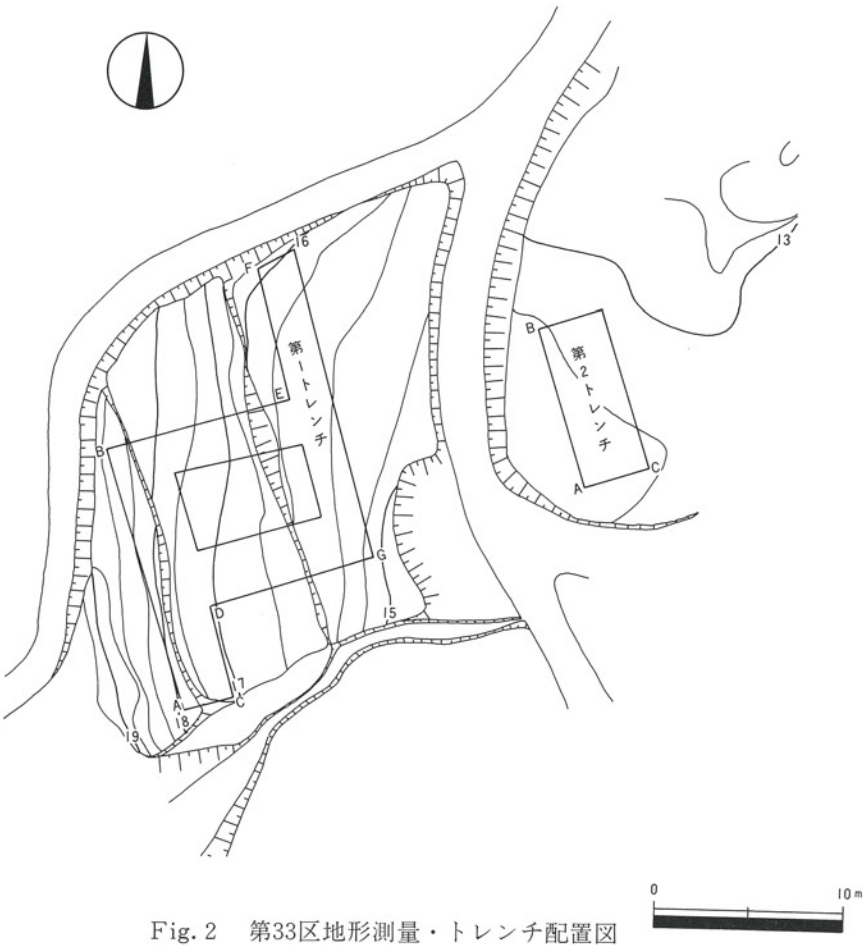


Fig. 2　第33区地形測量・トレンチ配置図

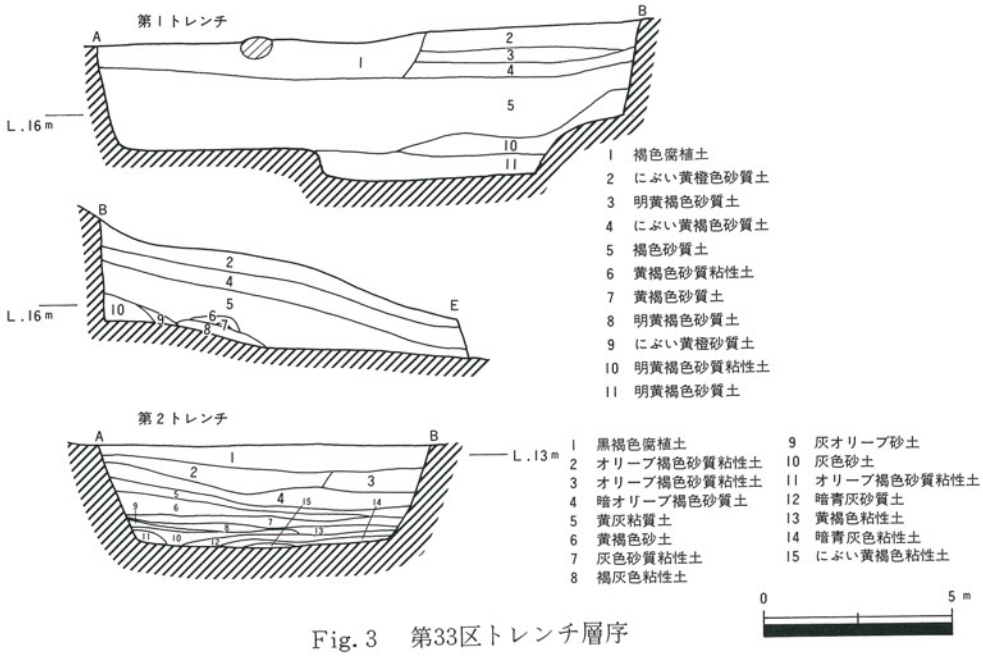


Fig. 3　第33区トレンチ層序

Ⅳ 遺　　物

（Fig. 4，ＰＬ．３）

出土遺物は約10点出土している。表土第１層中より近世陶磁器と寛永通宝，第１トレンチ第５層中より弥生式土器とサヌカイト剥片，石鏃が出土している。

１．第５層出土遺物

弥生式土器　　１は弥生式土器の壺である。底部を遺存する。やや上げ底気味の平底で胴部は外反気味に立ち上がる。胎土は多くの砂粒を含み粗い。焼成は良好でにぶい淡橙褐色を呈する。復原底径約6.7㎝。

石鏃　　２～４は凹基の石鏃である。石材はサヌカイト。２は入念な整形剥離が施され端正な作りである。尖端部をわずかに欠失する。現存する長さは約3.15㎝，重さは約1.35ｇ。３の整形剥離は粗い。基部の一端を欠失する。長さ約1.7㎝，現存する重さ約0.6ｇ。４の整形剥離は粗い。長さ約2.25㎝，重さ1.8ｇ。

剥片　　５はサヌカイトの剥片である。上端に新しい欠損がみられる。現存する長さ約3.7㎝，重さ約5.4ｇ。

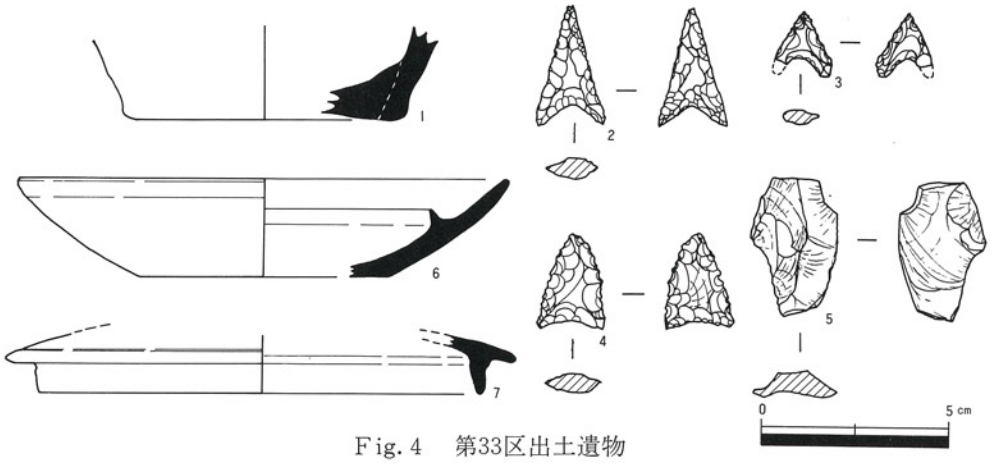


Fig. 4　第33区出土遺物

2．第１層出土遺物

灯明皿　　６は口縁部内側に断面三角形の突帯をめぐらす油受皿である。施釉陶器。やや上げ底気味の平底で体部は内彎して拡がる。突帯は口縁部より低い。内面に淡黄色の釉をかける。貫入れがみられる。

蓋　　７は内側にかえりをもつ山蓋である。施釉陶器。淡橙色の素地に半透明の釉を天井部にかける。

Ⅴ　ま　と　め

当該区では山麓に緩傾斜地があるため遺跡の可能性が高いとみられていたが，遺物が出土したにとどまり，良好な遺構および遺構面は検出されなかった。弥生式土器，サヌカイト剝片，石鏃が出土した第１トレンチの第５層は安定した遺物包含層として捉えられなく，大毛島山系からの流込とみられる。

このように，当該区では先人の明確な足跡は確認されなかった。

第　35　区

本　文　目　次

Ⅰ　位置と環境
Ⅱ　調査の経過
Ⅲ　基本層序
Ⅳ　遺　　構
Ⅴ　遺　　物
Ⅵ　ま と め

挿　図　目　次

Fig. 1　第35区位置図
Fig. 2　第35区地形測量・トレンチ配置図
Fig. 3　第35区第１・４トレンチ層序
Fig. 4　第35区第２・３トレンチ層序
Fig. 5　第35区石切鍛冶仕事場跡遺構(1)
Fig. 6　第35区石切鍛冶仕事場跡遺構(2)
Fig. 7　第35区フイゴ場跡
Fig. 8　第35区下部石列状遺構
Fig. 9　第35区出土遺物(1)
Fig. 10　第35区出土遺物(2)
Fig. 11　第35区出土遺物(3)
Fig. 12　第35区出土遺物(4)
Fig. 13　第35区出土遺物(5)
Fig. 14　第35区出土遺物(6)
Fig. 15　第35区出土遺物(7)

表　目　次

Tab. 1　第35区出土陶磁器類観察表

図 版 目 次

ＰＬ．1　第35区全景　　第35区全景
ＰＬ．2　第35区石切鍛冶仕事場跡　　第35区石切鍛冶仕事場跡
ＰＬ．3　第35区石切鍛冶仕事場跡　　第35区石切鍛冶仕事場跡
ＰＬ．4　第35区フイゴ場跡（１・２）　　第35区フイゴ場跡(1)
ＰＬ．5　第35区フイゴ場跡　　第35区灰捨て場跡
ＰＬ．6　第35区下部石列状遺構　　第35区調査風景
ＰＬ．7　第35区出土遺物(1)
ＰＬ．8　第35区出土遺物(2)
ＰＬ．9　第35区出土遺物(3)
ＰＬ．10　第35区出土遺物(4)

Ⅰ　位置と環境

（Fig. 1，ＰＬ．１）

第35区は西側に大毛山系が連なり，東に紀伊水道が見える平坦地にあり，標高10〜16mの高さに位置し，撫養石の石切場跡，石捨て場跡，荒地等となっている。西側の山は石切場跡で切り立った崖となり，東側は砂地の畑となっている。

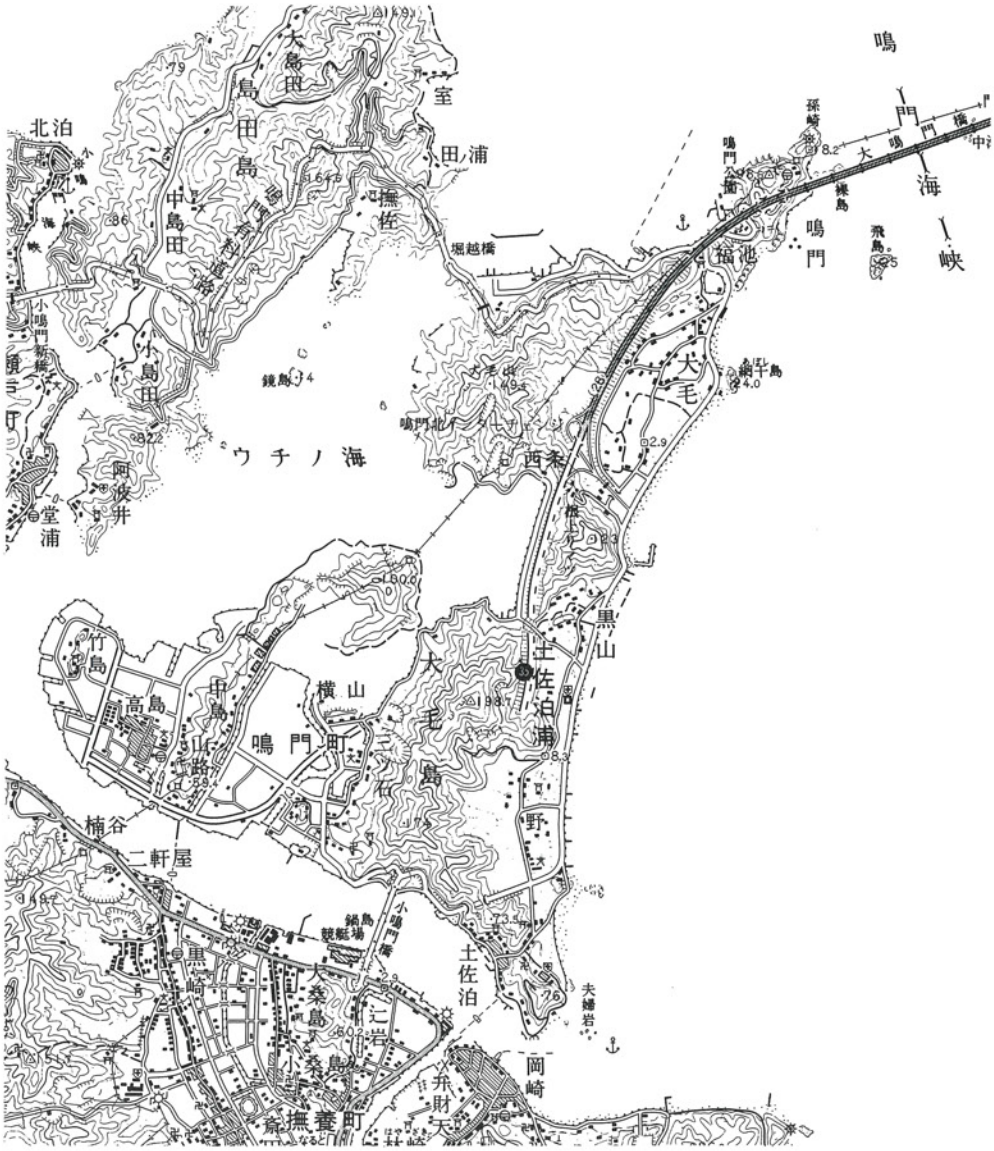


Fig. 1　第35区位置図

Ⅱ　調査の経過

（Fig. 2）

昭和52年度の鳴門架橋に系る道路建設に伴う埋蔵文化財精密分布調査（以下，分布調査とする）の成果に基づき，第35区においては昭和58年度に確認調査を行うこととなった。

調査期間は４月18日から７月９日であり，第33区の調査と同時併行で行った。

調査日誌抄

４月18日　伐採開始

28日　調査区設定（１～４トレンチ）

５月７日　地形測量開始　第１トレンチ掘り下げ

17日　第１トレンチ土層図作成及び写真撮影

21日　第４トレンチ掘り下げ

23日　第４トレンチ内より石垣状遺構を確認，染付碗出土

25日　第４トレンチの遺構確認の為，東側を拡張

27日　石切仕事場の割付作業を行う。

31日　石切仕事場側面図作成

６月２日　石切仕事場平面図作成

６日　トレンチ写真撮影

18日　灰捨て場検出及び掘り下げ

23日　第３・４グリッド全景写真撮影

30日　第４トレンチ下部石列検出

７月４日　第４トレンチ下部石列平面図作成

９日　確認調査終了

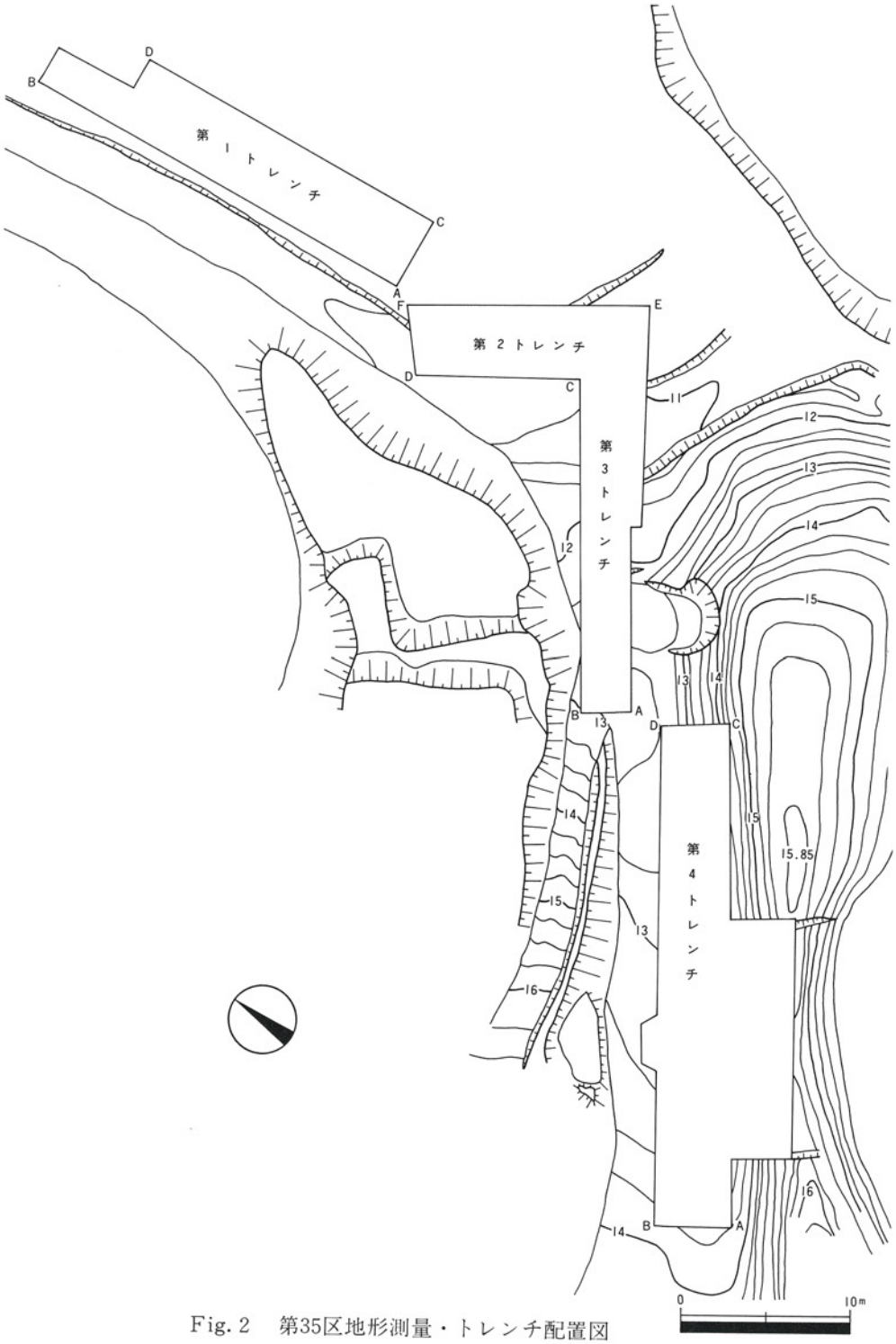


Fig. 2　第35区地形測量・トレンチ配置図

Ⅲ　基本層序

（Fig. 3・4）

1．第1トレンチ

第1層は10YR6/4，にぶい黄橙色砂質土層（表土）である。第2層は2.5Y6/3，にぶい黄色砂層で火縄銃の鉛玉が出土している。第3～5層は砂層で無遺物層である。

2．第2・3トレンチ

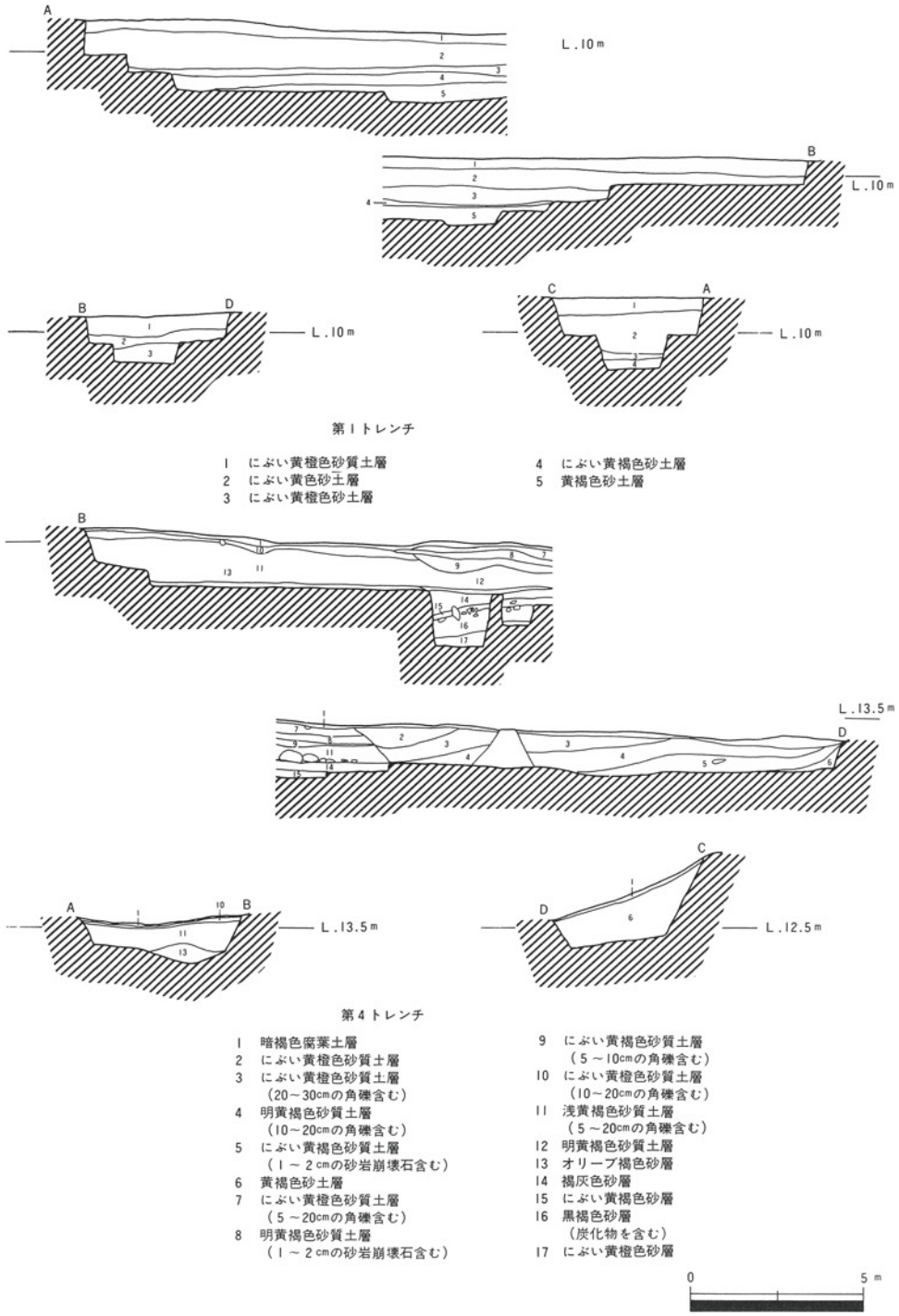
第1層は10YR3/3，暗褐色腐葉土（表土）である。第2層は7.5YR7/4，にぶい橙色砂質土層で砂岩切石を含んでいる。第3層は2.5Y7/4，浅黄砂質土層で砂岩切石を含んでいる。第4層は10YR6/4，にぶい黄橙色砂質土層で大礫を含んでいる。第5層は2.5Y4/4，オリーブ褐色砂層で無遺物層である。第2～4層は砂岩切石の堆積層となっている。

3．第4トレンチ

第4トレンチを基本土層とし，以下に述べる。

第1層は10YR3/3，暗褐色腐葉土層（表土）である。第2～6層は吹あげ砂の堆積土と思われる。第7層は10YR7/4，にぶい黄橙色砂質土層で5～20㎝の砂岩の切石混りである。

第8層は10YR6/6，明黄褐色砂質土層で砂岩の崩壊石混りである。第9層は10YR5/3，にぶい黄褐色砂質土層で5～20㎝の切石混りである。第10層は10YR6/4，にぶい黄橙色砂質土層で10～20㎝の切石混りである。第11層は2.5Y7/4，浅黄褐色砂質土層で5～20㎝の切石混りである。第12層は10YR7/6，明黄褐色砂質土層である。第13層は2.5Y4/4，オリーブ褐色砂層である。第7～13層は包含層で近世陶磁器，寛永通宝，鉄製品等を含んでいる。第14層は10YR6/1，褐灰色砂層で石切仕事場遺構の遺構面となっている。第15層は10YR5/4，にぶい黄褐色砂層で無遺物層である。第16層は10YR3/2，黒褐色砂層で炭化物を含んでいる。下部石列状遺構の遺構面となっている。第17層は10YR7/3，にぶい黄橙色砂層で，無遺物層である。第14層に石切仕事場跡の遺構面が形成され，7～13層は仕事場形成以降の遺物包含層となっている。



第1トレンチ

1　にぶい黄橙色砂質土層
2　にぶい黄色砂土層
3　にぶい黄橙色砂土層
4　にぶい黄褐色砂土層
5　黄褐色砂土層

第4トレンチ

1　暗褐色腐葉土層
2　にぶい黄橙色砂質土層
3　にぶい黄橙色砂質土層
　(20～30cmの角礫含む)
4　明黄褐色砂質土層
　(10～20cmの角礫含む)
5　にぶい黄褐色砂質土層
　(1～2cmの砂岩崩壊石含む)
6　黄褐色砂土層
7　にぶい黄橙色砂質土層
　(5～20cmの角礫含む)
8　明黄褐色砂質土層
　(1～2cmの砂岩崩壊石含む)
9　にぶい黄褐色砂質土層
　(5～10cmの角礫含む)
10　にぶい黄橙色砂質土層
　(10～20cmの角礫含む)
11　浅黄褐色砂質土層
　(5～20cmの角礫含む)
12　明黄褐色砂質土層
13　オリーブ褐色砂層
14　褐灰色砂層
15　にぶい黄褐色砂層
16　黒褐色砂層
　(炭化物を含む)
17　にぶい黄橙色砂層

Fig. 3　第35区第1・4トレンチ層序

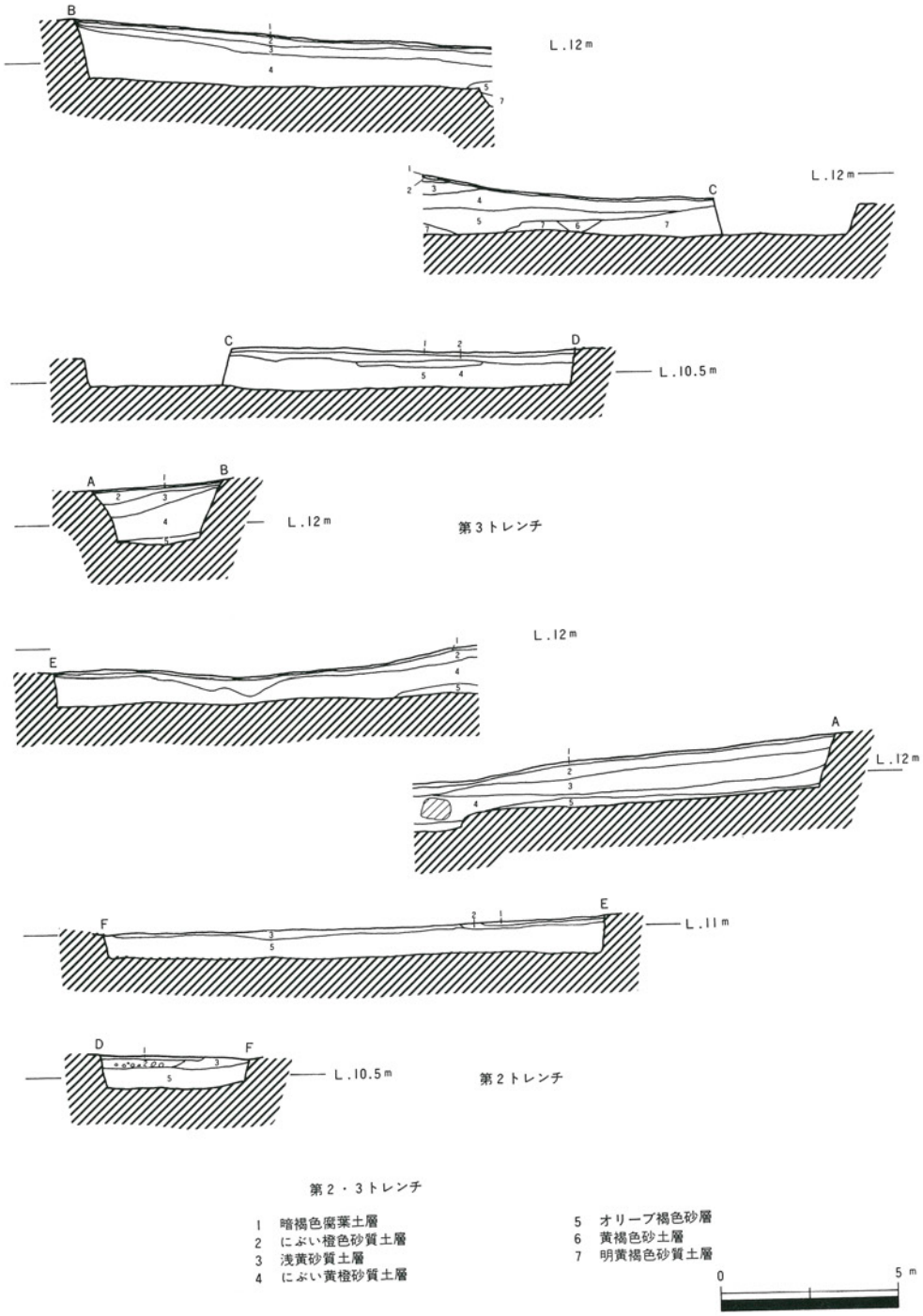


Fig. 4　第35区第２・３トレンチ層序

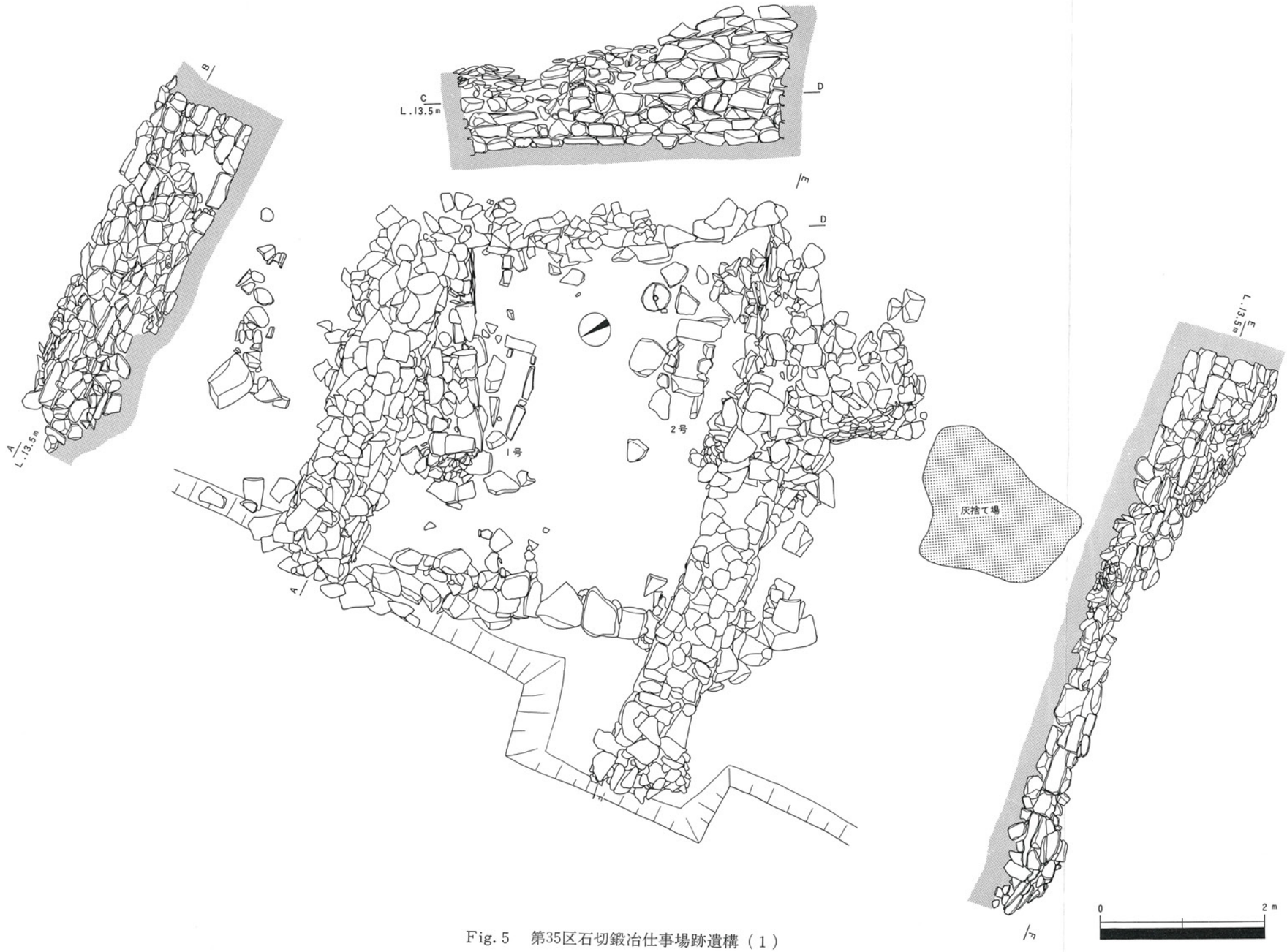


Fig. 5　第35区石切鍛冶仕事場跡遺構（1）

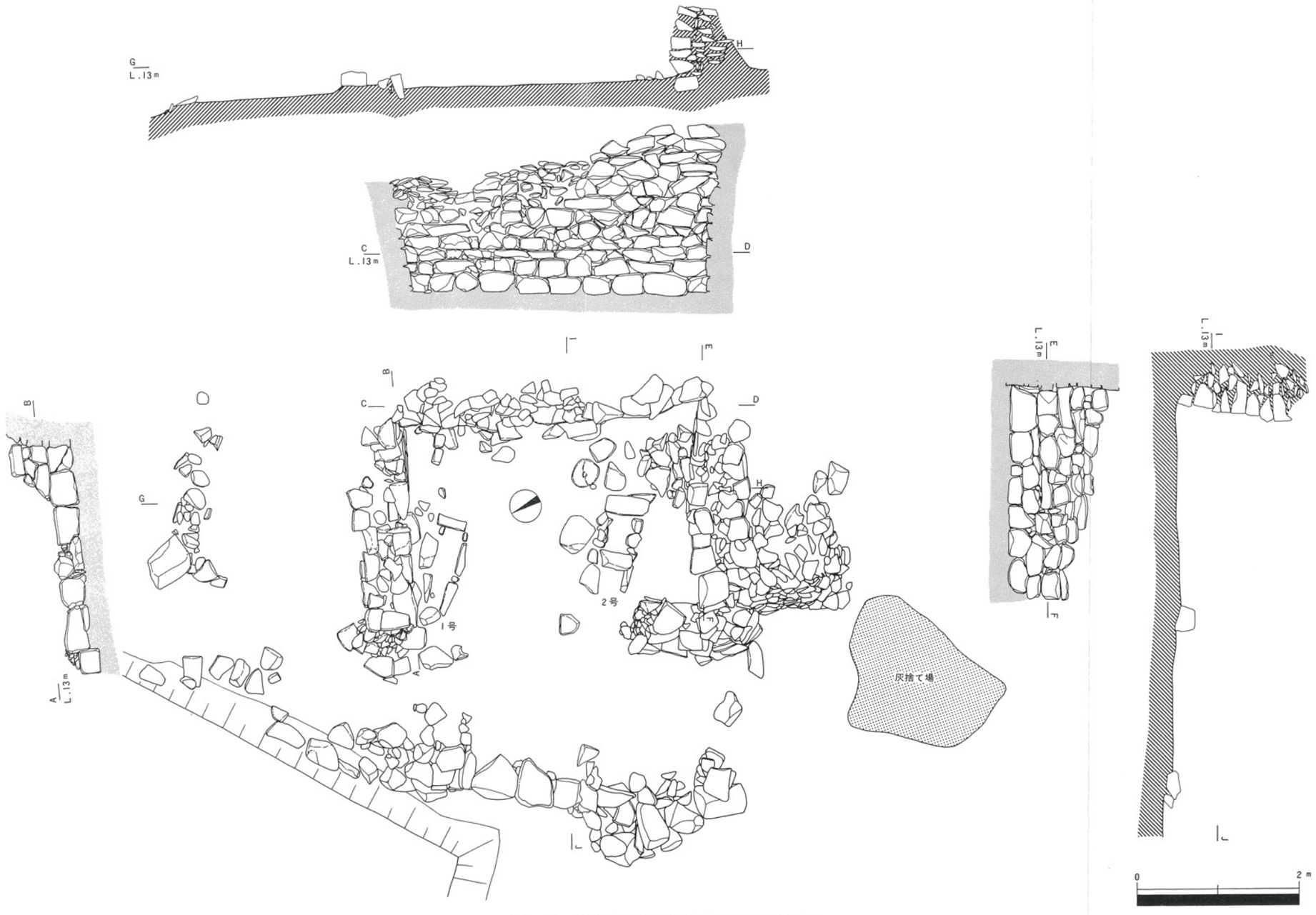


Fig. 6　第35区石切鍛冶仕事場跡遺構（2）

Ⅳ 遺　　構

（Fig. 5～8，ＰＬ．２～６）

第４トレンチ第14層より，石囲いの石切鍛治仕事場跡遺構を検出した。仕事場内では壁近くの床面にフイゴ火つぼ跡２基，仕事場外で灰捨て場跡を検出した。第４トレンチ第16層より，下部石列状遺構を検出した。

１．石切鍛治仕事場跡遺構

仕事場跡の現存規模は間口3.6m，奥行7.4mと間口3.6m，奥行2.5mである。仕事場内の砂の上に石屑を敷き床面としている。また，床面を切り込んでフイゴ火つぼ跡がつくられ，横に金床台が据えられている。砂岩の切石，40～50cmを積みあげ側壁（現高約１m），

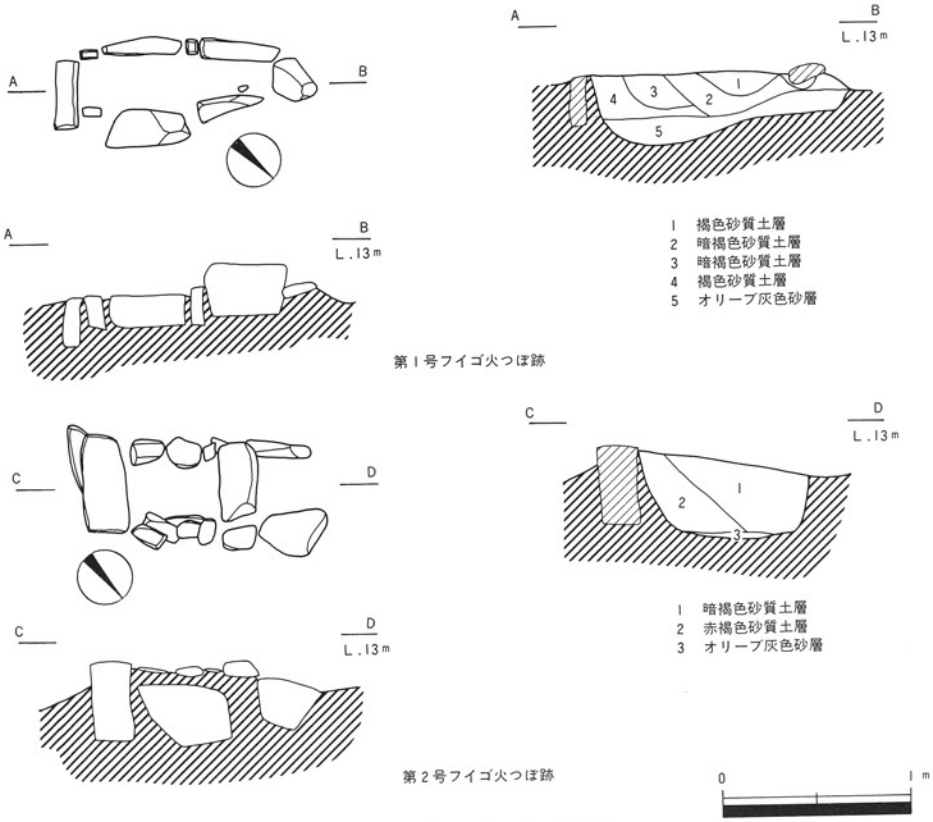


Fig. 7　第35区フイゴ場跡

Fig. 8　第35区下部石列状遺構

奥壁（現高約２ｍ）をつくっている。

１号フイゴ火つぼ跡は長さ135㎝，幅60㎝，深さ40㎝で耐火性の高い板石を２列に並べ溝状にし，板石と板石の間にレンガをはさみ，奥に板石を立て火が他に燃え移るのを防いでいる。火つぼ内の土層は５層に分かれ，１層から３層までは焼土・炭化物が入り，灰出し口は北西に向いている。

２号フイゴ火つぼ跡は長さ125㎝，幅60㎝，深さ45㎝で耐火性の高い板石を２列に並べ溝にし，一部ふた石をのせ奥には板石を立て，火が他に燃え移るのを防いでいる。火つぼ内の土層は３層に分かれ，１・２層には焼土・炭化物が入り，灰出し口は北西に向いている。東側には砂岩を荒く打ち欠いて作った金床台が据えられている。

２．下部石列状遺構

第４トレンチ第16層から，幅１ｍで東西に延びる砂岩の石列を検出した。石は20～30㎝でかなり風化しており，一時期は地表面に出ていたものと思われる。石列からは土器等の遺物は検出できなかったが，一部腐植土が確認できた。時期・性格等については不明である。

Ⅴ　遺　　物

（Fig. 9～15，Tab. 1，PL. 7～10）

本遺跡より出土した遺物は確認しえた限りでは総て近世以降のものであり，中には最近まで使用されていたものも含まれる。

１．陶磁器類

陶磁器類については(1)表土，(2)遺物包含層，(3)遺構上面，(4)灰捨て場の４項目に整理して述べておく。

(1)　表土

11は白磁紅皿である。白色の素地の胴部に蛸唐草の陰刻文をあしらい，内面は無文のまま青みをおびた釉を施す。外面の一部に釉が流れ付着している。型押し成形である。伊万里系。６は最近まで使用されていたと思われる磁器碗である。白色の素地に透明釉を施し，

外面に紺色で城郭図のうつし絵。

(2) 遺物包含層

1・2・4・5・7～9・12～14は遺物包含層より出土した遺物で，1・4・7は瀬戸系，2・5・8・9は伊万里系の磁器碗である。

1は白色の素地にわずかに灰色をおびた釉を施し，藍色の呉須で見込に寿，胴部に赤，是の文字を染付。口縁部は少し外反する。瀬戸系。2は小片であるが碗と思われる。灰白色の素地に灰色の釉を施し，青灰緑色の呉須で胴部に縦縞文の染付。口縁部は少し外反する。伊万里系。4は白色の素地にわずかに青みをおびた釉を施し，藍色の呉須で胴部に秋草文，見込みに寿の染付。口縁部は少し外反する。瀬戸系。5は碗の一部と思われる。白色の素地にかすかに青味をおびた釉を施し，濁った藍色の呉須で胴部に線と波文の染付。

口縁部はまっすぐ立ちあがる。伊万里系。7は白色の素地に透明釉を施し，藍色の呉須で胴部に稲束文様の染付。口縁部はわずかに外反する。瀬戸系。8は灰白色の素地に明灰色の釉を施し，くすんだ藍色の呉須で胴部に秋草文の染付。見込みに不明文様あり。高台畳付に緋色がみられ砂が付着している。口縁部はわずかに外反する。伊万里系。9は灰白色の素地に灰色がかった釉を施し，くすんだ藍色の呉須で胴部に縦縞文・波文，見込みに井筒文の染付。口縁部はわずかに外反し，高台畳付に砂が付着している。伊万里系。13は小片であるが七輪かと思われる。素地は土師質で薄茶色を呈し，小石がまじる。内外面にロクロ目がみられ，内面は口辺部直前までクシ目を施し，煤が付着している。12は近世陶器の徳利で大谷系である。素地は赤褐色で外器面近くは黒っぽく発色する。外面には暗褐色の釉を施し，酒井屋の彫り字を配す。内外面に明瞭なロクロ目がみられる。14も小片であるが大谷系の徳利と思われる。素地は灰色で外面に黒褐色の釉を施し，酉ではないかと思われる彫り字を配す。

(3) 遺構上面

3は猪口で灰白色の素地に灰色がかった釉を施し，くすんだ藍色で胴部に線に波文の文様を染付。高台畳付に緋色がみられる。伊万里系。10は底部付近のみであるが碗と思われる。黄味をおびた灰白色の素地に灰色がかった釉を施し，くすんだ藍色の呉須で胴部に稲束文様を染付。見込みにも文様がみられるが欠損のため不明である。広東碗と呼ばれるものである。伊万里系。

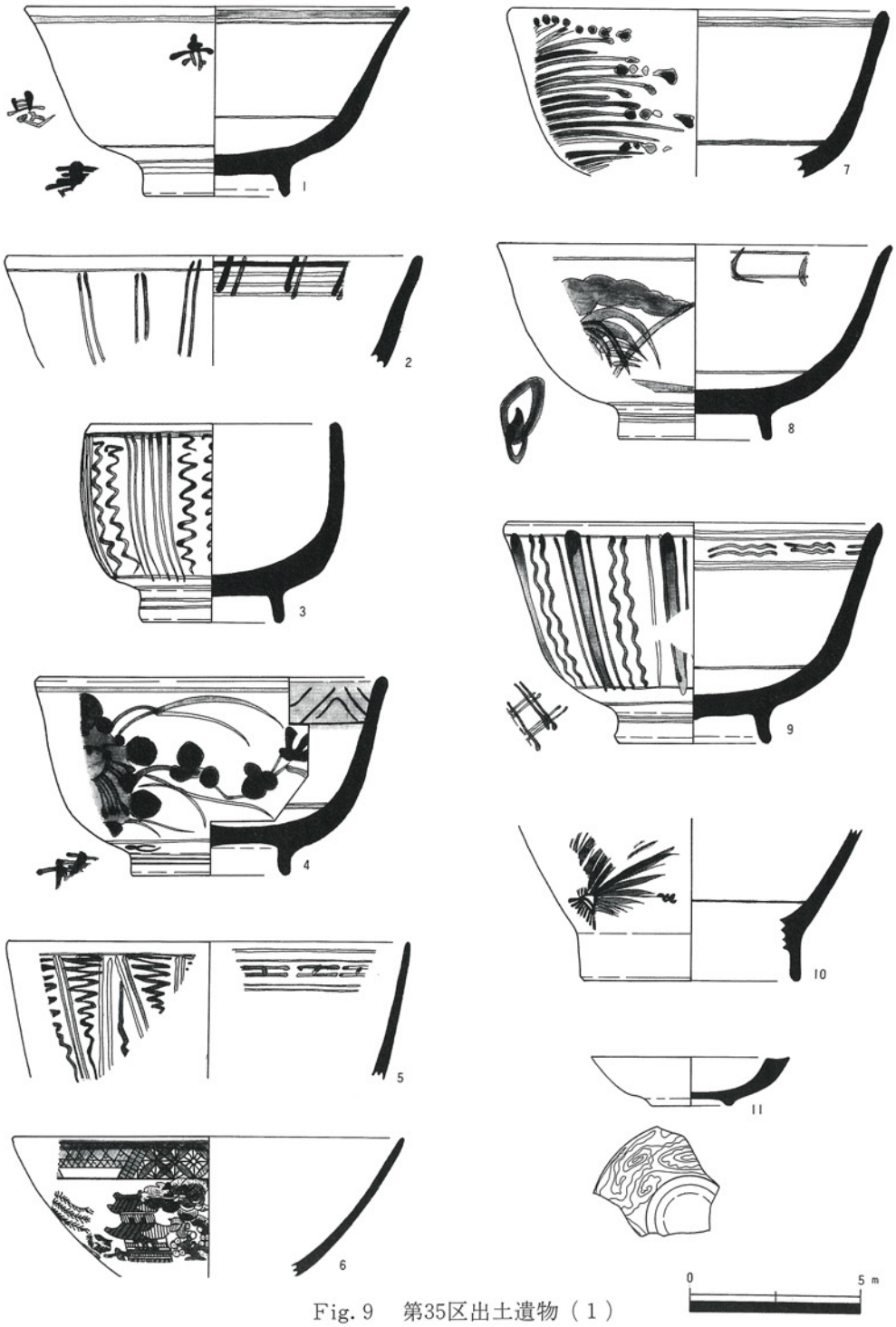


Fig. 9　第35区出土遺物（1）

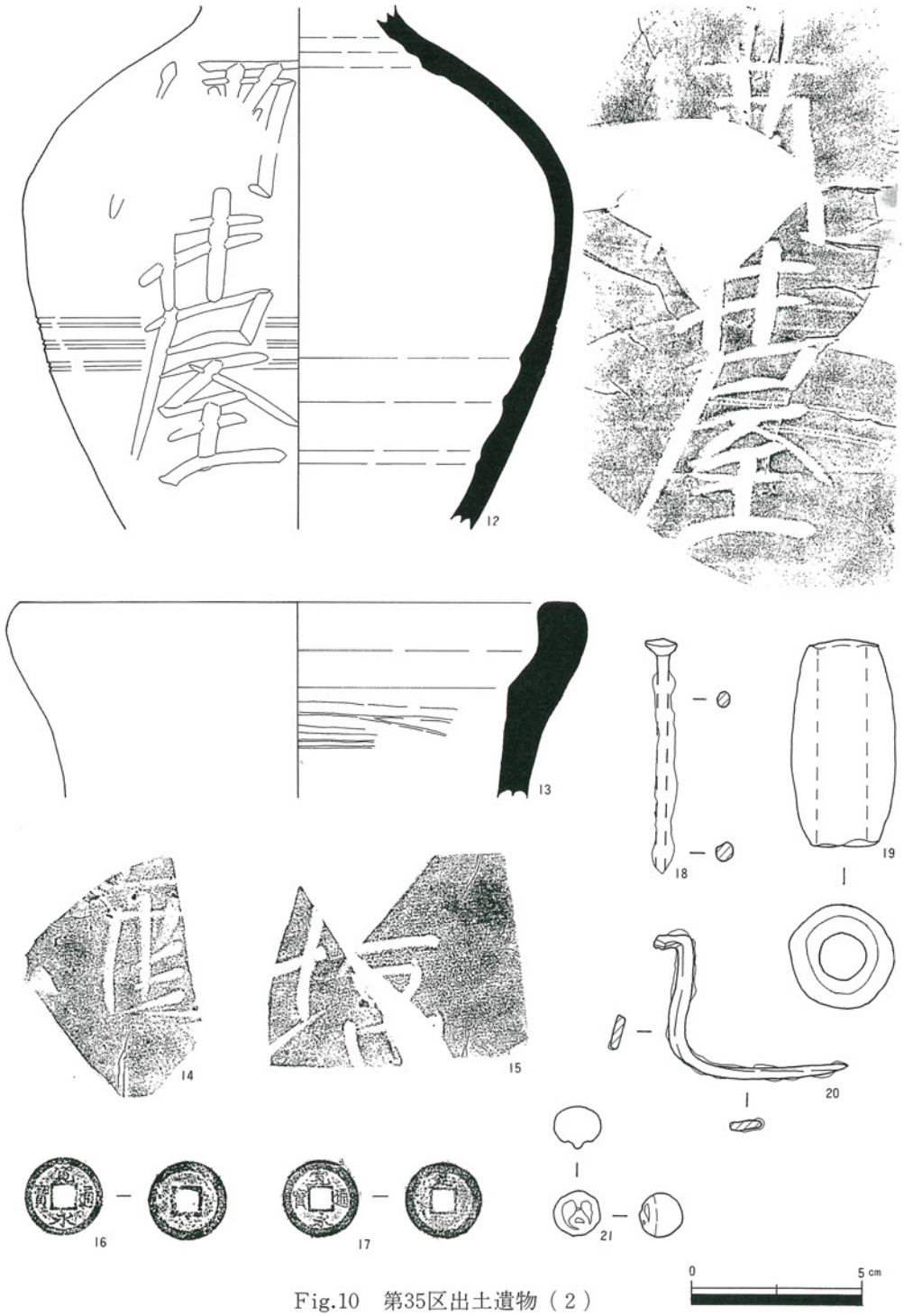


Fig.10　第35区出土遺物（２）

(4) 灰捨て場

灰捨て場内より出土した陶磁器類は15の大谷系の陶器のみである。小片であるが徳利である。素地は中央部が灰色で内・外器面近くはより黒っぽく発色する。外面は暗褐色の釉を施し，塩の彫り字を配す。内面は無釉で褐色を呈する。

2．石切用具（矢）

24～30は遺構上面及至遺物包含層より出土した矢である。矢とは石材を割る鉄製の楔の

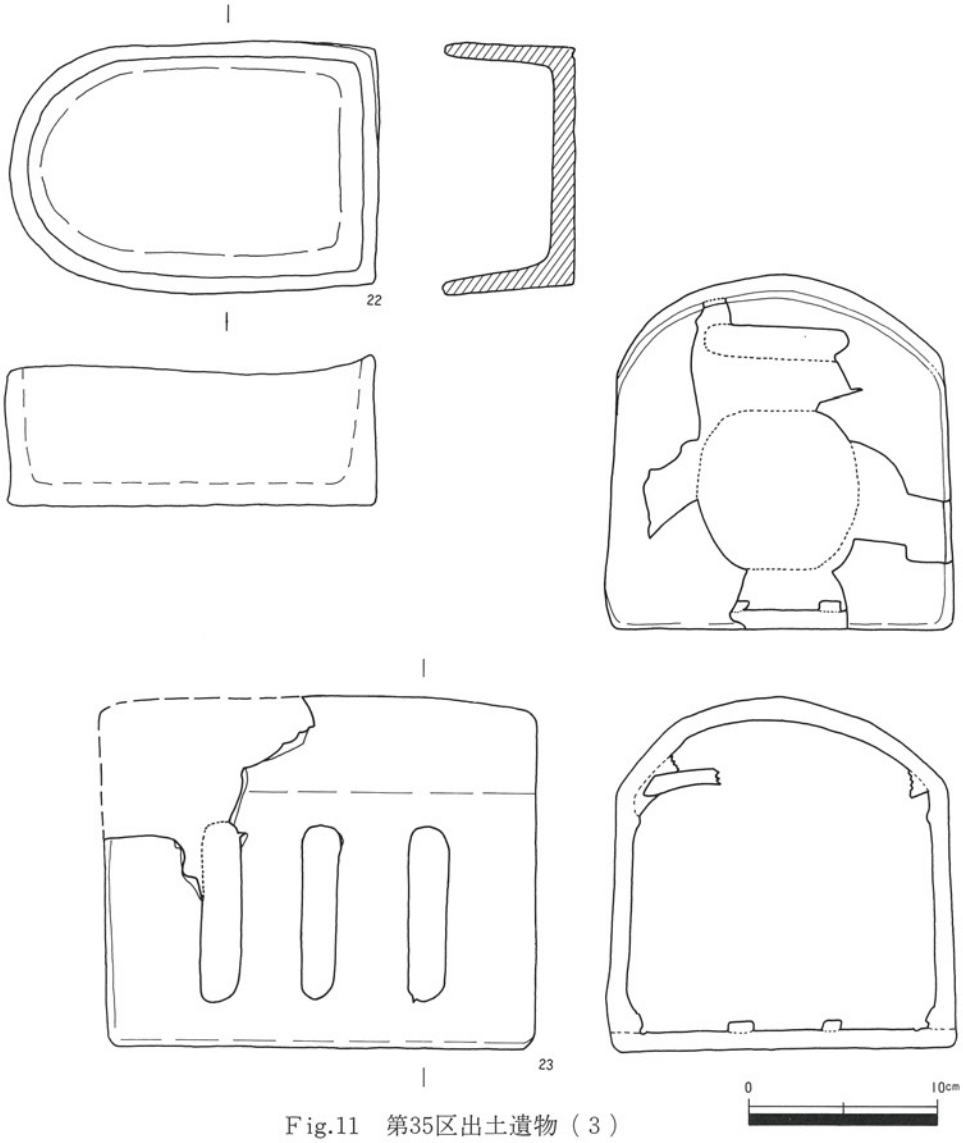


Fig.11　第35区出土遺物（3）

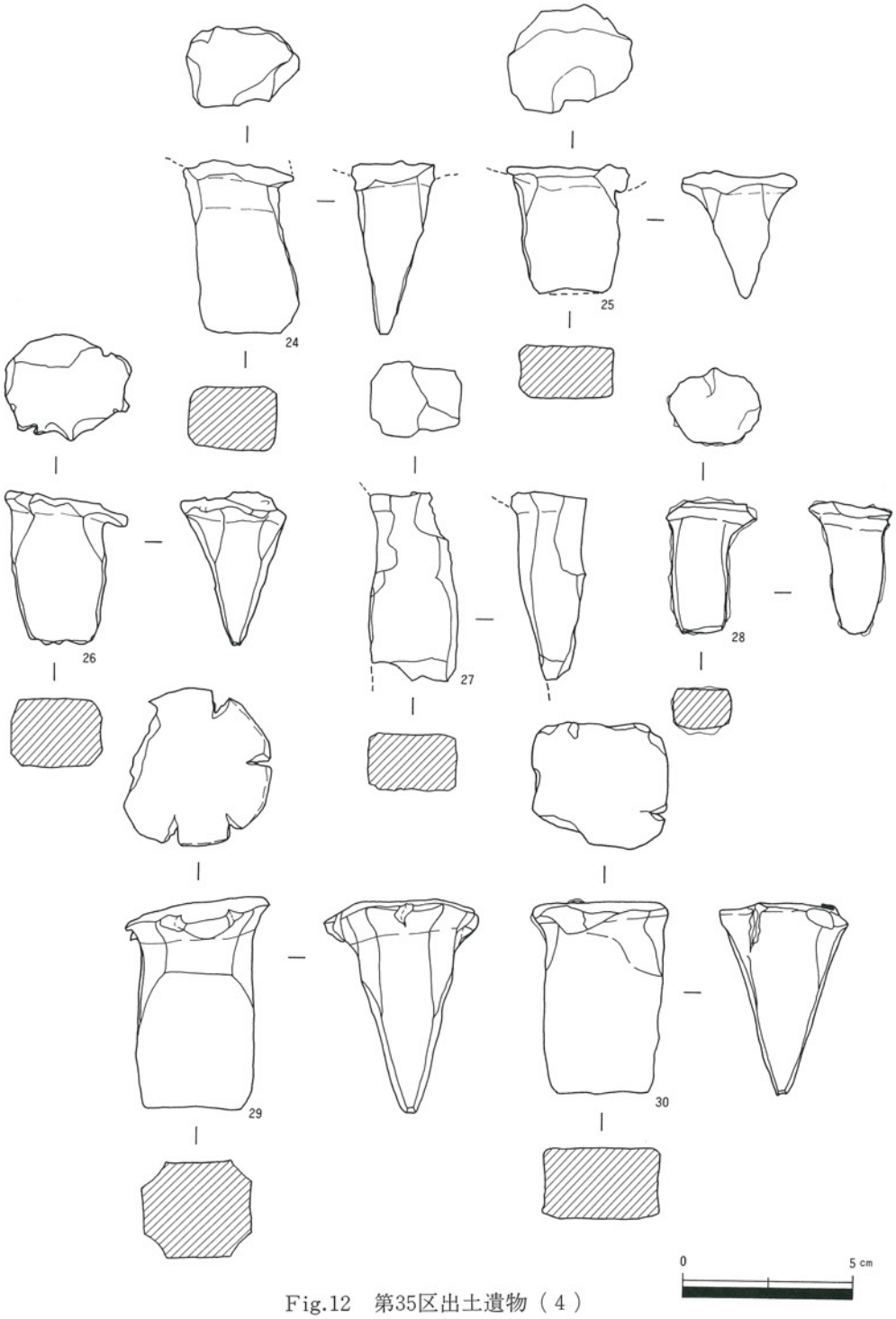


Fig.12　第35区出土遺物（４）

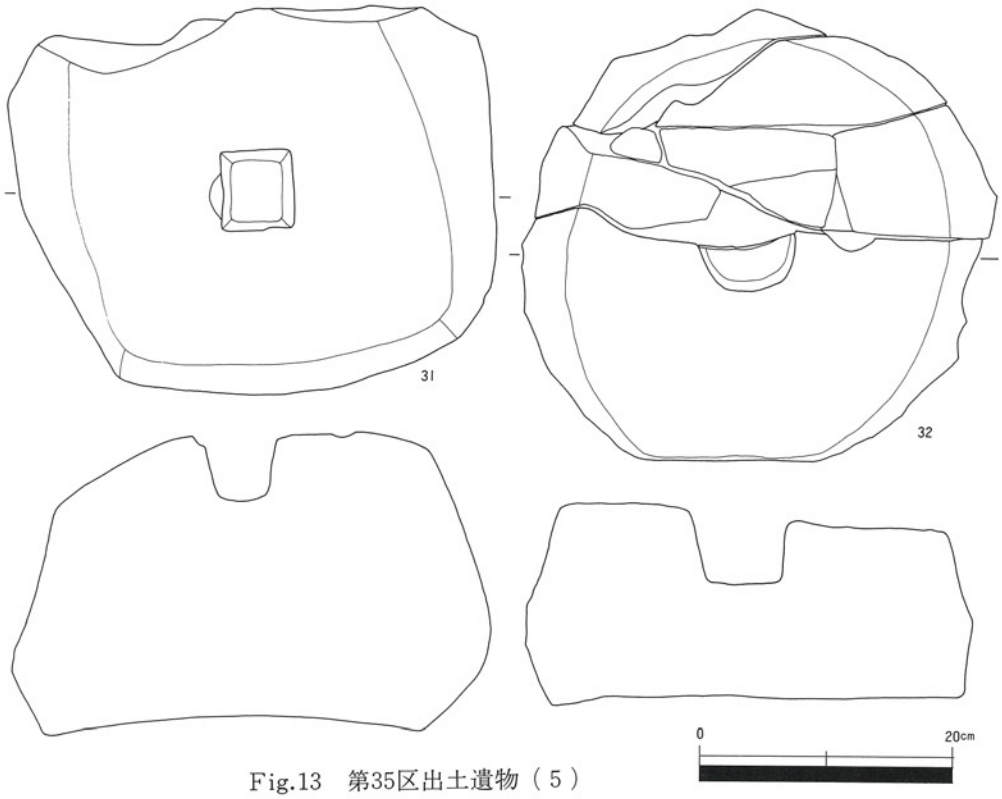


Fig.13　第35区出土遺物（５）

ことで，これを石材に適当な間隔に掘った矢穴に差し込んで，端から順次に同じ力で玄能で叩いて行くと石が割れる。用途により大小様々な形態がある。29は全長60㎜，幅31㎜，厚さ29㎜，重量291ｇ。30は全長55㎜，幅34㎜，厚さ21㎜，重量265ｇ。26は全長44㎜，幅29㎜，厚さ21㎜，重量115ｇ。24は全長53㎜，幅26㎜，厚さ19㎜，重量120ｇ。25は全長42㎜，幅28㎜，厚さ18㎜，重量100ｇ。27は全長57㎜，幅24㎜，厚さ16㎜，重量105ｇ。28は全長43㎜，幅25㎜，厚さ22㎜，重量70ｇ。

３．鍛治用具等

石切作業では道具の摩耗が激しく，常に道具の刃先を尖らせて焼きを入れる鍛治を，しなければならなかった。石屋は鍛治ができなければ一人前といわれなかった所以である。

(1)　鉄製品

33・35・36・39・40は石切り場で採集した鍛治道具である。いずれも鉄製で石材加工機

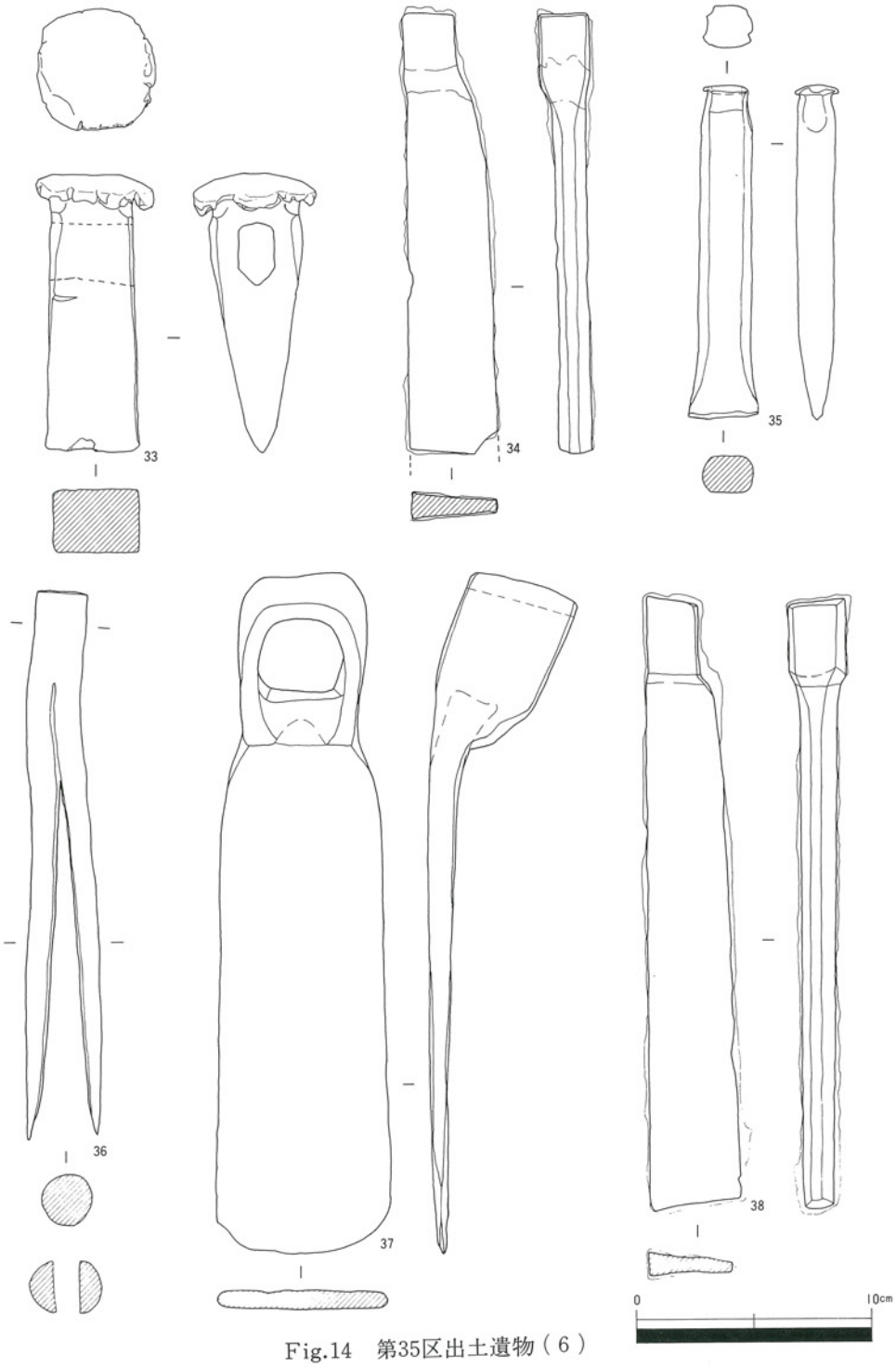


Fig.14　第35区出土遺物（６）

械が導入されるまで，使用されていたと思われる新しいものであるが，遺構上面及び包含層より出土した24～30・34・38との関連から参考として述べていく。

39・40ははしを焼いた道具をはさむ金ばさみである。様々な形状があるが，この２点ははさむ部分が丸くなった丸はしである。36等の棒状のものをはさんだと思われる。40は全長447㎜，重量785ｇ。39は全長424㎜，重量780ｇ。36は棒状の鉄の中心を縦に切断して先を開いたもの。中央より先は平たく加工してあるが，用途は不明である。全長223㎜，重量545ｇ。33はたがね。鉄を切断するのみである。木製の長い柄がつく。全長130㎜，刃幅28㎜，重量281ｇ。37は唐鍬。開墾用の鍬で刃は堅牢で重い。山から石材を切り出す時に，岩盤の上に堆積している土砂を取り除くのに使用したのかも知れない。全長291㎜，幅73㎜，厚さ８㎜，34・38は矢とともに遺構上面及至遺物包含層より出土した鉄製品である。製作途中の加工材かと思われる。38は全長244㎜，幅41㎜，厚さ14㎜，重量625ｇ。

34は全長201㎜，幅40㎜，厚さ13㎜，重量425ｇ。

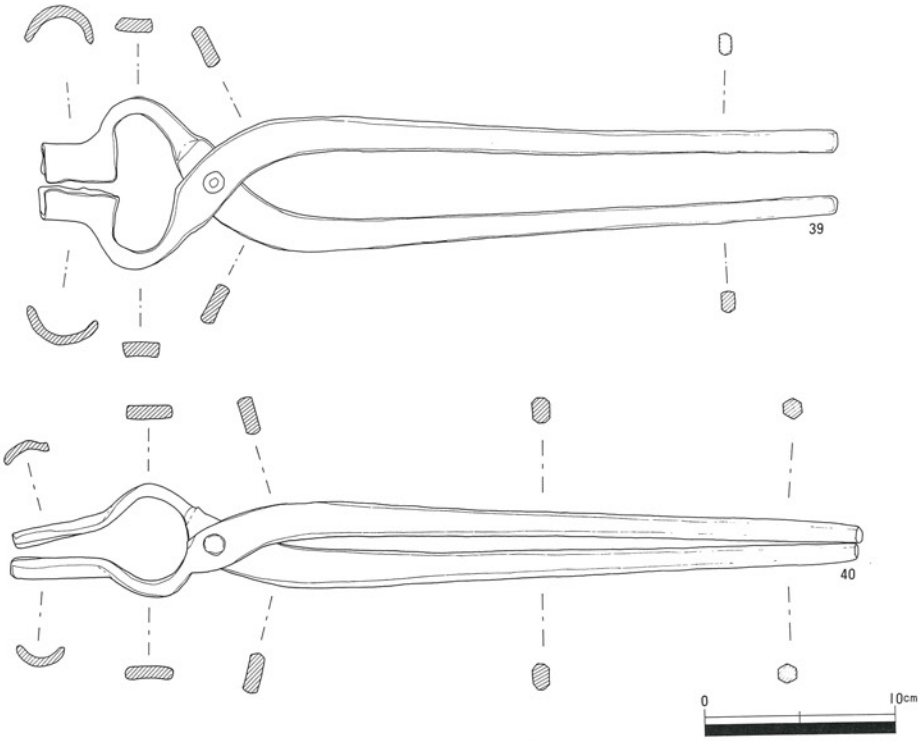


Fig.15　第35区出土遺物（７）

(2) 石製品

31・32は金床台。上部の四角い穴に金床（鉄を鍛える地鉄製の石）の下部の突起を差し込んで固定する。31は石切り場で採集，32は石囲いの石として転用されていたものである。

31は現存する最大幅約375㎜，最大厚240㎜。32は最大直径約370㎜，最大厚約160㎜。

4．その他の出土遺物

20は船釘，18は丸釘で，いずれも遺構上面及至包含層より出土。鉄製。20は全長100㎜，最大幅約14㎜。18は全長約68㎜，直径約45㎜。19は土錐で完形品である。土師質で色調は薄茶色，胎土は砂粒を含む。手捏により作製される。管状単孔式。遺物包含層より出土。

全長60㎜，外直径最大20㎜，内直径14㎜。21は鉛玉。火縄銃の弾丸である。発射されて変形しており，表面は灰白色に変色している。遺物包含層より出土。直径13㎜，重量12ｇ。

16・17は銅銭。15の大谷系陶器とともに，灰捨て場内より出土した寛永通宝である。17は背に足の文字のある下野足尾銭座（1742～1746年）の鋳造である。16は直径22.5㎜，17は直径22㎜。22・23は行火。表土より出土。22に火を起した木炭を入れ（丸くなった方から），23の中に納めて使用する。23の天井部は空間を設けた３枚重ねであると思われるが，外郭のみが残存する。22・23ともに土師質で粘土板成形である。22は縦131㎜，横193㎜，高さ78㎜，底部厚さ11㎜。23は縦180㎜，横227㎜，高さ187㎜，底部厚さ10㎜。徳島県麻植郡川島町で生産された，川島焼の汽車ごたつとみられる。

Ⅵ まとめ

石切鍛治仕事場について

石切鍛治仕事場跡からは近世陶磁器（碗・猪口・土瓶・徳利等），銅銭（寛永通宝），鉄製品（矢・ノミ等）が出土している。近世磁器は染付の高台碗（広東碗），口縁部を少し外反させた日常雑器碗等，伊万里系が主である（註１）。近世陶器は仕事場内及び灰捨て場跡から，酒井屋・塩・酉等とヘラ様の道具で陰刻された徳利が出土している（註２）。

銅銭は灰捨て場跡から寛永通宝で，背に足の字のあるものが出土している。下野足尾銭座鋳造のものと思われる（註３）。

次に撫養石の石切り場について述べる。撫養石は阿讃山脈東端の撫養地方の山々から切り出され，建設用材・塩田堤防用材・石碑材等に古くから利用されてきている。宝暦（1751

～1763)頃までは高島村に限られており，後には所々に石切り場ができた様である(註４)。また，天保５年（1835）頃には藩営とされ，天保９年（1839）頃には販売に対する保護政策がとられている。

以上，出土遺物・文献等から考えると，石切鍛冶仕事場跡遺構が使用されたのは，江戸時代後期以降であると思われる。また，大毛島周辺には石切り場は数多くあるが，その歴史についてはまだ十分にはわかっていない。今回調査した第35区周辺の山は，鍛冶仕事場跡が使用されていた時期に石切り場として使用されていたものと思われる。

註

註１　「肥前陶磁編年図表」のⅣ期，1780～1860年代（天明～慶応）に相当するものと思われる。「北海道から沖縄まで　国内出土の肥前陶磁器」佐賀県立九州陶磁文化館　'84年

註２　板野郡撫養近在には寛政７年（1795）の頃に次の造酒屋があった。

「鳴門市史」上巻　'84年

土佐泊浦 高島村	造酒屋 造酒屋	壱軒	塩　屋 酒井屋	茂吉 九郎左衛門

註３　寛保下野足尾所鋳造のものは，裏面に鋳造地を表わす足の字がある。これには大字・小字の別があり，銭形にも大・中・小がある。1742～1746年に鋳造されたものと思われる。「日本貸幣図鑑」郡司勇夫編　東洋経済新報社　'81年

註４　「－　石取り場　此石取場塩浜普請手当ニ被下置候石口ニ而住古ゟ今ニ不尽先年より此所江泉州墓造り村より石工罷越シ渡世仕近年ハ黒崎南浜其外所々ニ石工多シ宝暦年中迄ハ此処に限る」「戸辺集」鳴門市史上巻

Tab. 1　第35区出土陶磁器類観察表

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
1	磁器	碗	見込み：藍色で寿文字の呉須染付 外面：藍色で赤及び是文字の呉須染付 畳付釉ハギ，施釉	口径 11.0 器高 5.5 高台径 4.0 高台高 0.8	胎土：白色 釉：灰色をおびた半透明 瀬戸系，外反
2	磁器	碗	外面：青灰緑色で縦縞文の呉須染付 口縁部：圏文，施釉	口径 11.8	胎土：灰白色 釉：灰色の半透明 伊万里系
3	磁器	猪口	外面：くすんだ藍色で波文線の呉須染付 施釉	口径 7.0 器高 5.8 高台径 3.9 高台高 0.9	胎土：灰白色 釉：灰色をおびた半透明，畳付に緋色・砂粒付着。伊万里系
4	磁器	碗	見込み：藍色で寿文字を外部：秋草文を呉須染付 内面口縁部：幾可学文様 畳付釉ハギ，施釉	口径 9.9 器高 5.8 高台径 4.4 高台高 0.7	胎土：白色 釉：青味をおびた透明 瀬戸系
5	磁器	碗	外面：濁った藍色で波線文の呉須染付 施釉	口径 11.5	胎土：白色 釉：かすかに青味をおびた半透明 伊万里系
6	磁器	碗	外面：紺色で城郭図の呉須染付 施釉	口径 11.2	胎土：白色 釉：透明
7	磁器	碗	外面：藍色で稲束文の呉須染付 施釉		胎土：白色 釉：白色の半透明 瀬戸系
8	磁器	碗	見込み：不明文様 外面：くすんだ藍色で秋草文の呉須染付 施釉	口径 11.3 器高 5.7 高台径 4.3 高台高 0.8	胎土：灰白色 釉：明灰色の半透明 畳付に緋色・砂粒付着 伊万里系
9	磁器	碗	見込み：くすんだ藍色で井筒文 外面：縦縞文波文を呉須染付 施釉	口径 10.8 器高 0.4 高台径 4.3 高台高 0.8	胎土：灰白色 釉：灰色をおびた半透明，畳付砂粒付着 伊万里系
10	磁器	碗	見込み：文様あり 外面：くすんだ藍色で稲束文の呉須染付 施釉	高台径 6.2 高台高 1.4	胎土：黄味をおびた灰白色，釉：灰色がかった半透明，広東碗，伊万里系，貫入あり

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
11	磁器	皿	外面：蛸唐草文 型押し成形	口径 5.7 器高 1.4 高台径 2.3 高台高 0.2	胎土：白色 釉：青味をおびた半透明，外面無釉，紅皿 伊万里系
12	陶器	徳利	内外面：ロクロ目 胴部に酒井屋文字を彫り字		胎土：赤褐色 釉：暗褐色 大谷系
13	土師質土器	不明	内外面：ロクロ目 内面：口辺部直前までクシ目	口径 16.2	胎土：薄茶色，無釉 内面煤付着
14	陶器	徳利	胴部：酉文字を彫り字		胎土：灰色 釉：黒褐色 大谷系，拓影
15	陶器	徳利	胴部：塩文字を彫り字		胎土：灰色 釉：暗褐色，内面褐色 大谷系，拓影

第　38　区

本　文　目　次

Ⅰ　位置と環境
Ⅱ　調査の経過
Ⅲ　基本層序
Ⅳ　遺　　構
Ⅴ　遺　　物
Ⅵ　ま と め

挿　図　目　次

Fig. 1　第38区位置図
Fig. 2　第38区地形測量・トレンチ配置図
Fig. 3　第38区トレンチ層序
Fig. 4　第38区土塁状遺構(1)
Fig. 5　第38区土塁状遺構(2)
Fig. 6　第38区出土遺物(1)
Fig. 7　第38区出土遺物(2)
Fig. 8　第38区出土遺物(3)

表　目　次

Tab. 1　第38区出土陶磁器類観察表
Tab. 2　第38区出土弥生式土器・土師器類観察表

図 版 目 次

ＰＬ．１　第38区全景
ＰＬ．２　第38区土塁状遺構
ＰＬ．３　第38区土塁状遺構
ＰＬ．４　第38区土塁状遺構
ＰＬ．５　第38区Ａ・Ｂトレンチ土層
ＰＬ．６　第38区Ａ・Ｂ・Ｄトレンチ
ＰＬ．７　第38区Ａトレンチ土器出土状況
ＰＬ．８　第38区出土遺物(1)
ＰＬ．９　第38区出土遺物(2)
ＰＬ．10　第38区出土遺物(3)

Ⅰ　位置と環境

（Fig. 1・2，ＰＬ．1）

第38区は大毛島を南北に連なる山系が野地区で大きく入り組んで，東に延びる支脈の山裾標高４～19mにある。傾斜地の形成は山系の小溪谷の侵蝕作用と堆積作用によるものと思われる。調査区西側の岩に海蝕痕が見え，旧海岸線は複雑に入り組んでいたと思われる。

調査区東の山裾には小溪谷からの流水を溜める池状の凹地があり，その南は水田及び畑地となっている。池状の凹地の北側傾斜地には土塁が連なっている。

Ⅱ　調査の経過

昭和52年度の鳴門架橋に係る道路建設に伴う埋蔵文化財精密分布調査（以下，分布調査とする）の成果に基づき，第38区においては昭和58年度に確認調査を行うこととなった。

調査期間は11月21日から３月24日であり，第37区の調査と同時に行った。

調査日誌抄

11月21日　発掘調査準備作業

30日　伐採作業開始

12月８日　地形測量開始

14日　トレンチ掘り下げ開始

19日　Ａトレンチより土師器片，須恵器出土

１月９日　Ａトレンチ写真撮影，Ｃ・Ｄトレンチ堀り下げ

24日　Ｂトレンチより弥生式土器，流木出土

２月14日　Ａ・Ｂトレンチ土層図作成

18日　Ｃ・Ｄトレンチ土層図作成

22日　石垣平面図作成

３月７日　石垣平面図・側面図作成

24日　発掘調査完了

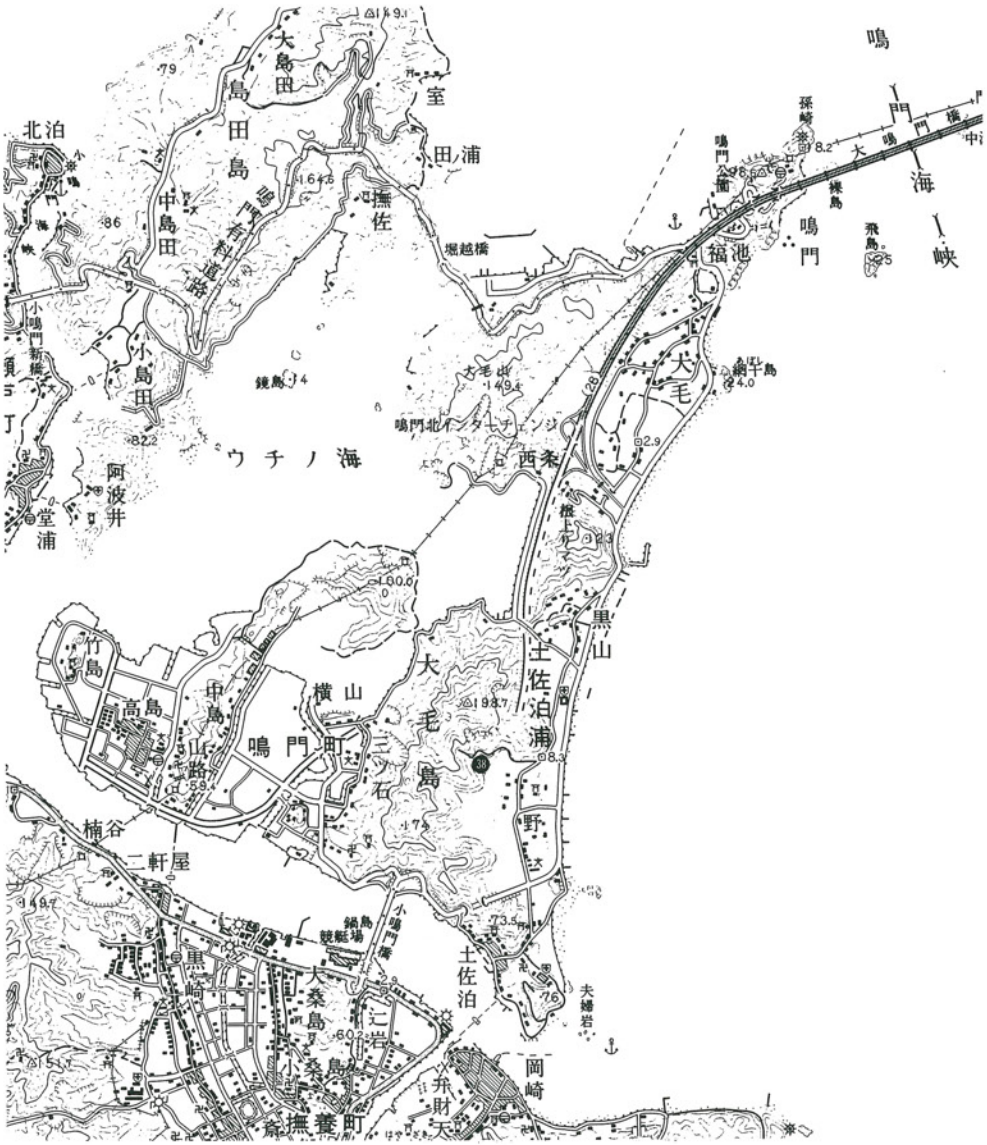


Fig. 1　第38区位置図

Ⅲ　基本層序

（Fig. 2・3，PL. 5・6・7）

1．Aトレンチ

第1層は10YR4/2，灰黄褐色粘質土層（表土）である。第2層は5YR5/8，明黄褐色粘質土層で土師器片を包含している。第3層は7.5YR5/3，にぶい褐色砂質土層で土師器片，須恵器を包含している。第4層は7.5YR4/2，灰褐色砂質土層で土師器片，炭化物等を包含している。第5層は10YR3/4，暗褐色粘質土層で炭化物を包含している。第6層は7.5YR4/4，褐色砂質土層である。第7層は5YR4/6，赤褐色砂質土層で砂岩礫を含んでいる。

第8層は5YR4/4，にぶい赤褐色砂質土層で砂岩崩壊石，炭化物を包含している。第9層は7.5YR5/8，明褐色砂質土層で砂岩礫，弥生式土器片を包含している。第10層は10YR4/4，にぶい黄褐色砂質土層で炭化物を含んでいる。第11層は10YR4/4，褐色砂質土層で炭化物を含んでいる。第12層は2.5GY4/1，暗オリーブ灰色砂質土層で自然木，炭化物を多量に含んでいる。第13層は7.5YR2/1，黒色粘質土層で炭化物，灰を多量に含んでいる。

第14層は砂礫層で弥生式土器片，自然木，炭化物，崩壊石を包含している。第15層は10GY1/5，緑灰色砂層で弥生式土器片，炭化物等を含んでいる。第16層は10GY4/1，暗緑灰色砂層で炭化物等を含んでいる。第17層は砂礫層で自然木を含んでいる。第18層は10GY4/1，暗緑灰色砂層で炭化物を含んでいる。

2．Bトレンチ

第1層は5YR3/2，暗赤褐色腐葉土（表土）層である。近世陶磁器片を包含している。

第2層は7.5YR4/4，褐色砂質土層で砂岩の崩壊土を含んでいる。第3層は10YR4/2，灰黄褐色粘質土層で土師器，炭化物等を含んでいる。第4層は10YR6/1，褐灰色粘質土層で崩壊土を含んでいる。第5層は10YR3/4，暗褐色砂質土層で崩壊石を含んでいる。第6層は5YR4/4，にぶい赤褐色砂質土層で土師器片，炭化物等を含んでいる。第7層は7.5YR6/3，にぶい褐色砂質土層で崩壊石を含んでいる。第8層は5YR4/4，にぶい赤褐色砂質土層で崩壊土を含んでいる。第9層は7.5GY6/1，緑灰色粘質砂性土層で砂岩礫，

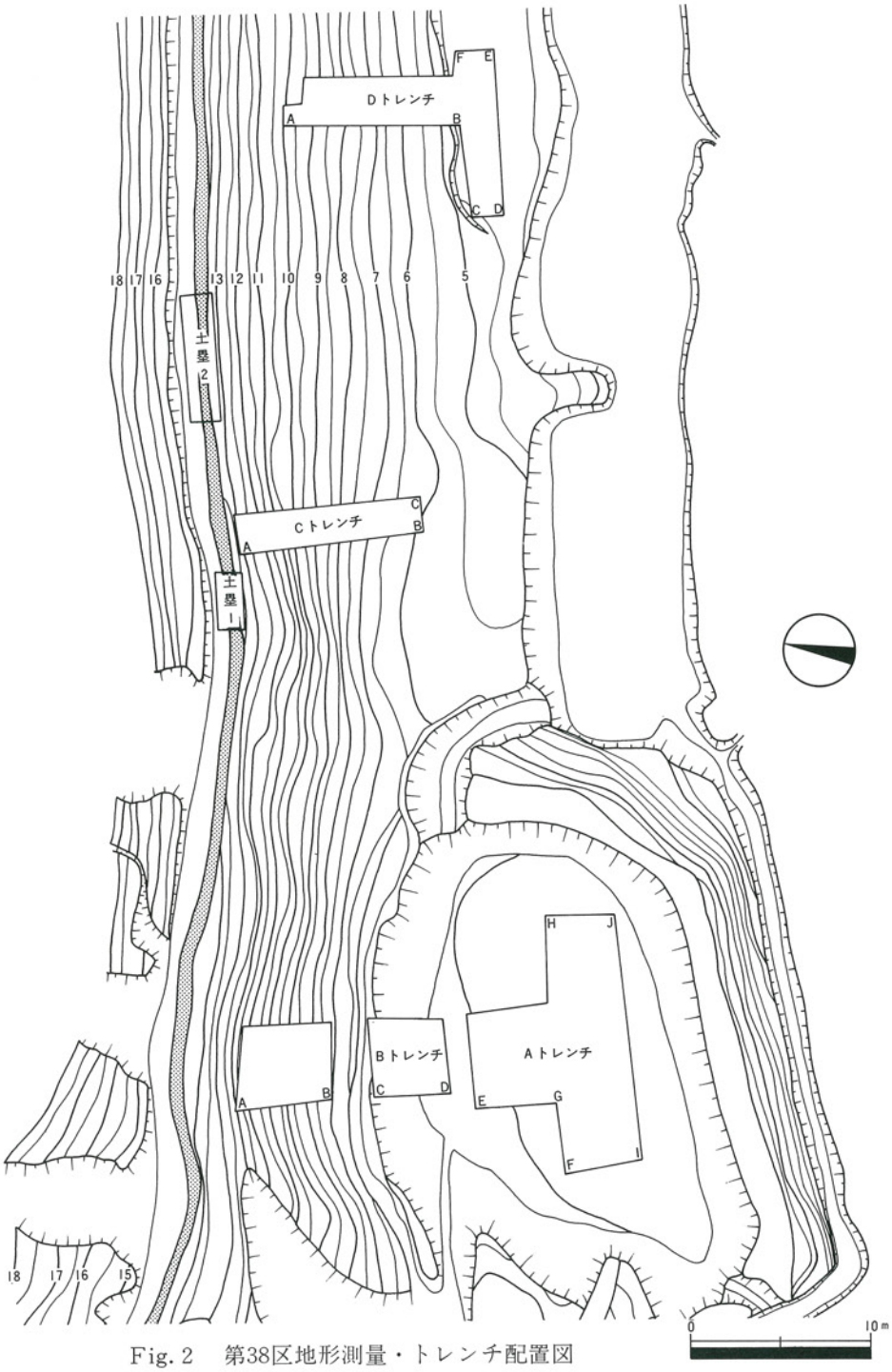


Fig. 2　第38区地形測量・トレンチ配置図

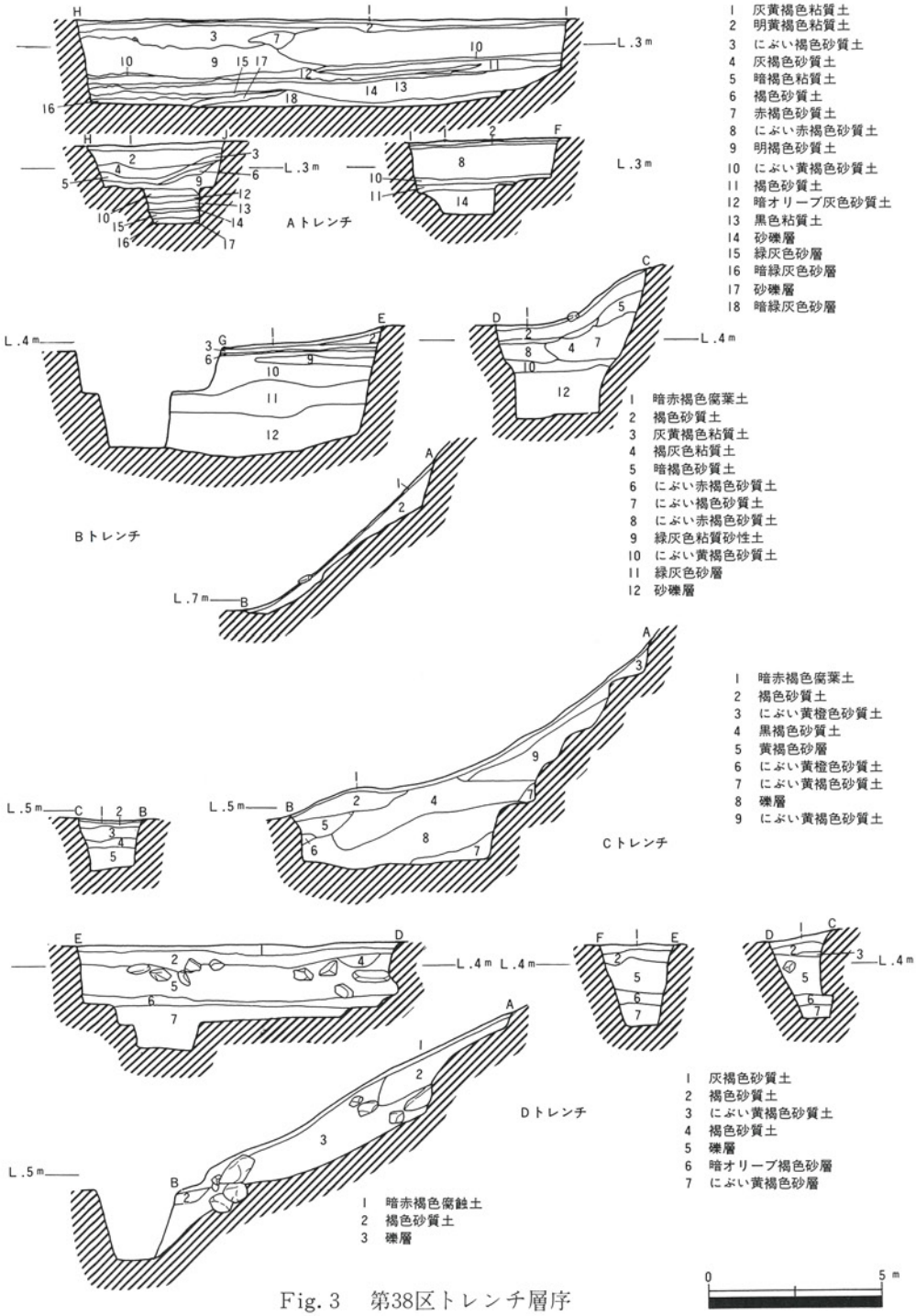


Fig. 3　第38区トレンチ層序

弥生式土器片等が混在して入っている。第10層は10ＹＲ$^{5}/_{4}$，にぶい黄褐色砂質土層で炭化物を含んでいる。第11層はＧＹ$^{5}/_{1}$，緑灰色砂層で弥生式土器片，木材，炭化物，崩壊石を含んでいる。第12層は砂礫層で弥生式土器片，砂岩の巨礫を含んでいる。この下層は岩盤となっている。以上からわかるように，小溪谷による侵蝕，堆積作用がくり返されていて，安定した状態での遺構の検出はむずかしく，遺物は流入してきたものと思われる。

３．Ｃトレンチ

第１層は５ＹＲ，暗赤褐色腐葉土（表土）層である。第２層は10ＹＲ$^{4}/_{4}$，褐色砂質土層で近世陶磁器片を包含している。第３層は10ＹＲ$^{6}/_{3}$，にぶい黄橙色砂質土層で砂岩崩壊土を含んでいる。第４層は５ＹＲ$^{2}/_{2}$，黒褐色砂質土層で腐葉土，砂岩焼石が混入している。

第５層は2.5Ｙ$^{5}/_{4}$，黄褐色砂層である。第６層は10ＹＲ$^{6}/_{4}$，にぶい黄橙色砂質土層である。第７層は10ＹＲ$^{5}/_{4}$，にぶい黄褐色砂質土層で崩壊石混りである。第８層は礫層で砂岩崩壊石が堆積している。第９層は10ＹＲ$^{5}/_{3}$，にぶい黄褐色砂質土層で崩壊土混りである。

４．Ｄトレンチ

第１層は５ＹＲ$^{4}/_{2}$，灰褐色砂質土（表土）層である。第２層は7.5ＹＲ$^{4}/_{4}$，褐色砂質土層で崩壊石混りである。近世陶磁器を包含している。第３層は10ＹＲ$^{5}/_{4}$，にぶい黄褐色砂質土層である。第４層は10ＹＲ$^{4}/_{4}$，褐色砂質土層で炭化物混りである。第５層は礫層で砂岩礫の堆積層である。第６層は2.5Ｙ$^{3}/_{3}$，暗オリーブ褐色砂層で炭化物混りである。第７層は10ＹＲ$^{4}/_{3}$，にぶい黄褐色砂層で無遺物層である。

Ⅳ　遺　　構

（Fig. ４・５，ＰＬ．２・３・４）

１．土塁状遺構

大毛山系の山裾標高14mに位置し，規模は幅１m，高さ1.5m，長さ100m以上で，傾斜面を幅２m程切りくずし，10～80㎝大の砂岩切石を３～５段石垣状に積んでいる。土塁の断面は台形状を呈し，両端に80㎝大の切石を据え，間に小切石と土をつめた構造である。

上部は石の風化がはげしく原形をとどめない状態である。一部に石ノミの痕が残った切

石が出土している。土塁の山裾側は幅１m程の山道となっている。

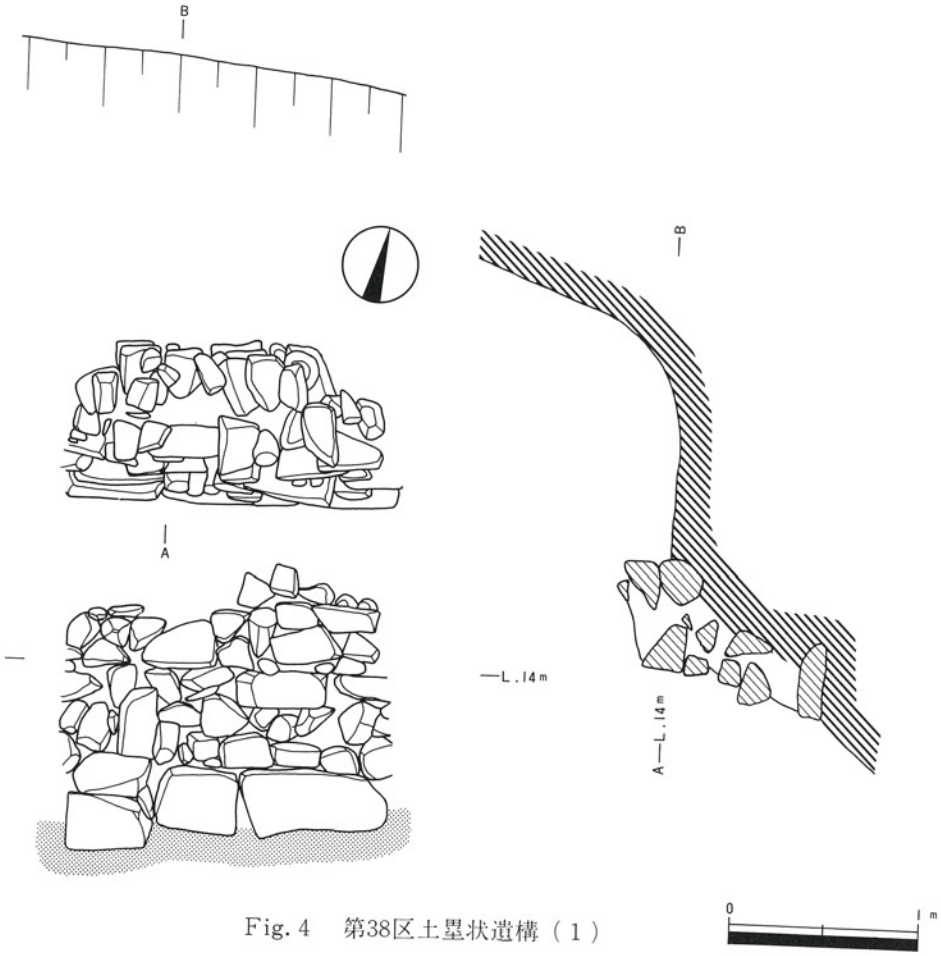


Fig. 4　第38区土塁状遺構（１）

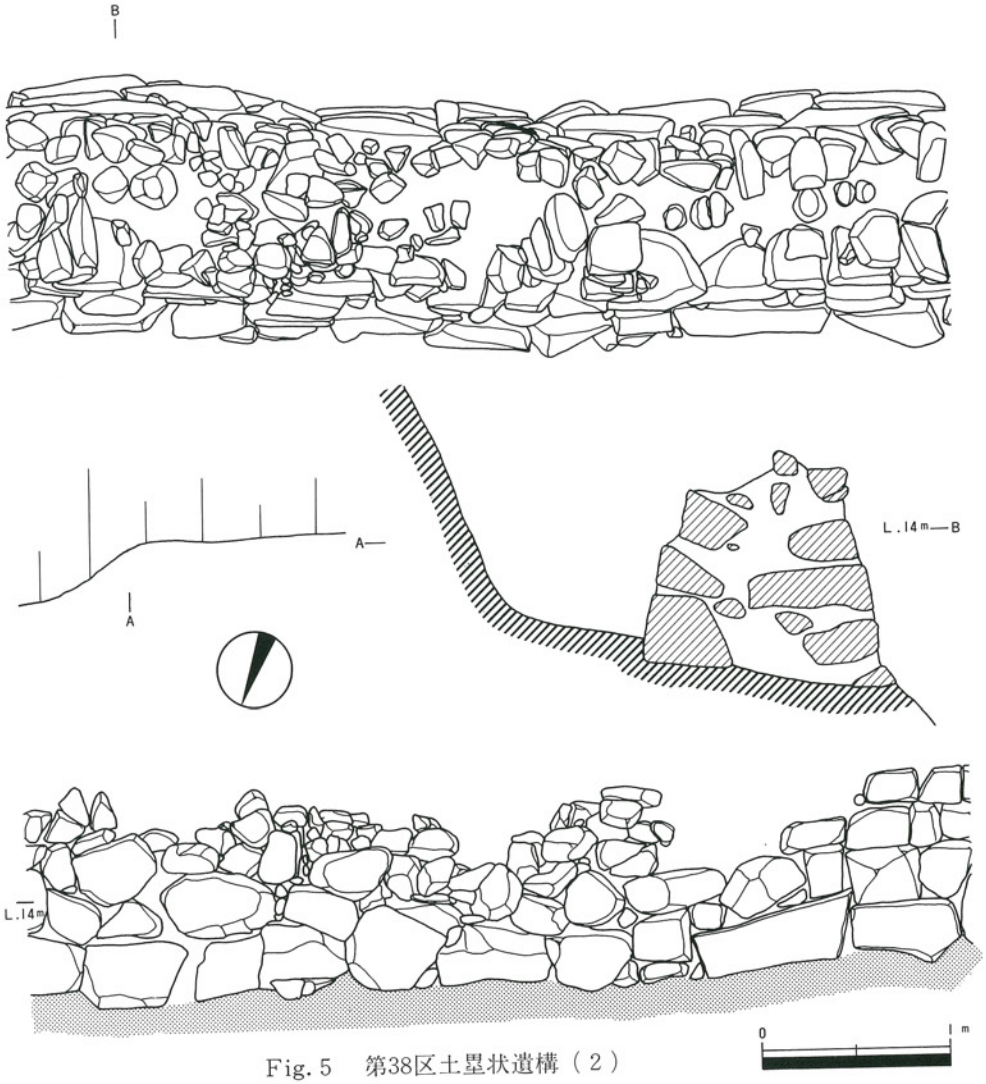


Fig. 5　第38区土塁状遺構（２）

V 遺　　物

（Fig. 6～8，ＰＬ．8～10）

第38区出土遺物は鉄錘，弥生式土器，土師器，灰釉陶器，そして近世～現代に亘る陶磁器片である。本区については表土と遺物包含層に分類して述べることにする。なお，本区では遺構からの出土遺物はない。

1．表　　土

表土出土の遺物は近現代陶磁器類である。1，2は染付の碗と思われる。1は内外面に藍色で秋草文を配している。白色の素地に青味をおびた釉を施す。口縁部が少し外反する。

伊万里系。2は胴部に濁った藍色の呉須で松竹梅文を施し，内面口縁部に梅に波文を配している。全体に気泡を含む。伊万里系。5は絵付磁器の山蓋でつまみを持たないものである。外面に笹に流水文，内面に白色の細かい渦巻を施している。3は銅版摺の碗で，8は同じく鉢である。3は百人一首カルタ図で発色が極めて悪い。8は胴部に巻物図，内面口縁部に唐草文を配している。銅版摺。6は現代磁器と思われる。4，9，7は陶器で，4，9は皿である。4は明るい灰色の素地に明灰白色の釉を施し，高台及び外面底部は無釉。内外面に薄い藍色の呉須で渦巻き文を配し，口錆を施している。9は黄土がかった白色の素地に黒味をおびた黄褐色の釉を施している。底部は無釉。細かい貫入がみられる。

内部及び底部に砂が付着している。7は大谷系であるが小片のため器種は不明である。

赤味をおびた茶色の素地にわずかに緑がかった褐色の釉を施す。外面底部及び内面は無釉。内面は赤褐色を呈す。

2．遺物包含層

包含層出土の遺物は近世磁器，灰釉陶器，土師器，弥生式土器及び鉄錘である。10は染付磁器の徳利と思われる。灰白色の素地に青灰色をおびた釉を施し，くすんだ藍色の呉須で胴部と高台部に横施文を配している。内面は無釉。伊万里系。11は灰釉陶器であるが小片のため器種は不明である。雲母と小砂粒を含む，灰白色の素地に胴部及び高台に灰釉を施す。高台端部にも灰釉が付着している。高台は貼り付けで外方向に張り出し，端部は内傾する。紐土巻き上げ成形か。12～19は土師器の杯，皿と思われる。完形品はなく状態も

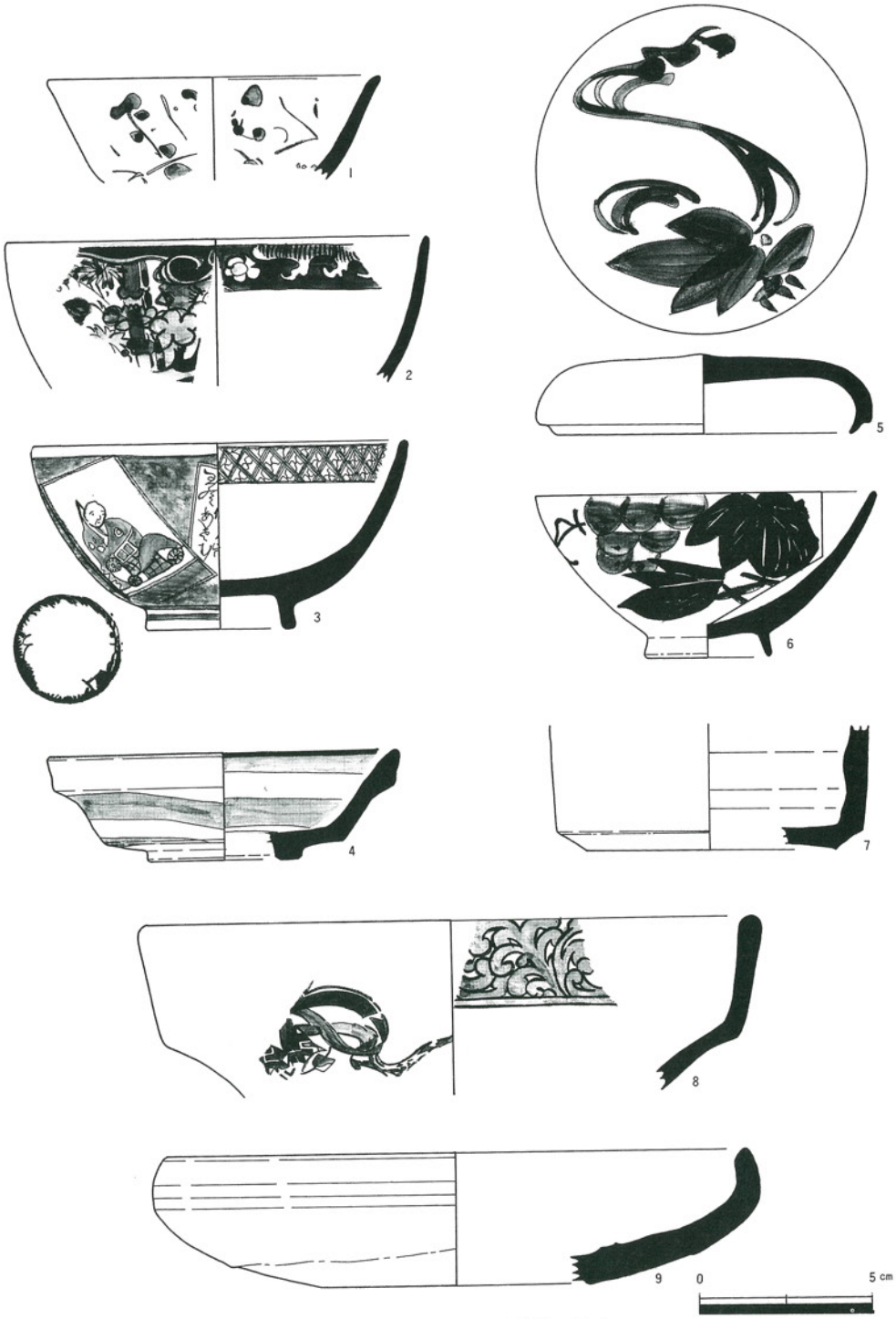


Fig. 6　第38区出土遺物（1）

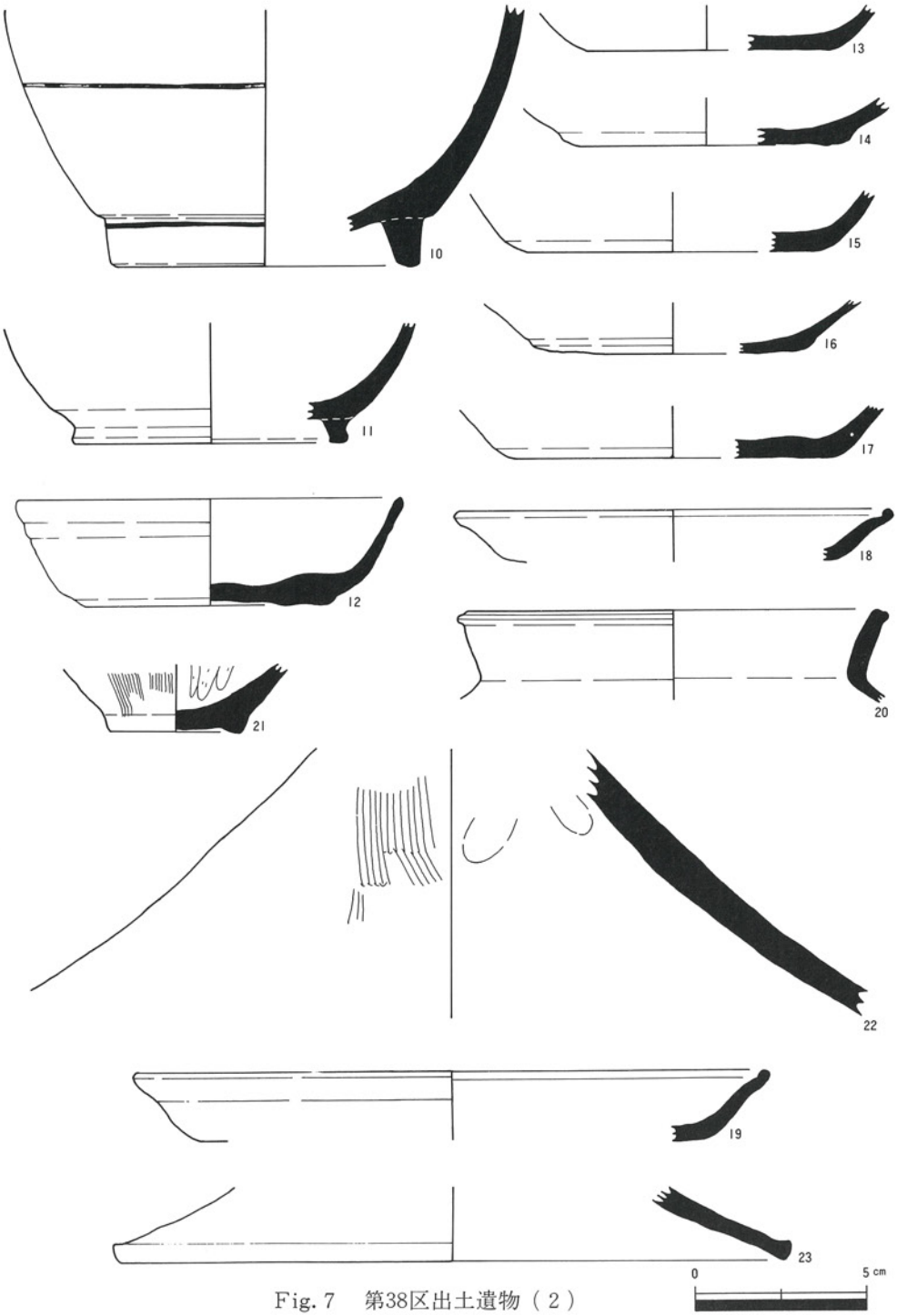


Fig. 7　第38区出土遺物（２）

よくないので詳細はわからない。簡単にふれるにとどめる。12は杯と思われる。紐土巻き上げ成形で底部は篦切り，内底面は指押え調整である。胎土は水漉しを行い精選されている。13〜19は皿と思われる。13，15，17は平坦な底部をもつ。14，16は体部外面に強い横ナデ調整を施す。18，19は体部下半は内灣し，上半がわずかに外反する弧を描く。口縁部は巻き込む。20は不明。21〜25は弥生式土器である。20は口縁部及び頸部の小片で器種は不明である。口辺部は緩く外灣するカーブを描いて立ち上がり，口縁端は下向きに拡張し丸まる。口縁上端に一条の凹線をめぐらせる。外面はナデ調整。22，23は高杯の脚部である。両者ともに外に大きく開く形態をとる。22には刷毛目調整がみられる。23の底径は約19.2㎝。25は広口壺である。刷毛目調整がみられる。21は底部の一部であるが器種は不明である。底径3.8㎝と小さく外面に刷毛目がみられる。底部は押し上げている。24は底部の一部である。突出する平底で外面は刷毛で調整した後，ヘラで磨いている。外底面はナデ調整で底部内面に粘土を継ぎ足し，強く指押え調整した後にナデ調整している。胎土は粗く石英，雲母を含む小石混じりである。なお，排土中から26の鉄錘が出土している。鋳鉄製で内外面に錆止めを施している。管状単孔式。半身欠落。全長4.7cm

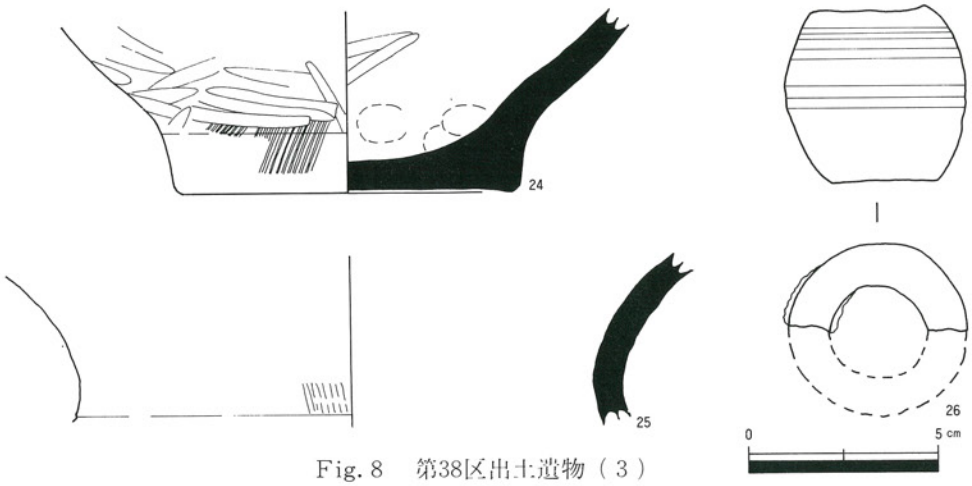


Fig. 8　第38区出土遺物（3）

Ⅵ まとめ

土塁状遺構について

大毛島南部の野地区の山裾に築かれたものである。西條氏と大毛牧場，近世田畠開発等との関係から述べてみたい。

寛永６年（1629）に15疋の馬を大毛島に放牧したのが最初で明治２年（1869）大毛牧場廃止まで続いた。また，寛政７年（1795）に西條眞太郎重明が大毛牧馬制道人に仰せ付けられてから代々西條家が管理に当った。放牧区域は黒山境より大毛鳴門戸崎の間と思われ，島の所々に石垣を築いており馬が家へ突入してくるのを防ぐ為のものと思われる。(註１)。

田畠開発について

土佐泊浦地区の田畠開発に関する資料は文献には次のように記載されている。

大永３年（1523）大代勝福寺過去帳に「泊庄」の荘園名が見える。

①延宝６年（1678）５月13日，板野郡土佐泊浦新開御検地帳，田２町２反５畝18歩，高19石４斗２升２合，田畠合15町４反２畝９歩，高合85石６斗６升８合　②元禄８年（1695）12月18日，板野郡土佐泊浦新開御検地帳，畠６反４畝24歩，高１石５斗１升４合　③宝永５年（1708）11月，板野郡土佐泊浦新開御検地帳，田８畝15歩，高６斗５升７合，畠３反１畝，高１反６斗１升７合，田畠合３反９畝15歩，高合１石１斗７升４合　④正徳元年（1711）11月，板野郡土佐泊浦新開御検地帳，田８反３畝13歩，高２石５斗２合，畠１町１反５畝３歩，高１石５斗６升９合，田畠合１町９反８畝15歩，高合４石７升１合　⑤享保６年（1721）３月，板野郡土佐泊浦新開御検地帳，田８反３畝13歩，高２石５斗２合，畠１町１反５畝３歩，高１石５斗６升９合，田畠合１町９反８畝15歩，高合４石７升１合　⑥享保18年（1733）11月，板野郡土佐泊浦新開御検地帳，田２反７畝24歩，高１石１斗１升２合，畠５反３畝12歩，高６斗７升８合，田畠８反３畝６歩，高合１石７斗９升　⑦宝暦４年（1755）３月，板野郡土佐泊浦新開御検地帳，畠７反４畝３歩，高７斗４升５合　⑧天明３年（1783）11月，板野郡土佐泊浦御検地帳，畠４反５畝24歩，高９斗１升６合（註２)。以上は土佐泊地区の記録であるが，具体的な記録としては第39区の水田址がある。第39区の水田址は出土遺物等から江戸時代の後半，宝永５年（1708），享保６年（1721），享保18年（1733）のいずれかに該当するものと考えられる（註３)。

土塁状遺構を馬・鹿等が田畠へ侵入するのを防ぐ為に構築されたものと考えるならば，構造時期は水田址と同時期頃であると考えられる。

註

註１　「板野郡史」

「鳴門市史」

註２　「鳴門市史」　４巻農業の「文化12年（1815）村浦別農地面積・実収高表」に土佐泊浦，畑32町４反４畝24歩，田５町２反８畝６歩，計37町７反３畝，実収高210石（阿波志による）と表わされている。

註３　「徳島県文化財調査概報」'80　徳島県教育委員会

参考資料

狩猟

鳥獣追立又は打留方等觸寫　（板野郡山田良太郎氏所蔵　諸事御寫中抄出）

一　鶴鴈多有之啄田畠之毛百姓共難義仕旨被聞召上然節は無遠慮鶴鴈共田畠と追立可申旨御意下候事

一　鹿猿兎多有之喰田畠之立毛百姓難義仕候由被聞召上御留山共御明被成候雖然追下仕義可為無用ねらひ笹荒立毛節御赦免被遊旨御意下候事

一　御留山之内大毛山近所に田畠有之間在来通御留置被成候嶋田山長崎山土佐泊山御明被成候に付三ヶ所之山々鹿打留候節とは被召上角肉被下事

右之通長谷川主計殿被仰渡候條面々組村中小百姓に至迄一々可申渡者也

十月十四日

安富平兵衛

西彌次郎

郷司孫右衛門

『御大典記念　阿波藩民政資料　大正三年物産陳列所版』による。この資料は，延宝８年（1680）に出されたものと思われる。

同十一巳年十一月廿八日

一　撫養大毛山此後後留山ニ被仰は，面々請持被仰付候條，可被得其意候，尤，杭木建候義八別紙書付之通可有手配候，且又，大毛山制道人之義，西條林彌並只今迄馬制道申付有之者共義も，右御留山制道仕候様ニ可申付旨，長谷川三平へ申渡候條，基心得二て猶委曲三平申談へく旨，御鷹支配へ覺書を以申渡之

大毛山御留山之事

黒山馬防キ東ハ木之鼻より西へ見通シ内之海馬防キ之鼻迄間，御留山之杭木建候事

是より北御留野地

同日

一　撫養大毛山此後御留山ニ被仰付，御鷹奉行請持ニ被仰付旨申渡候，尤，右大毛山制道人之儀，西條林彌ニ被仰付候條可申渡候，並只今迄馬制道役申付有之候者共も右御留山制道相兼相勤候様ニ可被申付候，猶委曲御鷹奉行可申談旨，長谷川三平へ覺書ヲ以中渡之

藩法研究会　1962　『藩法集３』　徳島藩　創文社による。この資料は，宝暦11年（1761）に出されたものと思われる。

同六酉年八月十三日

一　此度撫養齋田村，黒崎村，大桑島村御留野被仰付旨被仰出候，此段御家中，市郷とも相觸可申哉之旨，御鷹支配之面々申出承届候，則相觸候様申聞之

藩法研究会　1962　『藩法集３』　徳島藩　創文社による。この資料は安永６年（1777）に出されたものと思われる。

天明八申年九月十二日

一　板野郡三ッ石村・高嶋村近年留野ニ相成有之候所，此後山褌切山分指明，以前通被仰付候間，可有手配旨，御鷹支配之申達之

藩法研究会　1962　『藩法集３』　徳島藩　創文社による。この資料は天明８年（1788）に出されたものと思われる。

同五丑年二月廿六日

一　此度撫養大毛山水ヶ太尾より渡崎迄，鐵炮御指留，嶋田山鹿打候義御留山被仰付候條，右様被相心得可有手配候，尤，水ヶ太尾より渡崎迄ハ右制道役土佐泊浦小高取格西條房太被仰付候，且，彼者稽古場之義ハ只今迄通相心得候様，夫々申付方等之儀，福岡今左

衛門申談可有了簡由，御鷹支配申達之

藩法研究会　1962 『藩法集３』 徳島藩　創文社による。この資料は寛政５年（1793）に出されたものと思われる。

Tab．1　第38区出土陶磁器類観察表

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
1	磁器	碗	藍色の呉須染付 内外面：秋草文 口縁端部：圏線	口径 9.5	胎土：白色，釉：青味をおびた半透明，口縁部が少し外反 伊万里系
2	磁器	碗	にごった呉須染付 口縁内面：梅に波文 外面胴部：松竹梅文	口径 12.1	胎土：白色，釉：青味をおびた半透明 伊万里系Ⅲ期
3	磁器	碗	充分発色していない藍色の銅板摺 見込：くずれ松竹梅文 外面胴部：百人一首カルタ図	口径 10.7 器高 5.4 高台径 4.1 高台高 0.7	胎土：白色，釉：透明 畳付に砂が付着
4	陶器	皿	藍色の呉須染付 内外面：渦巻き文 口銹	口径 10.0 器高 3.1 高台径 4.1 高台高 0.3	胎土：明るい灰色，釉：明灰白色，ピンホール及び貫入，高台及び外面底部は無釉
5	磁器	蓋	内面：白色の細かな渦巻 外面：笹に流水文の絵付	口径 8.5 器高 2.3	胎土：白色，釉：灰白色の半透明，つまみを持たない山蓋，かえりに砂が付着
6	磁器	碗	黒と黄土色のプリント 外面胴部：葡萄図	口径 9.8 器高 4.8 高台径 3.5 高台高 0.7	胎土：白色，釉：かすかに灰色がかった半透明
7	陶器	不明	□7□目	不明	胎土：赤味をおびた茶色，釉：わずかに緑色がかった褐色，内面：赤褐色
8	磁器	鉢	青色の銅板摺 内面口縁部：唐草文 外面胴部：巻物図	口径 17.5	胎土：灰白色，釉：灰白色の半透明
9	陶器	皿		口径 16.8 器高 3.9	胎土：黄味がかった白色，釉：黒味をおびた黄褐色，細かい貫入，底部：無釉
10	磁器	徳利	くすんだ藍色の呉須染付， 貼付高台	高台径 8.5 高台高 1.4	胎土：灰白色，釉：青灰色をおびた半透明，畳付は釉ハギ，伊万里系Ⅲ～Ⅳ期

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
11	陶器	不明	貼付け高台 紐土マキアゲ成形	高台径 7.7 高台高 0.5	胎土：灰白色，胴部及び高台：灰釉，高台は外方向に張り出し，端部は内傾，高台端部に灰釉付着，小砂粒含む

※伊万里系時期区分は，大橋康二氏『北海道から沖縄まで国内出土の肥前磁器』による。

Ⅲ期 1690年代～1780年代（元禄～天明）

Ⅳ期 1780年代～1860年代（天明～慶応）

Tab. 2　第38区出土弥生式土器・土師器類観察表

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
12	土師器	杯	紐土マキアゲ成形 内底面中央：指押え調整 底部：ヘラ切り	口径 11.0 器高 3.1	胎土：淡橙色，胎土は水漉されている，体部が直線的に開く
13	土師器	Ⅲ	不明	不明	胎土：淡橙色，小砂粒を含む，底部は平坦
14	土師器	Ⅲ	体部外面に強いヨコナデ	不明	胎土：乳赤褐色，微粒
15	土師器	Ⅲ	不明	不明	胎土：淡橙色，若干の小砂粒を含む 底部は平坦
16	土師器	Ⅲ	体部外面に強いヨコナデ	不明	胎土：明るい橙色，若干の小砂粒を含む
17	土師器	Ⅲ	内底面周縁にナデ	不明	胎土：うす黄橙色，若干の小砂粒を含む
18	土師器	Ⅲ	不明	口径 18.3 器高 2.0	胎土：暗橙色，体部の下半は内彎し上半は僅かに外反する弧を描く，口縁端部巻き込む
19	土師器	Ⅲ		口径 12.5 器高 1.5	胎土：暗橙色，体部の下半は内彎し上半はわずかに外半する弧を描く，口縁端部巻き込む
20	不明	不明	口縁部上端：一条の凹線 外部：ナデ調整	口径 12.0	胎土：淡黄褐色で細かい，口辺部は外反気味に緩くカーブを描いて立ち上がる。口縁端は下向きに拡張し丸まる

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
21	弥生式土器	不明	外面：ハケ目 底部：押し上げ	不明	胎土：黄味灰色，若干の小砂粒を含む，平底
22	弥生式土器	高杯	ハケ目調整	不明	胎土：赤橙色，黒色砂粒を多く含む，大開する脚部
23	弥生式土器	高杯	ハケ目調整	底径 19.2	胎土：明赤褐色で細砂粒含む，大開する脚部
24	弥生式土器	不明	外面：刷毛調整後ヘラミガキ 外底面：ナデ 内底面：粘土を継ぎ足し内面を強く指押え調整後ナデ調整	底径 8.7	胎土：乳褐色で粗く石英雲母を含む小石混じり，突出する平底
25	弥生式土器	広口壺	ハケ目調整	不明	胎土：淡橙褐色で砂粒多く含む，口頸大外反

第　39　区

本 文 目 次

Ⅰ　位置と環境
Ⅱ　調査の経過
Ⅲ　基本層序
Ⅳ　遺　　構
Ⅴ　遺　　物
Ⅵ　ま と め

挿 図 目 次

Fig. 1　第39区位置図
Fig. 2　第39区全測・遺構配置図
Fig. 3　第39区Ａ調査区層序
Fig. 4　第39区Ｂ・Ｃ・Ｄ調査区層序
Fig. 5　第39区Ｂ調査区水田址遺構図
Fig. 6　第39区Ｂ調査区集石遺構図
Fig. 7　第39区Ｂ調査区集石遺構断面図
Fig. 8　第39区Ｂ調査区集石遺構内土器出土状況
Fig. 9　第39区Ｂ調査区土壙状遺構
Fig. 10　第39区出土遺物(1)
Fig. 11　第39区出土遺物(2)
Fig. 12　第39区出土遺物(3)
Fig. 13　第39区出土遺物(4)
Fig. 14　第39区出土遺物(5)
Fig. 15　第39区出土遺物(6)
Fig. 16　第39区出土遺物(7)

Fig. 17　第39区出土遺物(8)
Fig. 18　第39区出土遺物(9)
Fig. 19　第39区出土遺物(10)
Fig. 20　第39区出土遺物(11)
Fig. 21　第39区出土遺物(12)

表　目　次

Tab. 1　第39区出土土器類観察表
Tab. 2　第39区出土土錘観察表
Tab. 3　第39区出土石器類計測表
Tab. 4　第39区出土鉄・銅製品類観察表

図　版　目　次

ＰＬ. 1　第39区調査前全景　全景
ＰＬ. 2　第39区調査風景　Ｄ調査区全景
ＰＬ. 3　第39区Ａ調査区水田址　Ａ調査区土器出土状況
ＰＬ. 4　第39区Ｂ調査区水田址確認状況　Ｂ調査区水田址確認状況
ＰＬ. 5　第39区Ｂ調査区水田址確認状況　Ｂ調査区水田址確認状況
ＰＬ. 6　第39区Ｂ調査区水田址足跡　Ｂ調査区水田址足跡
ＰＬ. 7　第39区Ｂ調査区（ＳＫ－01）　Ｂ調査区（ＳＫ－02）
ＰＬ. 8　第39区Ｂ調査区（ＳＫ－03）　Ｂ調査区（ＳＫ－02・03）
ＰＬ. 9　第39区集石遺構検出状況　集石遺構検出状況
ＰＬ. 10　第39区集石遺構検出状況部分写真　集石遺構検出状況部分写真
ＰＬ. 11　第39区集石遺構基底部部分写真　集石遺構基底部部分写真
ＰＬ. 12　第39区集石遺構内遺物検出状況　集石遺構内遺物検出状況
ＰＬ. 13　第39区Ｂ調査区土層　Ｂ調査区土層

ＰＬ．14　第39区出土遺物(1)
ＰＬ．15　第39区出土遺物(2)
ＰＬ．16　第39区出土遺物(3)
ＰＬ．17　第39区出土遺物(4)
ＰＬ．18　第39区出土遺物(5)
ＰＬ．19　第39区出土遺物(6)
ＰＬ．20　第39区出土遺物(7)
ＰＬ．21　第39区出土遺物(8)
ＰＬ．22　第39区出土遺物(9)
ＰＬ．23　第39区出土遺物(10)
ＰＬ．24　第39区出土遺物(11)
ＰＬ．25　第39区出土遺物(12)
ＰＬ．26　第39区出土遺物(13)
ＰＬ．27　第39区出土遺物(14)
ＰＬ．28　第39区出土遺物(15)
ＰＬ．29　第39区出土遺物(16)
ＰＬ．30　第39区出土遺物(17)

Ⅰ　位置と環境

（Fig.1，ＰＬ．１）

本遺跡は鳴門市鳴門町土佐泊浦大字野字大谷27・28・29・38・49の２・50の３番地の大毛島島内の南東よりに位置する。大毛島をほぼ南北に連なる山系が野地区で大きく西へ入りくんでおり，東に延びる小支脈の間にはさまれた標高４～６ｍの微高地上にある。この微高地の形成は山系の間の小渓谷による堆積作用と海岸の侵蝕の相互作用によるものと思われる。等高線をみると縄文海進期には旧海岸線はこの調査区付近では大きく入りくんでおり，複雑な海岸線を形成していたとみえて，調査区のすぐ北側（第38区）の岩に海蝕痕がみられることからもそのことがうかがえる。調査区下層にみられる砂層は海岸線の後退による置き砂と考えられる。地目は水田及び畑地になっている。

付近には紀貫之の「土佐日記」に記述されている「土佐泊港」があり，この土佐泊港付近での一番広大な平地がこの野地区である。

Ⅱ　調査の経過

（Fig.2，ＰＬ．２）

昭和52年４月28日～５月20日にかけて分布調査を行い，その分布調査の結果，土器片・石製品が散布しており，遺跡の所在する可能性が高く事前調査が必要ということで，昭和54年４月８日～昭和56年３月31日までの間に約4,500㎡の発掘調査を実施した（註１）。現在の水田区画をもとに標高の高い所からＡ～Ｄ調査区の大区域を設定し，各調査区の地形の状況に応じて５ｍ×５ｍの地区割を行い小区画とした。グリッド調査の結果，遺物・遺構が確認されたことから，本四公団との協議により全面調査を実施した。

この間，用地買収が済んでいるのに作物が植えてあり旧地主とのトラブル，台風の接近により現場事務所の浸水等調査に支障をきたし，必ずしも順調に進まなかった。

調査日誌抄

４月８日　　本四公団鳴門工事事務所へあいさつ，現地を確認

16日　　地形測量開始，平坦な為等高線は省略することにした

24日　　調査前全景写真撮影

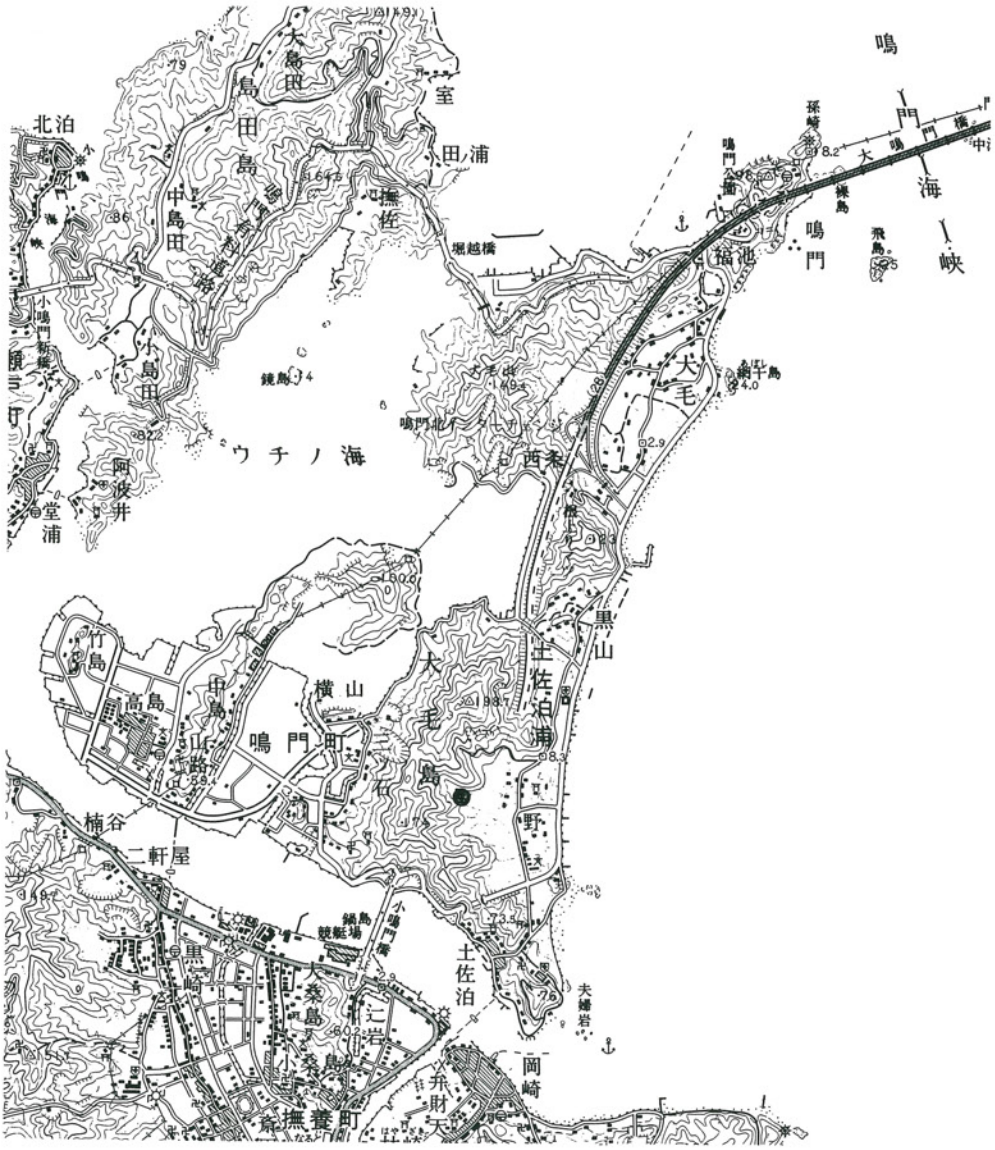


Fig. 1　第39区位置図

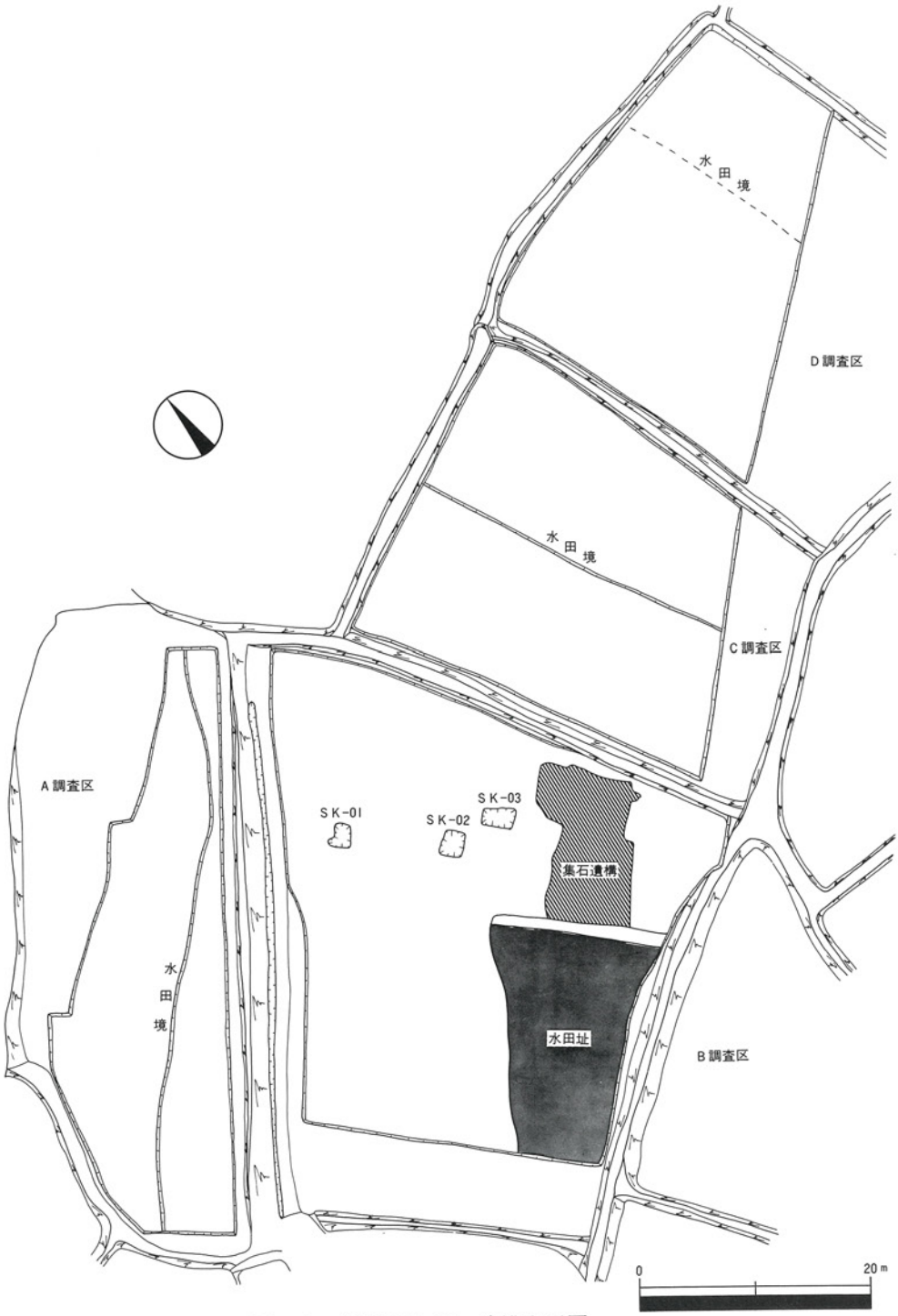


Fig. 2　第39区全測・遺構配置図

5月6日	本日より作業員が出勤。プレハブ内の整理，調査区内外の草刈り
10日	Ｂ調査区センター杭打ちをおこなう
19日	Ｂ－２グリッドの第４層より江戸時代の水田址の所在が判明
28日	Ｆ－２グリッドで円礫，亜円礫の集石を確認
6月5日	Ｆ－６グリッド西隅で土壙状の落ちこみを確認及び検出
13日	Ｆ－２グリッド集石内清掃及び写真撮影，平面図作製のための水糸張り
23日	Ａ調査区グリッド設定，杭打ち，南よりＡ～Ｚ，東より１～３区，表土削ぎ
7月7日	Ｃ調査区草刈り
30日	Ｃ調査区グリッド設定，Ａ調査区Ｂ－１グリッドに落ち込みプランが確認
8月5日	Ａ調査区Ｂ－1，Ｄ－1，Ｈ－3，Ｊ－3，Ｈ－1グリッド清掃，写真撮影
18日	Ｂ調査区のグリッドの土層写真撮影及び土層図を作製
9月2日	Ａ調査区において調査区をほぼ斜めに大きく落ちこむ遺構を確認する
16日	Ａ調査区の溝状落ち込み発掘完了，水田址と思われる
22日	Ａ調査区平面図完了，Ｂ調査区発掘調査再開
10月2日	Ｂ調査区水田址の足跡及び溝跡の検出に入る
11日	Ｂ調査区水田址確認状況写真撮影
23日	水田址，集石遺構の検出に入る
11月5日	Ｃ調査区平板測量
6日	Ｂ調査区水田址平面図作製開始
17日	Ｂ調査区集石遺構写真撮影，Ｃ調査区表土削ぎ開始
22日	現地説明会開催，70名余り参加
12月4日	Ｂ調査区水田址完了
9日	Ｃ調査区水田址確認
18日	Ｃ調査区水田址検出完了
1月6日	Ｂ調査区及びＣ調査区写真撮影
7日	Ｃ調査区平面図作成開始
24日	Ｄ調査区平面図完了，断面図作成
28日	Ｃ調査区土層図完了
29日	Ｂ調査区集石遺構平面図完了，エレベーション開始
2月6日	Ｂ調査区集石遺構根石平面図開始

2月16日　B調査区集石土壙エレベーション完了

25日　B調査区西側土層セクション作図，C調査区人力による埋め戻し開始

3月3日　B調査区集石遺構根石平面図完了

5日　B調査区集石遺構根石写真撮影

12日　B調査区SK－01～03確認及び検出，平面図及び土層図作成

13日　B調査区SK－01～03検出完了，平面図及び土層図完了

16日　C調査区埋め戻し完了

19日　D調査区ブルドーザによる埋め戻し開始

28日　B調査区埋め戻し完了

30日　現場撤収準備

31日　トラックで資材運搬，調査完了

Ⅲ　基本層序

1．A地区（Fig.3，PL.3）

この調査区は水糸レベル6m50cmとし，A調査区東端壁を図化した。所々深くなっている所はサブトレンチを表わし，トレンチ断面の石は，縄文海進当時の海岸線と思われる。

第1層は暗灰黄色砂質土層の調査前までの水田耕作土であり，磨滅した須恵器，土師器，近世陶磁器及び現代遺物，煙管，土錘などが出土している。時代的に相当幅をもち，しかも磨滅していることからみて，土が相当入れ替わっているものと思われ，土地利用の激しさがうかがえる。

第2層は黄褐色砂質粘土層で，いわゆる水田床土のハガネと言われているもので，水田床面の水漏れと，肥料分の浸透を防ぐために叩き固めた土であり，人工的な版築作業を行っている。後世の深掘耕作によって一部消滅している所もみられる。したがって出土遺物は総じて少なく，青磁，土製品，土錘，土師器，染付磁器，陶器などが僅かに出土している。

第3層はにぶい黄褐色粘質土層で中に少量の炭化物と和泉砂岩の小礫を含んでいる。現水田面に作りかえられる前の旧水田址の耕作土である。須恵器，染付磁器，土錘などを含んでいる。

第4層は黄褐色粘質土層で，第2層の土色と同じで，旧水田址の床土であり，現水田と同土壌の土を運んできて使用したことが伺える。染付磁器，石鏃が出土しているが，染付

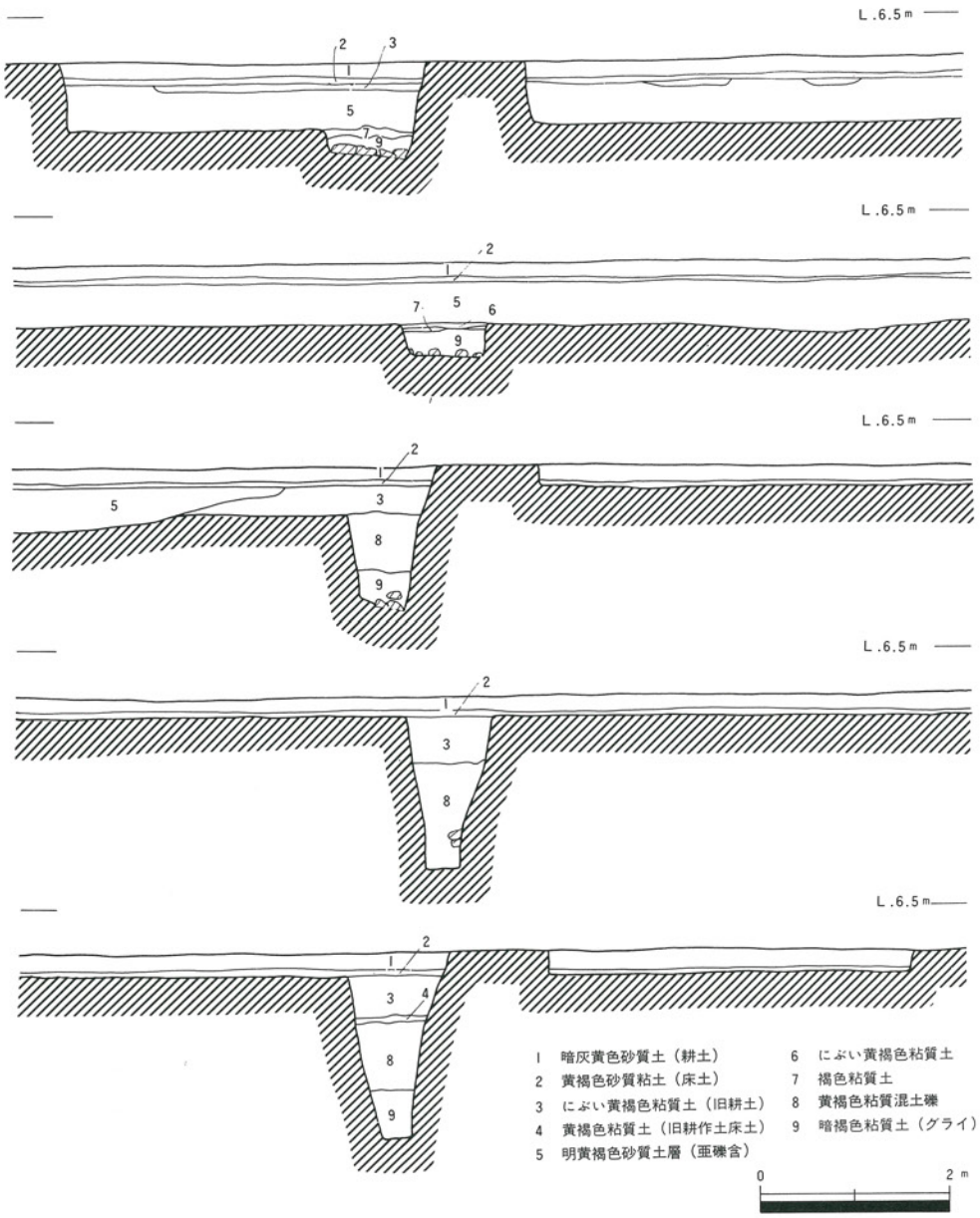


Fig. 3　第39区Ａ調査区層序

磁器の時期が18世紀後半～19世紀初頭に位置づけられることから江戸時代後半にこの水田址が作られたことがうかがえる。

第５層は明黄褐色砂質土層で和泉砂岩の亜礫を含んでいる。現在の水田に拡張するために用いられた埋土である。埋土は小渓谷のすぐ上の方から運びこんだものであり，調査区北東側に採掘跡がみられる。土師器，須恵器などが出土している。

第６層は第３層と同じにぶい黄褐色粘質土層であり，段々になった田の下段の水田耕作土層であり，土師器，染付磁器，土錘などが出土している。

第７層は褐色粘質土層であり，下段の旧水田床土であり，土師器，染付磁器などが出土している。

第８層は黄褐色粘質混土礫層であり，この山系における堆積作用の土と思われ，海に向かって傾斜している。磨滅した土器片がみられるが，取り上げる際には粉々にくだける状態であり，図化できるものはなかった。

第９層は暗褐色粘質土層のグライがかった層であり，やや砂質で炭化物を含んでいるが無遺物層である。なおこの層より湧水があり調査は困難を極めた。これより下は緑灰色砂質粘土層でいわゆるグライ層であり，グライ層下面は人頭大からこぶし大の円礫があり，旧海岸線であることをうかがわせる。

以上Ａ調査区の土層について述べたが，これより下は湧き水と壁面崩落の恐れが出てきたため，これ以上掘り下げることを断念した。

２．Ｂ調査区（Fig.４～９，ＰＬ．４～８・13）

第１層はＡ調査区と同じく，暗灰黄色砂質土層であり現水田耕作土である。須恵器，染付磁器，陶器，土錘，煙管などが出土しており，相当長期間にわたる遺物を含んでおり，土地利用の激しさがうかがえる。

第２層はやはりＡ調査区と同じく黄褐色粘質土層（灰オリーブ砂質土層を少量含む）で，いわゆる水田床土（ハガネ土）であり，水田床土と思われる。

第３層は場所によって分かれており，南半分は灰オリーブ砂質土層であり，後ほど述べる江戸時代の水田址覆土土層である。この土層を踏みこんだ形で足跡，溝跡等の遺構が確認された。北半分はにぶい浅黄色砂質土層であり，土師質土器，須恵器，青磁，白磁，陶器，石鏃，土錘などが出土しており，現水田面にする際に平坦に削平された面であると考えられる。遺物からみて近世において堆積された土層と思われる。

第4層はにぶい黄橙色粘質層であり，水田址覆土の下半分で溝等の深い耕作のさいに切り込みがみられる。

第5層の南半分は明黄橙色砂質土層で水田の床土である。東半分は浅黄色砂質粘土層で，この層を切りこんだ形で集石遺構が形成されており，集石遺構覆土であり土師器・須恵器等が出土している。

第6～8層はいずれも多量のマンガンを含んだ層である。第6層は明褐色粘質土層，第7層はにぶい黄褐色粘質土層，第8層は灰黄褐色粘質土層であり，いずれも少量の土師器の細片を含んでいた。

第9～12層にかけては，黒褐色粘質土層がサンドイッチ状に堆積されており，しかもやや黒みがかるとか砂質がかるとかいった極く微細な変化がみられ，いずれも小渓谷の沖積作用による堆積であり，土器片の磨滅したものが少量出土している。

第13，14層は黒褐色，あるいは黒色砂質土層で，ややグライがかった層であり旧海岸線の堆積土層と思われ，湧水がみられた。

3．C調査区（Fig. 4）

第1層は暗灰黄色砂質粘土層であり，土師器，磁器，陶器片などが出土した。

第2層は明褐色粘質土層であり，現水田の床土である。須恵器，土師器，青磁，陶器，染付磁器，土錘，鉄砲玉などが出土した。

第3層はにぶい黄褐色粘質土層，第4層は灰黄色砂質土層でいずれも水田址の覆土であり，青磁，染付磁器などが出土している。

第5層はにぶい黄褐色粘質砂層で第3層と同じ土色であるが，粘質がかっている旧水田跡床土である。陶器，煙管が出土している。

第6層の黒褐色粘質層及び第7層のオリーブ暗色砂質土層であり，いずれもマンガンを含んでいる。遺物は全然見あたらなかった。この二つの土層は小渓谷の沖積作用による堆積と考えられる。

第8層は褐色砂質土層であり，ややグライがかった層である。A調査区及びB調査区と同様に旧海岸線に伴う土層と思われる。

4．D調査区（Fig. 4，PL．2）

第1層は暗灰黄色砂質粘土層であり，現水田耕作土である。染付磁器，陶器が出土している。

第2層は明褐色粘質土層であり，現水田の床土である。遺物は染付磁器，陶器が出土している。

第3層は明黄褐色砂質粘土層であり，旧水田址覆土である。遺物は細片の染付磁器，陶器，土錘が出土しており，江戸時代後期と思われる。

第4層は灰褐色砂質土層で旧水田址床土である。遺物は微少の染付磁器，陶器が出土している。

第5層は灰黄褐色砂質粘土層から第6層の黄褐色粘質土層は，やはり小渓谷の沖積作用による堆積と思われる。

第7層は灰褐色砂質土層であり，ややグライがかった層であることからA～C調査区の最下層と同様の層であり，ここでも湧水がみられた。

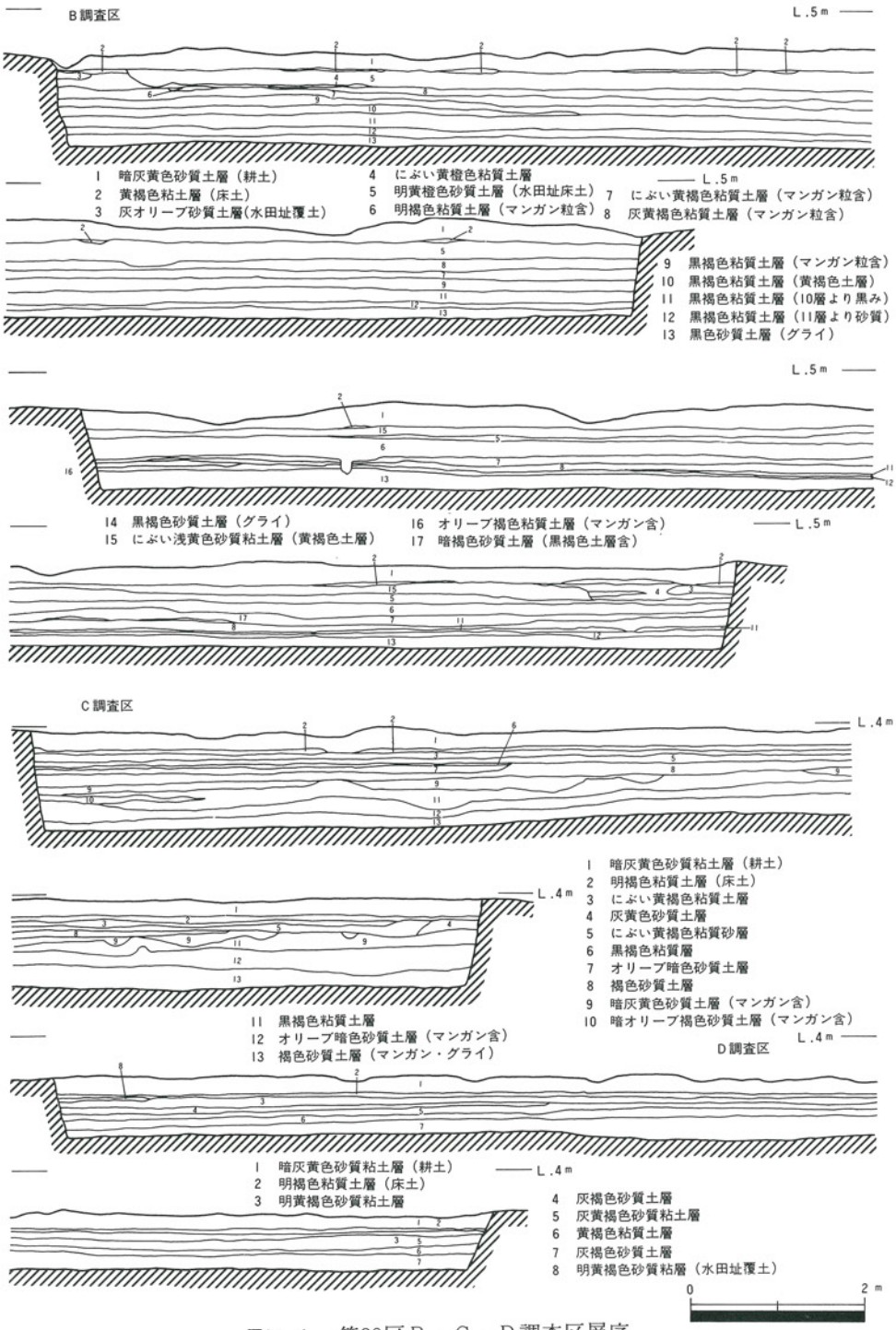


Fig. 4　第39区B・C・D調査区層序

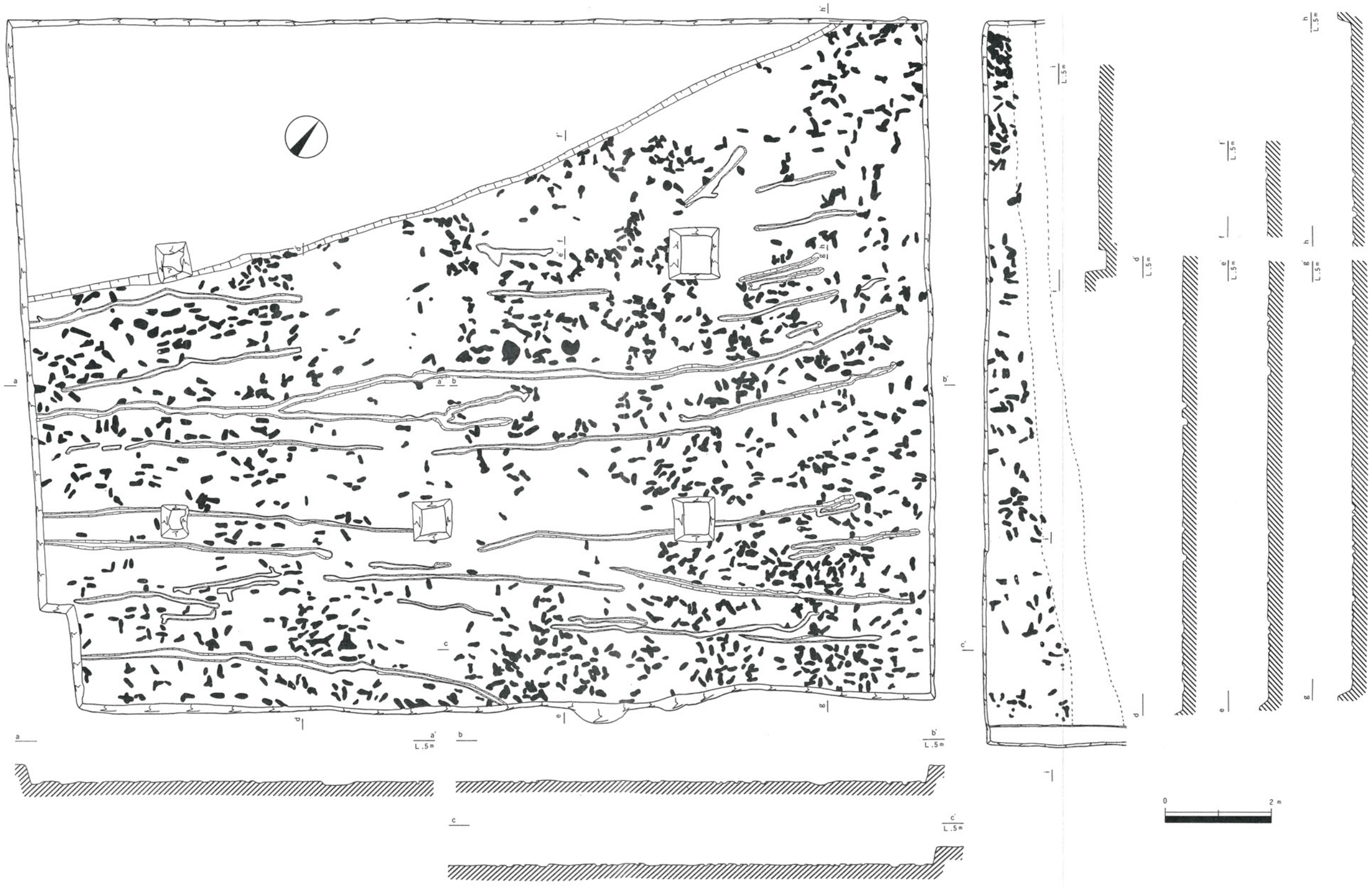


Fig. 5　第39区Ｂ調査区水田址遺構図

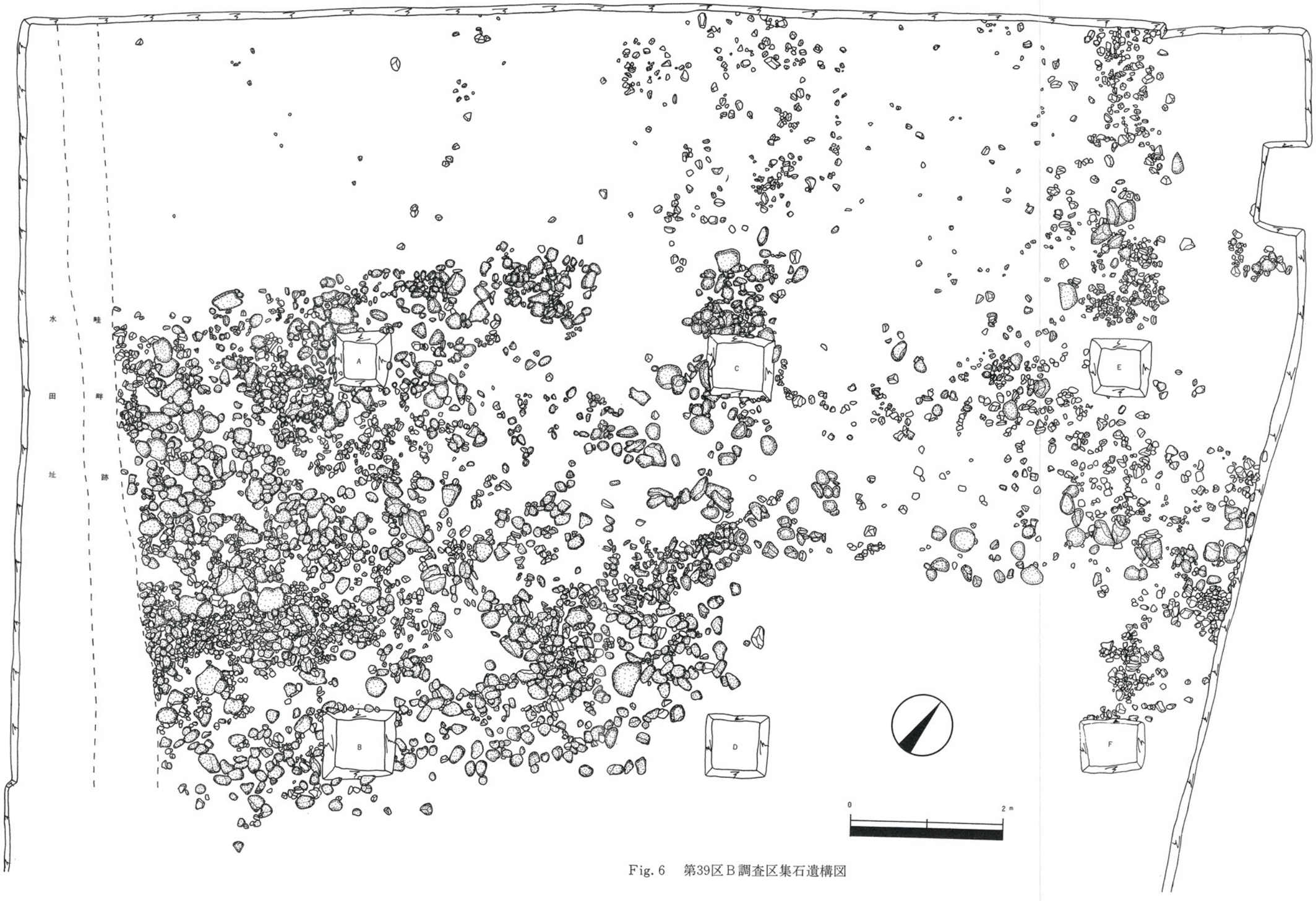


Fig. 6　第39区Ｂ調査区集石遺構図

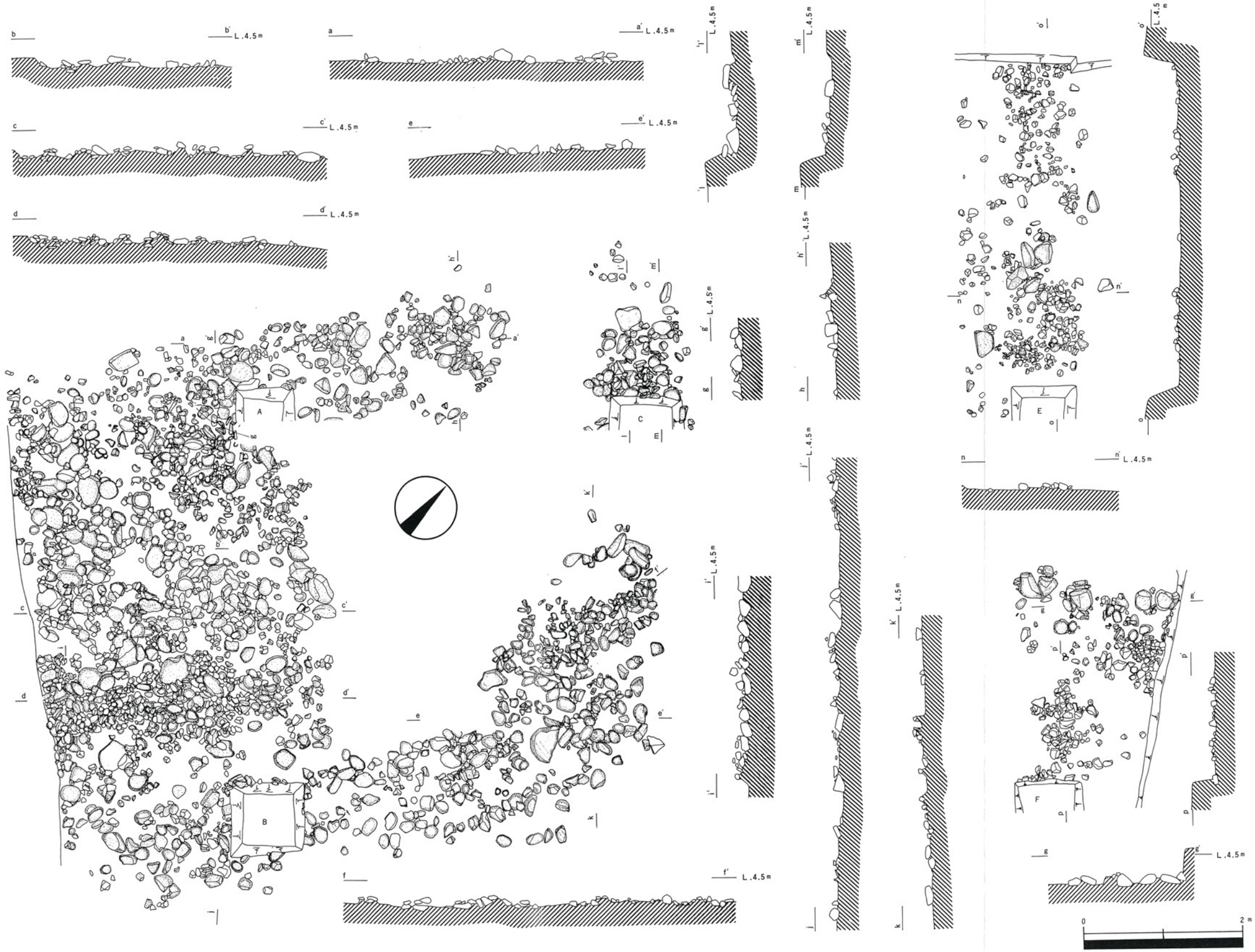


Fig. 7　第39区Ｂ調査区集石遺構断面図

Ⅳ 遺　　構

遺構は大別して江戸時代の水田址と古墳時代～平安時代にかけての集石遺構・土壙状遺構に分かれる。したがって江戸時代の水田址はA～D調査区のいずれにも見られることから一括して取り扱うものとする。

1．水田址（Fig.5，ＰＬ．３～６）

A～D調査区全域にわたって見られた遺構であり，現水田の床土直下で検出されたもので，いずれも伊万里染付磁器及び煙管の編年から見て18世紀後半ごろに現水田の広さに改田されたものと思われる。

A調査区の水田址は，段々畑（比高差40～70㎝）になっていた上段の４枚以上の水田を上段の床土より下の土壌を削平して下段の水田を埋土し，現状のA調査区の範囲の水田に耕地整理したものと思われる。埋土は明黄褐色砂質土層であり，和泉砂岩質の人頭大の亜礫を大量に含んでいた。その埋土内に須恵器，土錘，染付礫器，石鏃等が混入していた。

この水田の給水は調査区外にみられる溜め池と，小さな谷があり，これらの水でもって谷水田的な営農が行なわれていたものである。以下B～D調査区の水田も同様である。

B調査区の水田址は，調査区の南西部で検出されたもので，南限は下段の現水田によって削平され，西限は現場事務所のプレハブの下となり，更に西側の現存する溜め池によって調査が不可能であったため不明である。北限は一段高い面がみられ，現水田にするために上の段の水田は削平されたため，水田址としての確証はえられなかったが，一応の推定ラインはつかめた。東限は後述する集石遺構を削平する形で大畦畔が検出され判明した。水田址からは，第３層の灰オリーブ砂質土層が足跡，溝等の覆土であり，第４層の黄橙色粘土層を踏みこんだ状態で検出されたが，異常冷夏による降雨日数が多く，確認に非常に手間どった。

畦畔跡は水田址東限にあり北端で幅50㎝，南端で１ｍ，高さ10㎝程であり，断面の中央部は平坦であり端の方はなだらかに傾斜している。土壌は粘質土層を踏み固めた状態で作られたとみえて同レベルの土壌と比べて非常に堅かった。東限は後述の集石遺構を削平したものとみられ畦畔下に集石は全然みらなかった。

溝跡は，水田内ほぼ全域にわたって幅５～10㎝，深さ５～20㎝，長さは１～18ｍ，傾斜

方向はまちまちである計33条の溝が検出された。断面がV字形あるいは逆台形状を呈しており，畦畔跡とほぼ直行して，溝と溝が平行して走っている。土層や断面から人力で行なったものでなく牛か馬による深耕痕と思われる。

この溝跡は当初は収穫時における排水用の溝と思われたが，この地区は現在でも水田の水の確保に苦労をしており，排水の必要はなく，しかも溝は一定方向に向かって傾斜していないことから，牛か馬による荒起しの際の痕跡と断定した。

足跡は水田内ほぼ全域にわたってみられ，長さ10〜30㎝，深さ２〜10㎝のものが総数約1,500か所検出された。この総数は再々の降雨によって消滅したものを除いているので検出されたものは最低数であり，それ以上存在したことは確実である。足跡をよく観察してみると，左右の区別，走行方向，踵，指先などの判明できるものが相当数見られる。足跡の大きさからみて大人のものとは考えられない程小さいものがあることから耕作のある時期（田植え，稲刈り等）には子供も含めた家族全員が携わっていたのではないかと思われる。走行方向は一定の方向に限定されるものでなくあらゆる方向のものが検出された。なお円形あるいは楕円形に近いものについては，溝跡と関連して考えれば，牛あるいは馬の足跡の可能性も考えられる。なお水口，小畦畔については何度かの精査を行ったが検出できなかった。

出土遺物からみると伊万里染付碗の18世紀代のものが床土から出土しており18世紀代に造営されたものであると思われる。他に土師質土器，青磁，土錘などが出土している。

Ｃ調査区の水田址は，Ａ調査区の水田址と同じく２枚の水田址であったものを現水田の広さに直したものであり，上段水田址と下段の水田址との比高差は約15㎝程である。水田の広さを現在の広さに変える際はＡ調査区と同じく上段の水田の耕作土を除いておき，上段の土壌を削平して下段の水田を埋めて整地したものと思われる。水田床土より17世紀後半〜18世紀前半の刷毛目唐津鉢が出土しており，やはり18世紀後半に現水田の広さに改田されたものと思われる。他に17世紀後半〜18世紀後半の伊万里白磁皿，18世紀後半の煙管の吸口などが出土している。

Ｄ調査区の水田址は，Ａ・Ｃ調査区のものと同様であり，上段水田址と下段水田址の比高差は約８㎝程である。床土からの遺物はないため確証はできないが，第２層の現水田床土の中に18世紀代の伊万里皿，17世紀後半の伊万里猪口，18世紀後半〜19世紀初頭の大谷焼燈明台などが出土していることからみて，やはり18世紀後半と思われる。

以上水田址について述べたが，いずれも18世紀後半に比定されるものであると考えられ

る。

2．集石遺構（Fig. 6～8，ＰＬ．9～12）

Ｂ調査区の南東部において，第５層の浅黄色砂質粘土層（水田床土）の直下層に直径２～50㎝の和泉砂岩の円礫，亜円礫でもって，長軸８ｍ，短軸６ｍの長方形を呈した形でブロック状に石が集中して堆積した状態で検出され，その長方形より北は集石状態がまばらになり，小さな角礫が多く長方形を呈したものとは異なる状態で検出された。

集石の状況は１ｍ内外の正方形，長さ３ｍ，幅１ｍの長方形，長さ４ｍ，幅１ｍの長方形，直径２ｍの円形の平面プランのものがいくつも重なり合って図のような検出状況を呈したものと思われる。断面からみて分かるように周縁部の石が高く内へ向かってやや内傾させたものが多く，集石の内側に向かって深さ10～20㎝下っている状態である。小円礫のものは数段の石を積み重ねており比較的高さをもっている。集石の間は砂質がかった粘土を充塡した状態で非常に堅くしまっている。したがって自然の堆積ではなく，人工的な手が加えられていることは明らかである。

集石の石は火を受けたものと思われ赤褐色を呈し，もろくなっている。また石の表面には黒斑がみられ，上部水田層のマンガンが付着したものか，あるいは海水の中のカルシュウムが付着したものか分からない。

集石の間の土は灰褐色と赤褐色が入り混ざり，乾燥している時は非常に堅くさらさらしており，水分を含むと非常に粘り気のある土である。土の中には細かい粒子の焼土や炭化物が含まれており，集石は火を用いた何らかの作業が行われたことを示している。

集石内には土師器片，杯や甕の底部の須恵器片が約180片程出土しているが，土器の中には二次焼成によって剝落しているものが多く器種，器形も定かでなくわずか19点のみ図化できた。出土した遺物は古墳時代中頃（５世紀後半）から平安時代にかけての範疇におさまるものであり，一応この期間にわたって集石遺構の存続年代が考えられる。中に製塩土器と思われるものや支脚なども出土している。

この集石に用いられた円礫は現在の大毛海岸は砂浜となっており，円礫は全くなくむしろウチノ海側に円礫はみられ，ウチノ海側から運んだものか，もしくはＡ調査区のトレンチ最下層にみえる旧海岸線と思われるレベルには円礫がみられることからみて，どちらかの石でもって集石は形成されたものと思われる。旧海岸線の時期の確定が不明瞭なためどちらとも確定できない。

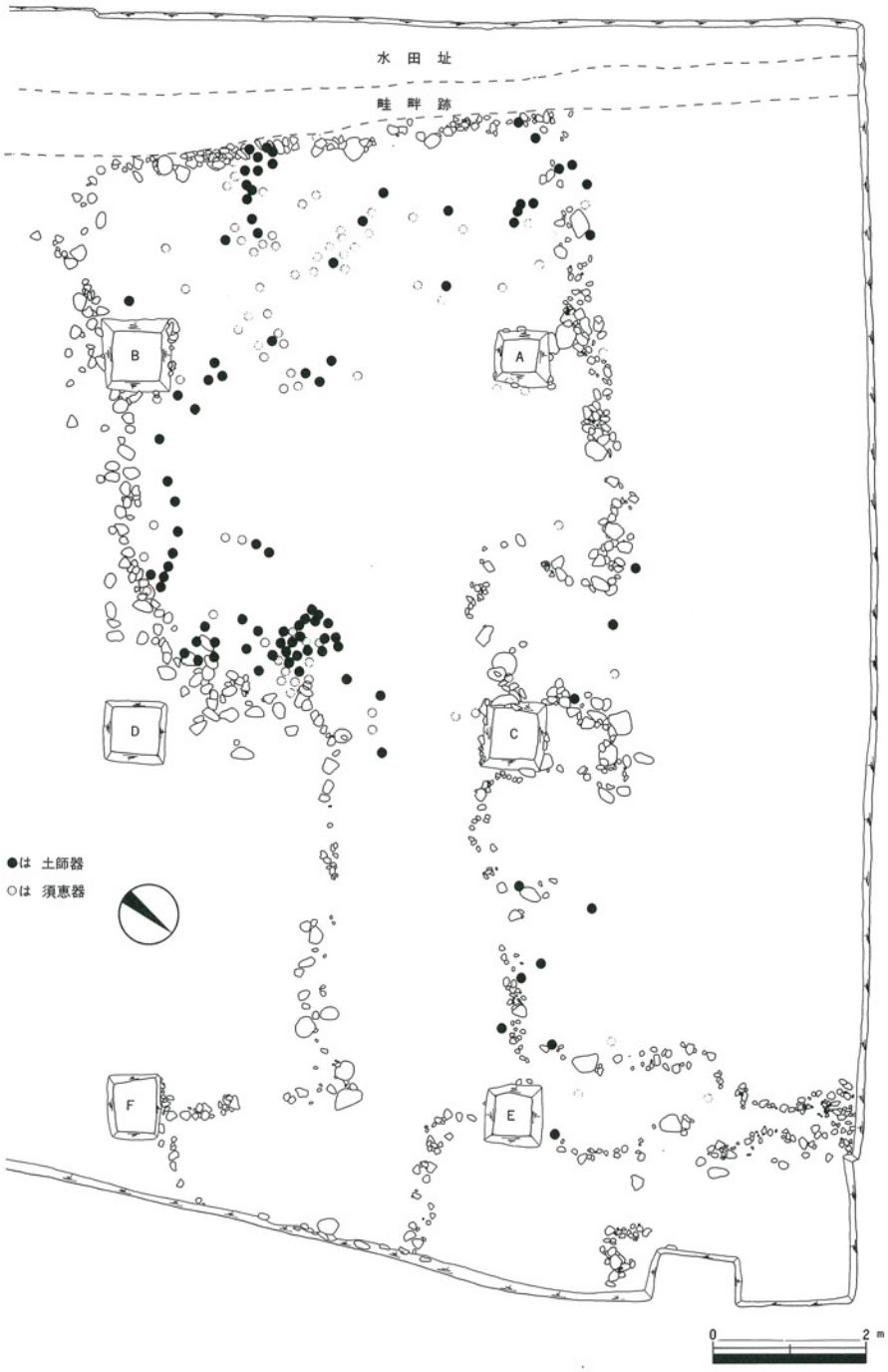


Fig. 8　第39区Ｂ調査区集石遺構内土器出土状況

この集石の性格であるが概報書の折には製塩跡としての方向の可能性があるとのことで述べたが，表採も含めた遺物全体の比率からみても製塩土器の出土数が極めて少なく，製塩が行なわれていれば，焼成の際の破損により相当量の破片が出土するものと考えられ，製塩の可能性は少ない。立地状況からみると場所を制約された上での一定期間に一定の場所に集石があり，何らかのものを集石の中へ立てるか入れる形に内側に凹んでおり，しかも集石の間の土は意図的に粘質がかった土をつめている状態であり，ただ単に石を集めて雑然と並べたという感じでないことは明らかである（註２）。

いずれにしても大毛山系の材木を燃料とし，何らかの海に関する生産か祭祀を行なった場所でないかと想定される。

３．土壙状遺構（Fig. ９，ＰＬ．７・８）

Ｂ調査区北東部において３か所検出されたもので，北よりＳＫ－01～03と名付けた。

(1)　ＳＫ－01

集石遺構と同じく第５層マンガン大粒を多量に含む浅黄色砂質土層を切り込んだ形で確認された。長軸Ｎ37°Ｅで縦2.14m，横北で1.2m，南で1.86m，深さ0.7mであり，平面形はやや西側が出っぱった形の隅丸長方形で，断面は台形を呈しており，北側がなだらかに落ち，南側では急に立ち上がっている。土層は３層に分かれ，第１層はにぶい褐色砂質土層で酸化鉄及び小礫を含んで第２層のにぶい黄褐色砂質土層とともに皿状堆積になっている。第３層は褐灰色砂質土層である。土壙の南側に自然石が１個置かれた形で出土しているが，何の用途か，意図したものかは不明である。土壙内から遺物は殆どみられず，僅かに磨滅した土器片が数点出土しているが，時期を決定できるだけの資料となりえない。

土層から判断すると集石遺構と同時期と思われる。

(2)　ＳＫ－02

ＳＫ－01より約10m程集石遺構よりで検出されたもので，ＳＫ－01と同じく浅黄色砂質土層（小礫を含む）の最直下層で確認され，長軸Ｎ52°Ｅ，縦2.24m，横1.9m，深さ0.2mの隅丸長方形で，断面は皿形を呈している。非常に浅いことから上の部分が水田改田の際に削平されたものと思われる。覆土は１層でにぶい黄褐色粘質土層で，細粒の炭化物，火を受けて焼けた小亜円礫，磨滅した土器片が微量に入っていた。層序，覆土の状況からみて，集石遺構とほぼ同時期と思われ，集石遺構に関連したものと思われる。

(3)　ＳＫ－03

ＳＫ－02より約２ｍ程離れた所で直交する形で検出されたもので，前述の土壙状遺構と同じく浅黄色砂質土層（小礫を含む）の最直下層で確認され，長軸Ｎ138°Ｅで長さ現存2.42m，横1.96m，深さ0.2mの隅丸長方形を呈している。断面は南に深くなった皿状で，上の部分が削平されていると思われ，土層はＳＫ－02と同じくにぶい黄褐色粘質土層の１層で，やはり細粒の炭化物・火を受けた小亜円礫，磨滅した土器片が微量に入っていた。ＳＫ－01，02と同じ性格をもつものと思われる。

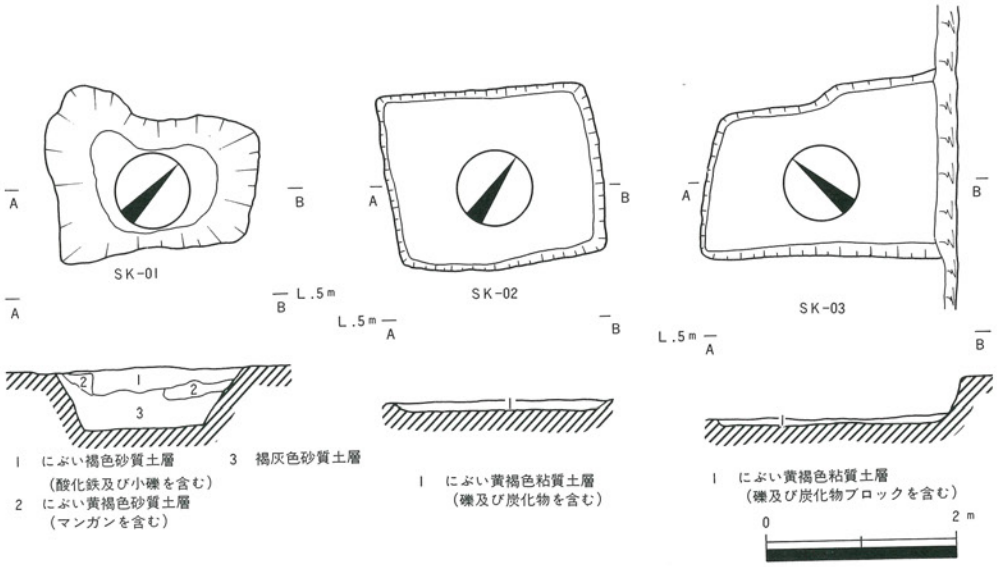


Fig. 9　第39区Ｂ調査区土壙状遺構

Ⅴ　遺　　物

（Fig. 10～12，Tab. 1～4，ＰＬ. 14～30）

この地点は調査の都合上，山に近い所すなわち標高の高い所から順にＡ～Ｄ調査区に分けているが，現耕作土の表面観察において39区も含める当地（野地区）一帯は，土師器・須恵器・その他中近世～現代に至る陶磁片が相当量散在することが確認できる。

「大毛島」という土地の制約上，土地利用は緩慢ならぬものがあり，遺物は殆どが細片となっており，当調査区も本来は大毛山系から緩やかに傾斜した開折谷による扇状地状を呈していたものを，現地形の水田にするために削平と客土をくり返しており，集石遺構と旧水田床土以外は，遺物の「現住所」を混乱させている。

以下Ａ調査区より順にＤ区までの遺物について述べることにする。

１．Ａ調査区

第１層は現水田耕土，第２層は現水田床土，第３層は旧水田耕土，第４層は旧水田床土である。他に排土及び表採のものに分けて述べる。

(1) 第１層

非常に遺物が少なく僅か２点の図化が可能であった。

煙管（１）

煙管の吸口部分で全長6.8㎝，最大径1.1㎝，吸口径0.5㎝で，羅宇から吸口に向かって同じ太さで全体の３分の２を占めており，吹口部分の３分の１は細くなり，吸口部分はやや太くなっている。１枚の銅板を巻いて成形しており，古泉編年Ⅵ期の19世紀以降と思われる（註３）。

土錘（６）

全長5.35㎝の土師質の管状土錘の丸棒成形で，胎土は赤褐色を呈し，白砂・雲母・黒砂を含んでおり，水簸しており，重さ2.2ｇである。

(2) 第２層

第１層と同じく非常に遺物が少なく５点が図化可能であった。

青磁（２）

底部の破片で非常に厚く，平底を呈し，高台は低くＵ字形を呈している。胎土は黄色味かかった灰色で，黒粒を含んでいる。釉は深みをおびたオリーブ灰色で龍泉窯系。森田編年青磁碗Ⅰ－４期，12～13世紀初頭（註４）。

土製品（５）

所謂泥人形の大黒像であり，胎土は緻密で白砂を含んでいる。淡燈褐色を呈し上半部は欠損している。范型押し成形で江戸時代。

土錘（７，９，11）

３点出土しており，９・11はやや胴の張ったものであり，７はやや細目のものである。いずれも丸棒成形。９は暗赤褐色を呈した陶質で，胎土に白砂・雲母を含み，最大径3.3㎝，重さ50ｇとやや大形で，表面にヘラ削り痕がみられ，両端に使用による磨滅痕がある。11は赤褐色を呈した土師質で，胎土に白砂・黒粒を含み，最大径3.4㎝，重さ67.2ｇとやや大形で，両端面ヘラ削りと指押さえを施しており，両端をしぼっ

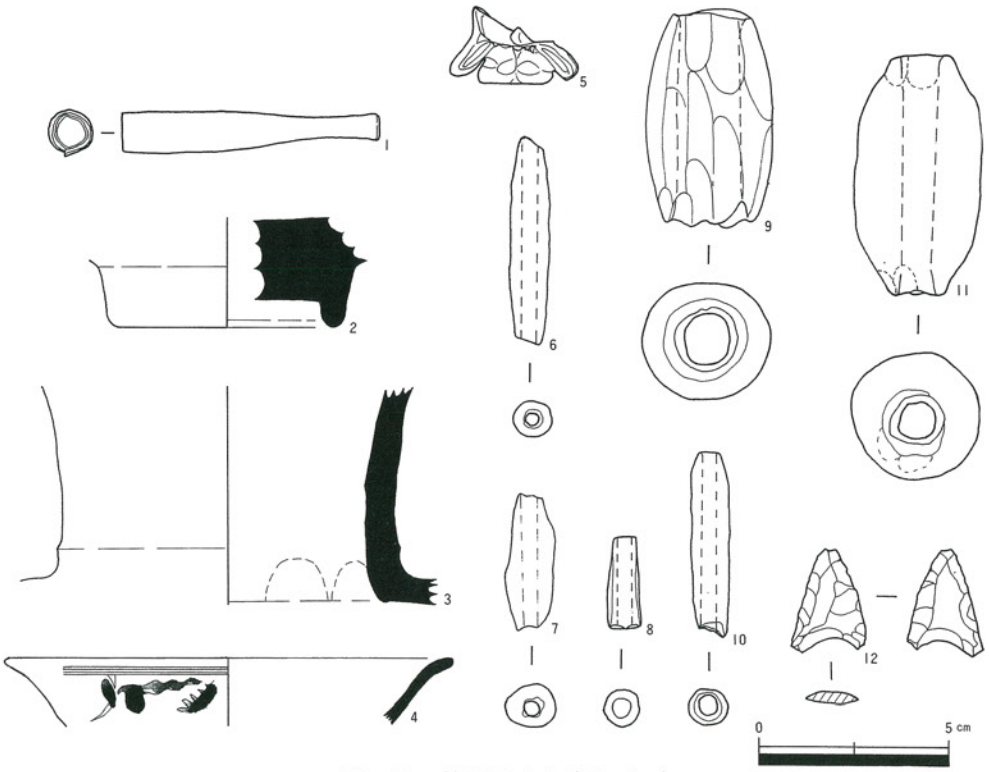


Fig.10　第39区出土遺物（１）

た状態である。７は現長3.4cmで灰白色を呈した土師質で，胎土に白砂・雲母・クサリ礫・黒粒を含み，最大径1.35cmで重さ4.6ｇで指押さえによるひずみがみられる。

(3)　第３層

僅か３点のみ図化が可能であった。

須恵器（３）

長頸壺で，頸部はゆるやかに外彎し，外上方に立ち上がっており，体部は頸部よりＬ字形に屈曲させ水平に開き，焼成は良好で胎土に白砂・雲母を含んでいる。粘土紐巻き上げ成形で内外面ともナデ調整を行っている。頸部の形態からみて８世紀代(註５)。

土錘（８．10）

８・10の２点出土しており，いずれも土師質である。８は欠損が大きく，丸棒成形，外面指押さえによるひずみが見られる。10は片方が欠損しており，やはり丸棒成形で，外面指押さえによるひずみが僅かにみられる。胎土は黄灰白色で体部の片方に黒斑がみられる。

(4) 第4層

わずか2点のみ図化が可能であった。

染付磁器（4）

体部は内彎気味に開き，口縁部は大きく外反，口縁端部は内外面より丸くおさめられている。胎土はやや黄色味がかった灰色で，釉はやや青味を帯びた灰白色，藍色で唐草文を描いており，伊万里焼で18世紀後半～19世紀初頭（註6）。

石鏃（12）

最大長は2.8cmで，凹茎式石鏃で剥片を3回の調整作業によって作り出しており，先端部は欠損しており片方に剥離面をそのまま残している。

(5) 排土及び表採

13～15は土師質土器，16～18は須恵器，20・21は青磁，22・23は近世磁器，19は陶器，25は石鏃，24は剥片，26・27は土錘である。

土師質土器（13～15）

いずれも甕の胴部の破片で，やや内彎しておりいずれも赤褐色・黄褐色を呈しており，13・14は格子目叩き，15は斜平行線文の叩きを施しており，13・15は製塩土器の可能性も考えられる。

須恵器（16～18）

17はやや肩の張った細口壺の破片と思われ，内外面ともロクロミズビキ仕上げを行っている。中村編年Ⅳ－3期で平安時代。18は壺か甕の底部の破片で平底であり体部はやや内彎して斜上方に立ち上がっており，内外面ともロクロミズビキ仕上げを行っている。16は薄手で口縁部に向かって「ハ」字型に開き，口縁内面を凹ませており，鉢か広口壺の口縁と思われる。

青磁（20・21）

いずれも緑色釉を施した碗の底部で，20はやや薄手で高台は削り出し高台を呈し森田編年Ⅰ－4期で12世紀後半～13世紀初頭。21は底部が非常に厚く，やはり削り出し高台でやや内傾した台形を呈しており，きめ細かい胎土で焼成もよく，森田編年小碗Ⅰ－1期で13世紀代。いずれも龍泉窯系のものと思われる。

染付磁器（22・23）

22は伊万里焼の紅皿で，型押し成形を行っておりやや薄手で口縁部はやや内傾している。外面無釉で小樽2号新窯に類似しており19世紀初頭（註7）。23は体部が球を

呈し，高台は外面やや内彎して高いものであり，焼き及び時期とも不明。

陶器（19）

非常に薄手で体部はゆるやかに内彎して外上方に開き，口縁部は屈曲させてやや斜下方に広げ，端部を上方につまみ上げており，口縁内面に１条の凹線が巡らされており，焙烙の一種と考えられるが，焼き時期とも不明。

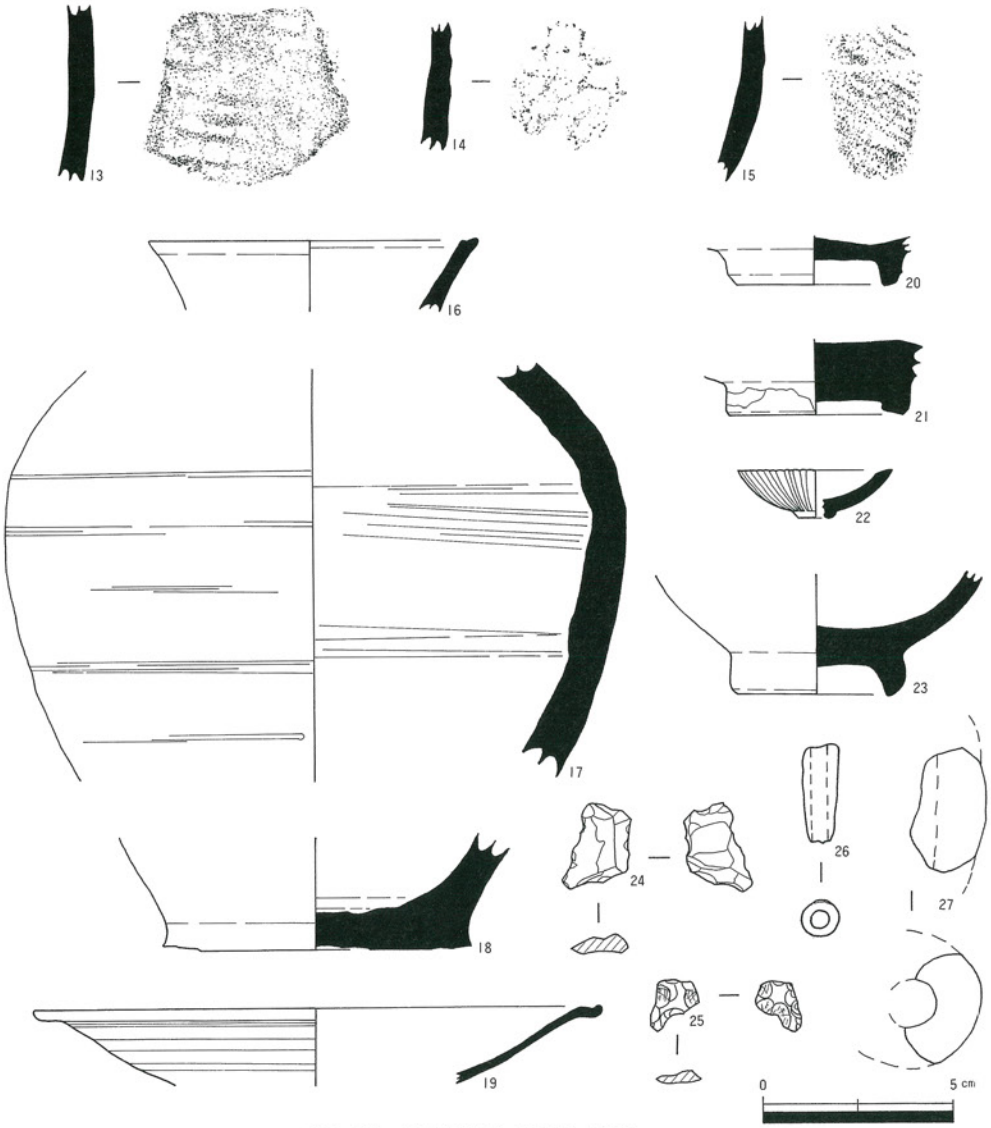


Fig.11　第39区出土遺物（２）

石鏃及び剝片（25・24）

25は凹茎式石鏃で，非常に小さいもので剝片を利用し３回に分けて調整剝離している。尖端部及び茎部の片方を欠損している。24は表面に剝離面の凹みがみられ，外面はやや膨らんでおり石器作製途中の剝片と考えられ，いずれもサヌカイトである。

土錘（26・27）

いずれも土師質土器で，26はやや細目で現在最大幅１㎝で，胎土は水簸されており丸棒成形で片方を欠損しているため全長は不明。27はやや大きめのものであり，胴部の破片で丸棒成形で指押さえ痕がみられる。

以上Ａ調査区について述べたが，旧水田跡を明確にしえる資料はなく，土地利用の激しさを物語っており，その中でも土錘と青磁が比較的多く出土している。青磁はこの水田跡に伴う可能性は考えられず，旧水田整地の際に混ざったものと思われる。

２．Ｂ調査区

現水田耕土及び床土，旧水田覆土，旧水田床土，集石遺構，表採及び排土中に分けて述べる。

(1) 第１層及び第２層

第１層は現水田耕土，第２層は現水田床土であり，いずれも現位置を遊離したものであり，図化できた21点について述べる。

須恵器（28・29）

いずれも破片であり，28は壺もしくは甕の肩部で淡青灰色を呈し，胎土に白砂・黒粒を含んだ焼成良好なもので，体部内彎気味に内傾して口頸部にいたっている。内外面とも叩きが施され，内面平行線，外面細かい斜平行線文である。29は口縁部の破片で灰青色を呈し，胎土に白砂を含んだ焼成良好なもので，体部は内彎気味に開いて口頸部にいたり，口縁部は外に肥厚させて下端をつまみ出している。時期は不明。

白磁（35）

底部は平底で，体部は内彎しながら斜上方に立ち上がり，底裏面静止糸切り離しを行っており，釉はやや黄色味がかった灰白色の白磁皿で中国産白磁と思われる。

染付磁器（30・31・36）

30・31は伊万里焼で，36は焼き不明である。30は体部が外傾気味に立ち上がる筒形で，碗か小鉢の底部で高台は低く外面底部はヘラ削りを行っている。胎土は乳白色で

黒粒を含み，薄い藍色で高台付近に２条の平行線を描いている。31はやや厚手で内彎しながら外方に開き，高台は低く狭いものでやや外反しており，くすんだ藍色で○×文，内面見込みに五弁花を描いており，18世紀後半。36は薄手で高台はやや高くＵ字形を呈してやや外方に開いており，藍色で外面草花文，内面見込み渦巻文を描いており，焼き時期とも不明。

陶器（32・33・34）

いずれも大谷焼で，32は胴部上半の破片で，内面にロクロ痕を残しており，外面に黒褐色釉が施され，「酒」の字が焼成前にヘラ彫りされている。33は燈明台の皿の部分で，体部は直線的に斜上方に立ち上がっており，口縁端部は外側より丸くおさめており，暗褐色釉を施している。34は所謂落蓋で，体部外半はヘラ削りを施しており，口縁部はＬ字形に屈曲させており，内面見込みにつまみが付けられているものと思われる。内面のみ暗茶褐色の釉を施している。いずれも18世紀後半～19世紀前半（註８）。

土錘（37・38・39・40・41・42・44・45・46・47）

全部で10点出土しており，いずれも水簸した胎土で丸棒成形であり，42を除いてはいずれも土師質である。37は最大径1.1㎝のほぼ完形であり，胴部がやや膨らんでおり，中央部に斜めに縄掛け痕があり，網の下を巻き付けて固定していたことをうかがわせる。39は片方が欠損しており，指押さえによるひずみがみられ，一部に黒斑がみられる。41は両端を欠いたもので，焼きムラがみられ焼成は悪い。38は片方を欠損しており，最大径は0.9㎝で棒状を呈している。40はほぼ完形に近く，長さ4.2㎝，最大幅1.4㎝で，中央部が膨らんでおり，焼成は良好。42は陶質のもので赤褐色を呈し，最大幅２㎝とやや幅をもち中央部の膨らんだものであり，片方を欠損している。44は中央部がやや膨らんだもので，焼きが柔らかく，表面は磨滅している。45はほぼ完形で長さ５㎝，最大幅1.2㎝，重さ4.2ｇで指押さえによるひずみがみられる。46は両端を欠損しており形がひずんでおり焼成は良好。47は長さ4.9㎝，最大幅3.1㎝で中央部が大きく膨らんだ大きめのもので，外面ヘラ削りがみられ丁寧なつくりである。

煙管（48）

煙管の鴈首で火皿部分は欠損し，体部中央がつぶれている。羅宇の竹が一部残っており脂返し部の彎曲が小さいことから古泉編年Ⅴ期の18世紀後半。

以上20点の現水田耕土及び床土には古墳時代以降近世までの資料が混在しており，土地利用の激しさを物語っている。

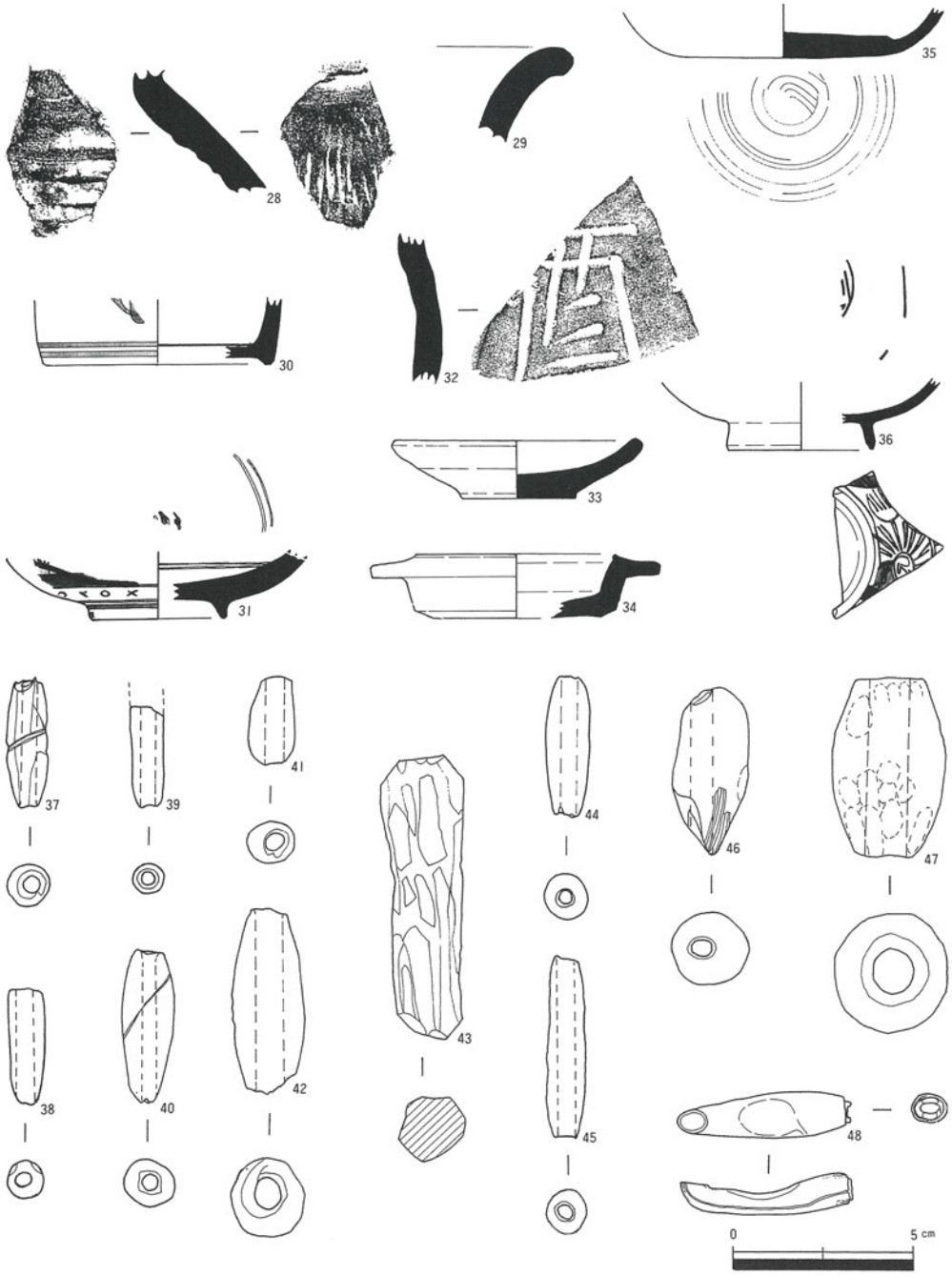


Fig.12　第39区出土遺物（３）

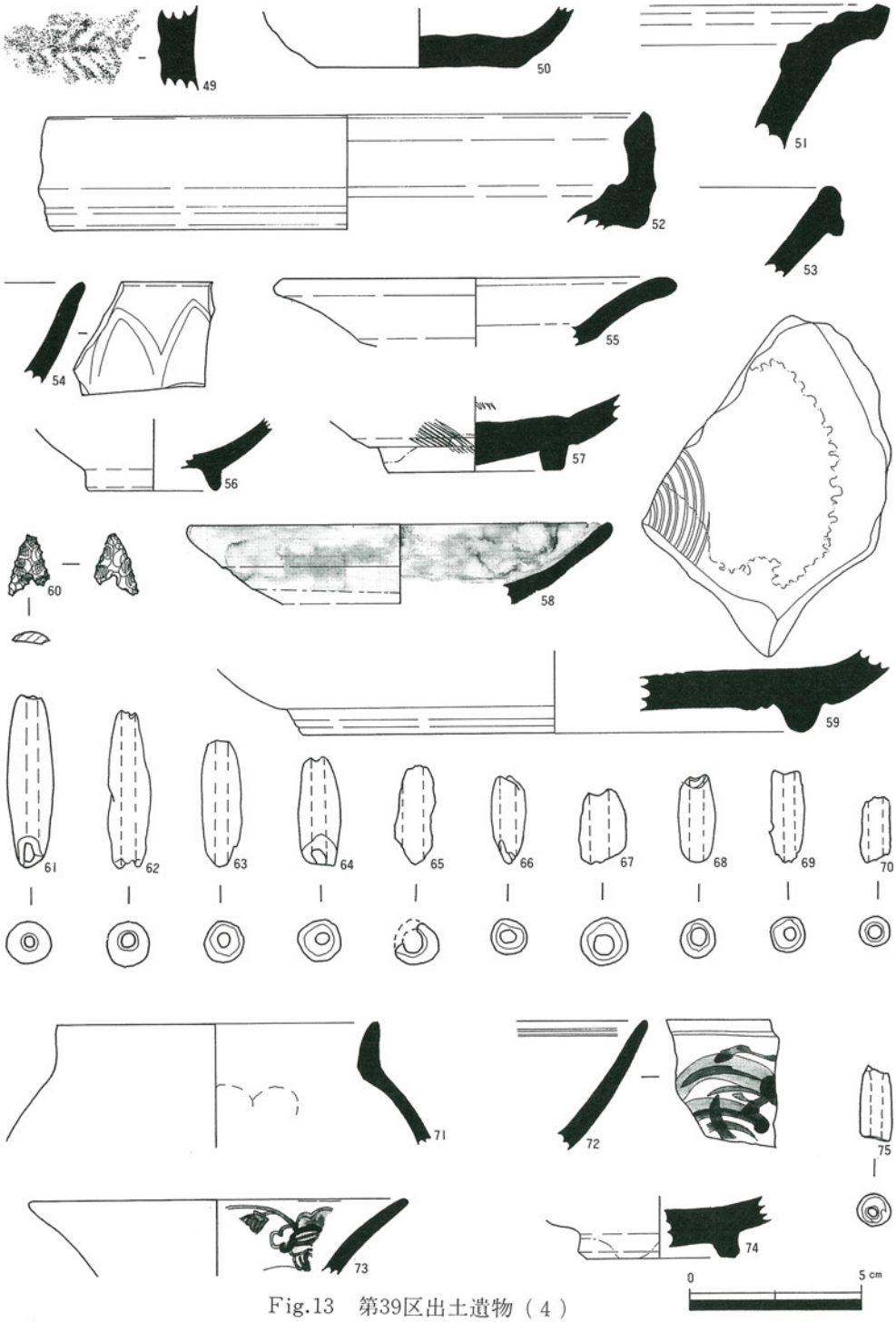


Fig.13　第39区出土遺物（４）

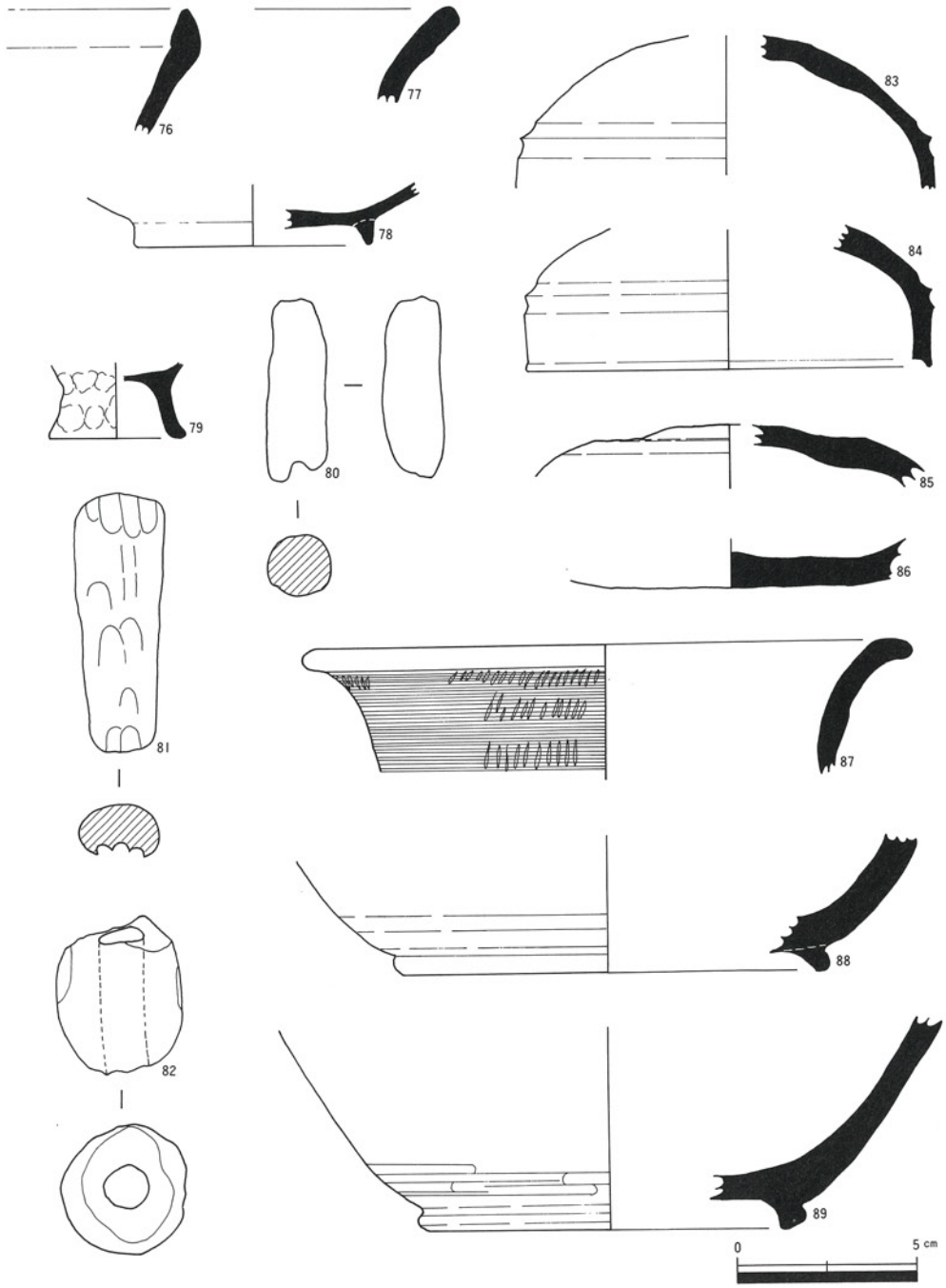


Fig.14　第39区出土遺物（５）

(2) 第３・４層

いずれも調査区南東端で検出された旧水田址の覆土から出土したものであり，22点を図化した。

土師質土器（49・50）

49は甕の体部の破片と思われ，厚さが１㎝とやや厚く胎土は浅黄色であり，外面に綾杉文の叩き目がみられる。50は杯の底部で体部は内彎して立ち上がり，底部は平底で胎土は水簸しており淡褐色を呈し，白砂・黒粒を含み江戸時代のものと思われる。

須恵器（51・52・53）

51は甕の口縁部で，口縁部は外反して開き外側に端面をつくっており，マキアゲミズビキ技法で内面に凹凸がみられ，中村編年Ⅱ型式第１段階で６世紀中頃。52は壺の破片で，口縁部を上に持ち上げて面をつくり，緩やかな一条の凹線を巡らしている。口縁内面を抉りこみ蓋が取りつけられるようにしており，端部は尖り気味であり，胎土は褐灰色，ミズビキ技法によるナデが施されている。53は鉢の破片で，体部は内彎気味に開き，口縁部は外に肥厚させて下端をつまみ，端面を形成している。端面には浅い凹みを巡らしており，胎土は淡青色を呈し片口鉢と思われる。

青磁（54・55・57）

54は碗の口縁の破片で，体部はやや内彎しながら，外上方に立ち上がり，口縁端部は内側より丸くおさめている。胎土は灰白色で明緑灰色の釉が施され，陽刻による鎬

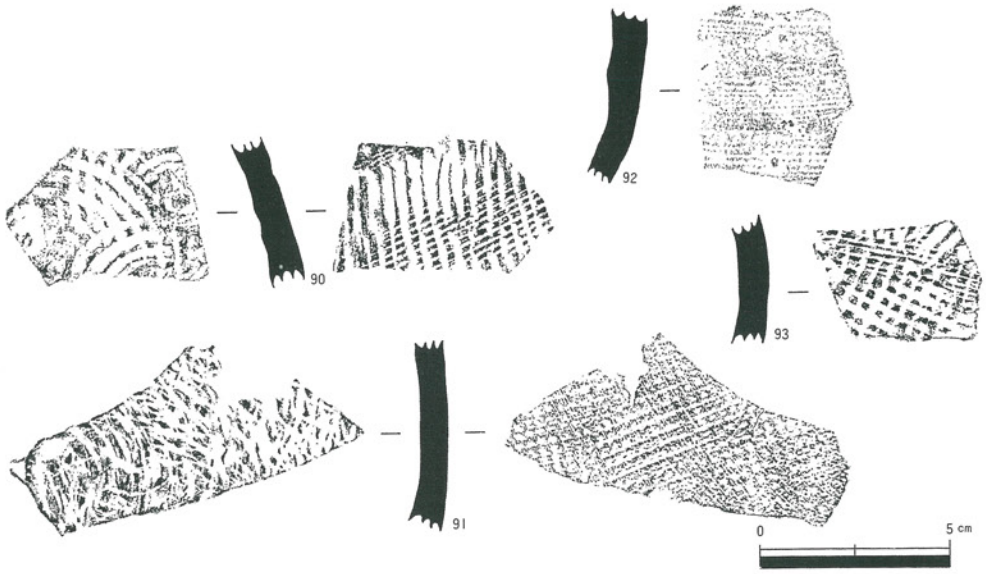


Fig.15　第39区出土遺物（６）

蓮弁文が描かれており，龍泉窯系で森田編年碗Ⅰ－５期で13世紀中頃。55は皿の口縁部の破片で，体部はゆるく内彎しながら大きく外反し，口縁部は外片につまみ出しており，端部は丸くおさめている。胎土はきめ細かな灰オリーブ色で外面とも貫入がみられ龍泉窯系。57はやや厚手の碗の底部で，高台は削り出し高台で畳付に砂が付着した兜巾高台であり，体部は僅かに内彎しながら斜外方に開いており，内面体部境に稜線を巡らしている。外面に11条単位の櫛目描きでオリーブ黄色釉を施しており，同安窯系で，森田編年碗Ⅰ－１期で12世紀中頃～13世紀初頭。

白磁（56）

56は底部の破片で，体部は僅かに内彎気味に外上方に開き，高台は断面台形で外面下半ヘラ削りを行っており，僅かに外へ開く。乳灰白色釉をかけており中国産白磁と思われる。

陶器（58・59）

58はいわゆる唐津焼の銅緑釉皿で，体部は内彎して斜上方に開き，口縁部は外側より丸くおさめている。内外面とも薄くくすんだ緑色の釉をかけ，外面は体部上半までの施釉であり，「国内出土の肥前陶磁」ｐ94．No.690　山口県長門国分寺跡などに類似しており，大橋編年Ⅱ期の17世紀後半。59は底径14.6㎝の平底の底部の破片で低い高台を貼り付けており，体部は僅かに内彎して斜上方に立ち上がり，内面見込み蛇ノ目釉ハギを行っており，オリーブ黄灰色の釉を施しており，美濃・瀬戸系の鉢である。

石鏃（60）

長さ1.8㎝の凹基式石鏃で，基部の片方を欠損しているがほぼ完形に近く，重さ0.3ｇと非常に軽く小さいもので，剥片を丁寧に剥離しており，サヌカイト製である。

土錘（61～70）

いずれも土師質で細目の管状土錘で，胎土は水簸しており丸棒成形を行っている。70は両端を欠損しており指押さえによるひずみが明瞭に表われている。68・69は片方を欠損しており，やや体部中央が膨らんだ形を呈している。65～67は両端を大きく欠損しており，いずれもやや体部中央が膨らんだもので，65は指押さえによるひずみが大きく出ている。63・64は片方を欠損しており，体部中央がやや膨らんでいる。61・62はほぼ完形に近く，64は指押さえのひずみが激しく長さ4.4㎝，重さ5.2ｇである。62は体部中央が膨らんでおり，長さ5.1㎝，重さ6.7ｇである。

(3) 第５層

いわゆる旧水田址の床土で，水田址が作られた時期以前の遺物であり，５点のみ図化が可能であった。

土師質土器（71）

短頸壺の口縁の破片であり，体部は内彎気味に内傾して口頸部は短く直立し，口縁端部を内側より丸くおさめている。外面ヨコナデ，内側頸部は指押さえの跡がみられる。淡赤褐色の胎土で焼成は良好。

染付磁器（72・73）

72は伊万里系の碗であり，体部は内彎して僅かに内彎して開き，口縁端部を丸くおさめており，青味かかった灰白色の釉を施し，ややにごった藍色で草花文を描いており，18世紀代か。73は体部が外反して開き，口縁端部をそのまま丸くおさめており，胎土は黄色味がかった灰白色で，青味かかった灰白色釉を施しており，灰色がかった藍色でつる花文を描いており，伊万里系と思われるが磁器・焼きとも不明。

青磁（74）

やや厚手の底部の破片で，高台は削り出した台形で，底裏面に兜巾痕を残しており，龍泉窯系で森田編年Ⅰ－５期で13世紀中頃。

土錘（75）

土師質の細目の管状土錘で，片方を欠損している。暗褐色を呈し，水簸しており，外面に一部ヘラ削りの跡がみられる。

以上第３～５層の水田跡の遺物をみると，伊万里焼の18世紀代，唐津銅緑釉皿（17世紀後半）がみられることから，開田は18世紀代と考えてよいものと思われる。土師質土器，須恵器は後で述べる集石遺構との関連が考えられる。

(4) 集石遺構

Ｂ調査区の北東に位置し，大小さまざまな和泉砂岩の非常に丸くなった石をいくつかのブロックに積んだ中から出土したものである。以下17点のみ図化できた。

土師器

76は鉢の口縁で，体部は直線的に外上方に立ち上がり，口縁部は外側を肥厚させて丸くおさめ，口唇部は僅かに内外する。口縁内面に一条の凹線を巡らしており，二次焼成を受けている。77は頸部より大きく外反した口縁の破片で，焼成は甘くやや白っ

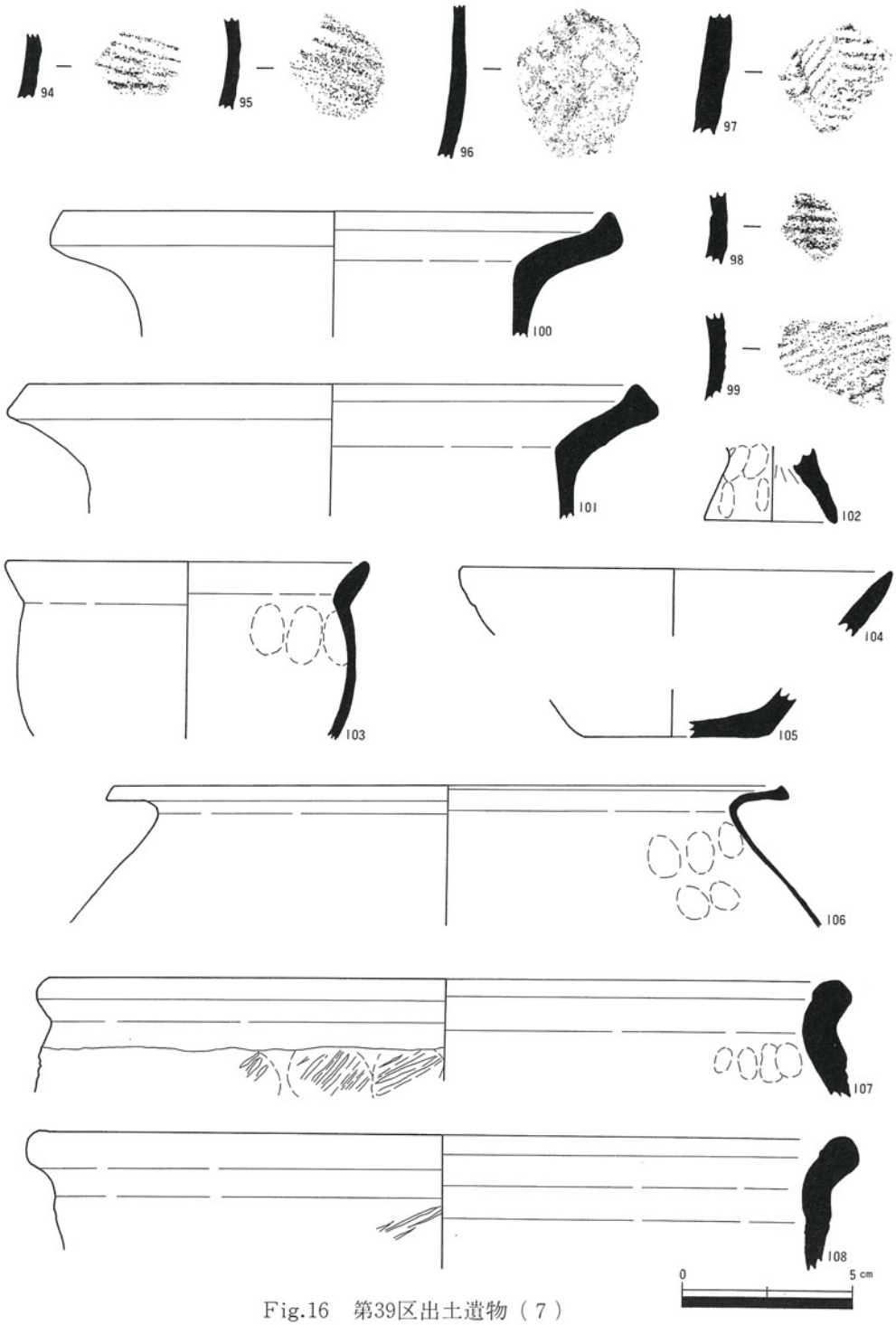


Fig.16　第39区出土遺物（７）

ぽい胎土であり，磨滅が激しく調整は不明。78は碗の底部で，体部はやや内碗気味に斜上方に開き，高台は台形で貼りつけ高台，底部は平底であり，磨滅のため調整は不明。79は脚台で二次加熱により変色している。製塩土器と思われる。

須恵器

83～85はいずれも杯蓋であり，体部は球形を呈し体部下より３分の１ぐらいの所で下方にゆるく屈曲させており，マキアゲミズビキによるナデの凹凸が明瞭であり，中

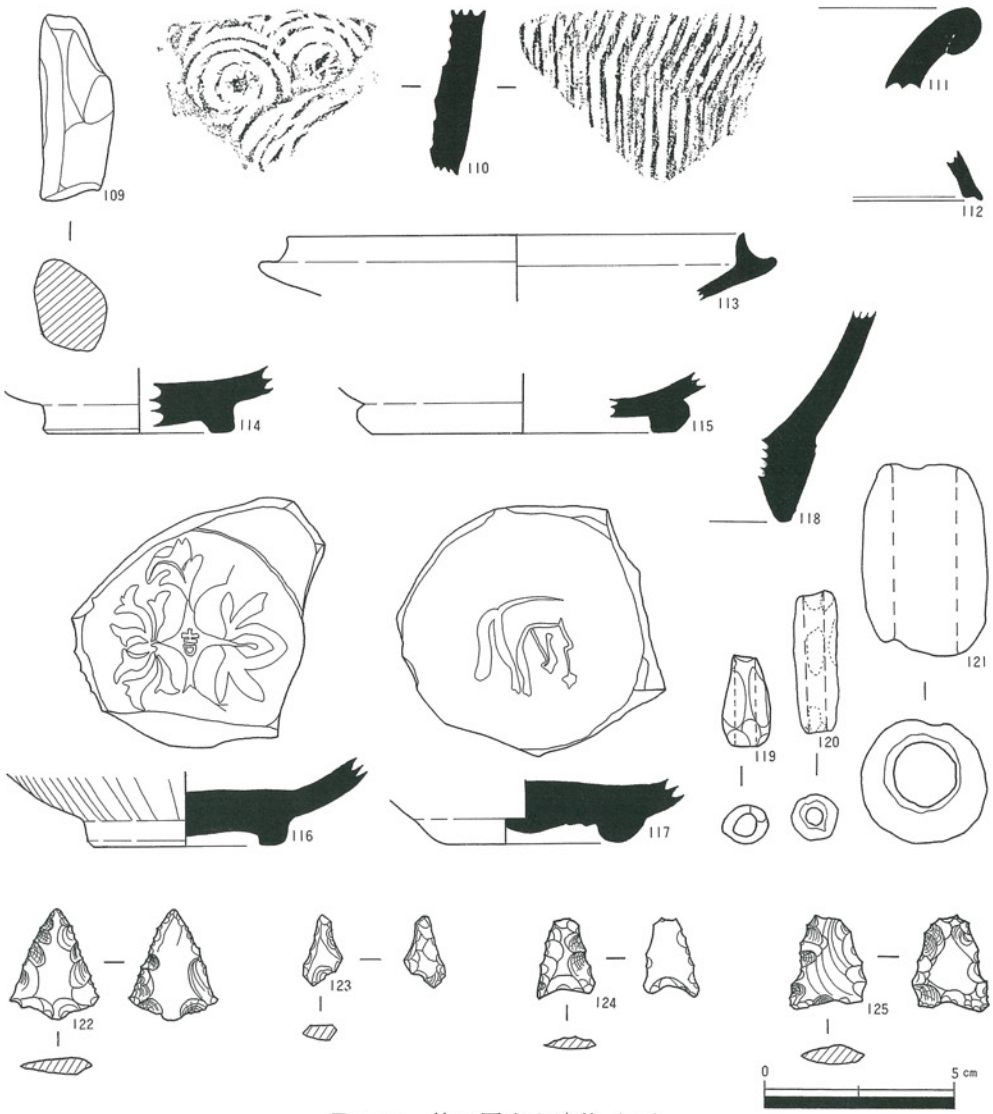


Fig.17　第39区出土遺物（８）

村編年Ⅰ型式4段階の5世紀後半。84は体部が83よりはやや平坦となり，途中で大きく屈曲してまっすぐに下り一条の稜線を巡らしている。口縁部内面を抉り受部との接合面を形成し，マキアゲミズビキによるナデの凸凹がみられ，中村編年Ⅰ型式3段階の5世紀後半。85は体部が平坦に近く，マキアゲミズビキによるナデの凹凸を明瞭に残しており，体部下半は欠損している。中村編年Ⅱ型式3段階の6世紀中頃。86は杯の底部で，平底とみられるが高台の付いていた可能性もある。マキアゲミズビキによるナデを施している。87は壺か甕の口縁で頸部は緩やかに外反し，口縁部を外方に折り曲げて端部を丸くおさめている。外面ハケか櫛による平行線を施し，所々に斜めの平行線を描いている。中村編年Ⅲ型式2段階の7世紀末～8世紀初頭。88・89はいずれも壺の底部で，体部が内彎しながら外上方に立ち上がっており，高台は低く外反したり貼り付け台形で，内外面ともナデ痕が残っており中村編年Ⅳ型式3段階の平安時代。90は内面青海波文，外面細かい斜格子文，92は外面平行線文のナデを施している。

支脚（81）

土師質の断面円形のもので，胎土は水簸させており焼きは甘く外面ヘラ削りで煤が付着しており，土鍋もしくは土釜の支脚と思われる。

土錘（80・82）

80は最大幅1.7㎝の両棒状有溝土錘で片方は欠損し，溝幅は0.6㎝で断面円形を呈ししており，指ナデによる凹凸がみられる。82は最大径3.5㎝とやや大きめの破片で，灰白色を呈し焼成は良好であり，丸棒成形。外面に指おさえ痕がみられる。

以上集石遺構の遺物について述べたが，古墳時代中頃より平安時代にかけての遺物が大半であることから，この時期に存続していたことがわかる。

⑸ 表採及び排土

調査前の表面採集及び，土層不明の排土中から出土したもので，大半は表採である。

土師器

94～99はいずれも甕の胴部の破片であり，体部は球形を呈しており，94・95は斜格子文，96は格子目文？，97は綾杉文，99は斜格子文である。100・101は甕の破片で体部がまっすぐで口縁部は斜上方に外反し，口縁端部をやや上方につまみ上げ気味になっており，胎土は橙黄色を呈し，焼成は良好で内外面とも磨滅が激しいため，調整は不明である。103は体部が球形を呈し，口縁部は体部より屈曲して外反し，端部を

丸くおさめている。胎土は茶褐色で焼成は良好。内外面とも調整は不明であるが頸部に指おさえがみられ，製塩土器と思われる。102は脚台であり，脚部のみで「ハ」字形に外反し，端部はやや内彎気味に丸くおさめており，外面指押さえ痕があり内面しぼり目がみられ，二次焼成を受けており製塩土器と思われる。104は体部が直線的に斜上方に開き，口縁端部は尖り気味であり体部上半に一条の稜線がみられる。一応碗と思われ内外面とも磨滅が激しく調整等は不明である。105は杯か皿の底部で，底部は平底で体部は斜上方に立ち上がっており，内外面ともナデ調整を行っている。106は甕で体部がやや内彎しながら「ハ」字形に下方に開き，大きく屈曲して水平に開いた口縁部で端部を上につまみ上げており，器壁が1㎜と非常に薄く焼成は良好であり，内外面とも磨滅が著しく調整は不明であるが，内面体部上面に指押さえ痕がみられ一応古墳時代初頭と考えられる。107は口縁部から頸部の破片で，口縁端部をやや内外に肥厚させ丸くおさめており，体部はやや外反している。外面はヨコナデを行っており斜平行文のタタキメが体部上半にみられ，内面指押さえの跡がみられる。108は体部が直下し，口縁部は屈曲して外反させ，やや肥厚させて丸くおさめており，外面に斜平行文のタタキメが体部上半に施されている。

支脚（109）

いずれも土釜か土鍋の支脚で，断面楕円形を基本とした角形を呈し，胎土は水簸しており焼きが甘く，外面ヘラ削りが施されている。

須恵器（110〜113）

110は甕の胴部の破片で淡青色を呈し，胎土に白砂・雲母・クサリ礫を含み，内面青海波文，外面平行叩きを重ねて施している。111は壺か甕の口縁の破片であり，口縁部は外側に折り曲げ丸くおさめて玉縁状を呈しており，淡褐色で内外面ともミズビキ調整を行っている。112はやや薄手の杯蓋の破片で，体部は内彎気味に下降し，内側に小さく返りをもって受部を形成している。胎土は淡青灰色を呈し，内外面ともミズビキ調整を行っており，中村編年Ⅱ型式1段階の6世紀前半。113は杯身部の破片で，体部はやや浅く返りが外反したやや高い受け部を形成しており，内外面ともミズビキ調整を行っており，中村編年Ⅱ型式4段階で6世紀後半。

青磁（114〜117）

114はやや厚手の底部の破片で，高台は低く削り出しの台形を呈し，体部は直線的に大きく外反しており，淡緑青色釉で内外面とも貫入がみられ，森田編年碗Ⅰ－5期

の13世紀中頃。115は高台部分の破片であり，高台外面を３面に削り出して屈曲させた削り出し高台で，体部は斜上方に直線的に延びている。116はやや厚手の底部の破片で，高台は台形の削り出しで，外面鎬文を陰刻し，内面蓮弁文と吉の字を陰刻してモチーフしており龍泉窯系で森田編年Ⅰ－５期，13世紀中頃。17は底裏面に兜巾痕を残す底部の破片で，高台は低く削り出しで断面U字形を呈し，有は緑色で，内面見込みに意味不明紋様が陰刻されており，龍泉窯系でやはり13世紀中頃。

陶器（118）

大谷焼の徳利の破片で，高台は断面逆台形状で高く，体部は内彎気味に立ち上がり，外面暗茶褐色釉を施しており，内外面ともロクロナデが明瞭に残っている。

石鏃

123はチャート製で，ほかはすべてサヌカイト製である。122は二等辺三角形を呈した凸茎式石鏃で，剥片を３回にわけて剥離している。123は黄灰褐色を呈したチャート製で，断面台形のものの両端を剥離しており石鏃と思われるが，剥片の可能性もある。124は裏面は剥離面をそのまま利用したもので，荒く剥離したもので茎部が僅かに凹んだ凹茎式石鏃である。125は茎部が外へ張り出した五角形状を呈したもので，片方及び先端部を欠損しており，片面のみ丁寧な剥離を行っている。いずれも弥生時代に伴うものと思われる。

土錘（119～121）

いずれも土師質の丸棒成形で胎土は水簸しており，細目のものとやや太めのものの２種に分けられる。119は両端を欠損しており，体部中央が膨らむものと思われ，ヘラ削りの痕がみられる。120も両端を欠損し筒形を呈しており，指押さえによる凹凸がみられ最大径1.3㎝のものである。121は両端を欠損し焼成は甘く，体部の中央部がやや膨らんでいる。

３．Ｃ調査区

第２層は水田床土，第３層は旧水田耕土，第４層は旧水田床土，表採及び排土に分けて述べる。

(1) 第２層

水田床土から出土したもので，一部水田耕土のものも含まれている。

土師質土器（126）

杯の底部であり，高台は低く三角形の貼り付け高台で，胎土は明橙色を呈し水簸させているもので，奈良〜平安時代と思われる。

須恵器（127）

長頸壺の頸部と思われ頸部はやや外反して斜上方に立ち上がっており，肩の張るタイプと思われ，灰色の胎土で内外面ともマキアゲミズビキ調整を行っており，中村編年Ⅳ型式３段階の平安時代。

青磁（128・131）

128は皿の底部の破片で，体部外面はヘラ削りによって鋭角に立ち上がっており，底部はやや上げ底で黄褐色釉を施し，内面見込み櫛によるジグザク文の陰刻がつけられており，同安窯系で森田編年皿Ⅰ－１期の12世紀中頃〜13世紀初頭。131は碗の体部の破片で，体部は球形を呈しており胎土は灰オリーブ色を呈し，緑色釉を施し内面に鎬文が施されており，龍泉窯系で森田編年碗Ⅰ－５期の13世紀中頃。

染付磁器（129・130）

いずれも伊万里焼で，129は体部が僅かに内彎し直線的に立ち上がり，口縁端部を丸くおさめている。淡灰色の胎土に淡灰色釉を呈した陶胎染付で，くすんだ藍色で唐草文を描いており，18世紀代。130は体部が球形を呈し，口縁端部を丸くおさめており，胎土は灰色でやや青味がかった灰白色の釉を施し，藍色で二重網目文を描いており「肥前陶磁」p.81　No.926，927佐賀県長尾遺跡に類似しており，17世紀後半〜18世紀代。

陶器

132は口縁部を上方に広げ面を作っており，二条の浅い凹線を巡らしており，口縁内面を凹ませＬ字形に屈曲している。内面にロクロナデ痕を残しており，備前焼で鎌倉時代と思われる。133は口縁と体部境を三角に突起させた尖帯を巡らしており，口縁部はやや内彎しながら内方に傾き，端部を内側より丸くおさめている。体部はやや内彎しながら斜下方に下っており，内面にロクロナデ痕を残しており，備前焼。134は器高が1.8cmと低く体部は内彎して開き，口縁端部は内側より丸くおさめており，体部にロクロメを残し体部下半と口縁部内側に煤が付着しており燈明皿である。胎土は淡褐色で暗赤褐色の釉を施しており美濃・瀬戸系と思われる。135は焼成良好で堅緻であり，体部は直線的で口縁端部は丸くおさめられており，体部にロクロメを残しており，備前系の鉢と思われる。136は壺であり，やや厚手で体部はやや内彎して下

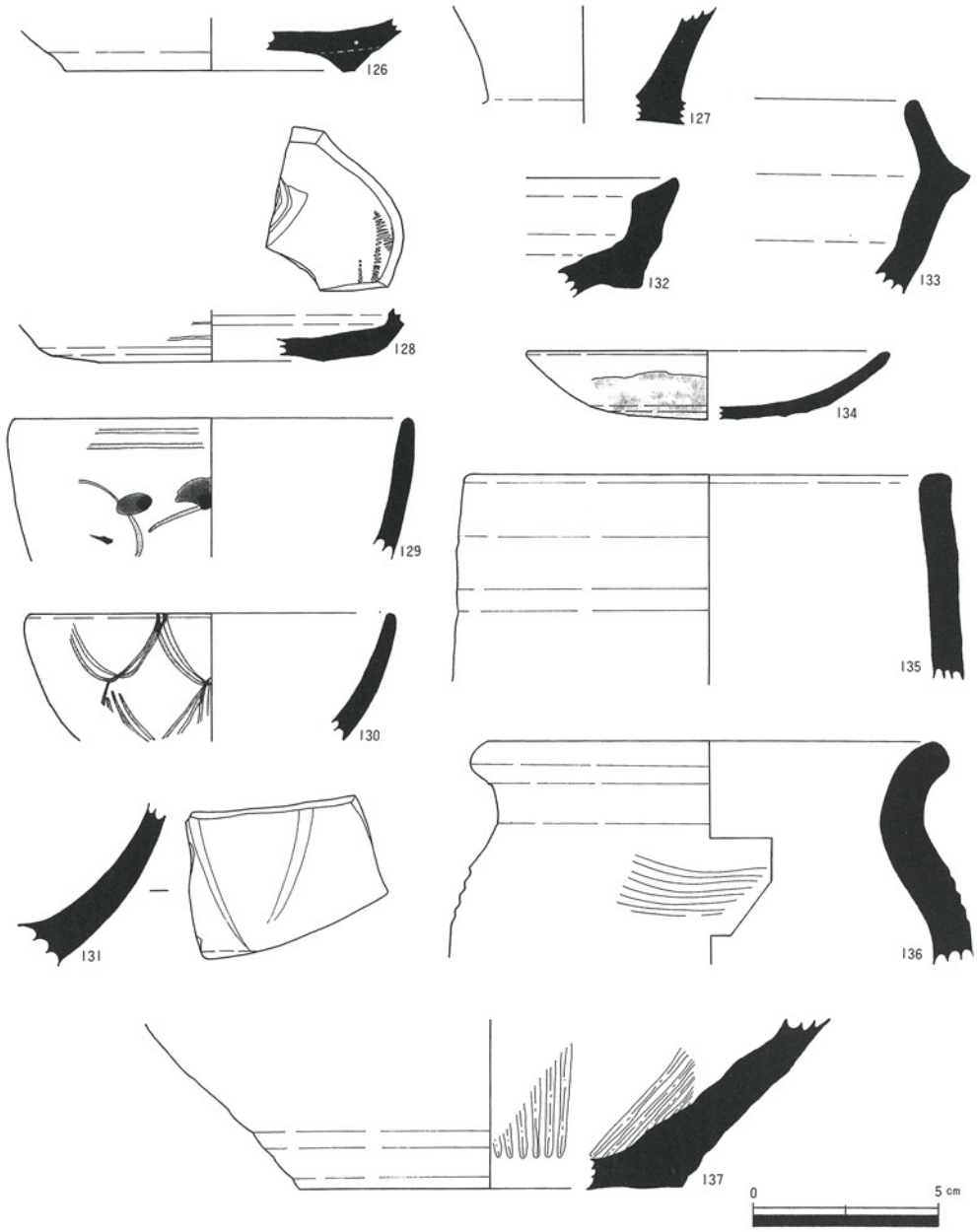


Fig.18　第39区出土遺物（９）

方に下っている。口縁部はゆるく「く」字形に外反させ，口唇部に平坦面をもたせて丸くおさめている。外面に平行櫛目文を施し，内面ロクロナデを行っており，備前焼。137は擂鉢の底部であり，平底で体部は斜上方に直線的に開いており，外面布によるロクロナデ調整を行っており，内面6条単位の平行櫛目により擂面を形成しており備前焼。

土錘（138〜141）

138・139は，やや大きめの土錘の破片であり，140・141はやや細目の管状土錘であり，いずれも水簸させており，焼成はやや甘く丸棒成形で，140・141は体部中央がやや膨らんでおり，指押さえによる凸凹がみられる。

鉄砲玉（142）

円形の鉛玉で，直径1.3cmで現重量9.1gであり，表面に凹凸がみられる。

(2) 第3層

旧水田耕土であり，磁器・青磁の3点のみ図化が可能であった。

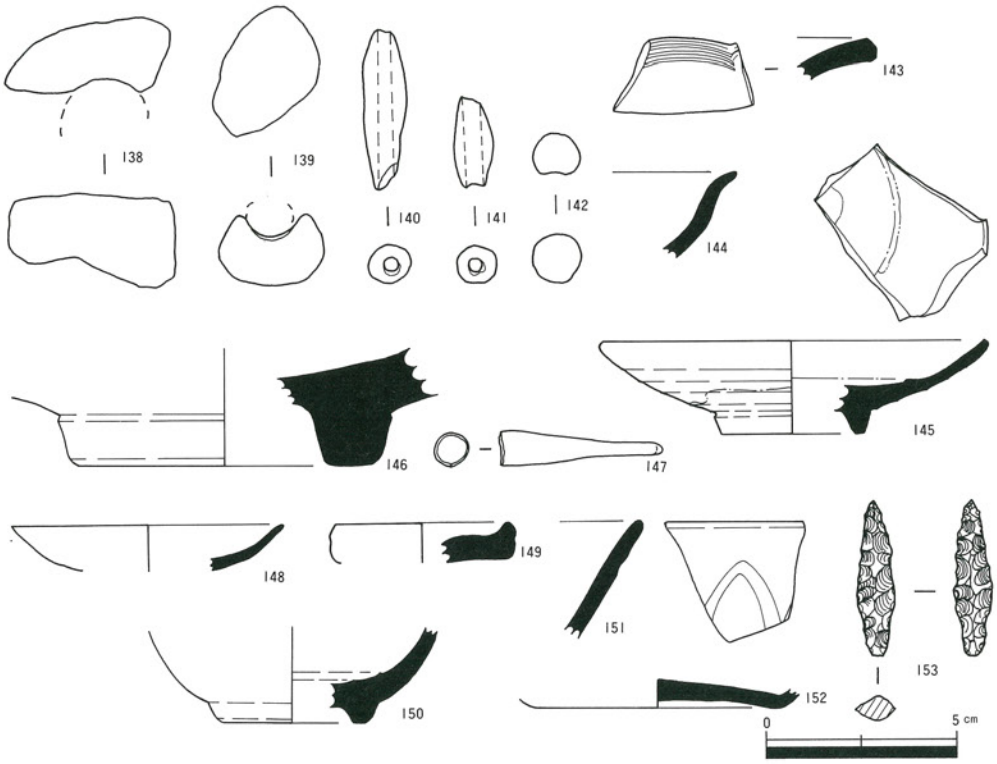


Fig.19　第39区出土遺物（10）

青磁（143）

口縁部が輪花の皿で，口縁部は大きく外反させ内面に3条の沈線を横方向に巡らしており，淡くくすんだ緑色で粗い貫入りがみられ，同安窯系のものと思われる。

染付磁器

145は断面台形の削り出し高台で，内面見込み蛇ノ目釉ハギを行った白磁皿であり，伊万里焼で17世紀後半～18世紀前半。144は口縁部が外反した端反り型で端部を薄く仕上げており，くすんだ灰白色の釉をかけた白磁碗であり，粗い貫入がみられ，伊万里焼と思われる。

(3) 第4層

旧水田跡の床土で，この水田の開田の時期がおされられる資料となるものであり，鉢と煙管の吸口2点のみが図化可能であった。

陶器（146）

所謂唐津焼の刷毛目鉢で，胎土は淡赤褐色で高台は断面台形でやや幅広く削り出しており，体部は僅かに外反気味に大きく開いている。褐釉の上に白釉の平行刷毛目を施しており，17世紀後半～18世紀前半。

煙管（147）

吸口の部分で，1枚の銅板を丸く巻いて貼り合わせたもので，羅宇の付近より吸口に向かって細くなっており，吸口部は丸くなっている。古泉編年Ⅴ期の18世紀後半。

以上旧水田跡の耕土及び床土には5点の遺物の図化を行ったが，青磁は別として，近世のしかも18世紀代に比定される遺物に限定されることから，18世紀代後半には旧水田跡が形成されていることを物語っている。

(4) 表採及び排土

表採は排土中のもので確実な層位がわからないものであり，一応6点が図化可能であった。

土師器（148・149）

148は皿で非常に薄手のもので，底はやや丸底気味になるものと思われ，体部下半で屈曲して斜上方に立ち上がり端部を内側へ丸くおさめており，杯の可能性もある。149は細い頸部で口縁部は大きく外反させ，端部を上へつまみ上げて外側に端面をつくり，口唇部にヘラ状工具による沈線が一条巡らされている。

青磁（151・152）

151は碗の口縁部の破片であり，体部は直線的に外上方に立ち上がり，口縁端部は内外面より丸くおさめられており，外面に鎬蓮弁文が陰刻され龍泉窯系で森田編年碗Ⅰ－５期で13世紀中頃。152はやや薄手の底部の破片の上げ底気味で，体部はやや内彎しながら外上方に開くものと思われる。焼き時期とも不明。

染付磁器（150）

伊万里焼の瓶又は壺の底部と思われ，体部は球形を呈し，高台は低く台形であり，高台畳付部に砂目痕があり，胎土はやや黄色味がかった灰白色で，外面に灰白色釉を施しており，内面無釉である。

石鏃（153）

細身の凸茎式石鏃で全長４㎝，重さ５ｇであり，両面中央に稜をもち，自然面を残さない緻密な剝離を行っており，非常に鋭い端面であり，断面は菱形を呈している。

以上Ｃ調査区について遺物の概要を述べたが，土師質土器・青磁はいずれも開墾の際に混入したものであり，水田の時期に該当するものではない。水田床土から出土した唐津刷毛目鉢，煙管の吸口からみて，18世紀代しかも後半と考えることが妥当であると思われる。

４．Ｄ調査区

Ｄ調査区は非常に狭い範囲であったため，旧水田址境はとらえられたが遺物はなく，現水田耕土及び床土からの出土物のみで，水田耕土からは土錘が１点のみ出土しているが，一応２層の現水田床土の中に含めた。

(1) 第１層

現水田耕土のもので，皿と燈明皿の２点のみが図化可能であった。

磁器（154）

伊万里焼の皿の底部の破片で，高台径が6.4㎝とやや大きく，体部は外に開き屈曲して斜上方に内彎して立ち上がっており，高台は低く三角形を呈しており，胎土は灰白色で淡い緑灰白色の釉を施している。内面見込み蛇ノ目釉ハギを行っており18世紀代。

陶器（155）

底部はやや上げ底気味の平底で，体部は内彎して立ち上がり，胎土は淡黄白色でオリーブ黄白色の釉を施し，貫入があり，底部外面ロクロ糸切り離しを行っている。胎

土・釉調からみて美濃・瀬戸系の燈明皿と思われる。

(2) 第2層

磁器，陶器，土錘，鉄製品，鉄砲玉など12点が図化可能であった。

磁器（156〜159・161）

いずれも伊万里焼のもので，156はやや薄手の皿で，体部は内彎気味に開き，口縁は外反した端反り型を呈し，端部は内側より丸くおさめられている。藍色で外面に唐草文が描かれており，唐草の紋様からして18世紀代。157は体部が僅かに内彎気味に立ち上がっており，端反り型の猪口で高台は低く三角形を呈し，くすんだ藍色で柳を描いており，器形からみて17世紀後半。158は体部が球形を呈し，高台はやや高く台形で，釉はやや青味がかった白色で，藍色で草花文を描いているが時期は不明。159は皿の底部の破片であり，高台は低く内傾した三角形を呈し，くすんだ藍色で内面見込み欠損のため文様不明を描き，外面高台に二条の平行文を描いており，時期は不明。161は体部は内彎気味に立ち上がり，高台は幅狭く高い高台で，淡黄色の胎土に淡黄白色の釉を施し，細かい貫入がみられることから，京焼系と思われる。

陶器（160，162，167）

160は燈明台裾の受け皿の部分で，口縁部はつまみ上げられており，赤褐色の胎土に黒褐色の釉を施しており，大谷焼で18世紀後半〜19世紀前半。162は体部が僅かに内彎しながら斜外方に開いており，体部中頃に燈芯受部が巡らされており，底部はやや上げ底気味の平底で，胎土は淡黄褐色で釉は淡茶褐色釉を施しており，貫入がみられる。胎土・釉調からみて美濃・瀬戸系と思われる。167は体部が僅かに内彎気味に直立しており，口縁部は外に折り返して肥厚させ玉縁状を呈しており，内外面ともロクロナデの痕がみられ，淡茶褐色釉を施した鉢で，焼き不明。

土錘（163，164）

163は旧水田耕土からの出土であり，他は現水田床土よりの出土である。いずれも細目のもので胎土は水簸しており丸棒成形であり，体部中央がやや膨らんでおり，指押さえの痕によるへこみがみられ，164は外面ヘラ削りの痕もみられる。

鉄製品（165）

全長4.3cm，厚さ0.7cm，重さ10.7gで頭をL字形に折りまげており，身部は偏平で先端をとがらせており，折頭型クサビで船釘と思われる。

鉄砲玉（166）

円形を呈したもので，直径1.3㎝で重さ9.6ｇであり，表面に僅かに凹凸がみられ，徳島城跡からも出土していることからみて江戸時代のものと思われる。

(3) 表採及び排土

調査前の表採及び排土中から出土したもので，土師質土器，須恵器，染付磁器，陶器が出土している。

土師質土器（171）

甕の体部の破片で焼きはよく，胎土は褐色を呈し外面にやや太めの平行ハケメを交差させて行っている。

須恵器（168）

器種不明の底部で，焼成は良好で暗青灰色を呈し，底部は平底で体部は内彎気味に立ち上がっており，ミズビキナデ痕を残している。中村編年Ⅱ－４・５段階で６世紀代。

陶器（169）

大谷焼の徳利の胴部の破片で，ゆるく内彎した筒形を呈し，暗茶褐色の釉を施し焼成前にヘラでもって「？油」と刻みこまれており，内外面ともロクロナデ痕を残している。18世紀後半以降。

染付磁器（170）

皿の底部の破片で，体部は内彎して外上方に開いており，高台は削り出しで台形を呈しているものと思われ，青味がかった灰白色の釉を施し，内面見込み蛇ノ目釉ハギを行っており，伊万里焼で17世紀後半～18世紀前半。

５．地区不明及び地域外表採

いずれも調査区域が不明なものと調査区域外のフィールドでもって拾ったものを図化したものである。土師質土器，土錘，石鏃，剝片が採集されている。

土師質土器

172は体部をやや内彎させながら下方に下り，口縁部は「く」字形に外反させ，若干肥厚させている。内面タテ方向のハケメ，内面平行と斜めのハケを施しており，土鍋と思われる。173は鉢か碗の底部と思われ，底部はやや上げ底気味の平底で，体部は内彎しながら斜上方に外反しながら立ち上がっている。淡橙褐色を呈し，焼成は良好であるが内外面とも磨滅のため調整は不明。

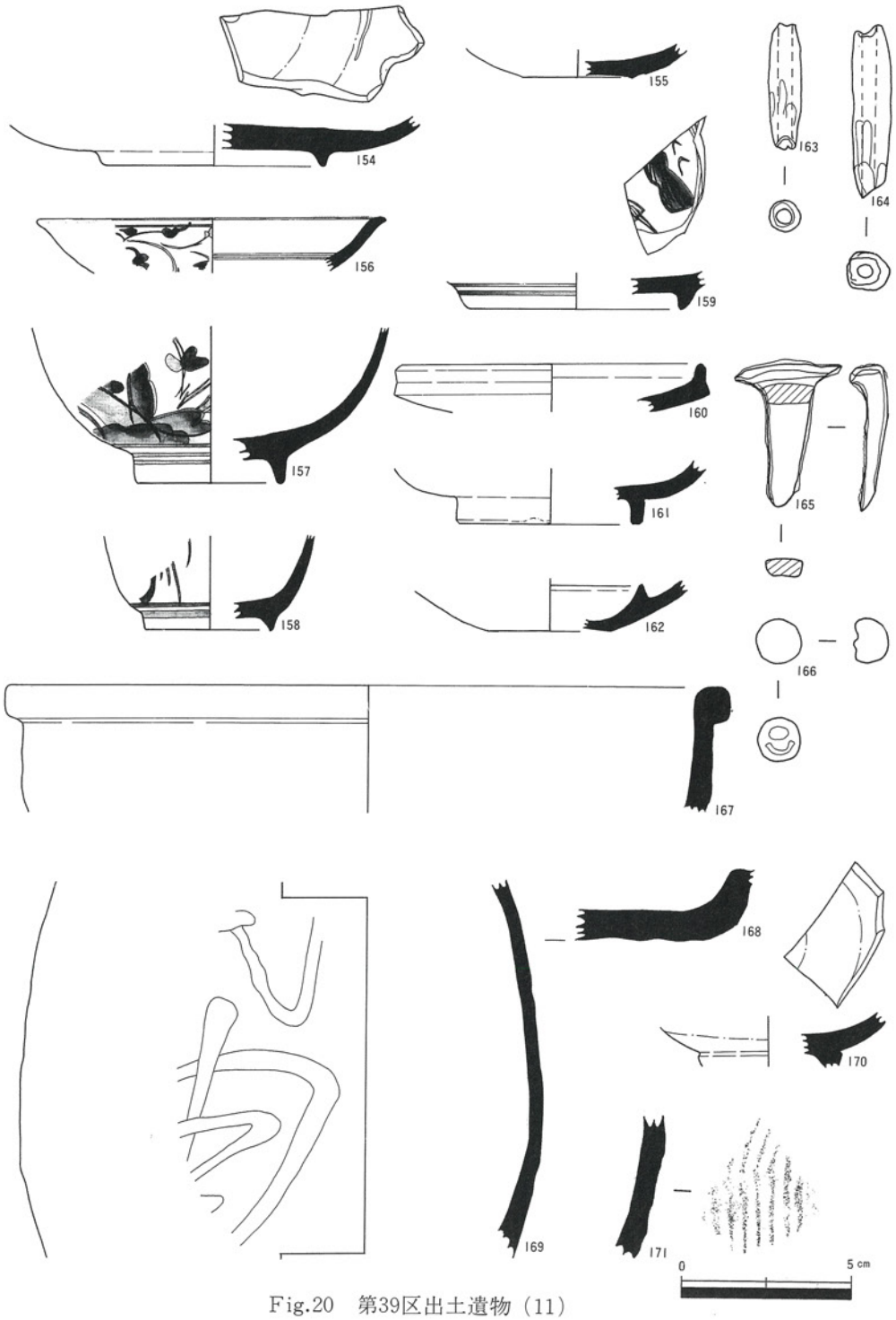


Fig.20　第39区出土遺物（11）

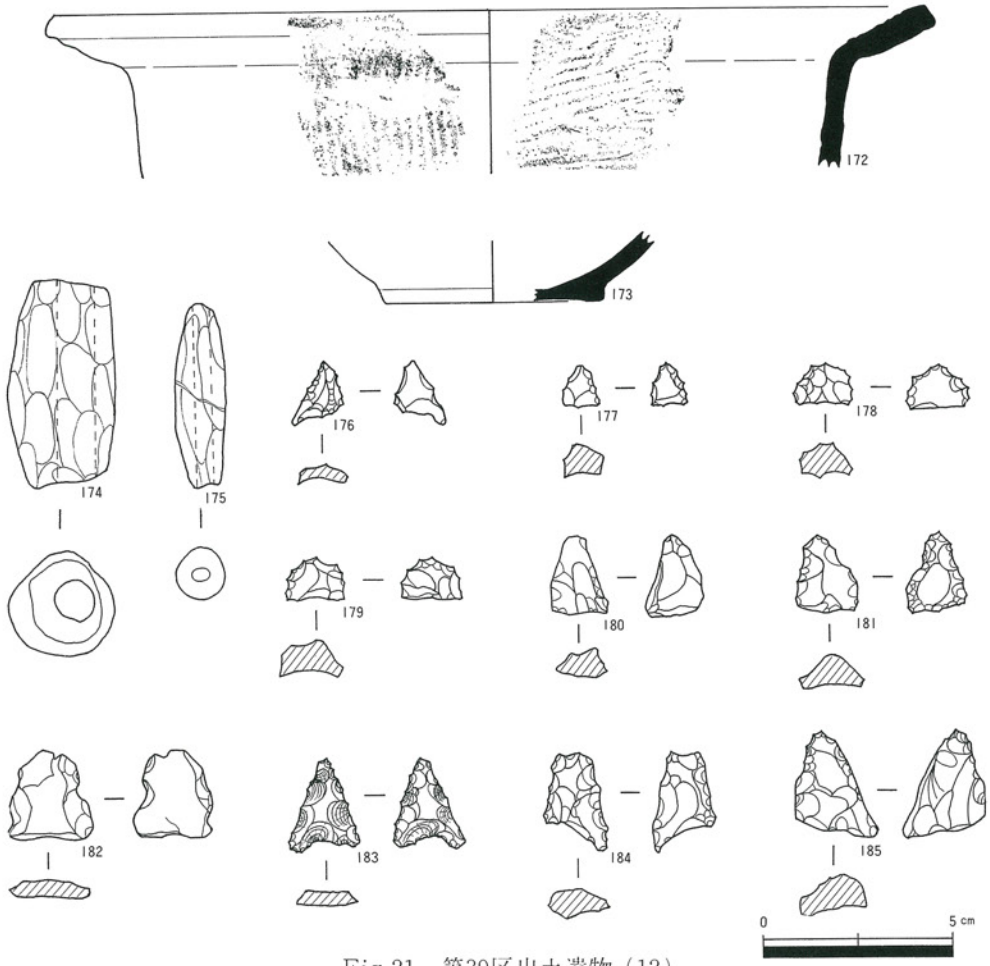


Fig.21　第39区出土遺物（12）

土錘

２点ありいずれも土師質で胎土は水簸しており丸棒成形。175は細目のもので最大径1.3㎝，体部中央が膨らんだもので，外面ヘラ削りを行っており，外面中央部に縄目跡がみられる。174はやや太めのもので最大径2.8㎝，体部外面ていねいなヘラ削りを行っている。

石鏃

形態は二等辺三角形の凹茎式石鏃で，剥片の両端をていねいに剥離して作っており，サヌカイト製。

剥片

177・182はサヌカイト，176・178・181・185はチャートの剥片であり，チャートは

184・185のように端面に人工的な剝離が施されているように見え，石鏃の石材とも考えられるが，燧石として利用された可能性もあり，石器の石材としては断定しがたい。

Ⅵ まとめ

1．水田跡

本県における水田址が検出された例は，奈良時代と考えられている徳島市庄遺跡西警察地区（溝跡と小畦畔跡）と江戸時代初頭に比定される鳴門市大麻町池谷中内遺跡（足跡，小畦畔，大畦畔，溝跡），江戸時代と考えられている徳島市庄遺跡徳島大学地点（溝跡）についで4例目である。本県における水田址の検出例が少なく，しかも同時期に位置するものは非常に少ない（註9・10）。

本調査区付近は「鳴門市史」（上巻）に新田開発の記録が残されており，この資料から検討し，大毛島内の水田開発の時期を判断することとする（註11）。

本島は，文献の上で大毛島という地名では記録がなく，大永3年（1523）の室町時代後期に大代勝福寺過去帳に「泊庄」という荘園名がみられる。その後，⑴延宝6年（1678）5月13日，板野郡土佐泊浦（以下略）検地帳，田2町2反5畝18歩，高19石4斗2升2合，畠13町1反6畝21歩，高66石2斗4升6合とあり，水田より畠が6倍近くあることを表しており，以下各時期とも圧倒的に畑が多く，本島の特色を示している。次に⑵元禄8年（1695）12月18日新開検地帳，畠合6反4畝24歩，高合1石5斗1升4合。⑶宝永5年（1708）11月新開検地帳，田数8畝15歩，高6斗5升7合，畠3反1畝，高1石6斗1升7合。⑷正徳元年（1711）11月新開検地帳，畠合8反1畝9歩，高合2石5斗4升。⑸享保6年（1721）3月新開検地長，田8反3畝13歩，高2石5斗2合，畠1町1反5畝3歩，高1石5斗6升9合。⑹享保18年（1733）11月新開検地帳，田2反7畝24歩，高1石1斗1升2合，畠5反3畝12歩，高6斗7升8合。⑺宝暦4年（1754）3月新開検地帳，畠7反4畝3歩，高合7斗4升5合。⑻天明3年（1783）11月新開検地帳，畠数4反5畝24歩，高9斗1升6合。以上の8例である。この中で水田開発を行い，しかも遺物が18世紀中頃以降となると，享保18年（1733）に限定され，この時期に改田されたものでないかと考えられる。

本島での水田可能地域は，本島の中央部を南北に縦断する山系の東側に開ける微高地にあり，極めて限定されている。したがって検地帳における水田開発は，本遺跡が

立地する野地区と，一つ山系をへだてた黒山地区の２地域に限定される。現在でもこの２地域以外に水田耕作を行っているところはなく，相当以前からこの地域が水田可能領域であることを物語っている。

本島における水田耕作は山系が低く，しかも深みがないため山自体に保水力はなく，常時水の流れる渓谷は皆無といっても過言ではなく，小川らしきものもない。したがって雨水や湧水を溜め池に溜めて利用するしかなかったと思われる。現に，現在の水田も水田の周りを取り巻くように溜め池が掘り込まれ，水を動力ポンプで汲み入れており，しかも標高３m以下の低い所で水田耕作が行われている。ましてや現在のように動力ポンプのない江戸時代においては，水田耕作の一番重要な水の確保は想像以上の労力と苦労を要していたと考えられる。

本遺跡の水田跡は，現在の水田地帯からみると比高差２～３m高い所にあり，水の確保には不便なところである。しかも，大毛山系の支脈がすぐ南側に大きく出てきており，遺跡のすぐ近くまでせまっており，急傾斜であるので日照時間が短く，水田耕作にはあまり恵まれていないことからみて，水田耕作には不適当な所をあえて水田にしたと考えられ，出土遺物と相合わせて考えるならば，本島でも江戸時代の水田開発の最終段階になるものと考えられる。

２．集石遺構

集石遺構の状況を要約すると，自然状態に集石したものでなく，人工的に円形もしくは長方形に意図的に配石されたものであること，集石の中に火によって焼けた石が多くみられること，集石内の覆土に焼土・遺物・炭化物を含んでいること，集石の周りと底を粘土でもって固めていること，集石の中に黒斑がみられることなどが上げられる。これらのことから考えると火を用いたことが明らかである。

火を用い，海辺部近くでの集石遺構の性格としては，ほかの調査例から考えるならば，まず製塩跡が考えられる（註12）。

製塩跡を考える上では，まず製塩土器の脚台形土器が僅か２点であり，タタキメをもつ破片を製塩土器と考えて入れても十数点しかなく，火を受ける為破損が激しく使い捨て同然の土器が非常に少ないこと，しかも周辺部にも全くみられない，集石内を清掃して捨てた灰原が見当らないこと，集石間の土壌が製塩遺跡のごとく焼けて固くしまった状態でないこと，現海岸線から相当離れていることなどを考え合わせてみると，土器製塩の可能性は少ない。

それに比して須恵器の量が図化できた中でも多いことがあげられる。ただ火を用いた痕跡は確実にあることからみても，何らかの海に関する他の生産かもしくは，祭りのたぐいが行われていた可能性はある。今後の資料の集積によって性格は解明されるものと思われる。

3．出土遺物について

近世のものと考えられる土錘の数が非常に多く出土しており，形態的に大小2種類に分けられるものであり，やはり島という性格上漁業が盛んに行なわれていることを物語っている。

龍泉窯・同安窯系の青磁が包含層中より数多く出土していることは，それより以前から，土佐の国司の任を終え京に帰る際に記述された「土佐日記」の中に承平5年（935）1月29日の頃に大毛島の土佐泊浦で停泊し，潮待ちの後，京都へ帰ったとの記録があり，これより以前より阿波・土佐の国より畿内へ渡る海上交通の要所であったとされている。この土佐泊港の後背に開けたこの地は，この港とともに繁栄した集落や寺院の存在が考えられ，12〜13世紀にかけての集落等の遺跡の所在の傍証となるものである。

以上簡単に述べてみたが，出土遺物からみると弥生時代から今日までの遺物が所在し，狭い平坦地を幾度となく土地利用がなされていたことを物語っている。集石遺構の性格の解明はできなかったが，今後の調査の類例をまちたいと思う。

註

註１　徳島県文化財調査概報「鳴門架橋に係る道路建設に伴う埋蔵文化財精密分布調査報告書」　’77年　徳島県教育委員会

註２　徳島県文化財調査概報「大鳴門橋架橋関連工事に伴う埋蔵文化財発掘調査　大毛島39区遺跡」　’82年　徳島県教育委員会

註３　古泉　弘「江戸時代の考古学」　考古学ライブラリー48　’87年

註４　森田　勉「太宰府出土の輸入中国陶磁について」　九州歴史資料館研究論集４　’83年

註５　中村　浩「陶邑Ⅲ」　大阪府文化財調査報告第30集　’78年

註６　特別展図録「国内出土の肥前陶磁器」　’84年　佐賀県立九州陶磁文化館

註７　特別展図録「白磁の美」　’86年　佐賀県立九州陶磁文化館

註８　豊田　進「阿波の陶器」　陶磁選書５　’74年

註９　徳島県文化財調査概報「庄遺跡発掘調査概報」　’81年　徳島県教育委員会

註10　「中内遺跡」　’81年　徳島県教育委員会

註11　「鳴門市史」上巻　’76年　鳴門市史編纂室

註12　近藤　義郎「土器製塩の研究」　’84年

間壁　忠彦「広江・浜遺跡」　倉敷考古館研究集報14集　’79年

近藤　義郎「土器製塩の話」　考古学研究　’79～80年

近藤　義郎「製塩」　日本の考古学Ⅳ　’67年

「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報Ⅳ・大浦浜遺跡」　’81年　香川県教育委員会

Tab. 1　第39区出土土器類観察表

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
2	磁器	碗か鉢	青磁 平底 施釉	高台径　5.8 高台高　1.6	胎土：黄色味がかった灰色，釉：深みがかったオリーブ灰色，龍泉窯系，森田編年碗Ⅰ−4
3	須恵器	長頸壺	粘土紐巻き上げ 内外面ナデ		胎土：白砂・雲母を含む，焼成硬い，8C
4	磁器	皿	草文図：藍色で唐草文 施釉	口径　11.7	胎土：やや黄色味がかった灰色，釉：やや青味おびた灰白色，伊万里焼，18C後〜19C初
13	土師質土器	甕	格子目叩き		赤褐色・黄褐色を呈す 胴部の破片
14	土師質土器	甕	格子目叩き		赤褐色・黄褐色を呈す 胴部の破片
15	土師質土器	甕	斜平行線文叩き		赤褐色・黄褐色を呈す 胴部の破片
16	須恵器	鉢か広口壺		口径　8.6	口縁
17	須恵器	細口壺	ロクロミズビキ仕上げ		中村編年Ⅳ−3，破片
18	須恵器	壺か甕	ロクロミズビキ仕上げ	底径　8.0	底部の破片
19	陶器	焙烙の一種	口縁内面に1条の凹線	口径　14.9	
20	磁器	碗	青磁 施釉	高台径　4.0 高台高　0.6	釉：緑色，底部 龍泉窯系 森田編年Ⅰ−4
21	磁器	碗	青磁 施釉	高台径　4.5 高台高　0.3	釉：緑色，底部 龍泉窯系 森田編年小碗Ⅰ−1
22	磁器	皿	染付磁器 型押し成形 貝殻文	口径　4.0 器高　1.3 高台径　4.9 高台高　0.2	外面無釉 小樽2号新窯に類似 伊万里焼の紅皿 19C初
23	磁器	皿	染付磁器	高台径　4.0 高台高　0.7	
28	須恵器	壺か甕	内面：平行線文叩き 外面：細かい斜平行線文叩き		胎土：白砂・黒粒を含む，焼成良好 淡青灰色を呈す 肩部

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
29	須恵器	不明			胎土：白砂を含み焼成は良好 灰青色を呈す 口縁部の破片
30	磁器	碗か小鉢	染付磁器 高台付近に薄い藍色で2条の平行線を描く 外面底部：ヘラ削り		胎土：乳白色で黒粒を含む 底部 伊万里焼
31	磁器	碗	染付磁器 見込み：五弁花 高台にくすんだ藍色で○×文		伊万里焼 18C後
32	陶器	徳利	内面：ロクロ痕 外面：酒文字が焼成前にヘラ削りされている，施釉		釉：黒褐色 胴部上半の破片 大谷焼，18C後〜19C前
33	陶器	燈明台	施釉	口径 6.6 高さ 1.6 底径 3.1	釉：暗褐色 大谷焼，皿の底部 18C後〜19C前
34	陶器	落蓋	内面見込みにつまみ 体部外半ヘラ削り	口径 5.5 高さ 1.8 底径 4.5	釉：暗茶褐色 大谷焼 18C後〜19C前
35	磁器	皿	白磁 施釉 底裏面静止糸切り離し	底径 5.5	中国産 釉：やや黄色味がかった灰白色
36	磁器	碗か小鉢	染付磁器 見込み：渦巻文 外面：藍色で草花文	高台径 3.9 高台高 0.8	
43	土師器	支脚	外面：ヘラ削り ハシ削り		胎土：乳灰色で白砂・雲母・クサリ礫を含む
49	土師質土器	甕	外面：綾杉文の叩き目		胎土：浅黄色 体部の破片
50	土師質土器	杯	平底	底径 5.8	胎土：水簸しており淡褐色を呈し，白砂・黒粒を含む，底部 江戸時代
51	須恵器	甕	内面：マキアゲミズビキ		胎土：やや粗く白砂を含む，色調：青灰色 中村編年Ⅱ−1 口縁部

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
52	須恵器	壺	ミズビキ技法によるナデが施されている	口径 17.4	胎土：褐灰色，細かい白砂・雲母を含む 破片
53	須恵器	鉢			胎土：密で白砂・黒粒を多く含む，色調：淡青灰色，破片
54	磁器	碗	青磁染付 施釉 陽刻による鎬蓮弁文		胎土：灰白色 釉：明緑灰色 龍泉窯系，口縁の破片 森田編年碗Ⅰ−5
55	磁器	皿	青磁	口径 11.0	胎土：きめ細かな灰オリーブ色，龍泉窯系 内外面に貫入，口縁部
56	磁器	不明	白磁，施釉 外面：下半ヘラ削り	高台径 3.7 高台高 0.6	中国産，底部の破片 釉：乳灰白色
57	磁器	碗	青磁 内面：体部境に綾線 外面:11条単位の櫛目文・施釉	高台径 5.0 高台高 0.75	削り出しの畳付砂粒付着兜巾高台，釉：オリーブ黄色，同安窯系 森田編年碗Ⅰ−1，底部
58	陶器	皿	内外面とも施釉，但し外面は体部上半まで施釉	口径 12.1	釉：薄くくすんだ緑色 唐津焼の銅緑釉皿 大橋編年Ⅱ
59	陶器	鉢		高台径 14.6 高台高 0.8	美濃・瀬戸系 平底の底部の破片 釉：オリーブ黄灰色
71	土師質土器	短頸壺	内面：頸部は指押えの跡 外面：横ナデ	口径 9.3	胎土：淡赤褐色，焼成：良好，口縁の破片
72	磁器	碗	染付 草花文（ややにごった藍色）		伊万里焼，胎土：黄色味がかった灰白色，釉：青味がかった灰白色
73	磁器	碗	染付 つる花文（灰色がかった青色）	口径 10.3	胎土：黄色味がかった灰白色で，わずかに黒粒を含む，釉：青味がかった灰白色
74	磁器	碗か鉢	青磁 底裏面に兜巾痕	高台径 4.3 高台高 0.8	龍泉窯系で，森田編年Ⅰ−5，胎土：灰オリーブ色で白砂を含む 底部の破片

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
76	土師器	鉢	口縁内側に一条の凹線		胎土：石英・雲母・黒砂を含む
77	土師器	不明			焼成：あまい　胎土：やや白っぽい　磨滅が激しく調整は不明 口縁の破片
78	土師器	碗	貼り付け高台	高台径　6.3 高台高　0.7	胎土：淡黄褐色で水簸しており白砂クサリ礫を含む　底部
79	土師器	製塩土器		高台径　3.6	二次加熱により変色 脚台
81	土師質土器	支脚	内面：やや平坦 外面：ヘラ削り		胎土：黄灰色で水簸しており白砂・雲母・黒粒を含む　煤が付着 土鍋か土釜の支脚
83	須恵器	杯蓋	マキアゲ・ミズビキ ナデの凸凹が明瞭		胎土：灰青色で小礫・砂粒を含む 中村編年Ⅰ−4
84	須恵器	杯蓋	マキアゲ・ミズビキ ナデの凸凹が明瞭 一条の稜線		胎土：灰青色で小礫・砂粒をわずかに含む 中村編年Ⅰ−3
85	須恵器	杯蓋	マキアゲ・ミズビキ ナデの凸凹が明瞭，ヘラケズリ		胎土：淡青灰色 中村編年Ⅱ−3
86	須恵器	杯	マキアゲ・ミズビキによるナデ		胎土：淡灰色
87	須恵器	壺か甕	ハケか櫛による平行線	口径　16.0	中村編年Ⅳ−2
88	須恵器	壺	ナデ痕 貼り付け高台	高台径　11.4 高台高　0.5	中村編年Ⅳ−3
89	須恵器	壺	ナデ痕 貼り付け高台	高台径　10.0 高台高　0.5	中村編年Ⅳ−3
90	須恵器	壺か甕	タタキ目　内面：青海波文 外面：細かい斜格子文		胎土：灰白色
91	須恵器	壺か甕	タタキ目		外：淡黄白色 内：灰白色
92	須恵器	壺か甕	ナデ 外面：平行線文		外：淡黒灰色 内：灰白色
93	須恵器	壺か甕	タタキ目		胎土：灰白色

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
94	土師器	甕	斜格子文		胴部の破片
95	土師器	甕	斜格子文		胴部の破片
96	土師器	甕	格子目文？		胴部の破片
97	土師器	甕	綾杉文		胴部の破片
98	土師器	甕	斜格子文		胴部の破片
99	土師器	甕	斜格子文		胴部の破片
100	土師器	甕		口　径　15.9	胎土：橙黄色
101	土師器	甕		口　径　17.7	胎土：橙黄色
102	土師器	脚台	指押え痕，しぼり目	底　径　3.9	製塩土器，二次焼成
103	土師器	甕	指押え痕	口　径　10.5	製塩土器 胎土：茶褐色
104	土師器	碗		口　径　12.5	
105	土師器	杯か皿	ナデ調整	底　径　5.0	
106	土師器	甕	指押え痕	口　径　19.5	古墳時代初頭？ 胎土：外面明褐色 内面茶褐色
107	土師器	甕か鍋	ヨコナデ，タタキ目，指押え痕	口　径　23.0	胎土：赤褐色
108	土師器	甕か鍋	タタキ目	口　径　23.6	胎土：赤褐色
109	土師器	支脚	ヘラ削り		水簸，土釜か土鍋
110	須恵器	甕	平行タタキ，青海波文		胎土：淡青灰色
111	須恵器	壺か甕	ミズビキ調整		胎土：淡褐色，自然釉
112	須恵器	杯蓋	ミズビキ調整		胎土：淡青灰色 中村編年Ⅱ−1
113	須恵器	杯	ミズビキ調整	口　径　12.0	中村編年Ⅱ−4
114	磁器	碗	青磁	高台径　4.4 高台高　0.7	森田編年碗Ⅰ−5 貫入
115	磁器		青磁	高台径　8.0 高台高　0.8	
116	磁器		青磁，内面：蓮弁文と「吉」の字 外面：鎬文	高台径　4.9 高台高　0.7	龍泉窯系 森田編年Ⅰ−5
117	磁器		兜巾痕，青磁 文様有り	高台径　4.6 高台高　0.7	龍泉窯系 13C中

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
118	陶器	徳利	ロクロナデ		大谷焼，畳付無釉 胎土：赤褐色 釉：暗茶褐色
126	土師器 土器	杯	貼り付け高台	高台径　7.7 高台高　0.7	胎土：明橙色 水簸，奈良～平安時代
127	須恵器	長頸壺	マキアゲミズビキ		胎土：灰色 中村編年Ⅳ-3
128	磁器	皿	ヘラ削り，青磁 見込み：櫛によるジグザグ文		同安窯系 釉：黄褐色，底部無釉 森田編年皿Ⅰ-1
129	陶器	碗	染付 くすんだ藍色で唐草文	口径　10.4	伊万里焼，18C代 胎土：淡灰色 釉：淡灰色
130	磁器	碗	藍色で二重網目文	口径　9.7	胎土：灰色 釉：青みがかった灰白色，17C後～18C代
131	磁器	碗	青磁 内面：鎬文		体部の破片，龍泉窯系 胎土：灰オリーブ色 釉：緑色 森田編年碗Ⅰ-5
132	磁器	鉢	内面：ロクロナデ ２条の浅い凹線		備前焼，鎌倉時代 暗赤灰色
133	陶器	鉢	内面：ロクロナデ		備前焼 内側：にぶい赤褐色 外側：褐灰色
134	陶器	燈明皿	ロクロ目	器高　1.8 口径　9.6	美濃・瀬戸系 体部，口縁部に煤付着 胎土：淡褐色 釉：暗赤褐色
135	陶器	鉢	体部にロクロ目	口径　12.8	備前系 胎土：淡赤褐色
136	陶器	壺	内面：ロクロナデ 外面：平行櫛目文 施釉	口径　12.0	備前焼，く字状口縁 胎土：紫がかった褐色 釉：褐灰色
137	陶器	擂鉢	内面:6条単位の平行櫛目 外面：布によるロクロナデ	底径　10.2	備前焼 底部

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
143	磁器	皿	青磁 内面：横方向に3条の沈線 施釉		輪花皿，同安窯系 胎土：乳黄白色 釉：淡くくすんだ緑色 でむらあり，貫入
144	磁器	碗	白磁		胎土：灰白色 釉：くすんだ灰白色 伊万里焼，貫入
145	磁器	皿	白磁 施釉 見込み：蛇ノ目釉ハギ 外面：ロクロ目	口径 10.4 高台径 3.8 高台高 0.6	胎土：乳白色 釉：淡水色で高台脇以 下無釉・伊万里焼 17C後〜18C前
146	陶器	鉢	ロクロ目 施釉：褐釉の上に白釉の平行刷毛目を施す		胎土：淡赤褐色 釉：褐色 唐津焼の刷毛目鉢 17C後〜18C前
148	土師器	皿		口径 7.2	非常に薄手
149	土師器	不明	口唇部ヘラ状工具による1条の沈線あり	口径 4.6	頸部
150	磁器	瓶か壺	染付磁器 外面：施釉	高台径 3.8 高台高 0.55	胎土：黄色味がかった 灰白色，伊万里焼 釉：灰白色，内面無釉 高台畳付部砂目痕
151	磁器	碗	青磁染付 外面：鎬蓮弁文の陰刻		胎土：灰オリーブ色 口縁部の破片 龍泉窯系 森田編年碗Ⅰ−5
152	磁器	皿	青磁		やや薄手の底部の破片
154	磁器	皿	見込み：蛇ノ目釉ハギ 施釉	高台径 6.4 高台高 0.45	胎土：灰白色 釉：淡い緑灰色 伊万里焼，底部の破片 18C代
155	陶器	燈明皿	底部外面：ロクロ糸切り離し 平底 施釉		胎土：淡黄白色 釉：オリーブ黄白色 美濃・瀬戸系，貫入
156	磁器	皿	外面：藍色の唐草文 施釉	口径 10.1	胎土：やや褐色がかった灰色 釉：灰色 伊万里焼，18C代

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
157	磁器	猪口	外面：くすんだ藍色の柳文 施釉	高台径 4.2 高台高 0.8	胎土：灰白色，釉：やや青味がかった白色 畳付高台無釉，17C後 伊万里焼，端反り型
158	磁器	猪口	外面：藍色の草花文 施釉	高台径 3.7 高台高 0.5	胎土：灰白色 釉：青味がかった白色 畳付高台無釉 伊万里焼
159	磁器	皿	見込み：欠損のため文様不明 外面高台:2条の平行文	高台径 6.2 高台高 0.5	胎土：乳白色 釉：淡水色，畳付高台無釉，伊万里焼
160	陶器	燈明台		口径 8.8	大谷焼 胎土：赤褐色 釉：黒褐色 18C後半〜19C前半
161	磁器	碗	貫入	高台径 5.3 高台高 0.75	京焼系 胎土：淡黄褐色 釉：淡黄白色
162	陶器	燈明皿	貫入	底径 3.6	美濃・瀬戸系 胎土：淡褐色 釉：淡茶褐色
167	陶器	鉢	ロクロナデ痕	口径 20.8	胎土：茶黒褐色 釉：淡茶褐色
168	須恵器	不明	ミズビキナデ痕		中村編年Ⅱ−4・5
169	陶器	徳利	ロクロナデ痕 「油」を記す		大谷焼，18C後半以降 胎土：赤褐色 釉：黒褐色
170	磁器	皿	見込み：蛇ノ目釉ハギ		伊万里焼 17C後半〜18C前半
171	土師質土器	甕	平行ハケ目		胎土：褐色
172	土師質土器	土鍋	ハケメ		
173	土師質土器	鉢か碗		底径 5.6	胎土：淡橙褐色

Tab. 2　第39区出土土錘観察表

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
6	土錘	管状土錘	丸棒成形	全長 5.35 重量 2.2	土師質 胎土：赤褐色
7	土錘	管状土錘	丸棒成形 指押え痕	全長 3.4 最大径 1.74 重量 4.6	土師質 胎土：灰白色
8	土錘	管状土錘	丸棒成形 指押えによるひずみ	全長 2.4 最大径 1.0 重量 1.75	欠損大
9	土錘	管状土錘	丸棒成形 ヘラ削り痕	全長 5.8 最大径 3.3 重量 5.0	陶質 胎土：暗赤褐色
10	土錘	管状土錘	丸棒成形 外面：指押え	全長 4.85 最大径 1.0 重量 4.95	土師質 胎土：黄灰白色
11	土錘	管状土錘	丸棒成形 外面両端面：ヘラ削り指押え痕	全長 6.4 最大径 3.4 重量 6.72	土師質 胎土：赤褐色
26	土錘	管状土錘	丸棒成形	最大幅 1.0	水簸
27	土錘	管状土錘	指押え痕		
37	土錘	管状土錘	丸棒成形 縄掛け痕	全長 3.6 最大幅 1.1 重量 3.25	土師質 胎土：橙色
38	土錘	管状土錘	丸棒成形	最大径 0.9 重量 2.95	土師質 胎土：淡黄褐色
39	土錘	管状土錘	丸棒成形 指押えのひずみ	最大径 0.9 重量 1.85	土師質 胎土：淡黄褐色
40	土錘	管状土錘	丸棒成形 縄掛け痕あり	全長 4.2 最大幅 1.4 重量 6.4	土師質 胎土：橙色
41	土錘	管状土錘	丸棒成形	最大幅 2.0 重量 3.0	土師質 胎土：淡赤橙色
42	土錘	管状土錘	丸棒成形	最大径 2.0 重量 17.5	陶質 胎土：赤褐色
44	土錘	管状土錘	丸棒成形	最大径 1.2 重量 4.25	胎土：橙色

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
45	土錘	管状土錘	丸棒成形 指押えによるひずみ	全長 5.0 最大幅 1.2 重量 4.2	胎土：褐色
46	土錘	管状土錘	丸棒成形	最大径 2.2 重量 16.5	胎土：淡褐色
47	土錘	管状土錘	丸棒成形 ヘラ削り	全長 4.9 最大幅 3.1	胎土：赤褐色
61	土錘	管状土錘	丸棒成形	全長 5.1 最大径 1.3 重量 6.7	胎土：淡黄色
62	土錘	管状土錘	丸棒成形	全長 4.4 最大径 1.2 重量 5.25	胎土：淡褐色
63	土錘	管状土錘	丸棒成形	全長 3.7 最大径 1.15 重量 3.8	胎土：にぶい橙色
64	土錘	管状土錘	丸棒成形	全長 4.4 最大幅 1.2 重量 5.2	胎土：灰白色
65	土錘	管状土錘	丸棒成形	重量 1.6	胎土：橙色
66	土錘	管状土錘	丸棒成形	最大径 1.0 重量 1.65	胎土：淡黄橙色
67	土錘	管状土錘	丸棒成形	最大径 1.4 重量 2.85	胎土：灰白色
68	土錘	管状土錘	丸棒成形	最大径 1.1 重量 2.2	胎土：浅黄褐色
69	土錘	管状土錘	丸棒成形	最大径 1.0 重量 1.8	胎土：上部灰赤色 下部橙色
70	土錘	管状土錘	丸棒成形 指押えによるひずみ	最大径 0.9 重量 0.75	胎土：淡褐色
75	土錘	管状土錘		最大径 1.0	胎土：暗褐色
80	土錘	有溝土錘		最大径 1.7 重量 16.2	胎土：明褐色
82	土錘	管状土錘	丸棒成形 指押え痕あり	最大径 3.5 重量 42.2	胎土：灰白色
119	土錘	管状土錘	ヘラ削り	全長 2.5 最大径 1.25	土師質 水簸

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
120	土錘	管状土錘	指押え	全長 3.8 最大径 1.3 重量 5.2	土師質 胎土：にぶい褐色
121	土錘	管状土錘		全長 5.0 最大径 3.25 重量 34.55	土師質 水簸 胎土：淡黄褐色
138	土錘	管状土錘		重量 18.35	水簸 胎土：淡橙色
139	土錘	管状土錘		重量 8.7	胎土：にぶい橙色
140	土錘	管状土錘	指押え	全長 4.15 最大径 1.1 重量 2.9	水簸 胎土：明赤褐色
141	土錘	管状土錘	指押え	全長 2.4 最大径 1.0 重量 1.65	胎土：橙色
163	土錘	管状土錘	指押え	全長 3.7 最大径 0.95 重量 2.35	水簸 胎土：褐色
164	土錘	管状土錘	ヘラ削り	全長 5.1 最大径 1.2 重量 6.9	胎土：赤橙色
174	土錘	管状土錘	ヘラ削り	全長 5.4 最大径 2.8	胎土：淡黄褐色
175	土錘	管状土錘	ヘラ削り 網目跡	全長 4.8 最大径 1.3	胎土：明暗褐色褐灰色

Tab. 3　第39区出土石器類計測表

番号	種類	形態	石材	出土層位	重量(g)	長さ(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	備考
12	石器	石鏃	サヌカイト		1.55	2.8	2.1	0.3	
24	石器	剥片	サヌカイト						石鏃作製途中の剥片
25	石器	石鏃	サヌカイト						凹茎式石鏃
60	石器	石鏃	サヌカイト		0.3	1.8		0.3	凹茎式石鏃
122	石器	石鏃	サヌカイト			2.9	2.35	0.45	凸茎式石鏃
123	石器	石鏃	サヌカイト		0.8	1.85	0.9	0.45	チャート製

番号	種類	形態	石材	出土層位	重量(g)	長さ(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	備考
124	石器	石鏃	サヌカイト			2.15	1.6	0.3	凹茎式
125	石器	石鏃	サヌカイト			2.5	2.1	0.5	
153	石器	石鏃	サヌカイト		5.0	4.0			
176	石器	剥片							
179	石器	剥片							
180	石器	剥片							
181	石器	剥片							
182	石器	剥片							
183	石器	石鏃			1.2	2.45	1.9		
184	石器	剥片							チャート
185	石器	剥片							チャート

Tab. 4　第39区出土鉄・銅製品観察表

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
1	銅製品	煙管		全長 6.8 最大径 1.1 吸口径 0.5	一枚の銅板を巻いて成形している。
48	銅製品	煙管		全長 4.7	18C後半
142	鉛製品	鉄砲玉		直径 1.3 現重量 9.1	
147	銅製品	煙管		全長 4.35 最大径 0.9 最小径 0.3 厚さ 0.1 重さ 1.85	18C後半 吸口
165	鉄製品	釘		全長 4.3 厚さ 0.7 重量 10.7	船釘
166	鉛製品	鉄砲玉		直径 1.3 重量 9.6	

第５・６・７区

本　文　目　次

Ⅰ　位置と環境
Ⅱ　調査の経過
Ⅲ　第５区
Ⅳ　第６区
Ⅴ　第７区

挿　図　目　次

Fig.1　第５・６・７区位置図
Fig.2　第５区地形測量図
Fig.3　第６区地形測量図
Fig.4　第７区地形測量図

写　真　図　版

ＰＬ．１　第５区全景　第５区全景
ＰＬ．２　第５区層序　第５区層序
ＰＬ．３　第６区遠景　第６区近景
ＰＬ．４　第６区砂岩礫　第６区砂岩礫
ＰＬ．５　第６区砂岩礫　第６区砂岩礫
ＰＬ．６　第６区斜面部分　第６区斜面部分
ＰＬ．７　第７区全景　第７区全景
ＰＬ．８　第７区近景　第７区近景
ＰＬ．９　第７区近景　第７区グリッド

Ⅰ　位置と環境

第５・６・７区は大毛島内でも北寄りに位置する。南北に長く連なる山系が北側へ向って高度を下げ，千畳敷方面へ向って再び高度を上げる，鞍部様地形を形成した場所の南北に位置している。県道が千畳敷方面と鳴門スカイライン方面に分岐する付近である。瀬戸内海の播磨灘が展望でき，何らかの遺跡の立地が想定されそうな場所で納言山古墳群や土師器の散布もみられる。（Fig. 1）

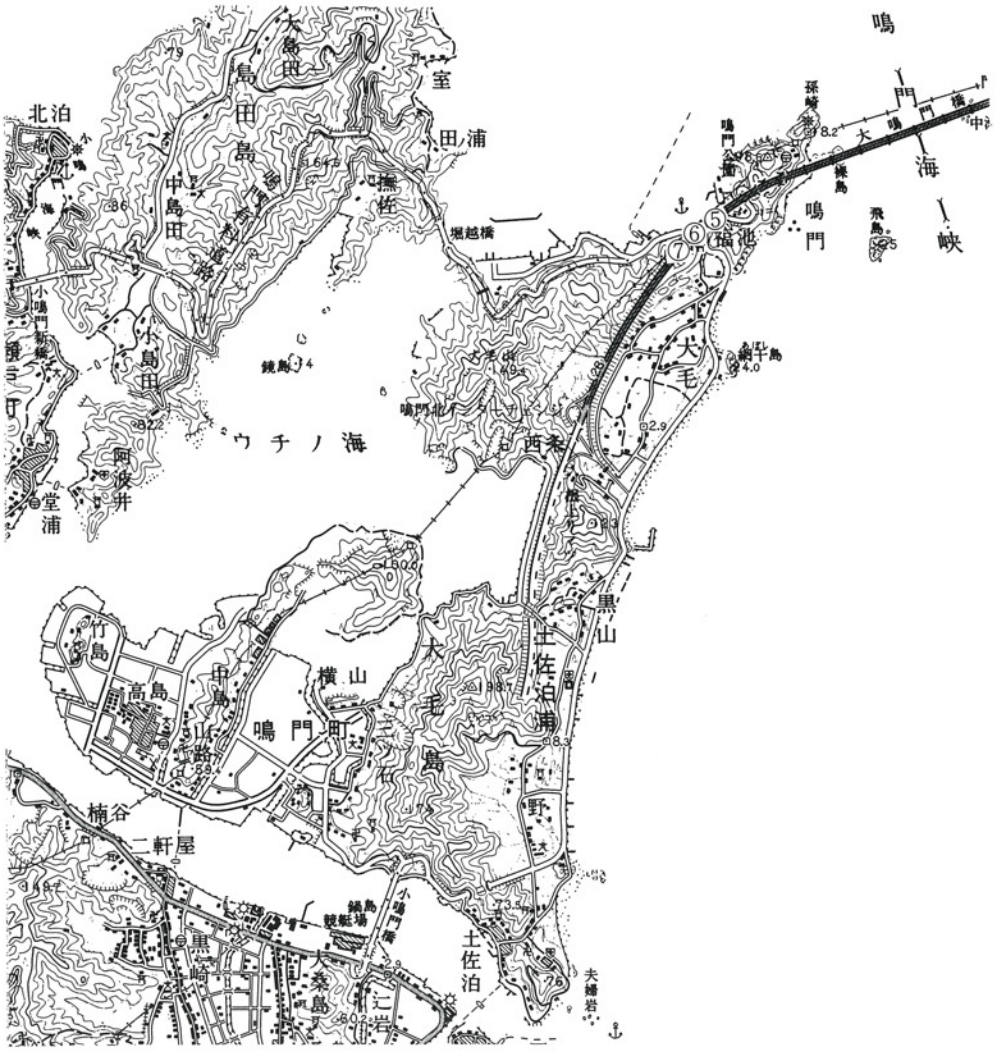


Fig. 1 第５・６・７区位置図

Ⅱ　調査の経過

昭和52年４～５月に実施された遺跡の精密分布調査によって，遺跡の存在の可能性が指摘されたことにより，昭和53年２月15日から第６区（福池遺跡）の調査に着手し，第５区・第７区の調査をおえ，昭和53年12月５日に調査を終了した。

Ⅲ　第　5　区

第５区は鳴門市鳴門町土佐泊浦字福池65－１に所在する。精密分布調査によって，尾根の最先端に微高地があることや石が並んでいること，さらに古地図に見られた地名などを手掛りとして，Ⅱランクの遺跡として発掘調査の必要性が打ちだされた場所である。

当該区は標高44～33m付近へかけての北側へ向いたなだらかな傾斜地で，瀬戸内海を一望のもとに見渡す眺望の立地である。古地図によればこの付近は「魚見」という地名が見られ，漁業に関しての何らかの関連遺構の存在が考えられた。遺構の存在しそうな500㎡について，立木の伐採や下草刈を実施して調査に備えた。発掘調査の方法としてはグリッド発掘の方式を採用した。発掘調査可能な範囲に２×２ｍのグリッドを設定し，市松様に掘り下げを実施した。

調査区東端部には四国電力の高圧送電鉄塔が設置されており，隣接するグリッド内から鉄塔建設工事に際しての地層の攪乱が明瞭に観察された。北側海岸寄りは県道11号の建設の折，擁壁工事のために手が加えられ急傾斜の崖面となっている。

掘り下げにあたり，まず表土層の除去から始めた。調査区内の東寄りで標高の高い場所一帯では，わずか２～３㎝の厚さの表土層（腐葉土）が存在し，その下はすぐに地山面であった。西寄りで標高の低い付近では，風化した地山のうすい層が表土層を形成していた。

その土壌成分は小粒子化した泥岩が主体をなしていた。また，調査区の中央付近で，幅の狭い鞍部となって石が攪乱する付近に至る手前の部分では，旧地表面は現地表面よりも低い位置で形成されていたようで，その詳しい堆積の様子が，グリッド内の壁面において観察される。

鞍部を経た調査区の西端に見られたこんもりとした盛りあがりは，石の存在さらに瀬戸内側と大毛島海岸側の両方向を見渡すという立地条件から，遺構存在の可能性も考えられ

たが，立木の伐採や下草刈を行ってみた結果，このテラス状をした盛りあがりは，単なる自然地形であることがほぼ判明した。当初，石の散在は建物等の基礎石として使用されたかもしれないという可能性もあったので，この部分にもグリッドを設定し調査を実施したが，すべてが砂岩の岩盤からなっており，その一部については風化土が堆積していることが判明した。

調査区内9地点において土層断面図を作成したが，遺構らしきものの存在は確認されなかった。土層断面に自然堆積によるとは思われない土壌の堆積がみられたが，詳細にわた

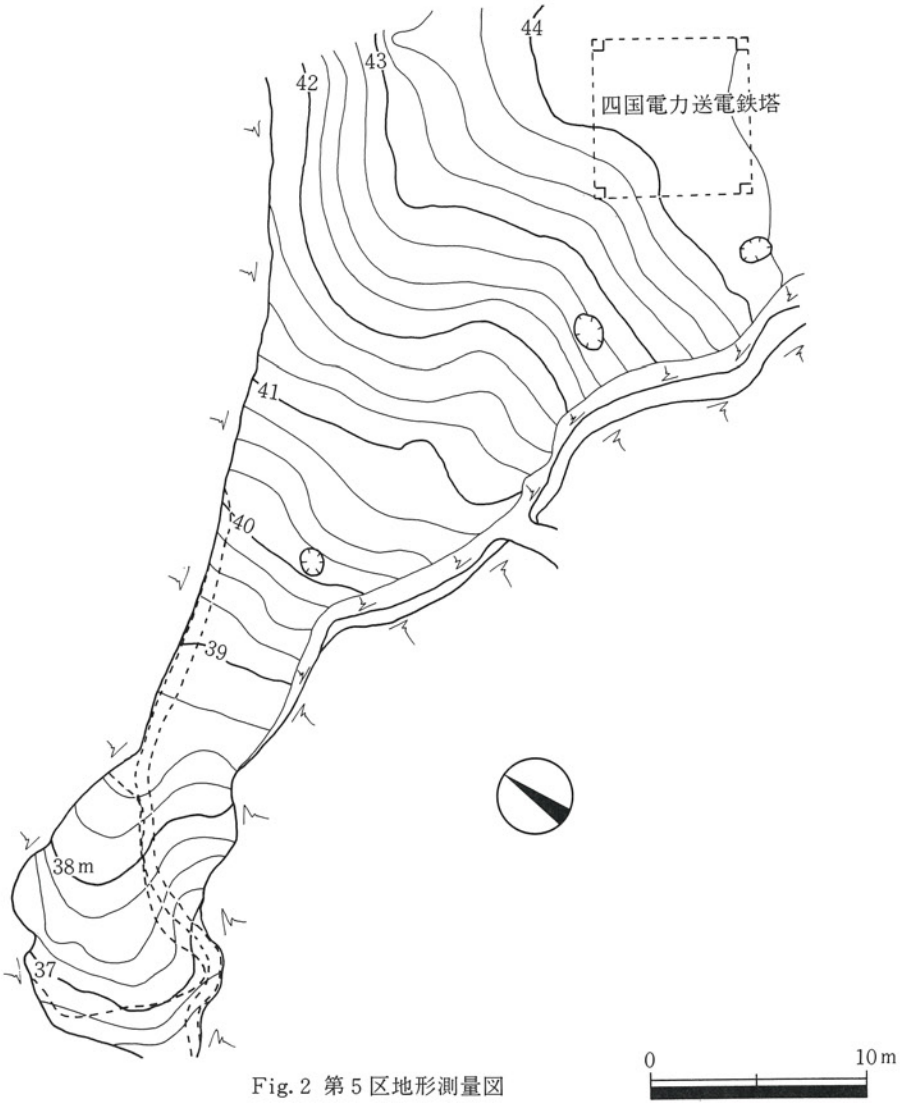


Fig. 2 第5区地形測量図

る検討の結果，四国電力の送電鉄塔建設の折，基礎掘削工事で生じた土砂の堆積であることが，ワイヤーロープや針金の切れ端などの出土によって判明した。

以上のように概括ではあるが，第５区の様相に関して述べてきたが，送電鉄塔建設に伴う以外の人為的所産は見られなかった。このことから，第５区には遺構が存在しないという結論に達し，発掘調査を完了した。（Fig.2，ＰＬ．１・２）

Ⅳ 第 6 区

第６区は鳴門市鳴門町土佐泊浦字福池28－８，同大毛271－３付近に所在する。

精密分布調査によって亀浦神社の周辺から土師器片や須恵器片，土錘等が採集されたことなどから，Ｉランクの遺跡として発掘調査がなされた。発掘調査は亀浦神社の位置する平坦地部分と，それに続く傾斜面において実施された。

当該区は標高４～５ｍ前後の平坦部と標高７～12ｍ前後の傾斜部とからなっている。平坦部においては亀浦神社の旧社殿に伴ったと考えられる石垣の一部等が検出されている。古代においては当地の前面は海岸線であったことが考えられる。調査にあたり立木の伐採や草苅を実施した後，百分の１の地形測量図を作成した。４×４ｍのグリッドを設定し，斜面部分の調査にあたった。地層の状況は砂岩の礫と砂岩の風化土が堆積したものであった。山側寄りは傾斜が急で利用価値がなかったようで遺構遺物の存在はみられなかった。斜面下方部において遺構ではないかと考えていた砂岩礫の散在も，規格性に乏しく結論がだしえない状況である。製塩作業に使用された土器片等も出土しており，明らかに何らかの形で製塩が行われていたことは確かな事実であるが，具体的な遺構としてはどれをとりあげても納得の行くものではなかった。当初，製塩作業の際に生じた灰層と考えていた土壌も，土器片や有機質分を含まないことながら，付近に露頭する泥岩の風化土の堆積である可能性もでてきた。同様に製塩作業の際の焼石と考えられていた赤味をおびた砂岩礫も，砂岩の集石とは関係なく付近で出土したものにも赤味をおびたものが数多く見られる。出土遺物としては製塩土器，須恵器，土師器，石鏃，土錘，近世陶磁器など多種類に及んでいる。

通例，土器を使用して製塩作業を行っていた遺跡の場合，土器の破損や器壁の剝離の度合いは高く，莫大な量の廃棄品が灰原や炉跡の近くから発見されるようであるが，第６区においては確認されなかった。製塩作業の主な部分は現在では亀浦神社の社殿等によって

削平されているが，山側寄りの傾斜面部分でなく，神社側の海岸寄りの場所にあったことも考えられる。製塩が行われていた時期であるが，古墳時代の中期から後期へかけての年代が比定されるようである。日出遺跡ともほぼ近い年代が与えられ，鳴門海峡付近において盛んに製塩が行われていたことが推測される。（Fig. 3，ＰＬ．３～６）

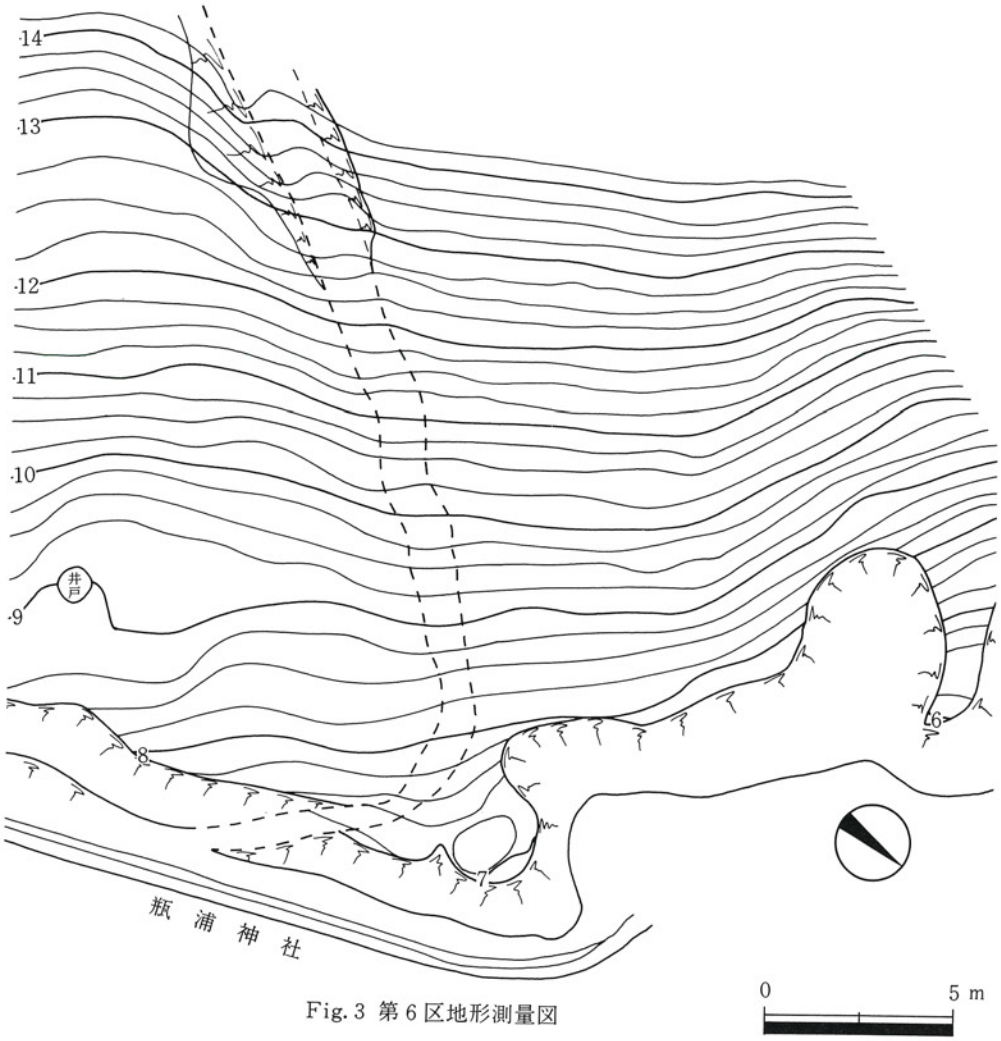


Fig. 3 第６区地形測量図

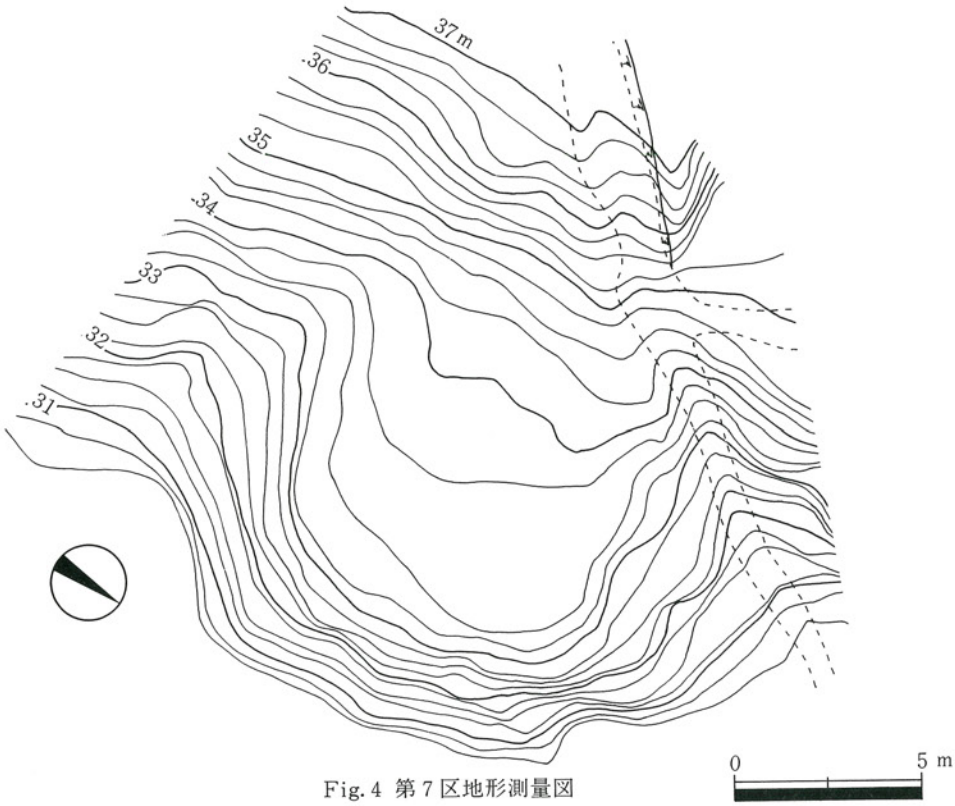


Fig. 4 第7区地形測量図

V 第 7 区

第７区は鳴門市鳴門町土佐泊浦字大毛270－10，同271－３付近に所在する。

精密分布調査によって，丘陵の中腹に径約15mほどの円形の平坦地があり，中央には配石が２列に並び，古墳の可能性があるということで，Ｉランクの遺跡として発掘調査がなされた。第６区からは約30m程上方にあたり，瀬戸内海・播磨灘が見わたせる好景観の地である。

当該区は標高31～35m前後で，丘陵東向斜面にテラス状を呈した盛りあがり部分である。

約300㎡にわたる伐採の後，地形の全容を明らかにし百分の１縮尺の地形図を作成した。

テラス状部分を中心に２×２mのグリッドを設定し発掘調査に備えた。当該区はＩランクに設定されており，全面発掘調査を基本としたが，とりあえず市松様にグリッド内の発掘を行い，遺跡の性格をつかむこととした。テラス状部分のグリッドでみられた様相は約５㎝前後の表土層があり，その下は砂岩の風化した砂質土と砂岩の割り石の混った層を形成していた。このような状況は斜面部分においても認められた。テラス状部分の上方，山側斜面に地層を確かめるための試掘を実施したが，３～４㎝の厚さの表土層の下は砂岩の風化した地山層を形成していた。テラス状部分の斜面端において観察された事柄を記述してみると，試掘穴で認められた地山層は本来の丘陵の傾斜と一致しているようで，テラス状部分の下に形成されていた。そういった点からすれば，本来の地形の上にテラス状部分が人為的に造られたことになる。しかしながら，テラス内のグリッドで観察された土層の状況から考えて，一番可能性のある結論としては古墳などではなく，近年まで行われていた砂岩の切り出しに関連するものであると考えられる。第７区の山側寄り西方向に，石の切り出しによって生じた大規模な凹地が存在している。石の切り出しにあたって生じた土砂や石片を下方に廃棄して出来あがったのが，テラス状部分ではないかと考えられる。

以上のように遺構の存在は考えられないようである。遺物等の出土もなく，砂岩の切り出しに伴って形成された石屑や土砂の捨て場であったと考えられる。（Fig. 4，ＰＬ．７～９）

第　16　区

本 文 目 次

Ⅰ　位置と環境
Ⅱ　調査の経過
Ⅲ　第 16 区
Ⅳ　ま と め

挿 図 目 次

Fig. 1　第16区位置図
Fig. 2　第16区地形測量図

写 真 図 版

ＰＬ．1　第16区遠景　第16区遠景
ＰＬ．2　第16区層序　第16区層序
ＰＬ．3　第16区層序　第16区層序
ＰＬ．4　第16区層序　第16区海蝕痕

Ⅰ　位置と環境

第16区は大毛島の中央部北側寄りに位置している。現在の海岸線とは約1.3km離れた山際にあたる。大毛島東海岸線からかなり奥まった地点のひとつである。北西側背後には標高百数十m前後の山々が連なり，その支稜が舌状の尾根台地となって調査対象地に接している。（Fig.1）

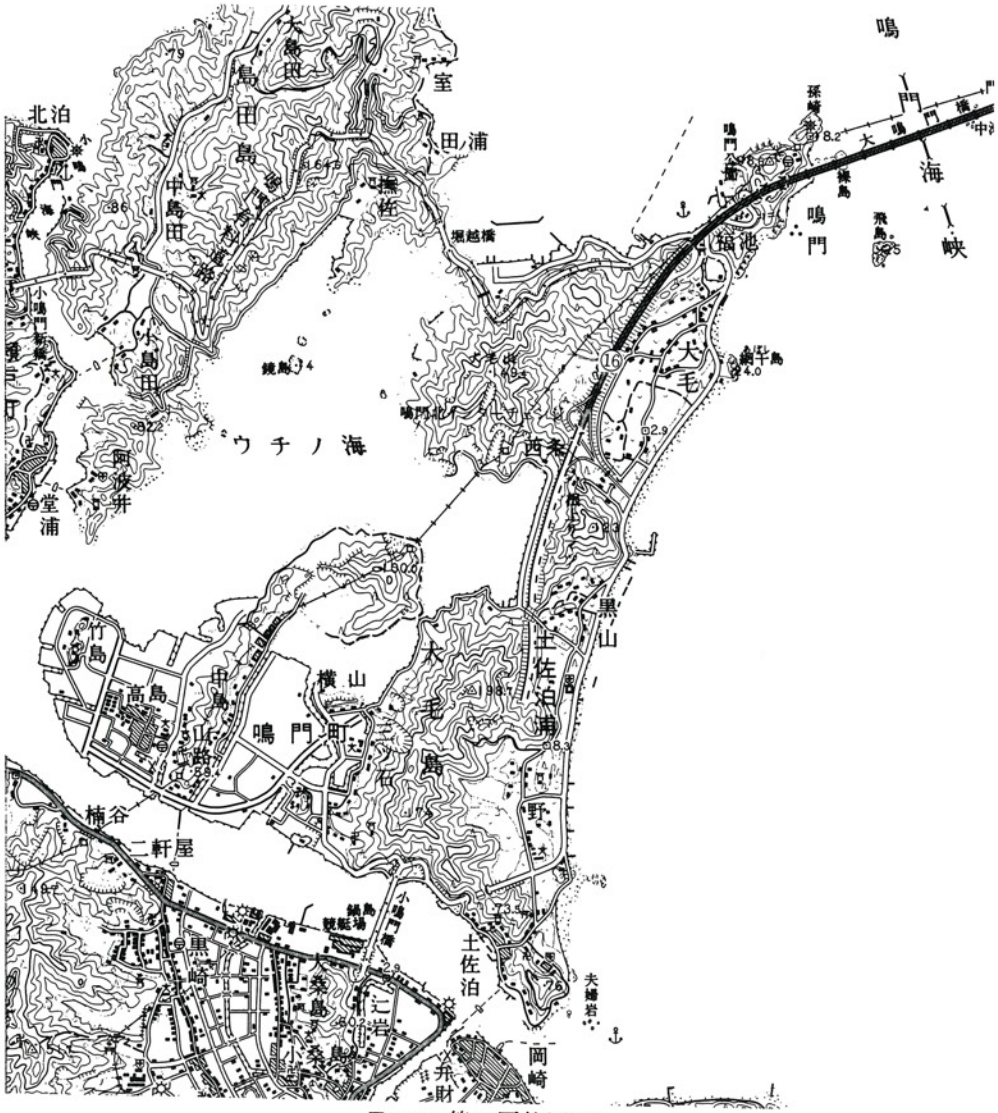


Fig. 1 第16区位置図

Ⅱ　調査の経過

精密分布調査において土器片等が採集されたことにより，Ｉランクの遺跡として発掘調査の必要性がとなえられた場所である。採集された遺物は製塩土器，土師器，近世陶磁器等がみられた。発掘調査は昭和53年12月15日から昭和54年３月15日まで実施し，引き続き９月１日より再開した。

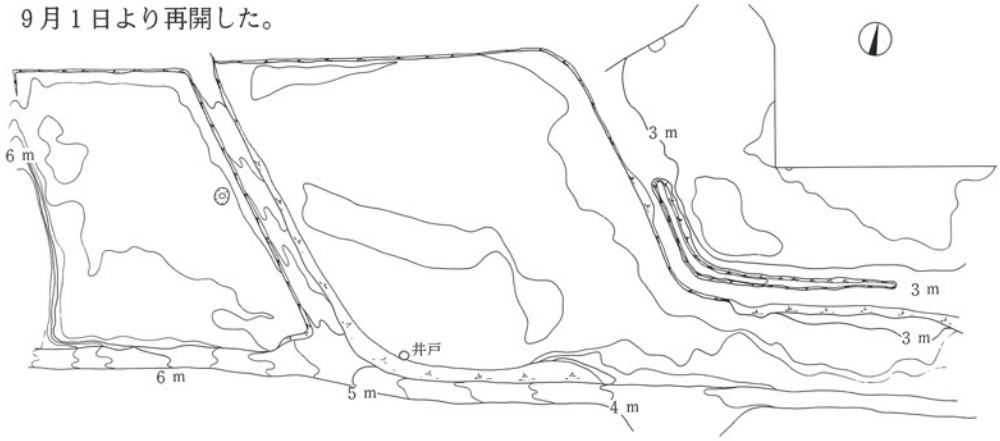


Fig. 2 第16区地形測量図

Ⅲ　第　16　区

当該区は鳴門市鳴門町土佐泊浦字大毛112－36付近に位置する。精密分布調査において，ラッキョ畑で砂地の平坦地が形成され，近くから土師器片が出土し，その範囲の一部であろうとされた場所である。海岸線より奥深く入った地点であるが，調査地一帯は砂丘を形成している。調査地脇と山麓の間を小さな谷川が流れている。また付近には馬垣の一部も残存している。（ＰＬ．１）

当該区の地形概要をみると標高5.4m前後の高さの面と，標高3.5m前後の高さを有する面とに大別することができる。便宜的に標高差の違いによって上段，下段と呼称する。両段とも人の手が加わったものであると思われるが，特に上段の方は屋敷地として利用されていたようで，その西側につづくラッキョ畑は標高２m近く高く，家を建るために地下げを行い現在の高さにしたものと思われる。地下げによって生じた崖面には崩壊を防ぐため

の植林生垣が見られた。下段は本来の地形を残している部分も存在するが，開墾や道路の建設によって周辺部は大幅な地形変更をしている。調査地内にグリッドを設定し掘り下げを実施した。グリッド内の層序はほぼ同様な様相を呈し，砂を主体とするものであった。

調査地脇に海蝕痕のみられる山肌があり，過去においてはこの付近が海岸線であったことを物語っている。掘り下げが可能なかぎり掘り下げを実施したが，砂層のみであった。

各グリッドの状況からみて旧海岸線であったことが推定できる。採集された遺物は近世から現代にいたり，陶磁類の破片が多数をしめた。これらの遺物は表土・耕作土中より検出されたもので，それ以下の層からは何ら遺物は検出されなかった。（ＰＬ．３・４）

Ⅳ　ま　と　め

第16区は多少の相違はあるにせよ，ほぼすべての場所において砂層が検出され，序層も色調の違いはあるが砂一層であった。山寄りの地点においては山間からの押し出しと思われる土壌の堆積がわずか見られた。調査区内からは土器片等も出土したが，それらはすべて表土・耕作土中であり，遺構に伴うものとは考えられなかった。以上のように，第16区においては遺跡の立地の可能性はないとの結論に達し，調査を終了した。

第　21　区

本　文　目　次

Ⅰ　位置と環境
Ⅱ　調査の経過
Ⅲ　基本層序
Ⅳ　遺構
Ⅴ　遺物
Ⅵ　まとめ

挿　図　目　次

Fig. 1　第21区調査位置図
Fig. 2　第21区地形測量・トレンチ配置図
Fig. 3　第21区トレンチ層序
Fig. 4　第21区下部遺構面遺構配置図
Fig. 5　第21区上部遺構面遺構配置図
Fig. 6　第21区池状遺構実測図
Fig. 7　第21区ＳＡ－０４，ＳＸ－０２，ＳＤ－０７実測図
Fig. 8　第21区ＳＡ－０１・０２・０３，ＳＤ－０５実測図
Fig. 9　第21区ＳＸ－０１実測図
Fig. 10　第21区ＳＢ－０４実測図
Fig. 11　第21区大山祇神社跡実測図
Fig. 12　第21区大山祇神社跡　拝殿・本殿遺物出土状況実測図
Fig. 13　第21区小祠跡実測図
Fig. 14　第21区ＳＢ－０３実測図
Fig. 15　第21区ＳＢ－０１・０２実測図
Fig. 16　第21区ＳＢ－０１屋内　石組遺構実測図
Fig. 17　第21区ＳＥ－０１・０２・０３実測図
Fig. 18　第21区Ｂ－２グリット礫層出土土器類

Fig. 19　第21区第１トレンチ第９層出土土器類
Fig. 20　第21区出土遺物（１）
Fig. 21　第21区出土遺物（２）
Fig. 22　第21区出土遺物（３）
Fig. 23　第21区出土遺物（４）
Fig. 24　第21区出土遺物（５）
Fig. 25　第21区出土遺物（６）
Fig. 26　第21区出土遺物（７）
Fig. 27　第21区出土遺物（８）
Fig. 28　第21区出土遺物（９）
Fig. 29　第21区出土遺物（10）
Fig. 30　第21区出土遺物（11）
Fig. 31　第21区出土遺物（12）
Fig. 32　第21区出土遺物（13）
Fig. 33　第21区出土遺物（14）
Fig. 34　第21区出土遺物（15）
Fig. 35　第21区出土遺物（16）
Fig. 36　第21区出土遺物（17）
Fig. 37　第21区出土遺物（18）
Fig. 38　第21区出土遺物（19）
Fig. 39　第21区出土遺物（20）
Fig. 40　第21区出土遺物（21）
Fig. 41　第21区出土遺物（22）
Fig. 42　第21区出土遺物（23）
Fig. 43　第21区出土遺物（24）
Fig. 44　第21区出土遺物（25）
Fig. 45　第21区出土遺物（26）
Fig. 46　第21区出土遺物（27）
Fig. 47　第21区出土遺物（28）
Fig. 48　第21区出土遺物（29）

Fig. 49　第21区出土遺物（30）
Fig. 50　第21区出土遺物（31）
Fig. 51　第21区出土遺物（32）
Fig. 52　第21区出土遺物（33）
Fig. 53　第21区出土遺物（34）
Fig. 54　第21区出土遺物（35）
Fig. 55　第21区出土遺物（36）
Fig. 56　第21区出土遺物（37）
Fig. 57　第21区出土遺物（38）
Fig. 58　第21区出土遺物（39）
Fig. 59　第21区出土遺物（40）
Fig. 60　第21区出土遺物（41）
Fig. 61　第21区出土遺物（42）
Fig. 62　第21区出土遺物（43）
Fig. 63　第21区出土遺物（44）
Fig. 64　第21区出土遺物（45）
Fig. 65　第21区出土遺物（46）
Fig. 66　第21区出土遺物（47）
Fig. 67　第21区出土遺物（48）
Fig. 68　第21区出土遺物（49）
Fig. 69　第21区出土遺物（50）
Fig. 70　第21区出土遺物（51）
Fig. 71　第21区出土遺物（52）
Fig. 72　第21区出土遺物（53）
Fig. 73　第21区出土遺物（54）
Fig. 74　第21区出土遺物（55）
Fig. 75　第21区出土遺物（56）
Fig. 76　第21区出土遺物（57）
Fig. 77　第21区出土遺物（58）
Fig. 78　第21区出土遺物（59）

Fig. 79　第21区出土遺物（60）
Fig. 80　第21区出土遺物（61）
Fig. 81　第21区出土遺物（62）
Fig. 82　第21区出土遺物（63）
Fig. 83　第21区出土遺物（64）
Fig. 84　第21区出土遺物（65）
Fig. 85　第21区出土遺物（66）
Fig. 86　第21区出土遺物（67）
Fig. 87　第21区出土遺物（68）
Fig. 88　第21区出土遺物（69）
Fig. 89　第21区出土遺物（70）
Fig. 90　第21区出土遺物（71）
Fig. 91　第21区出土遺物（72）
Fig. 92　第21区出土遺物（73）
Fig. 93　第21区出土遺物（74）
Fig. 94　第21区出土遺物（75）
Fig. 95　第21区出土遺物（76）
Fig. 96　第21区出土遺物（77）
Fig. 97　第21区出土遺物（78）
Fig. 98　第21区出土遺物（79）
Fig. 99　第21区出土遺物（80）
Fig. 100　第21区出土遺物（81）
Fig. 101　第21区出土遺物（82）
Fig. 102　第21区出土遺物（83）
Fig. 103　第21区出土遺物（84）
Fig. 104　第21区出土遺物（85）
Fig. 105　第21区出土遺物（86）

表　目　次

Tab. 1　第21区Ｂ２グリッド礫層出土土器類観察表
Tab. 2　第21区第１トレンチ第９層出土土器類観察表
Tab. 3　第21区遺物包含層出土土器類観察表
Tab. 4　第21区第１層出土土器類観察表
Tab. 5　第21区池状遺構・周辺出土土器類観察表
Tab. 6　第21区池状遺構直上出土土器類観察表
Tab. 7　第21区土塁状遺構（ＳＡ－０４）出土土器類観察表
Tab. 8　第21区土塁状遺構（ＳＡ－０１）出土土器類観察表
Tab. 9　第21区土塁状遺構（ＳＡ－０２）出土土器類観察表
Tab. 10　第21区土塁状遺構（ＳＡ－０３）出土土器類観察表
Tab. 11　第21区祭祀跡出土土器類観察表
Tab. 12　第21区祭祀跡周辺出土土器類観察表
Tab. 13　第21区礎石建物跡（ＳＢ－０３）出土土器類観察表
Tab. 14　第21区礎石建物跡（ＳＢ－０１）出土土器類観察表
Tab. 15　第21区井戸跡（ＳＥ－０３）出土土器類観察表
Tab. 16　第21区溝状遺構（ＳＤ－０１）出土土器類観察表
Tab. 17　第21区溝状遺構（ＳＤ－０２）出土土器類観察表
Tab. 18　第21区溝状遺構（ＳＤ－０３）出土土器類観察表
Tab. 19　第21区溝状遺構（ＳＤ－０５）出土土器類観察表
Tab. 20　第21区出土土錘計測表
Tab. 21　第21区出土石器類計測表
Tab. 22　第21区出土砥石計測表
Tab. 23　第21区銭貨出土遺構一覧表
Tab. 24　第21区出土銭貨計測表
Tab. 25　第21区出土墨書土器類一覧表
Tab. 26　第21区出土遺構概略年代一覧表

図 版 目 次

ＰＬ．１　第21区全景　第21区全景
ＰＬ．２　第21区第３トレンチ層序　第21区第４トレンチ層序
ＰＬ．３　第21区第６トレンチ掘削状況　第21区下駄出土状況
ＰＬ．４　第21区土塁状遺構（ＳＡ－０４・０３）　第21区配石遺構（ＳＸ－０１）
ＰＬ．５　第21区配石遺構（ＳＸ－０１）　第21区礎石建物跡（ＳＢ－０４）
ＰＬ．６　第21区土坑・小ピット　第２１区土塁状遺構（ＳＡ－０１）
ＰＬ．７　21区土塁状遺構（ＳＡ－０２）　第21区土塁状遺構（ＳＡ－０４・０３）
ＰＬ．８　第21区大山祇神社跡全景　第21区大山祇神社跡（鳥居・石段）
ＰＬ．９　第21区大山祇神社跡本殿炭化材　第21区大山祇神社跡本殿炭化垂木
ＰＬ．10　第21区大山祇神社拝殿・本殿跡　第21区大山祇神社拝殿・本殿跡
ＰＬ．11　第21区小祠跡　第21区小祠跡長方形区画配石
ＰＬ．12　第21区小祠跡長方形区画配石　第21区小祠跡長方形区画配石銭貨出土状況
ＰＬ.13　第21区礎石建物跡(ＳＢ－０１)　第21区礎石建物（カマヤ）跡（ＳＢ－０１）
ＰＬ．14　第21区礎石建物（石組遺構）跡（ＳＢ－０１）　第21区井戸跡（ＳＥ－０１）
ＰＬ．15　第21区井戸跡（ＳＥ－０３）　第21区溝状遺構（ＳＤ－０３）
ＰＬ．16　第21区出土遺物（１）
ＰＬ．17　第21区出土遺物（２）
ＰＬ．18　第21区出土遺物（３）
ＰＬ．19　第21区出土遺物（４）
ＰＬ．20　第21区出土遺物（５）
ＰＬ．21　第21区出土遺物（６）
ＰＬ．22　第21区出土遺物（７）
ＰＬ．23　第21区出土遺物（８）
ＰＬ．24　第21区出土遺物（９）
ＰＬ．25　第21区出土遺物（10）
ＰＬ．26　第21区出土遺物（11）
ＰＬ．27　第21区出土遺物（12）
ＰＬ．28　第21区出土遺物（13）

ＰＬ．29　第21区出土遺物（14）
ＰＬ．30　第21区出土遺物（15）
ＰＬ．31　第21区出土遺物（16）
ＰＬ．32　第21区出土遺物（17）
ＰＬ．33　第21区出土遺物（18）
ＰＬ．34　第21区出土遺物（19）
ＰＬ．35　第21区出土遺物（20）
ＰＬ．36　第21区出土遺物（21）
ＰＬ．37　第21区出土遺物（22）
ＰＬ．38　第21区出土遺物（23）
ＰＬ．39　第21区出土遺物（24）
ＰＬ．40　第21区出土遺物（25）
ＰＬ．41　第21区出土遺物（26）
ＰＬ．42　第21区出土遺物（27）
ＰＬ．43　第21区出土遺物（28）
ＰＬ．44　第21区出土遺物（29）
ＰＬ．45　第21区出土遺物（30）
ＰＬ．46　第21区出土遺物（31）
ＰＬ．47　第21区出土遺物（32）
ＰＬ．48　第21区出土遺物（33）
ＰＬ．49　第21区出土遺物（34）
ＰＬ．50　第21区出土遺物（35）
ＰＬ．51　第21区出土遺物（36）
ＰＬ．52　第21区出土遺物（37）
ＰＬ．53　第21区出土遺物（38）
ＰＬ．54　第21区出土遺物（39）
ＰＬ．55　第21区出土遺物（40）
ＰＬ．56　第21区出土遺物（41）
ＰＬ．57　第21区出土遺物（42）
ＰＬ．58　第21区出土遺物（43）

ＰＬ．59　第21区出土遺物（44）
ＰＬ．60　第21区出土遺物（45）
ＰＬ．61　第21区出土遺物（46）
ＰＬ．62　第21区出土遺物（47）
ＰＬ．63　第21区出土遺物（48）
ＰＬ．64　第21区出土遺物（49）
ＰＬ．65　第21区出土遺物（50）
ＰＬ．66　第21区出土遺物（51）
ＰＬ．67　第21区出土遺物（52）
ＰＬ．68　第21区出土遺物（53）
ＰＬ．69　第21区出土遺物（54）
ＰＬ．70　第21区出土遺物（55）
ＰＬ．71　第21区出土遺物（56）
ＰＬ．72　第21区出土遺物（57）
ＰＬ．73　第21区出土遺物（58）
ＰＬ．74　第21区出土遺物（59）
ＰＬ．75　第21区出土遺物（60）
ＰＬ．76　第21区出土遺物（61）
ＰＬ．77　第21区出土遺物（62）
ＰＬ．78　第21区出土遺物（63）
ＰＬ．79　第21区出土遺物（64）
ＰＬ．80　第21区出土遺物（65）
ＰＬ．81　第21区出土遺物（66）
ＰＬ．82　第21区出土遺物（67）
ＰＬ．83　第21区出土遺物（68）
ＰＬ．84　第21区出土遺物（69）
ＰＬ．85　第21区出土遺物（70）
ＰＬ．86　第21区出土遺物（71）
ＰＬ．87　第21区出土遺物（72）
ＰＬ．88　第21区出土遺物（73）

ＰＬ．89　第21区出土遺物（74）
ＰＬ．90　第21区出土遺物（75）
ＰＬ．91　第21区出土遺物（76）
ＰＬ．92　第21区出土遺物（77）
ＰＬ．93　第21区出土遺物（78）
ＰＬ．94　第21区出土遺物（79）
ＰＬ．95　第21区出土遺物（80）
ＰＬ．96　第21区出土遺物（81）
ＰＬ．97　第21区出土遺物（82）
ＰＬ．98　第21区出土遺物（83）
ＰＬ．99　第21区出土遺物（84）
ＰＬ．100　第21区出土遺物（85）
ＰＬ．101　第21区出土遺物（86）
ＰＬ．102　第21区出土遺物（87）
ＰＬ．103　第21区出土遺物（88）
ＰＬ．104　第21区出土遺物（89）
ＰＬ．105　第21区出土遺物（90）
ＰＬ．106　第21区出土遺物（91）
ＰＬ．107　第21区出土遺物（92）
ＰＬ．108　第21区出土遺物（93）
ＰＬ．109　第21区出土遺物（94）
ＰＬ．110　第21区出土遺物（95）
ＰＬ．111　第21区出土遺物（96）
ＰＬ．112　第21区出土遺物（97）

Ⅰ　位置と環境

第21区は，大毛島山系中央部の西斜面にあたる（鳴門市鳴門町土佐泊浦西條）。

大毛島西海岸が大きく入りこんで入江状となった最奥の海岸沿いの平坦地に位置する。

東の後背地には，やや低くなった大毛島山系が南北に連なり，内懐にいだかれた所である。西にはウチノ海がひろがり，島田島，高島および古くから漁港として栄えた堂浦を望むことができる。地目は山林と畑である。

Ⅱ　調査の経過

昭和52年度の鳴門架橋に係る道路建設に伴う埋蔵文化財精密分布調査（以下，分布調査とする）の成果に基づき，第21区においては，昭和57年度に確認調査を行うこととなった。

調査期日は，４月15日から10月６日である。第８・９・10・15区の調査とも同時併行して行った。６月24日から，確認調査を全面調査に切り替えた。

調査日誌抄

４月15日　トレンチ設定，堀り下げ。

５月６日　大山祇神社跡の整地および遺構検出にとりかかる。住居跡検出，平面図作成。

10日　住居跡のかまど，石臼を検出。

12日　第１トレンチより，土師質土器と有溝土錘が出土。

22日　石組遺構を検出。

27日　土塁状遺構を検出。

28日　土塁状遺構平面図作成。大山祇神社跡の表土中から寛永通宝が出土する。

６月２日　井戸跡の平面図作成。大山祇神社跡の平面図作成。

12日　地形測量開始。

24日　土塁状遺構，住居跡，大山祇神社跡，井戸跡などの遺構が検出されたので，全面調査に切り替える。

25日　調査区内にグリッドを設定する。

26日　土塁状遺構の平面図作成。

７月12日　礎石建物跡ＳＢ－０３から多量の陶磁器が出土。土塁状遺構に先行するとみ

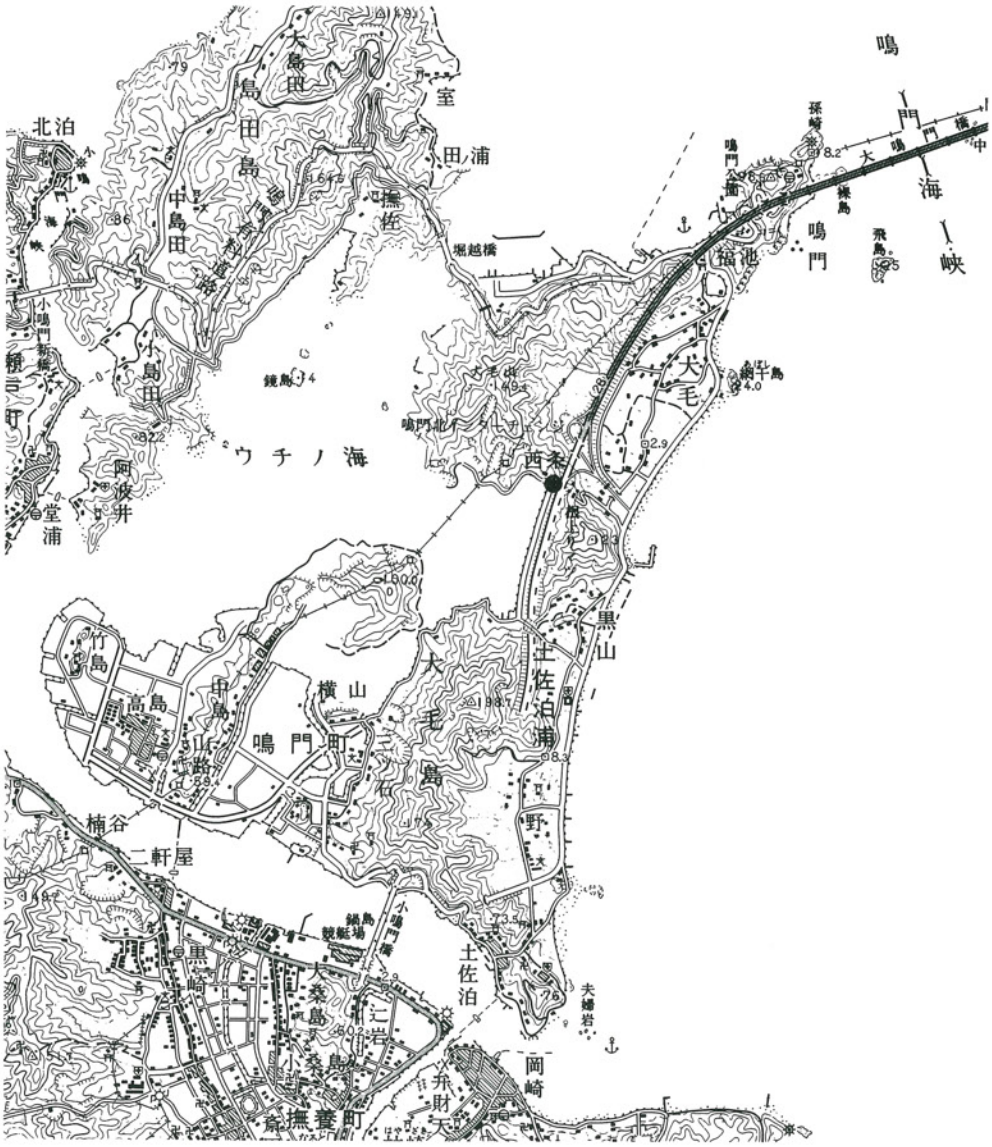


Fig. 1　第21区位置図

られる。

15日　大山祇神社跡北斜面にて，円礫を多量に検出。

23日　大山祇神社跡の写真撮影。鳥居に明治13年の銘が刻まれている。

27日　土塁状遺構は馬垣ではないかと考えられたが，神社と屋敷とを区画する土塁の可能性が高い。

28日　平板測量。

8月2日　大山祇神社跡の礎石を検出。

4日　大山祇神社跡北斜面検出の円礫は，石積みの小祠跡の一部とみられる。

10日　大山祇神社跡より，寛永通宝と炭化した垂木が出土。

28日　礎石建物跡ＳＢ－０３より，鉄製品，伊万里，大谷焼などが出土。

30日　小祠跡より墨書土器が出土。

9月3日　Ａ－３グリッドより，煙管，寛永通宝が出土。

6日　全景写真撮影。

7日　Ｂ－２グリッド礫層中より，土師器の杯出土。

8日　溝状遺構ＳＤ－０１検出。

14日　池状遺構検出。曲物，下駄，釘などが出土。

16日　土塁状遺構の平面図作成。第６トレンチの土層図作成および写真撮影。

21日　土塁状遺構の断面図作成。

27日　池状遺構，土塁状遺構ＳＡ－０２検出状況の写真撮影。

10月4日　全景写真撮影。

6日　調査終了。

Ⅲ　基本層序

（Fig. 2・3）

当該調査区は，分布調査の結果，次のように報告さている。「№21は西條区で，内ノ海の内湾の最奥の位置である。山の中腹に神社の祠跡があり，その土中より須恵器片・瓦器片・磁器片が出土する。また，鳥居は明治13年建立の銘が刻まれている。さらには，海岸線に平坦な地形があり，遺跡の可能性は十分考慮されなければならない地点である。

分布調査の成果を踏まえ，平坦な地形に合わせてグリッドを設定し，東から西へA’，

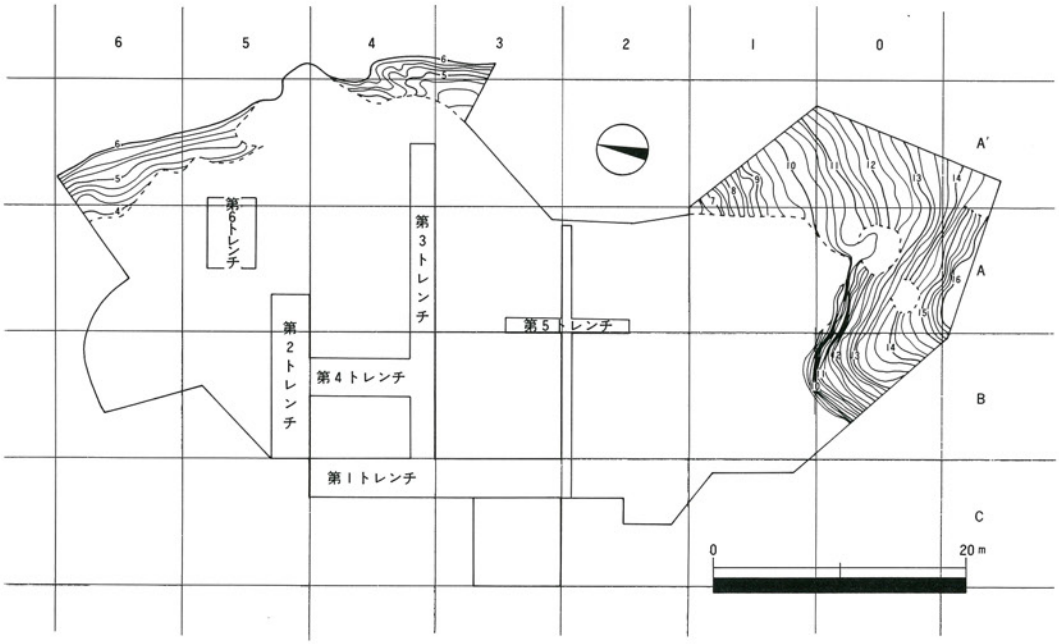


Fig. 2　第21区地形測量・トレンチ配置図

A，B，C，南から北へ0，1，2，3，4，5，6とした。このグリッドに合わせて，6本のトレンチを設定した。トレンチによる確認調査で遺構が検出されたので，対象地全域の調査を行った。

地理的には，大山祇神社が海抜約8.9mと高く，C－3グリッドの石垣状遺構SX－02が海抜約0.4mと低くて，約8.5mの比高差があり，南東から北西あるいは西に向かって下降して海岸に至る。

基本的には，明黄褐色粘質土の無遺物自然堆積層を地山として，大山祇神社跡の拝殿・本殿跡および石段，小祠跡，溝状遺構SD－05の一部，溝状遺構SD－06，池状遺構などが構築されている。他の遺構は，概ね自然堆積層あるいは整地層に設けられている。このように，遺構によって異なった様相がみられるため，遺物相互の先後関係は把握しがたい。以下，各トレンチの層序を概観したい。

1．第1トレンチ

第1トレンチは，C－3，C－4グリッドの南北方向に設定した。粘質土と砂質土が互層となり，下部に砂利層が拡がる。山裾から離れているため，岩盤にまでは至っていない。

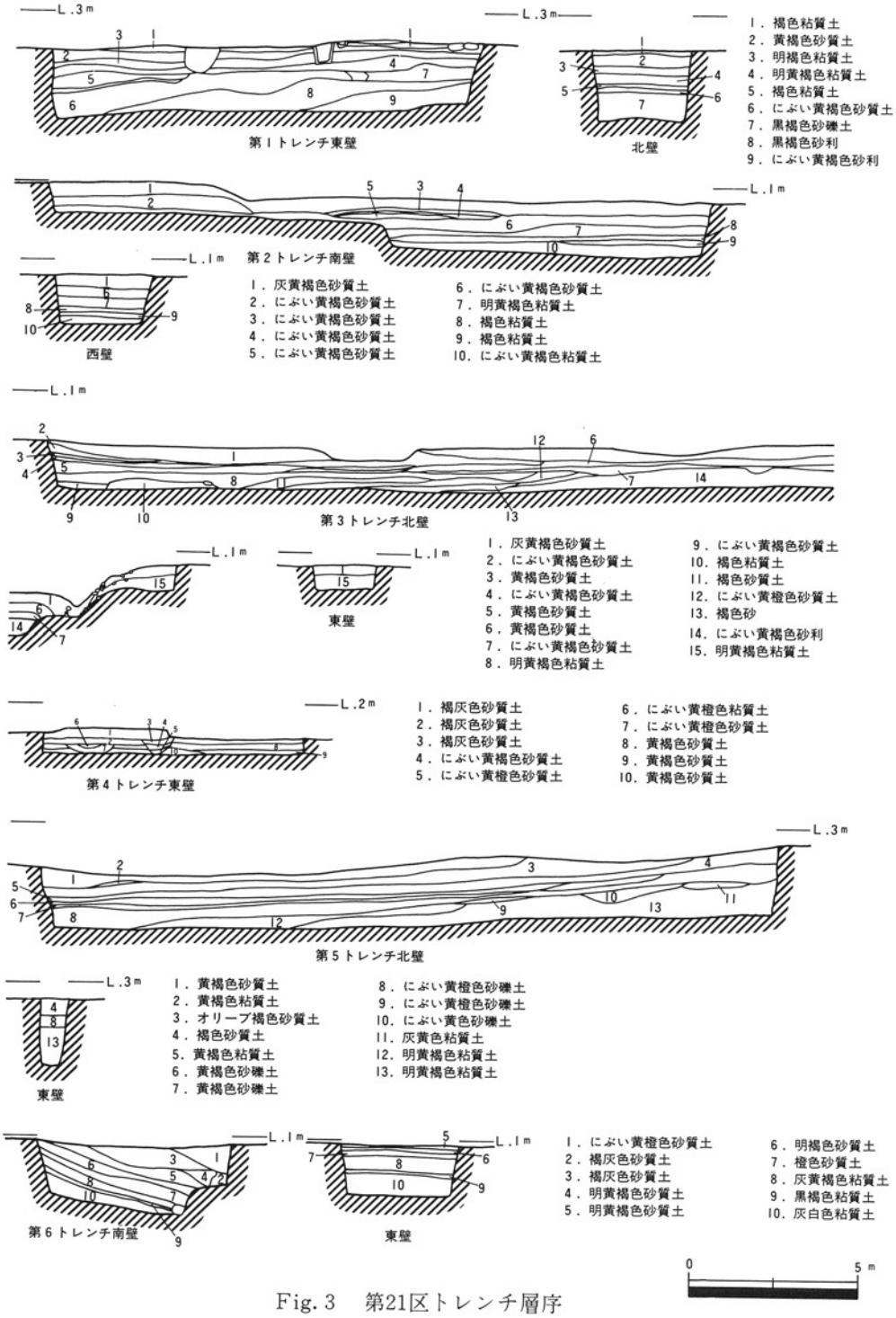


Fig. 3　第21区トレンチ層序

第１層から第６層に，上部遺構面の溝状遺構などが検出された。第４層以下に磨滅した須恵器，土師器，土錘などが散在するが，遺構を伴わない。

２．第２トレンチ

第２トレンチは，Ａ－５，Ｂ－５グリッドの東西方向に設定した。上層に砂質土，下層に粘質土の緩やかな堆積がみられるが，岩盤にまでは至っていない。

第１層から第３層に上部遺構面の礎石建物跡ＳＢ－０１，第７，第８層に下部遺構面の礎石建物跡ＳＢ－０４が検出されている。

３．第３トレンチ

第３トレンチは，Ａ’－４，Ａ－４，Ｂ－４の東西方向に設定した。上層は砂質土であり，下層に粘質土，砂質土，砂利層が互層となって緩やかな堆積がみられるが，岩盤にまでは至っていない。

第１層から第６層までに上部遺構面の溝状遺構が検出された。第７層以下の層に磨滅した須恵器が出土するが遺構を伴わず，流れこみとみられる。

４．第４トレンチ

第４トレンチは，Ｂ－４グリッドの第２・３トレンチ間の南北方向に設定した。砂質土の緩やかな堆積であり，岩盤にまでは至っていない。

上部遺構面の溝状遺構が第５層から第８層までの間に検出された。溝状遺構ＳＤ－０３は第５層からの切りこみであり，第２・３・４層が埋積土である。溝状遺構ＳＤ－０４は第８層からの切りこみであり，第６・７層が埋積である。

５．第５トレンチ

第５トレンチは，Ａ－2，Ｂ－２，Ｃ－３グリッドの東西方向に設定し，Ａ－２，Ａ－３グリッドで部分的に南北方向に伸ばし，「十」字状とした。上層は砂質土と粘質土の緩やかな互層である。中層は砂礫土であり，西の海岸に向けてその厚さを増す。下層は粘質土。

第11層の灰黄色粘質土層から，弥生時代後期とみられる土器の小破片が出土したが，磨滅が著しく，流れこみとみられる。第12・13層は無遺物層であるが岩盤にまでは至っていない。

6．第6トレンチ

第6トレンチは，上部遺構面の礎石建物跡ＳＢ－０１・０２および下部遺構面のピット群調査終了後，Ａ’－５，Ａ－５グリッドの東西方向に設定した。そのため，上半の層序は図示していない。

ピット群は第１・３層に検出され，その他の層は無遺物自然堆積層である。第９層は有機質を含む黒褐色粘質土層であり，ここに水の淀みがあったとみられる。

このように，各トレンチにより，遺構の検出層序が異なる。これは大毛島山系からの流れこみと海岸からの吹きつけによるものとみられる。便宜上，検出された遺構を上部遺構面の遺構，下部遺構面の遺構と２つに分けたが，そこには大きな年代差はみられない。

そこで，出土遺物の層序別分類にあたり，第２遺構面下層遺物，遺物包含層遺物，第１層遺物，遺構出土遺物と４つに分類した。第２遺構面下層遺物は，Ｂ－２グリッド礫層および第１トレンチ第９層から出土したもの。遺物包含層遺物は，上部・下部遺構面の遺物が混在する。遺物包含層とは，上部遺構面直上までを指し，第１トレンチでは第２～５層，第２トレンチでは第２～７層，第３トレンチでは第２～６層，第４トレンチでは第５層，第５トレンチでは第２～４層にあたる。第１層遺物とは第１～５トレンチの第１層にあたる遺物である。

遺構からの出土遺物は，17世紀末から1949年鋳造の五円貨までがみられるが，18世紀後半から19世紀前半頃までの100年前後の間に生産されたものがその大半を占める。そこで，この地での最も活発な人間の足跡がみられるのは，江戸時代中頃から明治時代頃と考えたい。

Ⅳ　遺　　構

（Fig.４・５）

前述したように，層序は安定性を欠くため，遺構相互の関連および先後関係は把握しがたいが，便宜上，遺構面を２面に分けた。調査前から周知されていた遺構および表土（第１層）下の遺構を上部遺構面の遺構とし，上部遺構面の下層で検出された遺構を下部遺構面の遺構とした。

下部遺構面では，池状遺構１，土塁状遺構１，石列状遺構１，溝状遺構２，神社に関連

するとみられる配石遺構１，礎石建物跡１，土坑２，小ピット５の14の遺構が検出された。上部遺構面では，土塁状遺構３，神社跡１，小祠跡１，礎石建物跡３，井戸跡３，溝状遺構５の16の遺構が検出された。

下部遺構面は江戸時代の中頃から末頃，上部遺構面は江戸時代末頃から現代として捉えられる。

１　下部遺構面の遺構

下部遺構面では，次の遺構が検出された。

(1)　池状遺構

(2)　土塁状遺構（ＳＡ－０４）

(3)　石列状遺構（ＳＸ－０２）

(4)　溝状遺構（ＳＤ－０６，０７）

(5)　配石遺構（ＳＸ－０１）

(6)　礎石建物跡（ＳＢ－０４）

(7)　土坑

(8)　小ピット

(1)　池状遺構　（Fig. 6）

池状遺構は，調査地の西，山裾で検出された。

南北に細長い長楕円形であり，北に排水機能をもつ小溝を付属させる。遺構中は３つに分けられる。南部の低位は高く，段をもって北へ流れる。西部はまわりに堤をめぐらし，堀りこんで北部の底と同じ高さとする。北部から小溝を伝って水が西へ流れるようになっている。長径約8.1m，短径約3.4m，深さ約0.4mである。

堆積土は４つの層に分けられるが，堤状とする第３層を除いては，グライ化したオリーブ灰色系の粘質土である。西部および南部北端から，下駄，曲物，板材，竹などの木製品と染付磁器の猪口（505），寛永通宝５枚，東岸からは染付磁器の碗・猪口・鉢・青磁染付の蓋などが出土している。出土遺物などの検討から，18世紀後半の構築とみられる。

この遺構は埋積して池状遺構として機能しなくなってから，廃棄場所になったとみられ池状遺構直上層には，多量の陶磁器を主とする遺物が出土した。なお，この遺物

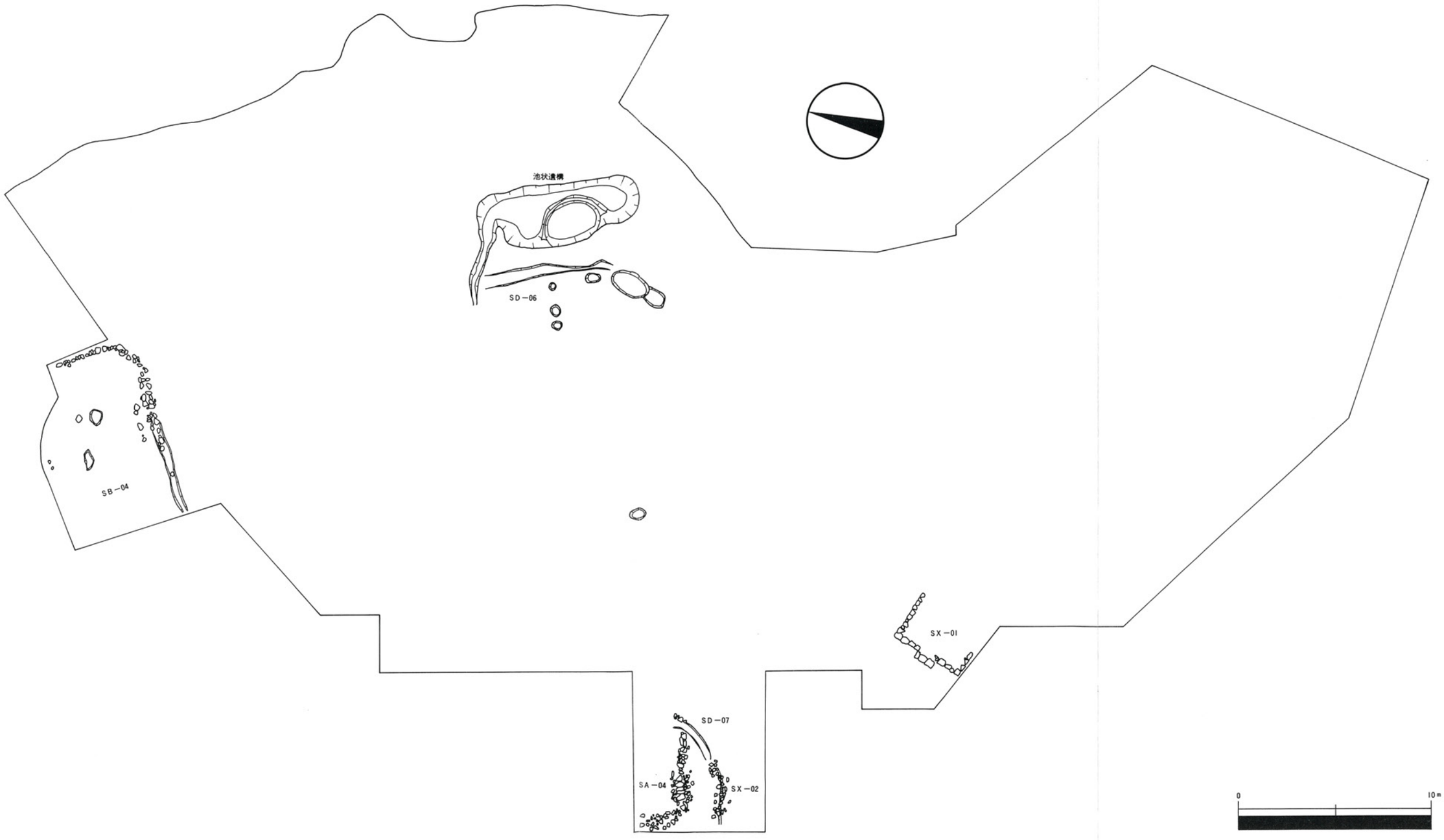


Fig. 4　第21区下部遺構面遺構配置図

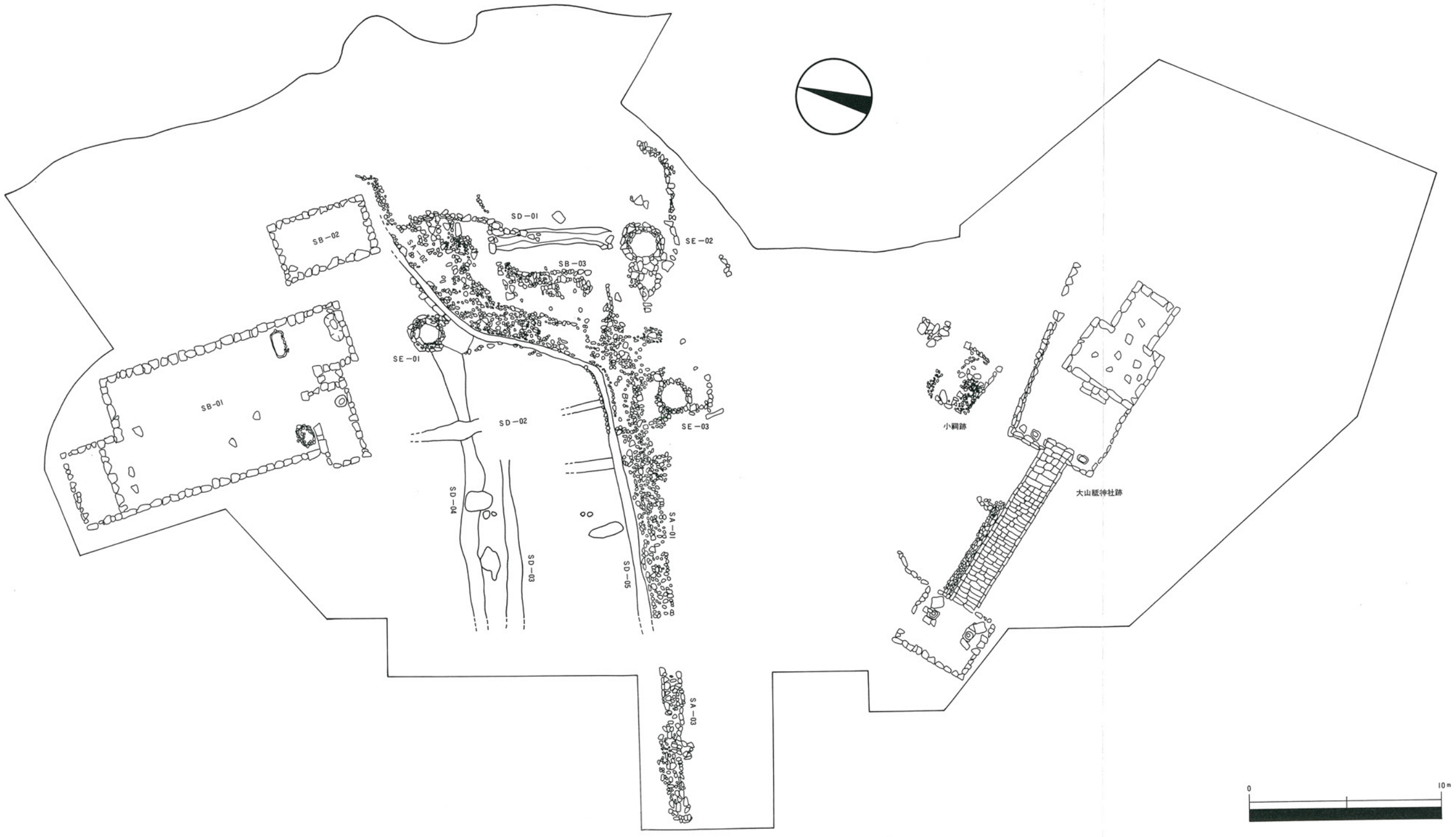


Fig. 5　第21区上部遺構面遺構配置図

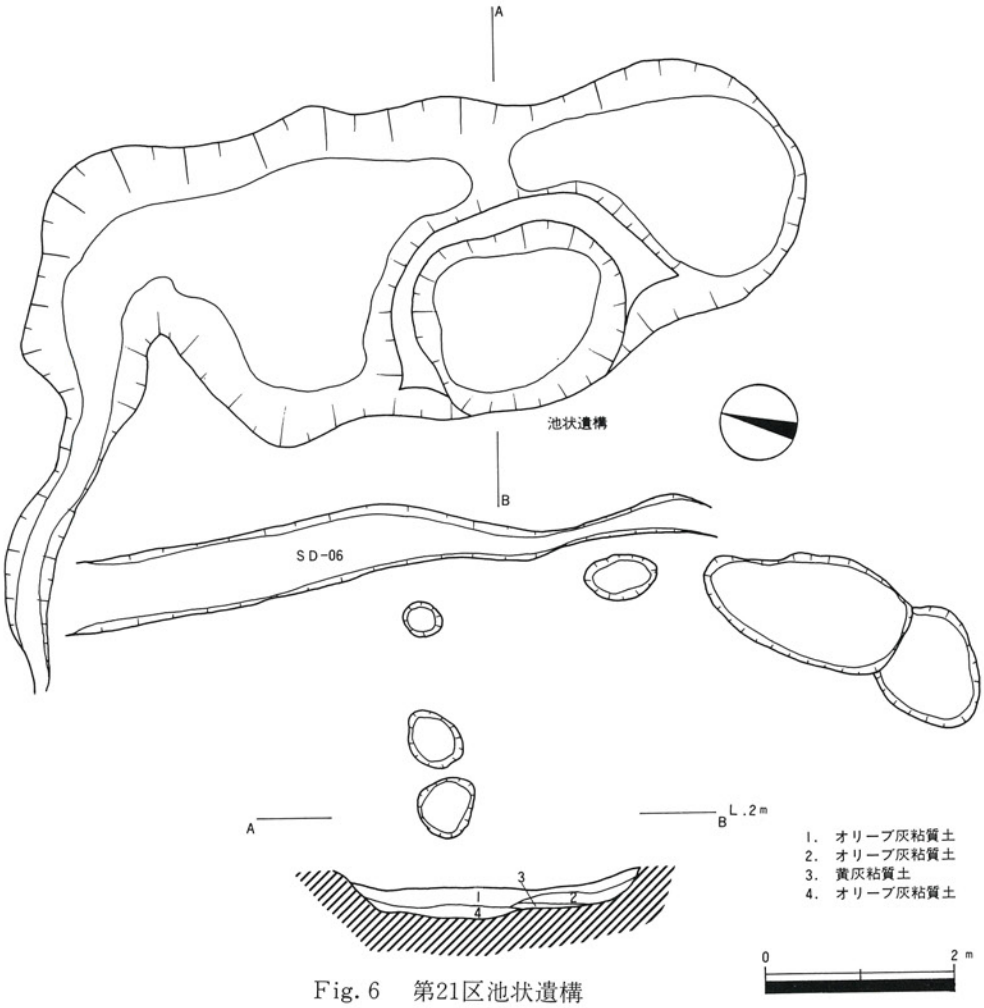


Fig. 6　第21区池状遺構

は，概報では，盛土状遺構下部出土としたものである。

(2) 土塁状遺構　(Fig. 7)

土塁状遺構ＳＡ－０４は，調査地の西端で検出された。

東西方向から北に向きを転ずるが，北部は調査地外であるため，未確認である。0.2～0.4m大の砂岩角礫を両側に２～３段積み上げ，その間に0.4m以下の砂岩角礫を無雑作に置き，にぶい黄褐色粘質土を充塡している。検出した全長約6.3mである。東西部分は全長約4.2m，走行方向N79°E，北に転ずる部分は全長約2.1m，N20°W

Fig. 8　第21区　SA－01・02・03，SD－05

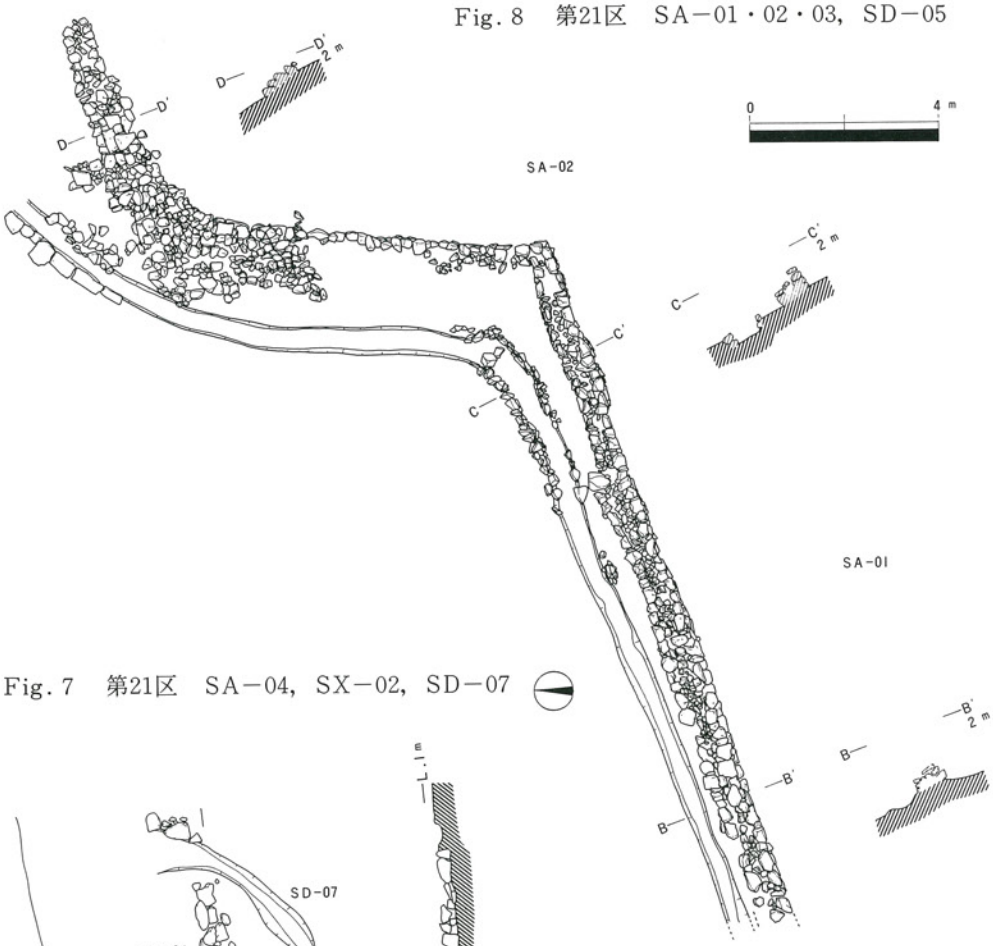


Fig. 7　第21区　SA－04，SX－02，SD－07

でやや鈍角に開く形状てる。直上に，土塁状遺構ＳＡ－０３が構築されていたため，上部は欠失しているとみられる。基底部幅0.3～１ｍ，残存高0.2～0.4ｍ。

染付磁器の碗・猪口・蓋・皿，施釉陶器の鍋，寛永通宝（774）などが出土している。基底部から染付磁器の碗（541），さらに下層の石灰殻層中からは染付磁器の碗（537，539）が出土している。

出土遺物，石灰殻層などの検討から，19世紀に入ってからの構築とみられる。

(3) 石列状遺構

石列状遺構ＳＸ－０２は，土塁状遺構ＳＡ－０４の南に位置し，東西方向に走る石列である。西部は調査地外であるため，未確認である。南に面を取り，0.15～0.35ｍ大の砂岩角礫を１～２段積み上げて，石積護岸的な様相を呈している。検出した全長約３ｍ。

地形的にみて，南北に下降しているため，北東から南西に走る溝状遺構ＳＤ－０７に関連のある施設ともみられる。出土遺物はない。土塁状遺構ＳＡ－０４と同時期の構築とみられる。

(4) 溝状遺構

① ＳＤ－０７

ＳＤ－０７は土塁状遺構ＳＡ－０４の東部から，石列状遺構ＳＸ－０２に向けて走る溝状遺構である。長さ約３ｍ，幅0.27～0.65ｍ，深さ0.1ｍ前後と浅い。断面Ｕ字形。出土遺物はない。

土塁状遺構ＳＡ－０４に付属する施設ともみられる。そのため，ＳＡ－０４と同時期の構築と考えられる。

② ＳＤ－０６

ＳＤ－０６は池状遺構の西に位置し，南から北に流れる。長さ約７ｍ，幅0.15～0.8ｍ，深さは約0.05ｍと浅い。池状遺構との関連は不明であるが，自然の流れとみられる。出土遺物はない。

(5) 配石遺構 （Fig. 9）

ＳＸ－０１は調査地の南西端で検出された配石遺構である。上層に大山祇神社跡の

鳥居を構成する配石遺構が位置する。両遺構は約0.4mの高低差をもって，平面的にほぼ重複する。

南北約4.35m，東西約2.85mの長方形プランを示す。外側に面を取って1列に並べられているが，東側の山裾には配石はみられなく，南側は東南部が欠失している。西側のほぼ中央は配石が途切れ，その外側に張り出し部状に配石される。張り出し部には，0.4～0.55mの比較的大きい砂岩角礫であるが，他の部分には，0.2～0.5m大の

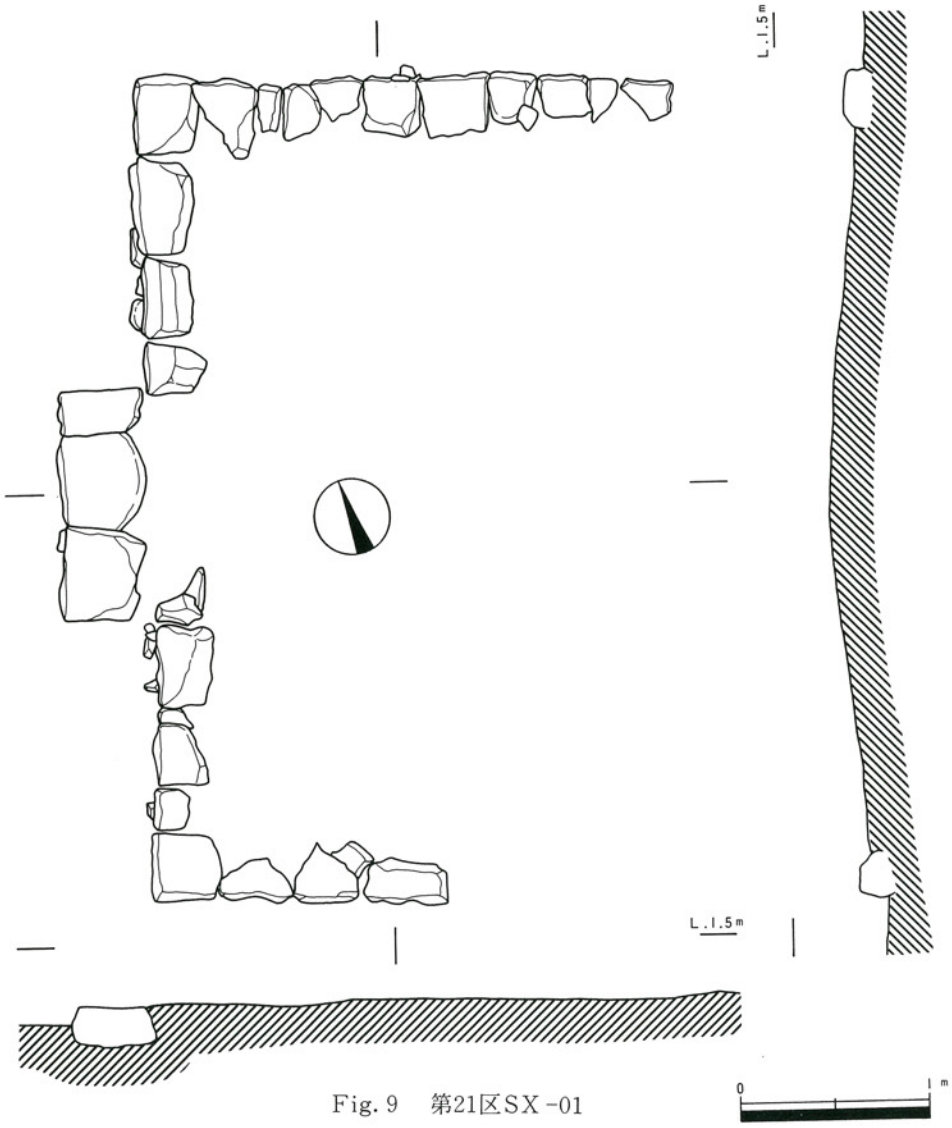


Fig. 9　第21区SX-01

砂岩角礫が用いられている。張り出し部の高さは，他の配石部に較べて約0.05m高くなっている。

出土遺物はない。直上に構築された大山祇神社跡鳥居脚には，「明治13年庚辰（1880）春建立」と彫りこまれ，また，大山祇神社跡から出土した水受に「文政四巳（1821）」と彫りこまれている。そのため，構築時期は1821年頃，あるいはそれ以前，もしくは降っても1880年以前と考えられる。

(6) 礎石建物跡　（Fig. 10）

ＳＢ－０４は，調査地の北端で検出された礎石建物跡である。直上層に礎石建物跡ＳＢ－０１が位置する。東側に南北，南側に東西に伸びる石列を有するが，北と西側の石列の有無については，調査地外にかかるため不明である。

現存する規模は，東西約8.5m，南北約４ｍである。長軸方向Ｓ63°Ｗ。石列には，0.2～0.4m大の砂岩角礫が用いられている。東側の石列は，外側に面をとって一列に並べられているが，南側では雑然としている。

石列の内には，土坑が２箇所検出され，ともに炭化物と焼土がみられる。東の土坑は，長径約0.95m，短径約0.45mの不整楕円形であり，深さは約0.1mである。西の土坑は，長径約0.9m，短径約0.65mの三角形を呈し，深さは約0.15mである。坑底の焼土の上には，0.1m以下の砂岩小角礫が散乱し，すべて加熱を受けている。両者とも，火を焚く施設と考えられるが，カマド跡であるかどうか不明。

ＳＢ－０４は遺存状況が悪く，住居跡か納屋跡かは不明であるが，礎石建物跡と考える。出土遺物は，陶磁器の細片や瓦，鉄釘などであるが，構築時期を決定する資料はみられない。礎石建物跡ＳＢ－０４が直上に位置するため，それに先行する年代が付与され，池状遺構に類似した年代，18世紀後半が考えられる。

(7) 土坑　（Fig. 6）

溝状遺構ＳＤ－０６の南で，２箇所の土坑が検出された。その１つは長径約2.2m，短径約1.2mの不整楕円形プランを示し，深さは約0.24m。他の１つは，前者により切られている。短径約1.1m，深さ約0.22m。両者とも出土遺物はなく，その性格は不明である。

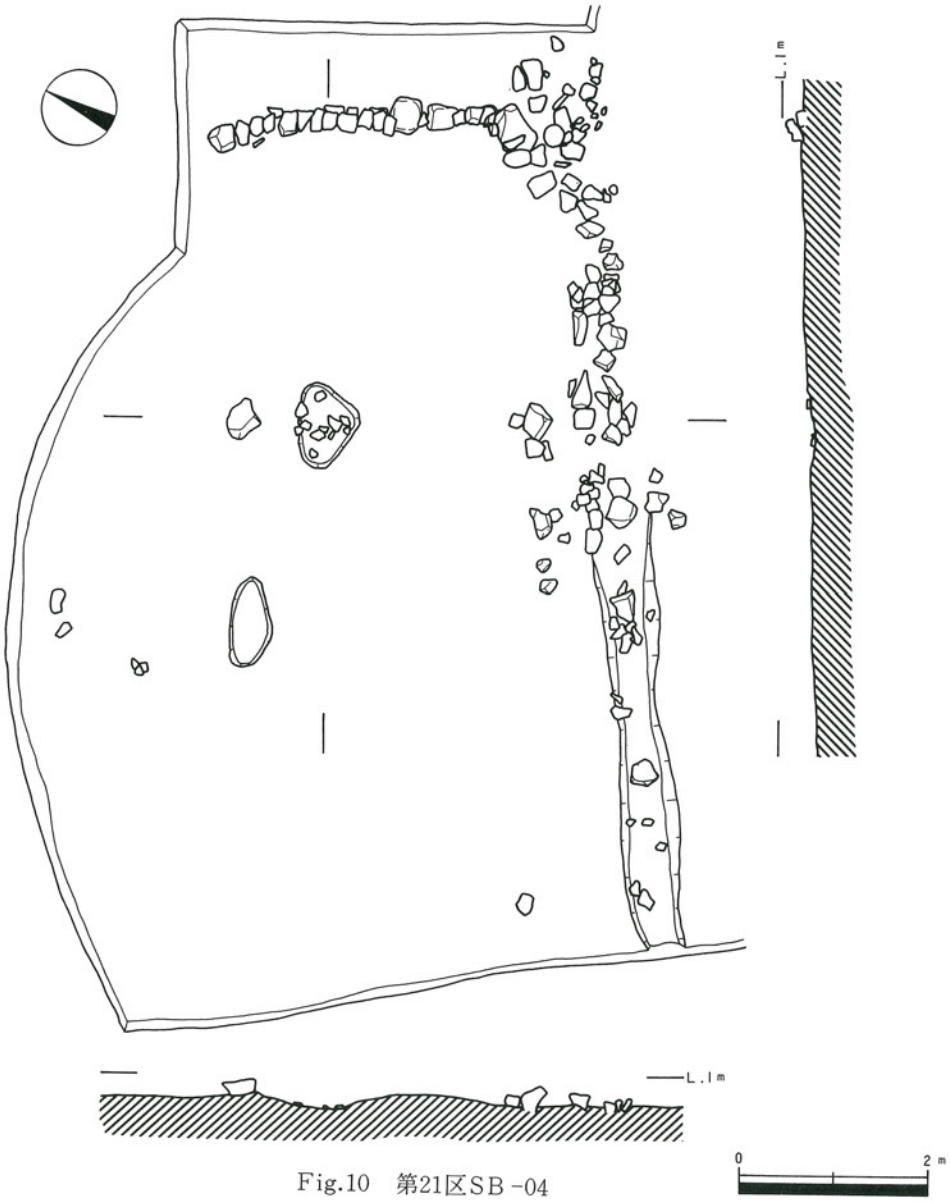


Fig.10　第21区SB-04

(8) 小ピット

溝状遺構ＳＤ－０６の西で，４箇所の小ピットが検出された。長径0.4～0.8mの不整円形を呈し，深さは0.05～0.12mと浅い。出土遺物はなく，その性格は不明である。

2．上部遺構面の遺構

上部遺構面では，次の遺構が検出された。

(1) 土塁状遺構（ＳＡ－０１，０２，０３）

(2) 祭祀跡（大山祇神社跡，小祠跡）

(3) 礎石建物跡（ＳＢ－０３，０１，０２）

(4) 井戸跡（ＳＥ－０１，０２，０３）

(5) 溝状遺構（ＳＤ－０１，０２，０３，０４，０５）

(1) 土塁状遺構　（Fig. 8）

① ＳＡ－０１

確認調査時に一部を欠失したが，全長約20mの土塁状遺構である。基底部幅は，東端で約0.5m，西部では１～1.05m，残存高は0.5～0.6mである。断面は梯形を呈する。0.2～0.4m大の砂岩角礫を両側に３～４段積み上げ，その間に0.1m内外の砂岩角礫およびにぶい黄褐色粘質土を充塡する。走行方向N69°E。

出土遺物は，少量の陶磁器，瓦（675），管状土錘（679），砥石（736），煙管の雁首（762）などの銅製品である。

ＳＡ－０１はＳＡ－０２・０３に先行するものとみられる。また基底部から，18世紀後半の生産とみられる染付磁器碗（551）が出土していることなどから，構築年代は18世紀後半から19世紀初め頃と考えられる。

② ＳＡ－０２

ＳＡ－０２は，ＳＡ－０１の東端の北辺から北に伸びて，円弧を描きながら東の山裾に向かう全長約11.7mの土塁状遺構である。北に伸びる部分は，全長約6.7m，走行方向Ｎ５°Ｅ。円弧状部分は，全長約５m，走行方向N71°Eである。基底部幅0.7～１m，残存高0.3～0.5mであり，断面梯形を呈している。0.2～0.3m大の砂岩角礫を両面にほぼ垂直に３～４段積み上げ，その間に0.1m以下の砂岩角礫および黄褐色粘質土を充塡する。

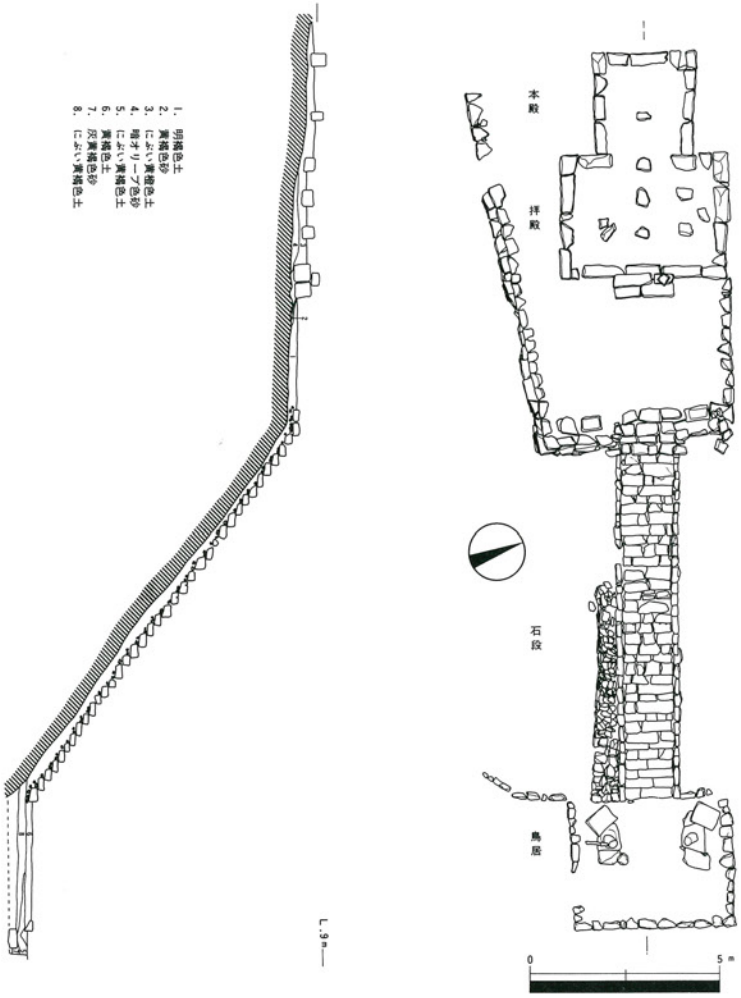


Fig.11　第21区大山祇神社

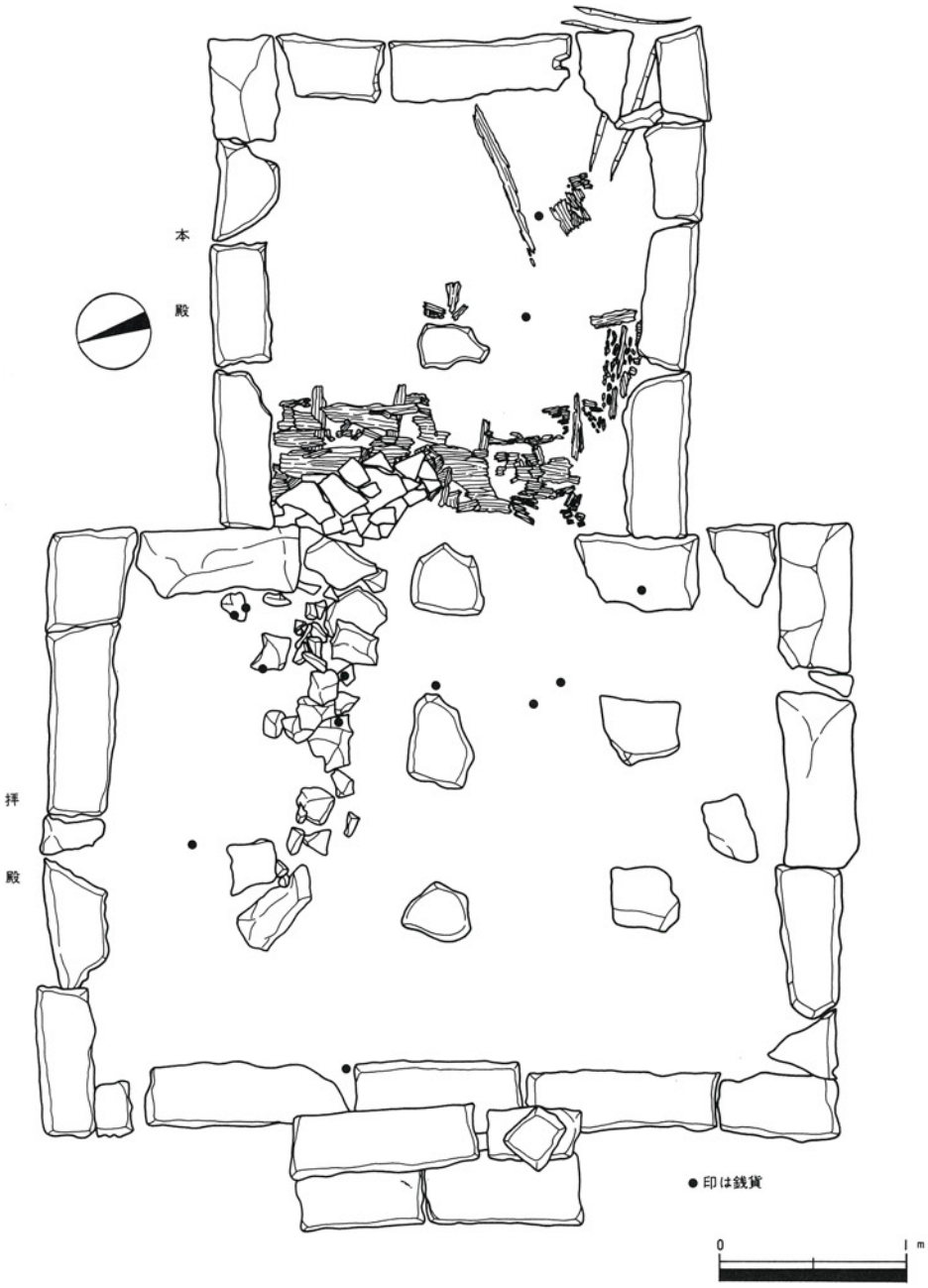


Fig.12　第21区大山祇神社跡拝殿・本殿遺物出土状況

出土遺物は，陶磁器および管状土錘（714）である。

ＳＡ－０２は，礎石建物跡ＳＢ－０３の上部に築かれ，しかも，ＳＡ－０１に後続するものとみられる。出土遺物に19世紀初めの染付磁器蓋（555）があることなどから，構築年代は19世紀前半以降と考えられる。

③　ＳＡ－０３

ＳＡ－０３は，ＳＡ－０１の西に，暗渠状遺構をもって接続する全長約5.2mの土塁状遺構である。基底部幅0.9～１m，残存高0.55～0.7m，断面梯形を呈する。走行方向Ｎ72°Ｅであり，ＳＡ－０１とはわずかに方向を異にする。0.2～0.4m大の砂岩角礫を両側にほぼ垂直に積み上げ，その間に0.1m内外の砂岩角礫およびにぶい黄橙色粘質土を充塡する。

出土遺物は，少量の陶磁器小破片である。

ＳＡ－０３は，ＳＡ－０４の上部に築かれ，しかも，ＳＡ－０１の西に接続するという性格をもつ。そのため，ＳＡ－０１にやや後続する19世紀前半以降の構築と考えられる。

(2)　祭祀跡

①　大山祇神社跡　（Fig. 11・12）

調査地の南端に位置する神社跡である。地元では大山祇神社と呼称し，出土した鳥居額束にも「大山祇神社」と記されているので，大山祇神社跡として把握した。

比高差約7.4mの山裾から山腹に築かれており，鳥居，石雁，拝殿・本殿部分の３つに分けられる。全長約22.6m，長軸方向Ｎ70°Ｗであり，海岸に面する（西面）。

鳥居部分は山裾に築かれ，配石遺構ＳＸ－０１の直上約0.4mに位置する。北，南，西の三方に0.2～0.5m大の砂岩角礫を１列，外側に面をとって配し，方形区画とする。西を正面とし，東に鳥居を築く。配石は，西側約4.1m，北側約3.35m，南側約3.25m，配石のない東側は幅約4.15mであり，ややいびつな長方形である。東には山裾をめぐるように配石がみられる。鳥居には，0.7m大を御影石角礫を基礎として，地中に埋めこむ。直径約0.29m，深さ約0.13mの穴を穿ち，ここに鳥居脚の円柱を収める。円柱は直径約0.28mの御影石製であり内側に傾くように構築され，上に向うに従い，直径を減じている。鳥居脚には，「明治13年庚辰（1880）春建立」，水受には「文政四巳（1821）」と彫りこまれている。鳥居の他の部分およ

び砂岩製の額束が，このまわりに散乱した状況で検出された。

石段は全長約9.7m，傾斜角35°，段数38である。石段の横幅は1.35〜1.6mであり，上段を広くとる。その両側に側石を設ける。北側には側石の外側に砂岩角礫を配し，土砂の流失を防いでいる。構築の順序は，地山を整地し，0.1m以下の砂岩礫を裏込めとするところから始める。その上に，奥行約0.3m，高さ0.15〜0.2m，長さ0.15〜0.8mの砂岩割石を配し，下から上へと積み上げる。上下の石のかかりは，0.03〜0.05mとわずかである。その後，両側に幅約0.15m，長さ0.2〜0.6mの側石を，傾斜角35°として1列に並べる。

拝殿・本殿部分は，海抜8.4〜8.9mの最高位に位置する。地山削平整地後，北，西，南の一部に方形区画の石垣を築き，拝殿・本殿の礎石を配している。石垣は，西側は幅約5m，拝殿手前の中央部幅約5.5mである。北の石垣が長軸方向からやや北に寄り，その東側を広くとっている。北と西の石垣には，0.3〜0.6m大の砂岩割石を5〜6段積み上げる。南には1段とする。拝殿と本殿の礎石は，両者が接合して「凸」字形を呈している拝殿の礎石の規模は，西側約4.26m，東側約4.28m北側約3.20m，南側約3.30mで横に1段並べられ，長方形区画とする。この外周の礎石の内側に，南北3，東西2の礎石が認められることから，南北2間（柱間4），東西1間半（柱間3）の横長拝殿とみられる。西側の正面に，奥行約0.6m，幅約1.52mの規模で，砂岩割石を2段積み上げて昇段とする。本殿の礎石は，拝殿の礎石より約0.3m上げて配されている。西側約2.50m，東側約2.67m，北側約2.67m，南側約2.70mで，横に1段並べられ，ややいびつな方形区画とする。外周の礎石の内側中央に1つの礎石が認められることから，1間四方（柱間2）の建物であったとみられる。南東隅には礎石がなく、浅い溝状の落ちこみがみられることから排水機能をここにもたせていたとみられる。

拝殿・本殿から，施釉陶器燈明皿（油皿　561），瓦，銭貨、炭化木材が出土している。一度火災に遇ったものとみられ，礎石および拝殿北東部に散乱する砂岩角礫は，火熱を受けている。また，本殿には，焼失した軒先が落下したそのままの状況で検出された。本殿の長軸方向に沿って，炭化した垂木が4本平行に並び，その上に，炭化した板材が長軸方向に直交して乗り，さらにその上に平瓦が乗っている。そのため，焼失した本殿は，切妻造りの平入り神殿の形式をとるものとみられる。銭貨は，寛永通宝が18枚（769，770，782，784〜787その他）と明治時代以降の銭

貨３枚（明治17年の？厘貨，大正９年の１銭貨，昭和15年の10銭貨）の21枚である。

大山祇神社の構築時期は，次の２通りが考えられる。文政４年（1821）の水受と明治13年（1880）の鳥居が出土しており，水受が配石遺構ＳＸ－０１に伴うものとすれば，1880年頃，伴わないものとすれば，1821年頃とみられる。

② 小祠跡　（Fig. 13）

大山祇神社跡の拝殿・本殿部分の北斜面に位置する遺跡遺構であり，小祠跡とみられる。海抜５ｍ前後の緩やかな斜面に築かれ，北面する。

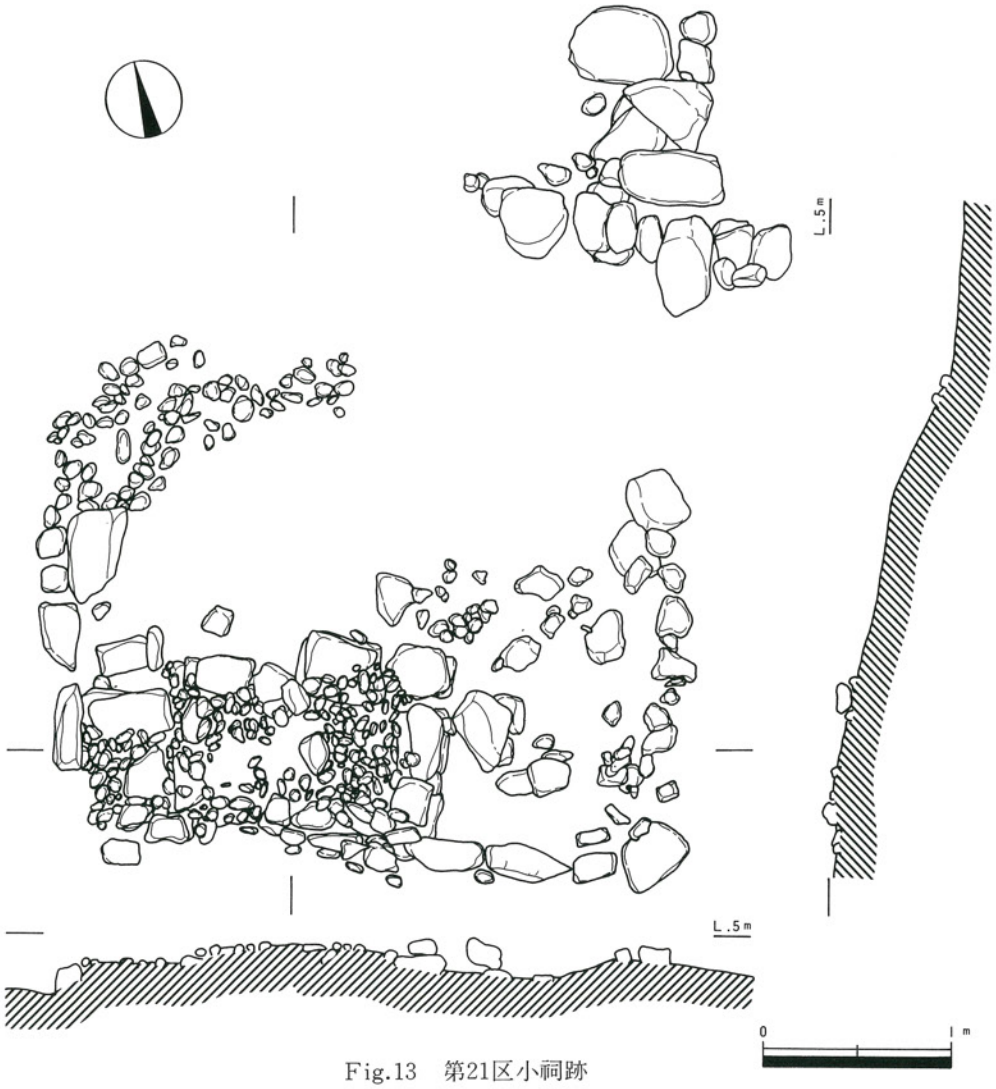


Fig.13　第21区小祠跡

0.15〜0.50m大の砂岩角礫を用いて，東西約3.35m，南北約2.30mの長方形区画とする。長軸方向はN74.5°Eである。北側の礎石は欠失しているが，東西1間半，南北は少なくとも1間の建物跡とみられる。この礎石の内側から，土師質土器（562，563）と平瓦が出土している。

この礎石の南西隅に，東西約2.1m，南北約1.2mの長方形区画の配石がみられる。内側には，0.1m前後の砂岩小円礫が敷きつめられている。礫中および礫上から，寛永通寶14枚（768，771，780，788その他）が出土している。

構築時期は，明治時代以降の銭貨がみられないことからも，配石遺構ＳＸ－０１と同時期の1821年頃，もしくはそれ以前と考えられる。

(3) 礎石建物跡

① ＳＢ－０３ （Fig. 14）

東西にのびる土塁状遺構ＳＡ－０１の北東に位置し，土塁状遺構ＳＡ－０２によって西部が破壊された礎石建物跡である。現存する規模は，南北約5.1m（約2間半），東西約3.2m（約1間半）であり，長軸方向はＳ14°Ｅである。

礎石は内外に面をとる石列である。現存するのは，南と北の一部，および東であり，西側の石列は欠失している。東側の石列は，0.2〜0.5m大の砂岩角礫が，約0.6m幅で内外に面をとって2列並べられ，南端の一部が欠失している。北と南の石列はほとんど欠失しているが，東側と同じく2列に並べられていた可能性がある。床面には，全面に炭化物，焼土が認められ，火災後，放棄されたとみられる。

陶磁器，瓦質土器の碗，猪口，蓋，皿，燈明皿，鉢，香炉，火舎，土釜，壺，甕，瓶，徳利などの日常生活に密着した遺物と瓦，砥石（735），寛永通寶（3枚）などが出土している。特に，炭化物層からの出土遺物に，染付磁器の碗（590），施釉陶器の猪口（609），染付磁器の皿（624）がある。

規模は納屋的要素をもつ礎石建物跡ＳＢ－０２に類似するが，出土遺物の検討から，住居跡とみられる。焼失した時期は，土塁状遺構ＳＡ－０２に先行することから，19世紀中葉頃，構築時期は，出土遺物に18世紀代あるいは18世紀後半の染付磁器が多くみられることから，18世紀後半頃と考えたい。

② ＳＢ－０１・０２ （Fig. 15・16）

ＳＢ－０１・０２は、調査区の北寄りに位置する2棟の礎石建物跡である。調査前に家屋が取り壊されたので，上屋構造は不明であるが，ＳＢ－０１は南北約15.2

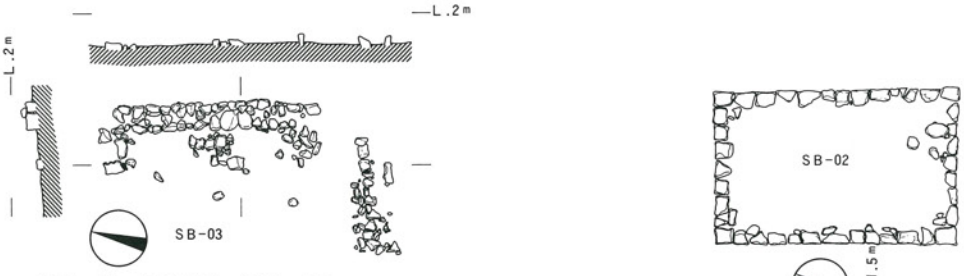


Fig.14　第21区　SB－03

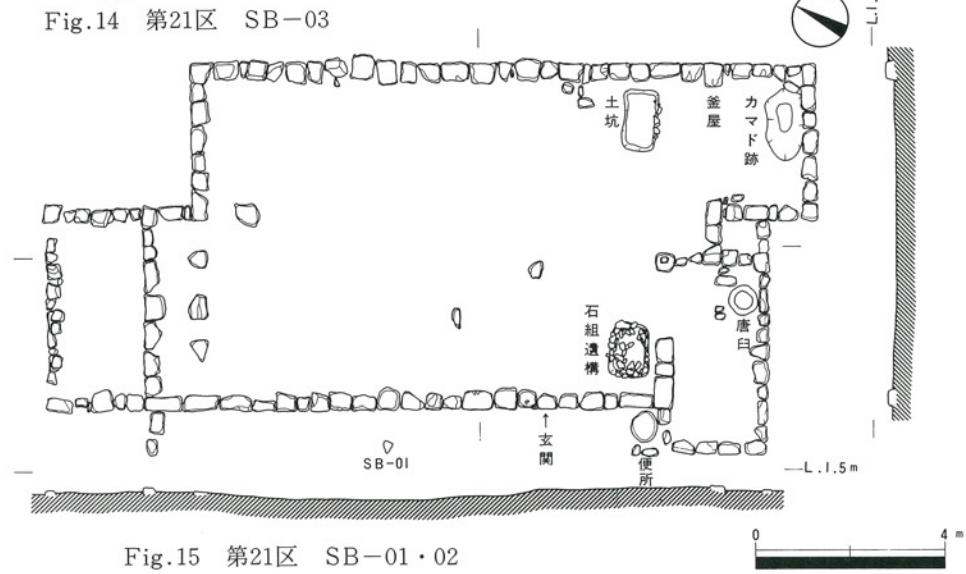


Fig.15　第21区　SB－01・02

m（約８間），東西約8.2m（約４間半）の母屋，ＳＢ－０２は南北約5.1m（約２間半），東西約3.2m（約１間半）の付属建物とみられる。長軸方向はＳ32°Ｅであり，正面を南西に向けた建物跡である。

母屋の主要部分には，0.25～0.75m大の砂岩割石が外側に面をそろえて隙間なく並べられ，礎石列を形成している。北西と南西の張り出し部は，礎石が0.2～0.5m大と小さく，しかも不ぞろいであり，後に増築されたものとみられる。南西の張り出し部には，直径約0.6mの砂岩製石臼が埋めこまれている。この石臼は脱穀用の唐臼であり，民俗例から，この南西の張り出し部は母屋の中の部屋ではなく，母屋の妻部分からひさしがかけられていた場所とみることが妥当である。

母屋の内部施設としては，カマド跡，土坑，石組遺構があり，南西側玄関の外右側には，直径約0.6mの便所用埋甕がある。母屋東南部隅に，長径約1.5m，短径約

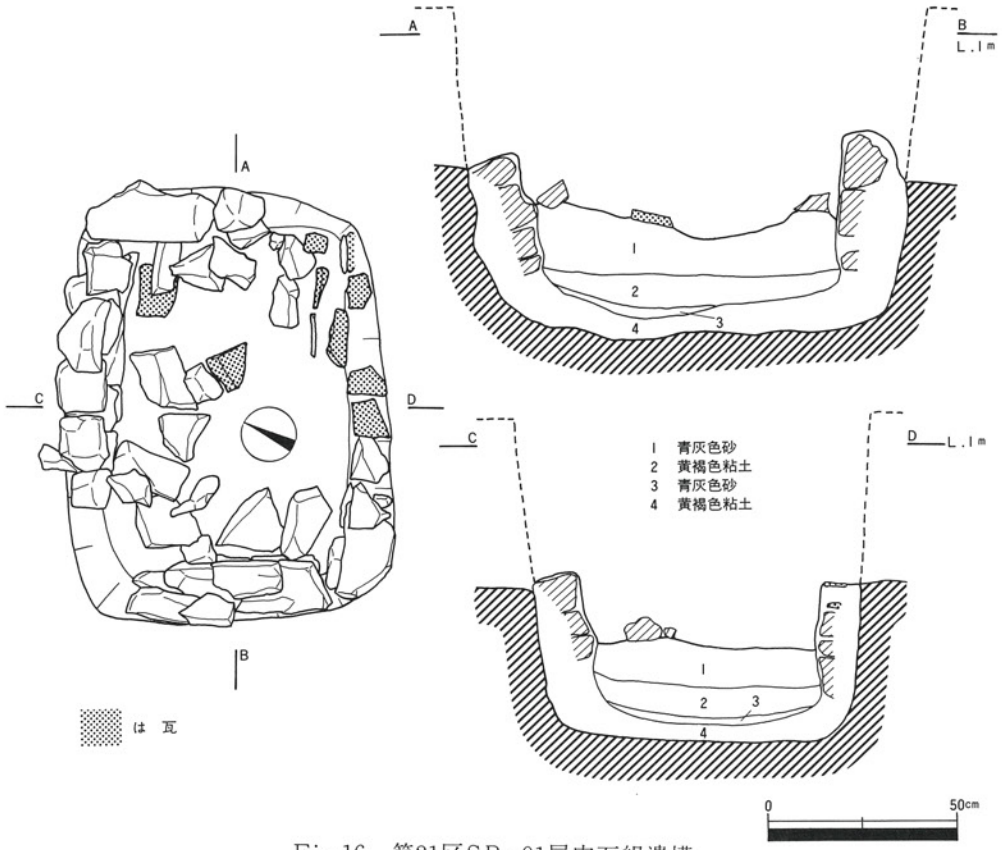


Fig.16　第21区SB-01屋内石組遺構

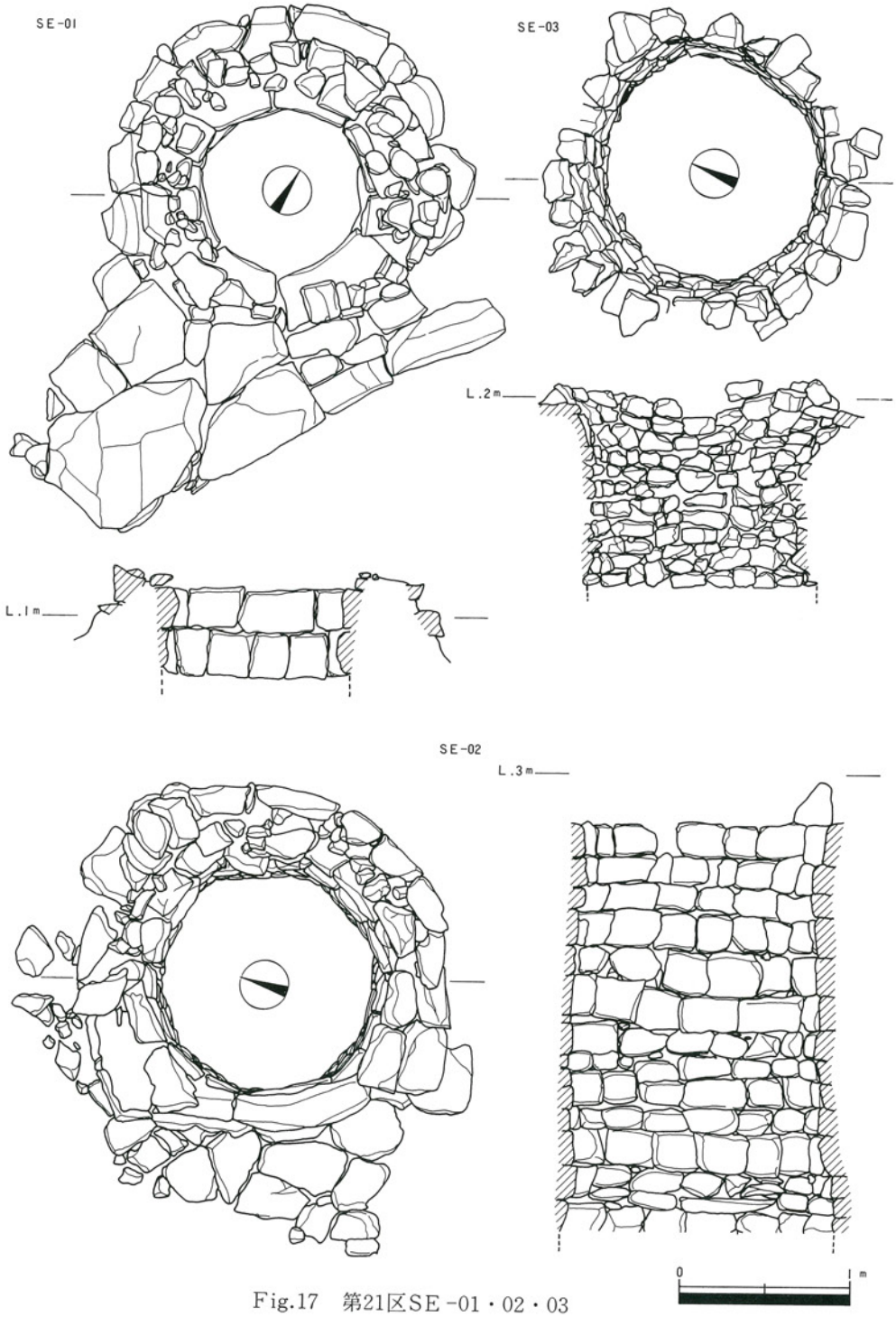


Fig.17　第21区SE-01・02・03

0.8m，深さ約0.1mの不整楕円形の浅い落ちこみがあり，底面には焼土，炭化物がみられることから，これがカマド跡と考えられる。土坑は母屋の南東，石組遺構は南西に位置する。両者とも攪乱のため，上部を欠失している。土坑は検出面では縦約1.3m，横約0.7mの隅丸方形であり，現存する深さは約0.1mであるが，復元推定の深さは約0.3mとみられる。長軸方向はS65°Wである。南辺に0.1m大の砂岩礫がみられるが，素堀りとみられる。石組遺構は，検出面で縦約1.15m横0.85mの隅丸方形であり，現存する深さは約0.55mであるが，復元推定の深さは約0.9mとみられる。長軸方向は土坑と同じく，S65°Wである。内部には黄褐色粘土が敷きつめられ，その上に0.1～0.3m大の砂岩割石が積み上げられて，竪穴式小石室に類似した様相を呈している。石の間隔には，黄褐色粘土が充塡され，石の前面すなわち4面の側壁は，黄褐色粘土で塗りこめらている。また，側壁構築材として，砂岩の他に平瓦も転用さている。底面とした黄褐色粘土の上には，青灰色砂が堆積し，その上にさらに黄褐色粘土が敷きつめられ，再び青灰色砂が堆積している。そのため，再度，底面を作り直して使用し，その後，放棄されたものとみられる。

土坑，石組遺構とも，母屋の内部にあり，母屋の礎石列にほぼ平行あるいは直交していることから，この建物に付属し，しかも，日常生活に密着したものとみられる。そのため，民俗例あるいはその構造上から，イモアナなどの貯蔵穴としての用途が考えられる。

付属建物（ＳＢ－０２）は，母屋（ＳＢ－０１）のすぐ南東に位置し，内部施設も認められないことから，納屋的性格を有する建物であったとみられる。長方形区画とする礎石は，外側に面をとる。

ＳＢ－０１からの出土遺物に，染付磁器の碗（650），施釉陶器の下皿（651），施釉陶器の香炉（652），瓦質土器の土鍋（653），砥石（746），聖床元豊（765），寛永通寳５枚（766，776，783その他），明治10年の二銭貨（789），昭和19年の５銭貨および陶磁器の細片がある。

構築時期は，出土遺物などの検討から，19世紀後半以降と考えたい。

(4) 井戸跡

① ＳＥ－０１　（Fig. 17）

井戸跡ＳＥ－０７は，礎石建物ＳＢ－０１の南側に検出された。

上端の内法は直径0.9～１ｍであり，平面的には不整円形を呈している。完堀していないため，深さは不明であるが，３ｍを越えるとみられる。また，堀り方も不明である。

井側は0.2～0.4m大の整えられた砂岩割石をほぼ垂直に積み上げて構築されている。井側上部では，石と石との間隙に黄褐色粘土を充塡する。井側外周には，0.3～0.6m大の砂岩自然石をめぐらしている。

南側には，0.25～１ｍ大の結晶片岩板石を敷きつめ，溝状遺構ＳＤ－０５に排水できるようになっている。

ＳＥ－０１は，礎石建物跡ＳＢ－０１に伴い，最近まで使用されていたものとみられ，土砂などは堆積していない。未完堀のため，下部構造および出土遺物は不明である。

礎石建物跡ＳＥ－０１に伴うものとみられることから，構築時期は，19世紀後半以降の頃と考えられる。

② ＳＥ－０２　（Fig. 17）

井戸跡ＳＥ－０２は、礎石建物ＳＢ－０３の南側に検出された。

上端の内法は，直径1.35～1.45mであり，平面的には不整円形を呈している。完堀していないため，深さは不明であるが，５ｍを越えるものとみられる。堀り方も不明である。

井側は，0.15～0.35m大の砂岩割石が積み上げられている。断面梯形を呈し，下部を広くつくり出す。部分的に0.25～0.35m大の整った割石がみられるが，全体として：ＳＥ－０１に較べ，やや粗雑なつくりである。

井戸跡内には，ＳＥ－０１と同じく，土砂などの埋積はみられない。未完堀のため，下部構造および出土遺物は不明であるが，外西側で軒丸瓦が出土している。

礎石建物跡ＳＢ－０３あるいは祭祀跡に伴うものとみられる。前者に伴うものとすれば，18世紀後半以降，後者の祭祀跡などに伴うものとすれば，19世紀前半から後半と考えられる。

③ ＳＥ－０３　（Fig. 17）

井戸跡ＳＥ－０３は，土塁状遺構ＳＡ－０１の南，井戸跡ＳＥ－０２の南側で検出された。

上部の内法は，直径1.4～1.5mであり，平面的には不整円形を呈している。深さ

は約1.7mとみられる。堀り方プランは不明である。

井側は，0.1〜0.2m大の不揃いの砂岩割石を雑然と積み上げて構築されている。ほぼ垂直とするが，部分的には，内側に膨みをみせ，直径約1.15mと狭くなっている。これは土圧によって内側にせり出したものとみられる。他の2基に較べ，石材も小さく，全体として粗雑なつくりである。

井側上端の下約0.7mのところから土砂が約1m埋積していた。にぶい黄褐色土と暗褐色砂との互層である。底部に，井筒あるいは水神祭祀などに関わる遺物はみられない。堀り方中より，施釉陶器の落蓋（654），鉢（655），徳利（656）が出土している。

礎石建物跡ＳＢ－０３あるいは祭祀跡に関わる井戸跡とみられる。埋積状況から，井戸跡ＳＥ－０２に先行するものとみられるが，出土遺物から，19世紀代の構築と考えたい。

(5) 溝状遺構

① ＳＤ－０１ （Fig. 5）

溝状遺構ＳＤ－０１は，礎石建物跡ＳＢ－０３の東に位置し，井戸跡ＳＥ－０２の北から北へ向って流れる，陶磁器や瓦質土器の碗，猪口，蓋，燈明皿，鉢，土釜，壺，徳利，（657〜664，666，667）などが出土している。

礎石建物跡ＳＢ－０３あるいは井戸跡ＳＥ－０２に関わる遺構とみられるが，出土遺物から，19世紀中葉頃には埋没し，溝としての機能を失ったものと考えられる。

② ＳＤ－０２ （Fig. 5）

溝状遺構ＳＤ－０２は，土塁状遺構ＳＡ－０１の北，ＳＡ－０２の西にあたり，礎石建物跡ＳＢ－０１の南から，溝状遺構ＳＤ－０５に流れこむ。中央部で途切れるが，長さ約9.5m，幅0.4〜0.9mであた，深さは0.1m前後ときわめて浅い。

溝中から，陶磁器の猪口（670），鍋（665），壺（669）などが出土している。

礎石建物跡ＳＢ－０１に関連する遺構とみられるため，構築時期は，19世紀後半以降と考えたい。

③ ＳＤ－０３ （Fig. 5）

溝状遺構ＳＤ－０３は，溝状遺構ＳＤ－０２の中途で途切れる部分から西への海岸方向に流れる。長さ約8m，幅0.3〜1m，深さは0.1m前後ときわめて浅い。

溝中から，施釉陶器の燈明皿（668），甕（671，672）などが出土している。

溝状遺構ＳＤ－０４，ＳＤ－０５と併行して流れるが，他の遺構との関連は不明である。ＳＤ－０２に先行するものならば，やや先行する19世紀後半の構築と考えたい。

④　ＳＤ－０４　（Fig.　５）

溝状遺構ＳＤ－０４は，井戸跡ＳＥ－０１の西から西の海岸方向へ流れる。長さ約14m，幅0.6～1.4mであり，深さ0.1m前後ときわめて浅い。

溝中から，陶磁器，瓦質土器などの小破片が出土している。

溝状遺構ＳＤ－０２の下層に位置し，溝状遺構ＳＤ－０５と同じく，井戸跡ＳＥ－０１の排水溝とみられる。そのため，ＳＤ－０２にはやや先行するが，19世紀後半の構築と考える。

⑤　ＳＤ－０５　（Fig.　５・８）

溝状遺構ＳＤ－０５は，土塁状遺構ＳＡ－０１．０２の北側に沿って，西の海岸方向へ流れる。

部分的に0.1～0.2m大の砂岩角礫を２段積み上げて護岸とするが，他の部分は素堀りである。長さ約27m，幅0.3～0.6m，深さ0.2m前後であり，断面Ｕ字形を呈する。

溝中からの出土遺物は少なく，染付磁器の菊鉢（673）や瓦などがみられる。

基本的には，東の山裾に集まる水を流す役割があり，同時に，溝状遺構ＳＤ－０４と同じく井戸跡ＳＥ－０１の排水溝的な機能を有していたとみられる。構築時期は，18世紀後半以降と考えたい。

Ⅴ　遺　　物

遺物は大量に出土したが，近世遺物がその大勢を占める。

実測可能遺物のうち，1318個体を実測したが，類似するものを割愛して，810個体をとりあげた。遺物の種類は多岐にわたるため，次のように分類した。

１．土器類（陶磁器，瓦質土器，土師質土器などの容器類）	673個体
２．瓦	５個体
３．土錘	40個体

4．土製品（土師質系の人形類）	9個体
5．石器類（石鏃・剝片）	7個体
6．砥石	13個体
7．大山祇神社跡関連石製品	4個体
8．鉄製品	5個体
9．銅製品	7個体
10．銭貨	27個体
11．木製品	2個体
12．その他の遺物	18個体

1．土　器　類

土器類とは，施釉，無釉を問わず，焼物の容器類を表す。層位・遺構毎の次のように分類した。

(1)　B－2グリッド礫層

(2)　第1トレンチ第9層

(3)　遺物包含層

(4)　第1層

(5)　池状遺構

(6)　土塁状遺構

(7)　祭祀跡

(8)　礎石建物跡

(9)　井戸跡

(10)　溝状遺構

さらに，以上の項目の中で，陶磁器，瓦質土器・土師質土器などの器種を問わず，以下の器形・用途毎の分類を試みた。しかし，(1)，(2)に関しては，その限りではない。

ⓐ　碗　　ⓑ猪口　　ⓒ　仏餉具　　ⓓ　蓋　　ⓔ　皿　　ⓕ　燈明皿　　ⓖ　鉢

ⓗ　香炉・火舎　　ⓘ　鍋・土釜・土瓶　　ⓙ　壺・甕　　ⓚ　瓶・徳利

各々の個体のデータは，別表に示した。染付磁器とは，藍色系の釉（呉須）で施文された磁器，青磁染付とは，青磁様な発色をする釉を施し，見込に染付がみられる磁器，陶胎染付とは，染付の後に白色釉をかけて陶器に似た胎土をもち，伊万里系とみられる。赤絵

とは赤色系釉で施文されたものを表わす。文様や生産年代については，肥前などの生産地での編年に対比させて推定した。

(1)　Ｂ－２グリッド礫層

Ｂ－２グリッドは，大山祇神社跡の石段下にあたる。19世紀代とみられる祭祀遺構ＳＸ－０１下層を地山確認のため精査中，下部礫層中から，90点ばかりの遺物が出土した。遺物は全て磨滅し，明確な遺構および遺構面は確認されなかった。そのため，周辺からの流れこみとみられ，ここではＢ－２グリッド礫層中遺物として，一括して

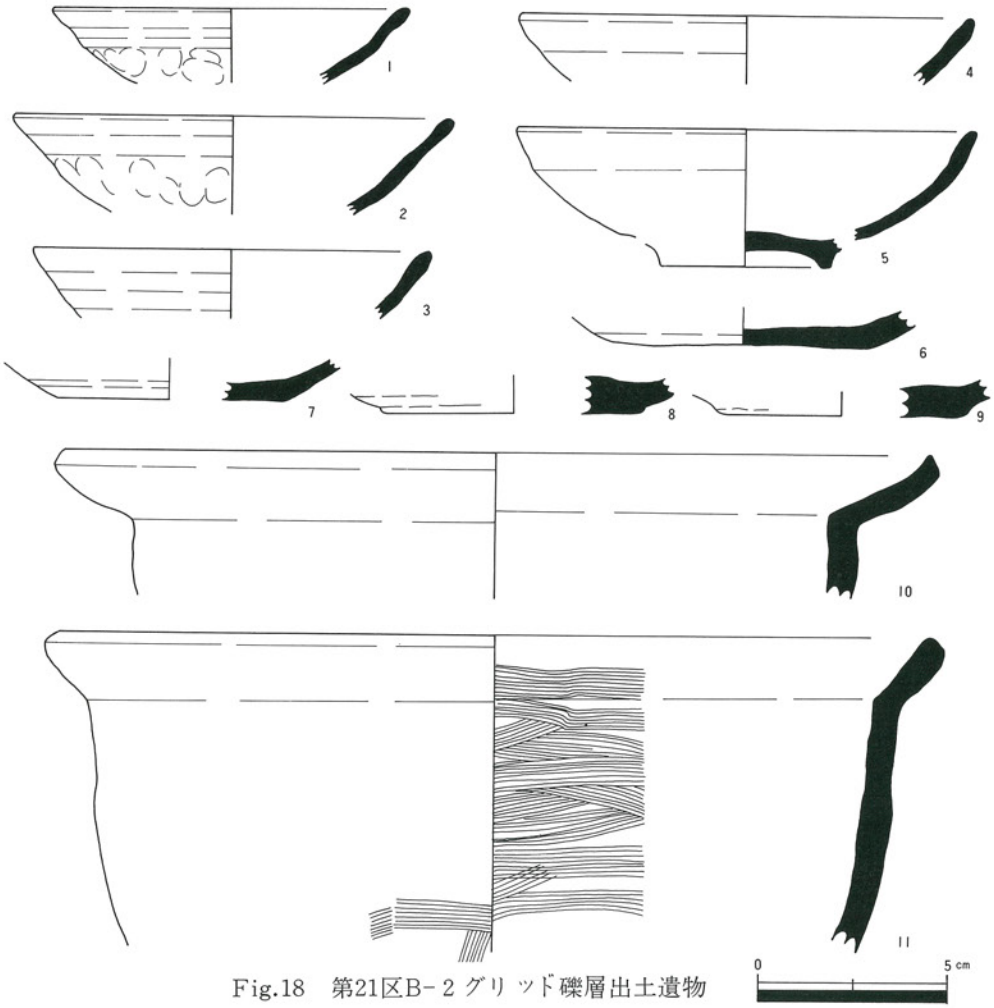


Fig.18　第21区B－２グリッド礫層出土遺物

扱う。

瓦器，土師質土器の小破片であり，実測可能遺物は少ない。器形別には，瓦器碗２，土師質土器杯７，土鍋２の11個体を図示した。

ⓐ　瓦器碗　（Fig. 18－１・２）

底部を欠失する瓦器碗である。口縁部直下に浅いくぼみをみせ，体部下位に指頭圧痕を認める。器高，口径ともに小さい小形碗とみられる。

ⓔ　土師質土器杯　（Fig. 18－３～９）

土師質土器杯の小破片である。

３，４は底部を欠失し，５は低くて小さい貼付高台を有する。６～９は底部のみを遺存し，平底である。器壁磨滅のために不明瞭であるが，ヨコナデ調整を認める。

①　土師質土器土鍋　（Fig. 18－10・11）

底部を欠失する土師質土器の土鍋である。焼成は良好・堅緻で，煤の付着がみられる。10は口縁部が内彎して大きく外反する。ヨコナデ調整。11は口縁部が小さく外反し，内外面にハケ目調整がみられる。

⑵　第１トレンチ第９層

第１トレンチは，当該調査区の確認のための試堀溝である。第９層から40点ばかりの遺物が出土した。遺物は全て磨滅し，明確な遺構および遺構面は検出されなかった。そのため，周辺からの流れこみとみられ，ここでは第１トレンチ第９層遺物として一括して扱う。

土師器，土師質土器，須恵器土器，施釉陶器の小破片であり，実測可能遺物は少ない。土師器甕１，施釉陶器皿１，土師質土器土鍋１の３個体を図示した。

①　土師器甕　（Fig. 19－12）

口縁部を遺存する土師器の甕である。口縁端部を小さくつまみ上げる。

ⓔ　施釉陶器皿　（Fig. 19－13）

底部を欠失する瀬戸系の施釉陶器皿である。浅く広く拡がる形態をもつ。にぶい緑灰色釉をかける。貫入が認められる。

①　土師器土器土鍋　（Fig. 19－14）

底部を欠失する土師質土器の土鍋である。口縁部は外反する。内面にハケ目調整がみられる。

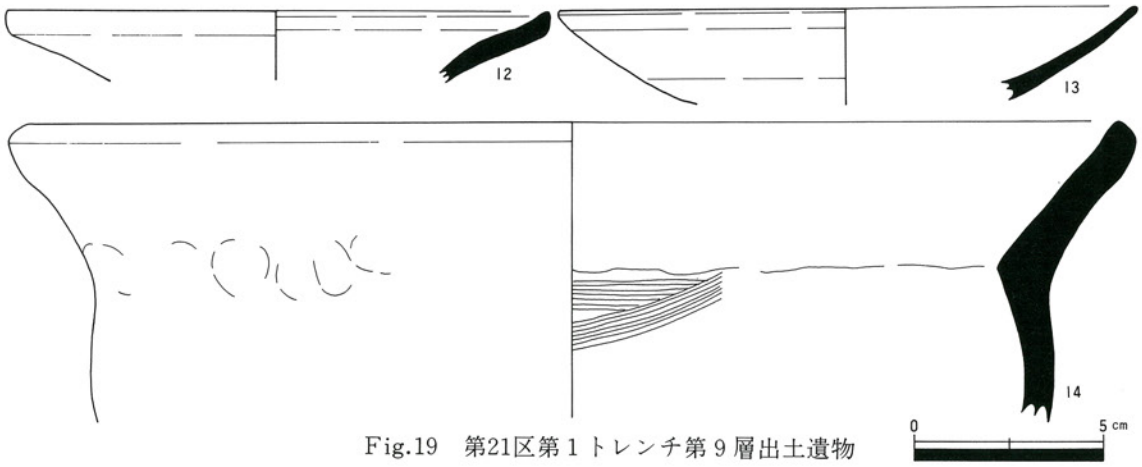


Fig.19　第21区第１トレンチ第９層出土遺物

(3)　遺物包含層

ここでは，調整区内の第２層から18世紀代とみられる近世中期の遺構面直上までの土器類を一括して扱う。

大量の陶磁器と瓦質土器，土師質土師器が出土している。器形別に，碗62，猪口22，仏餉具３，蓋44，皿29，燈明皿23，鉢21，香炉・火舎12，鍋・土鍋・土瓶24，壺11，瓶・徳利91の342個体を図示した。

ⓐ　碗　（Fig. 20～25）

15～18，20～23は，くらわんか手の染付磁器碗である。二筆網目文を施した丸碗（15，16，23），口縁部内側に四方襷文を施す丸碗（18，20）などがみられる。22は低く大きく開く形態をもつ。22，23は見込蛇ノ目釉ハギ。製作年代は18世紀代とみられる。

19，24～30は，陶胎染付の碗である。24は内の深い丸碗で，柳下一屋図に四方襷文を組み合わせている。その他は，草花図などを施す，24よりやや内の浅い丸碗である。製作年代は18世紀代とみられる。

31～33は，網磁染付の丸碗である。コンニャク印判の五弁花文をもつ。32は四方襷文を施す。32，33の高台裏銘は渦福とみられる。製作年代は18世紀後半とみられる。

34は高台裏に，「大明年製」とみられる銘をもつ染付磁器丸碗。

35，36は口縁部内側に四方襷文を施す染付磁器丸碗である。製作本題は18世紀後半とみられる。

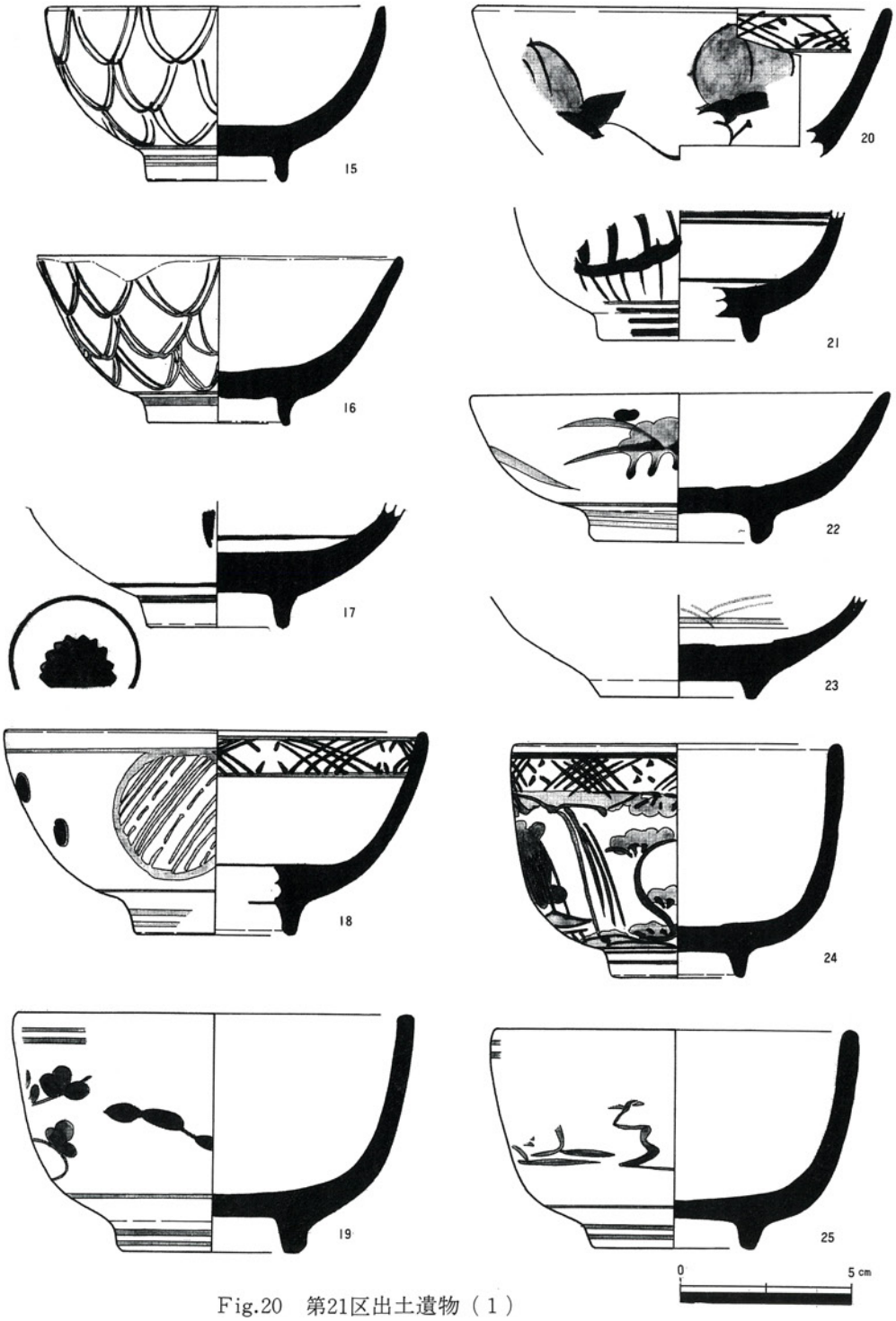


Fig.20　第21区出土遺物（1）

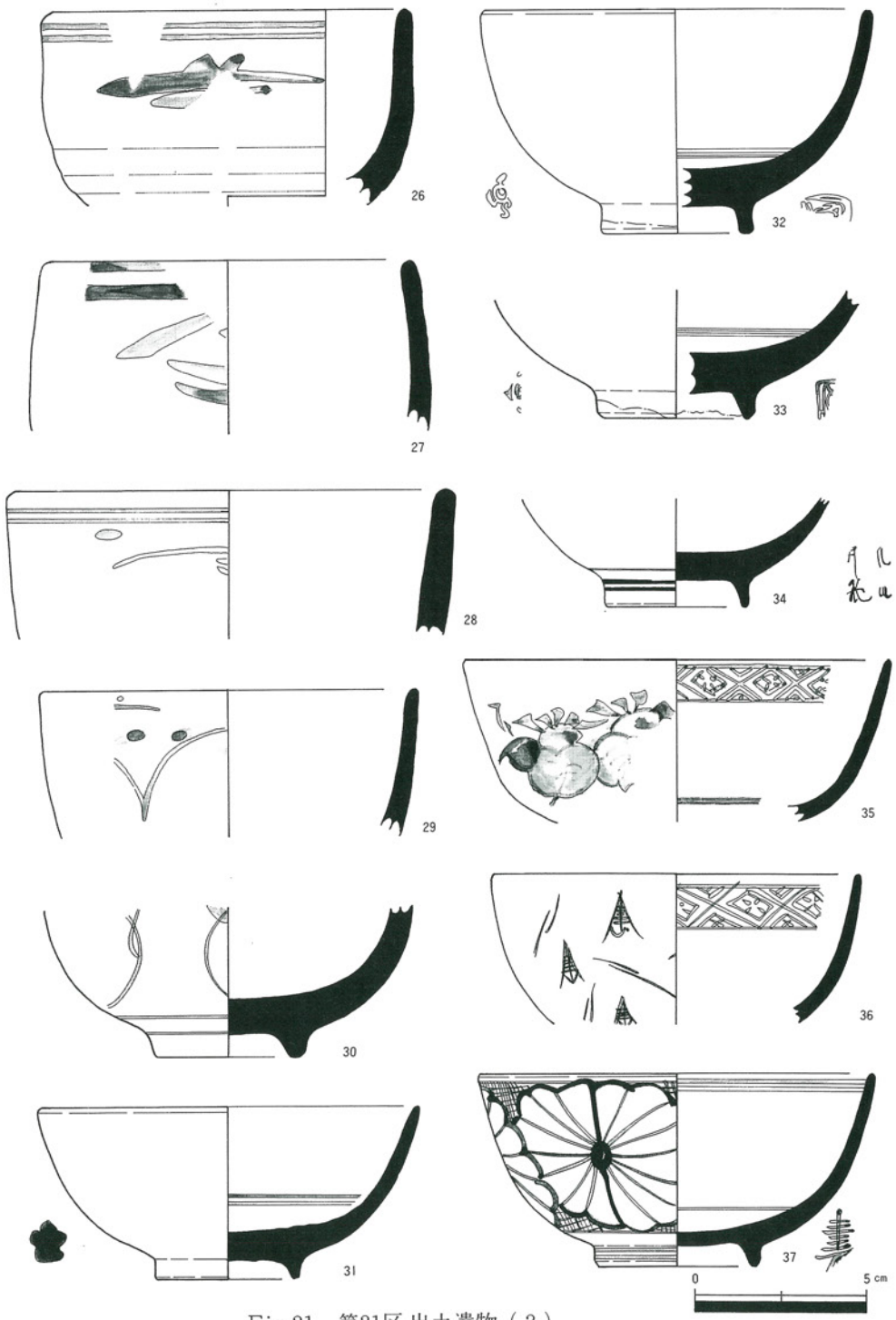


Fig.21　第21区 出土遺物（２）

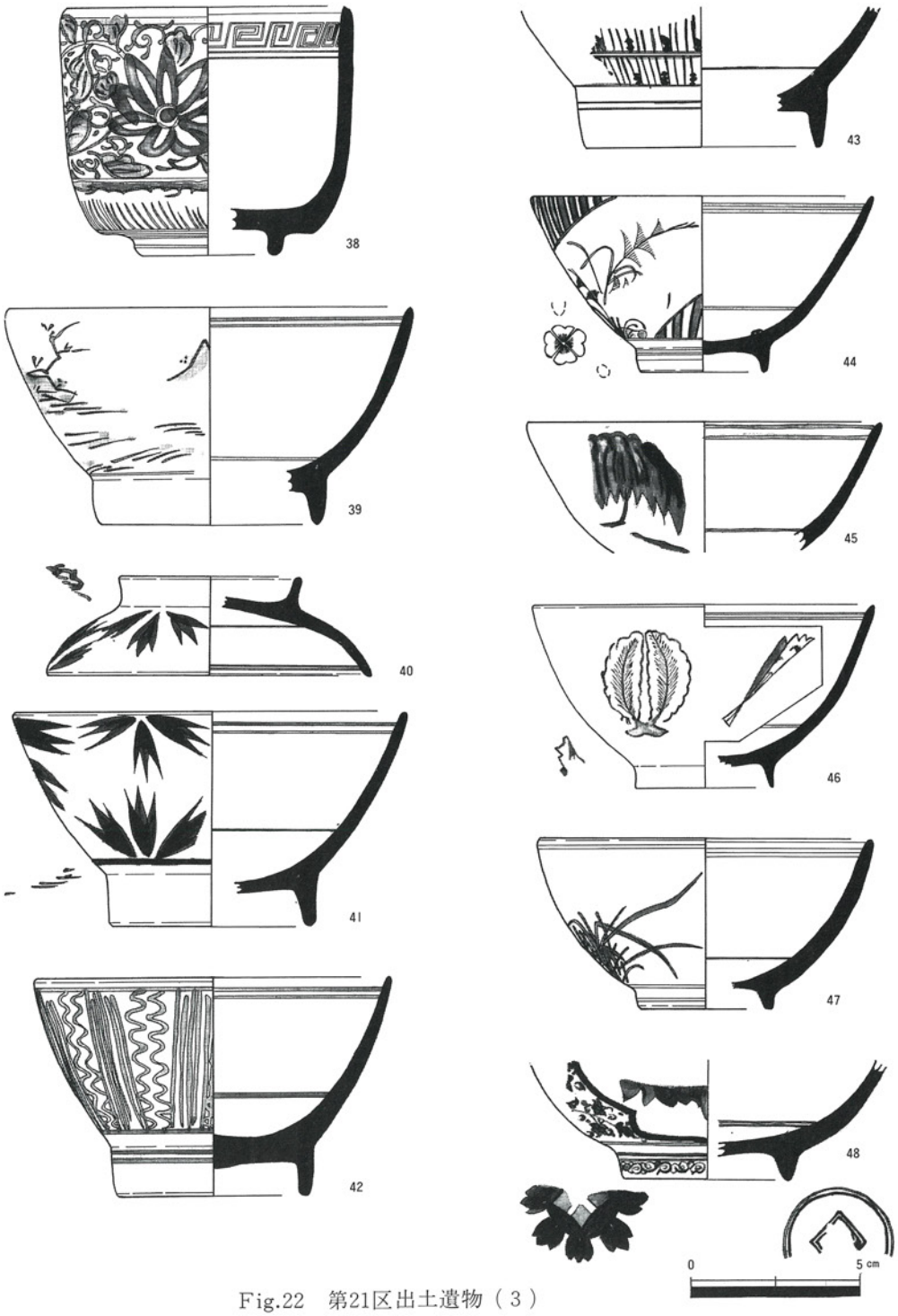


Fig.22　第21区出土遺物（３）

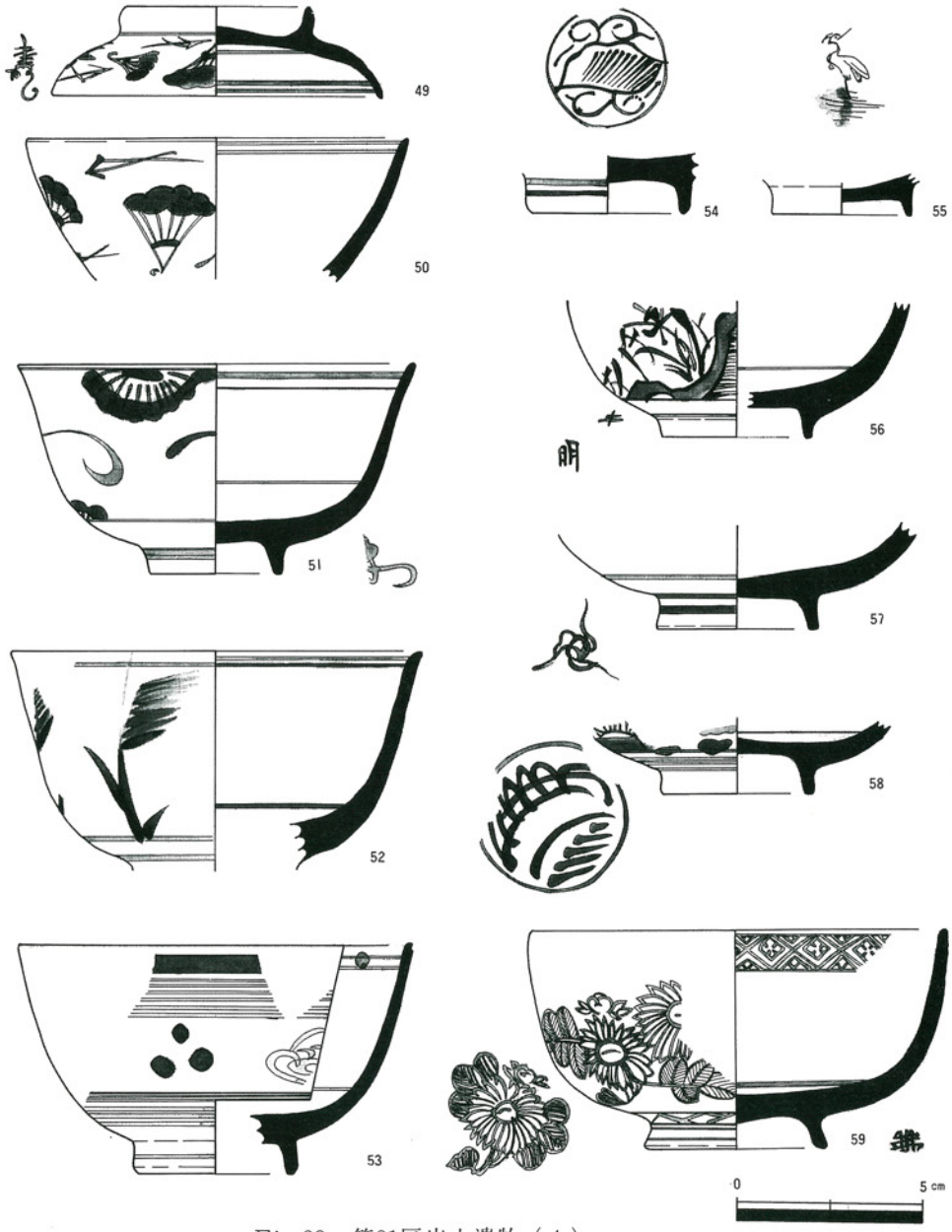


Fig.23　第21区出土遺物（４）

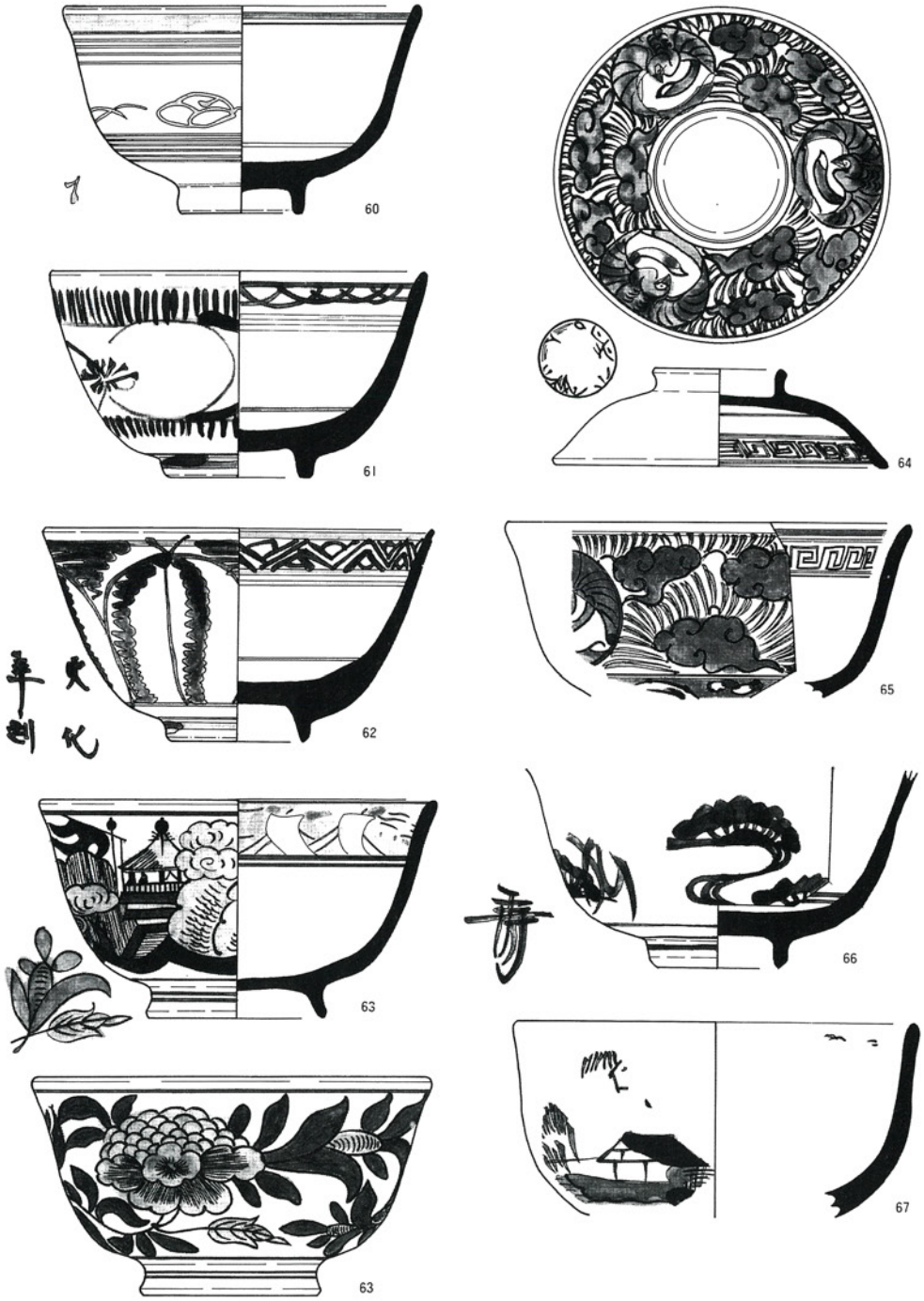


Fig.24　第21区出土遺物（５）

0　5 cm

37は高台裏に，くずし「寿」銘をもつ染付磁器丸碗。

38は筒状の形態をもつ染付磁器碗である。胴部に鉄線唐草図，口縁部に雷文帯を施す。

39〜43は染付磁器の広東碗とその蓋である。山水遠山図，撫子文，暦文，よろけ縞文などを施す。製作年代は18世紀末から19世紀初めとみられる。

44〜47，49，50は広東形の高台作りを小さくしたような形態をもつ染付磁器碗と

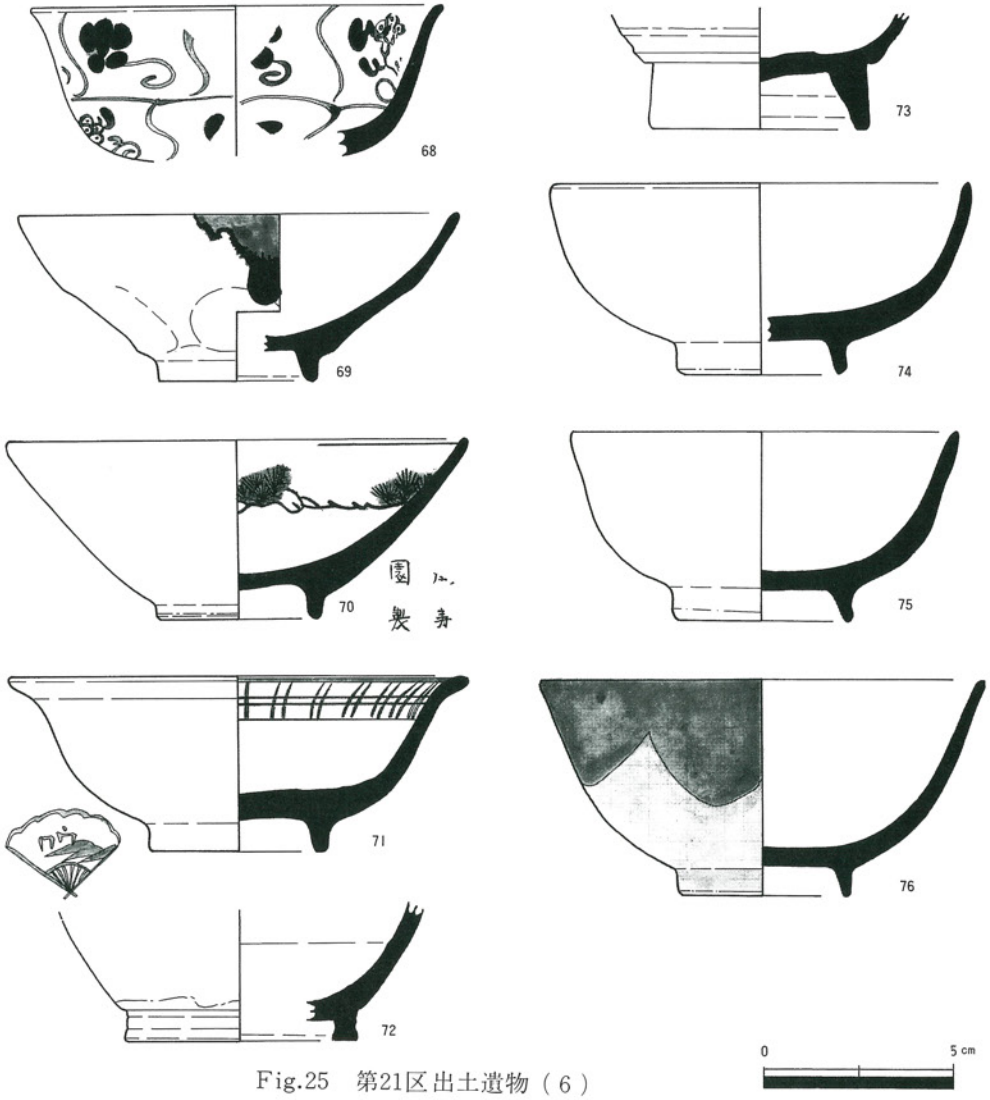


Fig.25　第21区出土遺物（6）

蓋である。製作年代は18世紀後半から19世紀初めとみられる。

59は内の深い形態をもつ染付磁器丸碗である。高台は撥状。口縁部内側に四方襷文を施す。胴部と見込には，細い線描きによる菊花図が認められ，製作年代は19世紀前半とみられる。

51，52，60～68は染付磁器の端りである。62の見込には，「大化年製」銘がみられる。63は撥状の高台をもつ。くすんだ呉須で唐草・窓絵山間楼閣図などを描く。67は内の深い形態をもつ。製作年代は19世紀前半とみられる。

69は腰部に花弁状面取りを施す型打ち成形の磁器碗である。胴部上位に茶褐色釉を流し釉状に施す。徳島市城ノ内遺跡に類例がみられる（松永　1988）。

71は陶器に類似した胎土をもつ磁器の端反り碗である。蛇ノ目釉ハぎを施す。口縁部内側に格子文，見込に扇文を暗緑色釉にて描く。佐賀県広瀬向窯出土例に文様が類似している（註２）。

７４～７６は施釉陶器の汁器である。

ⓑ　猪口　（Fig. 26・27）

77～79は筒形の猪口である。77はわずかに端反りする形態をとる染付磁器である。口縁部内側に四方襷文を施す。78はわずかに内傾する。製作年代は18世紀末から19世紀とみられる。

80～83は小丸碗形の猪口である。83は高い高台をもつ磁器であり，その他は染付磁器である。81と82はセットであり，三人の人物図を描く。

84～87は端反りする猪口である。84は銅締状の形態もつ。85～87は紐文を描く。淡黄褐色系のうすい口銹を施す。愛知県かみた窯製とみられる。（註３）

88～90は小丸碗形の染付磁器猪口である用途は盃とみられる。

91は端反りする染付磁器猪口である。用途は盃とみられる。

92，93は外開きする筒形の磁器猪口である。

94～96は端反りする施釉陶器猪口である。貫入がみられる。94の高台裏に墨書を認めるが，意味不詳。

97，98は腰ぶ鋭角的につくり出す施釉陶器の猪口である。

ⓒ　仏餉具　（Fig. 27）

99は染付磁器の仏餉具である。低い脚部に小丸碗形を組み合せた形状をもつ。

100，101は脚部を欠失した仏餉具とみられる。101は腰部を花弁状とする型打ち

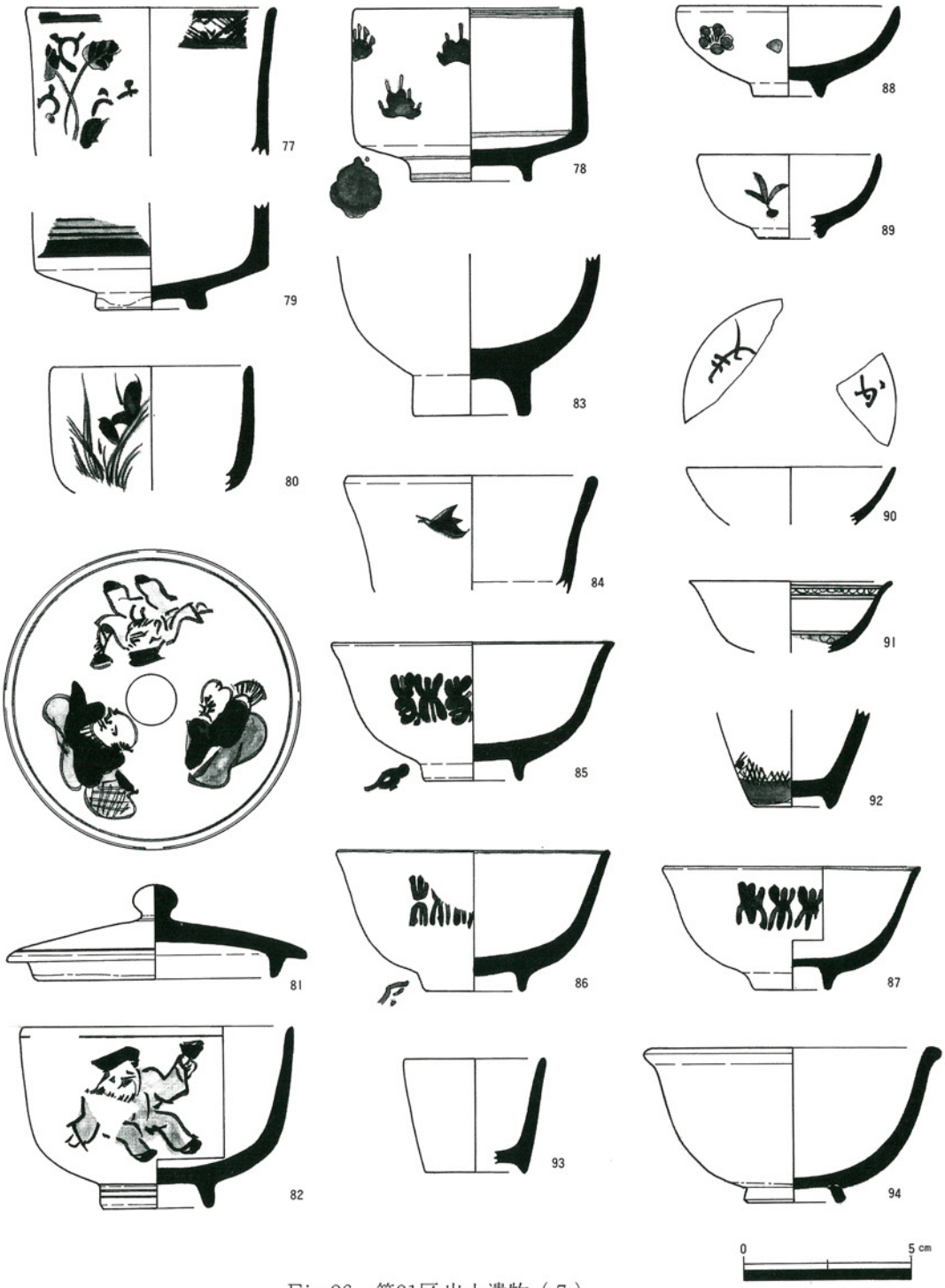


Fig.26　第21区出土遺物（７）

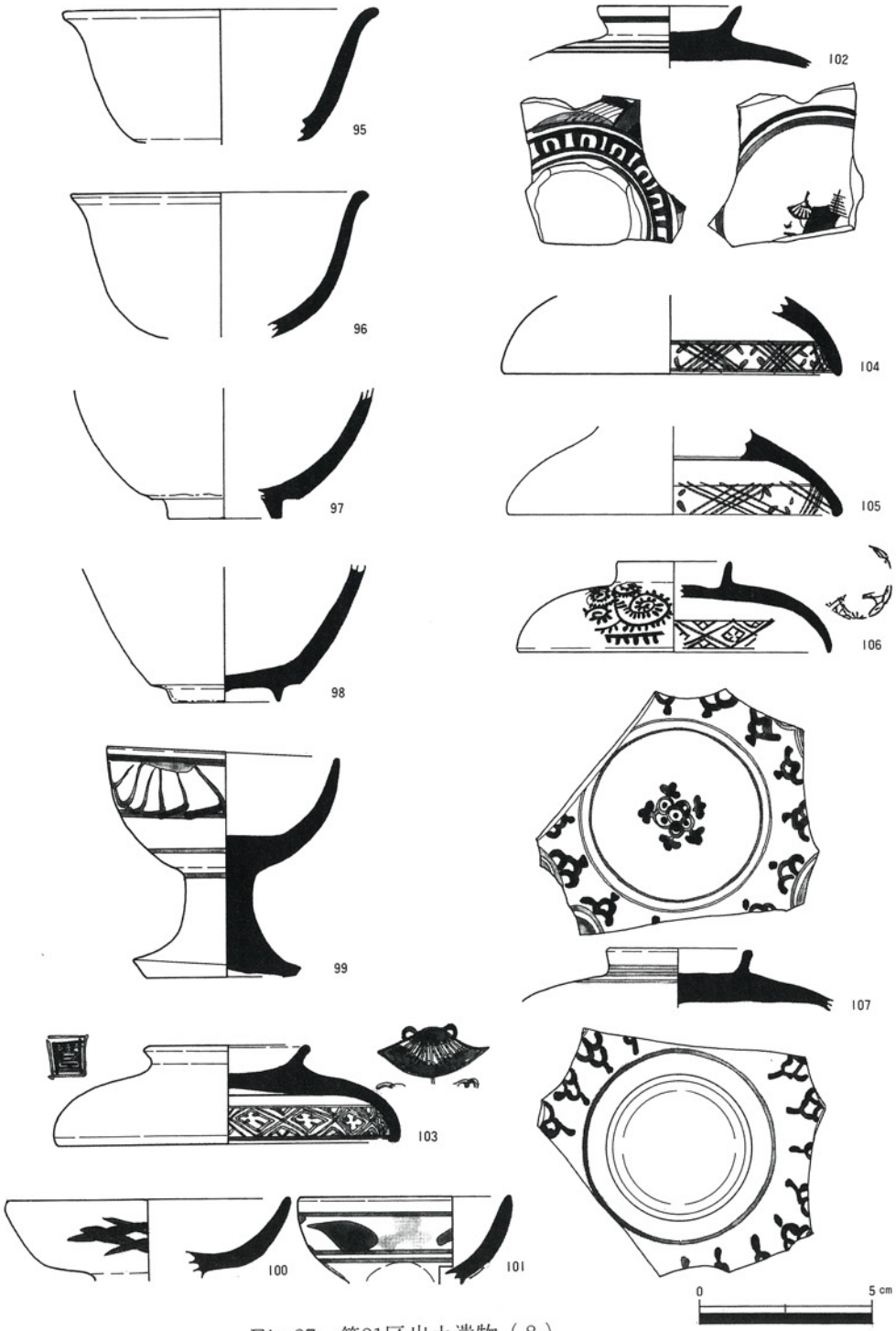


Fig.27　第21区出土遺物（８）

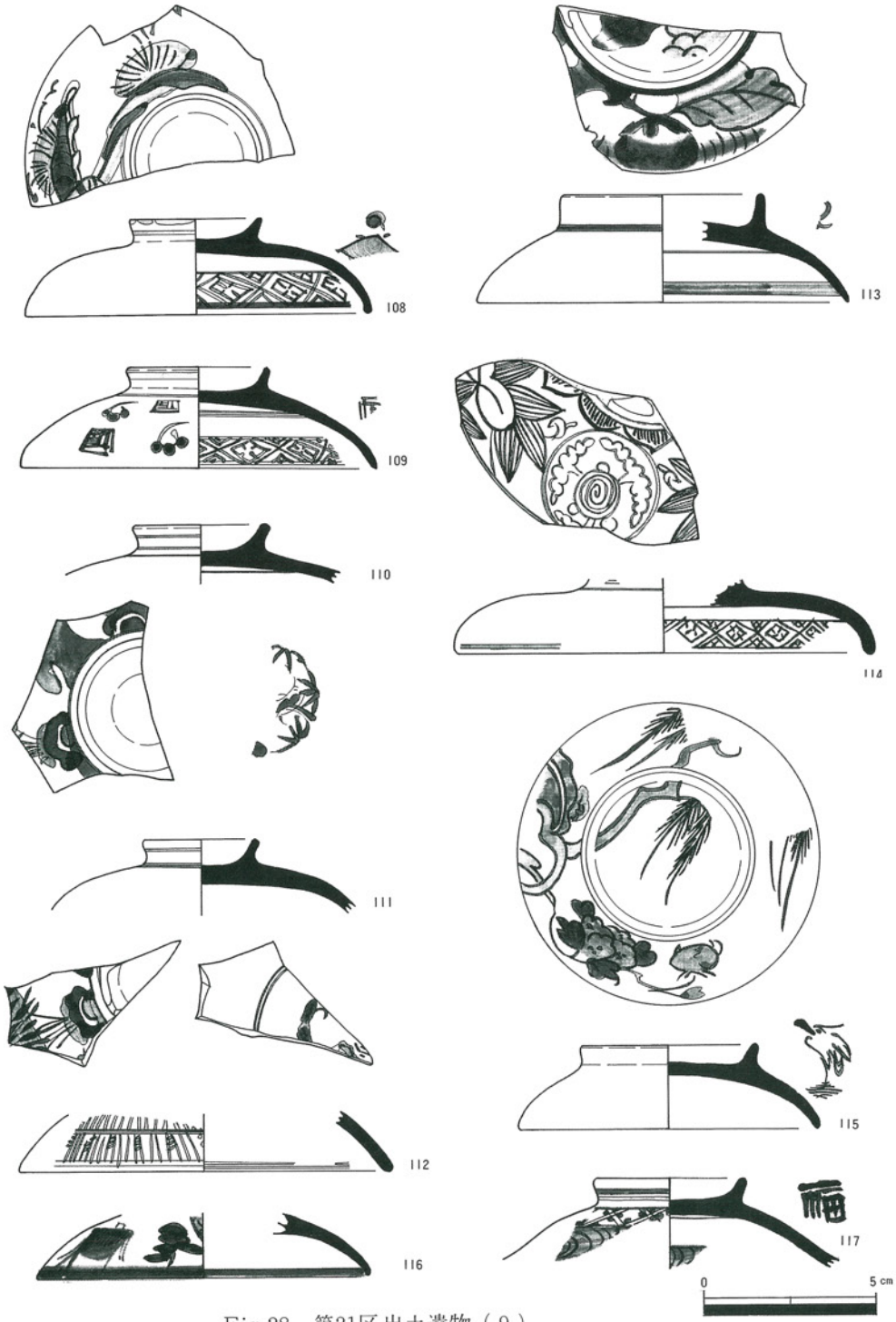


Fig.28　第21区出土遺物（９）

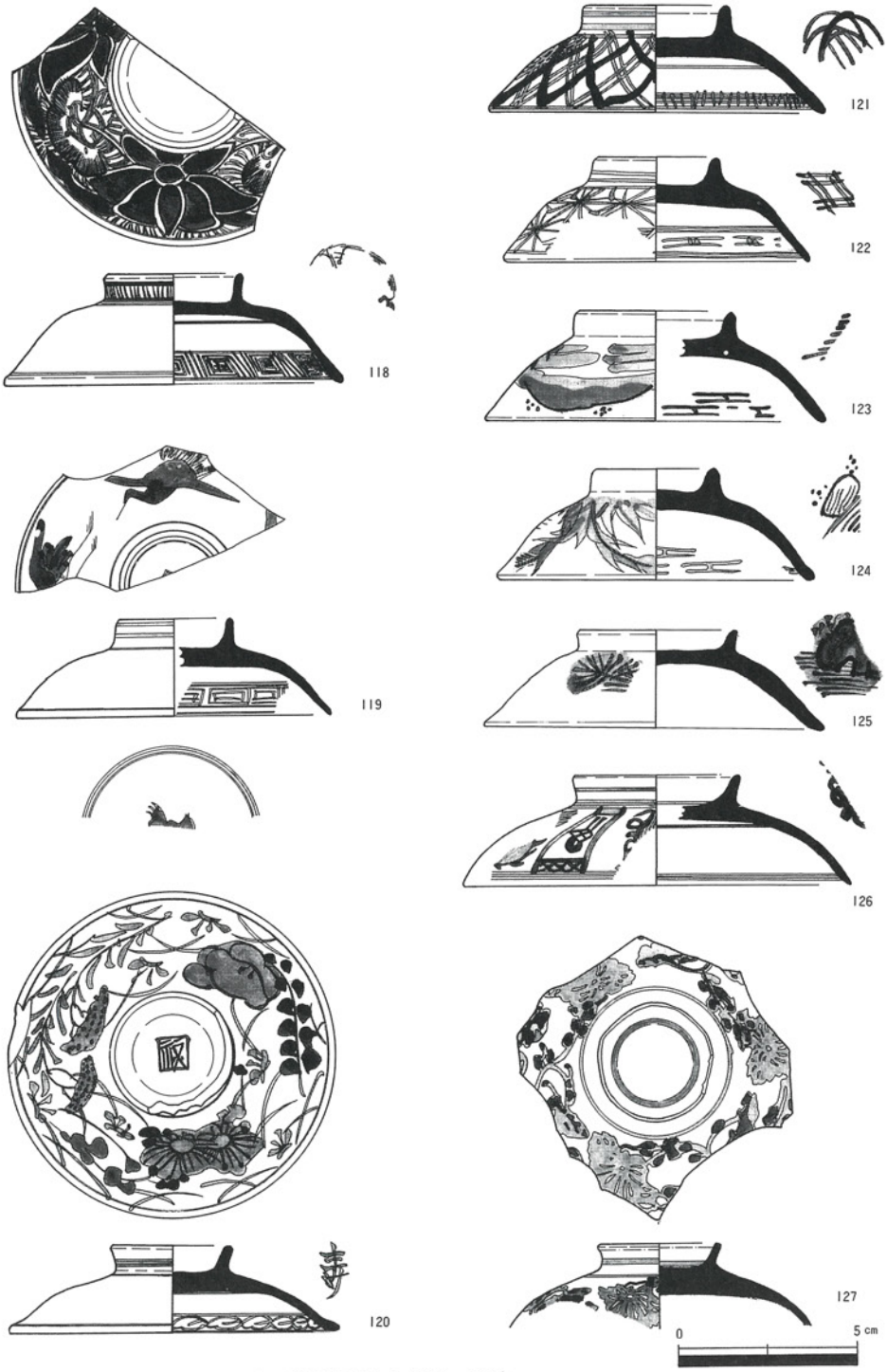


Fig.29　第21区出土遺物（10）

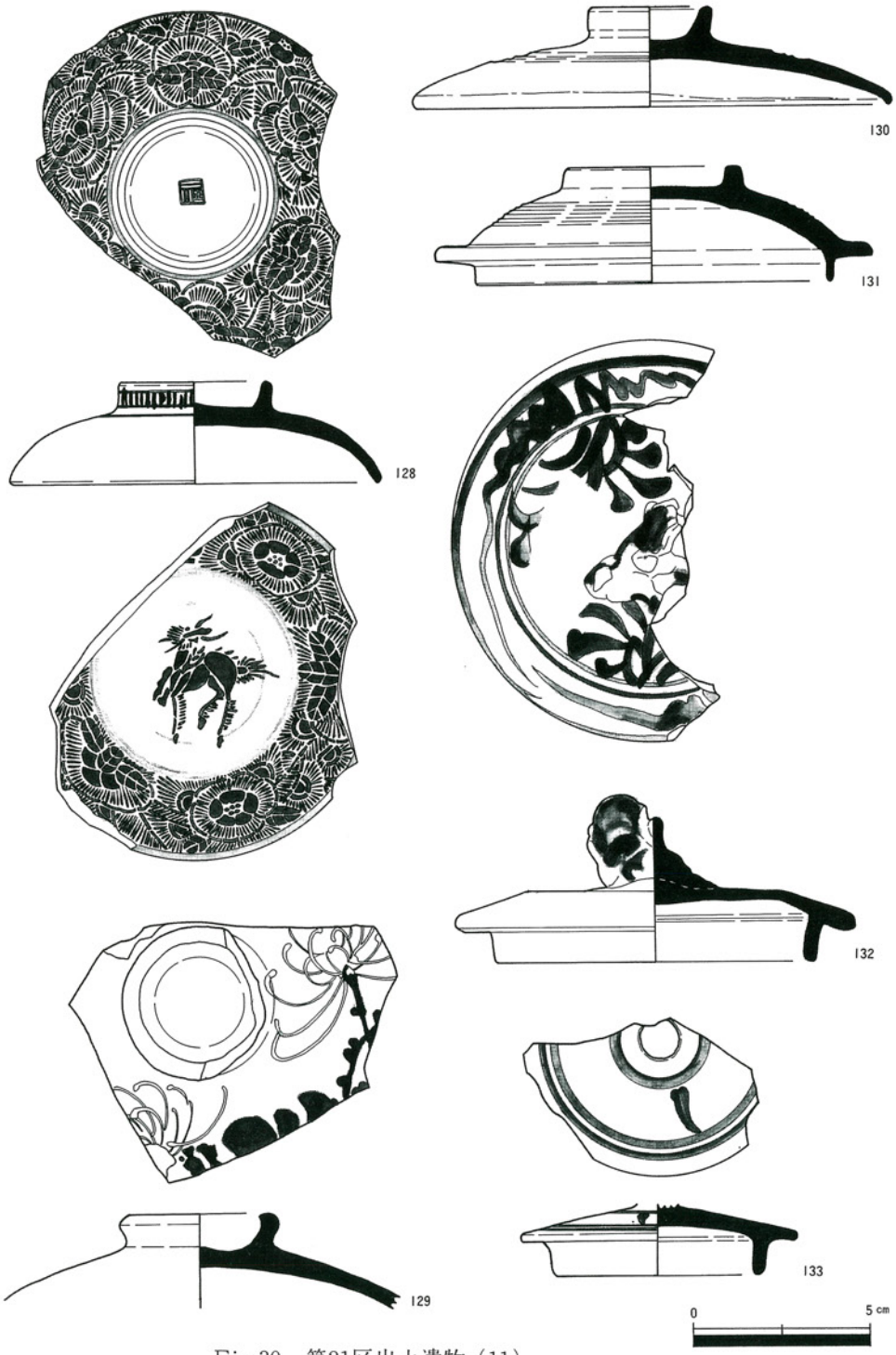


Fig.30　第21区出土遺物（11）

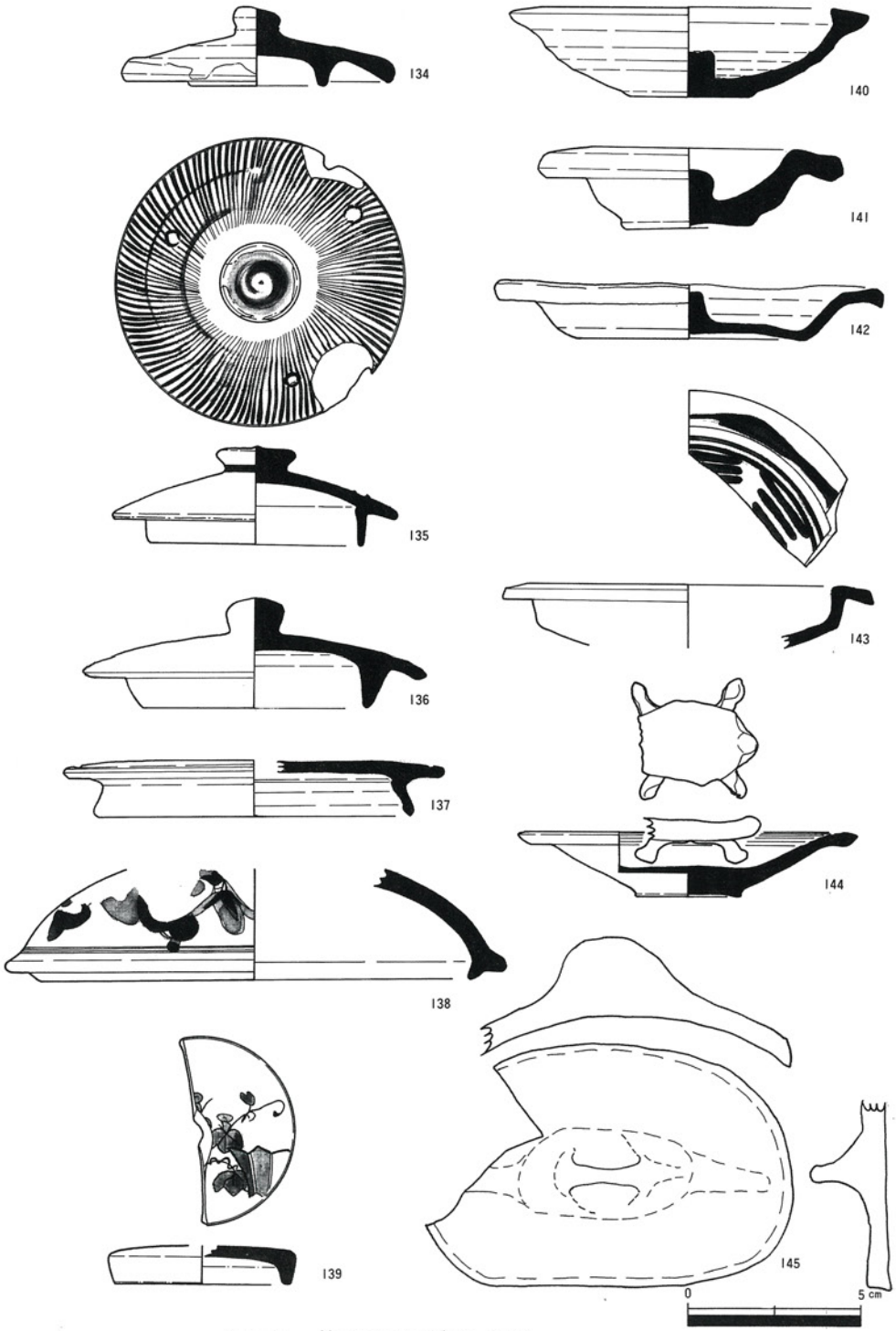


Fig.31　第21区出土遺物（12）

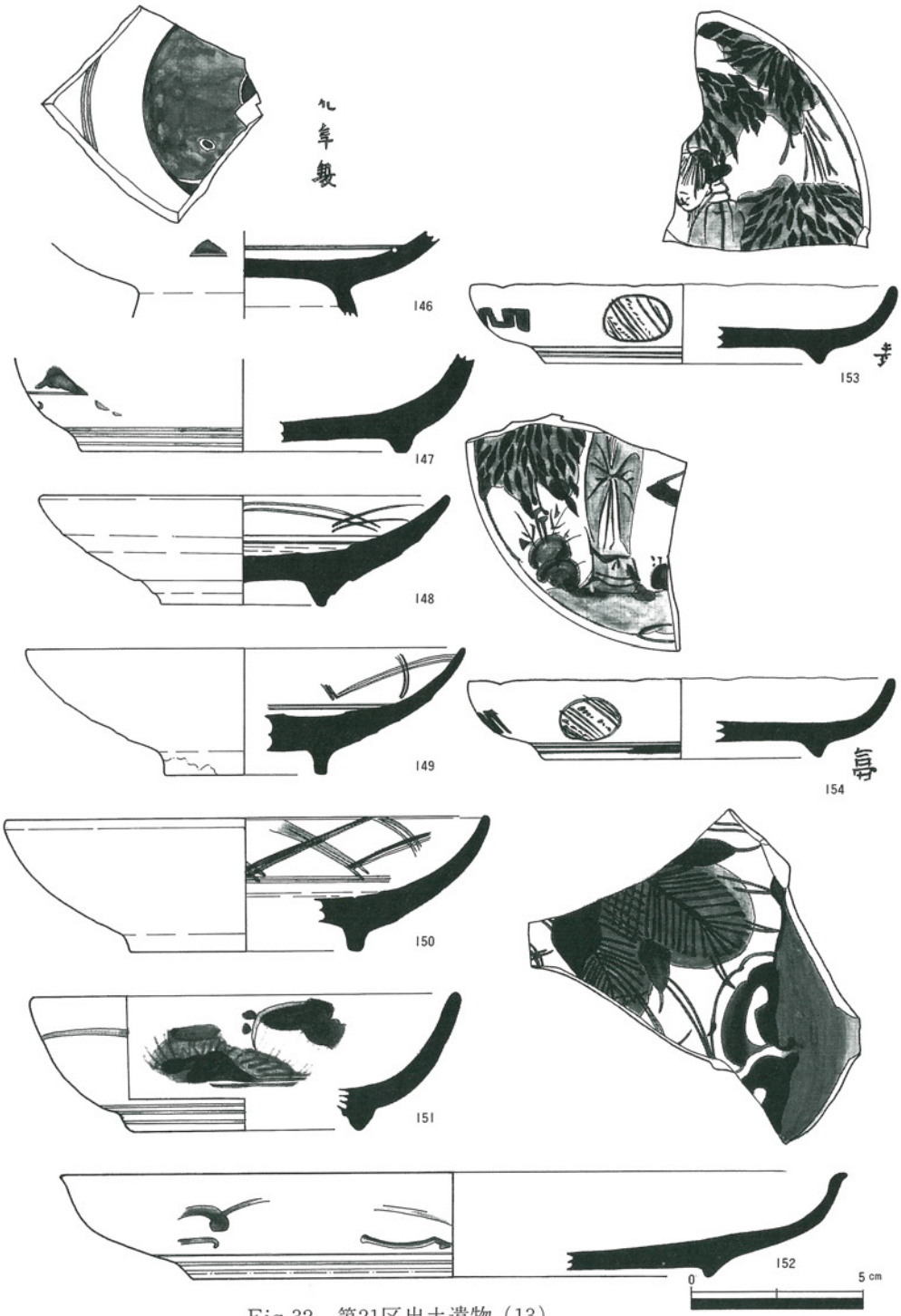


Fig.32　第21区出土遺物（13）

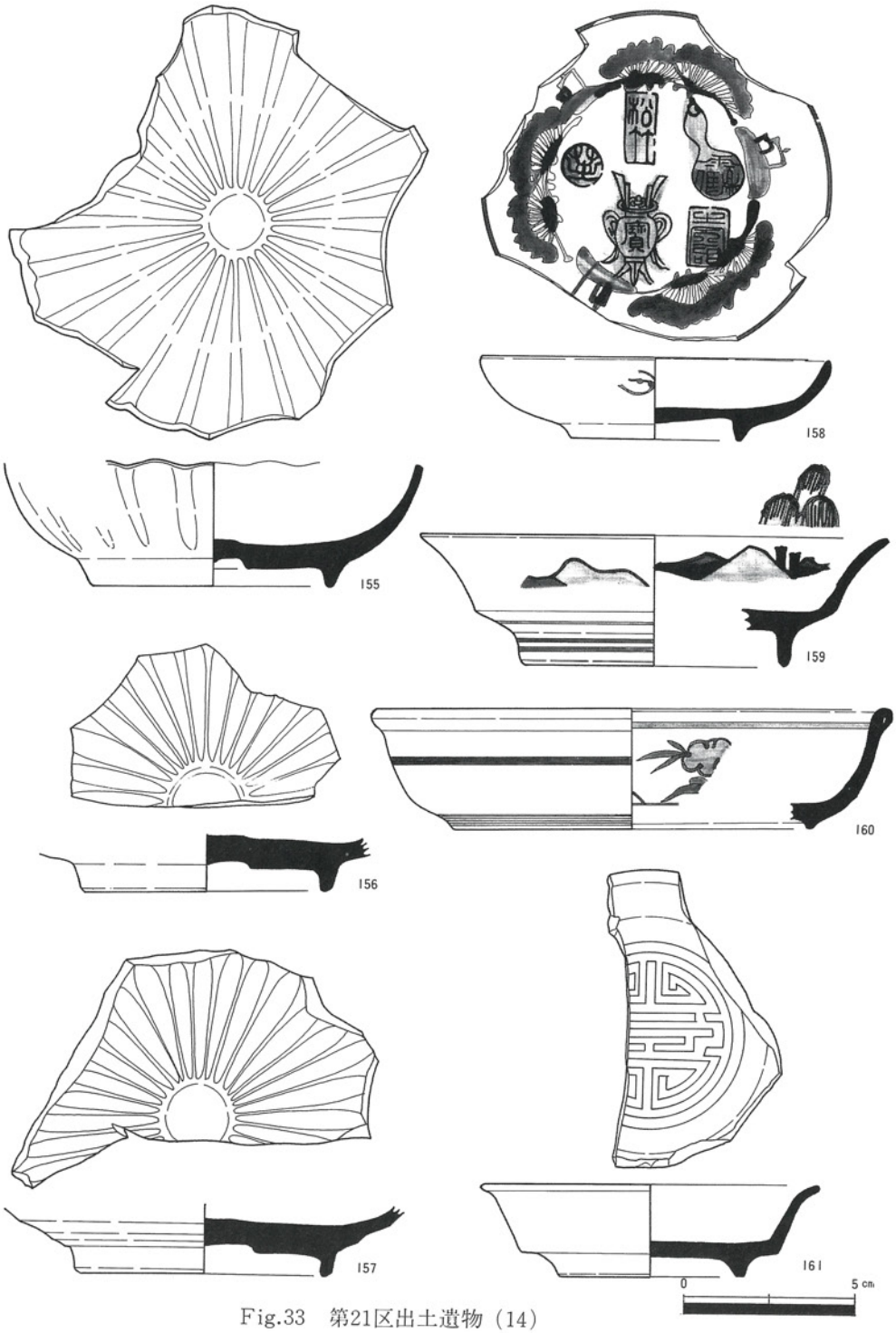


Fig.33　第21区出土遺物（14）

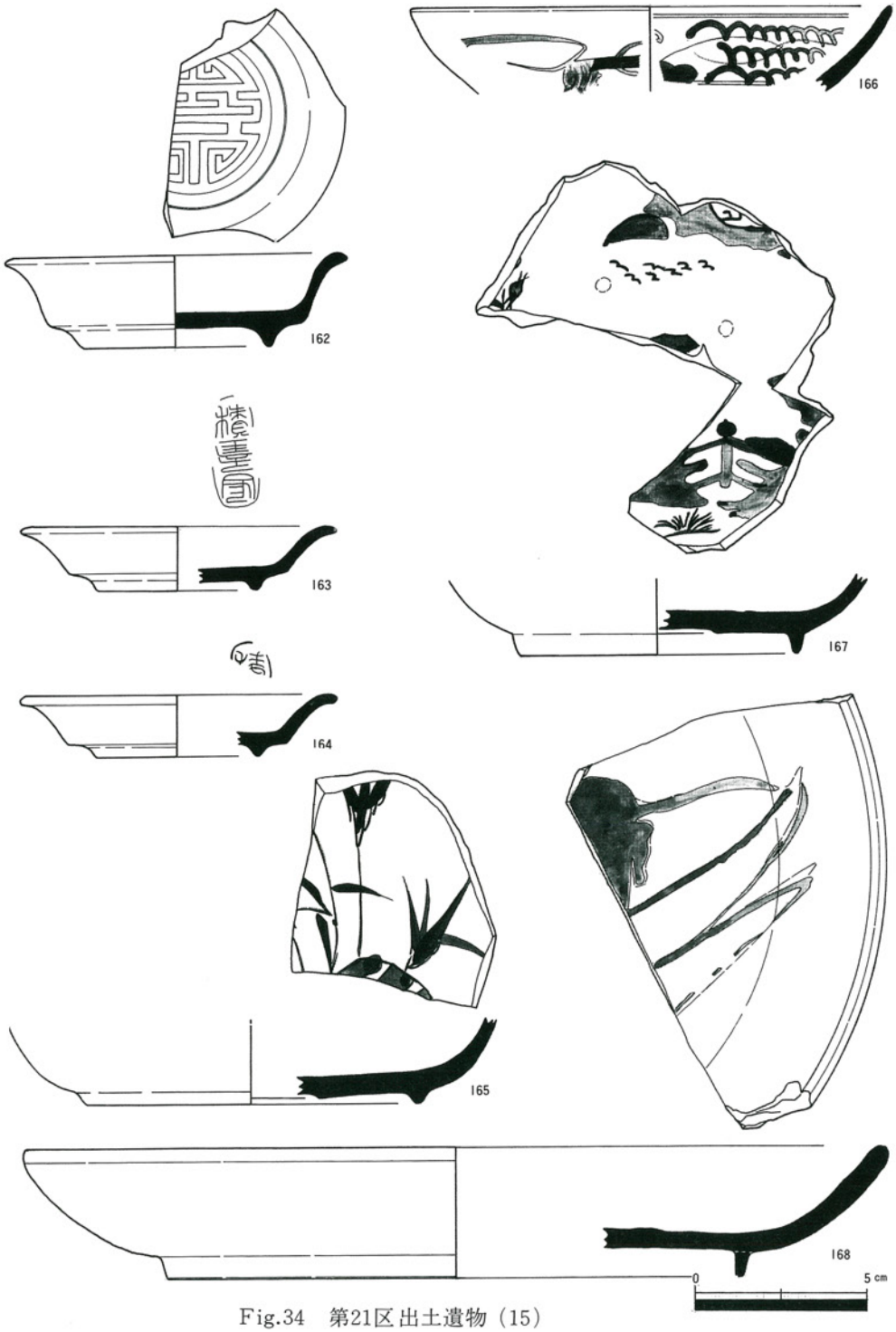


Fig.34　第21区出土遺物（15）

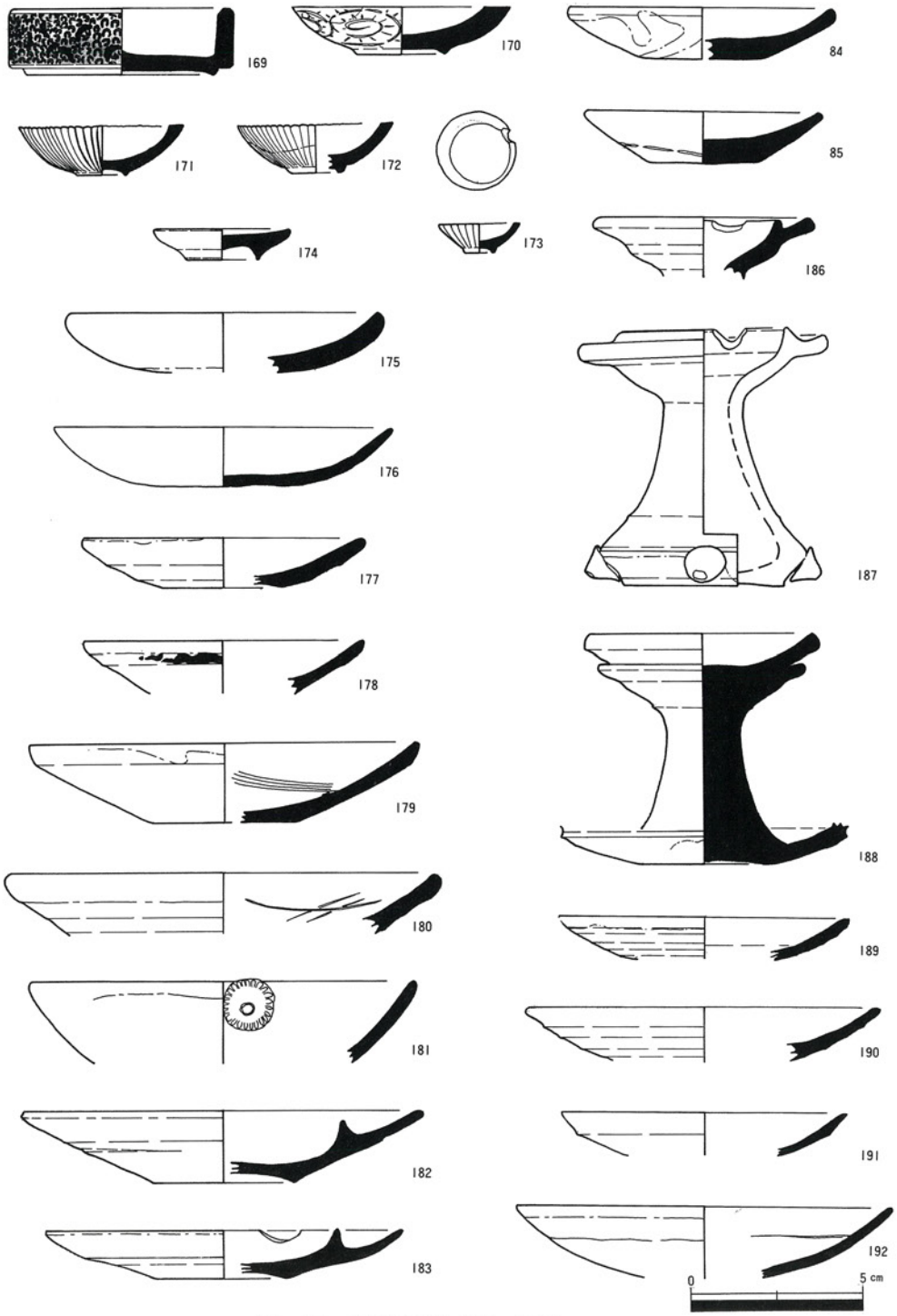


Fig.35　第21区出土遺物（16）

成形である。赤絵菊花文を描く。

ⓓ 蓋 (Fig. 27〜31)

102〜116は高台状のつまみをもつ山蓋である。103〜105は青磁染付であり，その他は染付磁器である。102〜111の製作年代は，18世紀後半とみられる。114の天井部には，細い線描きによる唐草文が認められ，製作年代は19世紀前半とみられる。

117〜126は高台状のつまみをもち，端反りする染付磁器の山蓋である。製作年代は19世紀前半とみられる。

129・130は高台状のつまみをもつ施釉陶器の山蓋である。

131は高台状のつまみとかえりをもつ施釉陶器の山蓋である。

132，137はつまみとかえりをもつ陶器の山蓋である。132には獅子形のつまみを貼り付け，天井部に呉須で草花文を描く。133〜136は擬宝珠状つまみを有する施釉陶器である。137は擬宝珠状つまみを有するとみられる無釉陶器。

139は染付磁器の合蓋である。

140〜144は落蓋，である。140，141は擬宝珠状つまみをもつ施釉陶器。143は呉須による文様を描く施釉陶器。144には亀形のつまみを貼り付け，淡オリーブ褐色釉の上に白色釉を鎬状に施す。

ⓔ 皿 (Fig. 32〜35)

146は撥状に開く高い高台をもつ染付磁器の皿である。高台裏に「□□□化年製」銘を有する。不明3文字の一部が遺存するが，「大明成」の可能性はない。製作年代は17世紀末以降ともみられる。

152はわずかに端反りする染付磁器の大皿である。口縁部は一部が遺存するにすぎないが，菊皿とみられる。

148〜151は，くらわんか手の染付磁器皿である。148〜150は，見込蛇ノ目釉ハギとし，二筆斜格子文を描く。製作年代は18世紀後半とみられる。

153，154は染付磁器の菊皿である。高台裏に「富」銘が遺存し，「富貴長春」の一部ともみられる。

156，157は，見込に菊花文を押陰刻する磁器の皿である。蛇ノ目凹形笄であり，155は菊皿である。155の押陰刻菊花文は，浅くしかも型がくずれている。

158は染付磁器の皿である。見込に，瓢箪，鼎とともに文字を押印する。

159，160は端反りする鉢状形態をもつ染付磁器の皿である。160は玉縁状に口縁

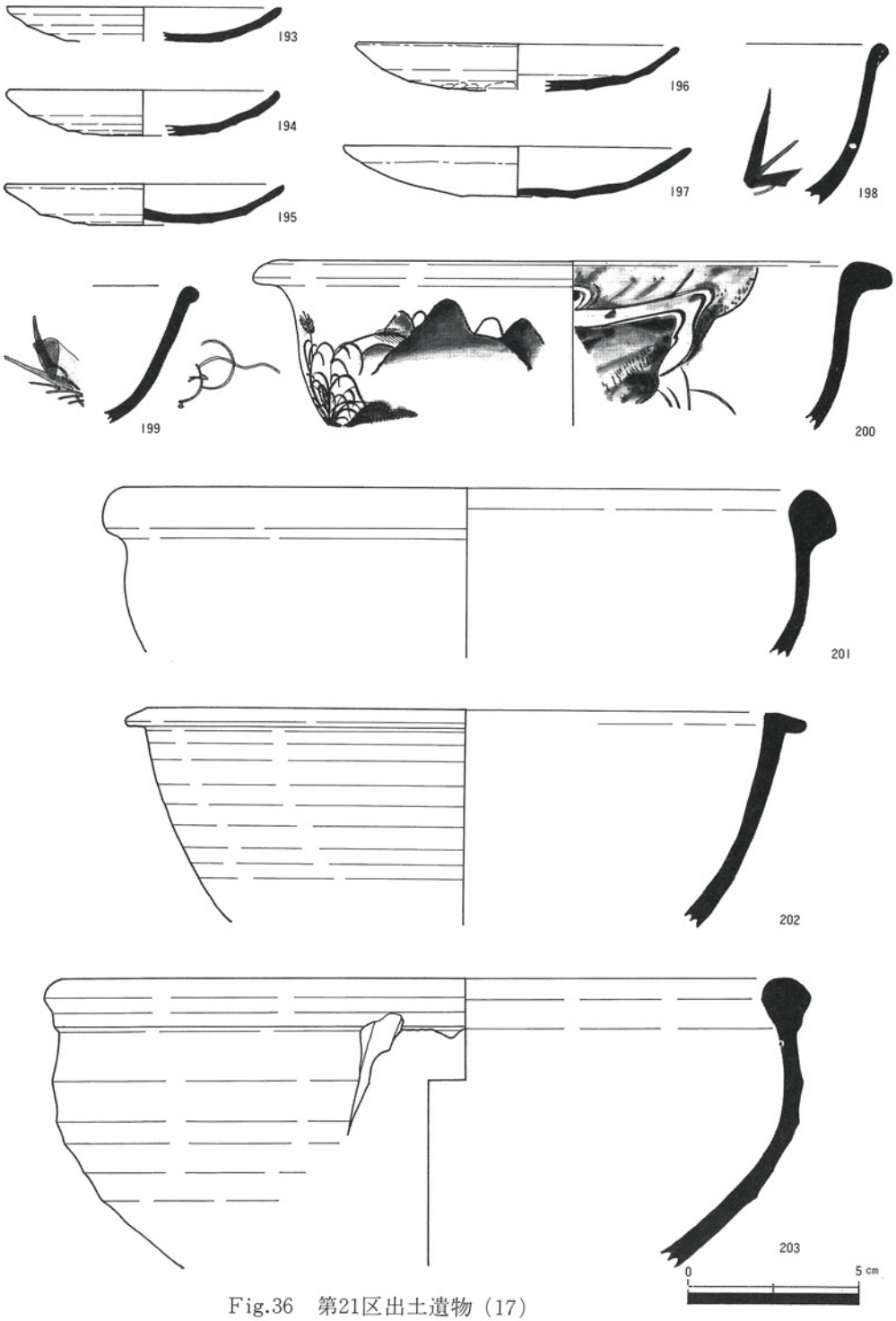


Fig.36　第21区出土遺物（17）

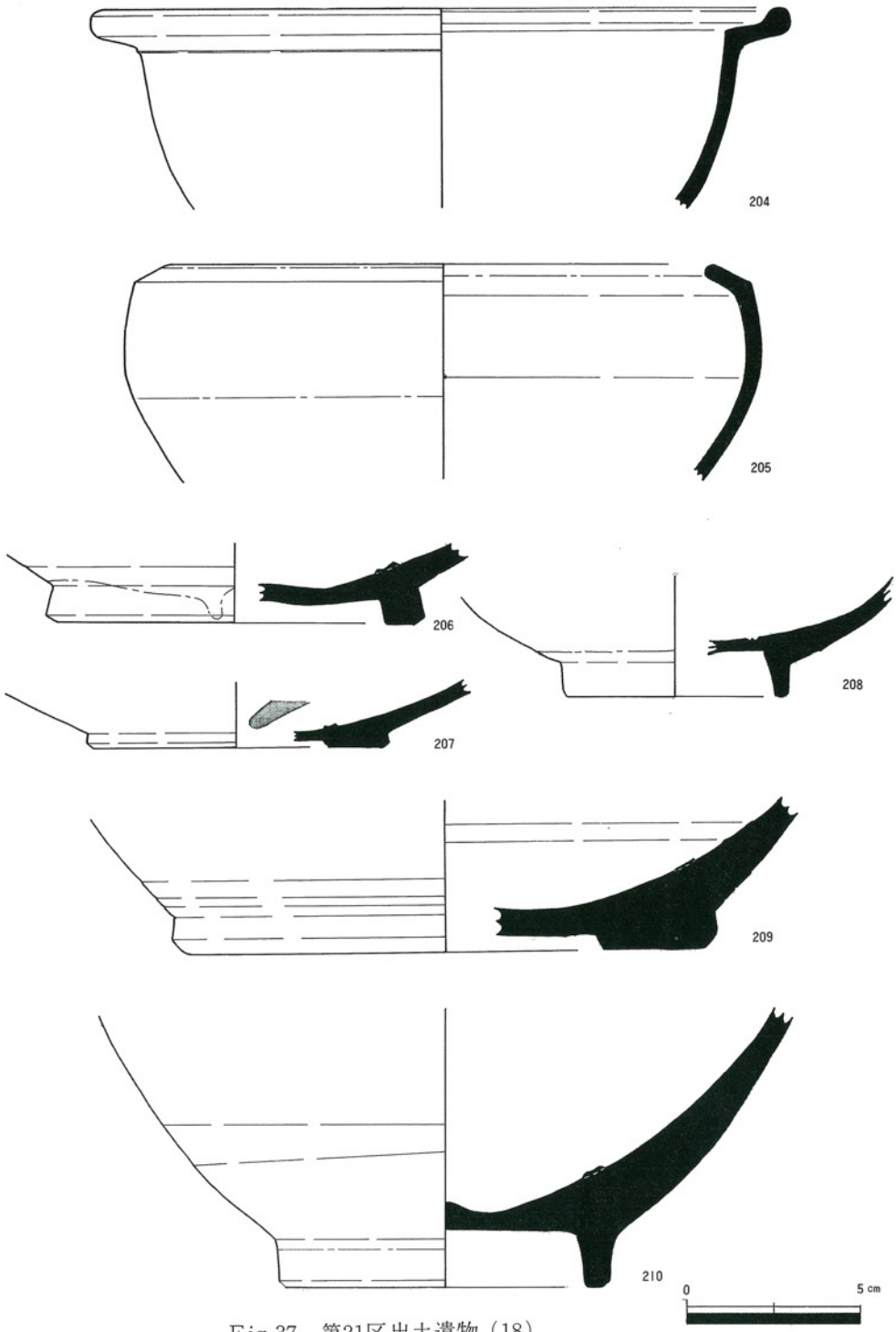


Fig.37　第21区出土遺物（18）

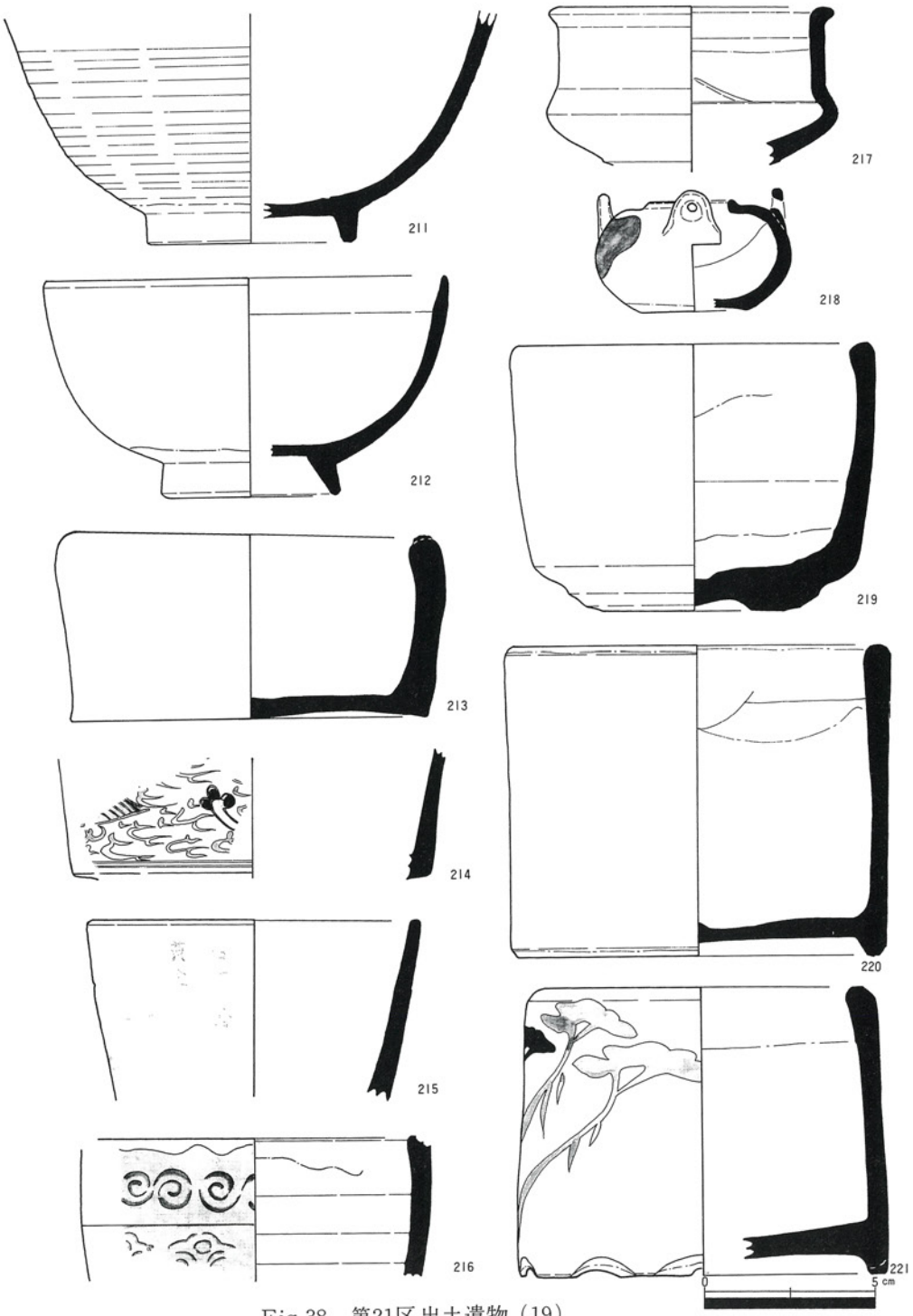


Fig.38　第21区出土遺物（19）

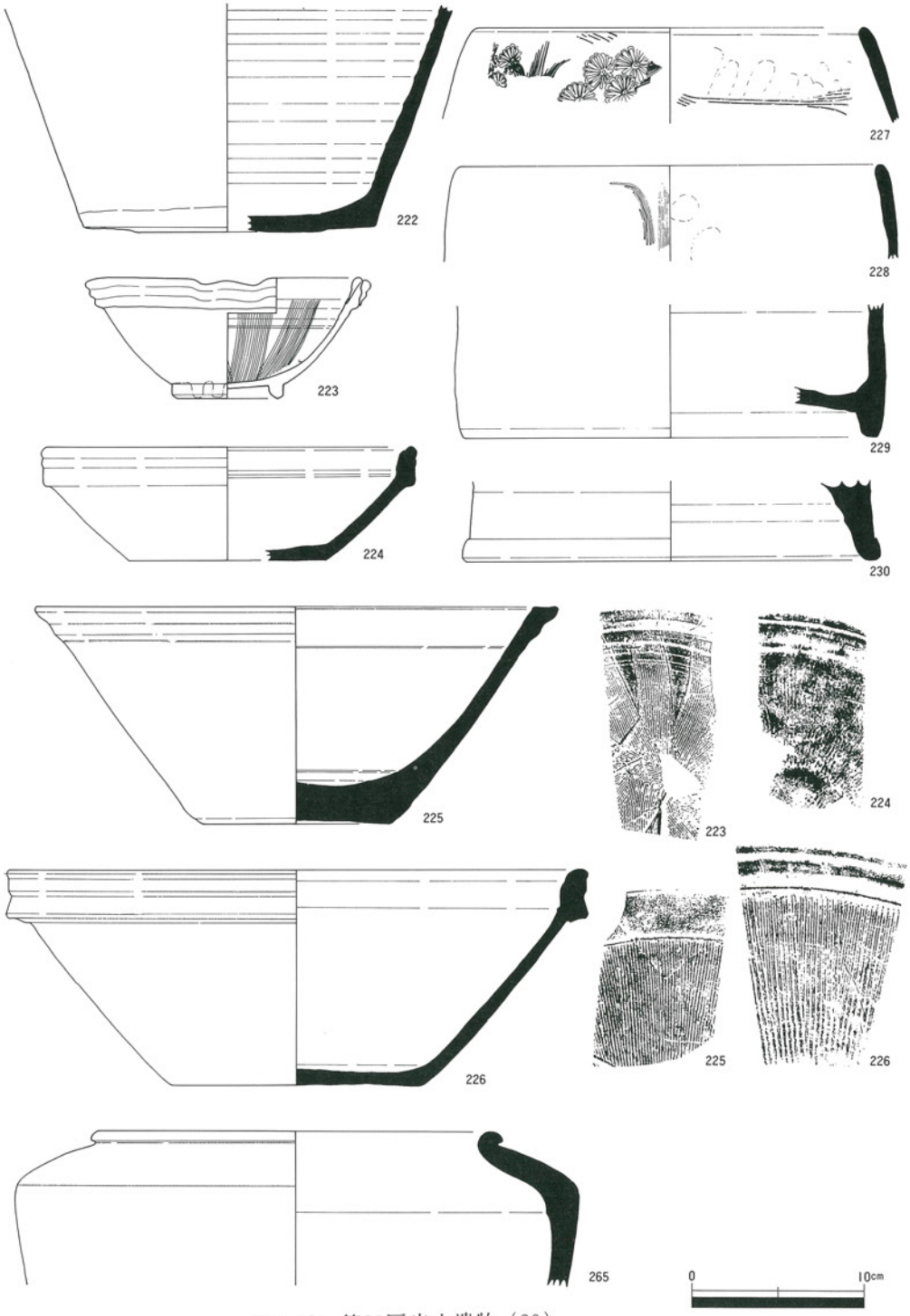


Fig.39　第21区出土遺物（20）

をつくりだす。

161～164は端反りする磁器の皿である。型打ち成形とみられる。見込に文字を押印陰刻する。

165～167は染付磁器の皿である。167は見込にハリ支え痕，蛇ノ目凹形高台。　168は施釉陶器の大皿である。見込には，押印陽刻で鼠図を描き，鼠に薄墨色の釉をかける。

169は染付磁器の蓋物である。浅い筒形であり，型紙摺の松葉とみられる文様を施す。

170～174は磁器の紅皿である。174以外は型打ち成形である。170は陰刻蛸唐草文を施す。171～173は貝殻状の形態をとる。173は口径2.4cm，器高0.85cmときわめて小さい。174の見込は浅い。

ⓕ　燈明皿　（Fig. 35・36）

175～181は施釉陶器の油皿である。179，180は見込に沈線を施し，181の口縁部の内側に菊花文を押印した円形浮文を貼りつけ，美濃・瀬戸系とみられる。

182，183は施釉陶器の油皿である。見込に断面三角形状の突帯をめぐらす。183の突帯には半月形の切りこみが1箇所遺存している。

184，185は施釉陶器の油皿である。脚付油受皿とのセットとみられる。

186～188は施釉陶器の脚付油受皿である。187は完形品である。口縁部内側に断面三角形状の突帯をめぐらし，半月形の切りこみを1箇所に入れる。188は油皿との合成形とみられる。脚底部を皿状とする。

189～197は施釉陶器の油皿である。薄手につくられ，素地は赤色系が多い。口縁部内外に煤が色濃く付着している。

ⓖ　鉢　（Fig. 36～39）

198～200は染付磁器の鉢である。端半りの形状をとり，198と199は玉縁状口縁とする。

201～205は施釉陶器の鉢である。203は玉縁状口縁とする片口鉢。

210は施釉陶器の鉢である。赤褐色の素地に暗褐色の釉をかける。見込には，さらに白泥によるハケ目状文様を施す。18世紀前半の唐津とみられる。

207，209は低く幅広い高台をもつ施釉陶器の鉢である。

213は施釉陶器の鉢である。平底で半筒形の粗製品である。鶏の水飲み用器とみ

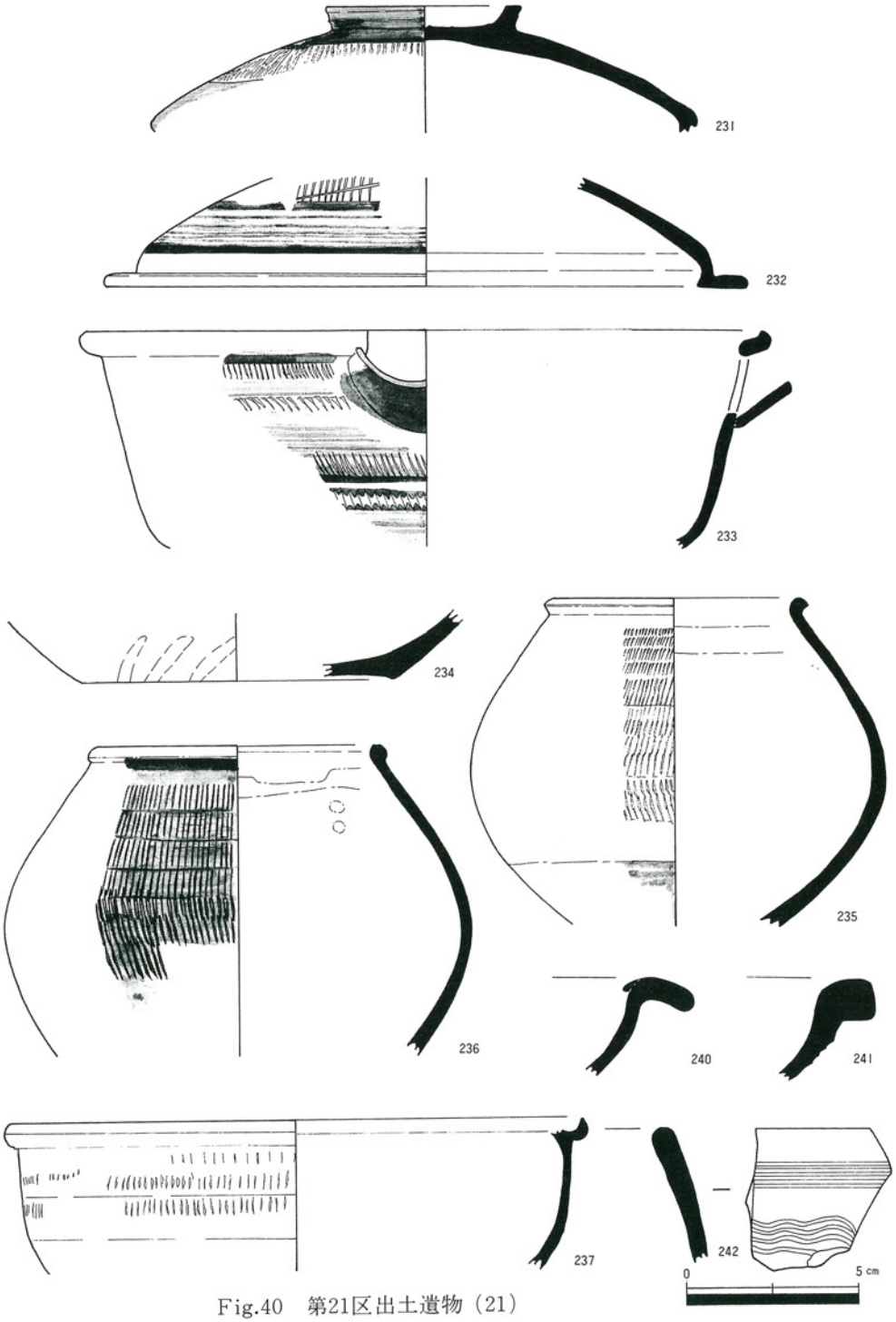


Fig.40　第21区出土遺物（21）

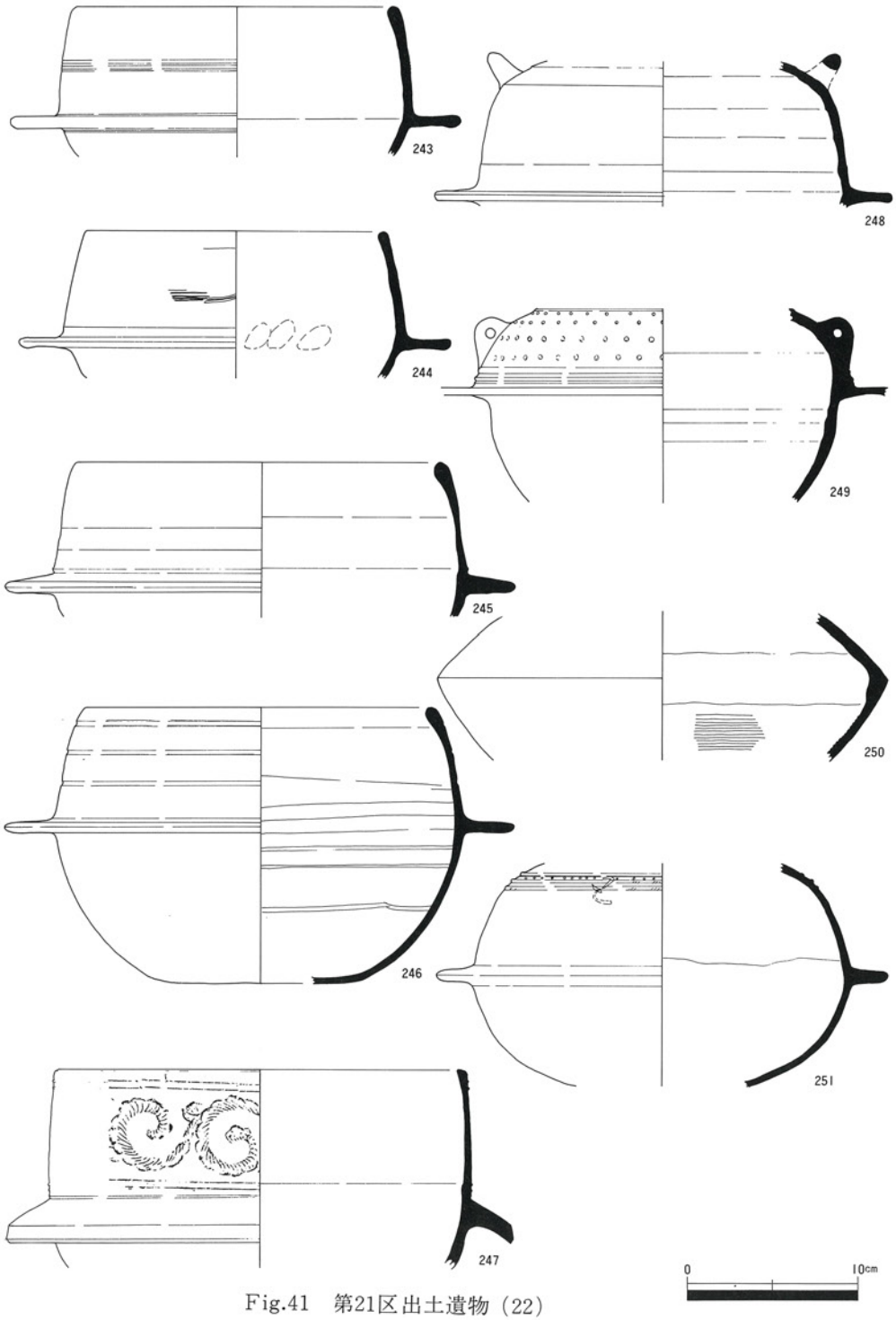


Fig.41　第21区出土遺物（22）

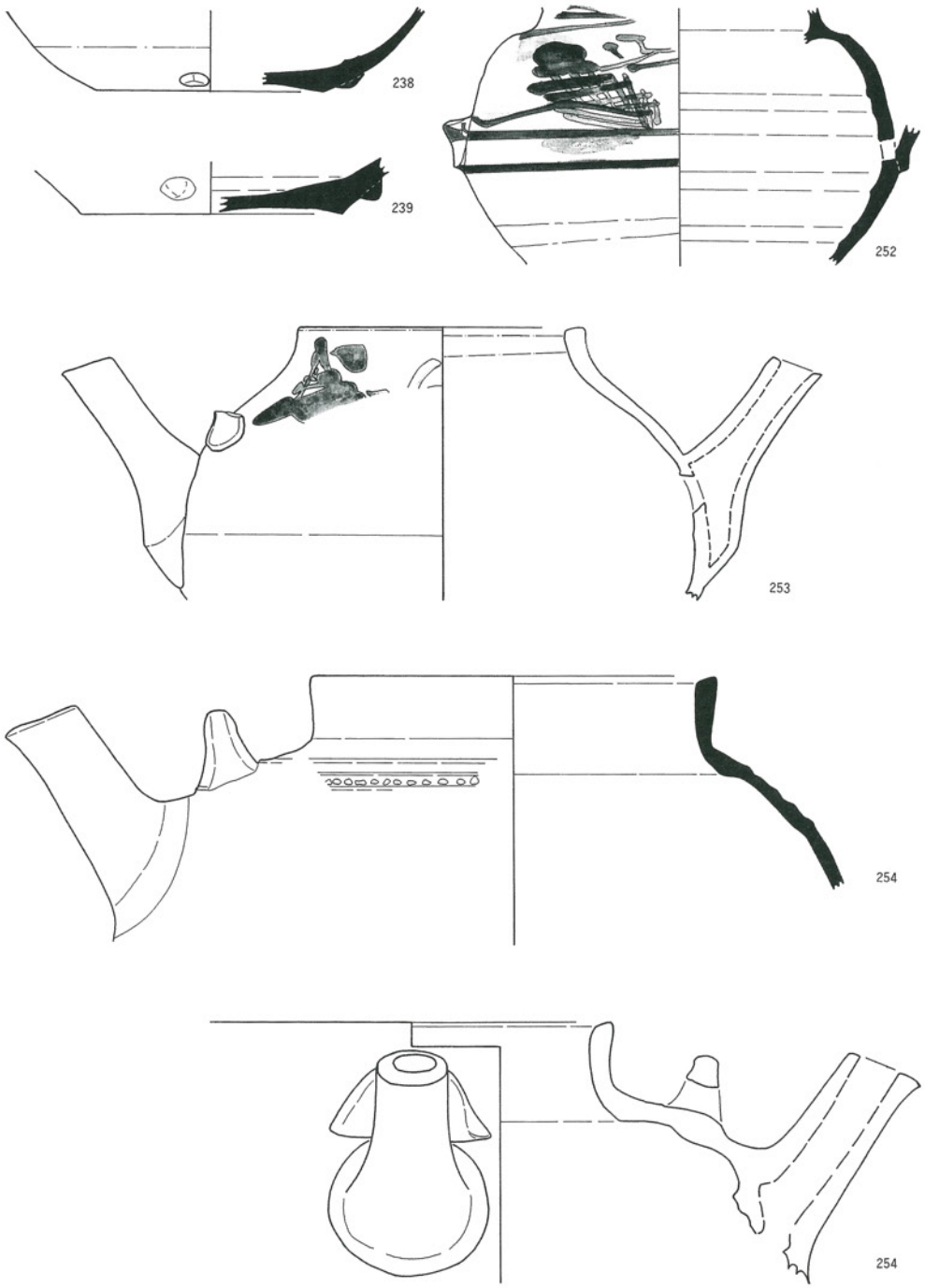


Fig.42　第21区出土遺物（23）

られる（豊田　1969）。礎石建物跡ＳＢ－03出土（634）に類似する。

222は施釉陶器の大鉢である。底部を除いて，暗赤褐色の釉をかける。

223～225は施釉陶器の擂鉢である。223は片口の形態をとり，15条単位の擂目を間隔をおいて施す。224，225は擂目を重ね合せて施す。

226は無釉陶器の擂鉢である。９条単位とみられる擂目を重ね合せて施す。

ⓗ　香炉・火舎　（Fig. 38・39）

217は壺形の磁器香炉である。小さくふくらむ胴部から，頸部が長く直立して小さく端反りする。見込に「□十」と墨書する。乳白色の素地に淡緑灰色釉をかける。

218は無頸壺形の施釉陶器香炉である。１対の取手をもつとみられる。

214は筒形の染付磁器香炉である。胴部に雲竜図を描く。

215，216は筒形とみられる施釉陶器香炉である。215の胴部には，「白□□香□」，「黄金□」と押陰刻され，銘には呉須が入れられている。

220，221は筒形の施釉陶器香炉である。221はわずかに内傾し，高台部を輪花状とする。胴部には朱紫・薄緑色釉による松図を描く。

219は碗形の施釉陶器香炉である。

227～229は瓦質土器の火舎である。227，228には，押陰刻文様を施す。

230は無釉陶器の火舎の底部である。高台のみを遺存する。

ⓘ　鍋・土釜・土瓶　（Fig. 40～42）

231～234は片口の鍋と蓋である。施釉陶器。231，232の蓋は，高台状のつまみをもち，下端を外に拡張させる。231～233には，陰刻櫛目状文を施す。

235，236は無頸壺形の施釉陶器鍋である。胴部に陰刻櫛目状を施す。

237は受部をもつ無釉陶器鍋である。胴部に陰刻櫛目状文を施す。235～237は産地を同じくするとみられる。

240，241は瓦質土器の鍋である。口縁部を外に大きく折り返す。浅い鍋とみられる。

242～247は瓦質土器の土釜である。幅広い鍔をもち，その上部から口縁部に沈線をめぐらす。247には押陽刻の唐草文を施す。

248～251は瓦質土器の茶釜である。248，249，251は幅広い鍔をもつ。248と249には一対の三角形状の取手を貼り付ける。251には「Ｚ」字状文様を押陽刻する。250は算盤玉状の形態を示す。最大径部分で接合して成形したとみられる。

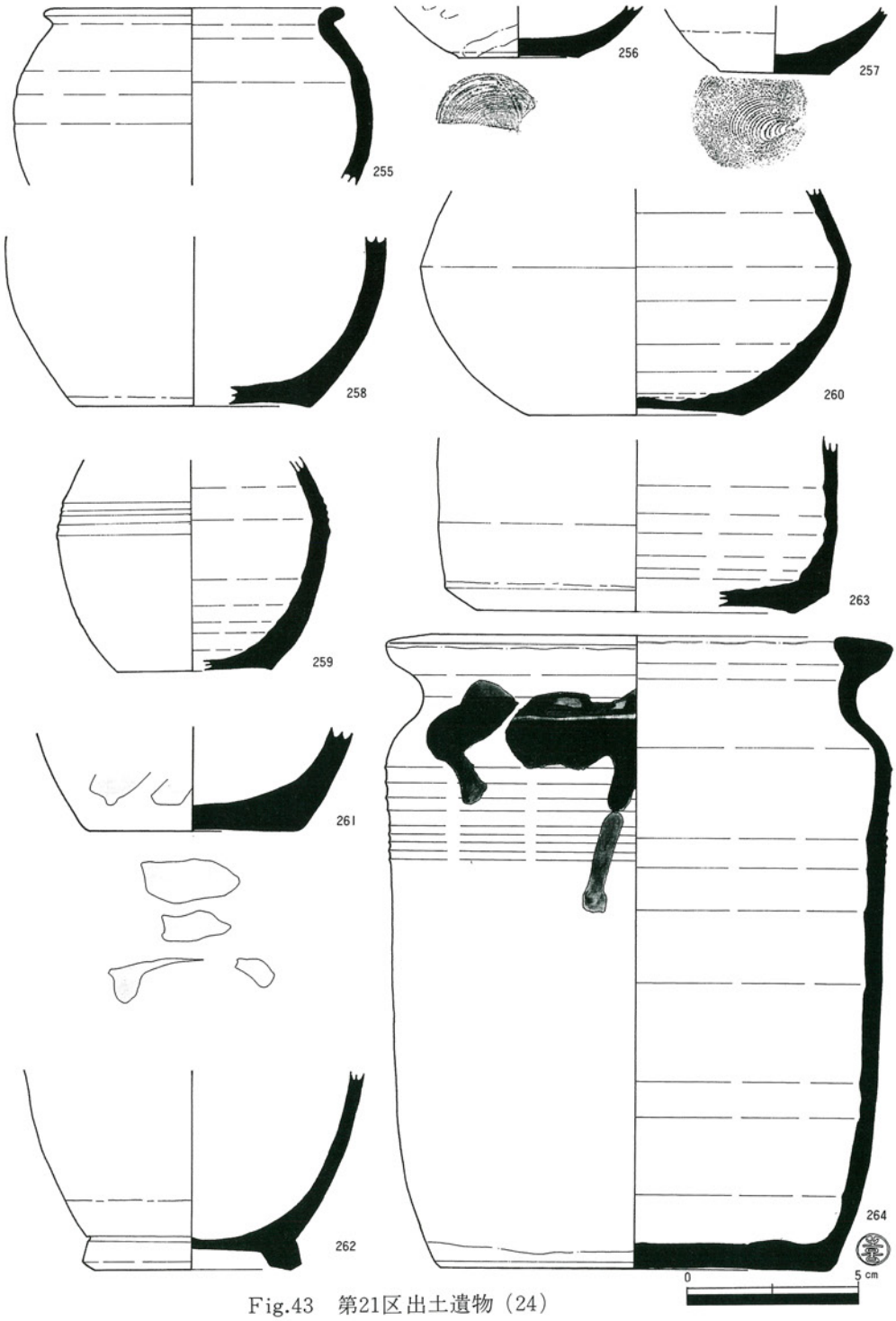


Fig.43　第21区出土遺物（24）

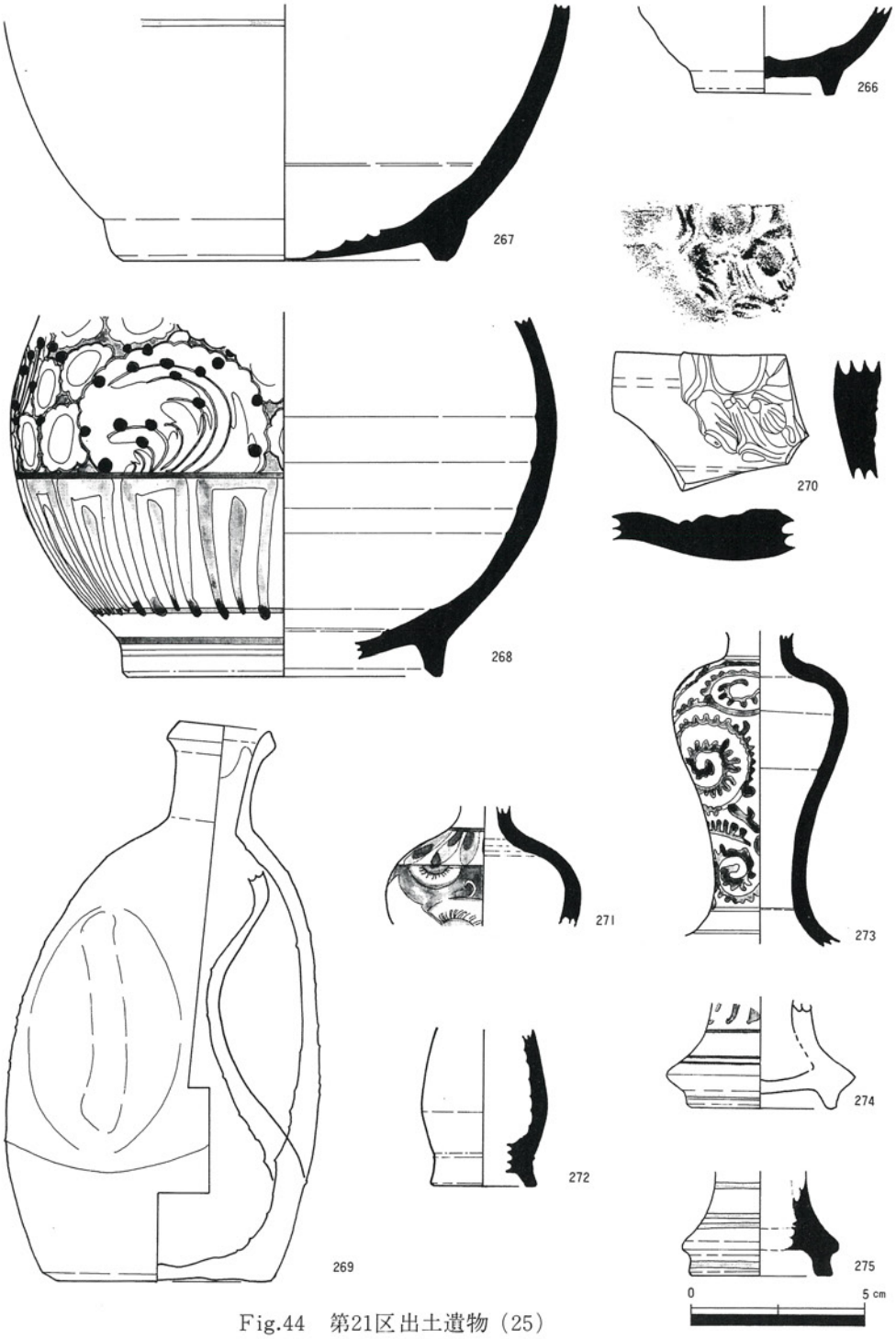


Fig.44　第21区出土遺物（25）

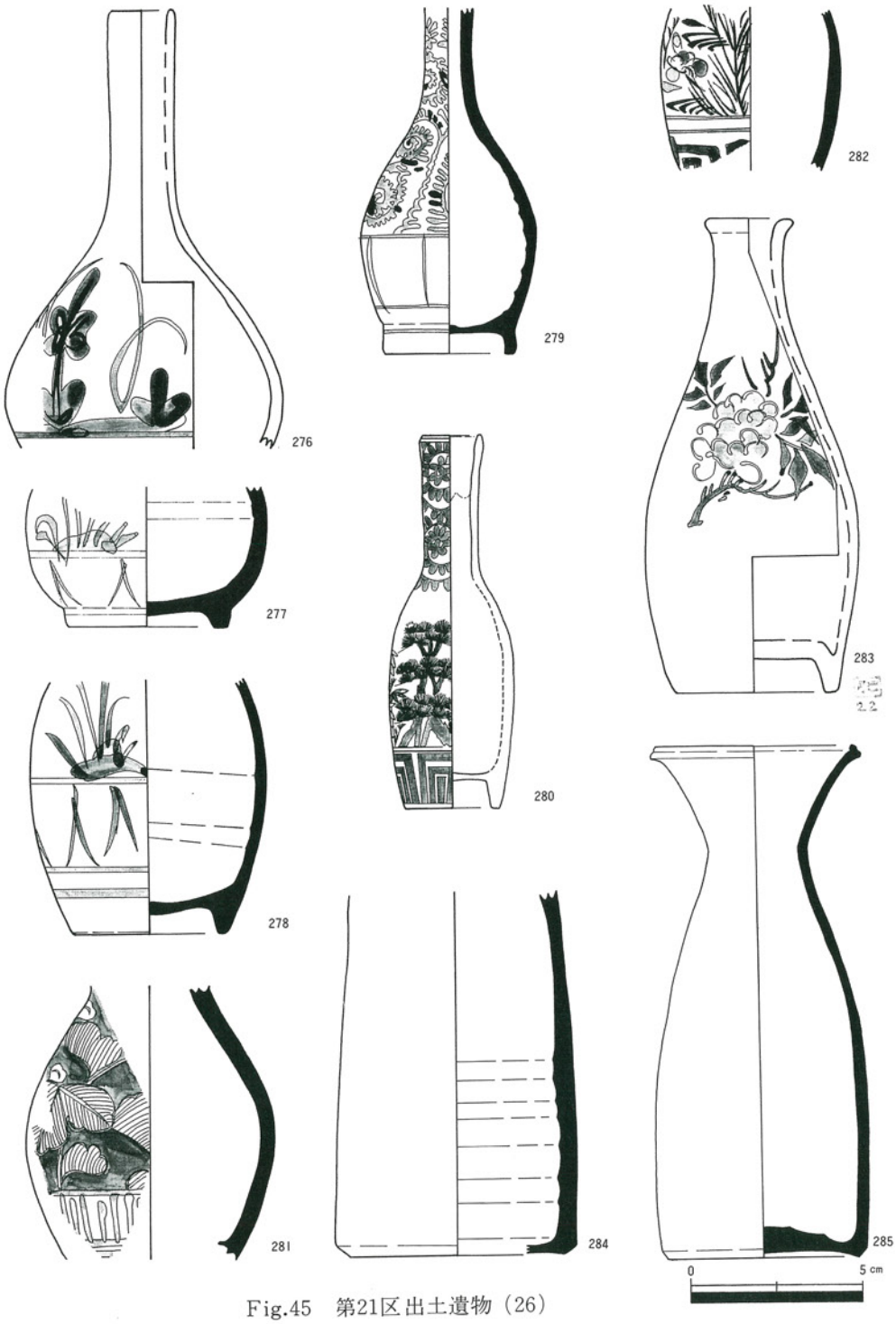


Fig.45　第21区出土遺物（26）

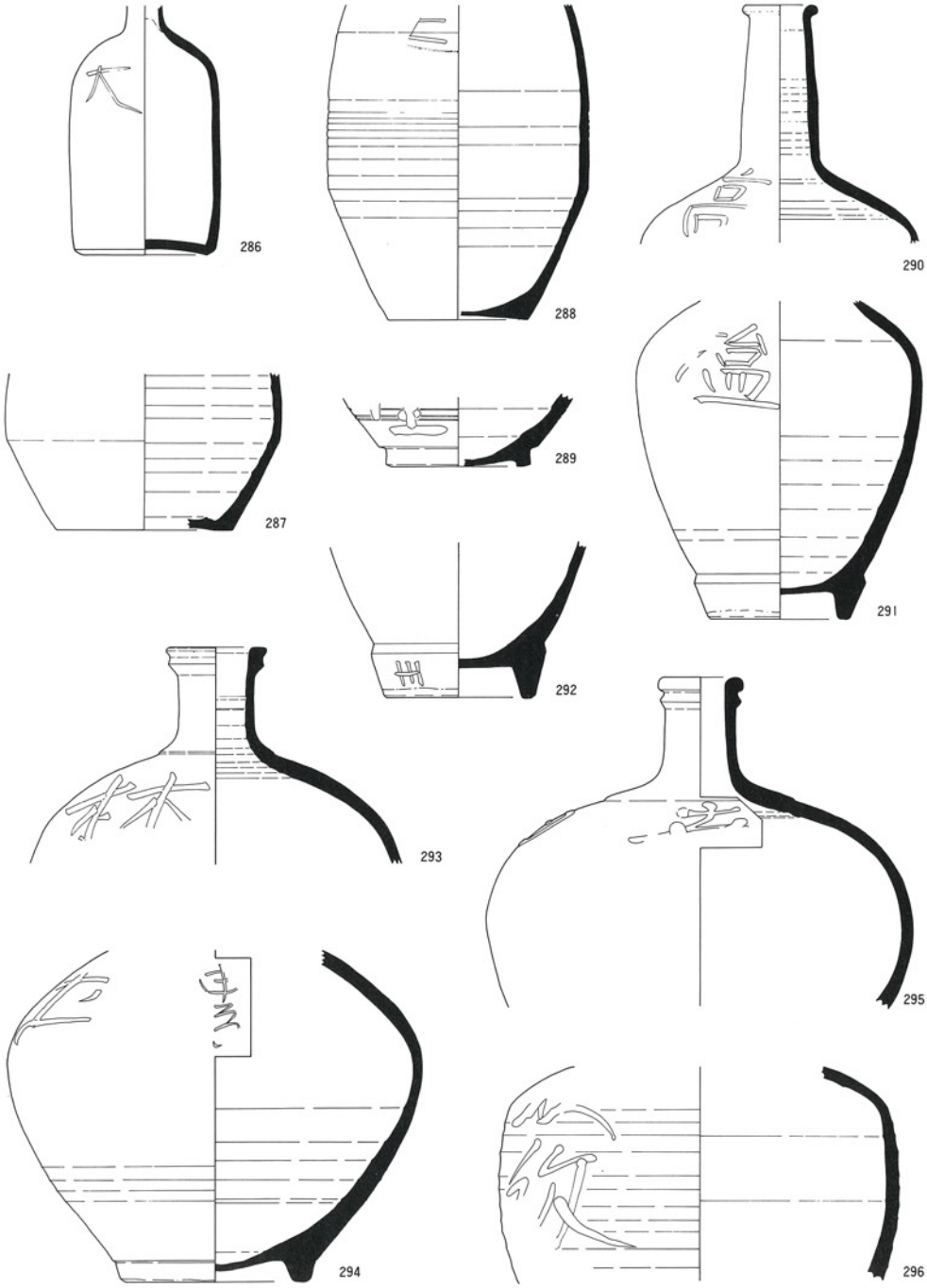


Fig.46　第21区出土遺物（27）

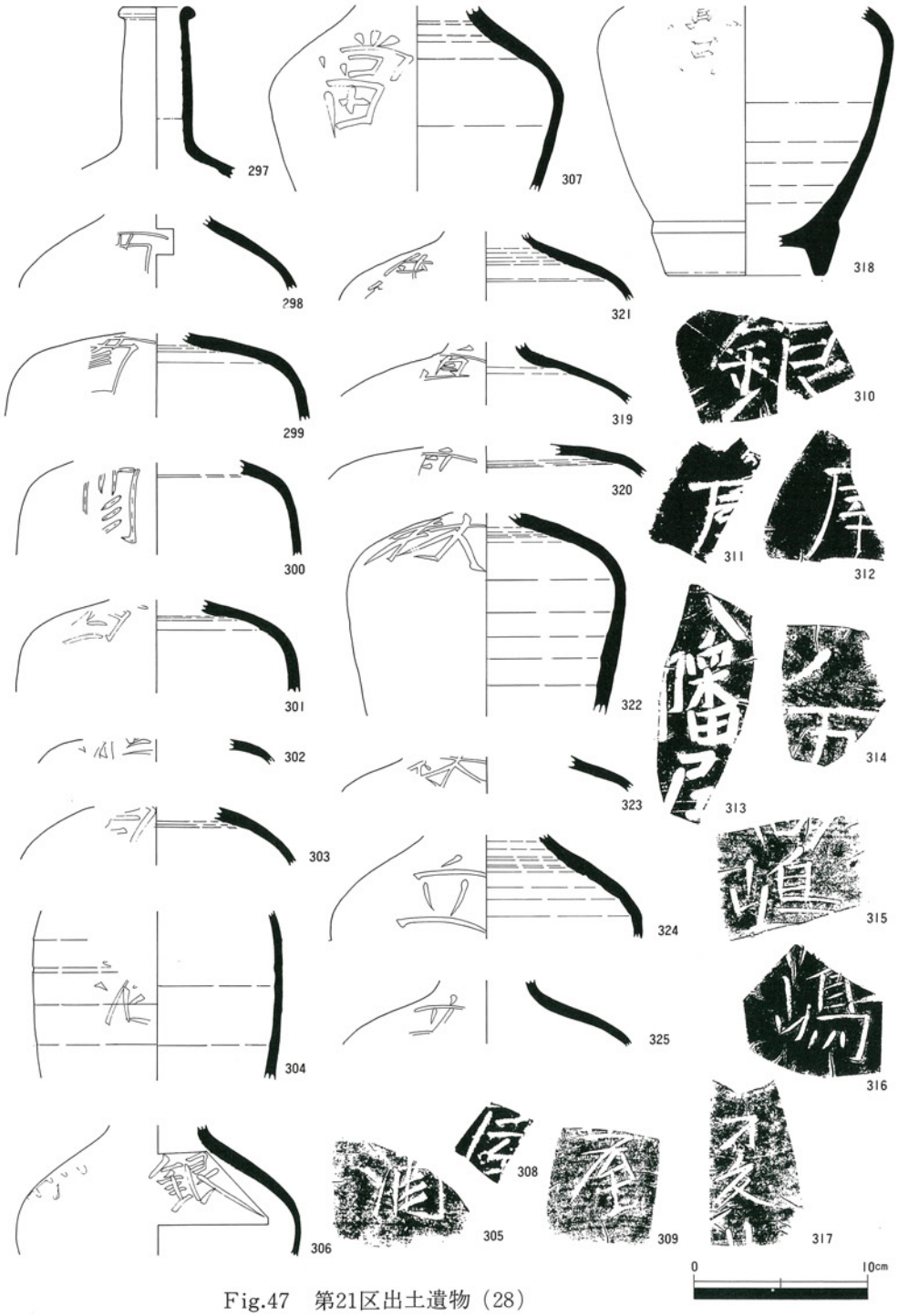


Fig.47　第21区出土遺物（28）

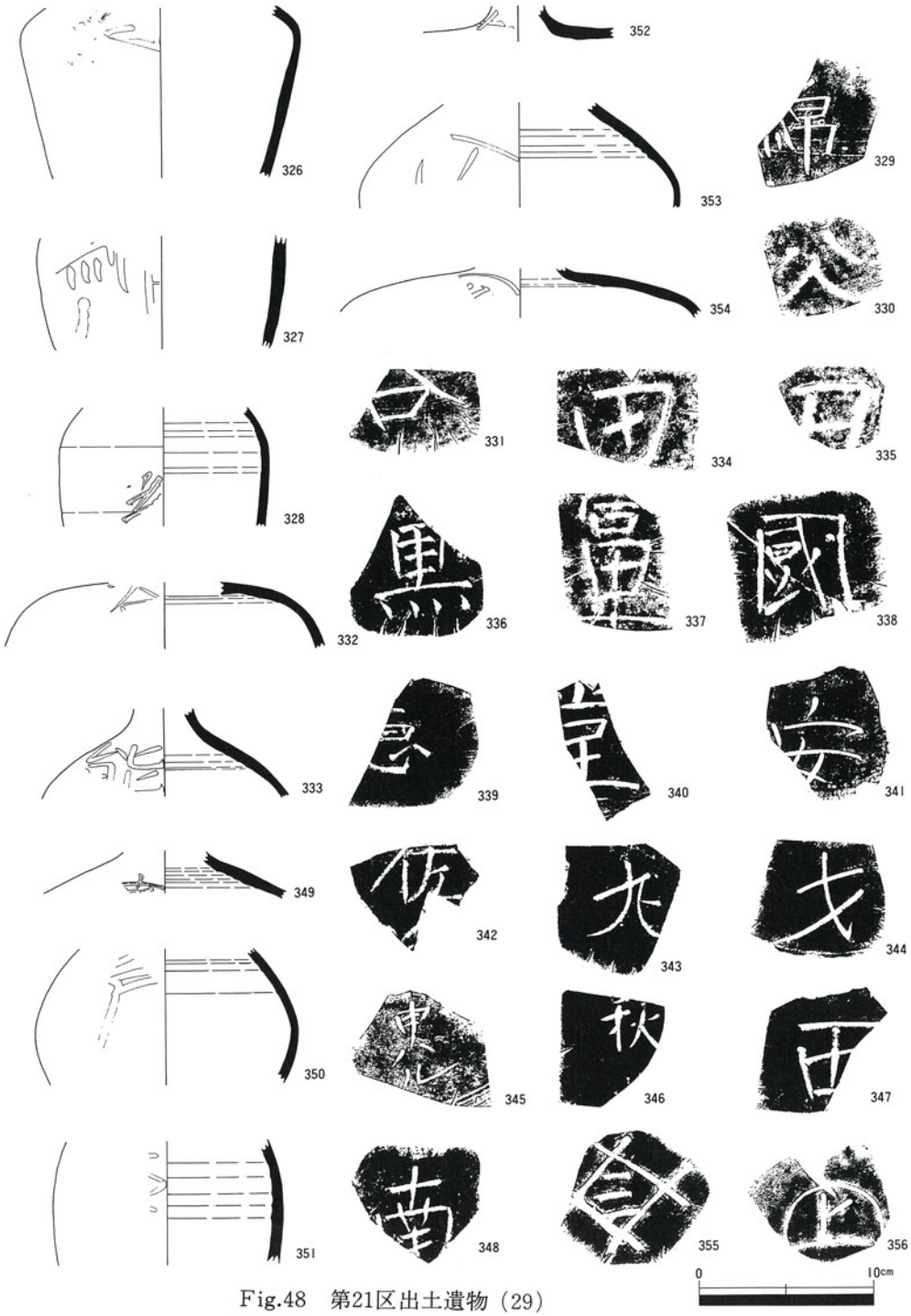


Fig.48　第21区出土遺物（29）

252～254は土瓶である。

ⓙ 壺　(Fig. 43)

255～260は施釉陶器の壺である。赤色系の素地に，暗い褐色系の釉をかける。

261は無釉陶器の壺である。胴部と底部に墨書をする。

262は撥状に開く高台を有する施釉陶器壺である。黒色釉の上に茶褐色釉をかけ，黒色釉を小さい斑点状にあらわす。475の施釉方法と同じである。

264は施釉陶器の壺である。筒形の長い胴部に小さく口頸部がつく。口縁端部を幅広く平坦につくる。平底の底部に，㊟銘を押陰刻する。暗褐色釉により，肩部に流釉的手法をみせる。

ⓚ 瓶・徳利　(Fig. 44～48)

267，268は染付磁器の花生である。球形の胴部に小さな高台がつく。

269，270は施釉陶器の瓶である。胴部の三方にしぼりを入れる。270はしぼり部分に押陽刻人物図を貼り付けたものである。第31区にも類似例がみられる。

271は染付磁器の瓶である。油壺ともみられる。染付菊花文に赤絵花文を施す。

273～275は染付磁器の神酒徳利である。S字状の胴部に小さな高台がつく。蛸唐草文を描く。製作年代は18世紀末から19世紀前半とみられる。

276～279は染付磁器の神酒徳利である。球形状の胴部に細長い頸部がつく。草花図，蛸唐草文などを描く。製作年代は18世紀後半から19世紀初め頃とみられる。

281は染付磁器の徳利である。染付蓮弁文に赤絵草花図を施す。

283は磁器の銚子徳利である。高台裏に「肥22」と押印。

286～356は施釉陶器の徳利である。295，296には白泥による文字，その他には陰刻による文字が認められる。大谷焼系とみられる。

286は小形の徳利である。肩部に「大」「柳」「酒」の3文字が陰刻されている。陰刻部分は無釉である（以下，徳利の陰刻については同じ）。

287，288は平底で胴部下位に明瞭な稜線を形成する。

289は胴部下位に陰刻するが，文字不詳。

290～292は，筒状の長い口頸部に，倒卵形の胴部，内向する高い高台という形態をとる。290の肩部には「高」，「酒」，「□」，291の肩部には「塩」，「酒」，292の高台には「州」とみられる文字を陰刻する。

293は短い筒状の口頸部をもつ。肩部に「林」，「□」，「□」の文字を陰刻する。

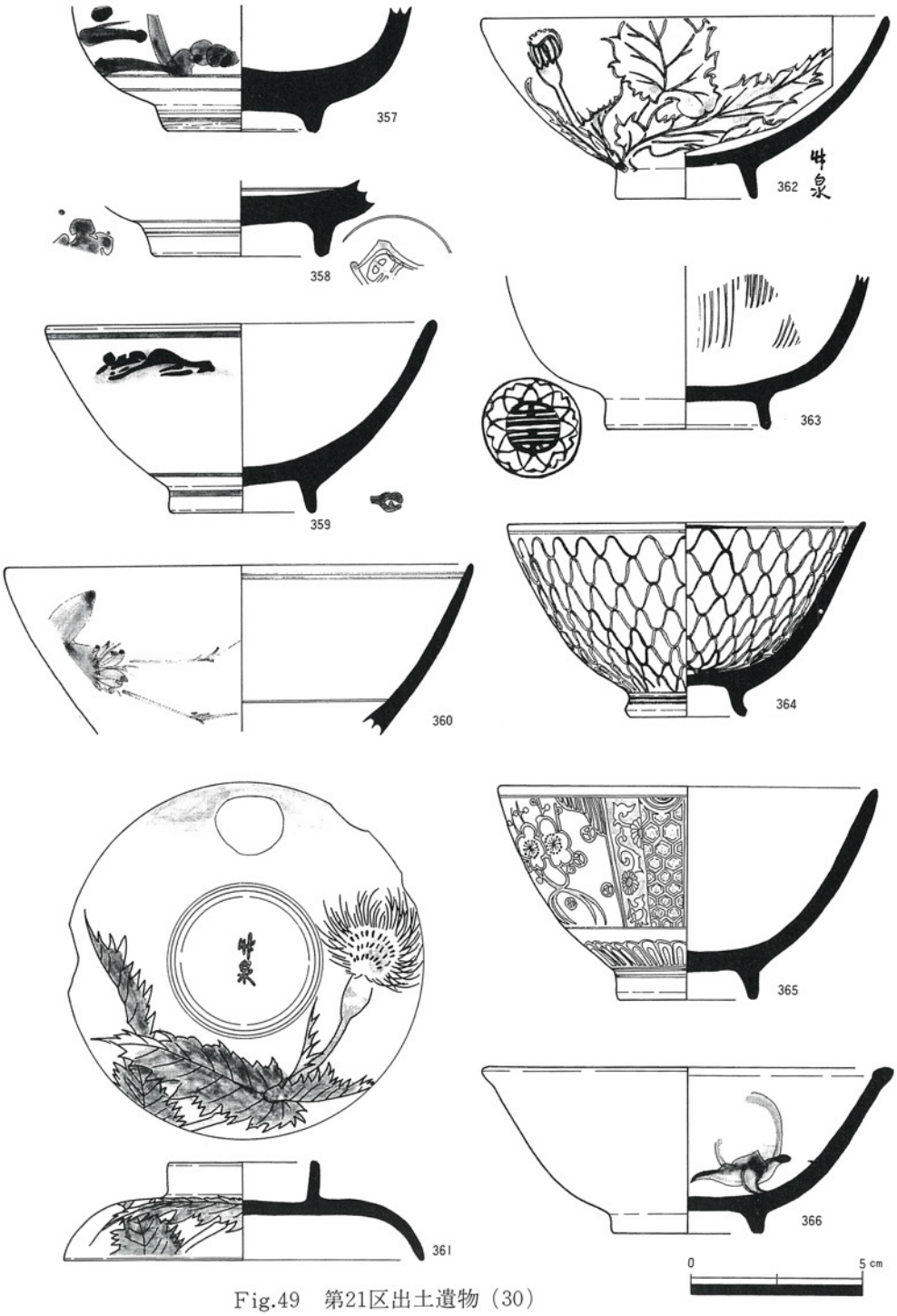


Fig.49　第21区出土遺物（30）

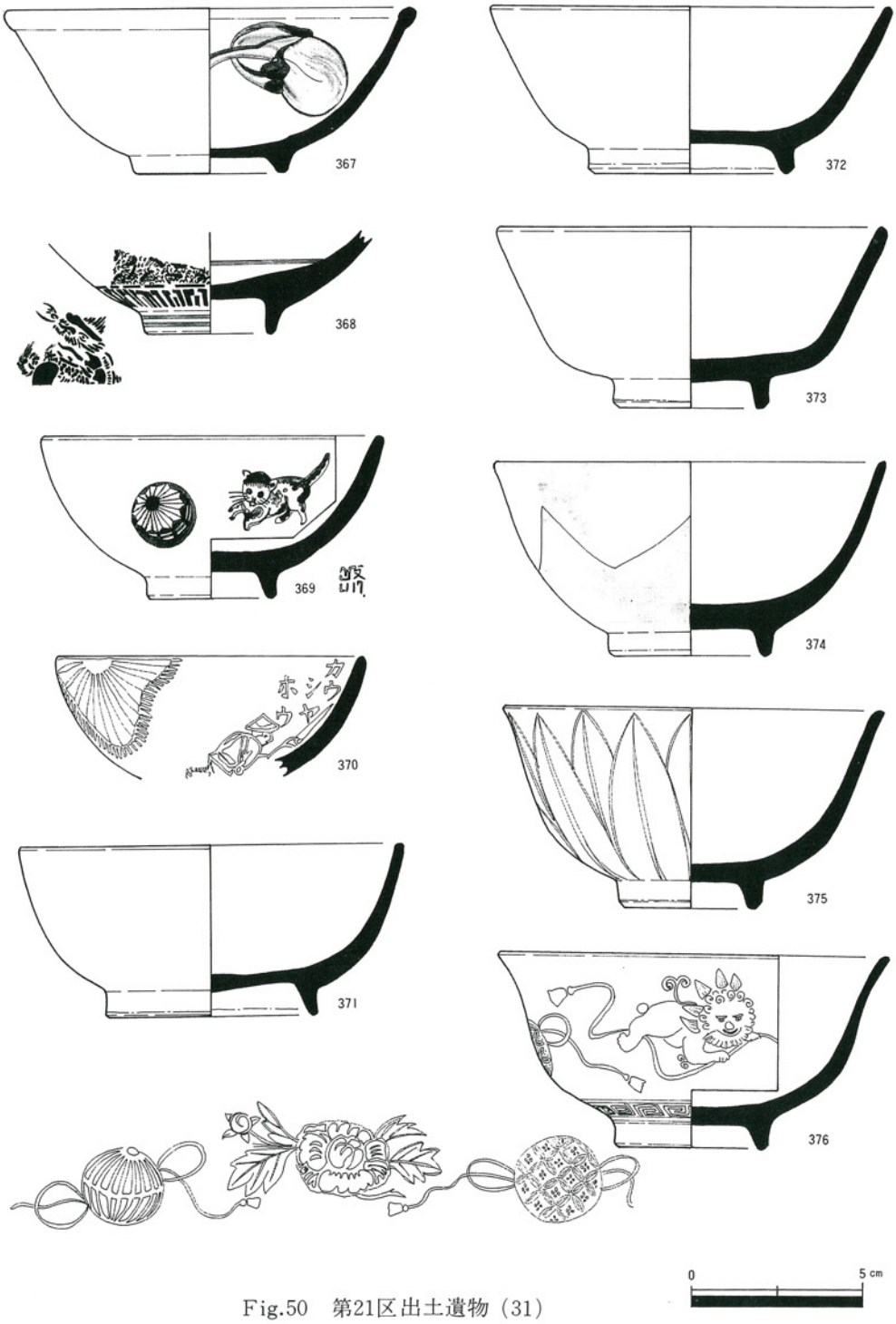


Fig.50　第21区出土遺物（31）

294は球形状の胴部に低い高台がつく。肩部に「申□」と「玉」とみられる文字を陰刻する。

295・296は倒卵形の胴部をもつ。295には293に類似した短い筒状の口頸部がつく。白泥により，296には「岡」，「□□」，295には「酒」，「南」，「□」の文字を描く。製作年代は19世紀末以降とみられる。

297〜302, 304, 305には，「酒」の文字を陰刻する。303は「南」の文字を陰刻する。

306には「當」，「銀」，「屋」の文字を陰刻する。307に「當」，310に「銀」の文字があり，306と同じとみられる。

308，309，311，312には，「屋」の文字が陰刻されている。

313には「八幡屋」，314には「八万」の文字が陰刻されている。

315に「高」，「嶋」，316に「□嶋」，317に「高」，「酒」，「冖亥□」，318〜320に「高」，321に「高」，「戊□」の文字が陰刻されている。「高嶋」の文字が刻まれていたとみられる。

322には「□」，「林」，323には「林」の文字を陰刻。

324，325には「立」の文字を陰刻。

326〜329には糸偏につらなる「細」，「綿」の文字を陰刻。

330〜351には「能」,「田」,「黒」，「冨士」，「國」，「恵」，「堂」，「安」，「佐」，「丸」，「戈」，「申ハル」，「秋」，「西」，「南」，「戸」，「柳」などの文字を陰刻する。

354の口頸部と肩部との境には，「㐅」とみられる窯印を押印陰刻する（豊田　1969）。

（4）　第1層

ここでは，調査区内の表土第1層および攪乱層中から出土した土器類を一括して扱う。大量の陶磁器と瓦質土器，土師質土器が出土している。器形別に，碗20，猪口17，仏餉具10，蓋15，皿20，燈明皿8，鉢14，香炉・火舎5，鍋・土瓶6，壺・甕6，瓶・徳利27の148個体を図示した。

ⓐ　碗　（Fig. 49・50）

357は陶胎染付の碗である。内の深いつくりで，草花図とみられる図柄を描く。製作年代は18世紀代とみられる。

359，360は広東形の高台作りを小さくしたような形態をもつ染付磁器の碗である。

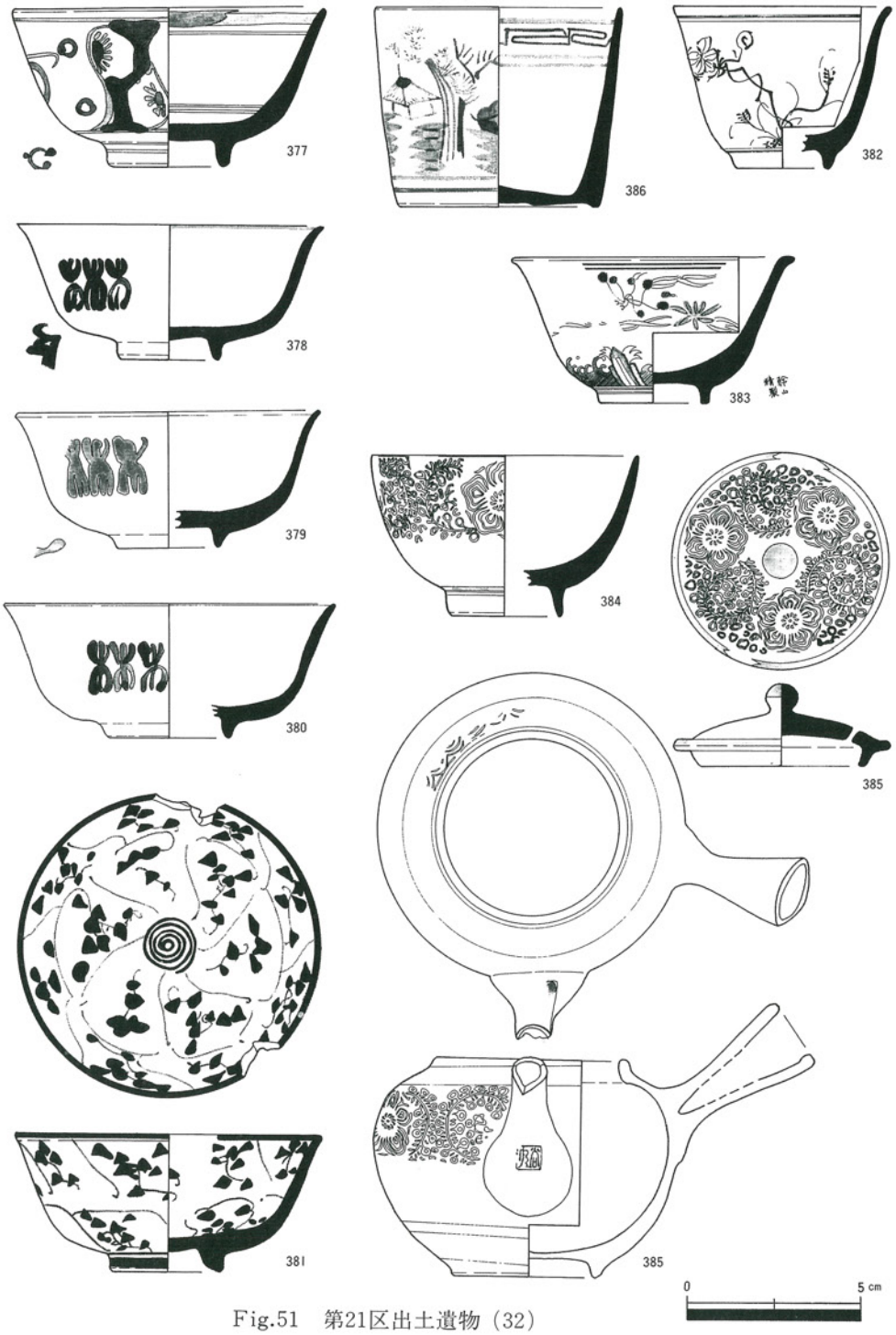


Fig.51　第21区出土遺物（32）

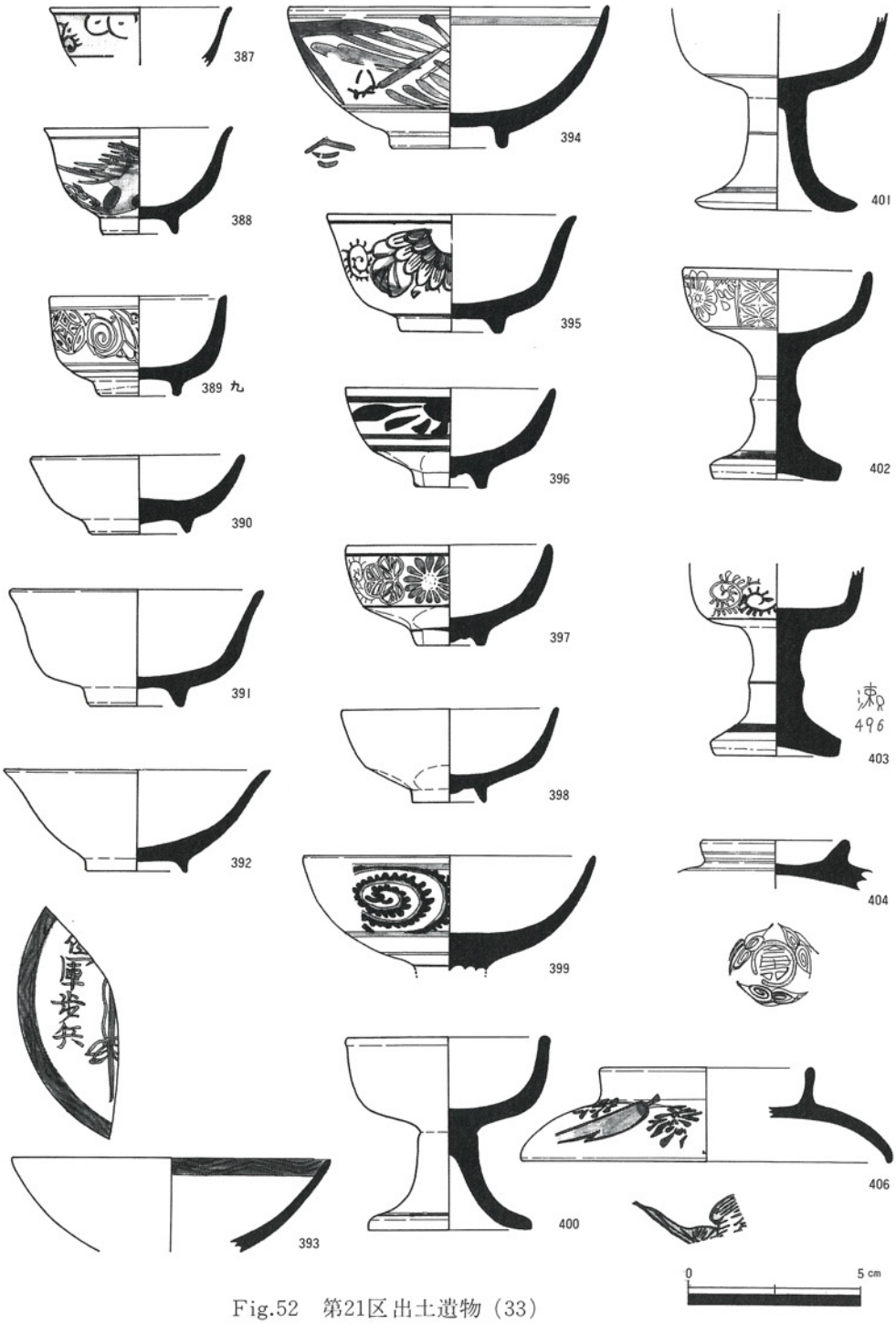


Fig.52　第21区出土遺物（33）

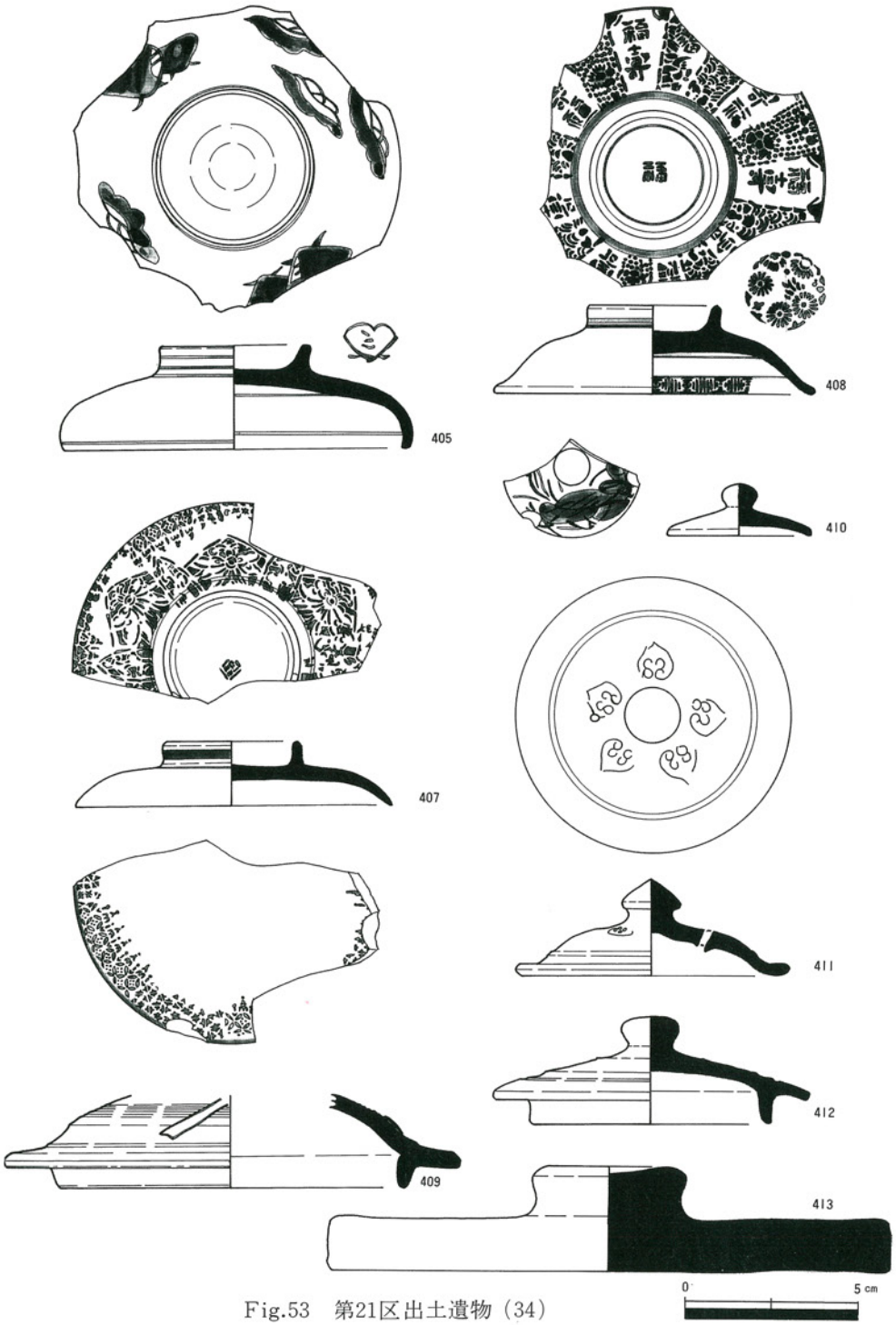


Fig.53　第21区出土遺物（34）

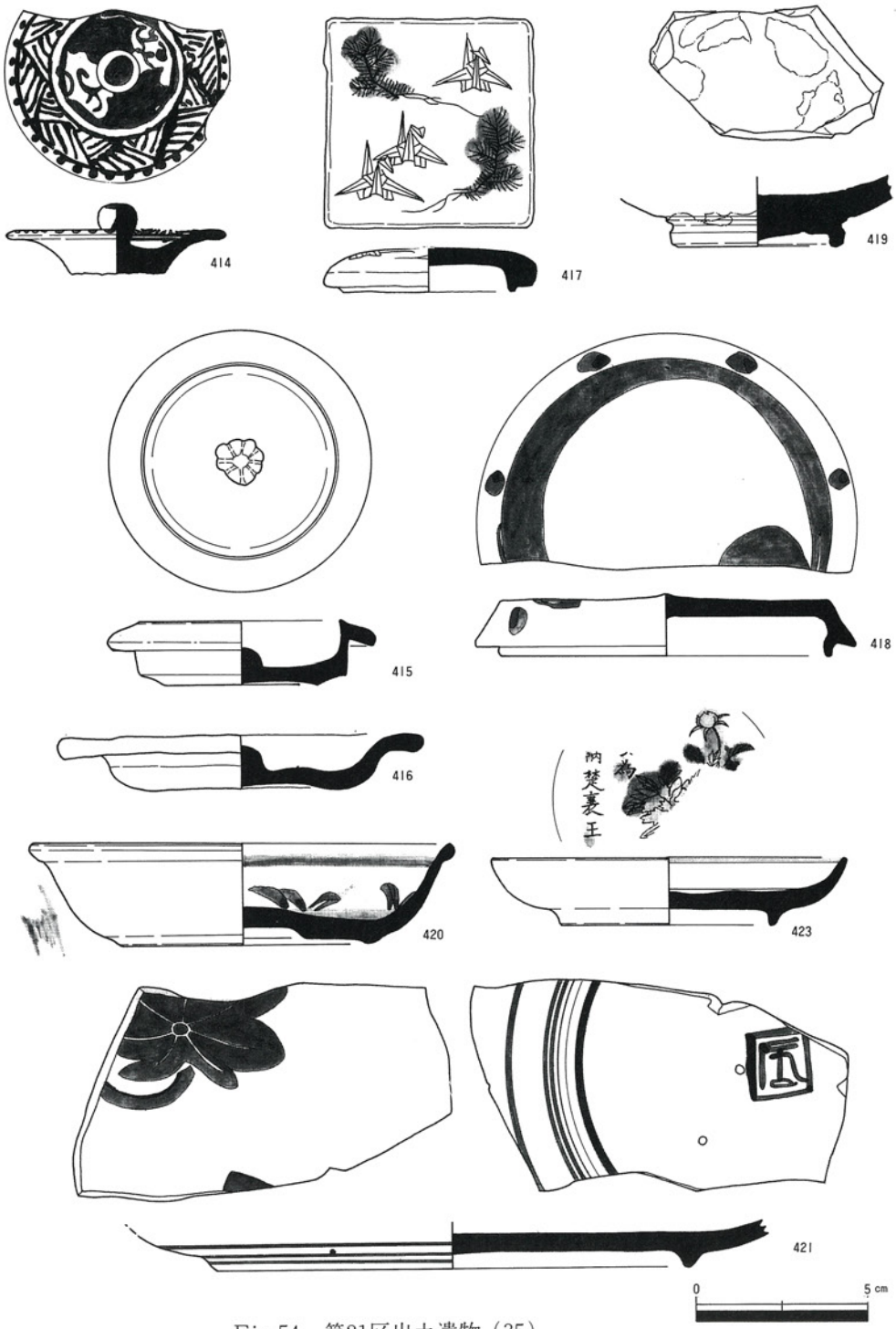


Fig.54　第21区出土遺物（35）

360は底部を欠失するが，広東碗の可能性がある。製作年代は18世紀末から19世紀初め頃とみられる。

361, 362は染付磁器の蓋と碗である。ともに薊図を描き，「竹泉」銘をもち，セットとみられる。製作年代は19世紀前半の可能性がある。

368は型紙摺で麒麟図を描く染付磁器の碗である。

369の高台裏に，「岐レ117」との押印がみられる。

371～375は施釉陶器の汁器である。丸碗形と端反りするものがある。

376は端反りする磁器の汁器である。牡丹，獅子，手まりなどを押陰刻する。

ⓑ 猪口　(Fig. 51～52)

377～383は端反りする染付磁器の猪口である。製作年代は19世紀初めから半ば頃とみられる。377は「寿」の文字文を描く。378～380は紐文を描く。淡黄褐色系のうすい口銹を施す。

384，385は磁器の猪口（茶碗）と急須である。五弁花と唐草文を白・金・エンジ色でスタンプ状に施す。急須の注口部に「九谷」銘を押印。

386は筒形の染付磁器猪口である。19世紀前半の製作とみられる。

387～393は盃とみられる。389は九谷焼。393の見込には，「陸軍歩兵」の文字を赤茶色釉の上に金色釉を重ねて描く。

ⓒ 仏餉具　(Fig. 52)

394～398は碗形の仏餉具である。398を除いて，赤絵の松葉図，花唐草文，菊花文などを描く。396～398は方形高台に花弁状腰部という特徴を持つ。

399～403は高い脚部に小丸碗を組み合せた高杯形である。399は蛸唐草文を描く染付磁器である。その他は赤絵の磁器であるが，ほとんど文様が剝落している。403の底裏に「瀬496」の押印陰刻が認められる。

ⓓ 蓋　(Fig. 52～54)

404～408は染付磁器の山蓋である。405，406は19世紀初め頃の製作とみられる。407，408は型紙摺。408は端反りする。

409は高台状のつまみをもち，口縁部を外に拡張する形態をとる施釉陶器の山蓋である。鍋の蓋の可能性もある。410～413は擬宝珠状つまみをもつ山蓋である。411は急須の蓋とみられる。

414～416は擬宝珠状つまみを有する落蓋である。415のつまみには菊花文を押印

陰刻する。416は瓦質土器である。

417，418は合蓋である。417は方形の型打ち成形である。松に折鶴図を染付ける磁器。418は暗緑色釉で丸文を描く施釉陶器。

ⓔ 皿 （Fig. 54〜58）

419は施釉陶器の皿である。高台裏に兜巾をみせる。にぶい黄灰色の素地に，にぶい緑灰色の釉をかける。見込に砂目を遺存する。製作年代17世紀前半の唐津とみられる。

421は染付磁器の大皿である。高台裏に「居」とみられる角銘を有する。八ッ手の部分に墨弾きとみられる手法が用いられている。

420は見込蛇ノ目釉ハギ，蛇１目凹形高台の染付磁器皿。

424は施釉陶器の大皿である。見込に黒色釉で風景図を描く。

425〜430，432は染付磁器の菊皿である。425は見込に「寿」，「福」の文字を墨弾き的手法で描く。呉須の発色は暗藍色。426は蛇ノ目凹形高台で，茶褐色釉による口銹を施す。427，428は唐草文を染付け，見込を型紙摺とする。432の高台裏に「岐925」銘を押印する。

433〜435は型打ち成形の磁器皿である。433，434は花文を押印する角皿。435は「寿」字文を押印する。

436〜438は型打ち成形の磁器紅皿である。436は陰刻蛸唐草文を施し，170に類似する。437，438は貝殻状の形態をとる。

ⓑ 燈明皿 （Fig. 57）

439，440は施釉陶器の油皿である。

441は施釉陶器の油受皿である。見込に断面三角形状の突帯をめぐらし，３箇所に半月形に切り込みを入れる。

442〜445は施釉陶器の脚付油受皿である。443〜445は脚底部を皿状とする。445は188と同じく，油皿との合成形とみられる。

446は施釉陶器の秉燭である。筒形で，円錐状芯受けをもつ形態をとる。

ⓖ 鉢 （Fig. 58・59）

447は染付磁器の鉢である。大きく端反りして，口縁部上端に平坦面を形成する。

448，449は染付磁器の鉢である。448は大きく端反りして，口縁端部をつまみ上げる形態をとる。梅花文を赤絵とし，八卦文，卍文，太極図を染付ける。高台裏に

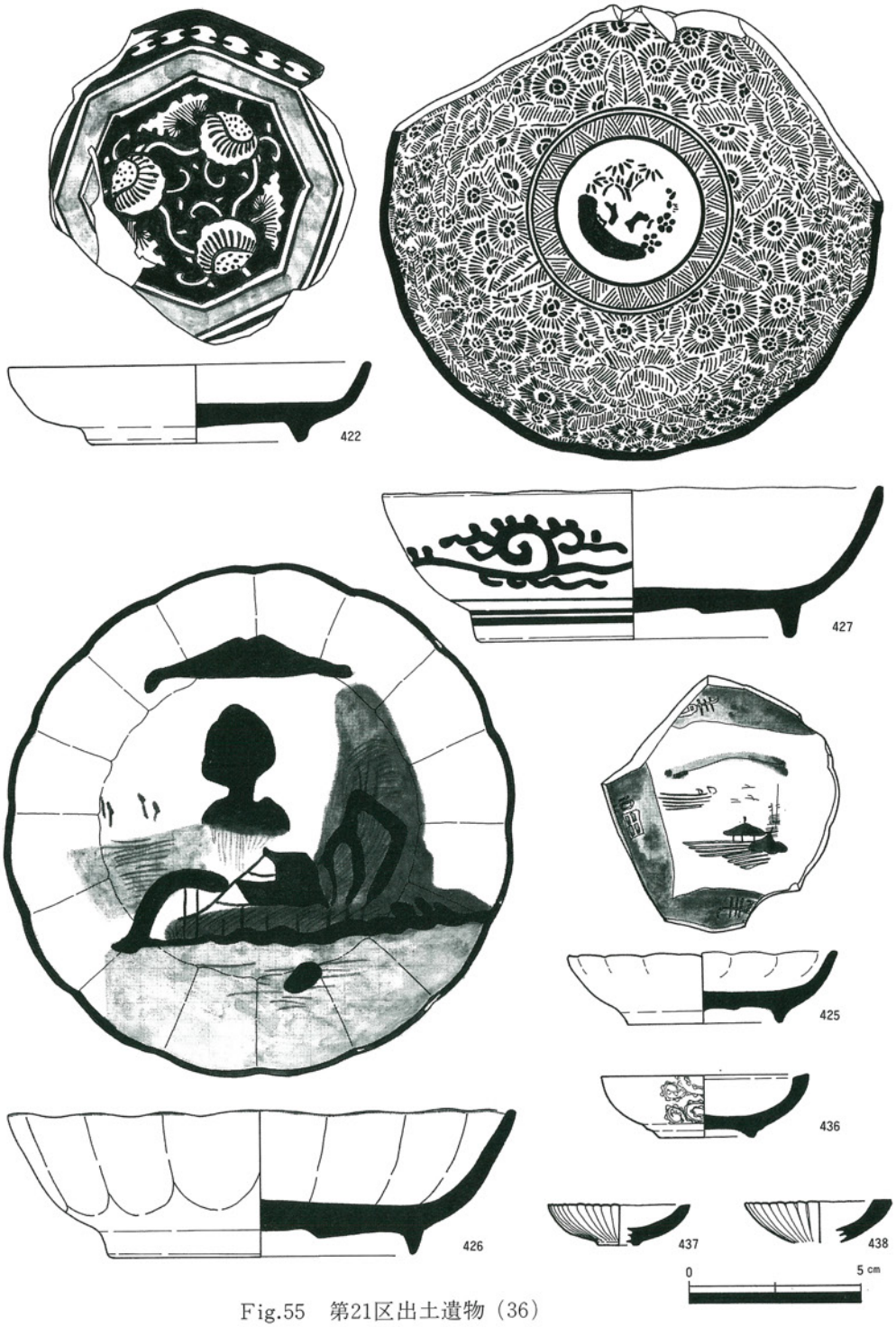


Fig.55　第21区出土遺物（36）

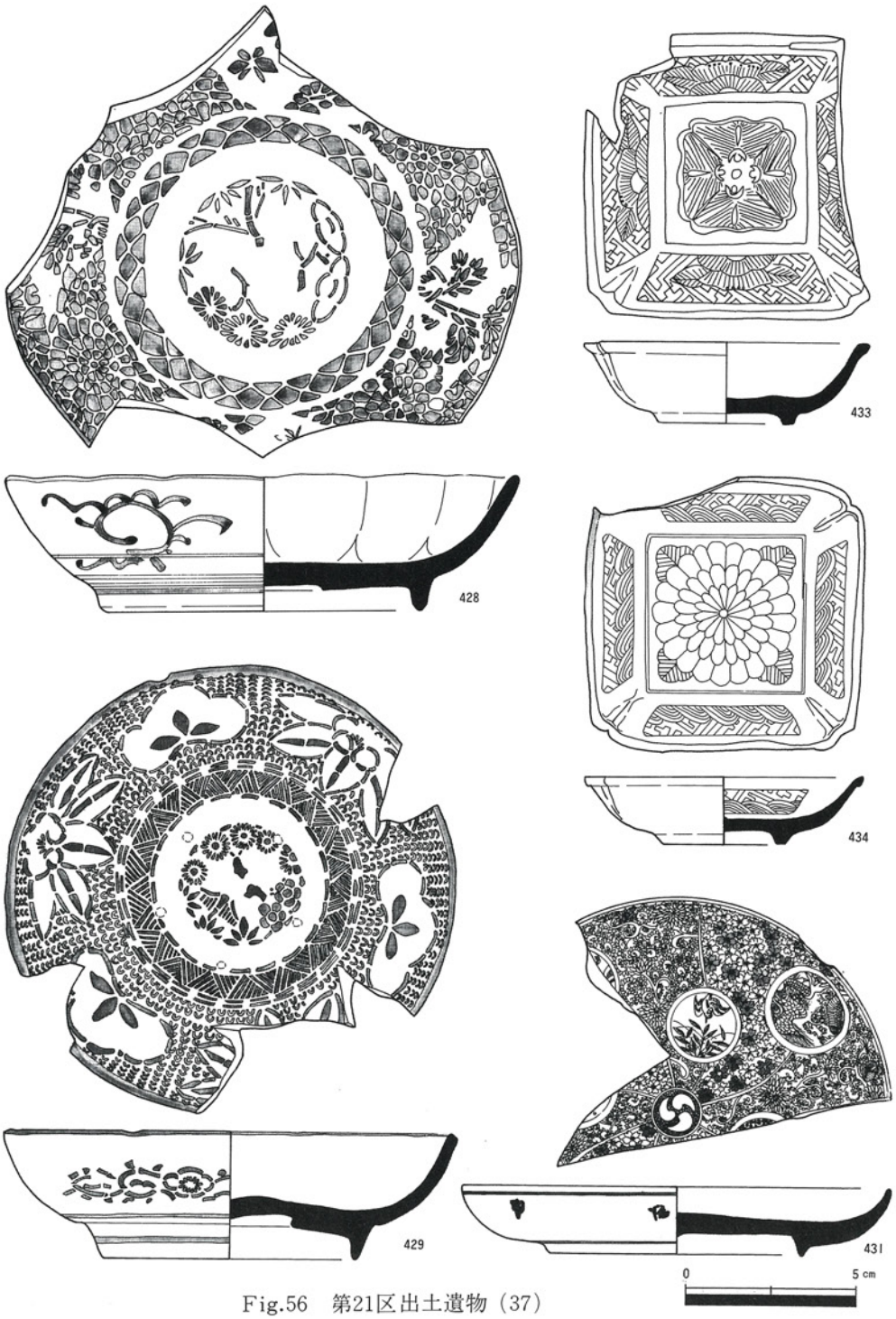


Fig.56　第21区出土遺物（37）

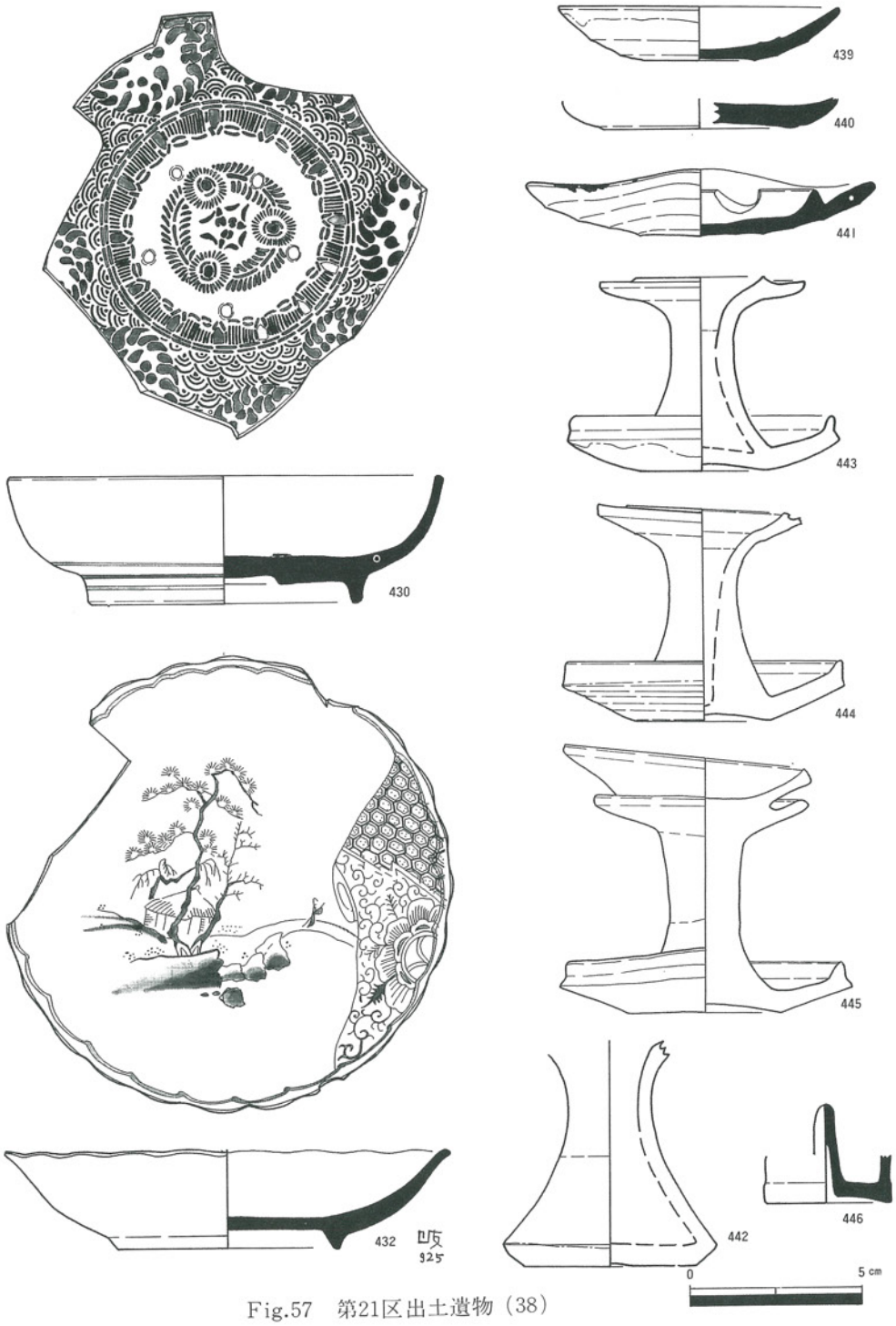


Fig.57　第21区出土遺物（38）

渦福銘。449はうすい藍色で渦文を描く。

451～453は玉縁状口縁を有する施釉陶器の鉢である。454はそれらの底部とみられる。見込にハリ支え痕を認める。

455，456は筒形の施釉陶器鉢である。漬物用容器ともみられる。

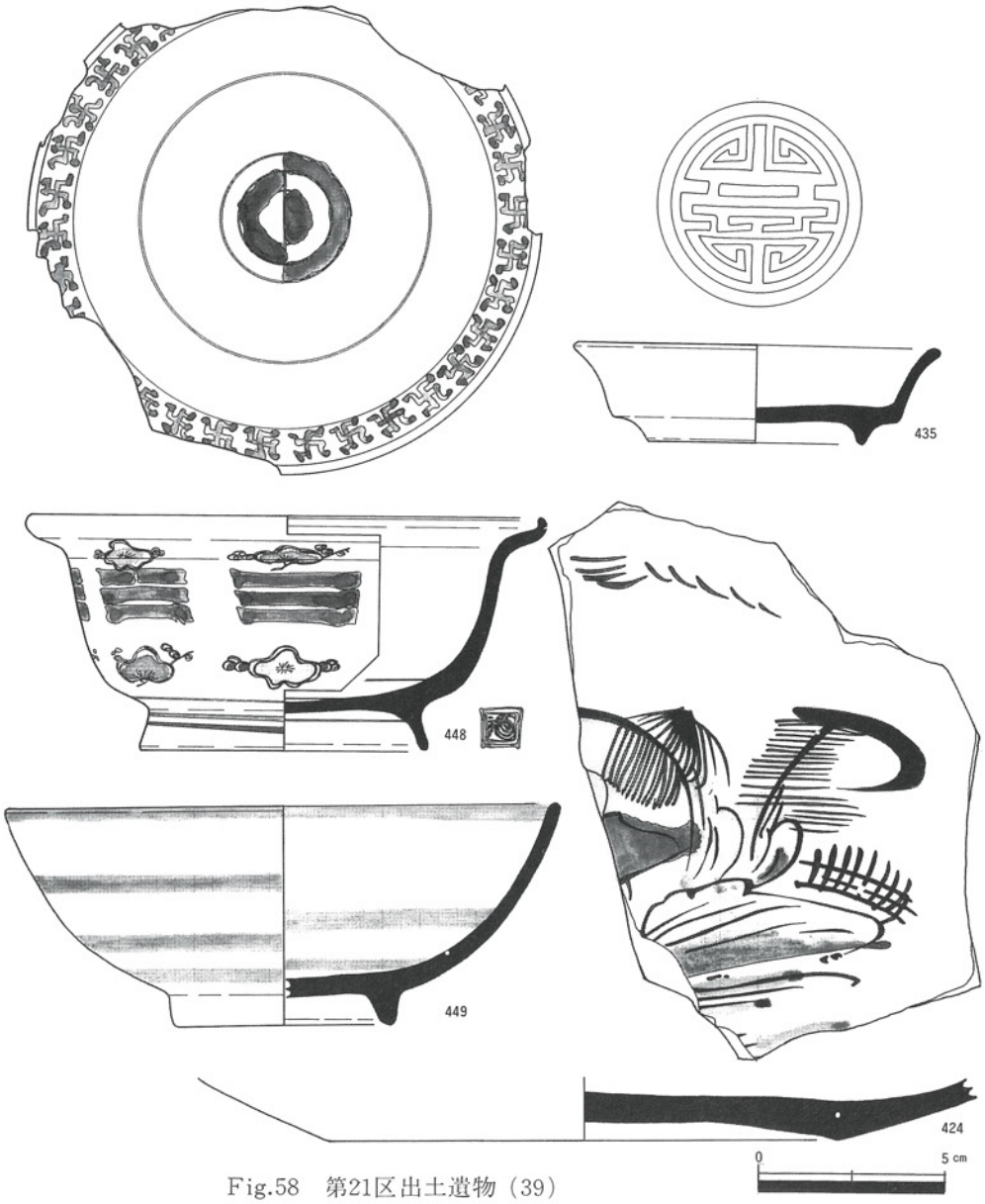


Fig.58　第21区出土遺物（39）

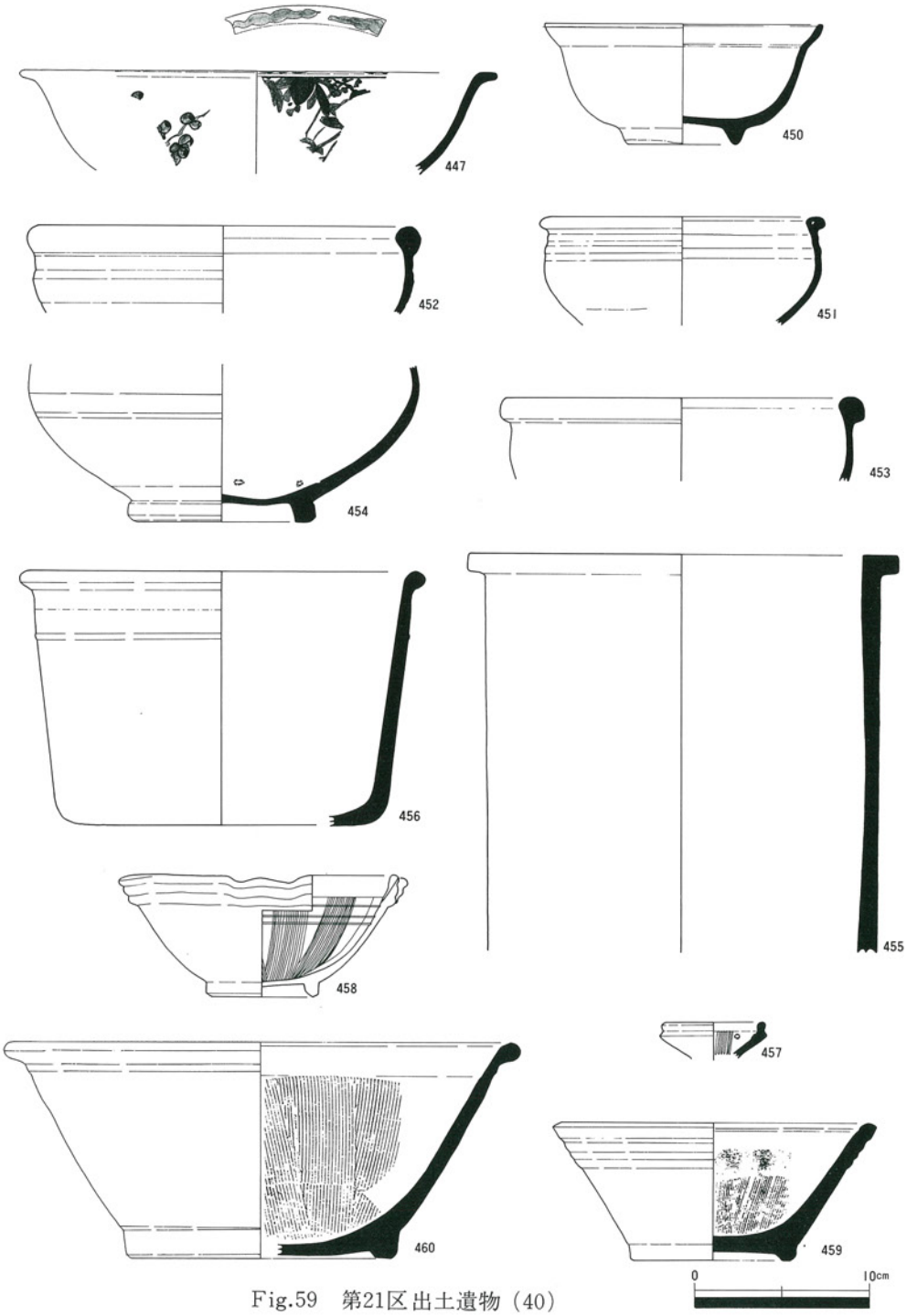


Fig.59　第21区出土遺物（40）

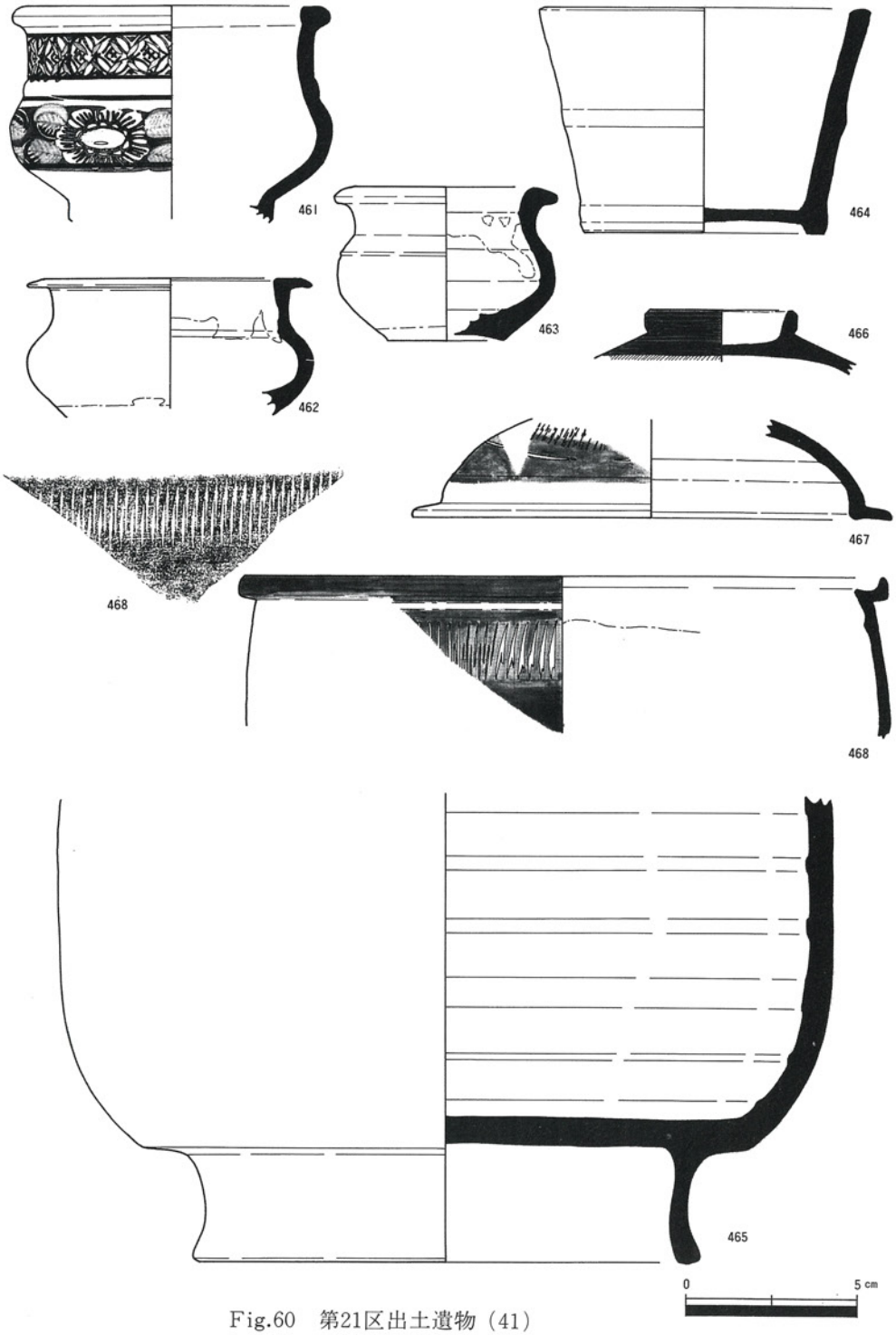


Fig.60　第21区出土遺物（41）

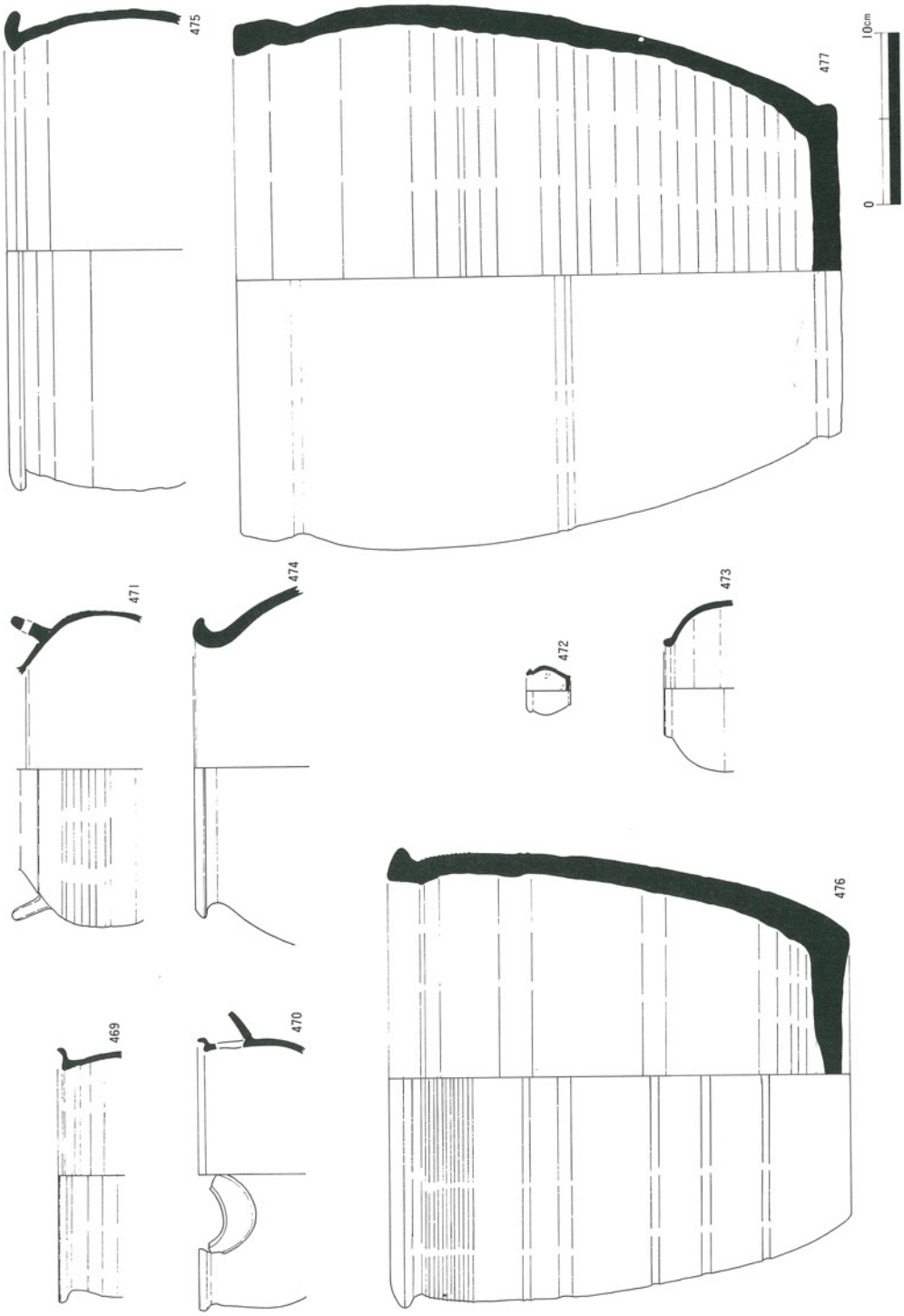


Fig.61　第21区 出土遺物（42）

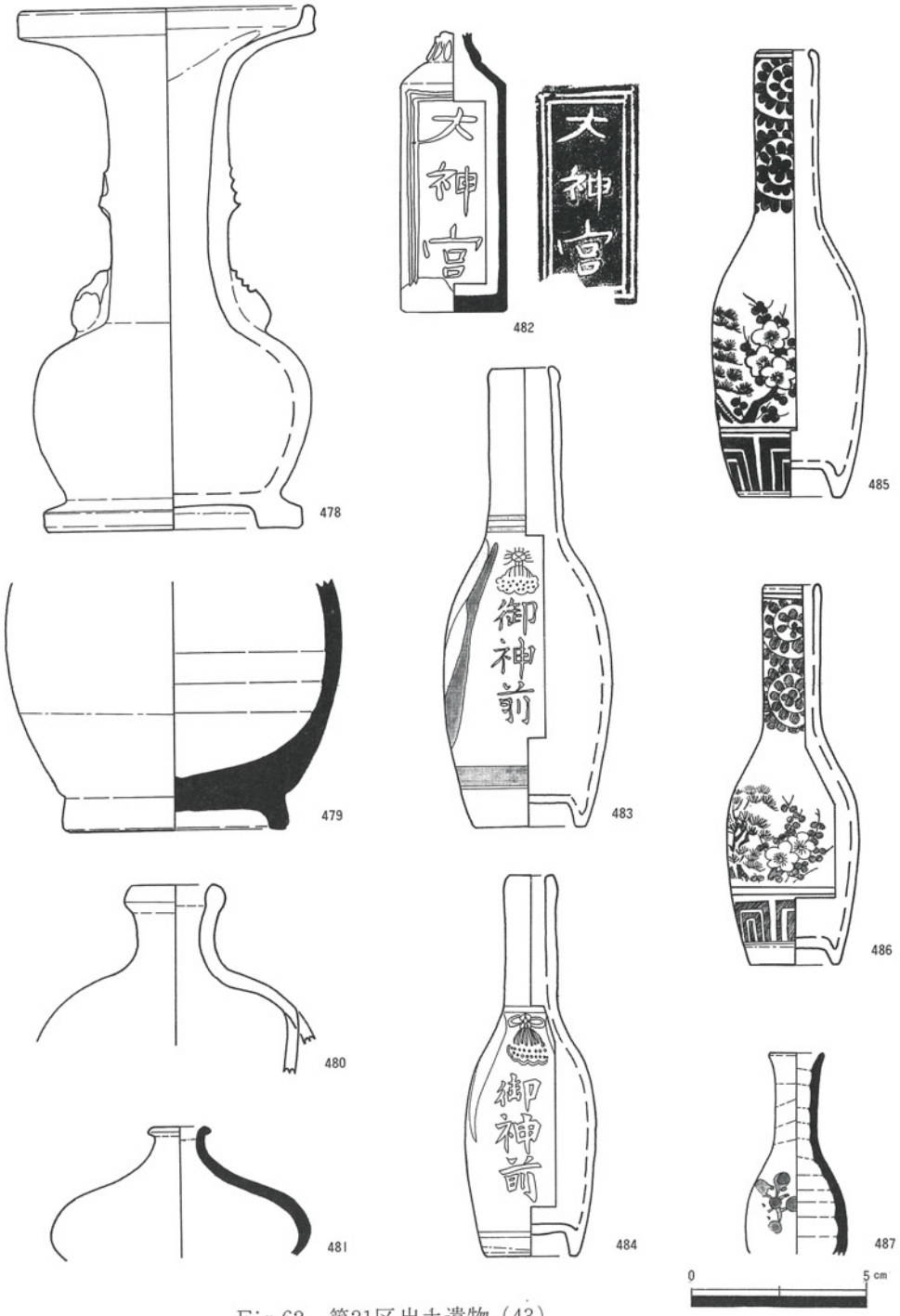


Fig.62　第21区出土遺物（43）

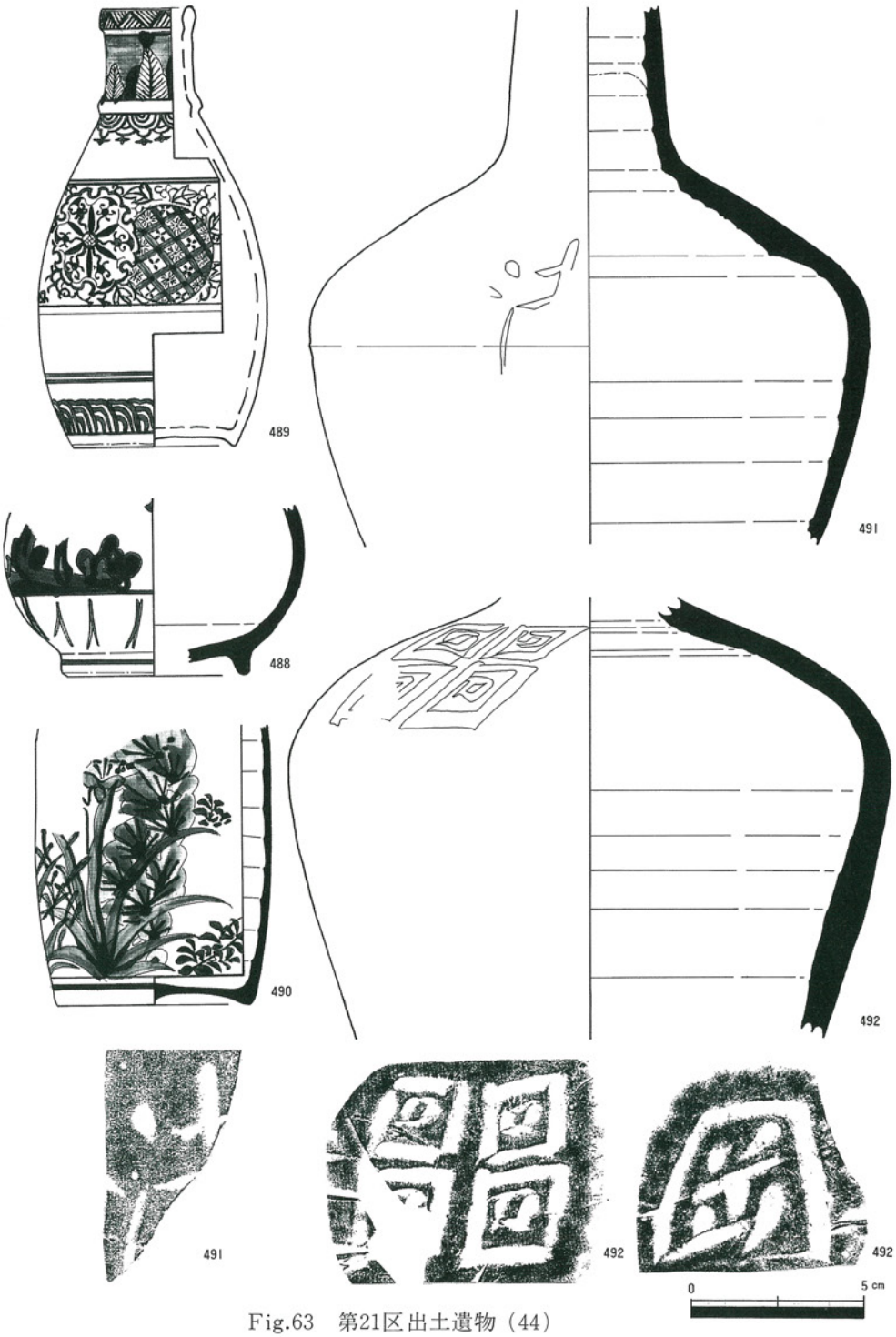


Fig.63　第21区出土遺物（44）

457～460は施釉陶器の擂鉢である。457は6条単位の擂目を間隔をあけて入れる。小鉢もしくはわさびおろし用の擂鉢とみられる。458は片口で，16条単位の擂目を間隔をあけて入れる。459，460は擂目を重複して入れる。460は片口。

ⓗ　香炉・火舎　（Fig. 60）

461～463は壺形の香炉である。462・463は施釉陶器。461は赤絵の花文，七宝つなぎ文を描く磁器である。

464は筒形の施釉陶器香炉である。胴部を竹節状とする。見込にハリ支え痕をみせる。

465は高い高台をもつ無釉陶器の火舎である。

ⓘ　鍋・土瓶　（Fig. 60・61）

466～470は施釉陶器の鍋と蓋である。466，467は高台状のつまみをもち，口縁端部を外に拡張する山蓋である。天井部に陰刻櫛目状文を施す。468～470は受け部を有し，470は片口の形態をとる。468の口縁部直下に陰刻櫛目状文を施す。

471は施釉陶器の土瓶である。一対の三角形状の取手を貼り付ける。

ⓙ　壺・甕　（Fig. 61）

472は磁器の壺である。ミニチュアの製品とみられる。

473は施釉陶器の無頸壺である。

474～477は施釉陶器の甕である。475は黒色釉の上に茶褐色釉をかけ，黒色釉を小斑点状にあらわす。262の施釉方法と同じである。476の底裏に押印がみられる。

ⓚ　瓶・徳利　（Fig. 62～65）

478は施釉陶器の仏花瓶である。かぶら形の形態をとり，一対の取手を貼り付ける。頸部は長く直立して，口縁部は大きく開く。

479は内面にも施釉する施釉陶器の瓶である。胴部下位，高台無釉。

480は施釉陶器の瓶である。胴部の三方にしぼりを入れ，269，270に類似する。第31区にも類似例がみられる。

481は施釉陶器の油壺である。

482～487は神酒徳利である。482は胴部を方柱状とする施釉陶器。胴部の一方に「大神宮」と陰刻する。口頸部に菊花文を押印する。483，484は赤絵で「御神前」の文字を描く。485，486は松竹梅図と蛸唐草文を描く染付磁器。487は松竹梅文を描く染付磁器。

488は染付磁器の神酒徳利とみられる。松竹梅図を描く。製作年代は18世紀後半から19世紀初め頃とみられる。

489，490は染付磁器の銚子徳利である。489は型紙摺。

491～504は陶器の徳利であり，504以外は全て施釉陶器である。496には白泥によ

Fig.64　第21区 出土遺物（45）

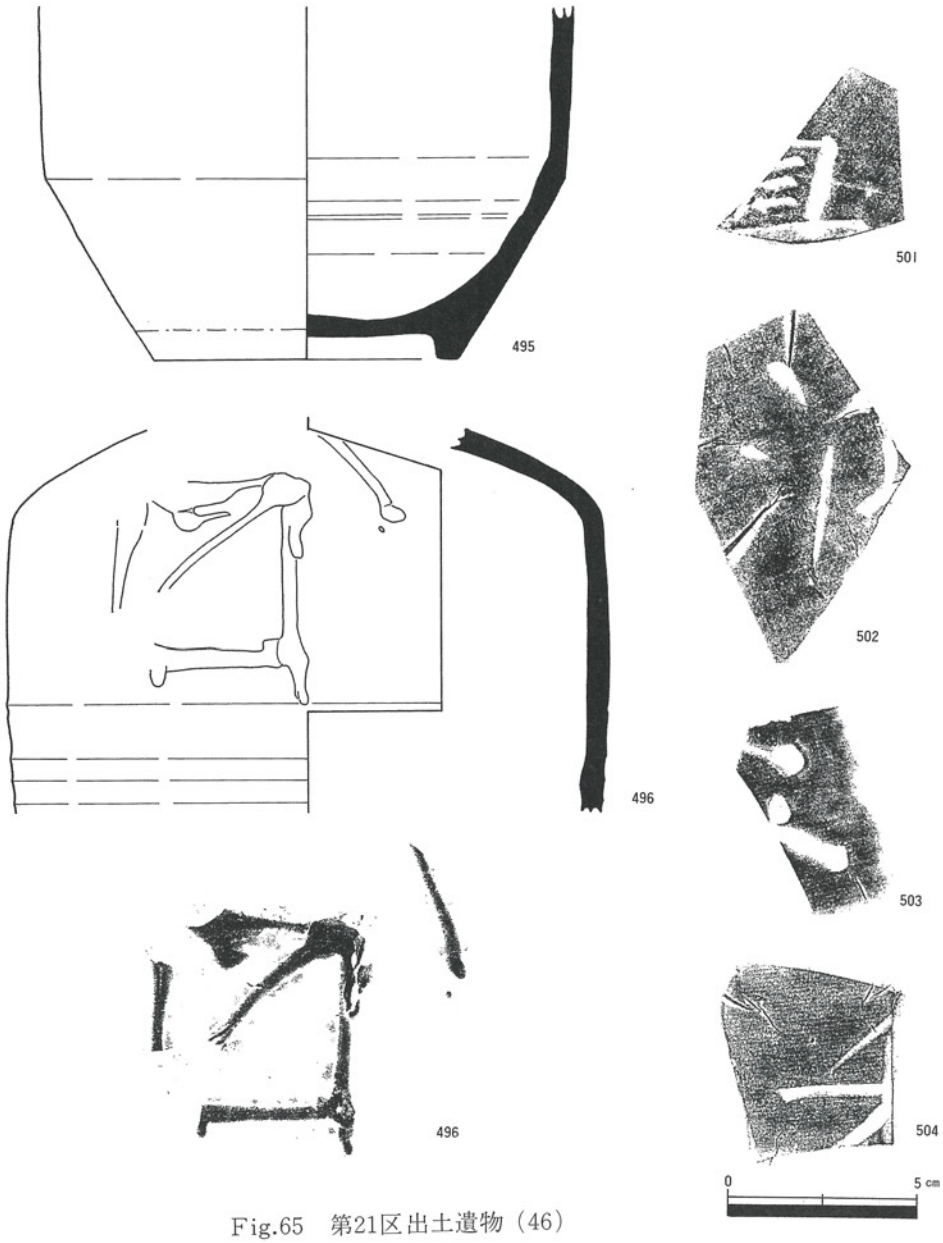


Fig.65　第21区出土遺物（46）

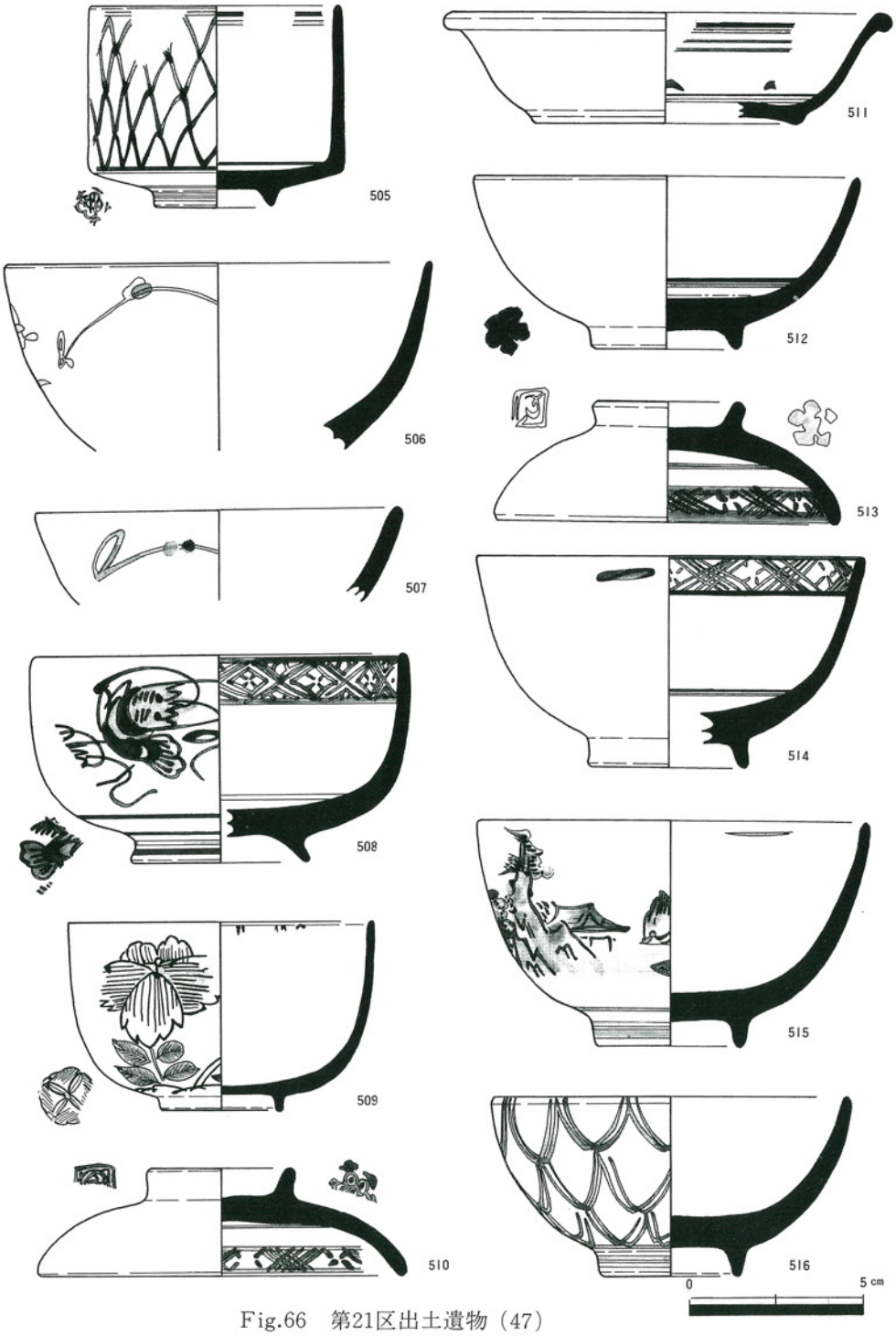


Fig.66　第21区出土遺物（47）

る記号，494，496を除いたその他には陰刻による文字が認められる。大谷焼系とみられる。

491～494は筒状の長い口頸部に，倒卵形の胴部，内向する高い高台という形態をとる。491，493の肩部には文字不詳，492には「𠀋」の記号の陰刻がみられる。陰刻部分は無釉である（以下，徳利の陰刻については同じ）。

496は筒状の胴部をもつ。肩部に白泥で「⌂」とみられる記号を描く。

495は胴部下位に明瞭な稜線を形成する。

497～499には「酒」，500には「店」，501には「嶋」，502には「江」または「鴻」，503には「玉」？，504には「秋」？とみられる文字を陰刻する。

（5）　池状遺構

池状遺構の出土の土器類は少なく，猪口1個体を図示した。

池状遺構周辺からの土器類も少なく，碗3，猪口1，蓋1，鉢1の6個体を図示した。

池状遺構直上からは，大量の土器類が出土している。概報では，盛土状遺構下部としていたが，ここでは池状遺構直上土器類として扱う。碗8，猪口1，蓋2，皿2，燈明皿5，擂鉢2，火舎1，鍋1，土釜1，土瓶1，徳利1の25個体を示した。

①　池状遺構　（Fig. 66）

ⓑ　猪口

筒形で内の深い染付磁器の猪口である。胴部に網目文，見込に五弁花文を施す。18世紀末から19世紀初め頃の製作とみられる。505

②　池状遺構周辺　（Fig. 66）

ⓐ　碗

506～508はくらわんか手の染付磁器碗である。508は，内は深いが器高は低く，撥状に開く高台を有する。製作年代は18世紀後半とみられる。

ⓑ　猪口

509は小丸碗形の染付磁器猪口である。細い線で花図と轡文を描く。19世紀前半の製作とみられる。

ⓓ　蓋

510は青磁染付の蓋である。製作年代は18世紀後半とみられる。

ⓖ　鉢

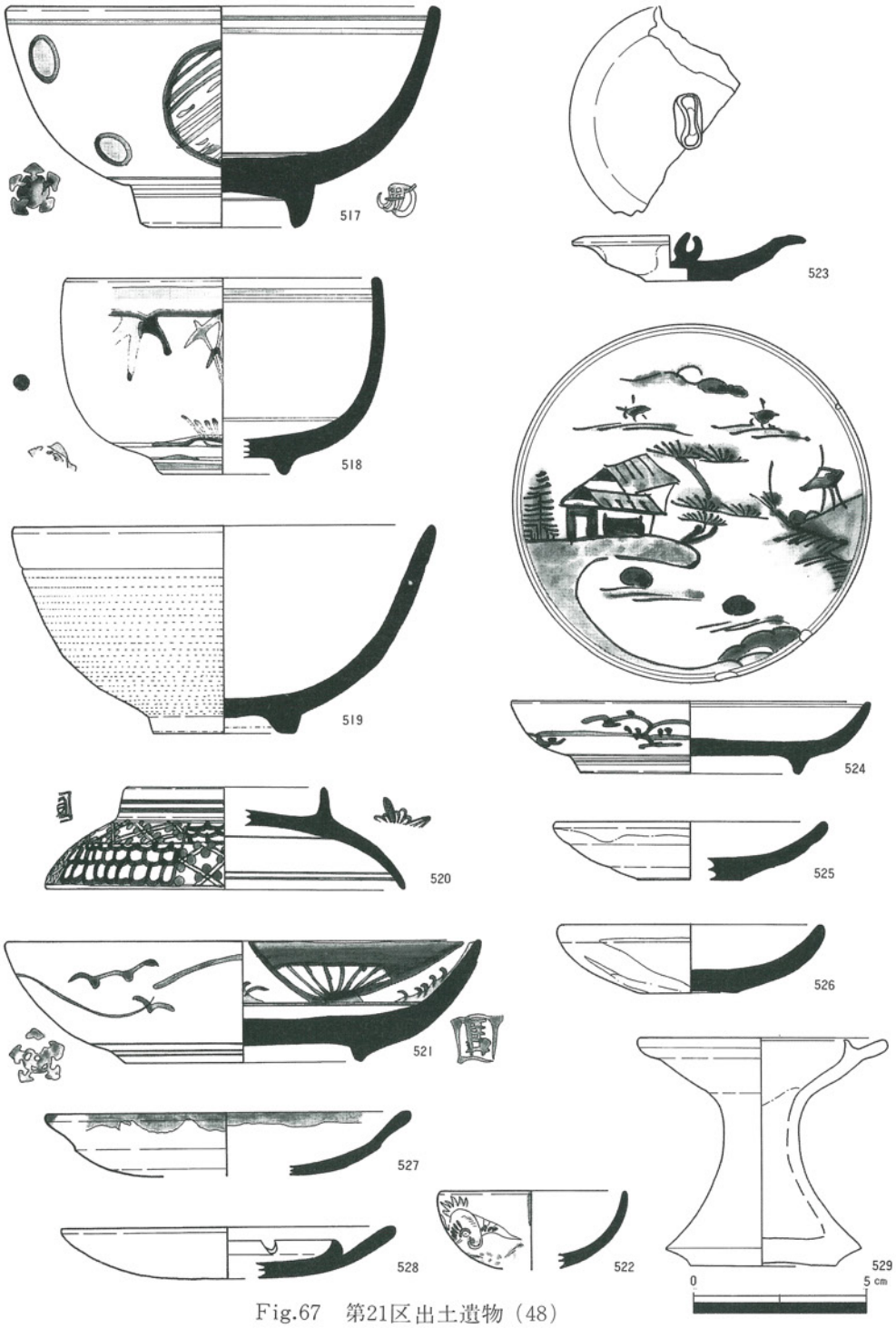


Fig.67　第21区出土遺物（48）

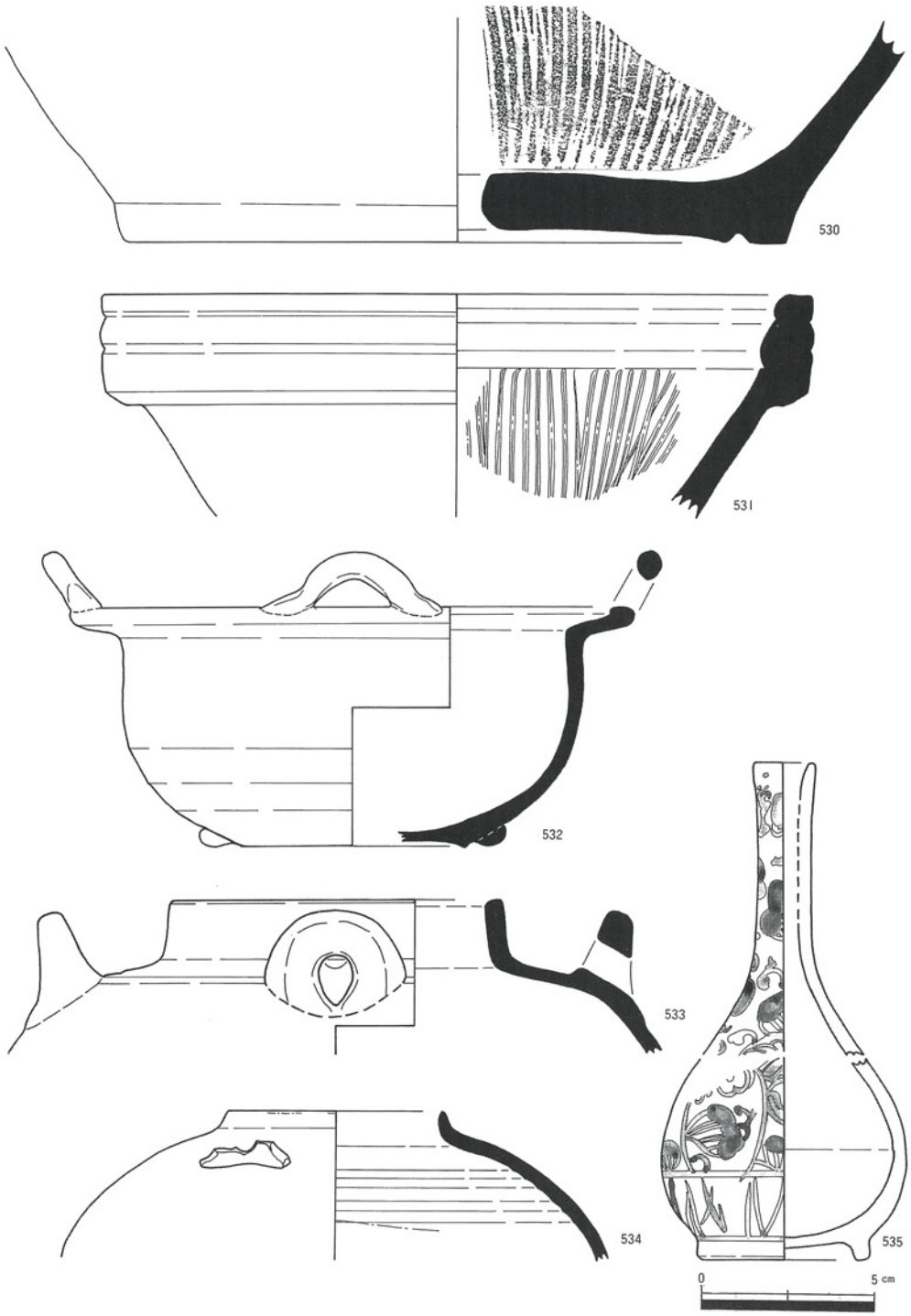


Fig.68　第21区出土遺物（49）

511は端反りの玉縁状口縁を有する染付磁器の鉢である。見込蛇ノ目釉ハギ。

③　池状遺構直上　（Fig. 66～69）

ⓐ　碗

512～514は青磁染付の碗と蓋である。製作年代は18世紀後半とみられる。512は見込蛇ノ目釉ハギとし，四方襷文を施さない。513と514は蓋と碗のセットである。513のつまみ内には，簡略化された渦福銘を施す。

515～517はくらわんか手の染付磁器碗である。18世紀後半から末の製作とみられる。

519は施釉陶器の碗である。ロクロ目を細かい螺旋状に施し，文様的意匠をみせる。淡黄色の素地に，口縁部外側から見込にくすんだ緑色釉，胴部に黄褐色釉をかける。茶器ともみられる。

ⓑ　猪口

522は赤絵の磁器猪口である。底部欠失のため，不明であるが，盃または仏餉具とみられる。

ⓓ　蓋

520は染付磁器の山蓋である。広東碗の蓋とみられる。

523は施釉陶器の落蓋である。小円板をつまみ上げたようなつまみを貼り付ける。

ⓔ　皿

521はくらわんか手の染付磁器皿である。高台裏に「馬」とみられる銘を施す。

ⓕ　燈明皿

527はわずかに端反りする施釉陶器の油皿である。口縁部内外に色濃く煤付着。

525，526は施釉陶器の油皿である。529に類する脚付油皿とセットとなる油皿とみられる。大谷焼系。

528は施釉陶器の油皿である。３分の２を欠失するが，見込の断面三角形状の突帯に半月形の切りこみを２箇所遺存する。

529は施釉陶器の脚付油受皿。大谷焼系。

ⓖ　擂鉢

施釉陶器の擂鉢。530の内底面には，８条と７条の櫛描擂目帯を交差させて施す。底部に内外から長径約２㎝の楕円形焼成後穿孔を施す。植木鉢に転用された備前焼とみられる。

ⓗ 火舎

536は瓦質土器の火舎。菊花文，山に松林などの文様押印陽刻する。

① 鍋・土釜・土瓶

532は施釉陶器の鍋。外に開いた口縁部に，紐状の取手を一対貼り付ける。

534は瓦質土器の茶釜。肩部に三角形状の取手を一対貼り付ける。

533は施釉陶器の土瓶。三角形とみられる取手を貼り付ける。

ⓚ 徳利

535は染付磁器の神酒徳利。18世紀後半から19世紀初め頃の製作とみられる。

（６） 土塁状遺構

土塁状遺構からの出土土器類は，ＳＡ－０４に集中し，ＳＡ－０２，ＳＡ－０３，ＳＡ－０１と少くなっていく。遺構上面出土の土器類もみられるが，ここでは，遺構中出土の確実な土器類のみを図示した。

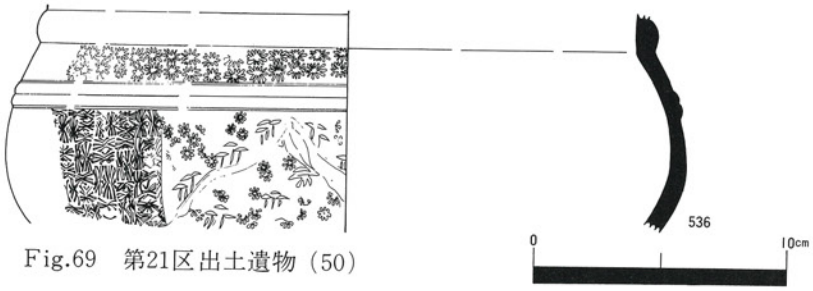


Fig.69 第21区出土遺物（50）

① 土塁状遺構ＳＡ－０４ （Fig. 70）

ⓐ 碗

製作年代18世紀末から19世紀初とみられる染付磁器の碗である。

537と539は，ＳＡ－０４下の石炭ガラ層からの出土である。537は胴部に蛸唐草文，見込に細い線で松竹梅のつなぎ文とみられる文様を施す。

538は広東碗である。43と同じ暦文を施すが，施釉の発色に43が明るい透明感をもつのに対し，ややくすんだ乳灰白色の色調を示す。

ⓑ 猪口

542は施釉陶器の猪口。無釉部分の高台裏に墨書の痕跡がみられる。

ⓓ 蓋

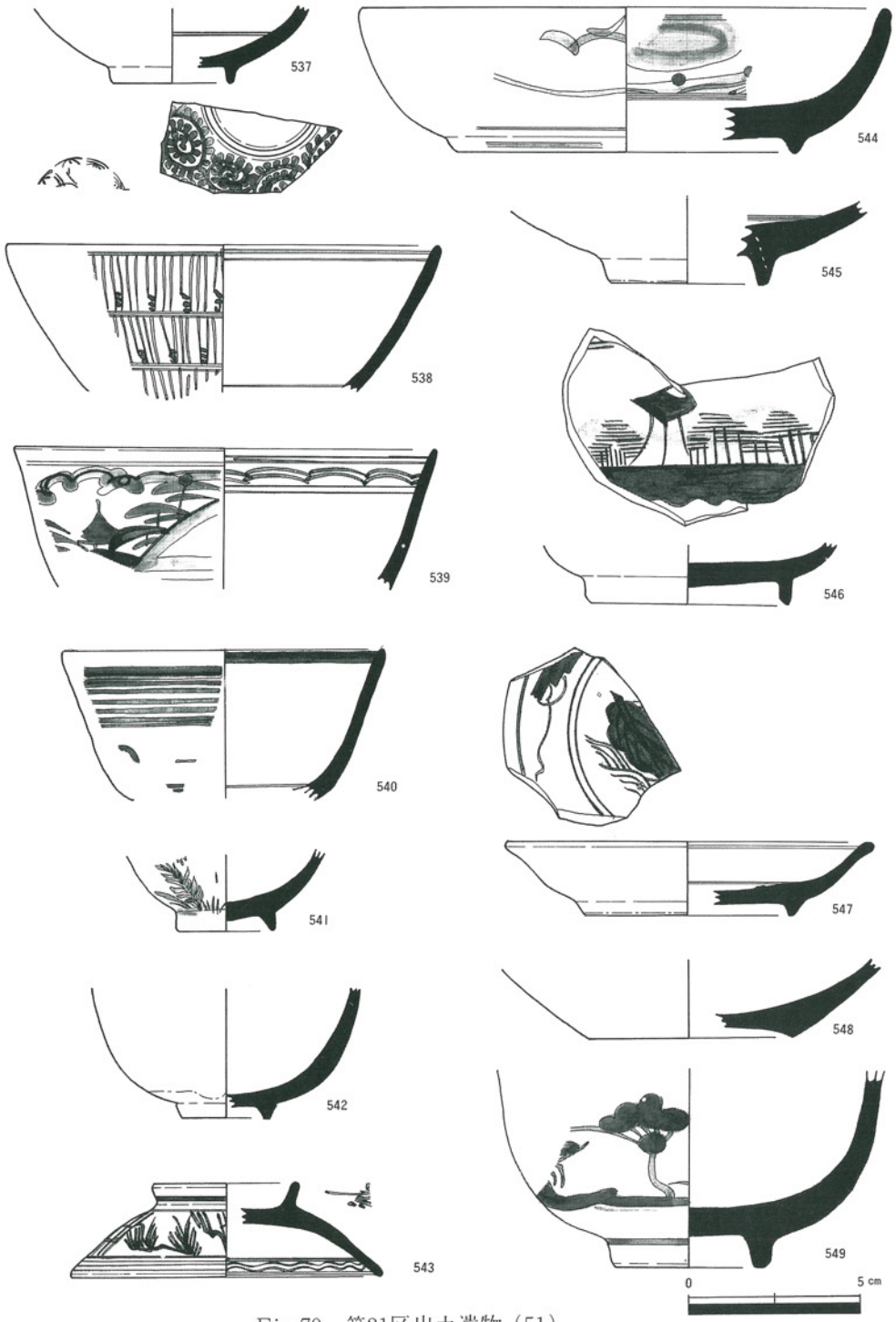


Fig.70　第21区出土遺物（51）

543は染付磁器の山蓋。広東碗の蓋とみられる。天井部裏に「寿」の文字文。

ⓔ 皿

544～547は染付磁器の皿である。

544，545はくらわんか手。545は見込蛇ノ目釉ハギ，高台畳付に砂粒付着。17世紀末から18世紀前半の製作とみられる。

547は端反りし，見込に帆船航海図を描く。第29，31区から，同一製品が出土している。

ⓘ 鍋

548，550は施釉陶器の鍋である。550は片口の片手鍋である。断面六角形状で中空の取手を貼り付ける。唐人図を押印陽刻する。胴部上位に櫛目状文を施す。

② 土塁状遺構ＳＡ－０１　（Fig．70・72）

549は陶胎染付の碗である。内の深いつくりで，草花図様の文様を染付ける。

551は染付磁器の碗である。見込にくつわ文を染付ける。18世紀後半の製作とみられる。ＳＡ－０１基底部出土。

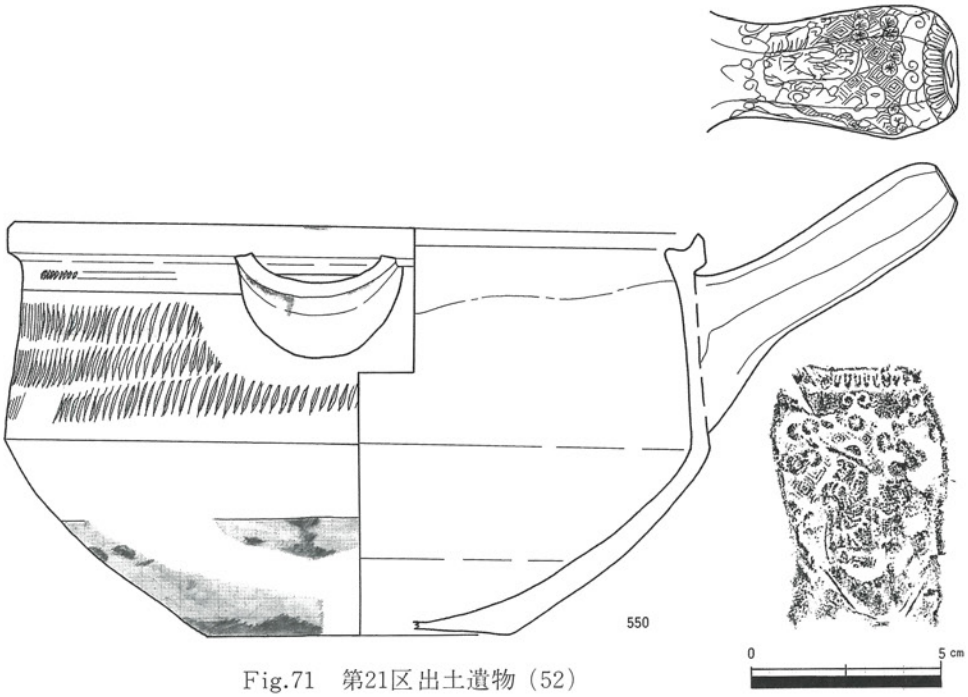


Fig.71　第21区出土遺物（52）

③　土塁状遺構ＳＡ－０２　（Fig. 72）

ⓐ　碗

552，553は染付磁器の碗である。552は内の深いつくりで，見込に葉文を染付ける。553はくらわんか手である。見込に渦文状文様を染付ける。ともに18世紀代の製作とみられる。

ⓑ　猪口

554はくらわんか手の染付磁器猪口である。他に97，98に類似した，腰部に明瞭な稜線を形成する施釉陶器の猪口もみられる。

ⓓ　蓋

555は染付磁器の山蓋である。椿図を染付ける広東碗の蓋とみられる。

ⓔ　皿

556はくらわんか手の染付磁器皿である。高台裏に銘を染付ける。

ⓖ　鉢

557は施釉陶器の鉢である。陶胎染付に類似した淡灰色系の胎土。高台裏の貼り出しは深く，見込にハリ支え痕をみせる。淡灰緑色系の釉をかける。

ⓚ　徳利

558は染付磁器の神酒徳利である。蛸唐草文，草花図を染付ける。

④　土塁状遺構ＳＡ－０３　（Fig. 72）

ⓐ　碗

559は施釉陶器の碗である。見込蛇ノ目釉ハギ状手法をみせる。

ⓔ　皿

560は染付磁器の皿である。くすんだ乳黄白色系の釉をかける。

（７）　祭祀跡

祭祀跡からの出土土器類は少なく，大山祇神社跡１，小祠跡２の３個体にすぎない。ここでは，祭祀跡周辺から出土した土器類を，祭祀跡関連土器類として扱う。

①　大山祇神社跡　（Fig. 73）

ⓕ　燈明皿

561は大山祇神社跡本殿跡から出土した施釉陶器の油皿である。見込に３点のハリ支え痕がみられる。

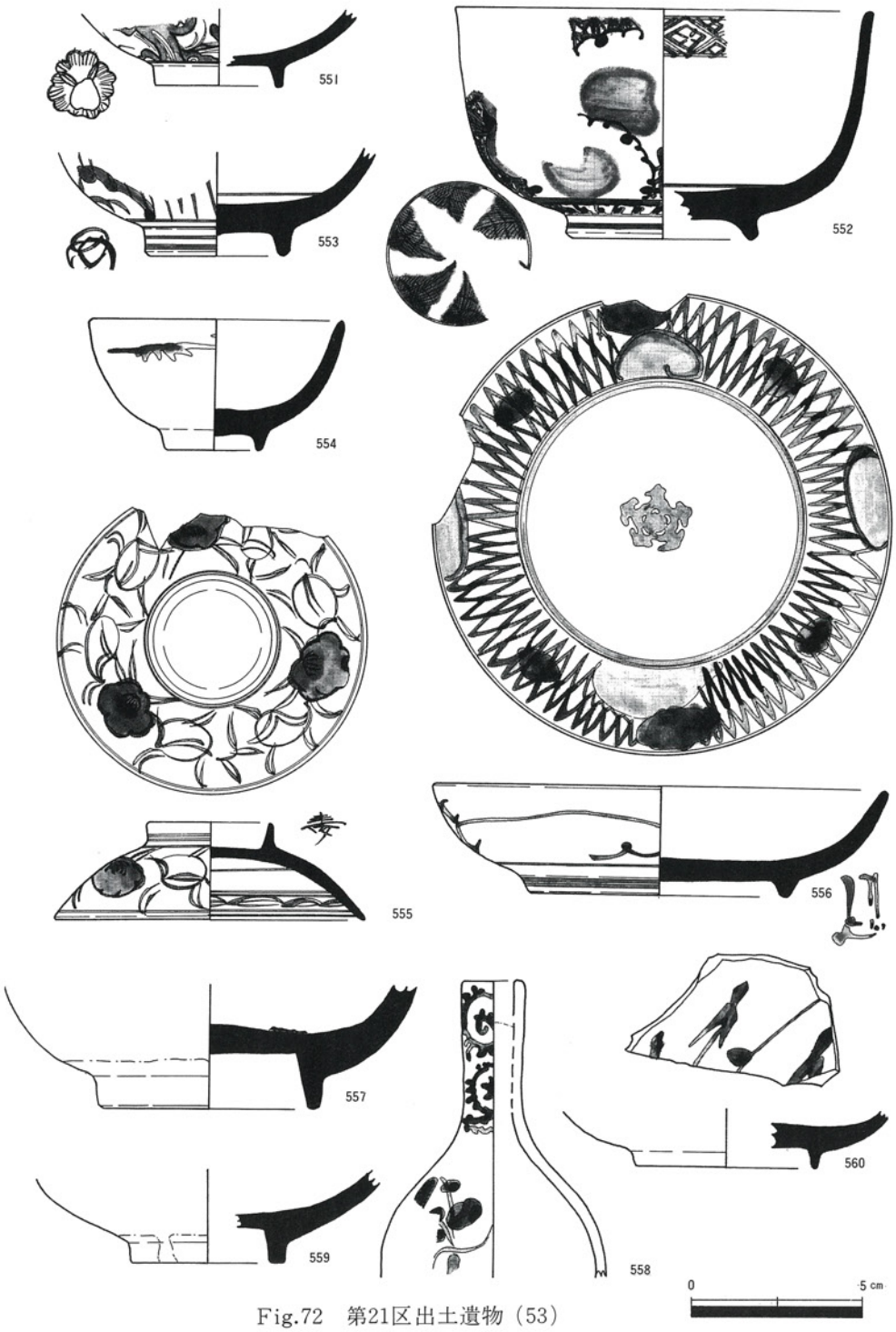


Fig.72　第21区出土遺物（53）

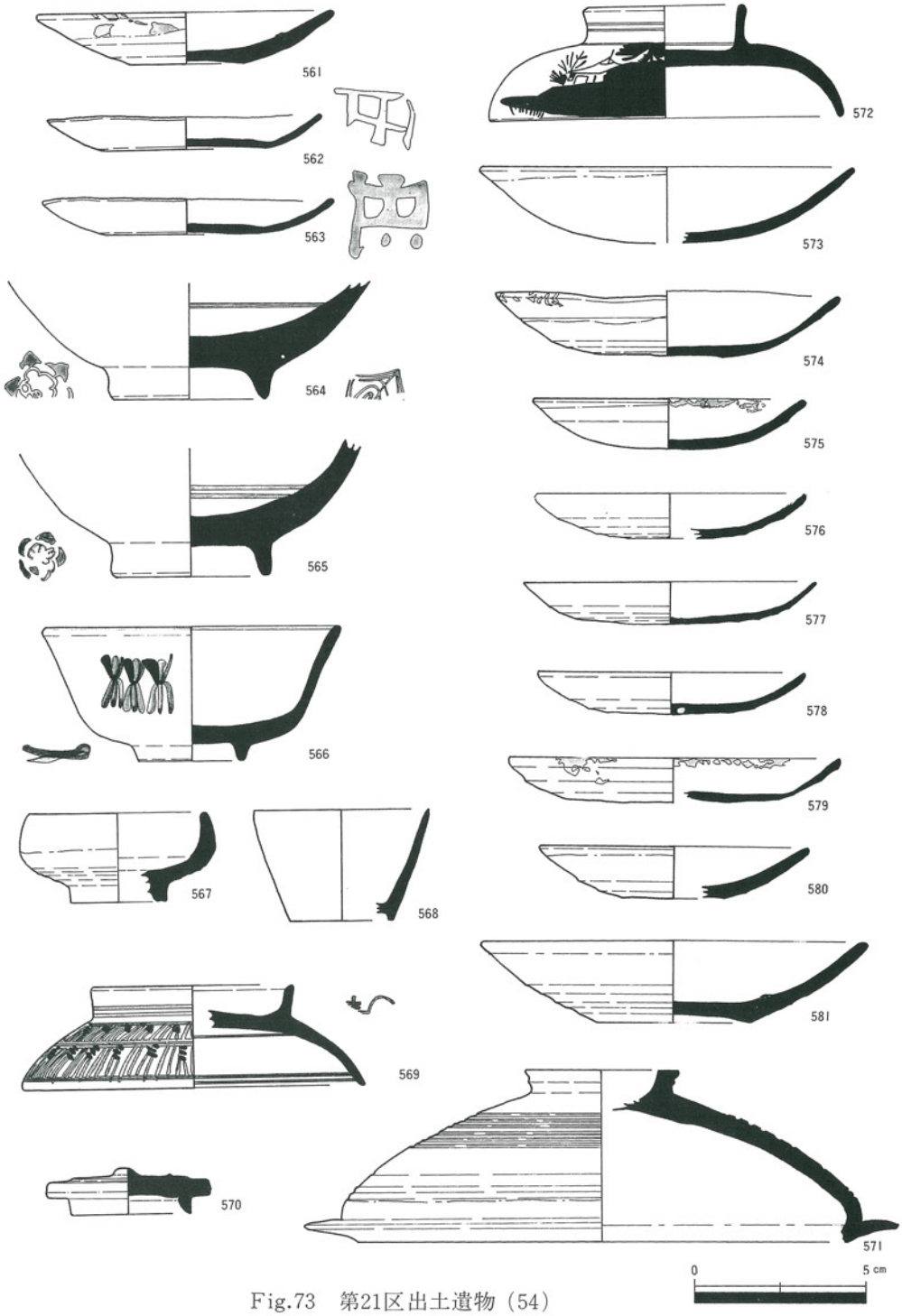


Fig.73　第21区出土遺物（54）

② 小祠跡　(Fig. 73・74)

ⓔ 皿

562, 563は土師質土器の皿である。ほぼ同一の形態，口径，器高を示す。見込に墨書がみられる。

③ 祭祀跡周辺　(Fig. 74)

ⓐ 碗

564, 565は青磁染付の碗である。見込に五弁花文，高台裏に渦福銘を染付ける。18世紀後半の製作とみられる。

ⓑ 猪口

566は端反りする染付磁器の猪口である。紐文を染付け，黄茶色の口銹を施す。愛知県かみた窯製とみられる（註４）。

567は施釉陶器の猪口。

ⓓ 蓋

569, 572は染付磁器の山蓋である。569は暦文を染月ける広東碗の蓋とみられる。572には樹下一屋図を暗藍色に染付ける。

570は小さな擬宝珠つまみとかえりをもつ扁平な施釉陶器の山蓋である。茶入の蓋ともみられる。

571は高台状のつまみをもち，口縁部が外に拡張する施釉陶器の山蓋。鍋の蓋である。

ⓕ 燈明皿

573～579は施釉陶器の油皿である。赤褐色系の素地に半透明の釉をかけ，暗赤褐色系の発色を示す。口縁部内外に煤が付着している。577は暗灰色の素地に暗褐色釉をかける。

580～582は淡黄色系の素地に淡緑色系釉をかける施釉陶器の油皿である。582の見込には，３条単位３帯の沈線が施されている。

583は淡黄色の素地に茶褐色釉をかける施釉陶器の油皿である。見込に砂目をみせる。

584は施釉陶器の油受皿である。見込に断面三角形状の突帯をめぐらし，半月形切りこみを入れる。

ⓖ 鉢

585は染付磁器の鉢である。口縁部を折り返して玉縁状とする。

ⓙ 壺

586，587の施釉陶器の壺である。586は肩衝茶入的形状を示す短頸壺。

ⓚ 徳利

588は染付磁器の神酒徳利である。S字状の胴部をもつとみられる。蛸唐草文を染付け，273～275に類例がみられる。

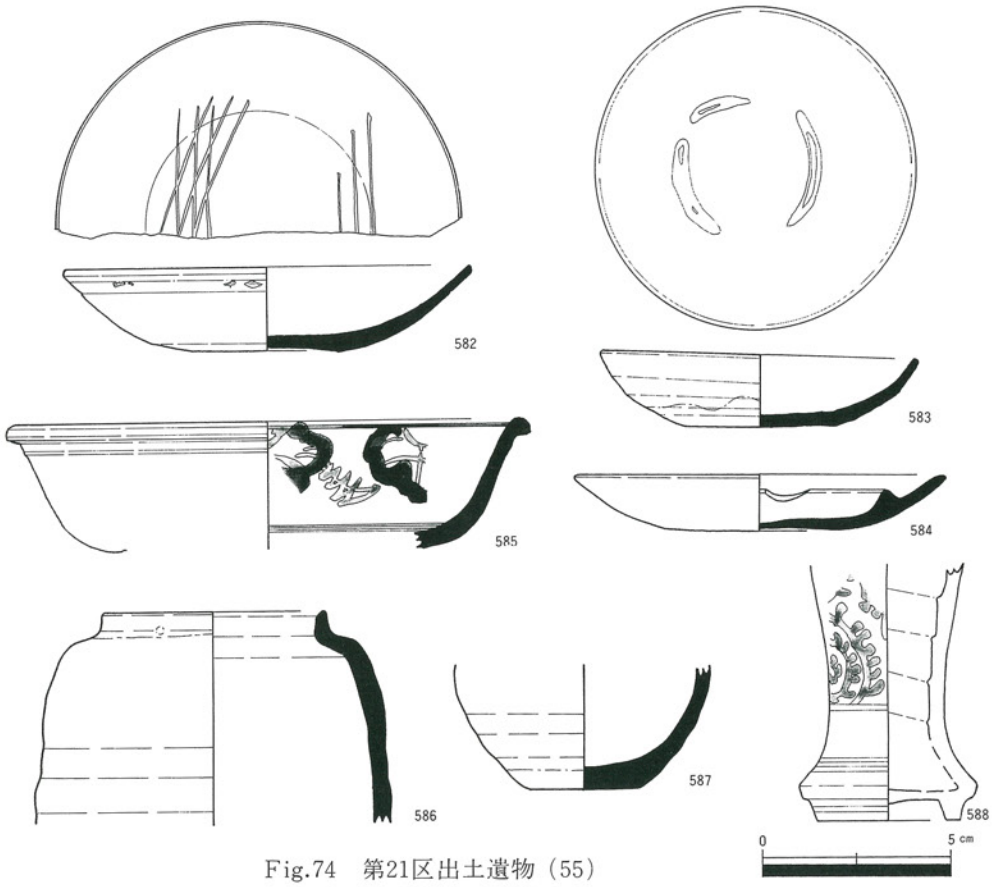


Fig.74　第21区出土遺物（55）

（8）　礎石建物跡

礎石建物跡ＳＢ－０４，０２からの出土土器類は細片であるため，図示しなかった。ここでは，ＳＢ－０３，０１の土器類を示した。

①　礎石建物跡ＳＢ－０３　（Fig. 75～82）

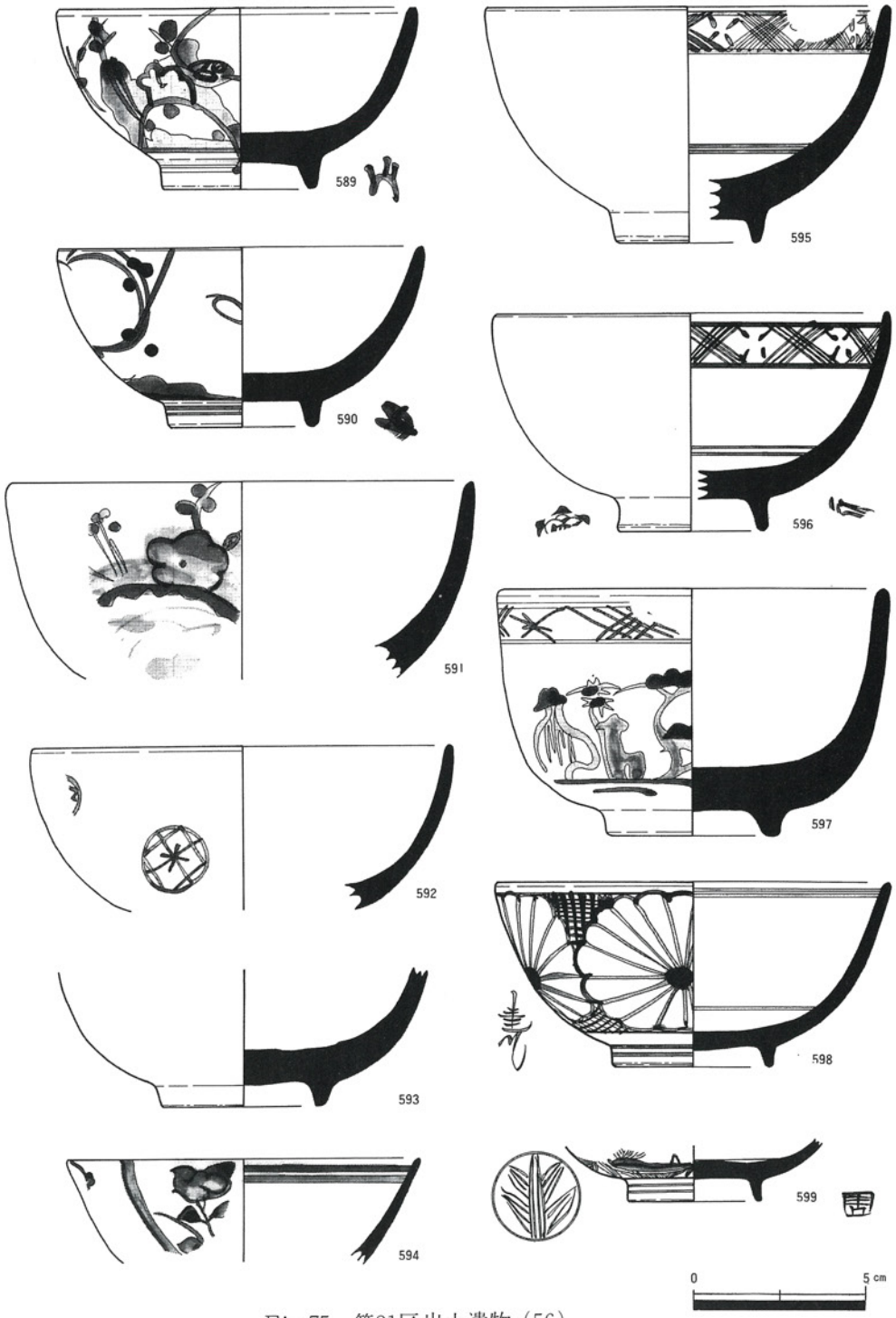


Fig.75　第21区出土遺物（56）

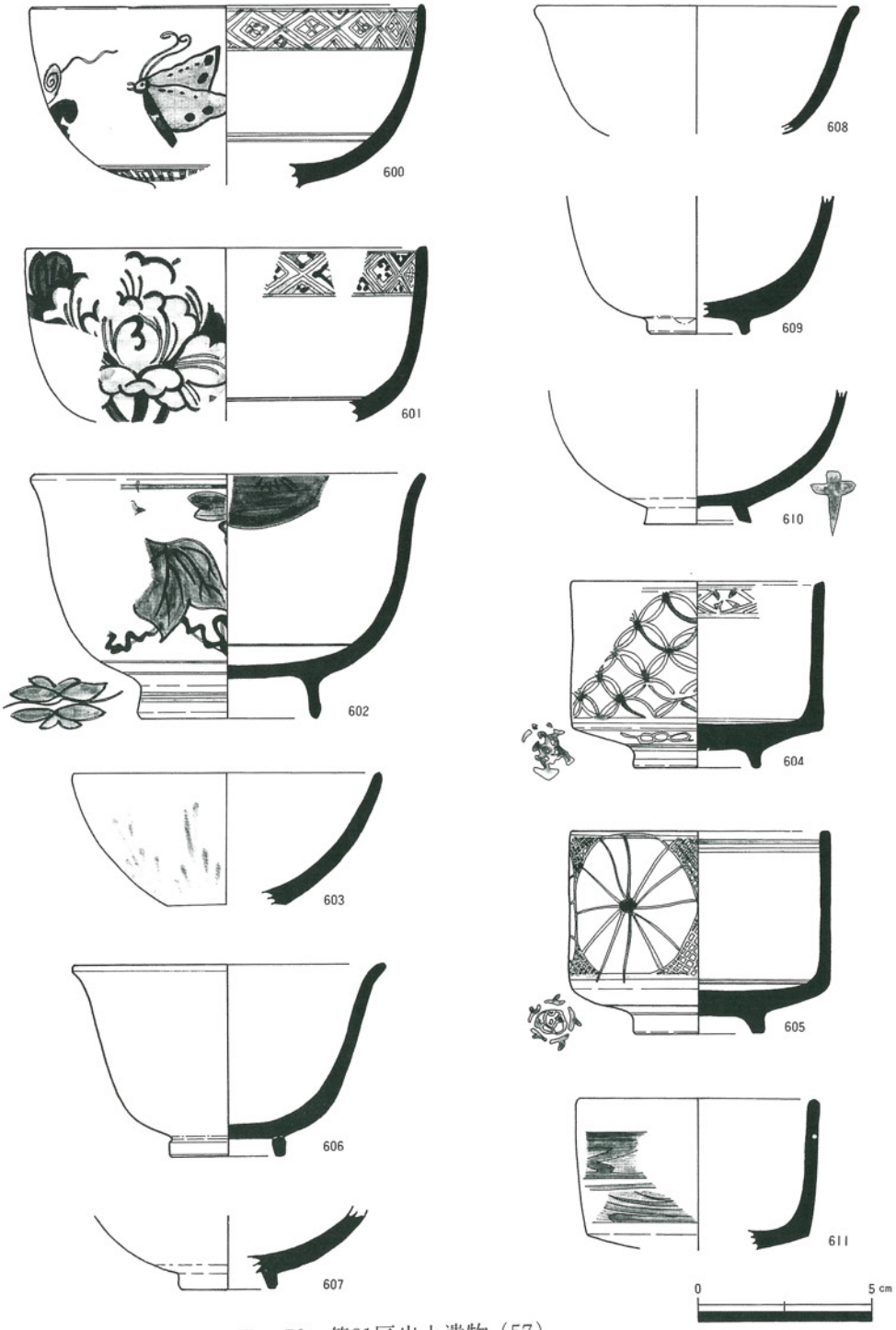


Fig.76　第21区出土遺物（57）

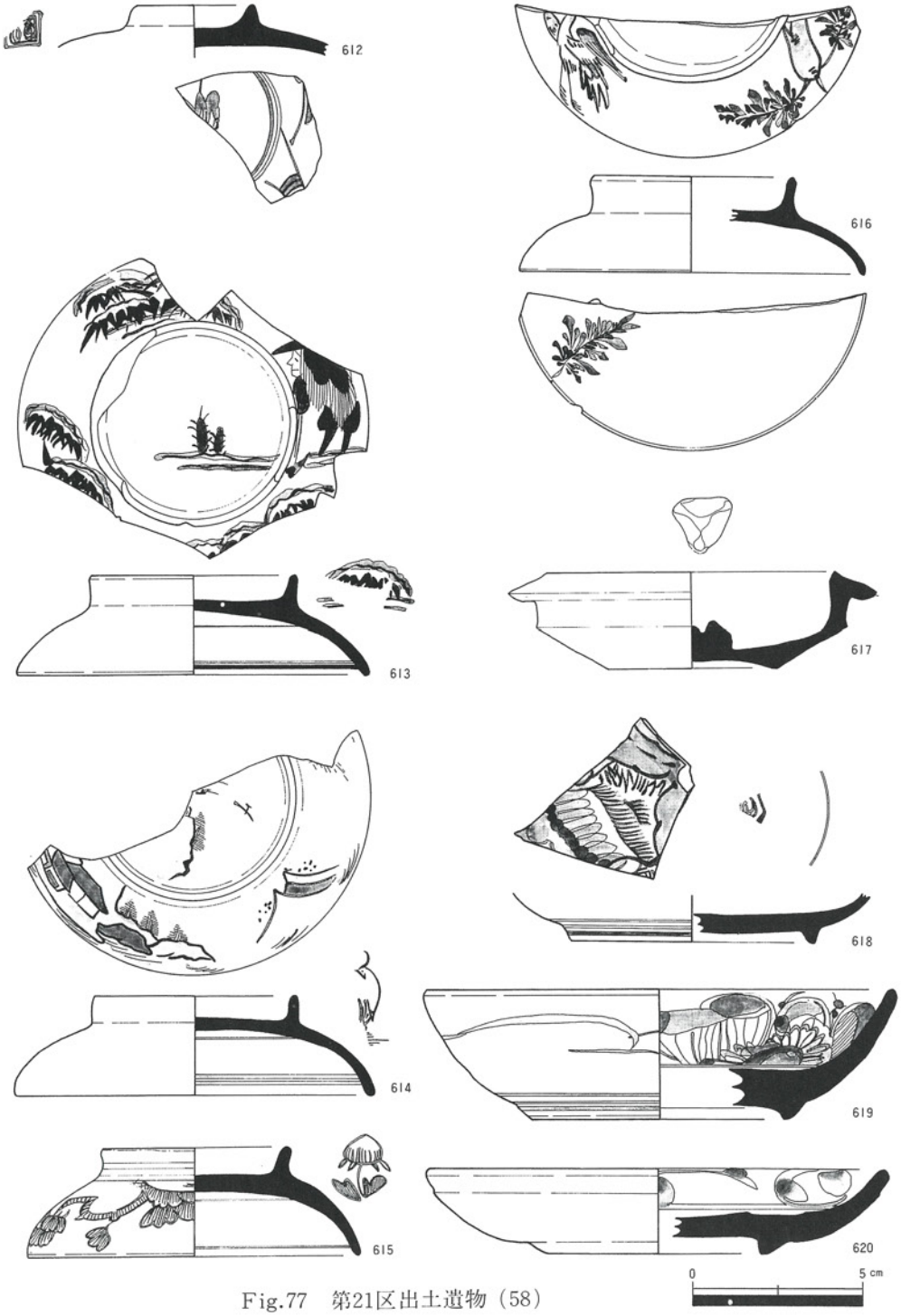


Fig.77　第21区出土遺物（58）

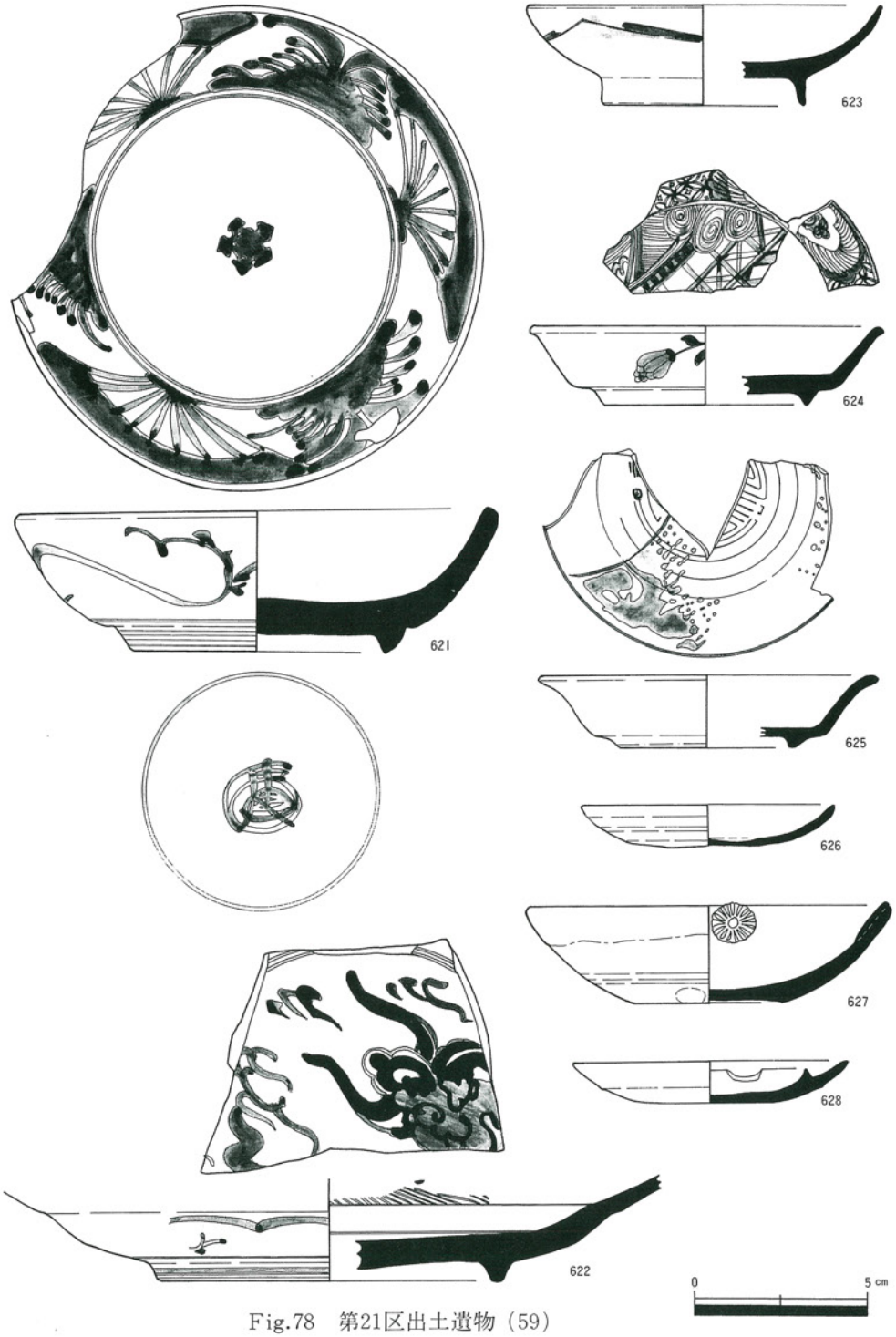


Fig.78　第21区出土遺物（59）

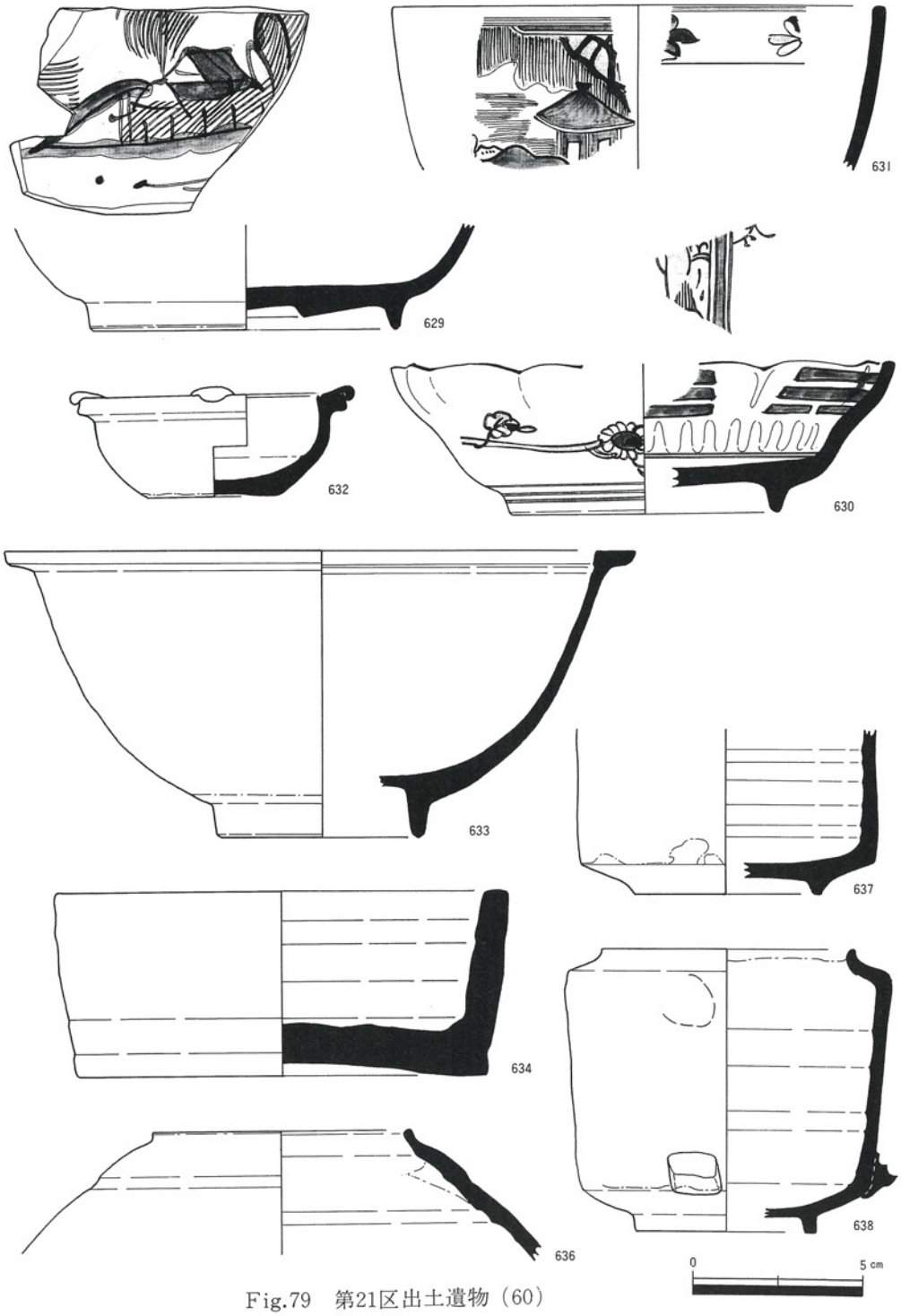


Fig.79　第21区出土遺物（60）

礎石建物跡ＳＢ－０３の土器類は，建築時の床面直上と炭化物層上面の２つに分けられる。

碗15，猪口８，蓋６，皿８，燈明皿３，鉢７，香炉・火舎２，土釜１，壺・甕５，瓶・徳利６の６１個体を図示した。

ⓐ　碗

589～593はくらわんか手の染付磁器碗である。製作年代は18世紀代とみられる。589～591には，雪輪梅樹図を染付ける。590は床面直上出土。

597は内の深い陶胎染付碗である。

595・596は青磁染付の碗である。18世紀後半の製作とみられる。

600・601は内の深い染付磁器の碗。蝶図あるいは牡丹図を胴部に，口縁部内側に四方襷文を染付ける。製作年代，18世紀後半とみられる。

602は高高台で，端反りする染付磁器の碗である。19世紀前半の製作とみられる。

603はにぶい緑褐色系釉で若松図を描く施釉陶器の小丸碗。京焼の猪口とみられる。

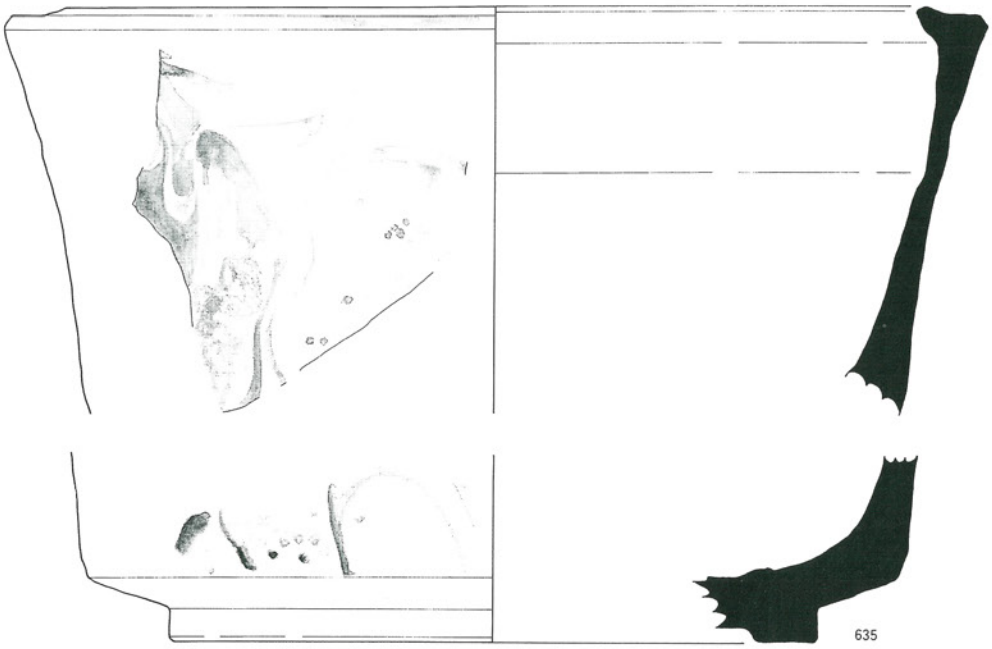


Fig.80　第21区出土遺物（61）

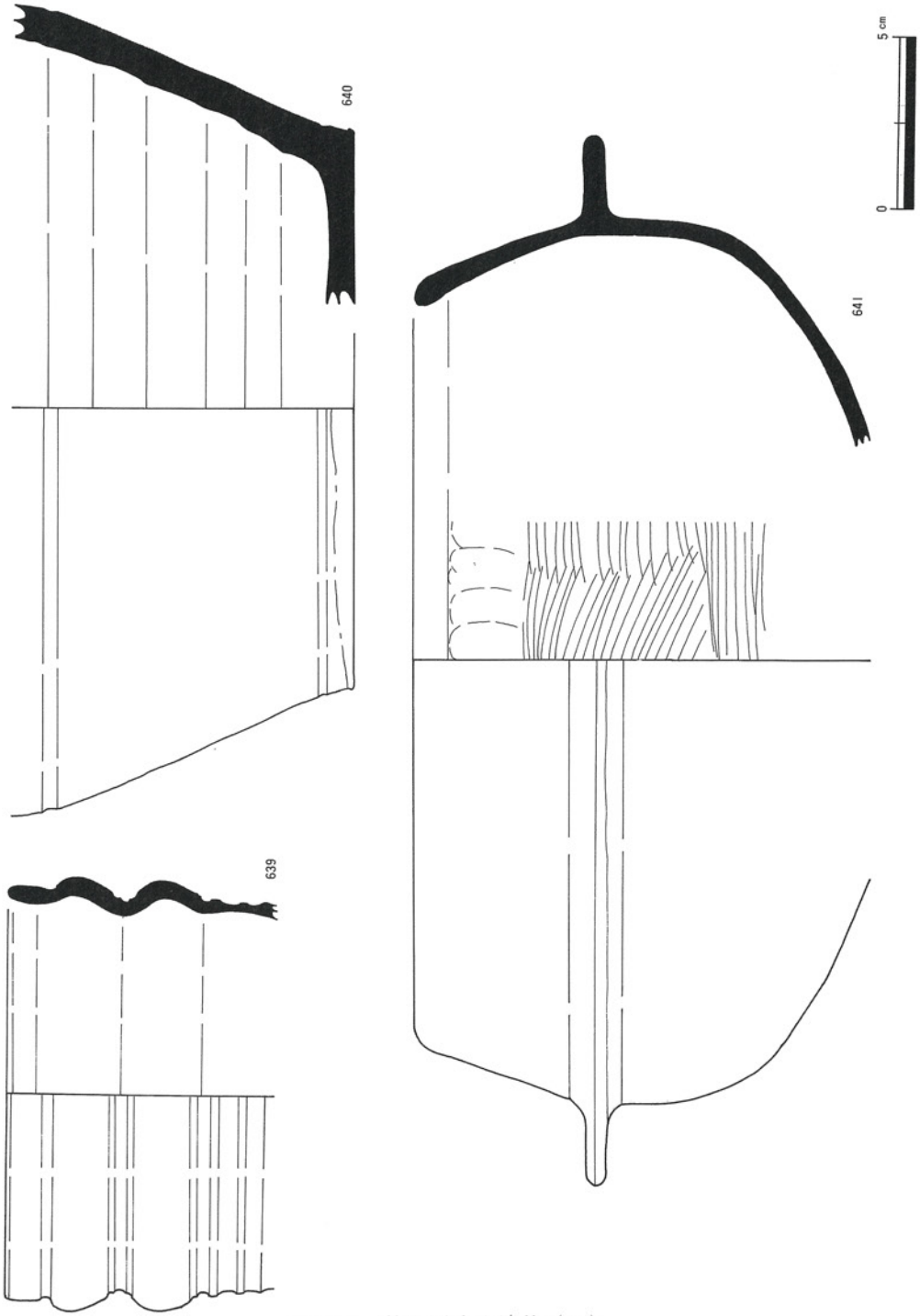


Fig.81　第21区出土遺物（62）

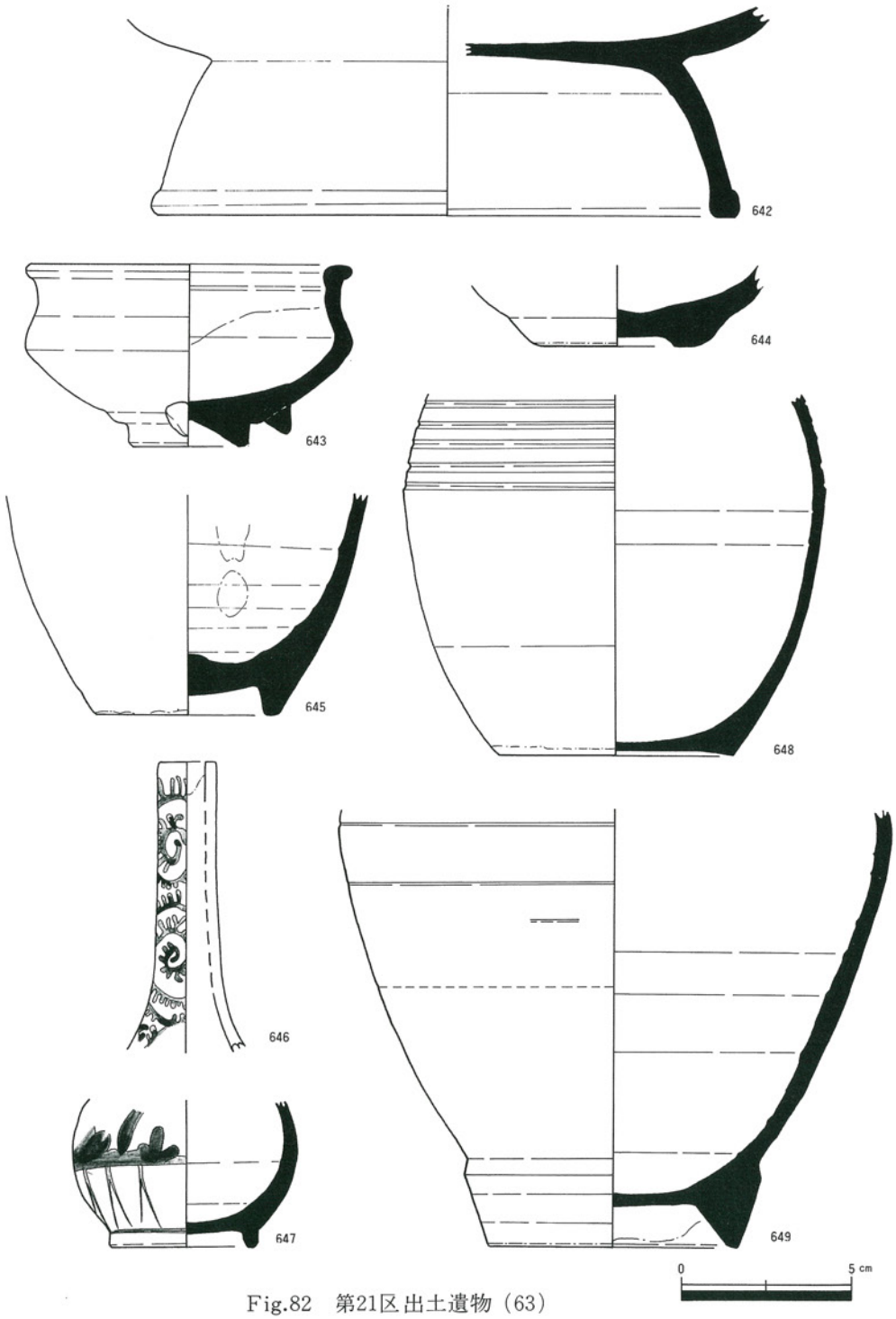


Fig.82　第21区出土遺物（63）

ⓑ 猪口

604，605は筒形の染付磁器猪口である。604は口縁部内側に四方襷文を染付け，74に類例がみられる。605は口縁部内側に2条の圏線を染付け，類例に78，505がある。

606～610は施釉陶器の猪口である。606・608・609は端反りする。606は竹節状高台とする。610の高台裏に「十」の墨書がみられる。609は床面直上出土。

611は筒形の施釉陶器猪口である。暗緑褐色釉にて文様を施す。

ⓓ 蓋

612は青磁染付の山蓋である。高台裏に渦福銘を染付ける。

613～616は染付磁器の山蓋である。19世紀初め頃の製作とみられる。616は406と同一製品である。615には細い線で牡丹図を染付ける。

617は施釉陶器の落蓋である。三方を内側に折りこんだつまみを貼り付ける。

ⓔ 皿

619～622はくらわんか手の染付磁器皿である。製作年代は18世紀とみられる。620以外に唐草文を染付ける。621に茶褐色釉による口銹を施す。620に見込蛇ノ目釉ハギ。622は2段に屈曲して拡がる大皿。

624，625は端反りする型打ち成形の染付磁器皿である。624には細い線で花図と桜閣図を染付ける。床面直上出土。625の見込には「寿」の文字文を押印し，その上に波涛状文様を染付ける。同じく，赤色釉で「□田」銘を描く。茶褐色釉にて口銹を施す。

ⓕ 燈明皿

626，627は施釉陶器の油皿である。627は口縁部内側に菊花文を押印した円形浮文を貼り付ける。美濃瀬戸系とみられる。床面直上出土。

628は施釉陶器の油受皿。見込に断面三角形状の突帯をめぐらし，半月形の切りこみをいれる。2箇所遺存するが，3箇所であったとみられる。

ⓖ 鉢

629，630は菊鉢形とする染付磁器の鉢である。629は蛇ノ目凹形高台。630には，花唐草文，八卦文，唐人図を染付ける。茶褐色の口銹を施す。18世紀後半の製作とみられる。

673も同一製品である。

631は染付磁器の鉢である。口縁端部を平坦につくる。

632は大谷焼系とみられる施釉陶器の鉢。634は平底で半筒形の粗製品である。鶏の水飲み容器とみられる。（豊田　1969）。213に類似する。

635は施釉陶器の大型鉢である。外傾する筒状で，口縁部を内側に折りこむ。文様を押陰刻し，緑褐・暗緑・暗藍系釉で象る。高台以外に全面施釉し，貫入がみられる。内面に重ね焼きの痕跡。美濃・瀬戸系とみられる。徳島市城ノ内遺跡からも類似資料が出土している。

ⓗ　香炉・火舎

643は青磁様とした磁器の香炉である。壺形，削り出し高台。高台脇に小さな三足を貼り付ける。釉がけは厚いが，青灰色から褐灰色とムラがみられる。

642は高い高台を有する瓦質土器の火舎である。高台貼り付け。

ⓘ　土釜

641は瓦質土器の土釜。鍔を有し，内面をハケ状工具で調整する。

ⓙ　壺・甕

636～639は施釉陶器の壺である。637・638は肩衝形の高台を有する短頸壺とみられる。638の胴部には取手を貼り付ける。639は筒形で，胴部に波形のしぼりをみせる。花生ともみられる。636は釉のムラがみられる無頸壺。

640は施釉陶器の甕または鉢。平底で，底部以外の内面にも施釉する。大谷焼系。

ⓚ　瓶・徳利

644，645は碁笥底状の底部をもつ花生である。644には淡緑色の釉をかける。

646，647は染付磁器の神酒徳利である。18世紀後半から19世紀初め頃の製作とみられる。

648，649は施釉陶器の徳利。648は平底。649は高台をもち，大谷焼系。

②　礎石建物跡ＳＢ－０１　（Fig．83・84）

礎石建物跡ＳＢ－０１では，碗１，皿１，香炉１，鍋１の４個体を図示した。

ⓐ　碗

650は端反りする染付磁器の碗である。製作年代は19世紀後半とみられる。

ⓔ　皿

651は施釉陶器の下皿である。櫛状工具による下目を施す。外面に布目痕をみせる。

ⓗ　香炉

Fig.83　第21区出土遺物（64）

652は施釉陶器の香炉。壺形。

① 鍋

653は瓦質土器の鍋。浅い身から，口縁部が外に拡張して，平坦図を形成する。

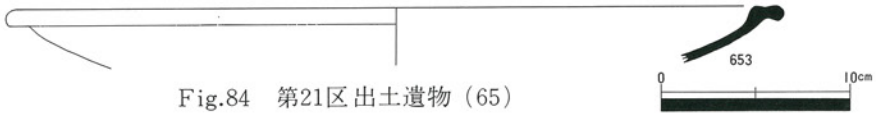


Fig.84　第21区出土遺物（65）

（9）　井戸跡　（Fig. 83）

井戸跡ＳＥ－０１，０２から出土した土器類は，陶磁器の細片にすぎない。ここでは，ＳＥ－０３の掘り方から出土した土器類を図示した。

ⓓ 蓋

654は施釉陶器の落蓋である。擬宝珠状の小さなつまみを貼り付ける。回転糸切り。

ⓖ 鉢

655は施釉陶器の鉢。口縁部を外に拡張し，平坦図を形成する。大谷焼系。

ⓚ 徳利

656は施釉陶器の徳利。胴部に「堂」とみられる刻字。大谷焼系。

（10）　溝状遺構

溝状遺構ＳＤ－０６，０４からは陶磁器の細片が出土している。ここでは，ＳＤ－０１，０２，０３，０５の土器類を図示した。

① 溝状遺構ＳＤ－０１　（Fig. 83・85）

溝状遺構ＳＤ－０１では，碗１，猪口１，蓋２，燈明皿２，鉢１，土釜１，壺１，徳利１の10個体を図示した。

ⓐ 碗

664は施釉陶器の汁器。口縁部直下にわずかにくぼみをみせる。

ⓑ 猪口

658は磁器の猪口。淡い灰黒色釉で草花図と，高台裏に「乾山」銘を描く。

ⓓ 蓋

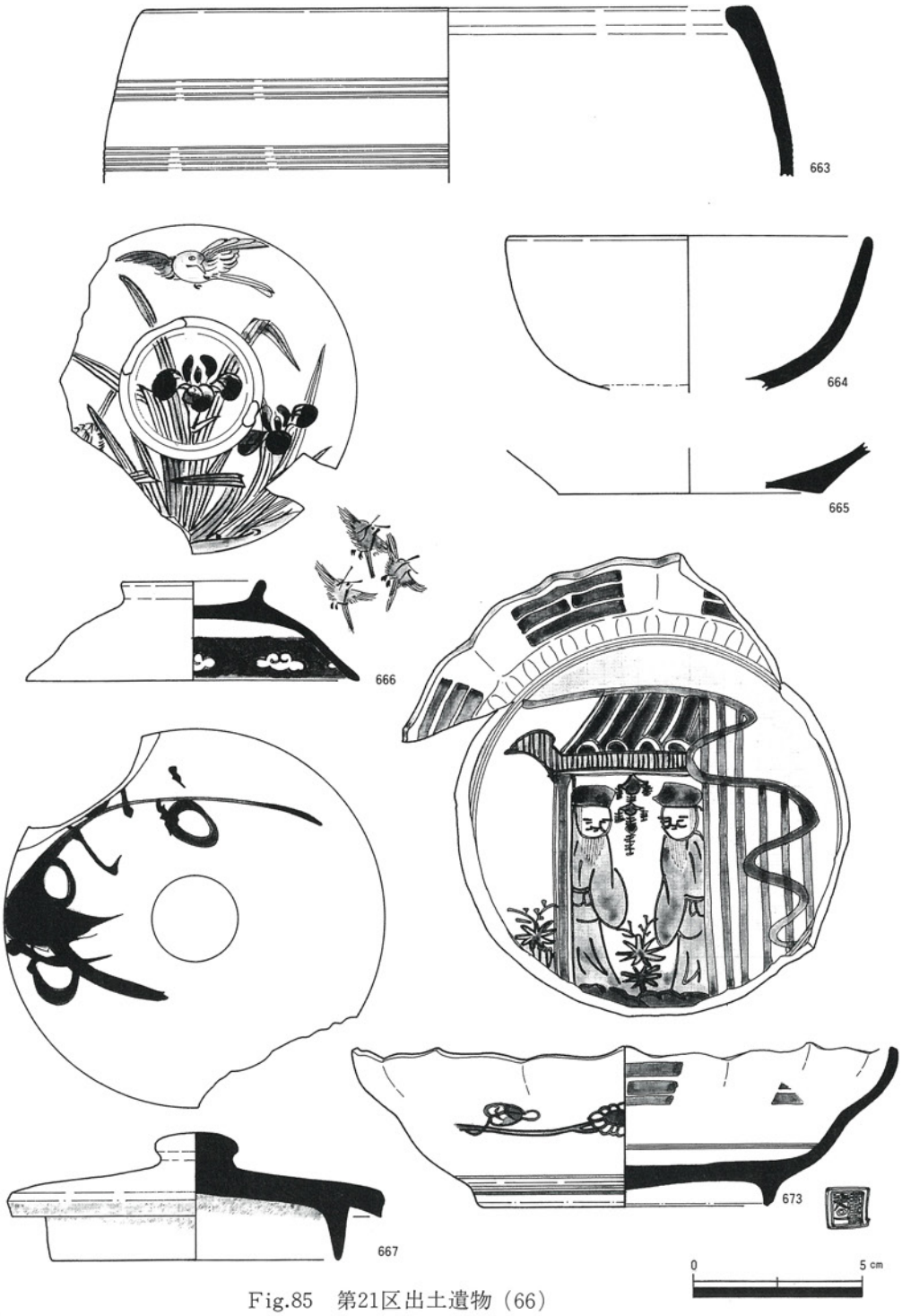


Fig.85　第21区出土遺物（66）

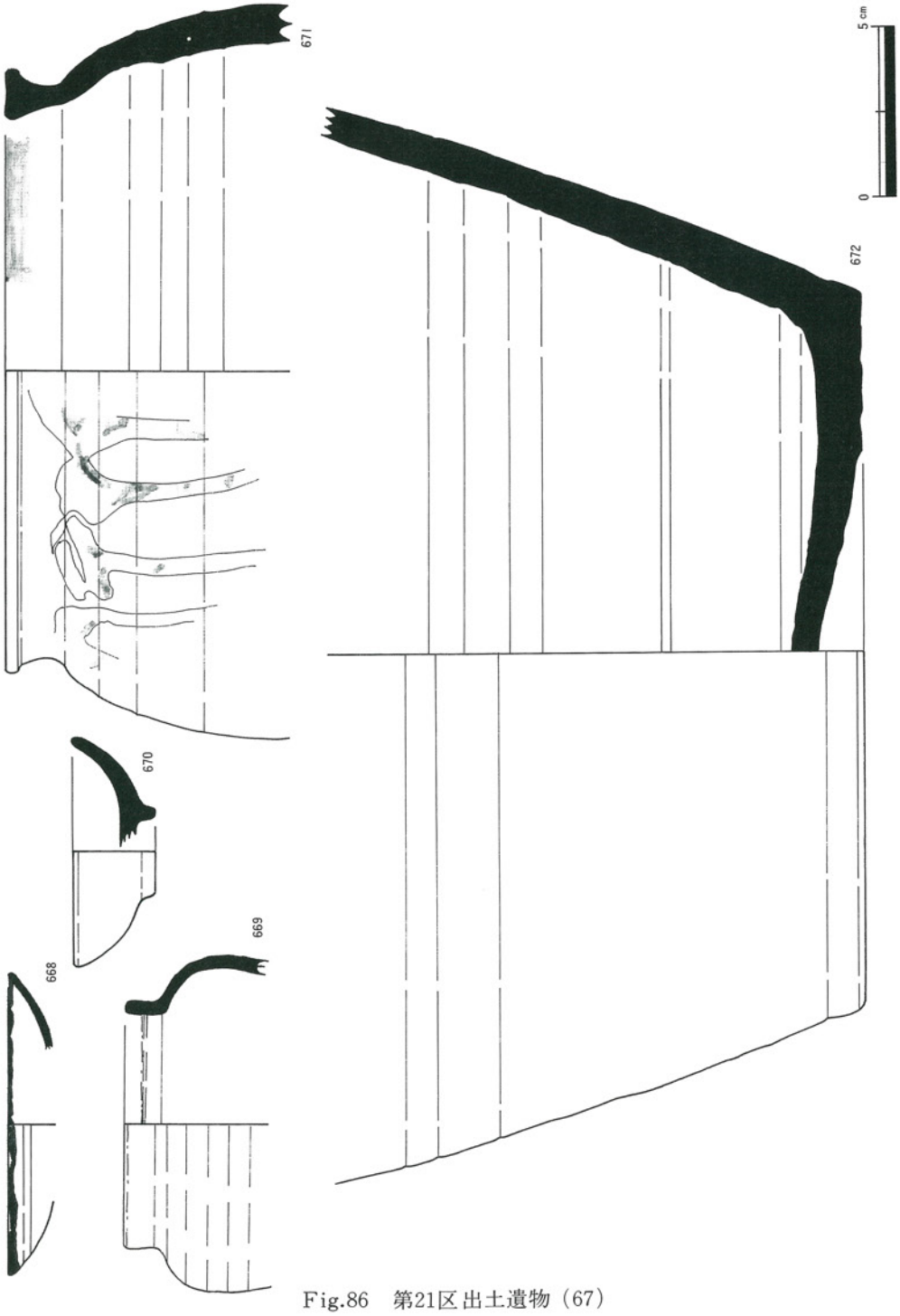


Fig.86　第21区出土遺物（67）

666は端反りする染付磁器の山蓋。細い線であやめに雲雀図を染付ける。製作年代は19世紀前半とみられる。

667は擬宝珠つまみとかえりをもつ施釉陶器の山蓋。黒褐色釉で天井部に文様を描く。

ⓕ　燈明皿

661は施釉陶器の油皿。659は施釉陶器の脚付油受皿。口縁部内側に断面三角形状の突帯をめぐらし，半月形切りこみを1箇所遺存する。大谷焼系。

ⓖ　鉢

660は施釉陶器の鉢。見込と高台脇に各3点のハリ支え痕。瀬戸焼とみられる。

ⓘ　土釜

663は瓦質土器の土釜。口縁端部内側を肥厚させ，上端に平坦図を形成する。

ⓙ　壺

657は施釉陶器の小壺。肩部に，にぶい緑色釉で3点の斑点状文様を施す。油壺ともみられる。

ⓚ　徳利

662は施釉陶器の徳利。平底で，胴部下位に稜を形成する。胴部に自然釉がみられる。

②　溝状遺構ＳＤ－０２　（Fig. 85・86）

溝状遺構ＳＤ－０２では，猪口1，壺1，鍋1の3点を図示した。

ⓐ　猪口

670は磁器の猪口。盃とみられる。

ⓘ　鍋

665は施釉陶器の鍋。内面施釉。外面煤付着。

ⓙ　壺

669は施釉陶器の壺。肩衝形の短頸壺。淡黄色の素地に半透明釉をかける。

③　溝状遺構ＳＤ－０３　（Fig. 85・86）

溝状遺構ＳＤ－０３では，燈明皿1，甕2の3個体を図示した。

ⓕ　燈明皿

668は施釉陶器の油皿。口縁部内外に，色濃く煤が付着している。

ⓙ　甕

671，672は施釉陶器の甕。671の肩部には，白灰色系釉による流し釉手法がみられる。672の胎土には，５㎜以下の多くの砂粒を含む。内面に自然釉。

④　溝状遺構ＳＤ－０５

溝状遺構ＳＤ－０５では，鉢１個体を図示した。

ⓖ　鉢

673は菊鉢形とする染付磁器の鉢である。花唐草文，八卦文，唐人図を染付ける。暗茶褐色の口銹を施す。高台裏の角銘は，佐賀県樋口窯物原中層資料と同じである。18世紀後半の製作とみられる。630も同一製品である（註５）。

２．瓦

大山祇神社跡，小祠跡，礎石建物ＳＢ－０１の石組遺構，礎石建物跡ＳＢ－０４，土塁状遺構ＳＡ－０１，溝状遺構ＳＤ－０５およびその周辺から，大量の瓦が出土している。平瓦がその大部分を占め，特徴のある瓦は少ない。ここでは，軒丸瓦３，鳥衾１，棟瓦１の５個体を図示するにとどめた。

①　軒丸瓦　（Fig. 87）

674は井戸跡ＳＥ－０２のすぐ西の，遺物包含層中から出土した三ッ巴文軒丸瓦である。瓦当文様は左巻三ッ巴文と連珠文の組み合わせであり，巴文の頭部は大きく，尾根も太く短い。珠文は直径約1.2㎝と大きく，13～14個とみられる。周縁は幅約2.1㎝，高さ約0.7㎝と広くて高い。瓦当と体部の接合位置は，先端からやや下り，上端に反りがみられる。接合部内面は指でなでつける。体部外面はヘラ状工具による粗い磨き調整が施される。体部内面には，細かい布目と横筋が残り，縦に粗いヘラ削りがみられる。体部下半を欠失しているため，釘穴は不明。胎土は粗く，0.2㎝以下の砂粒を多く含む。焼成良好。黒灰色。

675は土塁状遺構ＳＡ－０１の裏込め中から出土した三ッ巴文軒丸瓦である。瓦当文様は，左巻三ッ巴文と連珠文の組み合わせであり，巴文の頭部は大きく，尾部も太く短い。珠文は直径約1.2㎝と大きいが，間隔がせまく，16～17個とみられる。周縁は幅約2.1㎝，高さやくつ0.6㎝と広くて高い。瓦当と体部の接合部内面は指でナデつけている。体部外面はヘラ状工具により，丁寧に磨きこまれている。内面には細かい布目と横筋が残り，縦に粗いヘラ削りがみられる。体部側面には，切り離しの後，軽くナデ調整を施す。瓦当下半と体部下半を欠失するが，体部に直径1.3

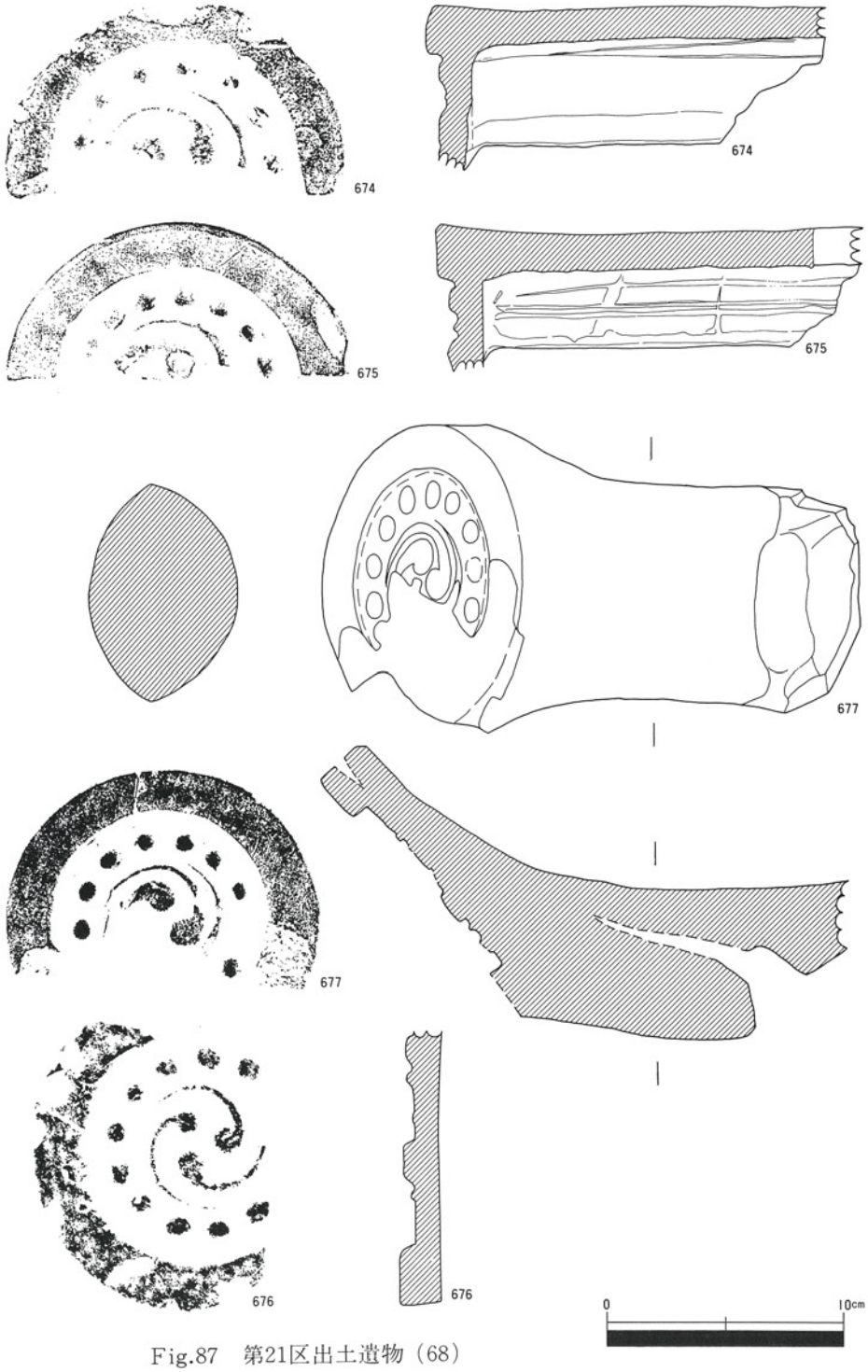


Fig.87　第21区出土遺物（68）

cmの釘穴を穿つ。外面穿孔。穿孔後の内面は未調整。胎土はやや粗く，直径0.3cm以下の小礫を含む。焼成良好，堅緻。灰黒色。

676は遺物包含層中出土の三ッ巴文軒丸瓦である。瓦当文様は，左巻三ッ巴文と連珠文の組み合わせである。巴文の頭部は大きいが，尾部は細く長い。珠文は直径約1.2cmと大きく，13個とみられる。周縁は幅約2.1cm，高さ約0.7cmと広くて高い。瓦当と体部の接合部は欠失している。瓦当内面，ナデ調整，胎土はやや粗く，直径0.1cm以下の砂粒を含む。焼成良好。堅緻。黒灰色。

② 鳥衾　(Fig. 87)

677は棟の先端に取り付ける鳥衾である。瓦当文様は左巻三ッ巴文と珠文の組み合わせ。巴文の頭部は大きいが，尾部は細く長い。珠文は直径約1.1cmと674～676に較べて小さいが，13個とみられる。周縁は幅約2cm，高さ約0.7cmと広くて高い。瓦当と反部との接合はナデ。反部の棟からつき出る部分は一部中空になっている。棟にのる部分欠失。反部全体にヘラ状工具により，丁寧に磨きこまれている。瓦当上端面に円孔（直径0.6～0.7cm，深さ約1.6cm）が3箇所みられる。胎土はやや粗く，白色形の砂粒を含む。焼成良好。堅緻。灰黒色。第1層出土。

③ 棟瓦　(Fig. 88)

678は第5トレンチから出土した棟に用いられたとみられる瓦である。大形の平瓦に桟を接合するという形態をとる。凸面の一端に幅約3.5cmで粗い櫛目を入れ，幅約6.3cmの桟を接合する。桟の接着面は半分強で，幅約2.8cmの葺き継ぐのに必要な面を残す。凸面の他の一端に葺き重ねた痕跡がみられる。平瓦部と桟の凸面は丁寧に磨きこまれているが，凹面の調整は粗い。胎土は密で，わずかに細砂粒を含む。焼成良好。堅緻。灰黒色。

3．土錘

土錘は小破片を含めると50個体ばかり出土しているが，40個体を図示した。管状土錘37，有溝土錘3個体である。

① 管状土錘　(Fig. 89・90)

管状土錘は，第1トレンチ第9層（697），礎石建物跡ＳＢ－０３（698・713），土錘状遺構ＳＡ－０１（679），ＳＡ－０２（714），遺物包含層（680～695・701～704・707～709・711・712・715），第1層（696・699・700・705・706・710）などから出土している。679～700・703・704は土師質，701・702・705～715陶器であ

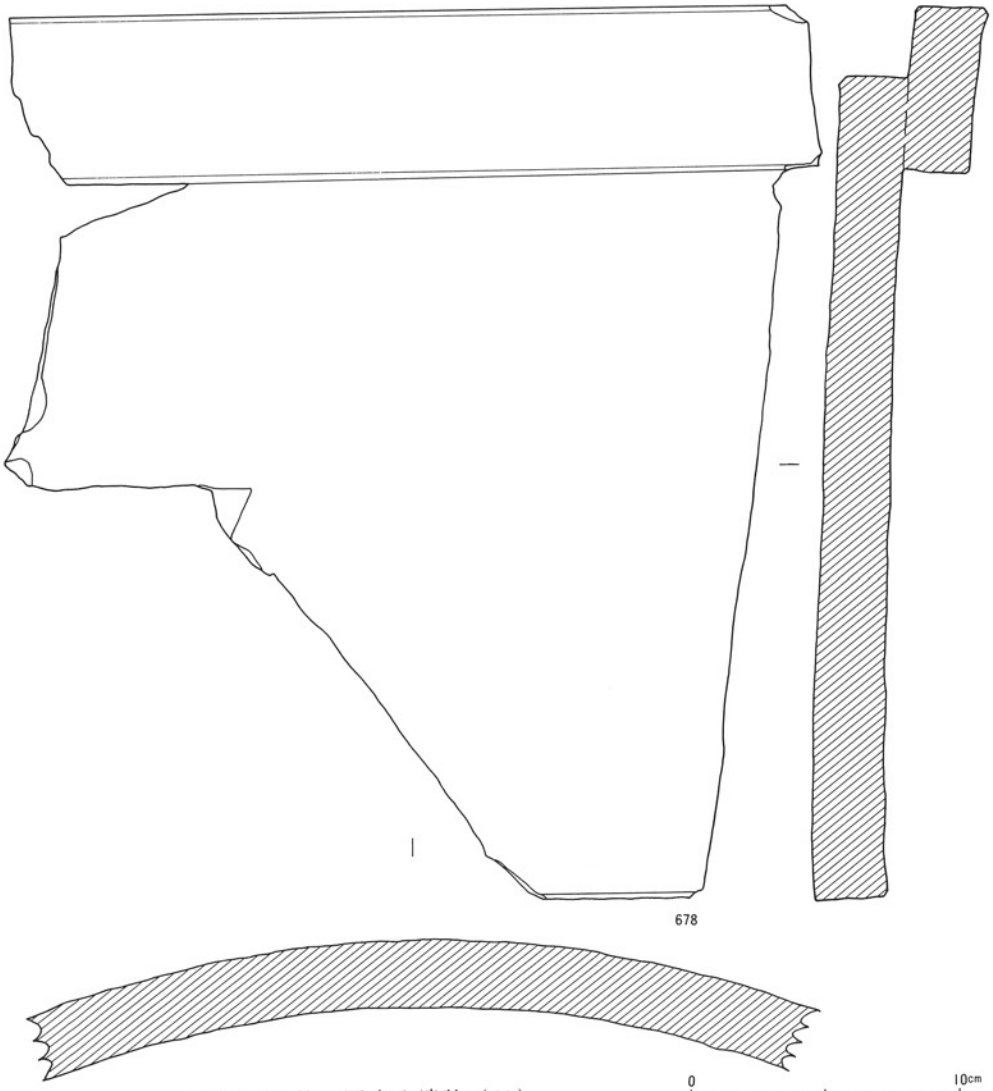


Fig.88　第21区出土遺物（69）

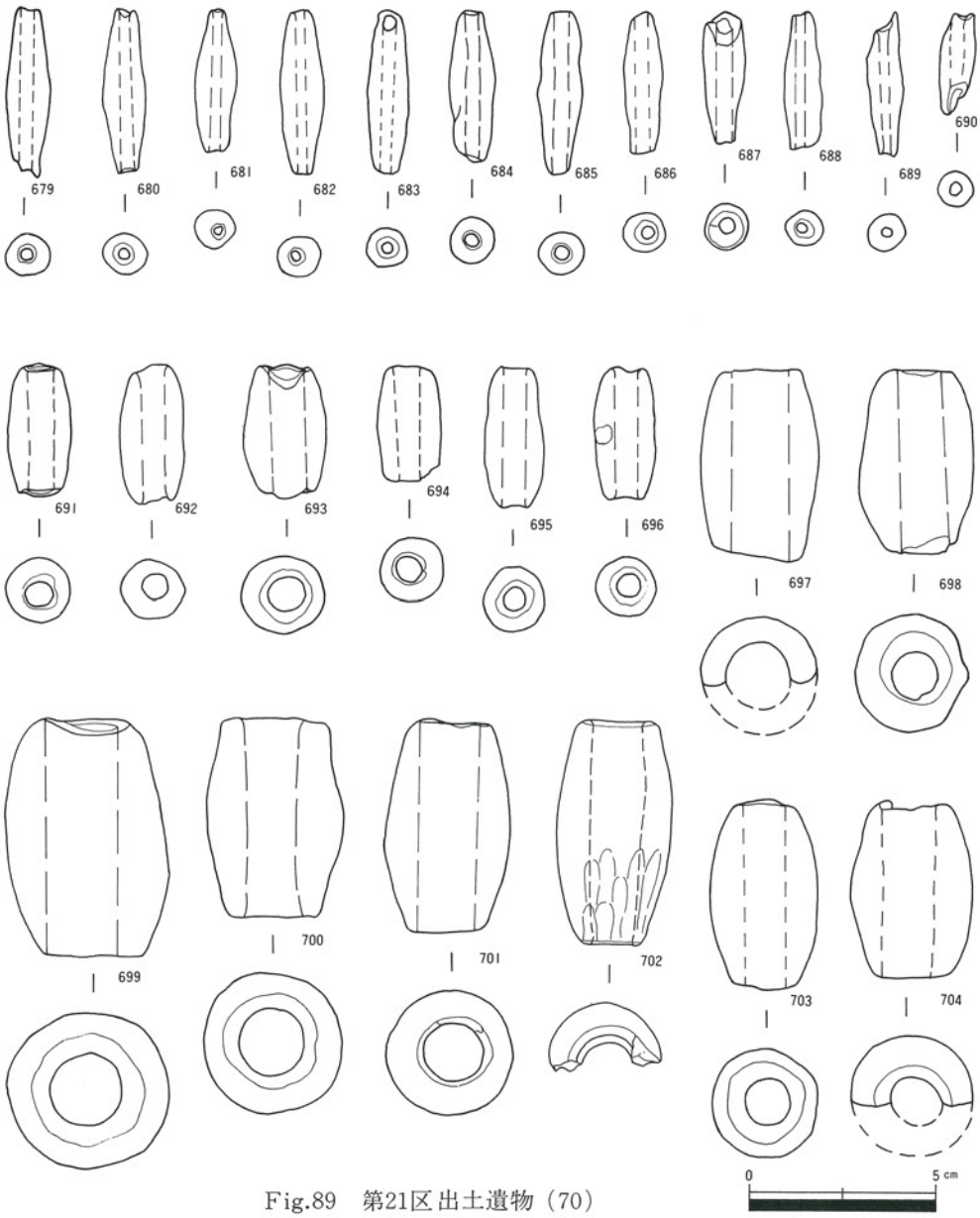


Fig.89　第21区出土遺物（70）

り，そのうち707は無釉陶器である。その形状から５つに分けられる。

a．中央に膨みをもつ細長い管状土錘　679～690

b．中央に膨みをもち，aより太い管状土錘　691～696

c．中央に膨みをもち，bより太く大きい管状土錘　697～710

d．中央に膨みをもち，cより短く小さい管状土錘　714～715

e．円筒形の管状土錘　711～713

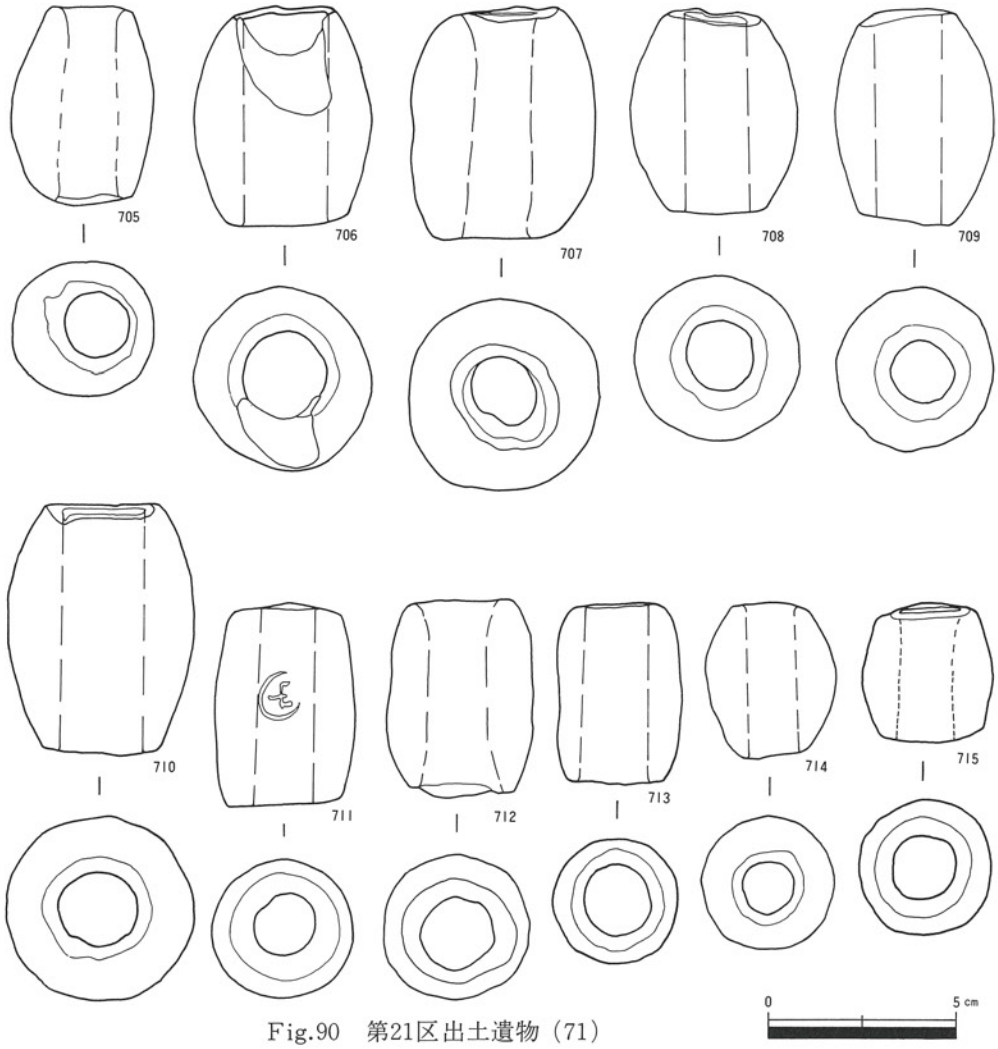


Fig.90　第21区出土遺物（71）

② 有溝土錘　(Fig. 91)

716～718は第１トレンチ第９層から出土した有溝土錘である。土師質土器。胎土はやや粗く，２㎜以下の砂粒を含む。焼成は良好，堅緻。淡赤褐色を呈する。全体として卵形であり，手づくね成形とみられ，指押えの跡がある。溝はヘラ状工具によって切りこみ，ナデ調整が施されている。磨滅していて，細部調整は不明。短軸上断面は「エ」字形。

有溝土錘は，徳島県では鳴門市日出遺跡（森・白石編　1968），小松島市市営グランド遺跡(小林　1974),鳴門市中内遺跡（管原編　1981），徳島市庄遺跡徳島西警察署地区（河野　1981），旧あさひ学園地区，鳴門市第37調査区（小笠原編　1986）などの臨海地域に類例がみられる。

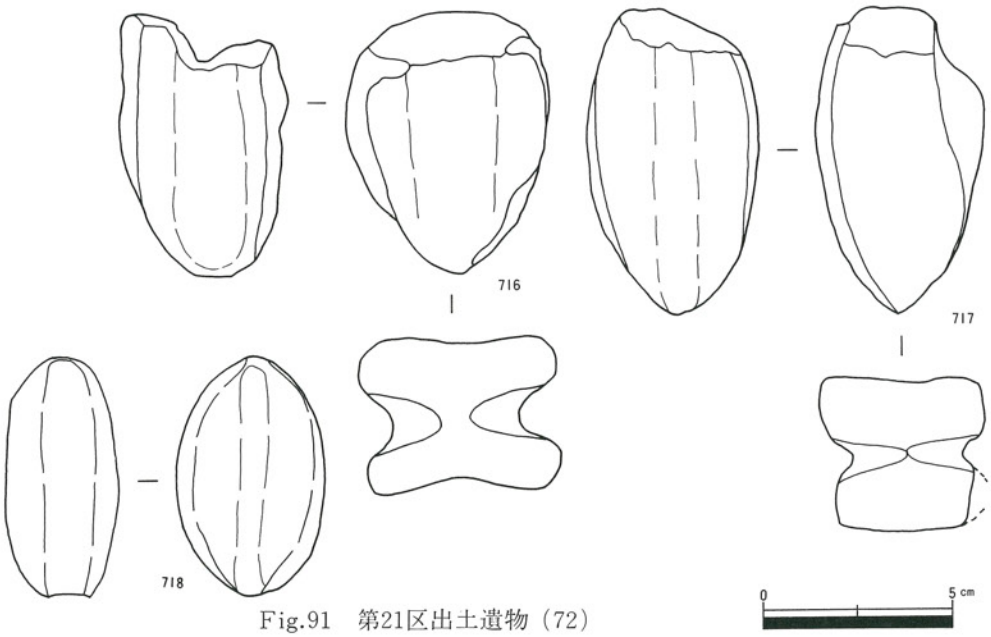


Fig.91　第21区出土遺物（72）

４．土製品　(Fig. 92)

土師質土器系人形の類を土製品として扱う。土塁状遺構ＳＡ－０２周辺の第１層と遺物包含層中から出土している。玩具あるいは庶民信仰の所産とみられる。

719は立燈籠を形を模したものである。宝珠は欠失しているが，笠，火袋，受台で構成されている。現在高約4.1㎝，受台の幅約2.2㎝。笠は寄せ棟あるいは宝形造の形態をとり，四方の傾斜面には中央に１，その周囲に５の珠文が形敲されている。

火袋は方形であり，隔面に鳥居と円（○と⊗）の形敲文が配される。方形の受合の下面には，対角線上に形痕が認められる。型起し，接合後の整形は認められなく，粗雑なつくり。無彩色。

720は虚無僧の姿を模したものである。天蓋，尺八，衣，袈裟，偈箱で構成され，偈箱から下は欠失している。現在高約3.5cm，最大幅約2.3cm。衣の袂から肩，天蓋の側面にかけて型痕が認められる。型起し，接合後の整形は認められなく，粗雑なつくりである。偈箱下の欠失部に直径約0.1cmの孔がみられる。顔面部分欠失。無彩色。

721は人頭部を模したものである。目，鼻，口が型敲され，耳は表現されていない。完形品。高さ約3.2cm，側頭部の幅約2.1cm，鼻から後頭部の幅約2.3cm。首の部分に長径約0.6cm，短径約0.5cmの不整円形穿孔がみられる。頭部は中空。頭頂から側頭，さらに首と顎の間にかけて型痕が認められる。型起し後，丁寧に整形され，端正なつくりである。無彩色。

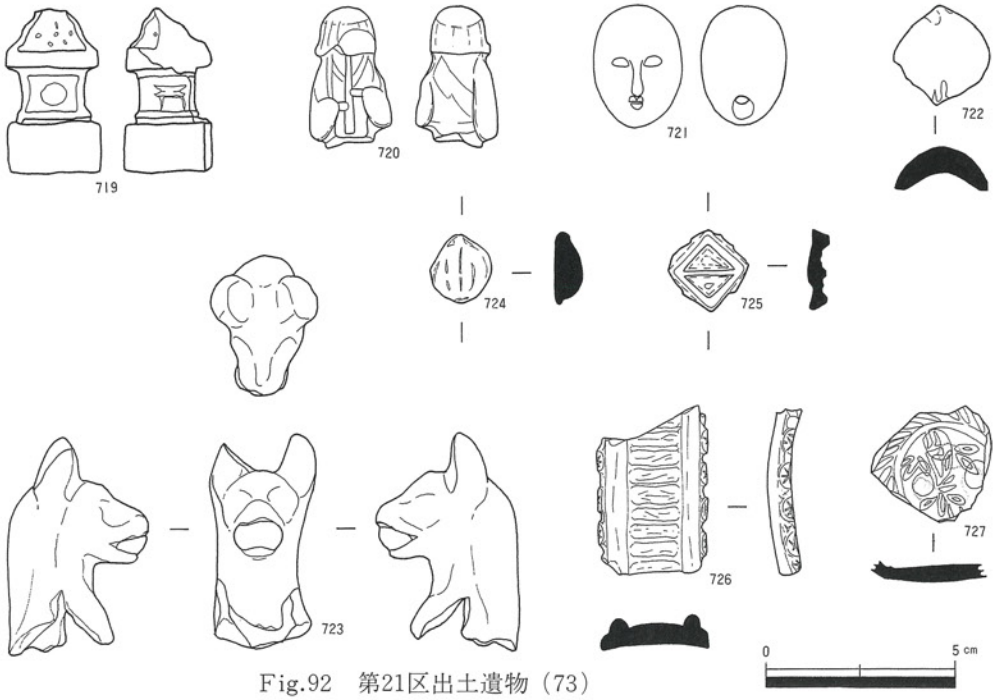


Fig.92　第21区出土遺物（73）

722は果実を模したものとみられる。型起し，型合せの後，その一方が欠失したものである。内部は中空。現存高約2.6㎝。粗雑なつくりである。無彩色。

723は宝珠を銜えた稲荷である。頸部から下を欠失する。耳の前部から頸にかけて型痕が認められる。型起し後，整形されているが，目・鼻などの細部は表現されていない。頭・頸部中空。宝珠偉大の全面に，銀色の粒子がみられる。無彩色。

724は果実を模した泥面子である。縦縞状の３筋の型鎬痕がみられる。長さ約1.8㎝，幅約1.6㎝，厚さ約0.7㎝。磨滅のため，調整不詳。無彩色。

725は桝を模した泥面子である。型起し後，未調整。長さ約1.7㎝の方形で，厚さ約0.5㎝。無彩色。

726は丸太の反橋を模したものである。型起し後，整形されている。現存長約4.4㎝，幅約2.8㎝，厚さ約0.6㎝。無彩色。

727は皿を模したものとみられる。見込に竹を押印刻する。淡橙色の素地に半透明の釉をかけ，さらに斑点状に白色，緑色釉をかさねあわせる。厚さ約0.4㎝。

719～721は土塁状遺構ＳＡ－０２の南からの出土であり，大山祇神社跡，小祠跡などとの関連も考えられる。徳島県では他に，徳島市慈光寺蜂須賀家墓（山川　1974，豊田　1978），徳島市徳島城御花畠遺跡などにも類似がある。いずれも，江戸時代の所産である。

５．石器類　（Fig. 93）

サヌカイト．チャートの製品を石器として扱う。遺物包含層，第１層から，サヌカイト製石鏃７．チャート剥片31の38個体が出土している。周辺からの流れこみとみられる。

①　石鏃

728～731は凹基石鏃である。入念な整形剥離が認められる。尖端部欠失。728～730の現長は20㎜を超えるが，１ｇ前後と軽い。

732，733は平基石鏃である。整形剥離は粗い。尖端部欠失。733は現長34㎜，現存する重さ3.4ｇである。復原推定の長さは45㎜前後，重さ４ｇ前後とみられ，大型で重量のある製品といえる。

他に大山祇神社跡石段下から，凹基石鏃が出土している。整形剥離の入念な完成品。長さ約265㎜，最大幅約18.5㎜，最大厚約3.0㎜，重さ約1.1ｇ。

②　剥片

734は明確な剥離面をみせる。周縁を鋭利につくる。背面上端に自然面をのこす。

断面三角形状。

他にチャートの剝片が30点出土している。

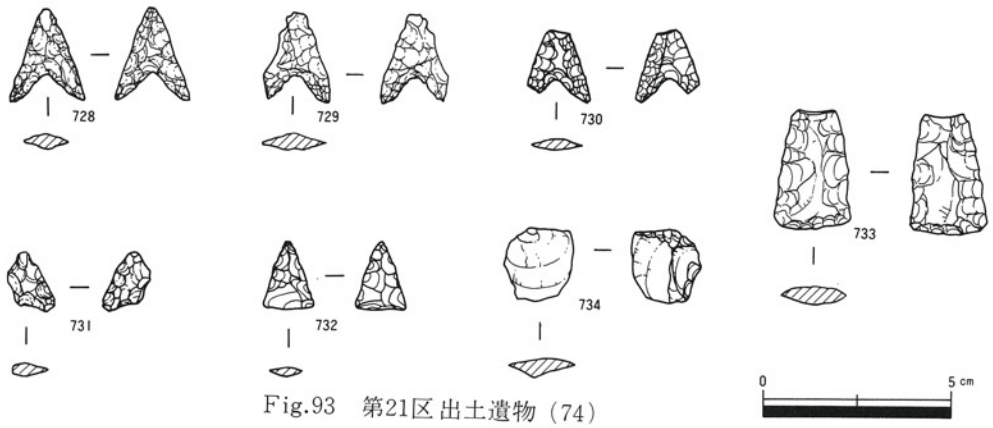


Fig.93　第21区出土遺物（74）

6．砥石　（Fig. 94・95）

砥石は，小破片を含めると，30個体ばかり出土しているが，13個体を図示した。仕上砥石（735～738），中砥（739～745），荒砥（746，747）の３つに大別した。形状は扁平な板状。全て破損している。

①　仕上砥

735～738は粘板岩製の仕上砥とみられる。砥面はきわめてなめらかである。砥石面の数は，上下の２面とみられるが，736は背面を欠失しているため不明。735は礎石建物跡ＳＢ－０３の炭化物層，736は土塁状遺構ＳＡ－０１，737と738は遺物包含層から出土している。

②　中砥

739～745は粘板岩あるいは粘板岩系石材の中砥とみられる。砥面はなめらかである。砥面の数は，上下の２面とみられるが，740は背面を欠失しているため，不明。741は一側面を欠失しているため不詳であるが，長軸上の４面全てが砥面とみられる。739，740，742～744は遺物包含層，741，745は第１層から出土している。

③　荒砥

746・747は砂岩製の荒砥とみられる。砥面のきめはやや粗い。砥面の数は，上下の２面とみられるが，747は背面を欠失しているため不明。746は礎石建物跡ＳＢ－

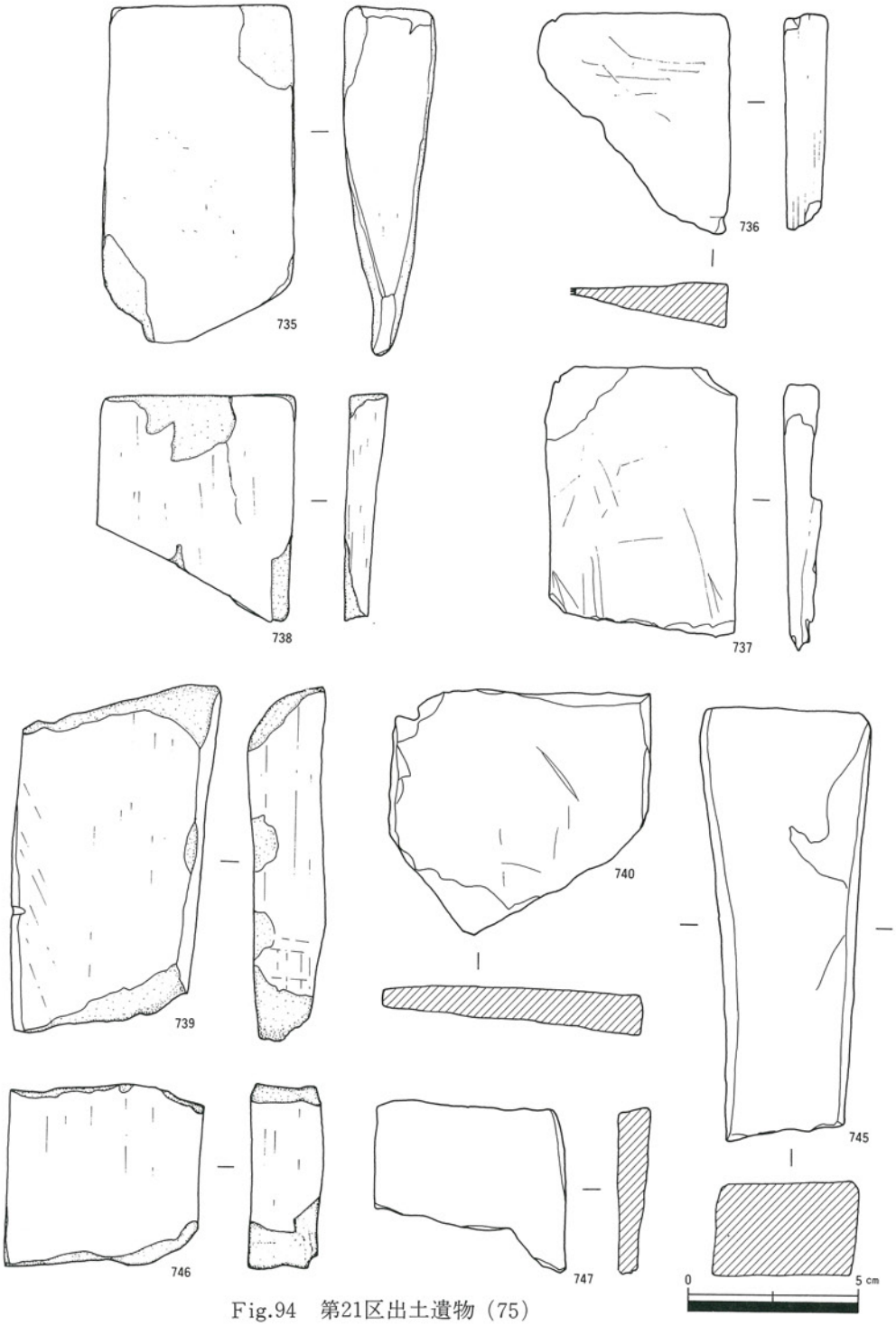


Fig.94　第21区出土遺物（75）

0 1，747は遺物包含層からの出土である。

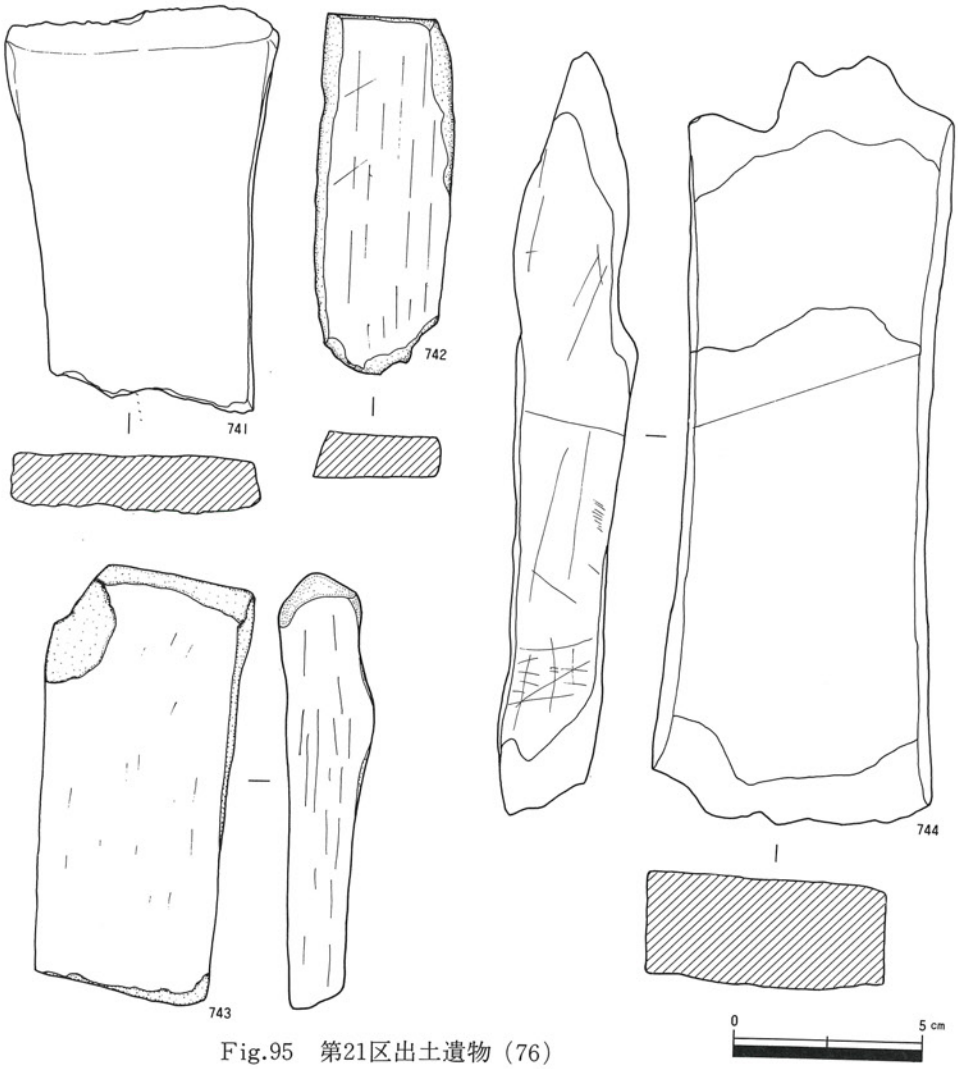


Fig.95　第21区出土遺物（76）

7．大山祇神社跡関連石製品

大山祇神社跡からは，礎石，石段，石鳥居，狛犬，水受などの石製品が出土している。

拝殿，本殿の礎石，石段は砂岩製。方柱状に成形され，加工痕を遺存する。石鳥居は御影石製。成形，加工後の調整がみられる。柱は円柱とする。向って右の柱には「□□　福池忠次郎」，「明治十三年庚辰（1880）春建立」，左の柱には「氏子中」と薬研彫されている。

ここでは，石鳥居の額束，狛犬，水受を取り上げる。

① 額束　(Fig. 96)

748は砂岩製の額束である。縦約52cm，横約40cm，厚さ約7cmの方形板状とする。背面には上面に円形の突起をもつ束をつくり出している。上面奥行き約18cm，幅約22cm，縦約21cm，下面奥行き約18cm，幅約22cmの台形状とする。突起は直径約5cm，高さ約2cmの半截球形状とし，島木の下面に組み込む形式とする。額面外周には波状文様，内側に内法縦約28cm，横約15cmの方形枠をレリーフ様に彫り出す。方形状の内側には，縦に「大山祇神社」と薬研彫りし，赤色顔料の痕跡がみられる。文字の大きさは，縦3～6cm，横5～7cmと不均一。額面の調整は入念であるが，背面および束部分には，成形・加工後の調整はみられない。

② 狛犬　(Fig. 97)

749・750は凝灰岩製の一対の狛犬である。台座に鎮座する形式をとる。風化，破損し，形状などは詳かではない。大きさは，749が高さ約59cm，胴張約30cm，胸張約30cm，750が高さ約55cm，胴張約25cm，胸張約27cmである。

③ 水受　(Fig. 98)

751は砂岩製の水受である。逆三角錐状で，上が広い形式をとり，土中に埋めこむ。高さ約56cm，上辺前面幅約48cm，奥行約44cm。上辺に直径約28cm，深さ約0.5cmの円形に彫りこみ，さらにその内面を，直径24cm，深さ約9cmの円筒形に彫り込み，水受けとする。前面には，「文政四巳（1821）」，「奉献」，「願主」，「吉田治太良」，「佐代松」と彫りこまれている。

8．鉄製品

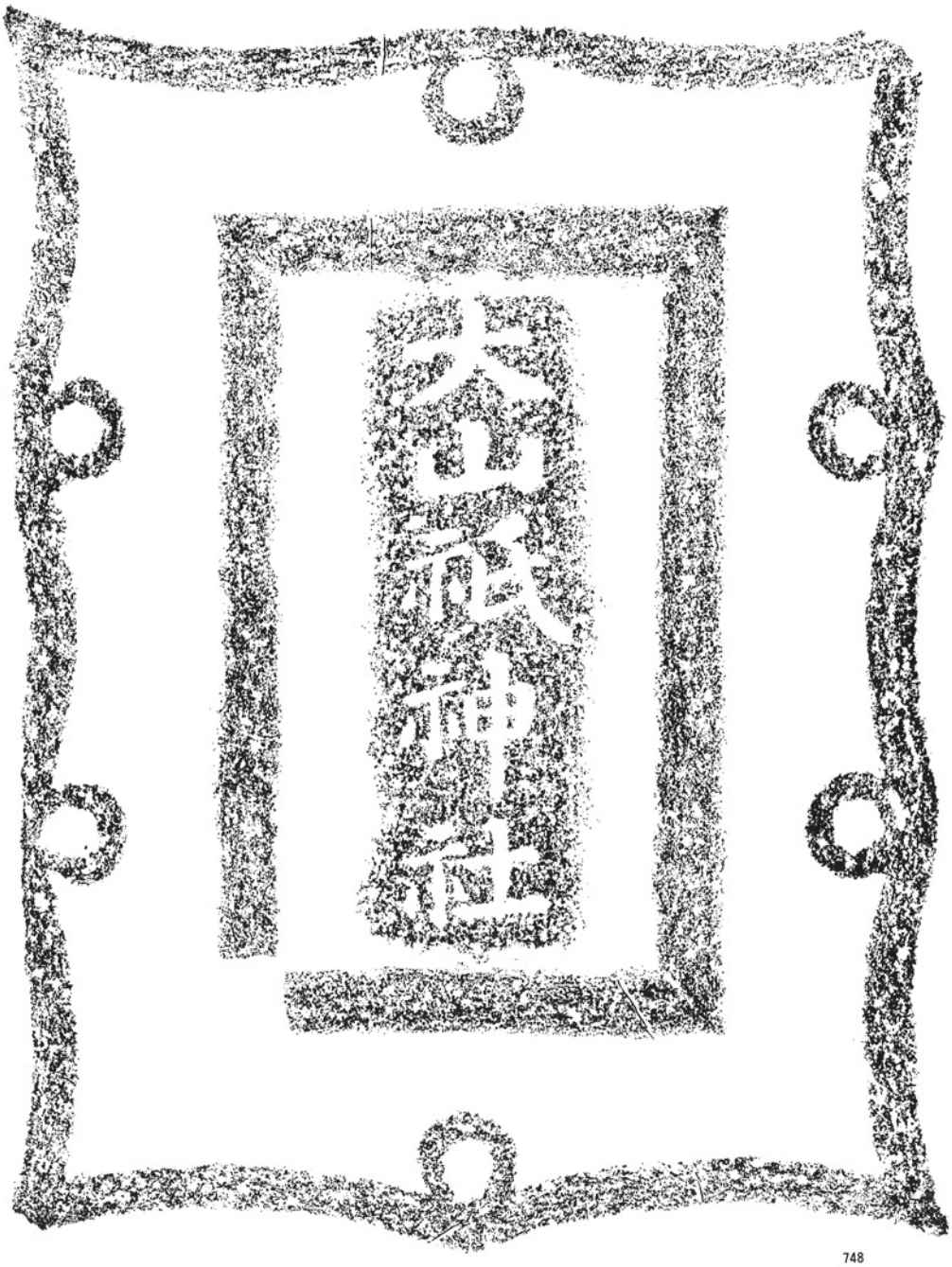
遺物包含層，第1層中から数多くの鉄製品が出土しているが，臨海地という地理的条件のためか，銹化が著しく，原形をとどめるものは少ない。釘，鍋，容器，小柄，庖丁，桟などがみられる。

釘は折頭形で胴部方柱とする。他に巨大な舟釘もある。鍋は銹化が著しいが，厚さ0.4cm前後とみられる。756は用途不明の鋳物製品である。

ここでは，小柄，庖丁，容器，桟，用途不明鋳物製品を図示した。

① 小柄　(Fig. 99)

752は刀部先端を欠失する小柄である。現存長約16.3cm。遺物包含層出土。



748

Fig.96　第21区出土遺物（77）

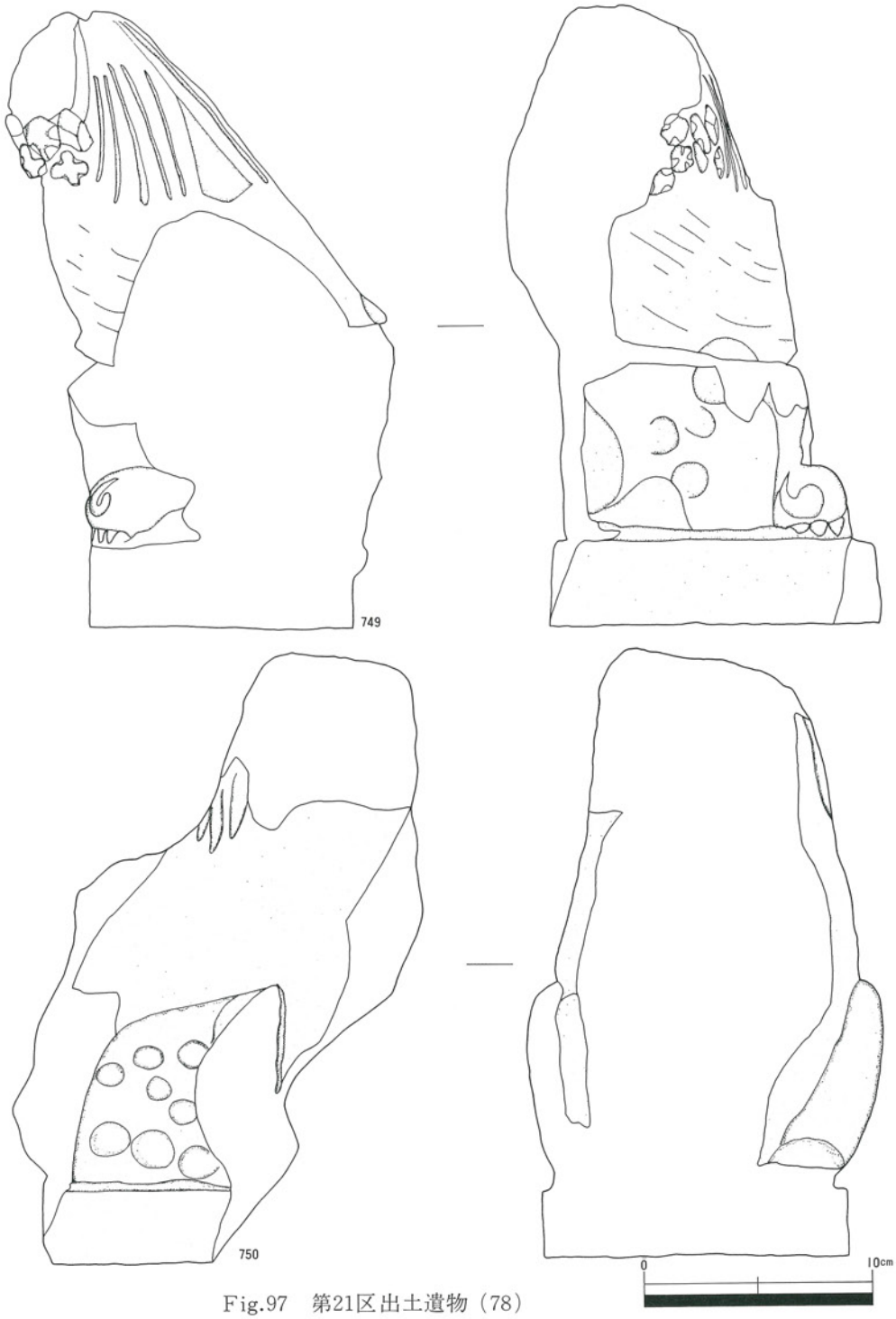


Fig.97　第21区出土遺物（78）

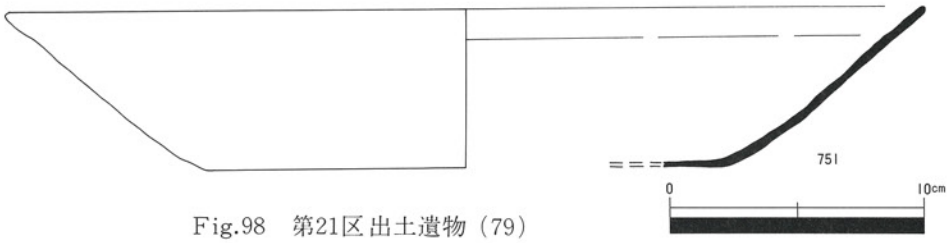


Fig.98　第21区出土遺物（79）

鉄製の刀部は，断面三角形状で先端に向けて幅を減じている。現存長約6.6cm，最大幅約1.0cm，厚さ棟約0.15cm。銹化が著しい。

柄は1枚の銅板を巻いて貼り合わせ，中空とする。一側面には，金箔を押した牛と御所車のレリーフを貼り合わせる。長さ約9.7cm，最大幅約1.4cm。厚さ棟約0.4cm，刀側約0.2cmで，断面は丸味のある三角形状である。緑青がみられる。

② 庖丁　(Fig. 99)

754は刀部先端を欠失する庖丁である。遺物包含層出土。現存長約23.1cm刀部は現存長約16.6cm，最大幅約3.9cm。先端にいくにつれて細くなる。棟の厚さ約0.3cm。茎の現存長約6.5cm，最大幅約1.0cm。銹化が著しい。

③ 容器　(Fig. 99)

753は底の浅い容器とみられる。遺物包含出土。厚さ約0.2cmの鉄板を用いる。約1.5cmの立ち上がりをもつ平底で，楕円形状。銹化が著しい。

④ 桟　(Fig. 99)

756は七輪用の桟（ロストル）とみられる。第1層出土。鋳物製品。直径約10.3cmの円形の内側に，5筋の桟をいれる。桟および外周部の断面は三角形。

9．銅製品

礎石建物跡ＳＢ－０３，土塁状遺構ＳＡ－０１，遺物包含層，第一層から，20個体ばかりの銅製品が出土しているが，緑青のふき出しで原形をとどめるものは少ない。銅板，蝶番，金具，角釘，火箸，煙管などがみられる。

① 煙管　(Fig. 100)

煙管には，羅宇を含めた完成品はなく，雁首6，吸口1の7個体を図示した。緑青が出ている。

757～762は，煙管の雁首である。厚さ約0.1cmの銅板を継ぎ合わせて火皿と雁首部を作り，後で接合する。757は長さ約4.6cm。火皿は直径0.9ｃｍの不製碗形。完成品。758は火皿欠失。現存約3.7ｃｍ。759は火皿欠失。現存長4.8cm。竹製羅宇の一部遺存。760は火皿欠失。現存長約5.1cm。竹製羅宇の一部遺存。761は火皿欠失。現存長約4.4cm。762は全長約4.7cm。火皿は直径約1.4cmの碗形。火皿の一部が欠損しているが，ほぼ完成品。竹製羅宇の一部遺存。758は18世紀後半から19世紀初頭，その他は19世紀の所産とみられる（古泉　1987）。

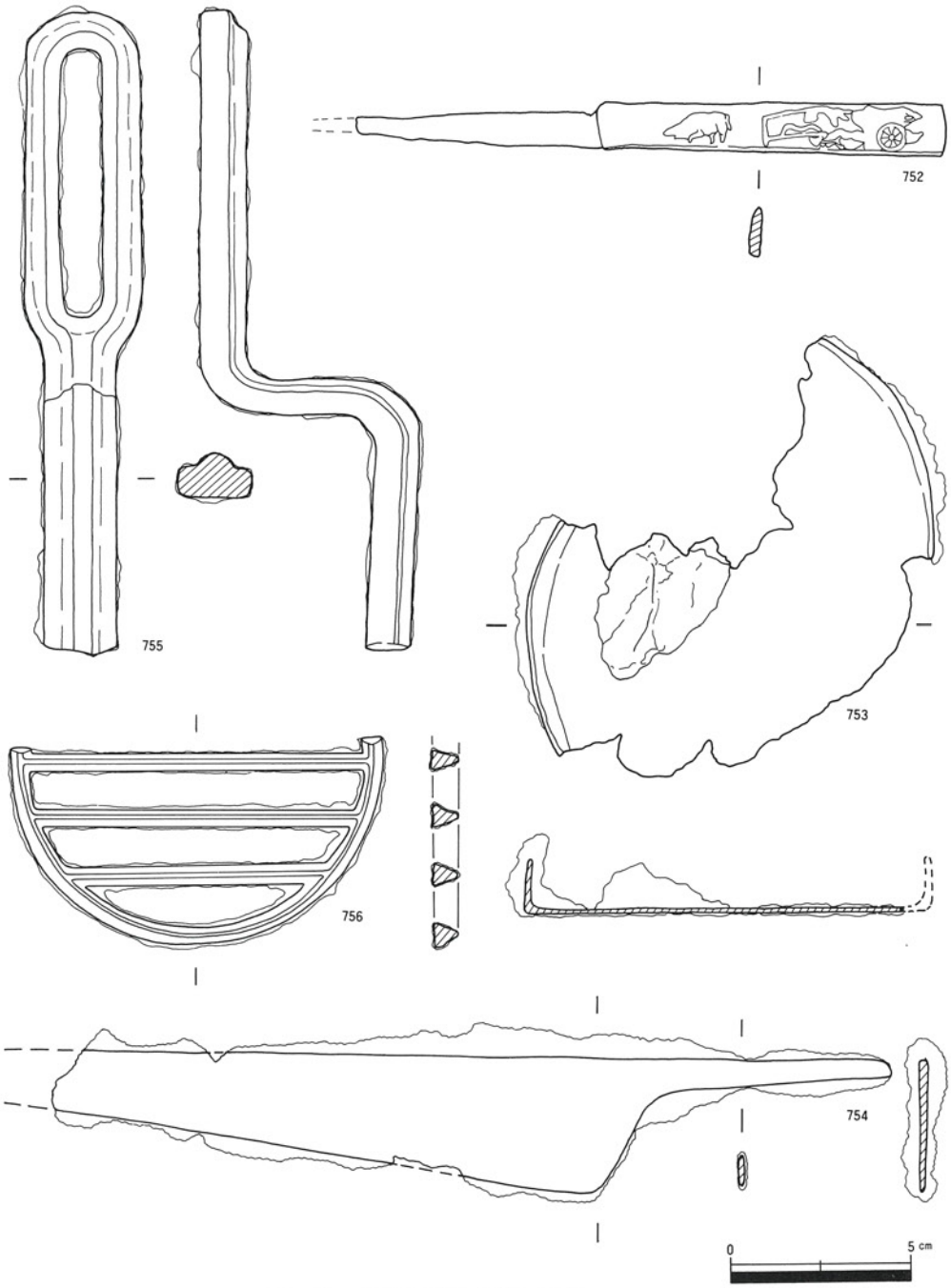


Fig.99　第21区出土遺物（80）

763は煙管の吸口である。厚さ0.05cm以下のきわめて薄い銅板を継ぎ合わせている。先端を欠失し，現存約3.5cm。

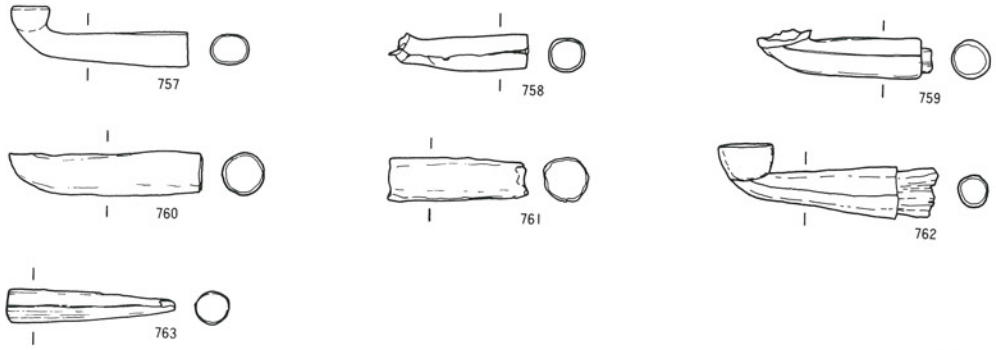


Fig.100　第21区出土遺物（81）

10. 銭貨　（Tab. 23・24）

池状遺構，大山祇神社跡，小祠跡，礎石見物跡ＳＢ－０３・０１，土塁状遺構ＳＡ－０４，遺物包含層，第一層から，75枚の銭貨が出土している。渡来銭の元豊通宝，聖宗元宝各１枚，寛永通銭51枚，寛永通宝とみられる銹化が著しいもの（鉄銭か）９枚。以上はいわゆる円体方孔銭である。明治以降の円体銭と円体有孔銭13枚。

ここでは遺存状態の良好な27枚の拓影を図示した。

① 渡来銭　（Fig. 101）

764は第１層出土の元豊通宝である。鋳造年代は宋の神宗豊年間（1078～85）。765は礎石建物跡ＳＢ－０１出土の聖宋元宝。鋳造年代は宋の徽宋建中靖国１年（1101）。

② 寛永通宝　（Fig. 101）

766～788は江戸時代寛永13年（1636）以降に鋳造されたとみられる寛永通宝である。766～782は「通」の頭を「コ」または「ユ」，783～787は「マ」とするもの。788は不詳である。

766～768は「寛」の背面に「文」を鋳出したもの。池状遺構，小祠跡，礎石建物跡ＳＢ－０３から出土している。

785～787は背面に青海波紋を鋳出し真鍮銭。波線は10とする。大山祇神社跡出土。

788は「寛」の背面に「元」とみられる文字を鋳出したもの。鋳化，緑青著しい。

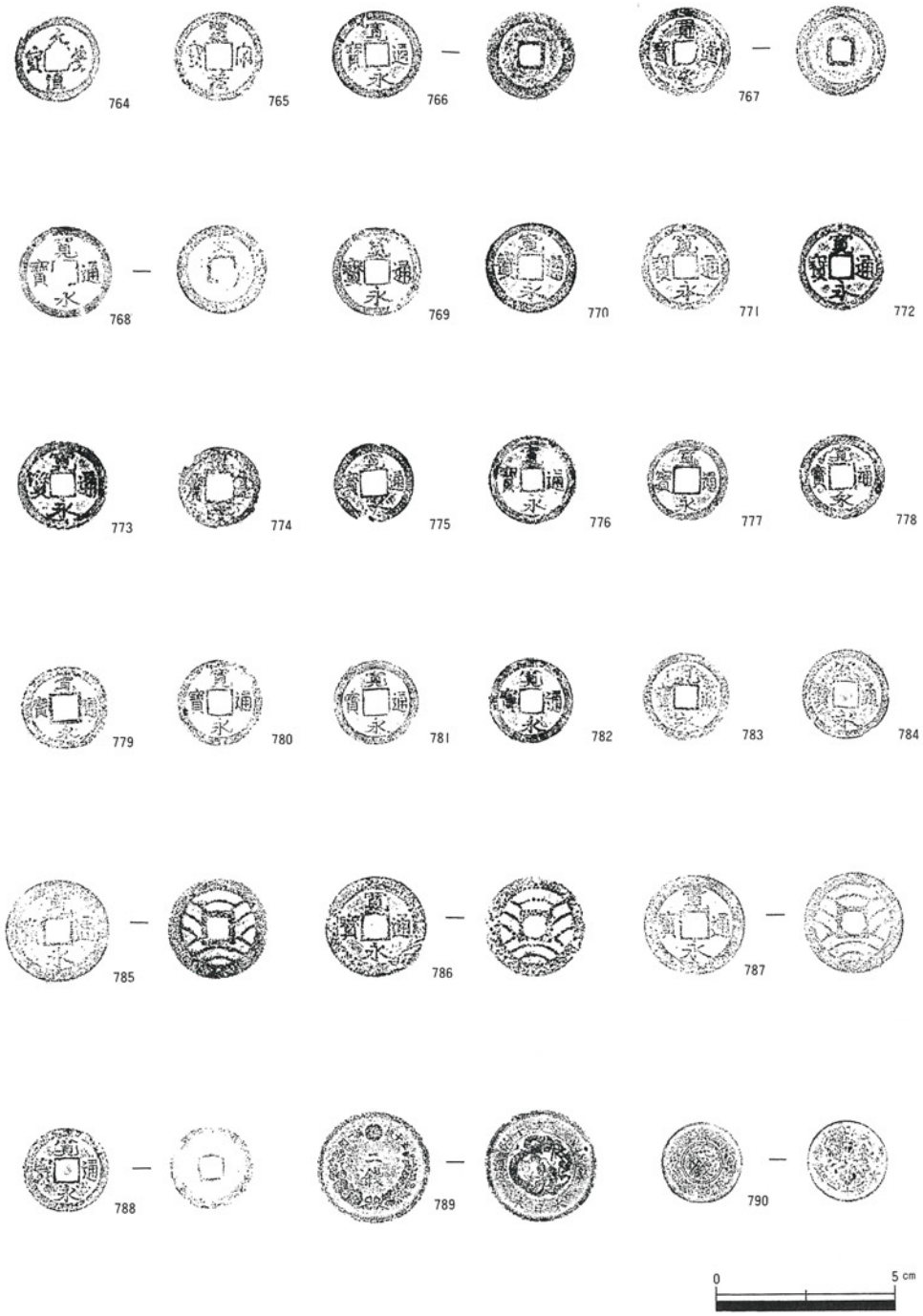


Fig.101　第21区出土遺物（82）

③　明治以降の銭貨　（Fig. 101）

789は明治10年（1877）鋳造の二銭貨。礎石建物跡ＳＢ－０１出土。

その他に，大山祇神社跡から明治17年（1884）の？厘貨，大正９年（1920）の一銭貨，昭和15年（1940）の十銭貨，礎石建物跡ＳＢ－０１から，昭和19年（1944）の五銭貨，第１層から，明治17年の五厘貨，昭和15年と17年（1942）の十銭貨，昭和21年（1946）の五十銭貨，昭和24年（1949）の五円貨などが出土している。

11.　木製品

池状遺構，大山祇神社跡，遺構包含層，第１層から多くの木製品が出土しているが，その多くは建築部材の一部あるいは炭化したものである。ここでは，池状遺構出土の木製品を取り上げる。池状遺構には，板材，竹材などもみられるが，下駄と曲物を図示した。

①　下駄　（Fig. 102）

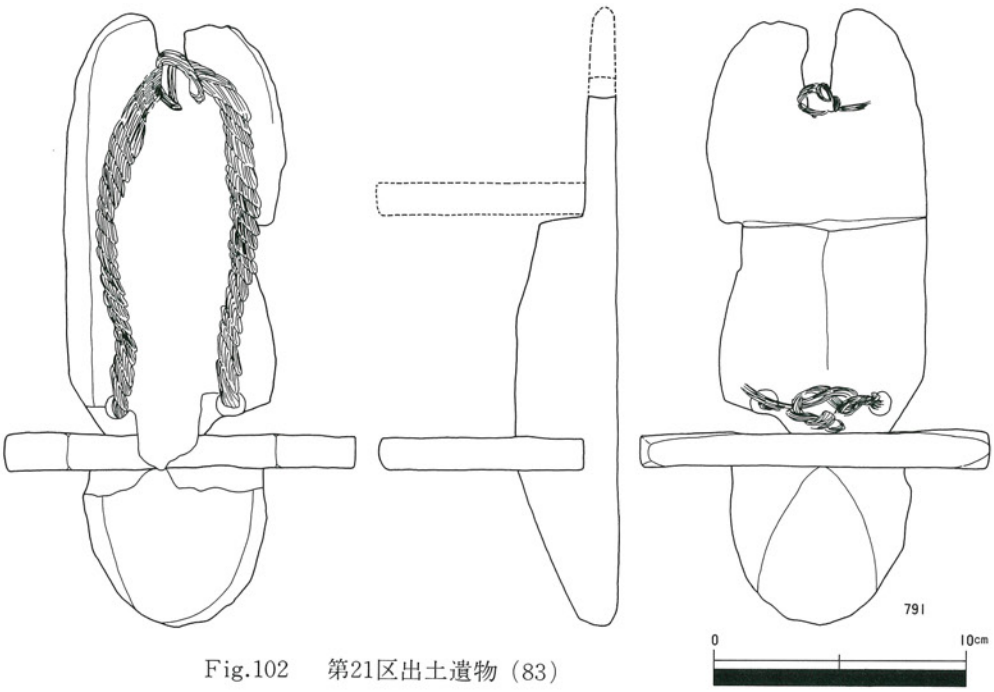


Fig.102　第21区出土遺物（83）

791は前後を丸く整形した丸下駄であり，高い歯を装着しているため，高下駄を範疇に属するとみられる。材質不詳。現存長約２４．２㎝，現存幅７．２㎝。緒にはシュロの毛を用いる。束にしたシュロ縄を３本撚り合せて，その両端を後歯の前の２孔にすげ，内側で結ぶ。他に一束を用いて，先の紐に結び，その端部を前歯の前の１孔にすげる。柾目材を用いるも，面取りも粗く，粗製品とみられる。

② 曲物 （Fig. 103）

792は一枚の柾目材を輪にして，サクラの木の皮で綴じた曲物である。材質，用途不詳。長さ約29㎝，幅約2.1㎝，厚さ約0.05～0.40㎝の細長い板材を用い，内径6.9～7.9㎝の円径とする。約3.8㎝を重複させ，外周の端部で一箇所綴じる。綴じた部分の上下端に切りこみを入れる。上端を厚くし，下端を厚さ約0.1㎝と薄くつくり出す。面取りはみられない。底板の有無については不詳である。

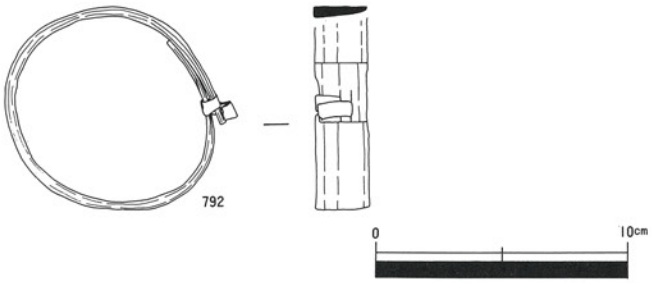


Fig.103 第21区出土遺物（84）

12. その他の遺物

これまでの分類の範疇から外れるものを，ここで扱う。

近・現代遺物10，漆器，墨書土器12，線刻円板１，石盤１をとりあげる。

① 近・現代遺物 （Fig. 104）

793～797は乳白色系の素地に半透明の釉をかける磁器である。遺物包含層出土。793は絵具の顔料入れ。794，795は栓。頭部に0.4㎝前後の円孔を穿ち，794に紐遺存。795の頭部に文様を押印陰刻する。796は天井部に円弧状文様を刻りこむ合蓋とみられる。797は口縁直下に貼り出しを設ける容器。貼り出しに梅唐草文を押印陽刻する。

798は染付磁器の散り蓮華。内側には，丸文の中によろけ縞文状の文様，取手には「メ」状の文様を連続して描く。遺物包含層出土。

799～802はガラスおよびガラス質のものである。799はかえりをもつ山蓋。透明

Fig.104　第21区出土遺物（85）

感のある乳白色。第１層出土。800は色ガラスの円板。周囲の隆帯の内側に「九」または「光」を陽刻し，背面に木葉文を陰刻。透明感のある藍色。遺物包含層出土。801はガラス質のろうそく立て。ろうそくを立てる部分は鉄とみられるが欠失している。脚部上位に「進」を陽刻する。乳白色。802は透明ガラスの香水瓶とみられる。背面に，「ＴＨＥ　ＣＲＯＷＮ」，「ＰＥＲＦＵＭＥＲＹ　ＣＯＭＰＡＮＹ」，「ＬＯＮＤＯＮ」，「ツキワ」と陽刻。遺物包含層出土。

② 漆器　（Fig. 104）

803は図示し得ないが，漆器碗とみられる。外面に黒色，内側に赤褐色の漆を塗る。遺物包含層出土。

③ 墨書土器　（Fig. 105）

墨書のみられる土器類が12個体確認された。土塁状遺構ＳＡ－０４，小祠跡，礎石建物跡ＳＢ－０３，遺物包含層から出土している。器種別の内訳では，土師質土器２，陶器10。器形別では，猪口４，皿２，香炉２，壺１，火舎１，不詳２。墨書部位は高台裏・底５，見込４，胴下位２，胴と底１。墨小内容は，「三」，「四」，「八」，「九」，「十」などの数字が多く，墨書の文字数は８である。文字の一部であるために不詳とするものが多いが，数字以外では，805の「㊇」がある。

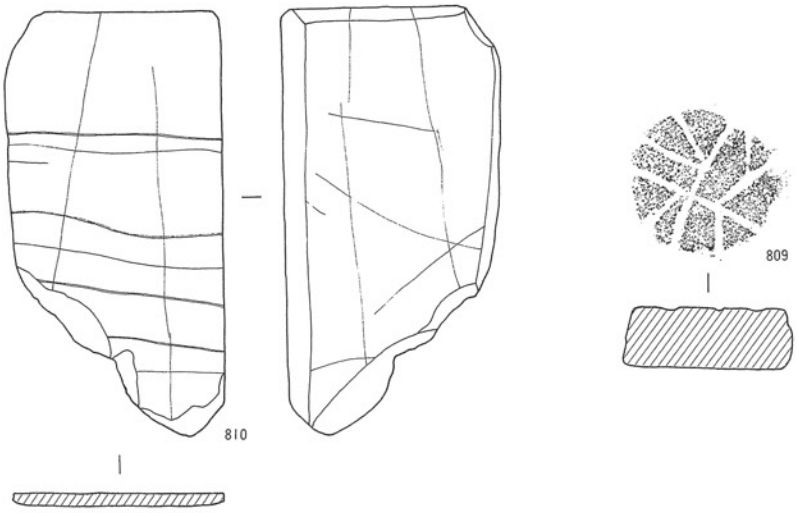


Fig.105　第21区遺物包含層出土遺物（86）

④　線刻円板　（Fig. 105）

809は瓦に直線文を陰刻する円板である。直径４㎝不整円形に整形して，線刻したもの。厚さ約1.5㎝の灰黒色の平瓦を用いる。重さ約37ｇ。遺物包含層出土。

⑤　石盤　（Fig. 105）

810は粘板岩製の石盤とみられる。背面に面取りを施す。両面とも丁寧に磨きこまれている。両面に，細くて浅い縦横の線が走る。黒色。方形とみられる。遺物包含層出土。

石盤の小破片は，多く出土しているが，そのほとんどが細片である。

Ⅵ　ま　と　め

分布調査では，海岸線に沿って平坦な地形があり，遺跡の可能性があるとされていた。須恵器や瓦器が表面採集されていたため，中世以前の遺跡も期待されたが，弥生土器，土師器，須恵器，瓦器，土師質土器などが出土したにとどまり，当時の遺構および遺構面は検出されなかった。近世遺構に関しては，集約的な土地利用の跡が窺われる。

１　土地利用の変遷　（Tab. 26）

第21区における明確な土地利用の開始は，江戸時代中頃以降，18世紀後半とみられる。

18世紀後半頃には，礎石建物跡ＳＢ－０４，池状遺構，溝状遺構ＳＤ－０５・０６，土塁状遺構ＳＡ－０１が構築され，一応の居住空間が構成される。

18世紀末頃には，礎石建物跡ＳＢ－０３，井戸跡ＳＥ－０２が構築されて，さらに居住空間が整備される。

19世紀に入ると，土塁状遺構ＳＡ－０４，溝状遺構ＳＤ－０７・０１が構築され，居住性の充実がみられる。また祭祀関連遺構ＳＸ－０１や小祠跡が設けられ，居住空間の南端に祭祀空間が付随される。

19世紀中葉頃に，礎石建物跡ＳＢ－０３の焼失の後を受けてＳＢ－０４も廃棄され，新たに，礎石建物跡ＳＢ－０１・０２，井戸跡ＳＥ－０３・０１，溝状遺構ＳＤ－０３・０４が構築され，居住空間の再編成がみられる。

19世紀後半頃には，土塁状遺構が整備され，ＳＡ－０１の東北と西にＳＡ－０２・０３が構築され，再び居住空間の整備が図られる。

19世紀末頃には，南の山腹に，大山土神社跡が構築され，祭祀空間の充実がみられる。

このように、当該調査地においては，18世紀後半以降のたゆまぬ土地利用の変遷が窺われる。

2　空間的利用状況

当該調査地は，東西に伸びる土塁状遺構の北と南に大別される。

すなわち，北は日常生活に伴う遺構・遺物の集中する私的な居住生活空間であり，大きくは，２度にわたる住居の構築がみられ，その間，あるいは後に，たび重なる空間整備が続けられている。

南は祭祀に関する遺構・遺物のみられる非日常的な祭祀公共空間として把握される。19世紀初頭は，小規模な祭祀であるが，居住空間の充実を受けて，19世紀末頃になると，大きな鳥居をもつ祭祀空間が形成される。

また，南は土佐泊浦から第28・29・30・31区の間の切り通しを通って，亀浦，鳴門海峡に向う街道の一部共考えられる。古地図などの分析，井戸跡ＳＥ－０２の南および東側の地形測量図にも道の痕跡があらわれている。そのため，街道は大山祇神社跡と土塁状遺構との間に想定される。

3　近世遺構と遺物

当該調査区では，近世中頃以降の遺構と大量の器物がみられた。

器物のなかでも，とりわけて伊万里系とみられる磁器がその大半を占める。徳島県下では，近世の遺構と伊万里系の遺物がみられるのは，他に徳島市延生軒跡，徳島市城ノ内遺跡，徳島市西の丸・御花畠の４調査地点にすぎない。

これらは，徳島城あるいは蜂須賀家の重臣屋敷跡であり，当該調査区のように，下級士族あるいは庶民階級に関わるものでない。

このように，庶民レベルでの近世資料が，ここに得られた意義は大きい。近世における調査例は少なく，調査と資料の増加がまたれる。

註

註１　概報とは，次の報告書を示す。

松永雅行・河野雄次編　1985　「徳島県文化財調査概報　昭和57年度」　徳島県教育委員会

註２　大橋康二　1986　のFig.16　広瀬向２号窯出土磁器（６）と窯道具に示された21。

註３・４　菅原康夫氏の御教示による

註５　九州陶磁文化館　1984　の肥前陶磁編年図表（５）による。

参考文献

大橋康二　1986　「南川原窯１辻窯・広瀬向窯」　佐賀県立九州陶磁文化館

古泉弘　1987　『江戸の考古学』　ニューサイエイス社

鳴門市史編纂委員会　1976　『鳴門市史』上巻

豊田進　1987　『慈光寺出土の陶磁器』

小林勝美　1974　「古墳時代の小松島　漁具」『小松島市史』上巻

菅原康夫編　1981　『中内遺跡』　徳島県教育委員会

森浩一・白石太一郎編　1968　『紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報告』　同志社大学文学部

山川浩美　1974　「蜂須賀家・藩士墓出土品について」　『徳島県博物館紀要』第５集　徳島県博物館

Tab. 1　第21区B－2グリッド礫層出土土器類観察表

番号	種　類	器　　形	技　法　・　文　様	法量（cm）	備　　考
1	瓦　器	碗		口　径　9.4	胎土：内面灰黄色，外面：淡黒色 焼成：ややあまい
2	瓦　器	碗		口　径　11.6	胎土：淡黒褐色 焼成：ややあまい
3	土師質 土　器	杯		口　径　10.5	胎土：淡赤褐色 焼成：良好
4	土師質 土　器	杯		口　径　12.0	胎土：淡黄褐色 焼成：あまい
5	土師質 土　器	杯		口　径　12.2 器　高　13.6 高台径　4.5	胎土：淡黄褐色 焼成：良好，高台
6	土師質 土　器	杯		底　径　8.6	胎土：淡黄褐色 焼成：良好，平底
7	土師質 土　器	杯		底　径　6.1	胎土：淡黄褐色 焼成：良好，平底
8	土師質 土　器	杯		底　径　6.7	胎土：淡赤褐色 焼成：良好，平底
9	土師質 土　器	杯		底　径　6.5	胎土：淡赤褐色 焼成：良好，平底
10	土師質 土　器	土　　鍋		口　径　23.0	胎土：淡赤褐色 焼成：良好，く字状口縁，煤付着
11	土師質 土　器	土　　鍋	ハケ目調整	口　径　23.2	胎土：輪赤褐色 焼成：良好，く字状口縁，煤付着

Tab. 2　第21区第1トレンチ第9層出土土器類観察表

番号	種　類	器　　形	技　法　・　文　様	法量（cm）	備　　考
12	土師質	甕		口　径　14.4	胎土：明赤褐色 焼成：良好
13	陶　器	皿	施釉	口　径　15.4	胎土：淡黄色，淡橙色 釉：にぶい緑灰色 貫入，瀬戸系
14	土師質 土　器	土　　鍋	ハケ目調整	口　径　28.9	胎土：淡褐色 焼成：良好，く字状口縁，煤付着

Tab. 3　第21区遺物包含層出土土器類観察表

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
15	磁器	碗	染付 外面：二筆網目文	口径 10.0 器高 5.2 高台径 4.0 高台高 1.0	胎土：灰白色 釉：灰濁色 くらわんか手 18C
16	磁器	碗	染付 外面：二筆網目文	口径 10.7 器高 4.9 高台径 4.3 高台高 0.9	胎土：灰白色 釉：灰緑濁色 くらわんか手 18C・歪
17	磁器	碗	染付 外面：菊文	高台高 0.9	釉：半透明 くらわんか手 18C
18	磁器	碗	染付 内面：四方襷文 外面：丸文	口径 12.4 器高 6.0 高台径 4.8 高台高 1.1	胎土：乳灰白色 釉：淡潮色濁色 くらわんか手 18C
19	陶器	碗	陶胎染付 外面：草花図	口径 11.4 器高 7.0 高台径 5.1 高台高 0.8	胎土：不明 釉：乳灰白色，釉だまりあり 貫入,18C
20	磁器	碗	染付 内面：四方襷文 外面：桃図	口径 12.3	胎土：灰白色 釉：淡青色 くらわんか手 18C末〜19C初
21	磁器	碗	染付 内外面：呉須染付	高台径 4.5 高台高 0.8	胎土：淡灰白色 釉：半透明 くらわんか手 18C
22	磁器	碗	染付 蛇ノ目釉ハギ 外面：笹図	口径 12.4 器高 4.5 高台径 5.1 高台高 0.9	胎土：白地 釉：淡緑灰濁色 くらわんか手 18C
23	磁器	碗	染付 蛇ノ目釉ハギ 外面：二筆網目文	高台径 4.6 高台高 0.5	胎土：乳白色 釉：淡灰濁色 くらわんか手 18C
24	陶器	碗	陶胎染付 内面：四方襷文 外面：柳下一屋図	口径 9.8 器高 9.6 高台径 4.1 高台高 0.7	胎土：灰黄色 釉：半透明 18C

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
25	陶器	碗	陶胎染付 外面：文様あり	口径 9.7 器高 6.2 高台径 4.6 高台高 0.7	釉：にぶい暗オリーブ色 貫入 18C
26	陶器	碗	陶胎染付 外面：文様あり	口径 10.2	胎土：白灰色 釉：半透明 貫入 18C
27	陶器	碗	陶胎染付 外面：文様あり	口径 10.5	胎土：暗灰色 釉：淡オリーブ灰色 18C
28	陶器	碗	陶胎染付 外面：文様あり	口径 12.6	胎土：灰色 釉：淡オリーブ灰色 貫入 18C
29	陶器	碗	陶胎染付 外面：草花図	口径 10.8	胎土：暗灰色 釉半透明 貫入 18C
30	陶器	碗	陶胎染付 外面：文様あり	高台径 4.1 高台高 0.7	胎土：灰色 釉：オリーブ灰色 貫入 18C
31	磁器	碗	青磁染付 見込：五弁花文 蛇ノ目釉ハギ	口径 10.3 器高 5.1 高台径 4.3 高台高 0.7	胎土：乳白色 釉：外淡緑色・内半透明 18C後
32	磁器	碗	碗青磁染付 見込：五弁花文 内面：四方襷文 高台内：渦福銘	口径 11.2 器高 0.5 高台径 4.5 高台高 0.9	胎土：乳灰白色 釉：淡緑色 18C後
33	磁器	碗	青磁染付 見込：五弁花文 高台内：渦福銘	高台径 4.6 高台高 0.9	胎土：乳灰白色 釉：淡緑色 18C後
34	磁器	碗	染付 高台内：銘あり	高台径 4.3 高台高 0.8	胎土：乳白色 釉：半透明 18C後
35	磁器	碗	染付 内面：四方襷文 外面：草花図	口径 12.4	胎土：乳白色 釉：淡青色 18C後

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
36	磁器	碗	染付磁器 内面：四方襷文 外面：くずし寿蟬文	口径 10.6	胎土：乳白色 釉：淡青色 18C後
37	磁器	碗	染付 外面：氷裂菊花文 高台内：寿銘	口径 11.0 器高 4.8 高台径 4.7 高台高 0.8	胎土：乳白色 釉半透明 18C末〜19C初
38	磁器	碗	染付 内面：雷文 外面：鉄線唐草図 筒形	口径 8.1 器高 7.3 高台径 4.0 高台高 0.5	胎土：乳白色 釉：半透明 19C初
39	磁器	碗	染付 外面：山水遠山図	口径 11.6 器高 6.4 高台径 6.7 高台高 1.5	胎土：乳白色 釉：半透明 広東碗 18C末〜19C初
40	磁器	蓋	染付 外面：撫子文	口径 9.6 器高 3.0 つまみ径 5.4 つまみ高 0.9	胎土：乳灰白色 釉：灰濁色 広東碗の蓋 18C末〜19C初
41	磁器	碗	染付 外面：撫子文	口径 11.5 器高 6.4 高台径 6.1 高台高 1.7	胎土：乳灰白色 釉：淡青色 広東碗 18C末〜19C初
42	磁器	碗	染付 見込：草文 外面：よろけ縞文	口径 10.5 器高 6.5 高台径 5.4 高台高 1.6	胎土：乳白色 釉：淡緑色 広東碗 19C初
43	磁器	碗	染付 外面：暦文	高台径 6.9 高台高 1.8	胎土：乳白色，広東碗 釉：淡青色,19C初
44	磁器	碗	染付 見込：花文 外面：枠絵羊歯図 ハリ支え	口径 10.1 器高 3.8 高台径 3.8 高台高 0.8	胎土：乳白色 釉：半透明 18C末〜19C初
45	磁器	碗	染付 外面：柳図	口径 10.4	胎土：乳白色 釉：半透明 18C末〜19C初
46	磁器	碗	染付 見込：扇文 外面：双葉文	口径 10.0 器高 5.4 高台径 4.0 高台高 0.8	胎土：乳白色 釉：半透明 18C末〜19C初

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
47	磁器	碗	染付 外面：蘭図	口径 9.9 器高 5.0 高台径 3.8 高台高 0.6	胎土：乳白色 釉：半透明 19C初
48	磁器	碗	染付 見込：花七宝図 外面：花図	高台径 4.9 高台高 0.8	胎土：乳白色 釉：半透明 18C末〜19C初
49	磁器	蓋	染付 外面：銀杏とこぼれ松葉図 山蓋	口径 8.9 器高 2.4 つまみ径 2.4 つまみ高 0.8	胎土：乳白色 釉：半透明 19C初
50	磁器	碗	染付 外面：立銀杏とこぼれ松葉図	口径 10.3	胎土：乳白色 釉：半透明 19C初
51	磁器	碗	染付 外面：菊小文 高台内：寿銘	口径 10.6 器高 5.6 高台径 3.5 高台高 0.7	胎土：乳白色 釉：半透明 端反り 19C前
52	磁器	碗	染付 外面：秋草図	口径 11.0	胎土：乳白色 釉：淡青黄色 端反り 19C前
53	磁器	碗	染付 外面：横縞に三丸文	口径 10.5 器高 0.1 高台径 4.2 高台高 0.9	胎土：淡黄灰色 釉：半透明 貫入 19C前
54	磁器	不明	染付 見込：葉とつる図	高台径 4.0 高台高 0.9	胎土：乳白色 釉：半赤色
55	磁器	不明	染付 見込：鷺図	高台径 3.7 高台高 0.8	胎土：乳白色 釉：半透明
56	磁器	碗	染付 見込：文字文 外面：草木文	高台径 4.0 高台高 0.5	胎土：乳白色 釉：半透明
57	磁器	碗	染付 見込：龍雲文 ハリ支え	高台径 4.4 高台高 0.9	胎土：乳白色 釉：半透明
58	磁器	碗	染付 見込くずし文字文	高台径 4.2 高台高 0.7	胎土：乳白色 釉：淡青色 18C末〜19C初

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
59	磁器	碗	染付 内面：四方襷文 外面：菊花図	口径 11.1 器高 5.9 高台径 4.8 高台高 0.9	胎土：乳白色 釉：淡青色 19C前
60	磁器	碗	染付 外面：横縞に秋草文 高台内：寿銘	口径 10.4 器高 5.8 高台径 3.9 高台高 0.6	胎土：乳白色 釉：淡青 端反り 19C前
61	磁器	碗	染付 外面：縞地・梅花文 高台内：寿銘	口径 10.4 器高 5.8 高台径 3.9 高台高 0.6	胎土：乳白色 釉：半透明 わずかに端反り 19C前
62	磁器	碗	染付 内面：鋸歯文 外面：並草歯文 高台内：大化年製銘	口径 10.7 器高 0.1 高台径 4.2 高台高 0.9	胎土：乳白色 釉：半透明 端反り 19C前
63	磁器	碗	染付 内面：帆船航海図 見込：唐花図 外面：唐花・窓絵山間・楼閣図	口径 11.3 器高 6.0 高台径 4.9 高台高 0.9	胎土：乳白色 釉：半透明 端反り，撥高台 19C前
64	磁器	蓋	染付 内面：雷文 外面：飛雲・鳳凰文	口径 9.4 器高 2.9 つまみ径 3.7 つまみ高 0.7	胎土：乳白色 釉：半透明 端反り，山蓋 19C前
65	磁器	碗	染付 内面：雷文 外面：飛雲・鳳凰文	口径 11.5	胎土：乳白色 釉：半透明 端反り 19C前
66	磁器	碗	染付 内面：松図 見込：寿銘	高台径 3.4 高台高 0.8	胎土：乳白色 釉：半透明 貫入 19C前
67	磁器	碗	染付 内面口縁部：雁 外面：柳下一屋図 ハリ支え	口径 11.1	胎土：乳白色 釉：半透明 端反り 19C前
68	磁器	碗	染付 外面：蔓草立涌文	口径 10.8	胎土：乳白色 釉：半透明 端反り

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
69	磁器	碗	染付 腰部花弁状型打ち成形	口径 11.6 器高 4.4 高台径 4.2 高台高 0.6	胎土：乳白色 釉：半透明，胴部茶褐色釉
70	磁器	碗	青磁染付 内面：松・牡丹図呉須染付，口銹 高台内：口寿園製銘	口径 12.0 器高 4.7 高台径 4.1 高台高 0.5	胎土：乳白色 釉：内面半透明・外面淡緑色 19C中
71	磁器	碗	内面：格子文 見込：扇文 蛇ノ目釉ハギ	口径 12.2 器高 4.8 高台径 4.8 高台高 0.8	胎土：乳灰色 釉：乳灰色，暗緑色釉による施文，端反り 広瀬向窯 19C中
72	陶器	碗	施釉陶器	高台径 6.0 高台高 0.9	胎土：淡黄褐色 釉：半透明 貫入
73	俊樹	碗	施釉陶器	高台径 5.6 高台高 1.7	胎土：乳黄色 釉：半透明 貫入
74	陶器	碗	施釉陶器	口径 10.8 器高 5.1 高台径 4.1 高台高 0.9	胎土：乳白色 釉：焦茶 汁器
75	陶器	碗	施釉陶器	口径 11.8 器高 5.5 高台径 4.4 高台高 0.6	胎土：乳白色 釉：濃青緑色 端反り 汁器
76	陶器	碗	施釉陶器	口径 11.8 器高 5.5 高台径 4.4 高台高 0.6	胎土：淡橙色 釉：にぶい緑色に赤褐色のかさね釉 端反り，汁器
77	磁器	猪口	染付 内面：四方襷文 外面：草文	口径 7.4	胎土：乳白色 釉：半透明，筒形 19C初 604に類例
78	磁器	猪口	染付 外面：小松原文 高台内：文様有り	口径 6.9 器高 5.2 高台径 3.6 高台高 0.6	胎土：淡灰白色 釉：淡青色 19C初，筒形 505,605に類例

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
79	陶器	猪口	施釉	残存高 3.2 高台径 3.2 高台高 0.5	胎土：淡黄色 釉：半透明 筒形
80	磁器	猪口	染付 外面：あやめ図	口径 6.0	胎土：乳白色 釉：半透明
81	磁器	蓋	染付 外面：人物図	口径 8.8 器高 2.4	胎土：乳白色 釉：半透明 山蓋，宝珠つまみ
82	磁器	猪口	染付 外面：人物図	口径 8.2 器高 5.4 高台径 3.2 高台高 0.7	胎土：乳白色 釉：半透明
83	磁器	猪口		残存高 4.8 高台径 3.5 高台高 1.3	胎土：乳白色 釉：淡青色
84	磁器	猪口	染付 外面：鳥文	口径 7.3	胎土：乳白路 釉：半透明 胴締形
85	磁器	猪口	染付 外面：紐文 高台内：文様有り 口銹	口径 8.7 器高 4.2 高台径 3.1 高台高 0.6	胎土：乳白色 釉：半透明 19C前　端反り 愛知県かみた窯？
86	磁器	猪口	染付 外面：紐文 高台内：文様有り 口銹	口径 8.2 器高 4.2 高台径 3.0 高台高 0.5	胎土：乳白色 釉：半透明 19C前　端反り 愛知県かみた窯？
87	磁器	猪口	染付 外面：紐文 口銹	口径 7.6 器高 3.7 高台径 3.9 高台高 0.5	胎土：乳白色 釉：半透明 19C前　端反り 愛知県かみた窯？
88	磁器	猪口	染付 外面：梅花文	口径 6.1 器高 2.7 高台径 2.1 高台高 0.5	胎土：乳白異論釉：灰白濁色 くらわんか手
89	磁器	猪口	染付 外面：羽子板の羽根文	口径 5.4 器高 2.5 高台径 1.8 高台高 0.3	胎土：乳白色 釉：半透明

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
90	磁器	猪口	染付 内面：染付文字有り	口径 6.3	胎土：乳白色 釉：半透明
91	磁器	猪口	染付	口径 6.0	胎土：乳白色 釉：半透明　端反り
92	磁器	猪口	染付	残存高 2.9 高台径 2.2 高台高 0.3	胎土：乳白色 釉：半透明　端反り
93	磁器	猪口		口径 4.0 器高 3.4 高台径 3.0 高台高 0.3	胎土：乳白色 釉：半透明 筒形
94	陶器	猪口	施釉 高台内：墨書あり	口径 8.9 器高 4.7 高台径 3.0 高台高 0.5	胎土：灰白色 釉：淡緑灰色 端反り 細かい貫入
95	陶器	猪口	施釉	口径 9.1	胎土：淡黄白色 釉：淡緑黄色 端反り，粗い貫入
96	陶器	猪口	施釉		胎土：乳黄白色 釉：淡緑黄色 端反り，貫入
97	陶器	猪口	施釉	高台径 3.3 高台高 0.6	胎土：乳黄白色，貫入 釉：緑がかった淡黄色
98	陶器	猪口	施釉	高台径 3.2 高台高 0.4	胎土：乳黄白色，貫入 釉：緑がかった灰黄色
99	磁器	仏餉具	染付 外面：氷裂菊花つなぎ文	口径 6.9 器高 6.8	胎土：乳白色，高杯形 釉：淡青白色
100	磁器	仏餉具	染付 外面：井桁文	口径 8.2	胎土：乳白色 釉：淡青白色
101	磁器	仏餉具	染付，外面：菊花文 腰部花弁状型打ち成形	口径 6.1	胎土：乳白色 釉：半透明
102	磁器	蓋	染付，外面：蓮弁文 天井部：山中一屋図	つまみ径 4.1 つまみ高 0.8	胎土：乳白色，釉：淡青白色，山蓋，18C後
103	磁器	蓋	青磁染付 つまみ部内：堇銘 内面：四方襷文 天井部：花図	口径 9.8 器高 2.9 つまみ径 4.7 つまみ高 0.7	胎土：乳灰白色 釉：淡緑色 山蓋 18C後

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
104	磁器	蓋	青磁染付 内面：四方襷文	口径 9.6	胎土：淡灰白色，山蓋 釉：暗オリーブ色 18C後
105	磁器	蓋	青磁染付 内面：四方襷文	口径 9.6	胎土：淡灰白色 釉：にぶいオリーブ色 山蓋,18C後
106	磁器	蓋	染付 外面：蛸唐草文 内面：四方襷文 天井部：文様有り	口径 9.1 器高 2.7 つまみ径 3.4 つまみ高 0.8	胎土：乳白色 釉：灰白濁色 山蓋 18C後
107	磁器	蓋	染付，つまみ部内：五弁花文 外面・内面：櫻珞文	つまみ径 4.2 つまみ高 0.6	胎土：乳白色，釉：淡青白色，山蓋，18C後
108	磁器	蓋	染付 外面：松図 内面：四方襷文 天井部：文様有り	口径 10.1 器高 2.9 つまみ径 4.1 つまみ高 0.7	胎土：乳白色 釉：淡青白色 山蓋 18C後
109	磁器	蓋	染付 外面：角銘文 内面：四方襷文 天井部：銘有り	口径 10.4 器高 3.0 つまみ径 4.0 つまみ高 0.7	胎土：乳白色 釉：灰白濁色 山蓋 18C後
110	磁器	蓋	染付，外面：竹林人物図 天井部：松竹梅文	つまみ径 4.0 つまみ高 0.7	胎土：乳白色，釉：淡青白色，山蓋，18C後
111	磁器	蓋	染付，外面：竹林人物図 天井部：松竹梅文	つまみ径 3.2 つまみ高 0.7	胎土：乳白色，釉：淡青白色，山蓋，18C後
112	磁器	蓋	染付 外面：暦文	口径 10.8	胎土：乳白色， 釉：淡灰白色，19C前 広東碗の蓋，山蓋
113	磁器	蓋	染付 つまみ部内・外面：茄子図 天井部：文様有り	口径 10.8 器高 3.2 つまみ径 5.7 つまみ高 1.1	胎土：乳白色 釉：淡青白色 山蓋 19C初
114	磁器	蓋	染付 外面：蓮弁文と笹・他 内面：四方襷文	口径 12.0	胎土：乳白色，山蓋 釉：淡青白色 19C前
115	磁器	蓋	染付 つまみ部内・外面：柳下牡丹図 天井部：白鷺図	口径 8.8 器高 2.6 つまみ径 5.0 つまみ高 0.9	胎土：淡黄白色 釉：灰濁色 山蓋,19C前 粗い貫入

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
116	磁器	蓋	染付 外面：海浜風景図	口径 9.7	胎土：乳白色，釉：半透明，山蓋，19C後
117	磁器	蓋	染付 外面：垣根に花文 内面：文様有り，天井部：福銘	つまみ径 4.3 つまみ高 0.7	胎土：乳白色 釉：淡青白色 山蓋，19C初，端反り
118	磁器	蓋	染付 外面：忍冬松竹梅図 内面：雷文 天井部：松竹梅図	口径 9.5 器高 3.2 つまみ径 4.0 つまみ高 1.0	胎土：乳白色 釉：半透明 山蓋,19C前 端反り
119	磁器	蓋	染付 外面：鶴飛翔図 底面：雷文	口径 8.8 器高 2.8 つまみ径 3.1 つまみ高 0.8	胎土：乳白色 釉：淡青白色 山蓋,19C前 端反り
120	磁器	蓋	染付 つまみ部内：角福銘 外面：秋草部，内面：草文 天井部：寿銘	口径 9.2 器高 2.5 つまみ径 3.5 つまみ高 0.9	胎土：乳白色 釉：淡青白色 山蓋,19C前 端反り
121	磁器	蓋	染付 外面：網目文 内面：文様有り 天井部：柳文	口径 9.3 器高 3.1 つまみ径 4.2 つまみ高 0.9	胎土：乳白色 釉：淡青白色 山蓋,19C前 端反り
122	磁器	蓋	染付 外面：麻葉文 内面：文様有り 天井部：井桁文	口径 8.6 器高 3.0 つまみ径 3.6 つまみ高 0.6	胎土：乳白色 釉：淡青白色 山蓋,19C前 端反り
123	磁器	蓋	染付 外面：遠山図 内面：文様有り 天井部：銘有り	口径 9.6 器高 3.3 つまみ径 4.2 つまみ高 0.8	胎土：乳白色 釉：灰白濁色 山蓋,19C前 端反り
124	磁器	蓋	染付 外面：秋草図 内面：文様有り 天井部：文様有り	口径 8.8 器高 3.1 つまみ径 3.5 つまみ高 0.7	胎土：乳白色 釉：淡青白色 山蓋,19C前 端反り
125	磁器	蓋	染付 外面：津図 天井部：文様有り	口径 10.5 器高 2.7 つまみ径 4.5 つまみ高 0.6	胎土：乳白色 釉：淡青白色 山蓋,19C前 端反り
126	磁器	蓋	染付 外面：縦仕切絵 天井部：文様有り	口径 10.9 器高 3.1 つまみ径 4.6 つまみ高 0.9	胎土：乳白色 釉：灰濁色 山蓋,19C前 端反り

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
127	磁器	蓋	染付 外面：菊花図	つまみ径 3.4 つみ高 0.7	胎土：乳黄白色，山蓋 釉：淡黄褐色， ハリ支え？
128	磁器	蓋	染付，型紙摺 つまみ部内：角福銘，外面：松に唐花文，内面：松に牡丹文 天井部：麒麟図	口径 10.5 器高 2.9 つまみ径 4.3 つまみ高 0.8	胎土：乳白色 釉：半透明 山蓋 19C後
129	陶器	蓋	施釉 外面：菊花文	つまみ径 4.0 つまみ高 0.8	胎土：淡灰黄色，山蓋 菊花白泥，葉茎黒銀重ね釉
130	陶器	蓋	施釉 外面：3～4条の凹線を螺旋形にめぐらす	口径 13.6 器高 2.9 つまみ径 3.5 つまみ高 1.0	胎土：淡灰黄色 釉：淡オリーブ色 山蓋 貫入
131	陶器	蓋	施釉 外面：6～7条の凹線を螺旋形にめぐらす	口径 12.4 器高 3.3 つまみ径 5.1 つまみ高 0.6	胎土：赤褐色 釉：暗鹿褐色 山蓋 かえり
132	陶器	蓋	施釉 外面：草花文	口径 10.4 器高 4.1	胎土：淡黄色，山蓋 釉：半透明，かえり 獅子形つまみ
133	陶器	蓋	施釉 外面：圏線	口径 7.2	胎土：淡黄色，山蓋 釉：明淡黄色，かえり 宝珠つまみ欠失
134	陶器	蓋	施釉	口径 7.8 器高 2.4	胎土：淡橙色，山蓋 釉：暗茶褐色，かえり 擬宝珠つまみ
135	陶器	蓋	施釉 ハリ支え	口径 8.3 器高 2.9	胎土：暗灰色，山蓋 釉：オリーブ褐色 かえり，擬宝珠つまみ
136	陶器	蓋	施釉	口径 6.6 器高 3.2	胎土：淡橙色，山蓋 釉：にぶいオリーブ褐色，かえり 擬宝珠つまみ
137	陶器	蓋	無釉	口径 9.0	胎土：淡灰色，山蓋 かえり，つまみ欠失 煤付着
138	磁器	蓋	染付 外面：草花図	口径 14.4	胎土：乳白色，合蓋？ 釉：淡青白色，かえり 18C

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
139	陶器	蓋	施釉 外面：朝顔図	口径 5.4 器高 1.1	胎土：乳白色，合蓋 釉：淡青白色
140	磁器	蓋	染付 回転糸切り	口径 10.4 器高 2.7	胎土：淡黄橙色，落蓋 釉：半透明，斑点状緑色釉，擬宝珠つまみ
141	陶器	蓋	施釉	口径 9.8 器高 2.2	胎土：淡橙色，落蓋 釉赤茶色 擬宝珠つまみ
142	瓦質土器	蓋		口径 11.3 器高 1.6	胎土：淡黄色，落蓋， 擬宝珠つまみ
143	陶器	蓋	施釉 外面：呉須による文様有り	口径 10.5	胎土：淡灰黄色，落蓋 釉：淡灰白色
144	陶器	蓋	施釉，外面：縞状に白灰釉，5～6条の凹線を螺旋形にめぐらす 糸切り	口径 9.8 器高 2.4	胎土：灰白色，落蓋， 釉：淡オリーブ褐色， 亀形つまみ
145	陶器	蓋	施釉	幅 7.2	胎土：淡橙色，小判形 釉：明橙黄色 三角形状つまみ
146	磁器	皿	染付磁器 見込み：染付文・2条圏線 高台内：□□□化年製の銘文		胎土：乳白色，緻密 釉：半透明 18C
147	磁器	皿	染付磁器 内面：花図	固形 23.0 器高 3.1 高台径 15.0 高台高 0.5	胎土：乳白色 釉：灰青白色 端反り 18CC
148	磁器	更紗	白磁染付 内面：斜格子文 外面：染付文様あり 高台脇：2条圏線，蛇ノ目釉ハギ	口径 12.0 器高 3.2 高台径 4.8 高台高 0.7	胎土：灰白色，緻密 釉：灰濁色 くらわんか手 18C
149	磁器	皿	染付磁器 内面：斜格子文 蛇ノ目釉ハギ	口径 12.8 器高 3.8 高台径 4.8 高台高 0.7	胎土：淡黄白色 釉：灰白濁色 くらわんか手 18C
150	磁器	皿	染付磁器 内面：斜格子文 蛇ノ目釉ハギ	口径 14.1 器高 4.0 高台径 0.7 高台高 0.6	胎土：淡黄白色 釉：淡青白色 くらわんか手 18C

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
151	磁器	皿	染付磁器 内面：草花文	口径 12.4 器高 4.0 高台径 0.6 高台高 0.6	胎土：淡黄白色 釉：淡青白色 くらわんか手 18C
152	磁器	皿	染付磁器 内面：草花文	口径 23.0 器高 3.1 高台径 15.0 高台高 0.5	胎土：乳白色 釉淡青白色 くらわんか手，端反り 18C後
153	磁器	皿	染付磁器・型打ち成形 内面：竹林人物図 外面：丸文 高台内：富銘	口径 11.8 器高 2.4 高台径 7.4 高台高 0.4	胎土：乳白色 釉：半透明 菊皿 18C
154	磁器	皿	染付磁器・型打ち成形 内面：竹林人物図外面：丸文 高台内：銘あり	口径 12.4 器高 2.4 高台径 8.0 高台高 0.5	胎土：乳白色 釉：半透明 菊皿 18C
155	磁器	皿	内面：押陰刻菊花文 蛇ノ目凹型高台 型打ち成形	口径 12.2 器高 3.6 高台径 7.0 高台高 0.8	胎土：乳灰白色 釉：淡青白色 菊皿 18C末〜19C初
156	磁器	皿	内面：押陰刻菊花文 蛇ノ目凹型高台 型打ち成形	高台径 7.0 高台高 0.7	胎土：淡灰白色 釉：淡青白色 菊皿，18C末
157	磁器	皿	内面：押陰刻菊花文 蛇ノ目凹型高台 型打ち成形	高台径 7.0 高台高 0.8	胎土：淡灰白色 釉：淡青白色 菊皿 18C末
158	磁器	皿	染付 内面：松・帆船図押印陰刻文 口銹	口径 10.3 器高 2.4 高台径 5.5 高台高 0.7	胎土：乳白色 釉：半透明
159	磁器	皿	染付 内面：花図	口径 13.8 器高 3.9 高台低 7.7 高台高 1.1	胎土：乳白色 釉：淡青白色 玉緑状端反り 19C前
160	磁器	皿	染付 内外面：遠山図	口径 15.3 器高 3.5 高台径 10.6 高台高 0.2	胎土：乳白色 釉：淡青色 端反り 19C前

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
161	磁器	皿	見込み：押印陰刻寿字文 型打ち成形	口径 9.9 器高 2.0 高台径 5.5 高台高 0.3	胎土：乳白色 釉：淡青白色 端反り
162	磁器	皿	見込み：押印陰刻寿字文 型打ち成形	口径 10.0 器高 2.7 高台径 5.6 高台高 0.5	胎土：乳白色 釉：半透明 端反り
163	磁器	皿	見込み：押印陰刻寿字文 型打ち成形	口径 9.2 器高 1.9 高台径 4.8 高台高 0.5	胎土：乳白色 釉：半透明 端反り
164	磁器	皿	見込み：押印陰刻文字文 型打ち成形	口径 9.3 器高 1.8 高台径 4.8 高台高 0.3	胎土：乳白色 釉：半透明 端反り
165	磁器	皿	染付 見込み：草図 蛇ノ目凹型高台	高台径 9.7 高台高 0.4	胎土：乳白色 釉：淡青白色
166	磁器	皿	染付 草図	口径 14.4	胎土：乳白色 釉：白色
167	磁器	皿	染付 内面：築山図，ハリ支え 蛇ノ目凹型高台	高台径 8.2 高台高 0.7	胎土：乳黄白色 釉：半透明
168	陶器	皿	施釉陶器 内面：押印陽刻鼠図	口径 25.5 器高 2.9 高台径 16.7 高台高 0.7	胎土：淡黄褐色 釉：半透明
169	磁器	皿	染付 外面：松葉文型紙摺 ロクロ目 半筒形	口径 6.3 器高 1.9 高台径 5.4 高台高 0.2	胎土：乳白色 釉：白色 蓋物
170	磁器	皿	外面：陰刻蛸唐草文 型打ち成形	口径 6.3 器高 1.4 高台径 2.6 高台高 0.2	胎土：乳黄白色 釉：半透明 紅皿 19C初
171	磁器	皿	貝型型打ち成形	口径 4.8 器高 1.4 高台径 1.5 高台高 0.1	胎土：乳白色 釉：白色 紅皿 19C初

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
172	磁器	皿	貝型型打ち成形	口径 4.5 器高 1.4 高台径 1.5 高台高 0.2	胎土：乳白色 釉：淡青白色 紅皿
173	磁器	皿	貝型型打ち成形	口径 2.4 器高 0.9 高台径 0.8 高台高 0.2	胎土：乳白色 釉：白色 紅皿
174	磁器	皿		口径 4.0 器高 1.0 高台径 2.1 高台高 0.4	胎土：乳白色 釉：半透明 紅皿
175	陶器	燈明皿	施釉	口径 9.0	胎土：乳黄白色 釉：半透明 油皿 粗い貫入，煤付着
176	陶器	燈明皿	施釉 ハリ支え	口径 9.7 器高 1.7	胎土：乳黄白色 釉：半透明 油皿 細貫入，煤付着
177	陶器	燈明皿	施釉	口径 8.0 器高 1.4 底径 3.5	胎土：乳灰白色 釉：灰濁色 油皿 煤付着
178	陶器	燈明皿	施釉	口径 8.0	胎土：淡黄色 釉：半透明 油皿 細貫入，煤付着
179	陶器	燈明差	施釉 内面：4条単位1帯の直線 ハリ支え	口径 11.0 器高 2.3 底径 4.0	胎土：淡黄白色 釉：半透明 油皿 細貫入，美濃・瀬戸系
180	陶器	燈明皿	施釉 内面:2条単位2帯の直線	口径 12.3	胎土：乳黄白色 釉：半透明 油皿，細貫入，煤付着
181	陶器	燈明皿	施釉 内面：2条単位2帯の直線	口径 11.0	胎土：灰白色 釉：淡オリーブ色 油皿，貫入，煤付着 美濃・瀬戸系

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
182	陶器	燈明皿	施釉 突帯	口径 11.3 器高 2.1 底径 4.1	胎土：淡黄色 釉：半透明 油受皿，細貫入 煤付着，美濃・瀬戸系
183	陶器	燈明皿	施釉 突帯に半月形切りこみ1箇所遺存	口径 10.3 器高 1.4 底径 3.8	胎土：乳黄色 釉：淡青灰色 油受皿 貫入，煤付着
184	陶器	燈明皿	施釉 糸切り	口径 7.5 器高 1.5 底径 3.6	胎土：淡赤褐色 釉：暗赤褐色 脚付油受皿の油皿
185	陶器	燈明皿	施釉	口径 7.2 器高 1.5 底径 3.2	胎土：赤褐色 釉：暗赤褐色 脚付油受皿の油皿
186	陶器	燈明皿	施釉 突帯に半月形切りこみ1箇所遺存	口径 6.4	胎土：赤褐色 釉：黒褐色 脚付油受皿
187	陶器	燈明皿	施釉 突帯に半月形切りこみ1箇所 回転糸切り	口径 7.0 器高 7.4 底径 4.6	胎土：赤褐色 釉：暗赤褐色 脚付油受皿
188	陶器	燈明差	施釉 油皿戸油受皿の合成形	口径 6.4 器高 6.6 底径 3.5	胎土：黒褐色 釉：暗赤褐色 脚付油受皿
189	陶器	燈明皿	施釉	口径 8.4	胎土：橙色 釉：淡赤褐色 油皿，煤付着
190	陶器	燈明皿	施釉	口径 10.2	胎土：橙色 釉：淡赤褐色 油皿，煤付着
191	陶器	燈明皿	施釉	口径 8.2	胎土：橙色 釉：暗赤色 油皿，煤付着
192	陶器	燈明皿	施釉	口径 10.9	胎土：橙色 釉：暗鹿色 油皿，煤付着
193	陶器	燈明皿	施釉	口径 8.0	胎土：淡赤色 釉：暗化色 油皿，煤付着

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
194	陶器	燈明皿	施釉	口径 10.8 器高 5.9 底径 1.5	胎土：淡赤橙色 釉：暗赤色 油皿 煤付着
195	陶器	燈明皿	施釉	口径 8.1 器高 1.2	胎土：黒褐色 釉：暗赤灰色 油皿 煤付着
196	陶器	燈明皿	施釉 指押え	口径 9.4	胎土：黒赤灰色 釉：透明 油皿 煤付着
197	陶器	燈明皿	施釉 回転糸切り	口径 10.2 器高 1.6 底径 3.3	胎土：黒褐色 釉：暗赤灰色 油皿 煤付着
198	磁器	鉢	染付 内面：笹図		胎土：乳白色，釉：灰白色，玉縁状，19C
199	磁器	鉢	染付 内面：笹図 外面：蔦図		胎土：乳白色，釉：淡青白色，玉縁状，19C
200	磁器	鉢	染付 外面：秋草遠山図	口径 18.8	胎土：乳白色，釉：半透明，19C
201	陶器	鉢	施釉	口径 20.0	胎土：館黄色，釉：半透明釉の上に白釉がけ玉縁状
202	陶器	鉢	施釉	口径 19.6	胎土：明赤橙色 釉：暗褐色
203	陶器	鉢	施釉	口径 24.4	胎土：淡黄色 釉：オリーブ色 片口，玉縁状
204	陶器	鉢	施釉	口径 19.8	胎土：赤褐色 釉：暗赤褐色
205	陶器	鉢	施釉	口径 15.7	胎土：淡黄色，釉：暗オリーブ色，片口？
206	陶器	鉢	施釉，ハリ支え2箇所遺存	高台径 10.4 高台高 1.1	胎土：明淡褐色 釉：淡黄褐色

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
207	陶器	鉢	施釉，ハリ支え1箇所遺存	高台径 8.3 高台高 0.45	胎土：黄灰色 釉：オリーブ色
208	陶器	鉢	施釉	高台径 6.3 高台高 0.95	胎土：赤褐色 釉：暗赤褐色
209	陶器	鉢	施釉，ハリ支え2箇所遺存	高台径 14.9 高台高 1.3	胎土：淡黄色 釉：褐色
210	陶器	鉢	施釉，ハリ支え3箇所遺存 内面：白泥ハケ目	高台径 0.7 高台高 1.7	胎土：赤褐色，釉：暗褐色，18C前，唐津
211	陶器	鉢	施釉	高台径 5.8 高台高 0.9	胎土：暗褐色 釉：暗赤褐色
212	陶器	鉢	施釉	口径 11.8 器高 6.5 高台径 5.3 高台高 1.1	胎土：赤褐色 釉：暗赤褐色
213	陶器	鉢	施釉 平底	口径 11.1 器高 5.7	胎土：赤褐色 釉：茶褐色 半筒形，重ね焼の痕跡 634に類似，大谷焼系
214	磁器	香炉	染付 外面：雲竜図		胎土：乳白色 釉：淡青白色，筒形
215	陶器	香炉	施釉，外面：押陰刻，白□□香□，黄金□，銘	口径 9.7	胎土：明黄褐色 釉：乳黄白色，筒形
216	陶器	香炉	施釉 外面：押印刻花文，渦文	口径 9.9	胎土：淡黄色 釉：緑色，筒形
217	磁器	香炉	見込墨書□十	口径 8.3	胎土：乳白色 釉：淡緑灰色，壺形
218	陶器	香炉	施釉 外面：暗緑釉文様	口径 2.5 器高 3.3	胎土：淡黄色，釉：白濁色，壺形，取手1対貫入
219	陶器	香炉	施釉	口径 10.2 器高 8.0 高台径 5.4 高台高 0.4	胎土：白灰色 釉：にぶいオリーブ 筒形
220	陶器	香炉	施釉	口径 11.2 器高 9.2 高台径 11.1 高台高 0.6	胎土：黒灰色 釉：乳白濁色 筒形，貫入 重ね焼の痕跡

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
221	陶器	香炉	施釉 外面：赤紫・薄緑色の釉による	口径 10.2 器高 9.2 高台径 11.0 高台高 0.5	胎土：淡黄色 釉：明黄褐色 細貫入 筒形
222	陶器	鉢	施釉	底径 17.0	胎土：赤橙色 釉：暗赤褐色，平底， 重ね焼の痕跡
223	陶器	擂鉢	施釉 15条単位の擂目	口径 14.8 器高 0.1 高台径 5.3 高台高 1.1	胎土：赤褐色 釉：暗赤褐色 片口
224	陶器	擂鉢	施釉，9条単位の擂目 内底面：交又する擂目	口径 21.0 器高 6.6	胎土：赤褐色 釉：半透明，平底
225	陶器	擂鉢	施釉 13条単位の擂目		胎土：淡赤褐色 釉：半透明，平底
226	陶器	擂鉢	無釉，9条単位の擂目 内底面：円弧状擂目		胎土：明赤橙色 平底
227	瓦質土器	火舎	外面：押陰刻菊花文 内面：指頭圧痕	口径 21.6	胎土：白灰色
228	瓦質土器	火舎	内面：指頭圧痕 外面：陰刻草文	口径 24.6	胎土：淡灰色
229	瓦質土器	火舎		高台径 24.1	胎土：淡灰黄色，筒形
230	陶器	火舎	無釉		胎土：淡橙色，高高台 煤付着
231	陶器	鍋	施釉 外面：陰刻櫛目状文		山蓋，胎土：淡黄問色 釉：褐色暗オリーブ色
232	陶器	鍋	施釉 外面：陰刻櫛目状文		山蓋，胎土：淡黄色 釉：褐色オリーブ色 煤付着
233	陶器	鍋	施釉 外面：陰刻櫛目状文	口径 19.8	胎土：暗灰色 釉：暗褐色暗オリーブ 色，片口
234	陶器	鍋	施釉	底径 9.1	胎土：暗灰色 釉：暗オリーブ色 煤付着

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
235	陶器	鍋	施釉 外面：陰刻櫛目状文	口径 7.7	胎土：淡橙色，釉：にぶい茶褐色，無頸壺形 煤付着
236	陶器	鍋	施釉 外面：陰刻櫛目状文		胎土：淡橙色 釉：茶褐色，無頸壺形，煤付着
237	陶器	鍋	無釉 外面：陰刻櫛目状文	口径 16.8	胎土：淡橙色
238	陶器	鍋	施釉	底径 6.3	胎土：淡橙色 釉：暗緑色，煤付着
239	陶器	鍋	施釉	底径 7.4	胎土：乳黄白色 釉：透明，煤付着
240	瓦質土器	鍋			胎土：灰黄色 煤付着
241	瓦質土器	鍋			胎土：淡黄色 煤付着
242	瓦質土器	土釜	外面：陰刻波状文		胎土：淡黄灰色
243	瓦質土器	土釜		口径 18.6	胎土：淡黄灰色 鍔，煤付着
244	瓦質土器	土釜	指押え	口径 17.4	胎土：淡灰黒色 鍔，煤付着
245	唐質土器	土釜		口径 21.6	胎土：淡黄灰色 鍔，煤付着
246	瓦質土器	土釜	外面:3条の沈線	口径 20.4 底径 12.0	胎土：淡黄色 鍔，煤付着
247	瓦質土器	土釜	外面：押陽刻唐草文	口径 23.4	胎土：淡黄白色 鍔，煤付着
248	瓦質土器	土釜			胎土：淡黄色，煤付着 茶釜，鍔，三角形状取手
249	瓦質土器	土釜	外面：押陽刻文		胎土：灰白色，煤付着，茶釜，鍔，三角形状取手
250	瓦質土器	土釜			胎土：淡黄灰色，煤付着，茶釜，算盤玉形

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
251	瓦質土器	土釜	外面：押陽刻文Z字状文様		胎土：淡黄灰色，煤付着，茶釜，鍔
252	陶器	土瓶	施釉 外面：風景図		胎土：淡黄色，釉：半透明，煤付着，穿孔3箇所遺存直径7㎜，急須
253	陶器	土瓶	施釉 外面：菊花文	口径 8.2	胎土：淡橙色 釉：乳白色，煤付着，穿孔4箇所直径8㎜
254	瓦質土器	土瓶	外面：押陽刻文	口径 11.5	胎土：淡黄橙色，穿孔3箇所直径1.1cm， 三角形状取手
255	陶器	壺	施釉	口径 8.2	胎土：にぶい赤褐色 釉：暗茶褐色
256	陶器	壺	施釉 回転糸切り	底径 3.0	胎土：赤紫色 釉：暗赤褐色
257	陶器	壺	施釉：回転糸切り	底径 3.5	胎土：赤紫色 釉：暗赤褐色
258	陶器	壺	施釉	底径 4.6	胎土：赤紫色 釉：黒褐色
259	陶器	壺	施釉	底径 6.8	胎土：暗赤色 釉：暗赤褐色
260	陶器	壺	施釉	底径 6.3	胎土：黒褐色 釉：暗茶褐色 算盤玉状
261	陶器	壺	無釉，回転糸切り 胴部：墨書あり，底部：三の墨書	底径 6.3	胎土：明橙色
262	陶器	壺	施釉	高台径 5.7 高台高 0.8	胎土：明黄橙色 釉：黒色釉上に茶褐色釉，黒色小斑点 475に類似
263	陶器	壺	施釉	底径 9.3	胎土：赤褐色 釉：暗褐色，筒形
264	陶器	壺	施釉 肩部：暗褐色釉による流釉的手法 胴部：押印陰刻喜銘	口径 11.6 器高 18.6 底径 11.3	胎土：淡黄橙色 釉：オリーブ褐色 筒形
265	陶器	壺	無釉	口径 24.0	胎土：明橙色

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
266	磁器	瓶		高台径 4.0 高台高 0.6	胎土：乳白色，花生 釉：白濁色
267	磁器	瓶	染付 胴部：圏線	高台径 9.2 高台高 1.2	胎土：乳灰白色，花生 釉：淡青白色 高台畳付，高台内に砂
268	磁器	瓶	染付 胴部：草花文	高台径 9.0 高台高 1.1	胎土：乳白色，釉：淡緑白色，粗貫入，花生
269	陶器	瓶	施釉	口径 2.6 器高 16.1	胎土：暗灰色，釉：茶褐色，胴部にしぼり，270,480類似
270	陶器	瓶	施釉 胴部：陽刻人物図		胎土：淡赤橙色，釉：赤橙色，269,480に類似
271	磁器	瓶	染付 肩部：菊花文，赤絵花文		胎土：乳白色 釉：淡青白色
272	陶器	瓶	施釉		胎土：淡褐色 釉：青緑色
273	磁器	徳利	染付 胴部：蛸唐草文		胎土：乳白色，S字状 釉：淡青灰色，588に類似，18C末～19C前
274	磁器	徳利	染付 胴部：蛸唐草文	底径 4.0	胎土：乳白色，釉：淡青灰色，588に類例 18C末～19C前
275	磁器	徳利	染付 胴部：圏線		胎土：乳白色，釉：淡青白色，588に類例 18C末～19C前
276	磁器	徳利	染付 胴部：唐草図		胎土：乳白色 釉：淡青白色 18C後～19C初
277	磁器	徳利	染付 胴部：草花図	高台径 4.8 高台高 0.6	胎土：乳白色 釉：淡青白色 18C後～19C初
278	磁器	徳利	染付 胴部：草花図	高台径 4.6 高台高 0.7	胎土乳白色，釉：灰白濁色，碁笥底状 18C後～19C初
279	磁器	徳利	染付 胴部：蛸唐草文	高台径 3.8 高台高 0.8	胎土：乳白色 釉：淡青白色 18C後～19C初

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
280	磁器	徳利	染付 頸部：蛸唐草文 胴部：松竹梅図	口径 1.7 器高 10.9 高台径 2.8 高台高 0.8	胎土：乳白色 釉：白色 碁笥底状
281	磁器	徳利	染付 胴部：赤松草花図，染付蓮弁文		胎土：乳白色 釉：半透明
282	磁器	徳利	胴部：赤松草花図		胎土：乳白色 釉：半透明
283	磁器	徳利	胴部：黒・暗緑青色釉による花図 底部：肥22銘	口径 2.5 器高 13.9 底径 4.7	胎土：乳白色 釉：白色 碁笥底状，銚子
284	陶器	徳利	施釉	口径 5.6 器高 15.0 底径 5.6	胎土：赤褐色 釉：透明 銚子
285	陶器	徳利	施釉	底径 6.2	胎土：淡褐色，貫入 釉：淡オリーブ色
286	陶器	徳利	施釉 肩部：大，柳，酒の陰刻	底径 6.9	胎土：暗赤褐色 釉：黒褐色，大谷焼系
287	陶器	徳利	施釉	底径 9.7	胎土：淡黄灰色 釉：暗褐色，底部黒釉色，大谷焼系
288	陶器	徳利	施釉 胴部：□陰刻，5条の螺旋状沈線	底径 7.8	胎土：赤褐色，釉：にぶい茶褐色，大谷焼系
289	陶器	徳利	施釉 胴部：□陰刻，螺旋状沈線	高台径 7.4 高台高 1.0	胎土：赤褐色，釉：暗茶褐色，大谷焼系
290	陶器	徳利	施釉 肩部：高，酒，□の陰刻	口径 3.4	胎土：赤褐色 釉：暗褐色，大谷焼系
291	陶器	徳利	施釉 肩部：塩酒の陰刻	高台径 7.8 高台高 1.6	胎土：暗赤褐色 釉：黒褐色，大谷焼系
292	陶器	徳利	施釉 高台：州の陰刻？	高台径 8.2 高台高 1.6	胎土：暗赤褐色 釉：暗褐色，大谷焼系
293	陶器	徳利	施釉：肩部：林，□，□の陰刻	口径 5.7	胎土：暗赤褐色 釉：暗褐色，大谷焼系
294	陶器	徳利	施釉：肩部：玉，申□の陰刻	高台径 10.0 高台高 1.0	胎土：赤褐色 釉：黒褐色，大谷焼系
295	陶器	徳利	施釉；肩部：白泥で酒，南，□	口径 4.0	胎土：暗赤色 釉：赤黒色，大谷焼系

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
296	陶器	徳利	施釉 肩部：白泥で岡，□□		胎土：赤褐色，釉：黒褐色，大谷焼系
297	陶器	徳利	施釉 肩部：□，酒の陰刻		胎土：明橙色，釉：暗赤褐色，大谷焼系
298	陶器	徳利	施釉 肩部：酒，□の陰刻		胎土：赤褐色，釉：にぶい赤褐色，大谷焼系
299	陶器	徳利	施釉 肩部：酒の陰刻		胎土：明鹿褐色，釉：暗赤褐色，大谷焼系
300	陶器	徳利	施釉 肩部：酒の陰刻		胎土：赤褐色，釉：にぶい赤褐色，大谷焼系
301	陶器	徳利	施釉 肩部：酒の陰刻		胎土：赤褐色，油脂：黒褐色，大谷焼系
302	陶器	徳利	施釉 肩部：酒の陰刻		胎土：明赤橙色，釉：暗茶褐色，大谷焼系
303	陶器	徳利	施釉 肩部：南の陰刻		胎土：明赤褐色，釉：暗赤褐色，大谷焼系
304	陶器	徳利	施釉 胴部酒の陰刻		胎土：赤褐色，釉：暗赤褐色，大谷焼系
305	陶器	徳利	施釉，酒の陰刻		大谷焼系
306	陶器	徳利	施釉 肩部：當，銀，屋の陰刻		胎土：赤褐色，釉：暗赤褐色，大谷焼系
307	陶器	徳利	施釉 肩部：當の陰刻		胎土：にぶい橙色，釉：暗赤褐色，大谷焼系
308	陶器	徳利	施釉 屋の陰刻		胎土：にぶい赤灰色 釉：黒褐色，大谷焼系
309	陶器	徳利	施釉，□屋の陰刻		大谷焼系
310	陶器	徳利	施釉，銀の陰刻		大谷焼系
311	陶器	徳利	施釉，屋の陰刻		大谷焼系
312	陶器	徳利	施釉，屋の陰刻		大谷焼系
313	陶器	徳利	施釉，八幡屋の陰刻		大谷焼系
314	陶器	徳利	施釉，八万の陰刻		大谷焼系
315	陶器	徳利	施釉，高，嶋の陰刻		大谷焼系
316	陶器	徳利	施釉，□嶋の陰刻		大谷焼系

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
317	陶器	徳利	施釉，高，酒，刀亥□の陰刻		大谷焼系
318	陶器	徳利	施釉 高の陰刻	高台径　9.1 高台高　1.7	胎土：暗赤褐色，釉：暗赤褐色，大谷焼系
319	陶器	徳利	施釉 肩部：高の陰刻		胎土：にぶい赤褐色 釉：黒褐色，大谷焼系
320	陶器	徳利	施釉 肩部：高の陰刻		胎土：赤褐色 釉：にぶい暗赤褐色，大谷焼系
321	陶器	徳利	施釉 肩部：高，戊□の陰刻		胎土：赤褐色，釉：にぶい茶褐色，大谷焼系
322	陶器	徳利	施釉 肩部：□，林の陰刻		胎土：にぶい赤褐色 釉：黒赤褐色 大谷焼系
323	陶器	徳利	施釉 肩部：林の陰刻		胎土：にぶい赤褐色 釉：暗赤褐色，大谷焼系
324	陶器	徳利	施釉 肩部：立の陰刻		胎土：にぶい橙色 釉：黒褐色，大谷焼系
325	陶器	徳利	施釉 肩部：立の陰刻		胎土：にぶい橙色 釉：黒褐色，大谷焼系
326	陶器	徳利	施釉 肩部：□，細の陰刻		胎土：にぶい赤橙色 釉：黒褐色，大谷焼系
327	陶器	徳利	施釉 胴部：綿の陰刻		胎土：鈍い赤褐色 釉：黒褐色，大谷焼系
328	陶器	徳利	施釉 胴部：細又は綿の陰刻		胎土：赤褐色 釉：黒褐色，大谷焼系
329	陶器	徳利	施釉，綿の陰刻		大谷焼系
330	陶器	徳利	施釉，谷の陰刻		大谷焼系
331	陶器	徳利	施釉，谷の陰刻		大谷焼系
332	陶器	徳利	施釉 肩部：谷の陰刻		胎土：赤褐色 釉：黒褐色，大谷焼系
333	陶器	徳利	施釉 肩部：能の陰刻		胎土：にぶい赤褐色 釉：にぶい暗赤褐色 大谷焼系
334	陶器	徳利	施釉，田の陰刻		大谷焼系

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
335	陶器	徳利	施釉，田の陰刻		大谷焼系
336	陶器	徳利	施釉，黒の陰刻		大谷焼系
337	陶器	徳利	施釉，富士の陰刻		大谷焼系
338	陶器	徳利	施釉，國の陰刻		大谷焼系
339	陶器	徳利	施釉，恵の陰刻		大谷焼系
340	陶器	徳利	施釉，堂の陰刻		大谷焼系
341	陶器	徳利	施釉，安の陰刻		大谷焼系
342	陶器	徳利	施釉，佐の陰刻		大谷焼系
343	陶器	徳利	施釉，丸の陰刻		大谷焼系
344	陶器	徳利	施釉，戈の陰刻		大谷焼系
345	陶器	徳利	施釉，申ハルの陰刻		大谷焼系
346	陶器	徳利	施釉，秋の陰刻		大谷焼系
347	陶器	徳利	施釉，西の陰刻		大谷焼系
348	陶器	徳利	施釉，南の陰刻		大谷焼系
349	陶器	徳利	施釉 肩部：南の陰刻		胎土：赤褐色 釉：黒褐色，大谷焼系
350	陶器	徳利	施釉 胴部：戸の陰刻？		胎土：灰黒色，釉：暗赤褐色，大谷焼系
351	陶器	徳利	施釉 胴部：柳の陰刻		胎土：灰黒色，釉：暗赤褐色，大谷焼系
352	陶器	徳利	施釉 肩部：陰刻有り		胎土：にぶい赤褐色 釉：黒褐色，大谷焼系
353	陶器	徳利	施釉 肩部：陰刻有り		胎土：にぶい赤褐色 釉：暗赤褐色 大谷焼系
354	陶器	徳利	施釉 肩部：陰刻有り，㐅の押印陰刻		胎土：灰黒色，釉：暗化褐色，大谷焼系
355	陶器	徳利	施釉，三の陰刻		大谷焼系
356	陶器	徳利	施釉，㊥の陰刻		大谷焼系

Tab. 4　第21区第1層出土土器類観察表

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
357	陶器	碗	染付，貫入 草文	高台径　4.3 高台高　0.8	18C，胎土：淡灰色 釉：淡緑灰色
358	磁器	碗	見込：五弁花 高台内：文字文	高台径　5.2 高台高　0.8	18C くらわんか手 胎土：乳灰白色 釉：半透明
359	磁器	碗	外面：遠山図 高台内：文様有り	固形　11.4 器高　5.5 高台径　4.3 高台高　0.7	18C末〜19C初 胎土：灰白色 釉：半透明
360	磁器	碗	外面：鳥図	口径　13.5	19C初，広東碗 胎土：乳白色 釉：淡青色
361	磁器	蓋	染付 外面：月に薊図 つまみ内：竹泉銘	口径　10.4 器高　2.9 つまみ径 4.2 つまみ高 1.0	19C前半 胎土：乳白色 釉：半透明 362の蓋
362	磁器	碗	染付 外面：月に薊図 高台内：竹泉銘	口径　11.9 器高　5.3 高台径　4 高台高　0.9	19C前半 胎土：乳白色 釉：半透明
363	磁器	碗	染付 見込：桜花喜文字文 内面：線文	高台径　4.6 高台高　0.8	19C後半 胎土：乳白色 釉：半透明
364	磁器	碗	染付 内外面：網目文	口径　10.4 器高　5.6 高台径　3.4 高台高　0.7	胎土：乳白色 釉：半透明
365	磁器	碗	染付 外面：仕切梅樹図	口径　11.0 器高　6.2 高台径　4.0 高台高　0.8	胎土：乳白色 釉：半透明
366	磁器	碗	内側：茄子図	口径　12.5 器高　4.7 高台径　4.6 高台高　0.7	端反り 玉縁状口縁 胎土：乳白色 釉：半透明
367	磁器	碗	内側：茄子図	固形　12.4 器高　4.5 高台径　4.6 高台高　0.5	端反り 玉縁状口縁 胎土：乳白色 釉：半透明

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
368	磁器	碗	型紙摺 見込：麒麟図 外面：文様有り	高台径 3.7 高台高 0.6	19C後半 胎土：乳白色 釉：半透明
369	磁器	碗	赤絵 外面：猫と鞠図 高台内：岐L117の押印	口径 10.0 器高 4.8 高台径 3.6 高台高 0.7	子供用茶碗 胎土：乳白色 釉：半透明
370	磁器	碗	赤絵 外面：戦闘図	口径 9.0	子供用茶碗 胎土：乳白色 釉：半透明
371	陶器	碗		口径 11.1 器高 4.8 高台径 6.0 高台高 1.0	胎土：淡灰白色 釉：焦茶色 汁器
372	陶器	碗		口径 11.6 器高 4.8 高台径 5.2 高台高 0.8	胎土：淡灰白色 釉：焦茶色 汁器
373	陶器	碗		口径 11.2 器高 5.2 高台径 4.2 高台高 0.9	胎土：淡灰白色 釉：焦茶色 汁器
374	陶器	碗	高台内：岐79の押印	口径 11.4 器高 5.7 高台径 4.3 高台高 0.6	わずかに端反り 胎土：にぶい緑色 釉：にぶい緑色 淡赤褐色，汁器
375	陶器	碗	型打ち成形 陰刻 外面：蓮弁文	口径 11.2 器高 5.9 高台径 3.8 高台高 0.8	胎土：乳器白色 釉：焦茶色 汁器
376	磁器	碗	型打ち成形 外面：牡丹・獅子・鞠図 雷文帯	口径 11.5 器高 5.7 高台径 4.2 高台高 0.8	胎土：乳白色 釉：浅緑色，茶色 汁器
377	磁器	猪口	染付 外面：寿の文字文	口径 9.1 器高 11.8 高台径 3.5 高台高 0.7	19C中 胎土：乳白色 釉：半透明

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
378	磁器	猪口	染付 口銹 外面：紐文	口径 9.0 器高 2.8 高台径 3.9 高台高 0.6	19C初，端反り 愛知県かみた窯製？ 胎土：乳白色 釉：半透明
379	磁器	猪口	染付 口銹 外面：紐文	口径 8.9 器高 3.9 高台径 3.0 高台高 0.4	19C初，端反り 愛知県かみた窯製？ 胎土：乳灰白色 釉：半透明
380	器	猪口	染付 口銹 外面：紐文	口径 9.5 器高 3.9 高台径 3.5 高台高 0.4	19C初，端反り 愛知県かみた窯製？ 胎土：乳白色 釉：半透明
381	磁器	猪口	染付 見込渦文 内外面：蔦文	口径 8.8 器高 3.9 高台径 3.2 高台高 0.5	胎土：乳白色 釉：半透明
382	磁器	猪口	染付 外面：草花図	口径 6.5 器高 4.7 高台径 2.7 高台高 0.4	19C初 胎土：乳白色 釉：半透明
383	磁器	猪口	染付 外面：波と花図 高台内：幹山精製銘	口径 8.2 器高 4.2 高台径 3.2 高台高 0.5	19C初端反り 胎土：乳白色 釉：半透明
384	磁器	猪口	外面：五弁花と唐草文	口径 8.4 器高 4.5 高台径 3.0 高台高 0.9	九谷焼 胎土：乳白色 釉：半透明
385	磁器	急須	外面：五弁花と唐草文	底径 4.0	九谷焼 胎土：乳白色 釉：半透明
386	磁器	猪口	染付 蛇ノ目凹形高台 外面：山水一屋図 内面：雷文帯	口径 7.3 器高 5.9 高台径 6.0	19C前半 胎土：白色 釉：灰濁色
387	磁器	猪口	染付	口径 3.2	18C後半〜19C 端反り 胎土：乳白色 釉：半透明，盃

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
388	磁器	猪口	染付 外面：山水図	口径 5.4 器高 3.1 高台径 2.2 高台高 0.4	19C初，端反り 胎土：乳白色 釉：半透明 盃
389	磁器	猪口	外面：金色釉による唐草と七宝繋ぎ文	口径 5.2 器高 2.9 高台径 2.2 高台高 0.4	九谷焼 胎土：乳白色 釉：赤茶 盃
390	磁器	猪口		口径 6.2 器高 2.3 高台径 2.8 高台高 0.4	胎土：乳白色 釉：淡緑白色 盃
391	磁器	猪口		口径 7.2 器高 3.4 高台径 2.8 高台高 0.6	端反り 胎土：乳白色 釉：白色 盃
392	磁器	猪口		口径 7.6 器高 2.7 高台径 3.0 高台高 0.3	端反り 胎土：乳白色 釉：半透明 盃
393	磁器	猪口	内面：波文陸軍歩兵	口径 9.2	わずかに端反り 胎土：乳白色 釉：半透明，盃
394	磁器	仏餉具	外面：赤絵松葉図	口径 9.2 器高 4.1	丸碗形 胎土：淡器白色 釉：半透明
395	磁器	仏餉具	外面：赤絵花唐草文	口径 7.2 器高 3.4 高台径 2.8 高台高 0.4	端反り 胎土：乳白色 釉：半透明
396	磁器	仏餉具	外面：赤絵菊花文	口径 5.8 器高 2.8 高台径 1.9 高台高 0.5	丸碗形，高台方形 腰部花弁状型打ち 胎土：乳白色 釉：半透明
397	磁器	仏餉具	外面：赤絵花唐草文	口径 6 器高 2.9 高台径 1.9 高台高 0.5	丸碗形，高台方形 腰部花弁状型打ち 胎土：乳白色 釉：にぶい白色

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
398	磁器	仏餉具		口径 6.2 器高 2.7 高台径 2.2 高台高 0.4	高台方形 腰部花弁状型打ち 胎土：乳白色 釉：白色
399	磁器	仏餉具	染付 外面：蛸唐草文	口径 8.5	胎土：乳白色 釉：淡青灰色
400	磁器	仏餉具	赤絵 外面：文様有り	口径 6 器高 5.4 底径 4.7	高杯形 胎土：乳白色 釉：半透明
401	磁器	仏餉具	赤絵 外面：文様有り	底径 4.2	高杯形，胎土：乳白色 釉：透明
402	磁器	仏餉具	外面：赤絵菊花に七宝繋ぎ文	口径 5.5 器高 6.1	高杯形 胎土：乳白色 釉：半透明
403	磁器	仏餉具	外面：赤絵花唐草文 底部外面：「瀬496」押印陰刻	底径 3.5	高杯形 胎土：乳白色 釉：半透明
404	磁器	蓋	染付 見込：寿字霊雲文	つまみ径 4.3 つまみ高 0.7	18C末，山蓋 胎土：乳白色 釉：半透明
405	磁器	蓋	染付	口径 10.0 器高 3.0 つまみ径 4.4 つまみ高 0.7	19C初，山蓋 胎土：乳灰白色 釉：淡青白色 貫入
406	磁器	蓋	染付 外面：鶴飛翔図	口径 10.8 器高 2.8 つまみ径 6.3 つまみ高 1.0	19C初 山蓋 胎土：乳白色 釉：半透明
407	磁器	蓋	型紙摺 つまみ内：角「福」銘	口径 9.2 器高 1.9 つまみ径 3.9 つまみ高 0.6	19C後半 胎土：乳白色 釉：半透明
408	磁器	蓋	型紙摺 見込：松竹梅図 外面：「福寿」青海波・梅花文 高台内：福銘	口径 9.2 器高 2.6 つまみ径 3.7 つまみ高 0.6	山蓋 端反り 胎土：乳白色 釉：灰濁色
409	陶器	蓋		口径 13.3	山蓋，胎土：茶褐色 釉：暗茶褐色

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
410	磁器	蓋	染付 外面：草図	口径 4.2 器高 1.5	山蓋，擬宝珠つまみ 胎土：乳白色 釉：白色
411	陶器	蓋	外面：押印陰刻文	口径 7.9 器高 2.8	山蓋，宝珠つまみ 小孔1ケ所，胎土：淡赤橙色，無釉
412	陶器	蓋		口径 7.0 器高 3.1	山蓋，擬宝珠つまみ 胎土：橙色，釉：透明
413	陶器	蓋		口径 16.0 器高 3.0	山蓋状，つまみ有り 胎土：淡赤橙色 釉：灰黒色
414	陶器	蓋	外面：鋸歯文	口径 6.3 器高 2.0	落蓋，擬宝珠つまみ 胎土：灰黄色 釉：淡黄白色
415	陶器	蓋	つまみ：菊花押印陰刻文	口径 7.7 器高 1.8	落蓋，まみ有り 胎土：淡黄褐色 釉：暗茶褐色
416	瓦質土器	蓋		口径 10.6 器高 1.5	落蓋，つまみ有り 胎土：暗灰黄色
417	磁器	蓋	染付 型打ち成形 外面：松に折鶴図	口径 6.1 器高 1.3	合蓋，方形 胎土：乳白色 釉：灰濁色
418	陶器	蓋	外面：暗緑色の丸文	口径 11.1 器高 1.8	合蓋，胎土：灰白色 釉：明灰濁色
419	陶器	皿	砂目 貫入		胎土：にぶい黄灰色 釉：にぶい緑灰色
420	磁器	皿	染付 蛇ノ目凹形高台 蛇ノ目釉ハギ 内面：草文	口径 12.4 器高 3.1 高台径 7.1 高台高 0.5	19C初 端反り 胎土：乳白色 釉：淡青白色
421	磁器	皿	染付，ハリ支え 内面：ハツ手図 高台内：居鋸	高台径 14.3 高台高 0.4	18C 胎土：乳白色 釉：田青白色
422	磁器	皿	染付 八角形打ち成形 内面：花唐草	口径 10.2 器高 2.4 高台径 6.4 高台高 0.6	胎土：乳白色 釉：灰濁色

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
423	磁器	皿	染付　口銹 押印陰刻 内面：牡丹図 口為所楚襄王	口径 10.3 器高 1.9 高台径 6.2 高台高 0.5	胎土：乳白色 釉：淡青白色
424	陶器		ハリ支え 内面：風景図	底径 13.6	胎土：淡黄白色 釉：淡褐色
425	磁器	皿	染付 内面：海浜一屋図 高台内：寿，福文字	口径 7.9 器高 2.0 高台径 4.5 高台高 0.3	菊皿 胎土：乳白色 釉：淡青白色
426	磁器	皿	染付 口銹 蛇ノ目凹形高台 内面：柳下一屋図	口径 15.1 器高 4.5 高台径 9.0 高台高 0.8	18C末〜19C前半 菊皿 胎土：乳白色 釉：淡白青色
427	磁器	皿	型紙摺，蛇ノ目凹形高台 内面中央：松竹梅図 内面：松文 外面：唐草文	口径 14.5 器高 4.3 高台径 9.2 高台高 0.9	19C前半 菊皿 胎土：乳白色 釉：半透明
428	磁器	皿	型紙摺 蛇ノ目凹形高台 内面：松竹梅図 外面：唐草文	口径 15.0 器高 3.9 高台径 9.2 高台高 0.8	19C後半 菊皿 胎土：乳白色 釉：半透明
429	磁器	皿	型紙摺 ハリ支え，蛇ノ目凹形高台 内面：松竹梅図，松竹梅文 外面：花唐草文	口径 13.2 器高 3.7 高台径 7.4 高台高 1.0	19C後半 菊皿 胎土：乳白色 釉：淡灰濁色
430	磁器	皿	型紙摺 ハリ支え 蛇ノ目凹形高台 内面：青海波文	口径 13.6 器高 3.4 高台径 8.0 高台高 0.8	18C後半 菊皿 胎土：乳白色 釉：淡青白色
431	磁器	皿	銅板摺 内面：丸文で三ツ巴・龍・笹に雲雀，唐草文，桜花図 外面：文字文	口径 12.6 器高 2.0 高台径 7.4 高台高 0.3	20C初 胎土：乳白色 釉：半透明
432	磁器	皿	染付 内面：樹下一屋図 高台内：岐925押印	口径 13.0 器高 2.8 高台径 6.7 高台高 0.3	菊皿 胎土：乳白色 釉：透明

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
433	磁器	皿	型打ち成形 内面：押印陽刻花文	口径 8.4 器高 2.5 高台径 3.9 高台高 0.4	角皿 端反り 胎土：乳灰白色 釉：青白色
434	磁器	皿	型打ち成形 内面：押印陽刻花文	口径 8.2 器高 2.0 高台径 3.6 高台高 0.3	角皿 端反り 胎土：乳白色 釉：白色
435	磁器	皿	型打ち成形 内面中央：寿字文 押印陰刻	口径 9.9 器高 2.7 高台径 5.9 高台高 0.5	端反り 胎土：乳白色 釉：白色
436	磁器	皿	型打ち成形 外面：陰刻 蛸唐草文	口径 6.3 器高 1.9 高台径 2.7 高台高 0.2	19C初 胎土：乳白色 釉：淡灰白色 紅皿
437	磁器	皿	型打ち成形	口径 4.2 器高 1.1 高台径 1.2 高台高 0.1	貝形 胎土：乳白色 釉：白色 紅皿
438	磁器	皿	型打ち成形	口径 5.4	貝形 胎土：白色 釉：淡青白色，紅皿
439	陶器	燈明皿	ハリ支え	口径 8.2 器高 1.5 底径 3.2	煤付着，細貫入 胎土：淡黄色 釉：にぶいオリーブ色
440	陶器	燈明皿	回転糸切り	口径 8.0 器高 0.9 底径 5.6	煤付着 胎土：淡橙色 釉：黄橙色
441	陶器	燈明皿		口径 10.1 器高 1.5	煤付着，突帯に3ケ所の半月，形切り込み 胎土：淡赤橙色
442	陶器	燈明皿	回転糸切り	底径 5.0	胎土：淡赤橙色 釉：暗茶褐色，脚付
443	陶器	燈明皿		器高 5.6 底径 3.5	胎土：暗赤色 釉：黒褐色，脚付
444	陶器	燈明皿		器高 6.1 底径 3.8	胎土：赤褐色 釉：暗茶褐色，脚付

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
445	陶器	燈明皿	油皿と油受皿の合成形	器高 7.4 底径 4.4	胎土：赤褐色 釉：油皿，暗赤褐色 油受皿，暗茶褐色
446	陶器	ひょうそく		器高 2.9 底径 3.6	胎土：乳白色 釉：淡青白色 筒形，円錐状先受け
447	磁器	鉢	染付 内面：草花文，霊雲文 外面：梅図	口径 27.6	端反り，19C 胎土：乳白色 釉：淡青白色
448	磁器	鉢	染付 内面：卍文，内面中央：太極文 外面：ハ卦文，赤絵松梅文 高台内：渦福銘	口径 13.8 器高 6.3 高台径 7.7 高台高 1.4	18C後 端反り 胎土：乳白色 釉：淡青白色
449	磁器	鉢	染付 外面：渦文	口径 14.8 器高 5.9 高台径 5.8 高台高 0.7	胎土：乳白色 釉：半透明
450	陶器	鉢		口径 16.2 器高 7.0 高台径 7.4 高台高 1.0	端反り 胎土：暗赤褐色 釉：乳黄色
451	陶器	鉢		口径 15.3	玉縁状口縁 胎土：淡黄灰色 釉：にぶい緑色
452	陶器	鉢		口径 21.3	玉縁状口縁 胎土：淡黄褐色 釉：オリーブ色
453	陶器	鉢	白泥がけ	口径 20.1	玉縁状口縁 胎土：淡橙色 釉：にぶいオリーブ色
454	陶器	鉢	ハリ支え	高台径 9.6 高台高 1.2	胎土：淡黄色 釉：淡オリーブ褐色
455	陶器	鉢		口径 24.6	筒形 胎土：淡赤橙色 釉：茶褐色
456	陶器	鉢		口径 22.1 器高 14.6	筒形，玉縁状口縁 胎土：淡黄褐色 釉：黒色

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
457	陶器	擂鉢	6条単位の擂目	口径 5.5	わさびおろし？ 胎土：淡黄橙色 釉：明黄
458	陶器	擂鉢	6条単位の擂目	口径 15.0 器高 7.1 高台径 5.8 高台高 0.8	片口 胎土：淡赤褐色 釉：暗茶褐色
459	陶器	擂鉢	26条単位の擂目	口径 17.6 器高 7.6 高台径 9.1 高台高 0.9	胎土：灰色 釉：暗赤褐色
460	陶器	擂鉢	6条単位の擂目	口径 28.5 器高 12.5 高台径 14.9 高台高 1.7	胎土：淡橙色 釉：明茶褐色
461	磁器	香炉	外面：赤絵花文 七宝つなぎ文	口径 8.5	壺形 胎土：乳白色 釉：白色
462	陶器	香炉			壺形 胎土：灰赤色 釉：黒褐色
463	陶器	香炉	回転糸切り		壺形 胎土：赤褐色 釉：暗赤褐色
464	陶器	香炉	ハリ支え	口径 9.5 器高 6.6 高台径 6.9 高台高 0.3	筒形 胎土：淡黄色 釉：濃緑色
465	陶器	火舎			高高台 胎土：淡赤橙色 2次火熱
466	陶器	蓋	外面櫛目状文	つまみ径 4.2 つまみ高 0.7	山蓋 胎土：黄灰色 釉：暗赤褐色 にぶいオリーブ色
467	陶器	蓋	外面：陰刻櫛目状文	口径 14.0	山蓋，胎土：黄灰色 釉：褐色 淡オリーブ色

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
468	陶器	鍋	貫入 外面：陰刻櫛目状文		受け部 胎土：淡灰黄色 釉：褐色，オリーブ色
469	陶器	鍋			受け部 胎土：淡黄褐色 釉：にぶい黄褐色
470	陶器	鍋	貫入		片口，受け部 胎土：淡黄灰色 釉：にぶいオリーブ色
471	陶器	土瓶			三角状の取手 胎土：淡橙色 釉：明橙褐色 煤付着
472	磁器	壺		口径 2.5 器高 2.6 底径 1.6	ミニュチア製品 胎土：乳白色 釉：茶褐色
473	陶器	壺			無頸 胎土：赤橙色 釉：暗赤褐色
474	陶器	甕		口径 17.3	胎土：黄灰色 釉：暗褐色
475	陶器	甕			胎土：暗黄灰色 釉：黒色釉の上に茶褐色釉をかける 黒色小斑点 262に類似
476	陶器	甕	高台内：押印 ㊙	口径 23.6 器高 26.8 底径 16.7	胎土：暗灰色 釉：暗赤褐色 重ね焼の痕跡
477	陶器	甕	外面：流し釉	口径 29.1 器高 35.1 底径 18.8 (14.1)	胎土：暗赤橙色 釉：暗色 重ね焼の痕跡
478	陶器	瓶		口径 8.0 器高 14.8 高台径 7.0	19C代，仏花瓶 かぶら形，一対の取手 胎土：乳黄白色 釉：黒褐色
479	陶器	瓶	貫入	高台径 6.5 高台高 1.0	胎土：淡黄白色

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
480	陶器			口径 2.4	胎土：淡赤褐色 釉：にぶい赤褐色 胴部にしぼり 269,270に類似
481	陶器	瓶		口径 1.5	胎土：赤褐色 釉：暗赤褐色 張りのある胴部，油壺
482	陶器	徳利	外面：大神宮の陰刻字 押印菊花文	底径 2.8	胎土：赤褐色 釉：暗赤褐色 胴部方柱状，神酒徳利
483	磁器	徳利	外面：赤絵御神前	口径 1.8 器高 13 底径 3.2	胎土：乳白色 釉：透明 碁笥底状，神酒徳利
484	磁器	徳利	外面：赤絵御神前	口径 1.5 器高 10.8 底径 2.6	釉：乳白色 碁笥底状 神酒徳利
485	磁器	徳利	染付 外面：松竹梅図 蛸唐草文	口径 1.7 器高 12.7 底径 2.9	釉：白色 碁笥底状 神酒徳利
486	磁器	徳利	染付 外面：松竹梅図 蛸唐草文	口径 1.6 器高 10.75 底径 2.6	胎土：乳白色 釉：白色 碁笥底状，神酒徳利
487	磁器	徳利	染付 外面：松竹梅文	口径 1.7	胎土：乳白色 釉：半透明 神酒徳利
488	磁器	徳利	染付 外面：松竹梅図	高台径 5.2 高台高 0.7	18C後〜19C初 胎土：乳白色 釉：淡青白色
489	磁器	徳利	染付 型紙摺 外面：花文	口径 2.6 器高 12.7 底径 4.8	胎土：乳白色 釉：半透明 銚子
490	磁器	徳利	染付 外面：草花文	底径 5.6	胎土：乳白色 釉：半透明，銚子
491	陶器	徳利	外面：陰刻		胎土：赤褐色 釉：黒褐色，大谷焼系
492	陶器	徳利	外面：岡[illegible]の陰刻		胎土：赤褐色 釉：黒褐色，大谷焼系

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
493	陶器	徳利	外面：陰刻	高台径 7.5 高台高 1.4	胎土：赤褐色 釉：暗茶褐色 大谷焼系
494	陶器	徳利		高台径 7.7 高台高 2.5	胎土：赤褐色 釉：暗赤褐色 大谷焼系
495	陶器	徳利		底径 7.9	胎土：赤褐色 釉：暗赤褐色 碁笥底状，大谷焼系
496	陶器	徳利	外面：白泥〇		胎土：赤褐色 釉：黒褐色 内面に施釉，大谷焼系
497	陶器	徳利	外面：酒の陰刻		胎土：赤褐色 釉：暗赤褐色 大谷焼系
498	陶器	徳利	外面：酒の陰刻		胎土：暗灰色 釉：暗赤褐色 大谷焼系
499	陶器	徳利	外面：酒？の陰刻		胎土：赤褐色 釉：暗赤褐色 大谷焼系
500	陶器	徳利	外面：店の陰刻		胎土：明橙色 釉：暗赤褐色 大谷焼系
501	陶器	徳利	外面：嶋の陰刻		胎土：赤褐色 釉：暗赤褐色 大谷焼系
502	陶器	徳利	外面：江又は鴻の陰刻		胎土：赤褐色 釉：暗赤褐色 大谷焼系
503	陶器	徳利	外面：玉？の陰刻		胎土：赤褐色 釉：暗赤褐色 大谷焼系
504	陶器	徳利	外面：秋？の陰刻		胎土：明橙色 大谷焼系

Tab. 5　第21区池状遺構周辺出土土器類観察表

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
505	磁器	猪口	染付 見込：五弁花文 外面：網目文	口径 7.2 器高 5.9 高台径 3.5 高台高 0.4	胎土：乳白色 釉：淡灰色，筒形 19C初 78,605に類似
506	磁器	碗	染付 外面：草花文	口径 12.2	胎土：淡灰白色 釉：灰濁色 くらわんか手,18C
507	磁器	碗	染付 外面：草花文	口径 10.6	胎土：淡灰白色，釉：灰濁色，くらわんか手 18C 506に文様類似
508	磁器	碗	染付 内面：四方襷文 見込：蝦図 外面：蝦文	口径 11.1 器高 6.0 高台径 5.2 高台高 0.8	胎土：淡灰白色 油脂：淡青色，撥高台 くらわんか手 18C後
509	磁器	猪口	染付 見込：轡文 外面：花図	口径 8.9 器高 5.4 高台径 3.5 高台高 0.5	胎土：乳白色 釉：淡青色 19C前
510	磁器	蓋	青磁染付 つまみ部内：渦福銘 内面：四方襷文 天井部：五弁花文	口径 10.4 器高 3.3 つまみ径 4.4 つまみ高 0.9	胎土：淡灰白色 釉：内面淡青色，外面淡緑色,18C後
511	磁器	鉢	染付 内面：草文，端反り，玉縁状口縁，蛇ノ目釉ハギ	口径 13.0 器高 3.2 高台径 7.6 高台高 0.2	胎土：乳白色 釉：半透明 19C初

Tab. 6　第21区池状遺構直上出土土器類観察表

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
512	磁器	碗	青磁染付 見込：五弁花文，蛇ノ目釉ハギ	口径 11.3 器高 5.0 高台径 4.3 高台高 0.7	胎土：淡灰白色 釉：内面灰褐色，外面淡緑色,18C後
513	磁器	蓋	青磁染付 つまみ部内：渦福銘，内面：四方襷文，天井部：五弁花文	口径 9.9 器高 3.5 つまみ径 4.3 つまみ高 0.8	胎土：淡灰白色， 釉：内面半透明，外面淡緑色,18C後 不良品

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
514	磁器	碗	青磁染付 内面：四方襷文	口径 11.3 器高 6.2 高台径 4.7 高台高 0.9	胎土：淡灰白色 釉：内面半透明，外面淡緑色，18C後
515	磁器	碗	染付 外面：樹間一屋図，遠島帆船図	口径 11.2 器高 6.4 高台径 4.4 高台高 0.8	胎土：乳白色 釉：淡青色 くらわんか手， 18C後半
516	磁器	碗	染付 外面：二筆網目文	口径 10.5 器高 5.3 高台径 4.1 高台高 0.9	胎土：淡灰白色 釉：淡青色 くらわんか手 18C後半
517	磁器	碗	染付 見込：五弁花文，外面：丸文 高台内：賽の目文	口径 12.6 器高 6.5 高台径 5.0 高台高 1.1	胎土：灰白色 釉：灰白濁白 くらわんか手 18C末
518	磁器	碗	染付 見込：五弁花文 外面：竹葉文	口径 9.1 器高 5.8 高台径 3.7 高台高 0.6	胎土：乳白色 釉：乳青濁色 19C 粗製品
519	陶器	碗	施釉 外面：螺施文	口径 12.4 器高 6.0 高台径 4.1 高台高 0.7	胎土：淡黄色 釉：内面緑色，外面黄褐色，貫入，端反り， 茶器
520	磁器	蓋	染付磁器 つまみ部内：銘あり 外面：市松文	口径 10.5 器高 2.9 つまみ径 5.8 つまみ高 0.9	胎土：乳灰白色 釉：淡青色 広東碗の蓋 19C初
521	磁器	皿	染付磁器 内面：扇・花文，見込：五弁花文 外面：唐草文 高台内：馬銘	口径 13.9 器高 0.5 高台径 0.9 高台高 0.6	胎土：灰白色 釉：にぶい淡青色 くらわんか手 18C
522	磁器	猪口	外面：赤絵鶴飛翔図	口径 5.6	胎土：乳白色 釉：半透明 脚部欠損
523	陶器	蓋	施釉陶器 糸切り	口径 0.9 器高 1.4	胎土：暗赤褐色 釉：暗茶褐色 落蓋，つまみ 大谷焼

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
524	磁器	皿	染付磁器 内面：海辺風景図 外面：唐草文	口径 10.5 器高 2.2 高台径 0.4 高台高 0.6	胎土：乳白色 釉：淡青色
525	陶器	燈明皿	施釉陶器 回転糸切り	口径 8.0 器高 1.8 底径 3.0	胎土：暗赤褐色 釉：にぶい暗赤褐色 油皿，大谷焼系
526	陶器	燈明皿	回転糸切り	口径 7.8 器高 1.7 底径 2.8	大谷焼系 脚付油受皿の油皿？ 素地：暗赤褐色 釉：黒褐色
527	陶器	燈明皿		口径 10.6	端反り，煤付着 素地：淡橙色 釉：赤褐色，油皿
528	陶器	燈明皿		口径 9.8	突帯に半月形切り込み 2個所遺存 素地：赤褐色 釉：半透明，油受皿
529	陶器	燈明皿	燈明皿：回転糸切り	口径 7.3 器高 6.6 底径 4.2	大谷焼系，素地：暗赤褐色，釉：黒褐色 脚付油受皿
530	陶器	擂針	内面：3条／cm単位の櫛描擂目 内面底部：8条／cm単位の櫛描擂	底径 19.0	備前焼，底部に2〜1.5cmの楕円を穿つ
531	陶器	擂鉢	内面：9条を単位とする擂目	口径 20.6	素地：赤褐色 釉：半透明
532	陶器	鍋		口径 16.3 器高 7.2	取手付，煤付着 口縁部：外に拡張 素地：黒灰色 釉：暗赤褐色
533	瓦質土器	土釜		口径 9.7	取手付，茶釜 素地：淡灰黄色
534	陶器	土瓶		口径 6.2	取手付，素地：淡赤黄色，釉：明乳黄色
535	磁器	徳利	外面：唐草文	口径 1.7 高台径 5.1 高台高 0.6	18C後〜19C初 神酒徳利
536	瓦質土器	火舎	外面：押印菊花文及び押印文様		素地：淡灰黄色

Tab. 7　第21区土塁状遺構ＳＡ－０４出土土器類観察表

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
537	磁器	碗	染付，見込：松竹梅文 外面：蛸唐草文	高台径　3.5 高台高　0.5	胎土：乳白色，釉：淡青白色，18C末～19C初
538	磁器	碗	染付 外面：暦文	口　径　12.5	胎土：乳灰白色 釉：半透明，19C初 広東碗，43と文様同じ
539	磁器	碗	染付，内面：孤状連続文 外面：山間一屋図	口　径　12.3	胎土：乳白色，釉：淡青白，19C 端反り
540	磁器	碗	染付， 外面：横縞文	口　径　9.4	胎土：乳白色，釉：半透明，19C初，端反り
541	磁器	碗	染付 外面：草花図	高台径　2.8 高台高　0.6	胎土：乳白色 釉：淡青色
542	陶器	猪口	施釉 墨書	高台径　2.5 高台高　0.5	胎土：乳黄白色 釉：淡青色，細貫入
543	磁器	蓋	染付 見込：寿銘 外面：格子に柳図	口　径　9.2 器　高　2.8 つまみ径 4.4 つまみ高 0.7	胎土：灰白色 釉：反透明 19C 広東碗の蓋
544	磁器	皿	染付 外面：唐草文	口　径　15.6 器　高　4.2 高台径　10.0 高台高　0.5	胎土：乳白色 釉：淡青色 18C くらわんか手
545	磁器	皿	染付 内面：圏線 蛇ノ目釉ハギ	高台径　4.6 高台高　0.7	胎土：乳黄白色，釉 薬：淡青白色，17C末～18C前，くらわんか手
546	磁器	皿	染付， 内面：湖畔一屋図	高台径　5.8 高台高　0.8	胎土：乳灰白色，釉：半透明，19C初，貫入
547	磁器	皿	染付， ハリ支え 内面：帆船航海図	口　径　10.8 器　高　2.2 高台径　6.2 高台高　0.4	胎土：乳白色， 釉：半透明 端返り 第29，31区からも出土
548	陶器	鍋	施釉	底　径　6.2	胎土：黄灰色，煤付着 釉：にぶいオリーブ色
550	陶器	鍋	施釉， 外面：櫛目状文 取手：押印陽刻唐人図	口　径　18.4 底　径　8.0	胎土：淡橙色，釉：内面淡褐色，外面赤褐色 片手鍋，片口，取手煤付着

Tab. 8　第21区土塁状遺構ＳＡ－０１出土土器類観察表

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
549	陶器	碗	陶胎染付 外面：松図	高台径　4.4 高台高　0.8	胎土：淡灰色，釉：にぶい淡オリーブ色 貫入，18C代
551	磁器	碗	染付 内面：轡文，外面：草花文	高台径　3.6 高台高　0.6	胎土：乳白色 釉：半透明，18C後

Tab. 9　第21区土塁状遺構ＳＡ－０２出土土器類観察表

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
552	磁器	碗	染付磁器 内面：四方襷 見込：葉文 外面：笹に根雪図	口径　12.3 器高　6.7 高台径　5.4 高台高　0.7	胎土：乳白色 釉：半透明 18C
563	磁器	碗	染付磁器 外面：笹図	高台径　4.3 高台高　0.9	胎土：淡灰白色 釉：淡青色 くらわんか手 18C
554	磁器	猪口	染付磁器 外面：笹図	口径　7.5 器高　3.9 高台径　3.0 高台高　0.6	胎土：乳白色 釉：半透明 くらわんか手 18C後
555	磁器	蓋	染付磁器 外面：椿図 天井部：寿銘	口径　9.0 器高　2.9 つまみ径 3.8 つまみ高 0.9	胎土：乳白色 釉：半透明 広東碗の蓋 19C初
556	磁器	皿	染付磁器 内面：網目文，見込：五弁花 外面：唐草文 高台内：銘あり	口径　13.6 器高　3.1 高台径　7.6 高台高　0.5	胎土：乳白色 釉：淡青色 くらわんか手 18C
557	陶器	鉢	施釉陶器 ハリ支え	高台径　6.5 高台高　1.5	胎土：淡灰色 釉：淡灰緑色 貫入
558	磁器	徳利	染付磁器 頸部：蛸唐草文 胴部：草花図	口径　1.9	胎土：乳白色 釉：淡青色 神酒徳利

Tab. 10　第21区土塁状遺構ＳＡ－０３出土土器類観察表

番号	種　類	器　　形	技　法　・　文　様	法量（cm）	備　　考
559	陶　器	碗	施釉陶器 蛇ノ目釉ハギ	高台径　4.4 高台高　0.6	胎土：淡黄灰色 釉：にぶい淡黄色
560	磁　器	皿	染付磁器 内面：沢瀉図	高台径　5.2 高台高　0.5	胎土：乳黄白色 釉：くすんだ乳黄白色

Tab. 11　第21区祭祀跡出土土器類観察表

番号	種　類	器　　形	技　法　・　文　様	法量（cm）	備　　考
561	陶　器	燈　明　皿 （油　皿）	ハリ支え	口　径　8.8 器　高　1.6 底　径　3.4	素地：乳黄白色 釉：淡緑色 粗い貫入　煤付着
562	土師質 土　器	皿	糸切り 内面：墨書	口　径　8.1 器　高　1.1	素地：淡黄褐色
563	土師質 土　器	皿	回転糸切り 内面：墨書	口　径　8.6 器　高　1.1	素地：淡黄褐色

Tab. 12　第21区祭祀跡周辺出土土器類観察表

番号	種　類	器　　形	技　法　・　文　様	法量（cm）	備　　考
564	磁　器	碗	青磁染付 見込：五弁花文 高台内：渦福銘	高台径　4.6 高台高　0.9	18C後 表地：淡灰白色 釉：にぶい淡緑色
565	磁　器	碗	青磁染付 見込：五弁花文 高台内：渦福銘	高台径　4.5 高台高　0.9	18C後半 表地：淡灰白色 釉：にぶい淡灰白色
566	磁　器	猪　　口	染付　口銹 外面：紐文	口　径　8.8 器　高　3.9 高台径　2.8 高台高　3.0	愛知県かみだ窯 素地：乳白色 釉：半透明 端反り
567	陶　器	猪　　口		口　径　5.1 器　高　2.6 高台径　2.8 高台高　0.5	素地：淡灰黄色 釉：半透明
568	磁　器	猪　　口		口　径　5.1 器　高　3.3 高台径　3.0	筒形 素地：乳白色 釉：半透明

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
569	磁器	蓋	染付 外面：暦文 見込：寿銘	口径 10.0 器高 3.0 つまみ径 5.9 つまみ高 1.0	19C初 広東碗の蓋，山蓋 素地：乳灰白色 釉：淡青色
570	陶器	蓋	細貫入 施釉	口径 5.0 器高 1.4	茶入の蓋，山蓋 素地：淡黄色 釉：半透明
571	陶器	蓋	高台状つまみ 施釉	口径 17.3 器高 5.0 つまみ径 4.5 つまみ高 0.6	鍋の蓋，山蓋 素地：淡黄色 釉：淡緑色 貫入　煤付着
572	磁器	蓋	外面：樹下－屋図	口径 10.3 器高 3.3 つまみ径 4.5 つまみ高 1.0	山蓋 素地：乳白色 釉：半透明
573	陶器	燈明皿	施釉	口径 11.0 器高 2.2	素地：明赤褐色，油皿 釉：暗赤褐色　煤付着
574	陶器	燈明皿	糸切り 施釉	口径 10.3 器高 1.9	素地：明赤褐色，油皿 釉：暗赤褐色　煤付着
575	陶器	燈明皿	施釉	口径 8.0 器高 1.5	素地：明赤褐色 釉：暗赤褐色 煤付着，油皿
576	陶器	燈明皿	施釉	口径 7.8 器高 1.3	素地：明赤橙色 釉：暗赤褐色 煤付着，油皿
577	陶器	燈明皿	施釉	口径 8.6 器高 1.3	素地：暗灰色 釉：暗褐色，油皿
578	陶器	燈明皿	施釉	口径 7.9 器高 1.4	素地：明赤褐色 釉：暗赤褐色 煤付着，油皿
579	陶器	燈明皿	施釉	口径 9.8 器高 1.4	素地：赤褐色 釉：明赤褐色 煤付着，油皿
580	陶器	燈明皿	施釉	口径 7.8 器高 1.5 底径 2.9	素地：淡黄白色 釉：にぶいオリーブ色 油皿
581	陶器	燈明皿	ハリ支え 施釉	口径 11.2 器高 2.4 底径 4.5	素地：淡黄色 釉：淡緑色 細貫入　煤付着，油皿

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
582	陶器	燈明皿	ハリ支え 施釉	口径 10.9 器高 2.3 底径 3.6	素地：淡黄色，油皿 釉：半透明　細貫入 3帯の直線　煤付着
583	陶器	燈明皿	砂目 施釉	口径 8.6 器高 1.9 底径 3.9	素地：淡黄色 釉：茶褐色 平底，油皿
584	陶器	燈明皿	施釉	口径 9.9 器高 1.6	胎土：明赤褐色 釉：半透明 突帯に半月形，油受皿 切り込み3ヶ所遺存
585	磁器	鉢	染付 内面：つる草文	口径 13.9	胎土：乳白色 釉：灰白色 玉緑状　端反り
586	陶器	壺	施釉	口径 6.0	肩衝形短頸壺 胎土：赤褐色 釉：暗茶褐色
587	陶器	壺	回転糸切り 施釉	底径 2.7	胎土：暗赤褐色 釉：暗茶褐色，平底
588	磁器	徳利	染付 外面：蛸唐草文	高台径 3.9 高台高 0.7	胎土：乳白色，釉：灰白濁色，18C末～19C前，273～275に類例

Tab. 13　第21区礎石建物跡ＳＢ－０３出土土器類観察表

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
589	磁器	碗	染付，外面：雪輪梅樹図	口径 10.2 器高 5.3 高台径 4.3 高台高 0.9	胎土：乳白色 釉：灰濁色 18C くらわんか手
590	磁器	碗	染付，外面：雪輪梅樹図	口径 10.7 器高 5.3 高台径 4.5 高台高 0.9	胎土：乳白色 釉：淡青灰濁色 18C くらわんか手
591	磁器	碗	染付，外面：雪輪梅樹図	口径 13.3	胎土：乳灰色 釉：淡青灰色 18C，くらわんか手
592	磁器	碗	染付，外面：丸文	口径 12.0	胎土：淡灰白色，釉：

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
					淡灰濁色，18C，くらわんか手，コンニャク印判
593	磁器	碗		高台径 4.7 高台高 0.5	胎土：乳灰白色 釉：淡青白色 18C，くらわんか手
594	磁器	碗	染付，外面：草花立涌文	口径 10.2	胎土：乳白色，釉：淡青色,18C末～19C初
595	磁器	碗	青磁染付，内面：四方襷文，見込：五弁花文	口径 11.9 器高 7.0 高台径 4.2 高台高 0.8	胎土：淡灰白色 釉：にぶい淡緑色 18C後 粗製品
596	磁器	碗	青磁染付，内面：四方襷文，見込：五弁花文，高台内：渦福銘	口径 11.4 器高 6.4 高台径 4.4 高台高 1.0	胎土：淡灰白色 釉：淡緑色 18C後 貫入
597	陶器	碗	陶胎染付 外面：四方襷文，松・柳図	口径 11.4 器高 7.0 高台径 5.1 高台高 0.7	胎土：淡灰色 釉：灰濁色 18C 貫入
598	磁器	碗	染付 見込：寿銘 外面：氷裂菊花文	口径 11.4 器高 5.5 高台径 4.7 高台高 1.7	胎土：乳白色 釉：判透明 18C末～19C初
599	磁器	碗	染付，見込：笹葉文 外面：笹図，高台内：銘有り	高台径 3.8 高台高 0.8	胎土：乳白色 釉：判透明
600	磁器	碗	染付，内面：四方襷文，外面：蝶図	口径 11.5	胎土：乳白色 釉：淡青色 18C後，粗い貫入
601	磁器	碗	染付，内面：四方襷文，外面：牡丹図	口径 11.5	胎土：乳白色 釉：半透明 18C後，粗い貫入
602	磁器	碗	染付，見込：花文，外面：朝顔図	口径 11.4 器高 7.1 高台径 5.3 高台高 1.1	胎土：乳灰白色 釉：灰濁色 端反り，撥高台 19C前
603	陶器	碗	施釉，外面：若松図	口径 8.8	胎土：淡黄色 釉：半透明，京焼？

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
604	磁器	猪口	染付，内面：四方襷文，見込：五弁花文，外面：七宝つなぎ文	口径 7.3 器高 5.4 高台径 3.7 高台高 0.6	胎土：乳灰白色 釉：淡青灰色 筒形，19C初 77に類例
605	磁器	猪口	染付，見込：五弁花文，外面：氷裂菊花文	口径 7.7 器高 5.8 高台径 3.9 高台高 0.5	胎土：乳灰白色 釉：灰濁色 筒形，19C初 78,505に類例
606	陶器	猪口	施釉	口径 9.0 器高 5.6 高台径 3.4 高台高 0.6	胎土：淡黄色 釉：半透明 端反り 細貫入
607	陶器	猪口	施釉	高台径 2.7 高台高 0.5	胎土：淡黄色，釉：淡オリーブ色，貫入
608	陶器	猪口	施釉	口径 9.3	胎土：乳白色，釉：淡オリーブ色，細貫入
609	陶器	猪口	施釉	高台径 3.0 高台高 0.5	胎土：淡黄色 釉：淡灰濁色 端反り 細貫入
610	陶器	猪口	施釉	高台径 3.1 高台高 0.5	胎土：淡黄白色 釉：透明，十字墨書
611	陶器	猪口	施釉	口径 6.8	胎土：淡黄色 釉：半透明，筒形
612	磁器	蓋	青磁染付，つまみ部内：渦福銘 内面：文様有り	つまみ径 3.4 つまみ高 0.5	胎土：乳白色 釉：淡緑色,18C後
613	磁器	蓋	染付，外面：雪中荀掘図・雪持ち笹図	口径 10.3 器高 2.6 つまみ径 6.0 つまみ高 1.0	胎土：乳白色 釉：淡青白色 山蓋 19C初
614	磁器	蓋	染付， 外面：山家風景図 天井部：白鷺図	口径 10.5 器高 2.9 つまみ径 5.8 つまみ高 0.8	胎土：乳白色 釉：半透明 山蓋 19C初
615	磁器	蓋	染付 外面：牡丹図 天井部：牡丹つぼみ図	口径 9.8 器高 3.2 高台径 5.7 高台高 0.9	胎土：乳灰白色 釉：淡青白色 19C前

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
616	磁器	蓋	染付 外面：鶴飛翔図	口径 10.2 器高 2.8 つまみ径 6.1 つまみ高 1.0	胎土：乳白色 釉：淡灰濁色 19C初，山蓋 406と同一製品
617	陶器	蓋	施釉	口径 10.8 器高 2.8 底径 5.0	胎土：淡灰黄色 釉：オリーブ色 落蓋，つまみ，貫入
618	磁器	皿	染付，内面：文様有り 高台内：渦福銘	高台径 7.2 高台高 0.5	胎土：乳白色 釉：淡青白色
619	磁器	皿	染付 内面：扇図 外面：唐草文	口径 13.9 器高 4.0 高台径 7.5 高台高 0.5	胎土：灰白色 釉：灰濁色 18C くらわんか手
620	磁器	皿	染付 内面：花文 蛇ノ目釉ハギ	口径 13.6 器高 2.5 高台径 6.6 高台高 0.5	胎土：灰白色 釉：灰濁色 18C くらわんか手
621	磁器	皿	染付，口銹 内面：扇図，見込：五弁花文 外面：唐草文 高台内：渦福銘	口径 14.0 器高 4.3 高台径 7.3 高台高 0.6	胎土：淡黄灰色 釉：半透明 18C くらわんか手
622	磁器	皿	染付，内面：雲龍文 外面：唐草文 高台内：銘有り	高台径 10.0 高台高 0.5	胎土：乳白色 釉：淡灰白色 18C，くらわんか手
623	磁器	皿	染付 外面：遠山図	口径 10.3 器高 3.0 高台径 5.9	胎土：乳白色 釉：淡灰白色 貫入
624	磁器	皿	染付 内面：楼閣図 外面：花図 型打ち成形	口径 10.2 器高 2.3 高台径 5.8 高台高 0.5	胎土：乳白色 釉：半透明 端反り
625	磁器	皿	染付，口銹，型打ち成形 内面：波文，赤釉で口田 見込：寿文字文押印	口径 9.9 器高 2.1 高台径 5.1 高台高 0.4	胎土：淡白色 釉：灰白濁色 端反り
626	陶器	燈明皿	施釉	口径 7.3 器高 1.2	胎土：淡赤橙色 釉：暗赤褐色 煤付着

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
627	陶器	燈明皿	施釉 内面：押印した円形浮文の菊花文	口径 10.6 器高 2.8	胎土：淡赤色 釉：淡灰黄色 美濃・瀬戸系，細貫入
628	陶器	燈明皿	施釉	口径 8.0 器高 1.3	胎土：白灰色 釉：茶褐色 突帯に半月型切りこみ ２ヶ所遺存
629	磁器	鉢	染付，内面：柳下－屋図	高台径 9.1 高台高 0.8	胎土：乳白色 釉：灰白濁色，菊鉢， 蛇ノ目凹形高台.18C
630	磁器	鉢	染付，内面：八卦文，内面中央： 唐人図，外面：唐草文	口径 14.4 器高 4.1 高台径 7.6 高台高 0.8	胎土：乳白色 釉：淡青色，菊鉢，型 打ち成形，口銹，673と 同一整品.18C後
631	磁器	鉢	染付，内面：花文，外面：樹下楼 閣図	口径 14.6	胎土：乳白色 釉：半透明.18C
632	陶器	鉢	施釉	口径 7.8 器高 3.0	胎土：暗赤褐色 釉：黒褐色，平底，回 転糸切り，大谷焼系
633	陶器	鉢	施釉	口径 18.5 器高 8.5 高台径 6.1 高台高 1.5	胎土：赤褐色 釉：暗茶褐色 片口鉢？大谷焼系
634	陶器	鉢	施釉	口径 13.2 器高 5.4	胎土：淡赤褐色 釉：暗褐色，半筒形 213に類似，大谷焼系
635	陶器	鉢	施釉，外面：押印陰刻文		胎土：乳黄色 釉：淡オリーブ色，筒 状，貫入，美濃瀬戸系
636	陶器	壺	施釉	口径 7.6	胎土：赤灰白色 釉：黒褐色，釉にムラ が見られる，無頸
637	陶器	壺	施釉	高台径 5.5 高台高 0.4	胎土：淡黄色 釉：明茶褐色
638	陶器	壺	施釉	口径 7.4 器高 8.4 高台径 5.4 高台高 0.5	胎土：暗赤褐色 釉：暗赤褐色 筒形，取手付 大谷焼系

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
639	陶器	壺	施釉	口径 11.7	胎土：暗赤褐色 釉：黒褐色，筒形，胴部に波状のしぼり
640	陶器	甕	施釉	底径 15.9	胎土：赤褐色 釉：暗赤褐色，平底，大谷焼系
641	瓦質土器	土釜		口径 21.0	胎土：黒褐色 鍔，煤付着
642	瓦質土器	火舎		高台径 16.9 高台高 4.5	胎土：淡黒灰色 高高台
643	磁器	香炉		口径 9.6	胎土：淡黄白色 釉：青灰色・褐灰色
644	磁器	瓶	青磁	高台径 4.9 高台高 0.3	胎土：乳白色，釉：淡緑色，碁筒底状花生
645	磁器	瓶		高台径 5.5 高台高 0.8	胎土：乳白色，釉：淡青白色，碁筒底状花生
646	磁器	徳利	染付，体部：蛸唐草文	口径 1.8	胎土：乳白色 釉：淡青白色，細頸，神酒徳利
647	磁器	徳利	染付，体部：松竹梅図	高台径 4.7 高台高 0.6	胎土：淡青白色 釉：灰濁色，神酒徳利
648	陶器	徳利	施釉	底径 6.9	胎土赤褐色 釉：暗赤褐色，平底
649	陶器	徳利	施釉	高台径 7.3 高台高 1.3	胎土：赤褐色，釉：暗赤褐色，大谷焼系

Tab. 14　第21区礎石建物跡ＳＢ－０１出土土器類観察表

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
650	磁器	碗	染付 外面：草花図	口径 9.9 器高 5.0 高台径 4.5 高台高 0.5	胎土：乳白色，釉：半透明，端反り，19C後貫入
651	陶器	下皿	施釉	長径 14.2 短径 9.1 器高 1.6	胎土：灰色，釉：茶褐色，底面：布目痕，下目，方形，型打ち成形

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
652	陶器	香炉	施釉	口径 7.4	胎土：にぶい赤褐色，釉：黒褐色，壺形
653	瓦質土器	鍋		口径 41.2	胎土：淡黄褐色 煤付着

Tab. 15　第21区井戸跡ＳＥ－０３出土土器類観察表

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
654	陶器	蓋	施釉	口径 7.0 器高 2.1 底径 2.7	胎土：淡橙色，釉：明橙色，つまみ付落蓋，回転糸切り，煤付着
655	陶器	鉢	施釉	口径 14.2	胎土：赤褐色，釉：暗赤褐色，片口鉢？大谷焼系
656	陶器	徳利	施釉，胴部：堂の陰刻		胎土：明赤褐色，釉：暗茶褐色

Tab. 16　第21区溝状遺構ＳＤ－０１出土土器類観察表

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
657	陶器	壺	施釉	口径 1.6 器高 2.6 底径 2.9	胎土：淡橙色，釉：半透明，体部：斑点状緑釉，油壺
658	磁器	猪口	外面：草花図，高台内：幹山銘	高台径 3.1 高台高 0.7	胎土：乳白色，釉：半透明
659	陶器	燈明皿	施釉	口径 7.0 器高 7.1 底径 4.0	胎土：暗赤褐色，釉：黒褐色，回転糸切，煤付着，突帯に半月形切り込み，脚付油受皿
660	陶器	鉢	施釉	高台径 9.5 高台高 0.7	胎土：淡黄色，釉：半透明，粗い貫入，ハリ支え，瀬戸焼系
661	陶器	燈明皿	施釉	口径 10.0 器高 2.1	胎土：灰白色，釉：にぶいオリーブ褐色，ハリ支え，油皿
662	陶器	徳利	施釉	底径 8.0	胎土：灰色，釉：暗茶褐色，自然釉，平底

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
663	瓦質土器	土釜	外部:4~5条の櫛目	口径 17.8	胎土：淡灰黒色
664	陶器	碗	施釉	口径 10.8	胎土：赤褐色，釉：暗赤褐色，汁器
666	磁器	蓋	染付，外面：あやめに雲雀図，内面：雲文，天井部：雲雀図	口径 9.8 器高 3.0 つまみ径 4.2 つまみ高 0.7	胎土：乳白色，釉：淡青色，山蓋,19C前
667	陶器	蓋	施釉，外面：不明	口径 11.0 器高 3.8	胎土：淡黄色，釉：半透明，山蓋宝珠つまみ煤付着

Tab. 17　第21区溝状遺構ＳＤ－０２出土土器類観察表

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
665	陶器	鍋	施釉	底径 7.7	胎土：淡黄褐色 釉：半透明，煤付着
669	陶器	壺	施釉	口径 7.2	胎土：淡黄色，釉：半透明，肩衝形短頸壺
670	磁器	猪口		口径 6.5 器高 2.3 高台径 2.0 高台高 0.5	胎土：乳白色 釉：淡青色

Tab. 18　第21区溝状遺構ＳＤ－０３出土土器類観察表

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
668	陶器	燈明皿	施釉	口径 8.9	胎土：明赤褐色，釉：半透明，煤付着，油皿
671	陶器	甕	施釉，白釉を縞状にかける	口径 17.0	胎土：淡黄色，外釉：暗赤褐色，内釉：オリーブ褐色，流し釉
672	陶器	甕	施釉	底径 20.8	胎土：明赤褐色， 釉：暗赤灰色自然釉

Tab. 19　第21区溝状遺構ＳＤ－０５出土土器類観察表

番号	種類	器形	技法・文様	法量（cm）	備考
673	磁器	鉢	染付 内面：八卦文，見込：唐人図 外面：花唐草文，高台内：角銘 口銹，型打ち成形	口径 16.1 器高 4.8 高台径 8.9 高台高 0.8	胎土：乳白色 釉：淡青色 菊鉢，630と同一製品

Tab. 20　第21区出土土錘計測表

番号	形状	種類	色調	出土層位	現長（mm）	最大幅（mm）	孔径（mm）	重量（g）	溝幅（mm）	溝深（mm）	備考
679	管状土錘	土師質土器	淡黄色	SA−01	45	12	3.5	4.55			欠損
680		土師質土器	淡橙色	包含層	44	11.5	3				欠損
681		土師質土器	淡黄橙色	包含層	37.5	11	2.5				欠損
682		土師質土器	にぶい赤褐色	包含層	44	11	2.5	4.3			ほぼ完存
683		土師質土器	にぶい淡黄色	包含層	43	11	3	3.2			わずかに欠損
684		土師質土器	淡黄色，1/3程にぶい赤橙色，灰色	包含層	41	13	4	4.3			わずかに欠損
685		土師質土器	淡黄色 半分赤橙色	包含層	43	12	4	4.2			わずかに欠損
686		土師質土器	にぶい淡黄褐色	包含層	38	11	3	2.8			ほぼ完存
687		土師質土器	にぶい淡黄褐色	包含層	35	11	4	2.8			半分欠損
688		土師質土器	にぶい淡黄褐色	包含層	37	10	4	2.8			欠損
689		土師質土器	淡黄褐色	包含層	39	10		2.8			欠損
690		土師質土器	明赤褐色	包含層	27	9.5		1.85			欠損
691		土師質土器	淡赤橙から灰赤	包含層	35	17	7	7.4			欠損

番号	形状	種類	色調	出土層位	現長（mm）	最大幅（mm）	孔径（mm）	重量（g）	溝幅（mm）	溝深（mm）	備考
692	管状土錘	土師質土器	オリーブ赤橙色	包含層	37.5	15	8	8.5			欠損
693		土師質土器	淡赤橙色	包含層	37	22	10				欠損
694		土師質土器	にぶい淡黒褐色	包含層	31	12	7	7.9			欠損
695		土師質土器	オリーブ褐色	包含層	38	16	6	9.2			欠損
696		土師質土器	淡黄橙色	第1層	36	16		6.45			欠損
697		土師質土器	淡橙色	第1トレンチ第9層	51	32	15	23.8			欠損
698		土師質土器	淡橙色から淡乳黄色	SB−03	49	30	12				欠損
699		土師質土器	にぶい淡橙色	第1層	64	43.5	19				欠損
700		土師質土器	淡橙色	第1層	53	36	16				欠損
701		施釉陶器	縦半分黒褐色他赤色	包含層	57	34	16	51			ほぼ完存 大谷焼
702		施釉陶器	にぶい赤褐色	包含層	59	30	15				欠損 大谷焼
703		土師質土器	黄味灰白色	包含層	51	28	10	33.6			欠損
704		土師質土器	灰白色	包含層	47.5	32.5		22.7			欠損
705		施釉陶器	にぶい暗赤褐色	第1層	52	37	15				ほぼ完存 大谷焼系
706		施釉陶器	暗赤褐色	第1層	58	47	22	114			一部欠損 大谷焼系
707		無釉陶器	赤褐色一部暗赤灰色	包含層	61	50	21	165.2			完存
708		施釉陶器	黒褐色	包含層	54	44	17.5				ほぼ完存 大谷焼系

番号	形状	種類	色調	出土層位	現長(mm)	最大幅(mm)	孔径(mm)	重量(g)	溝幅(mm)	溝深(mm)	備考
709	管状土錘	施釉陶器	暗赤褐色	包含層	57	42	19				わずかに欠損 大谷焼系
710		施釉陶器	暗赤褐色	第1層	67	49	21	137.2			ほぼ完存 大谷焼系
711		施釉陶器	灰褐色一部暗赤褐色	包含層	53	38	14	71.5			刻印あり，大谷焼系，完存，筒形
712		施釉陶器	暗赤褐色	包含層	52	39	21	79.9			大谷焼系，完存，筒形
713		施釉陶器	淡赤褐色	SB−03	47	33	18	42.7			大谷焼系，ほぼ完存，筒形
714		施釉陶器	暗赤褐色	SA−02	40.5	45	13	45.3			大谷焼系，ほぼ完存，算盤，玉形
715		施釉陶器	灰味にぶい黒褐色	包含層	37	34.5	16	47.2			大谷焼系，完存
716	有溝土錘	土師質土器	淡赤褐色	第1トレンチ第9層	68	53.5		121.7	24	10.5	欠損
717		土師質土器	淡赤褐色	第1トレンチ第9層	80	44		144.1	25	6	欠損
718		土師質土器	淡赤褐色	第1トレンチ第9層	62.5	39		58.6	13	6.5	完存

Tab. 21　第21区出土石器類計測表

番号	種類	形態	石材	出土層位	重量(g)	長さ(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	備考
728	石鏃	凹基	サヌカイト	包含層	1.05	26	19.5	4	尖端欠損
729	石鏃	凹基	サヌカイト	包含層	1.1	25	17	4	欠損
730	石鏃	凹基	サヌカイト	第1層	0.8	22	16	3	欠損
731	石鏃	凹基	サヌカイト	包含層	0.55	17	10	11	欠損
732	石鏃	平基	サヌカイト	第1層	0.5	18.5	14	3	尖端欠損
733	石鏃	平基	サヌカイト	包含層	3.4	34	21	5	尖端欠損
734	剝片		チャート	包含層	1.45	22.5	18	5	

Tab. 22　第21区出土砥石計測表

番号	種　別	石　材	色　調	出土層位	現　長	最大幅	最大厚	備　考
735	仕上砥	粘板岩	淡黄褐色	SB−03	99	56	25.5	欠損
736		粘板岩	赤褐色，灰白色	SA−01	64	56	13	欠損
737		粘板岩	やや黄味を帯びた灰白色	包含層	76	54	10	欠損
738		粘板岩	にぶいオリーブ色	包含層	65	57	11	欠損
739	中　砥	粘板岩	淡黄褐色	包含層	96	56	19	欠損
740		粘板岩系	淡灰白色	包含層	63	72	12	欠損
741		粘板岩	にぶい淡褐色	第1層	104	7	15	欠損
742		粘板岩系	淡灰黒色	包含層	95	35	13	欠損
743		粘板岩系	淡灰黒色	包含層	111	51	21	欠損
744		粘板岩系	黒色白色	包含層	202	64	33	欠損
745		粘板岩系	淡灰黒色	第1層	127	50	33	欠損
746	荒　砥	砂岩	淡灰白色	SB−01	51	56	20	欠損
747		砂岩	淡灰白色	包含層	47	55	9	欠損

Tab. 23　第21区銭貨出土遺構一覧表

出土遺構	渡来銭	寛永通宝	明治以降の銭貨	計（枚）
池状遺構		5		5
SA−04		1		1
大山祇神社跡		18	3	21
小祠跡		14		14
SB−03		3		3
SB−01	1	4	2	7
遺物包含層		5		5
第1層	1	10	8	19
計（枚）	2	60	13	75

Tab. 24　第21区出土銭貨計測表

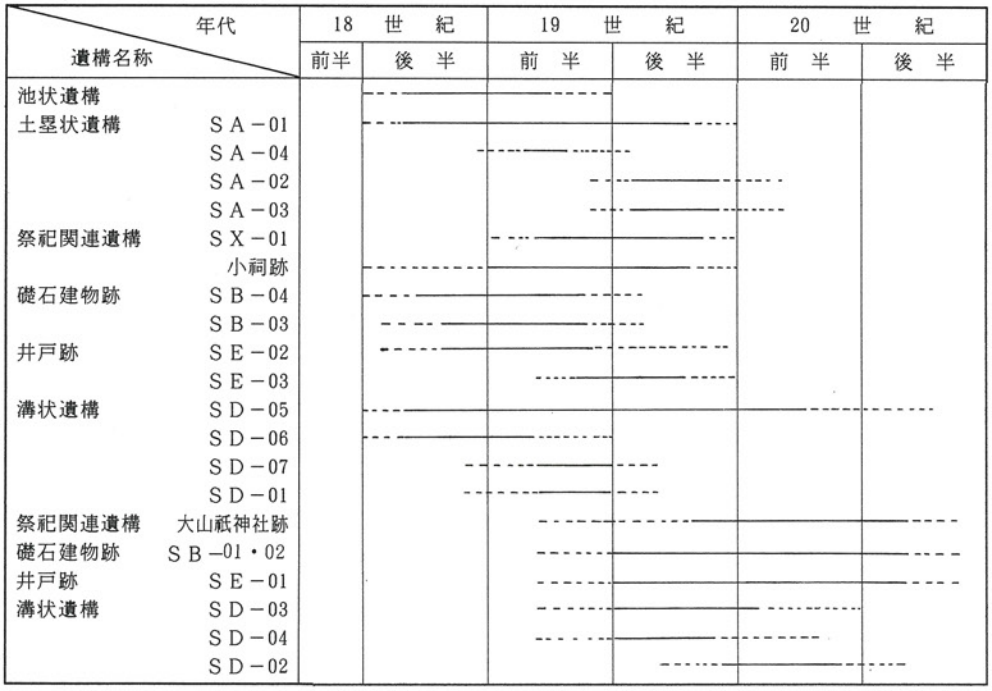
番号	名　称	背　文	出土遺構	直径(mm)	孔長(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備　考
764	元豊通宝		第1層	24.0	6.0	1.0	2.2	
765	聖栄元宝		SB−01	24.5	6.0	1.5	3.1	

番号	名称	背文	出土遺構	直径(mm)	孔長(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
766	寛永通宝	文	SB−01	25.5	6.0	1.5	1.7	破損
767		文	池状遺構	25.5	6.0	1.5	2.3	
768		文	小祠跡	25.0	5.0	1.5	3.0	破損
769			大山祇神社跡	24.5	6.0	1.0	2.8	
770			大山祇神社跡	25.0	5.5	1.5	3.4	
771			小祠跡	24.5	5.5	1.5	3.6	
772			池状遺構	23.5	6.0	1.0	1.8	破損
773			遺物包含層	25.0	5.5	1.5	3.9	銹化，緑青のため他に5枚重なっている
774			SA−04	23.0	6.0	1.0	1.9	破損
775			第1層	22.5	6.0	1.0	2.3	破損
776			SB−01	24.5	5.5	1.5	3.1	
777			池状遺構	22.5	6.0	1.0	2.2	
778			池状遺構	23.5	6.0	1.0	2.6	
779			池状遺構	23.0	6.0	1.0	2.7	
780			小祠跡	24.0	6.0	1.0	2.2	破損
781			小祠跡	23.5	6.5	1.0	2.5	
782			大山祇神社跡	23.5	6.0	1.0	2.4	
783			SB−01	24.5	5.0	1.5	2.9	
784			大山祇神社跡	24.5	6.0	1.0	2.2	破損
785		青海波文	大山祇神社跡	28.0	6.0	1.5	4.6	
786		青海波文	大山祇神社跡	28.0	6.0	1.5	6.0	
787		青海波文	大山祇神社跡	28.0	6.0	1.5	5.9	
788		元？	小祠跡	23.0	6.0	1.0	1.9	
789	二銭貨		SB−01	32.0		2.5	13.1	明治10年
790	一銭貨		第1層	23.0		1.5	3.8	大正11年

Tab. 25　第21区出土墨書土器類一覧表

番号	出土層位	器種	器形	部位	墨書内容	備考
94	遺物包含層	施釉陶器	猪口	高台内	不詳	
219	遺物包含層	施釉陶器	香炉	見込	□，十	
261	遺物包含層	無釉陶器	壺	胴，底	胴部不詳，底部三	
542	SA−04	施釉陶器	猪口	高台裏	不詳	
562	小祠跡	土師質土器	皿	見込	不詳	呪文か
563	小祠跡	土師質土器	皿	見込	不詳	呪文か
610	SB−03	施釉陶器	猪口	高台裏	十	
804	遺物包含層	無釉陶器？	？	見込	㊇	
805	遺物包含層	施釉陶器	猪口？	高台裏	十，九？	見込にガラス状釉
806	遺物包含層	施釉陶器	香炉？	底	三，□	
807	遺物包含層	施釉陶器	？	胴下位	□，四，八	煤付着
808	遺物包含層	無釉陶器	火舎？	胴下位	不詳	

Tab. 26　第21区出土遺構概略年代一覧表



第　37　区

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　位置と環境
Ⅲ　調査の経過
Ⅳ　基本層序
Ⅴ　遺構と遺物
Ⅵ　まとめ

図　版　目　次

ＰＬ．１　第37区出土遺物(1)
ＰＬ．２　第37区出土遺物(2)
ＰＬ．３　第37区出土遺物(3)

Ⅰ　はじめに

兵庫県淡路島と徳島県大毛島を結ぶ本州四国連絡橋（鳴門大橋）が完成し，昭和60年６月から供用されている。それに伴う道路改良工事が大毛島をほぼ縦断する形で行われているが，本路線内には道路改良工事に先行して行われた分布調査によって、数多くの遺跡の存在が予想されていた。改良工事に伴ってすでに大毛島第21～23，27，29～31，33，35，38，39区の発掘調査が実施されており，水田跡，製塩跡，神社跡，土塁状遺構，石切鍛冶仕事場等の遺構を検出確認している。

本遺跡は昭和60年１月に予備調査を開始し，昭和60年４月から本調査に移った。遺跡周辺は古くより土佐泊浦の地名を有し，本州との連絡・交通の要所であったことが窺える。

このため，本調査に際して地名と字名をとって，「土佐泊大谷遺跡」と呼称することとした。

Ⅱ　位置と環境

本遺跡は鳴門市北東にある大毛島のほぼ中央に位置する。西側の三ツ石山を背に東は鳴門海峡から淡路島を臨む。海岸付近は微高地となり，現在は自然堤防を利用した集落が営まれている。前述の微高地と三ツ石山との間に形成された低湿地を利用したものであり，遺構面上層には三ツ石山から流れ出す小谷による砂利層が堆積し，小規模な扇状地を形づくっている。この小谷は年間を通しての水量は少ないが，山腹から浸透した水分を常時供給できるようである。このように遺跡周辺は大毛島内でも水田耕作を行ううえで有利な地理的条件を持ち，また最近まで遺跡上では水田耕作が行われていた。周辺の遺跡としては旧石器時代から室町時代頃の遺跡および遺物包蔵地が確認されている。旧石器時代では小鳴門海峡海底遺跡があげられ，高橋正則・野々村拓也両氏により報告がなされている。弥生時代では鳴門公園千畳敷下遺跡，第33区，第38区等で土器・石器の出土がみられる。古墳時代には納言山古墳群，竹島古墳，北山古墳群，松瀬崎古墳等の小規模古墳が確認されている。奈良・平安時代の遺跡としては土佐泊廃寺，鎌倉・室町時代では土佐泊城跡があげられる。

Ⅲ　調査の経過

昭和59年度の予備調査によって複数の遺構面の確認がなされており，その結果に基づき本州四国連絡橋公団との協議によって，昭和60年度の調査を開始した。面積は当初約3200㎡であったが遺構検出・雨水の侵潤等による障害で手間どり，第37区上り車線の本調査と第36区の予備調査を行うこととなった。面積は約1700㎡である。第36区予備調査では遺構と認められるものの存在は確認できなかった。

Ⅳ　基本層序

層序は現地表下１m前後までは灰褐色粘土（耕作土）層と、黄褐色砂質土層の交互の堆積がみられ，それより下層には挙大の円礫や流木を含む青灰色砂層が２m程堆積している。

それ以下には三ツ石山から転落したと思える径１m前後の砂岩を含む粘土を混じえる砂質土層の堆積がみられる。

Ⅴ　遺構と遺物

１．第１遺構面

水田跡，それに伴う畦畔，水溜め状遺構，土壙等を検出した。水田跡には水口をもつ調査区南西部の大畦畔，北西中央付近の水溜め状遺構から伸びる小畦畔が構築され，その他に水口をもたない畦畔４本を検出した。大畦畔をはさみ南西側と北東側では0.5m程の段差がみられる。これより北東へ移るに従って小畦畔ごとに僅かずつ低くなってくる。水溜め状遺構は畦畔と同様の土手を築き，底面は良質の粘土を使って数回貼り固めている。畦畔は調査区北西部では明瞭に確認できたが，北東に移るに従って上層からの撹乱によって破壊され，その痕跡も地上では確認困難であった。しかし大きな成果として，上空からの写真撮影によって大部分の畦畔を認めたことが挙げられる。

水田跡覆土からは土錘，瓦器碗，土師器，羽釜，叩き目をもつ陶器，馬歯とおもえるもの等の出土がみられる。

土壙は径20～50cm程度の砂岩の配石をもつものが多い。形状は楕円形を呈するもの，

円形に近いもの等様々な様相がみられた。

2．第2遺構面

水田跡は上層からの撹乱によって平面的な広がりを確認することは困難であったが，調査区南東端付近で部分的に捉えることができた。その部分の断面観察では20～25cmの厚さで暗灰褐色土の堆積がみられた。これはしまりがあり上面に凹凸がみられ，耕作土としての可能性が極めて強いものである。混在遺物としては土錘，瓦器片，土師器片があげられる。

3．第3遺構面

遺構面形状は特異な形状を呈し，調査区北西壁中央付近の土壙，小溝を中心として黄褐色粘質土が15cm程の厚さで舌状に堆積する。周囲は灰褐色粘土層が堆積し一段低い平坦面を形成する。検出された遺構は小溝，土壙，柱穴があげられる。小溝はU字状で北方へ大きく方向を変える。性格等については不明である。

出土遺物は土錘，土師器，瓦器，羽釜，緑釉陶器等があげられる。土壙は溝に切られ不整形を呈するもので，深さは約30cmを測る。出土遺物は土師器片，瓦器碗，砥石等がみられる。柱穴は3本検出し，柱間距離はほぼ1間である。

4．第4遺構面

杭列，柱穴，土壙等を検出した。杭列は調査区をほぼ横断するように並び，それに垂直方向にも4列確認できた。縦断する杭列を隔てて北西側は黒褐色土が覆い，南東側は黄褐色砂質土となる。また垂直方向に伸びる杭列付近では北東へ移るに従い，レベルが一段ずつ僅かに低くなる。足跡の痕跡として明確なものはみられなかったが，黒褐色土上面で東西方向の溝状の落ち込みを多数検出した。

出土遺物には緑釉陶器片，須恵器壺，土錘，鉄鏃，刀子等がみられる。伴うかどうか現時点では判断できないが，この遺構面で径50cm前後の柱穴と思えるピット及び径1m未満の土壙を検出した。土壙からは黒色土器片，土師器片等が出土している。

5．第5遺構面

第4遺構面の黒褐色土を除去することによって，水路の断続的な溝を数本検出した。

この溝は溝西側の黒褐色土を矩形に囲むような形状を呈する。出土遺物は非常に少ないが土錘，土師器甕片，杯片等がみられた。

Ⅵ まとめ

本遺跡は海抜約2.80m（第5遺構面）～海抜約3.30m（第1遺構面）に営まれたもので，出土遺物から判断すると奈良末・平安初期以降中世までの遺跡と思える。しかし遺構からの遺物出土状態に特異な例が含まれるため，今後十分な検討を必要としている。

本州四国連絡橋建設に伴う
大毛島地区埋蔵文化財発掘調査報告書
（上）
昭和62年度
（1987）

発　行　昭和63年3月25日
編　集　徳島県教育委員会文化課
発　行　徳島県教育委員会
印　刷　㈱教育出版センター